

ザ！鉄腕/fate！ YARIO
は世界を救えるか？

パトラッシュユS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

体は寸銅でできている

血潮は土で心は農家

幾度の開拓を越えて不敗

ただ楽器を持つこともなく

ただ一度の演奏もない

歌い手がなぜか農家

島の石で鉄を鍛つ

ならば我が開墾に井戸は必須

この体は

自作の鋤で出来ていた。

ザ！鉄腕／f a t e！Y A R I Oは世界を救えるか？

目次

クランの大工	1
新たな師	13
バツクトウザだん吉	28
仲間探しへGO!!	41
まず草から探します	57
伝説の食材その1。霊草	71
日本食で乾杯!	84
インドの文明開化	100
魔猪会議!	117
まず木から作ります	128
石橋ヒルフォート	142

ルーマニアでごちになります!	155
日本で竹探し	168
石橋ヒルフォート作り その2	181
準備万端!	195
伝説食材その2。魔猪の豚骨	215
0円卓の食堂編	
天空の花嫁	228
アンビシヤス!	242
新企画スタート!	257
第一回、0円卓食堂	279
作り手の思いを伝えたい	295

453	露天風呂作り	その1	437	露天風呂作り	その2 (完成)	437
422	木の気持ちになつてみればわかる	その3	408	聖剣作り	その1	371
				聖剣作り	その2	391
				聖剣作り	その1	371
357	Wonderful Dash!!	その3	344	カタツシユ村開拓記	その1	309
				カタツシユ村開拓記	その2	324
				カタツシユ村開拓記	その3	344
				カタツシユ村清潔計画	その1	468
				カタツシユ村清潔計画	その2	483
				そうめん流すしかない	その1	498
				希望		512
				そうめん流すしかない	その2	525
				カタツシユ村清潔計画	その3 (完成)	539
				カタツシユ村散策	その1	554
				そうめん流すしかない	その3 (完成)	554

明日を目指して!	585
絶対開拓戦線 バビロニア with エジプト	573
鉄腕／ウルク その1	629
鉄腕／エジる その1	614
リリック	598
鉄腕／ウルク&エジる その2	644
ニトクリスのピラミッド作り その1	658
閑話 YARIOは0円で英雄を仲間 にできるのか?	670

鉄腕／ウルク&エジる その3	686
ニトクリスのピラミッド作り(大詰め)	703
その2	722
聖剣作り その4 (完成)	735
刀の指南 その1	750
斧は悪くないよ	764
トラベリングマン	777
伝説の豚骨ラーメン その1	790
裏番外編 医龍 team medici cal Dragon	804
方舟造り その1	825
宙船	

年末年始ウルトラマンカタツシユ編

ザ！ 年末年始ウルトラマンカタツ

シユ！ 841

ザ・ウルトマンカタツシユ！ その2

(決着) 856

ザ・ウルトラマンカタツシユ その3

(完結)。 873

北欧神話蛇駆除大戦 ア・オダイシヨウ・

タイジ

刀の指南 その2 887

蛇駆除 その1 899

蛇駆除 その2 913

閑話2 YARRIOは人理を救える

か

蛇駆除 その3 (完結) 941

カタツシユ村の日常 955

閑話3 カタツシユ村音楽祭。

970

王様作り (完結) 985

酪農のお手伝い

男爵デイーノの改修 (完了)

出航

島到着

エール交換

リゾラバ その1

リゾラバ その2

新章 人類未踏領域開拓地カタツシユ
島。

世界を救う戦い（工事現場）――

いざ、特異点へ――

拠点完成――

113311201105

クランの大工

ケルト神話。

この話の一つの中に出てくる有名な英雄がいる。

父は太陽神ルー、そして、母はコノア王の妹デヒテラ、幼名はセタンタという。

しかし、この話に出てくる英雄であるはずの彼は少し事情が変わっていた。何故ならば、彼には生まれる前の記憶がちゃんとあるからだ。

「はあ…腹減ったなあ」

彼は名高いアイルランドの大英雄。

『クランの猛犬』と呼ばれていた筈の彼だが、このケルト神話ではもう一つのあだ名で彼はこう呼ばれていた。

『農家の申し子』と。

そう、前世は知る人ぞ知る農家だった、いや、今もお、その気持ちはあの頃の仲間

達と会いたいという気持ちに日に日に強くなるばかりだ。

セタンタ・シゲル。

それが、今の彼の名前である。シゲルという名前だけは時を越え、転生しようとも彼は辛うじて覚えていた。そして、自分が何者であるのかを。

彼の頭の中にあるのはただ一つだけ、失われた仲間達を集め、Y A R I Oを結成するという使命だ。

「おー！ しげちゃん今日も門番かい！」

「せやでー、北登の代わりやからね！ 頑張らなあかん！」

「はっはっは！ 流石はクランの猛犬だ！ 頼もしいね！」

なぜ、彼が家の番犬の代わりをしているのか？

それは、クランの自慢の番犬の名前を北登と名付け、セタンタは可愛がっていたのである。

だがある日、北登は謎の流行り病で亡くなってしまった。

そんな自慢の番犬を謎の流行り病で失い悲しむ飼い主のクランを見かねて北登の子供が立派な番犬に育つまで代わりを務めるとセタンタはクランに誓いを立てたのである。

る。

そういう経緯で、その北登の子犬が立派に育つまで、代わりにセタンタはこうして今日も今日とてクランの家を守っている。

獯猛なクランの猛犬を手懐けたセタンタは村人たちから尊敬され、さらに、そんな獯猛なクランの猛犬の代わりになりクランの家を守る姿からクー・フリーンと呼ばれた。

しかし、彼は敢えて皆には『リーダー』と呼べと言う謎の異論を唱えた。

だが、皆の呼び名に定着したのが幼名のセタンタ・シゲルからとった『しげちゃん』という名前である。

もちろん、好んでクー・フリーンと呼ぶ者もいるが、彼を良く知る者は親しみを込めて『しげちゃん』の名で彼を呼んだ。

クー・フリーンの前を通過した村人は門番である彼に手を振りながら、その場を離れていく。

「あ、せや、確かそろそろ補強せなあかんとこがあつたな」

そして、クー・フリーンはポンと手を叩いた。

思い出したとばかりに彼は行動をしはじめる。まずは大工道具を取り出しはじめる、

これがクランの家を守る彼の仕事の一つだ。

それが、木造建築の知識を活かした家の補強である。そう、番犬代わりだけではない彼はクランの家自体を守っているのだ。

過去に学んだ匠の技を存分に発揮して、クランの自宅の傷んだ箇所などを手早く直していくその姿は『クランの猛犬』というよりは『クランの大工』である。

たとえ、台風、嵐、大雨が来ようともビクともしない家づくりを心がけ、腕をさらに磨く事数年。

セタンタ・シゲルのその技は前世よりも増して磨きがかかっているようだった。

「ふう……こんな感じでええかな？」

気づけば見事な木材の補強が完了している。

クランは後々こう語る。

一家に一台、彼が居ればその家は安泰であると、料理はプロ並み、土の知識には詳しく、それでいて建築は匠の業。

これだけのなんでもできる優秀な番犬が他にいるだろうか、クランは改めてセタンタ・シゲルという存在に大喜びした。

しかし、彼とクランにも別れの時がやってくる。

それはクー・フリーンが成人を迎えたその日、彼はある決意をクランに打ち明けた。

「クランのおっちゃん。僕は仲間を探しに行こうと思う」

「仲間……？」

「せや、仲間達やこの世界の何処かにきつといるであろう仲間。僕はその仲間達を見つ
けに旅に出ようかと思つとるんや」

「……なんと……、旅に……。いや、しげちゃんならきつとどんな困難な事でも成し遂げられる
と思う、今までありがとう」

「クランのおっちゃん……！ おおきになー！」

もう、北登の子供は大きくなった。

ならば、もう誓いは果たされたのである。だが、2人の間には誓いというだけには大
きな絆が出来上がっていた。

豪商クランと抱き合い別れを惜しむクー・フリーン。クランはまるで、自分を息子の
ようによく可愛いがってくれた。

仲間達を見つけたらクランの元にまた訪れよう、そして、彼の為に立派な納屋を建て

るのだ。

成人したセタンタ・シゲル、クー・フリーンは彼との別れを惜しみながら仲間達を探すための旅に出た。

旅はかなりの困難を極めた。

仲間達を探すといつても手掛かりがない、彼はどうしたものかと寄る村で度々畑を耕しては広大な農園を作るのを手伝い、食事を村人たちに振る舞い毎日を送っていた。

そして、彼はある時、村人の一人からある助言を受けることになる。

「良く魚が釣れる疑似餌の作り方だが……こうしてだな」

「す……勉強になる……」

それは、魚が良く釣れるようになる疑似餌の作り方だった。

だが、本来の目的はそこではない、そう、彼は仲間達を探すために旅に出たのである。確かにこれも貴重な話で食料を確保するにはクー・フリーンには大変良い勉強になったのだが、Y A R I Oとして仲間達を集め再び結成する為に必要な情報ではない。

何処に行けば彼らに会えるのだろうか。

リーダー、リーダーと呼ばれていたあの時、無人島、村を共に開拓しそして、様々な

村や集落を回った事を彼は忘れてはいない。

「どうにかせなあかんのはわかっただんなのやけどどうしたら良いんやろうか」

クー・フリーンは釣竿を垂らしながらそんな風な事を一人であらわしていた。

仲間達を探す為の手掛かりを見つめる。それは思いの外、大変な事だったと改めて痛感させられた。

自分一人ではやはり出来る事が限られてくる。仲間達が居た時はあんなにたくさんのものを得られていたというのに自分一人の情報網だとこのザマだ。

「ホッホッホ、釣れとるか？ 旅人よ」

「おー！ こんにちはやな、爺ちゃん！ 見ての通りそこそこ釣れとるで！ これ、さつき釣ったんやけどいる？」

「ホッホッホ！ 貰っておこうかの？」

そう言いながら近づいてきた爺ちゃんに釣った魚を手渡すクー・フリーン。

すると、お爺さんはクー・フリーンから手渡された魚に満足した様子で釣竿を垂らす彼の隣に座るとこんな話をしはじめた。

「ワシはこう見えてドルイドなの？ 魚の礼だお前さんの道を占ってしんぜよう」

「ドルイド？」

「まあ、占い師みたいなもんじゃよ」

「ホンマか!? いやー、占いなんてするの初めてやわ！ それじゃお願いしようかな？」

そう言つて、クー・フリーンはドルイドと名乗る老人から占いを受けることになった。もしかしたら、仲間達を見つけるきっかけになるかもしれないと思つたからである。真剣な表情で占いをはじめめる老人をクー・フリーンはジツと見つめる。

占いを終えた老人は真つ直ぐにクー・フリーンの手を掴むと静かに頷き、こう話をしはじめた。

「今日騎士になるものはエリンに長く伝えられる英雄となるが、その生涯は短いものとなるだろう……」

「ほうか……」

「今のが予言じゃ、それで、お主はどんな道を行く？」

そう言いながら、老人は真つ直ぐにクー・フリーンの目を見つめた。

老人には確信があった。きっとクー・フリーンは騎士になり、名だたる英雄となるだろうという事を……。

しかし、クー・フリーンはしばらくその予言を聞いた後、うーんと首を捻りしばらく考えた後に老人にこう語りはじめる。

「騎士になったらユニボとクレーン車の資格取れるんかな？」

「……………ゆ、ユニボ？ クレーン車？」

「んー、せやけど僕は仲間を探しとるからねー」

「…き、騎士団に入ればきつと英雄にはなれるぞ？」

「英雄かあ…せやなー、よし！ 決めたわ！」

「おお！ 騎士になるのか！ 若人よ！」

老人はバシンと胡座をかいていた足を叩き立ち上がるクー・フリーンの言葉を聞いて目を輝かせる。

英雄と呼ばれる男の誕生をこの日、目の当たりに出来る。それだけで、予言を話した老人は嬉しく感じた。

そして、決心を固めたクー・フリーンは老人に目を輝かせたまま嬉しそうにこう語る。

「僕はアイドルになろうと思う！」

老人はクー・フリーンの発した拍子抜けする一言に盛大にずっこけた。

ここまで、騎士になる流れの話をしていたにも関わらず、アイドルという謎の言葉には全くどう反応していいかわからない。

英雄になれるという予言を盛大に蹴り、彼はアイドルを目指すという奇行に走ろうとしている。これは、流石の予言者である老人も度肝を抜かれてしまった。

しかし、ここで予言者である老人も折れるわけにはいかない、最後の悪あがきと言わんばかりにこうクー・フリーンに告げた。

「そ、そうか…、なら影の国に行くの良い、そこにきつとお主の力になる者がおるはずじゃ」

「ホンマか!!? 仲間達に会えてしかもアイドルになれるんか!」

「…ああ…、多分な」

老人は目をキラキラと輝かせて顔を近づけてくるクー・フリーンにもうヤケクソ気味

に顔を逸らしながらそう告げる。

どうしてこうなったのか、全く見当もつかないがどうやら、クー・フリーンは影の国に向かうということになった。

彼は助言をくれた謎の老人に手を振りながら上機嫌に村人から貰った自分の愛馬である道子に跨る。

愛馬の由来はかつて『道草を食いながらどこまで行けるか?』という挑戦で北海道で出会った白い道産子である馬の名前から取った名前である。

この馬もまた道草を食いながらクー・フリーンの旅を支えてくれている。

「そんじゃ、爺さんありがとな！ 今度、寿司作って恩返しに来るからー」

「お、おう、気をつけてな、…寿司ってなんじゃ?」

こうして、クー・フリーンはひとまず彼がいう通りY A R I Oを結成してアイドルになる為影の国を目指し、道子と共に旅を開始する。

旅の最中、愛馬の道子にクー・フリーンは道中立ち寄った村の農業を手伝い村人達から譲り受けたチャリオットを引っ付けたり、食料を譲り受けたりして、非常に周りの村々から感謝されていたとか。

手を振る老人に満面の笑みで手を振り返すクー・フリーン、仲間達を探し出し、Y A R I Oを目指す彼の旅はまだ始まったばかりである。

新たな師

影の国。

そこは女王スカサハが統治している冥界、魔界とも呼ばれている国だ。もちろん、ここに至るまでには多大な困難が待ち受けている。

道子と共にそんな困難な道のりを越える我らがリーダーことクー・フリーンは途中で道子達を預け、1人でその国を目指した。

立ち塞がる数々の難所、しかし、彼は諦めなかった。全てはY A R I Oになる為、仲間達と再び再会する為、影の国を目指した。

鍬を担ぎ、金槌を腰に提げ、タオルを頭に巻き、青い農作業着を着た彼は汗を垂らしながらひたすらそんな困難から逃げずに戦った。

「はあ…、はあ…。これは石橋作った時並みにしんどいなあ…、けど！ 頑張らな！」

リーダー、クー・フリーンは折れずに立ち向かう。

そこには、再び仲間達と様々なチャレンジをしていきたいという願望があったからだ。YARIOを結成するという大きな使命が彼にはあった。

そして、困難な道の果てに彼の頭には自分を奮い立たせる言葉（テロップ）が蘇ってきた。

「……気持ちには分かる。

嵐が荒れ狂う海であっても彼は自分が作った船である『つれたか丸』で乗り越えて行く、自分の夢を叶える為に。

そして、彼は遂に幾多の苦難を乗り越えて影の国へとやって来た。

困難な道をひたすらに歩み、辿りついた彼を出迎えたのは長い紫髪を靡かせ、身体のラインが綺麗に映るピッチリとしたタイトのような服を着たミステリアスな赤目の美女だった。

「……ほう……、あの苦難の道を越えてくるとは……なかなか見どころがあるなお主」

「……め、めっちゃしんどかったです……」

「して、何の為にこの影の国に足を踏み入れた？ 力を欲してか？」

そう告げる美女は幾多の苦難を乗り越え、力尽き地に倒れるクー・フリーンに問いか

ける。

しかし、クー・フリーンは満足げな表情を浮かべていた。幾多の困難も苦難も仲間達と会えるのなら安いものだと思っっているからだ。

それは、己の夢の為、そして、これまでの苦難も心が折れず乗り越えてこれたのは唯一の望みであるY A R I Oを結成するという希望をクー・フリーンが持っていたからである。

疲労困憊、だけれど満足感を得た表情を浮かべたクー・フリーンは美女にこう語りはじめた。

「おっさんにはやっぱりきつい道やね、お姉さんもうちよつと道整備した方がええと思っよ」

「…いや、お前はどつ見てもまだおっさんという感じではないだろう」

そう告げる美女はため息をつき、その場で胡座をかいて座るクー・フリーンを真っ直ぐ見据える。

なるほどなど、クー・フリーンを見た彼女はすぐさま悟った。その鍛え抜かれた筋肉（農業O r 建築で）、逞しく力強い眼、確かに彼、クー・フリーンには英雄になれる素質

があつた。

ならば、ここに来たのも納得できる、力を求めて彼はここにやって来たのだろう、そうだと、そうに決まっている。

力を求め、私に指導して欲しくて、この影の国までこんなにボロボロになりながらやって来たのだとスカサハはそう思った。

「よし、今日から私はお主の師匠だ、良いな？ お前の名は何という？」

「あ、クー・フリーンって言います！ んー、けど、しげちゃんとかリーダーとか呼ばれてるんでしげちゃんですええですよ！」

そう言いながら、顔を照れくさそうに擦るクー・フリーン。

そんな彼の言葉を聞いた美女は不思議に思った。クー・フリーンなのにしげちゃん？ 全くもって名前に関連性がない、一体どういふことなのかと彼女は首を傾げたまま彼にこう問いかけはじめる。

「…しげちゃん？」

「僕の幼名がセタンタ・シゲルなんで、親しい人はしげちゃん呼んでるんです」

「そうか…ならば、私もしげちゃんと呼ばねばなるまいな。私の名はスカサハ、この影の国の女王だ」

そう言つて、スカサハは倒れていたクー・フリーンの手を握り立ち上がらせる。

英雄になる人材をいつまでも地べたに座らせておくわけにはいかない、そう、これからは自分が鬼のように彼を鍛えて何度も彼は地べたに這う事になるのだから。

スカサハはふと、手を握りしめたクー・フリーンの姿を見ながら期待をかけていた。この男は立派な英雄になると。

だが、クー・フリーンはというと、そんな、スカサハの思惑とは全く違うことを考えていた。

「…そうか、僕もここでY A R I Oになれるんか…、みんな待つとれよ、絶対迎えに行くからな！」

「ん？ Y A R I O？」

クーフリーンの発した言葉に思わず目を丸くするスカサハ。

何かがおかしい、彼は英雄になる為にこの影の国を目指していたのでは無いのかとス

カサハは思わず首を傾げていた。

だが、クー・フリーンはスカサハと同じく首を傾げたまま、彼女にこう問いかける。

「え？ 僕、ここでY A R I Oを結成できるって聞いて来たんですけど……」

「Y A R I O？ なんだそれは？ お前は力を求めて来たのでは無いか？」

「いや、失われた自分の仲間とY A R I Oを結成する為に来ました」

「……………」

スカサハはキリツとした表情で真っ直ぐに目を見つめて告げてくるクー・フリーンに思わず言葉を失う。

Y A R I O……。Y A R I Oとはなんだ？ 新しい騎士団か何かだろうか？ いや、しかし、Y A R I Oなど聞いたことも無い、Y A R I Oとは一体なんなのだ。

スカサハは人を超え、神を殺し、世界の外側に身を置くが故に得た深淵の知恵を持つ。そんな、スカサハも知り得ないワードが陳列していれば彼女とて混乱もしてしまうだろう。長年、生きて来たがこんな人間に会うのは初めての出来事だった。

「ちなみに師匠はクレイン車とかの免許とか持ってます？」

「…ク、クレーン車？」

「あ、クレーンじゃ無い方でしたか！ シヤベルかユンボでしたかね？」
「……………」

そう言いながらキラキラと目を輝かせるクー・フリーリン。

しかし、師匠と言いつたからにはそれらを持つていなければいけないのだろうか？ スカサハの思考が一旦停止する。

もちろん、スカサハはそんなものは持つていない、この時代にそんな免許を持つていたとしてもどこで使うというのか。

しかし、自分が師匠だと言いつ出した手前、弟子の期待を裏切るわけにはいかない。

そうだ、彼を鍛えると言いつ出したのは自分だ。しかも、彼は満更でも無さそうにこんなに純粋な瞳で自分を見ている。すると、スカサハから弟子にすると言われたクー・フリーリンは懐かしそうに昔を思い出しながら彼女にこう語りはじめた。

「師匠かあ…、懐かしいなあ…。村の開拓以来かもしれないなあ」

「村の開拓以来？」

「あ、僕の前の師匠でね！ 実は…」

そこから、クー・フリーンは自分の前世での記憶や経緯、仲間達との事やらを含めて新たに師匠となったスカサハに語りはじめる。

失われた自分のメンバーを集める事、そして、Y A R I Oの仲間達を結集し、新たな挑戦に挑みたいという野望があるという事。

そのクー・フリーンの話を聞いたスカサハは頭がだんだん痛くなって来た。まさか、こんなぶつ飛んだ英雄の卵がまさか自分のところを訪れようとは思ってもよらなかったからだ。

「なるほど…お前はそのY A R I Oとやらを結成する為にこの地を訪れたと」

「そういう事になりますかね？」

「馬鹿かお前は」

そう言つて、頭痛がする頭を片手で抑えながら告げるスカサハ。

それはそうだろう、どこの世界にアイドルになる為に苦難を乗り越え、さらに、Y A R I Oとやらを結集する為にこの影の国に来る者がいるというのか？

しかし、実際いるのだから怖い事実である。しかも、本人は至つて真面目故、尚更た

ちが悪い。

「…とりあえず…貴様の仲間達とやらはこの世界ではない何処かにいる可能性が高いな…、私の予想だが」

「ええ!?! ほんまですか! …そんな、あいつらがこの世界におらんなんて…」
「しかし、可能性がないわけではない」

そう言つて、落ち込むクー・フリーンを見かねたスカサハは彼の肩をポンと叩く。

長年、生きて来たがこんな人間に会うのは初めての出来事、スカサハにとってみれば興味心の方が強かった。

もしかすると、クー・フリーンは自分が思っている以上に面白いものを秘めているかもしれない、そういった期待感が彼女の中にはあった。

クー・フリーンはスカサハのその言葉を聞くと改めて嬉しそうに笑みをこぼした。

「…はあ、それはよかったですホツとしました」

「ああ、魔術を極め、世界を移動できる術を手に入れば、お前の仲間にも会えるかもしれないな」

「…魔術…、僕がハリー・ポッターみたいになつたらええんですね！　なるほど！　わかりました！」

「お前は何を言ってるんだ」

クー・フリーリンの言葉に思わずため息を吐くスカサハ。

ハリー・ポッターがなんなのか全く理解できないスカサハも遂に彼に突っ込まざる得なかつた。

ちなみにアイルランドの隣はイギリスである。イギリスが近いならもしかしたらと思つたが、どうやらクー・フリーリンのあては完全に外れたようだ。

時代が違うので当たり前である。

「師匠、ちなみに魔術はどのレベルからやるんです？」

「そうだなまず基礎として…」

「やっぱりドラクエみたいな感じなんか、パルプンテ使えるようになるんやろうか」

何やらワクワクしている様子でそうスカサハに問いかけるクー・フリーリン。

ドラクエ色が強いのは、思い入れが強い仲間の1人がピアンカ派だからかもしれないな

い。

クー・フリーンのその言葉に呆れたようにため息を吐くスカサハは静かに左右に首を振る。持っているものは一級品なのになぜこんな変わり者が来てしまったのかと残念で仕方なかった。

しかし、彼の心は純真でその瞳は混じりつけがなく光り輝いている。これならば、鍛えようによつてはとんでもない化け物に化けるかもしれない、スカサハはそう思った。

「パルプンテはわからんが、まあ、私が指導する通りにやれば魔術はできるようになるさ」

「流星は師匠！」

そう言つて、スカサハの言葉に目を輝かせるクー・フリーン。

こうして、クー・フリーンはYARIOの仲間達を集める為に厳しい修行に入る事になった。魔術を極め、世界を移動し、そして、どこかの世界線にいるであろう仲間達と再会する。

師匠となったスカサハの指導の元、クー・フリーンの修行がはじまった。

ちなみに今、ここで、スカサハの指導を受ける事になったクー・フリーンが現在でき

ることをおさらいしておこう。

- ・農業一般——できる
- ・陶器・磁器・鉄器——作れる（窯含め）
- ・炭——作れる
- ・料理——できる（プロ並み）
- ・手芸——できる
- ・牧羊（ヤギ含む）——できる
- ・養蜂業——できる
- ・スズメバチ駆除——できる（フルセット着てやれば）
- ・風呂釜——作れる（処女作は大破）
- ・井戸掘り——できる
- ・ペットの世話——できる（ダメ犬デブ犬教習含む）
- ・子ども——作れる
- ・鬼ごっこ——できる（対100人まで）
- ・巨大雪だるま実験——できる
- ・自動車——できる（製作・修理・運転も）

- ・自転車——できる（坂の上から海まで足をつけずに）
- ・電車——勝てる（リレー）
- ・飛行機——作れる（ペットボトルエンジン・一人用背負いタイプ）
- ・家——作れる（木造家屋）
- ・橋——できる（クレーンによる建築作業）
- ・漁業一般——できる（素潜りからマグロ釣りまで）
- ・村——作れる
- ・林業——できる（伐採）
- ・造船——できる（修復も）
- ・運送業——できる（PRも可）
- ・音楽業——できる（本業）
- ・芝居——できる（本業）
- ・司会業——できる
- ・ダンス・アクロ——できる
- ・落語——できる
- ・接待——できる
- ・無人島開拓——できる

・レールワーク——できる

・魔術——↑NEW!!

・色んな槍の使い方——↑NEW!!

オカン力：A+

男なのに優しいお袋じみた圧倒的包容力がある。仲間達の中心でもあり、さらに、訪れた村の村人達からよく好かれるので知らない間に知名度がだんだん高くなっていく。

土の知識：EX

わからない土の知識などない、だいたいの土なら豊かにすることができ、豊富な農作物を作ることができる。

島の開拓者：EX

山城やつれたか丸など、無人島に数々の物を作り上げた。無人島ならば彼と彼の仲間がいればもう持つていくものは何も必要ないだろう。

井戸作り：B+

いくら汚染されている井戸でも真水にできるほどのスキル。カラスの死体があった腐った井戸さえも飲める水までにした逸話を持つ。

幸運：B+

世にも珍しい深海魚ゴブリンシャークや絶滅寸前の動物などに巡り合うほどの幸運を持つ、本来のクー・フリーンは幸運Eだが、謎の加護を得た事により幸運値が上がった。

騎乗：B+

あらゆる働く乗り物を乗りこなすことができる。運搬トラックからクレーン車、ユニボ、シャベルカーまでなんでもござれ、重機歴13年のベテランは伊達ではない。

0円食材の探索：A

毎度お馴染みの『え？これ、捨てちゃうんですか!?』捨てちゃうものをタダで頂くことが出来るスキル。物を無駄に消費したり、捨てちゃったりすると、彼等が全部貰っていつてしまう。

バックトウザだん吉

クー・フリーンを弟子にしたスカサハ。

彼の修行を見ることになった彼女は持ち得るルーン魔術の知識を彼に指南した。

そして、クー・フリーンも熱心に彼女の教えに従って学べるものは学んだ。もともと、素材は一級品、学ぶ姿勢も良くスカサハはクー・フリーンを実に可愛がった。

しげちゃんと呼ぶ彼は人間的にも人格者であり、よく人から好かれる性格である。親しみやすい彼のそんな性格が功を奏したというべきだろう。

「いいか？ ルーン魔術はこうやってだな…」

「すぐく…勉強になる…」

持参した自作のメモ帳にスカサハから教えられた事を目をキラキラさせて書いていくクー・フリーン。

仲間達を探すため、ルーン魔術を学ぶことは彼には重要な事であった。この魔術の知識が自分自身と仲間達の架け橋となる事を彼も理解しているからだ。

学び、身体を鍛え、時には地面にへばりつこうとも彼は学ぶ姿勢を無くなさなかつた。スカサハもこんな弟子の姿勢を見れば、自然とクー・フリーンには自分のとっておきをやりたいたいと思いはじめるのは自然な事であつた。

そして、スカサハはクー・フリーンにある日、一本の槍を授ける事にした。

それは、ルーン魔術もある程度、板についてきた事を見計らつてスカサハはクー・フリーンに槍の使い方、槍を使った体術を学ばせようという意図があつたからである。

スカサハは己が授ける槍の使い方を学びさえすればきっと彼は英雄として名を馳せるだろうという確信があつた。

「…しげちゃん、よくここまでついてきた。褒美にこれをお主にやろう」

「これは…」

「ゲイ・ボルグ、今日からお主の槍だ」

クー・フリーンがスカサハから手渡されたのは朱色の槍、刺し穿つ死棘の槍だつた。それを静かに受け取るクー・フリーンはスカサハはまっすぐに見つめる。

そう、これからはこの槍が相棒だと彼の瞳を見据えたままスカサハは静かに頷いた。その槍を持ったクー・フリーンはジッとゲイ・ボルグを見つめる。そして、槍の先端に視線を伸ばすとムウとした表情を浮かべてスカサハにこう話をしはじめた。

「師匠！　これ！　先端尖つとるやん！　危ないで！　こんなん持ち歩いて人に刺さつたら大事ですよん！」

「いや、槍なんだからそれは尖つてるのは当たり前だろう」

そう言つて、ゲイ・ボルグを授けたスカサハは自分が持つている二本のゲイ・ボルグをクー・フリーンに見せながら告げる。

ゲイ・ボルグは槍なのだから先端が尖つているのは当たり前である。しかも、突けば心臓とかによく突き刺さつたりする槍だ。

先端が尖つているのは至つて当たり前の事である。しかし、クー・フリーンは左右に首を振るとお説教をするようにスカサハにこう告げはじめる。

「あかん！もう、あんたはいつもそんな屁理屈ばかり！　お母さんは許さへんよ！　ちよつと！　あんたのも先端尖つとるやん！残りのもお母さんに貸しなさい！」

「え？ ちよっ!? 儂のゲイ・ボルグをどうする気だお主!」

「しばらく没収やで! こんな危ないもの持ち歩いてたらダメでしょ! お母さんに預けてちよつと待つときなさい!」

そう言つて、エプロンを淡々と装着したクー・フリーンはスカサハから強引に二本の槍を没収し、計3本になったゲイ・ボルグを担いで何処かに行つてしまう。

彼の勢いに押されたスカサハは黙つてそのオカンになった弟子の後ろ姿を見つめることしかできなかつた。

それから、三日ほどの日が過ぎ、クー・フリーンは満足げに足取りを軽くして三本のゲイ・ボルグを担ぎ、再びスカサハの元に帰つてきた。

「ただいま帰つたでー、師匠」

「…何処に行つていたんだお前は…」

「はい! 師匠、これお返しするわ」

そう、彼がスカサハから没収し担いで帰つてきたゲイ・ボルグはもはや、ゲイ・ボルグだったものだ。

彼女はクー・フリーンから手渡されたそれを見て目をまん丸くしている。一本はなんだか先端に金具のようなものを取り付けてあり鍬のようになっている。

もう一本はしなっていて、先端には糸のようなものや浮きがついていた。早い話が釣竿になっている。

スカサハはクー・フリーンから没収され、鍬と釣竿になったゲイ・ボルグを見て言葉を失っていた。

「お主、これ…。儂のゲイ・ボルグは…」

「しつかりできてるやろ？ この竿ならマグロも釣れるし！ この鍬ならスイカ畑とかも問題なくできる！ しかも尖った先端がないからみんなも安心やで！ ほら、僕のものも鍬にしてきたんですよ！」

そう言ってドヤ顔で晴れやかな笑顔でサムズアップして、お手製、ゲイ・ボルグだった鍬を見せるクー・フリーン。

皆が変に先端に突き刺さらないようにゲイ・ボルグつたものの先端は綺麗に金具になつてるかもしくは丸くなっていた。

これでは心臓に突き刺さらないどころか槍として使い物にならない、使い道があると

すれば農業だけである。

「……………」

「よし！ 師匠！ 早速、この鍬の使つて畑を耕してみましょ！」

「私の…ゲイ・ボルグが…鍬に…」

まさか、こんな事になるとは思いもよらなかつたスカサハは鍬になつてしまつたゲイ・ボルグを静かに見つめる。

しかし、クー・フリーンは水を得た魚のように生き生きとそのゲイ・ボルグ（鍬）を使つて地面を耕していた。

感触はいい、これならどんな畑でも耕せそうだとクー・フリーンは確信する。槍なんて危ないものより、やはり、クー・フリーンには鍬が一番しつくり手に馴染んでいた。

「やつぱり、連日、槍持つより僕は鍬持つた方が落ち着きますね」

「そうか、しつくりくるか…私も思いの外、この鍬が手に馴染んでいてびつくりしてるよ」

そう言いながら静かに涙を流すスカサハは土をゲイ・ボルグ（鋤）で耕しながらクー・フリーンの言葉にがっくりと項垂れていた。

スカサハは槍の使い方を教えたいはずなのだが、気がつけば槍が鋤になっていた。しかも思いのほか自分の手にしつかりと馴染んでいる。

それから、しばらくゲイ・ボルグ（鋤）で畑を耕す2人。

その後、仕方ないのでスカサハは槍の代わりに鋤で槍の使い方をクー・フリーンに指導せざる得なかった。

クー・フリーンの目の前で槍を使うと怒って彼がゲイ・ボルグを没収し、また鋤や釣竿にしてしまうので致し方ない。

ゲイ・ボルグをこれ以上、鋤にして欲しくないスカサハには苦渋の決断であったのである。

それから、月日がそれなりに経ったある日、

スカサハは槍という名の鋤の使い方を指導し終え、何やらカチャカチャと工具を使って何かを一生懸命に作るクー・フリーンの姿を見つけた。

それは、スカサハが見た事の無い、鉄で出来た箱のようなものだ。不思議に思った彼女はそんな箱のようなものを一生懸命に作るクー・フリーンに声をかける。

「何を作っておるのだ？ お主」

「おー！ 師匠やん！ これか？ これはな、車やで！」

「車？」

「せやで、名前は『だん吉』つていうんやけど…バック・トゥ・ザ・フューチャーつて師匠見た事あるかな？」

「いや、無いが…、それは車というのか…」

そう言つて、鉄で出来た箱をまじまじと見つめるスカサハは煤だらけのクー・フリーンの顔を見つめながら不思議そうにそれを見つめていた。

今の時代は移動手段は馬が主流であり、車などの知識は彼女には無かった。

しかし、長年、生きてきた彼女にはそれが実に興味深いものに映る。

クー・フリーンは煤だらけの顔を指でこすりながらにこやかな笑顔を浮かべてスカサハにこう語りはじめた。

「このデロリアンもとい『だん吉』で仲間達のいる世界に渡ろうかと考えてまして…。ほら、ルーン魔術とかを応用で使つて」

「ほほう…それは、面白い発想だな、どれ、私も協力してやろう」

「ほんまですか!？」

「ああ、その代わりこの『だん吉』には私も乗せてくれよ?」

「もちろんですよ! それじゃまずはずね…」

そう言って、クー・フリーンはスカサハに自家製自動車『だん吉』の設計図を見せながらその詳細について話をしはじめた。

だん吉とは本来はソーラーカーである。太陽光の光をエネルギーに変えて走る地球に優しい車だ。

しかし、このだん吉のエネルギーにはルーン魔術を使ったエンジンを用いる。

なぜ、太陽光エネルギーではないのか? それは、時速140kmで世界を超えられるルーン魔術によるシステムをクー・フリーンが考えていたからだ。

太陽光のエネルギーだけでは140kmのスピードは出ない、すなわち、クー・フリーンはこの140kmのスピードを出させる為にルーン魔術を使おうと考えたのである。

そこからはスカサハとの綿密な話し合いだった。

タイヤに必要なゴム、そして、機械類に使うネジや加工品をこの世界では一から調達

しなければいけない。

タイヤはゴム（合成ゴム、天然ゴム）と配合剤（カーボンブラック、硫黄、オイルなど）を混ぜ合わせ、板状にするところから始まる。

そして、天然ゴム、オイル、カーボンブラックはこの時代には存在しない手に入らない代物だ。

よつて、クー・フリーンとスカサハはまず、これらを集める為、世界を旅する事になった。

まず、2人はオイルとカーボンブラックを得る為に石油を探すところから始める事にした。

黄色いヘルメットを被り、クー・フリーンとスカサハはツルハシにしたゲイボルクを担いで石油を掘り当てる為に中東まで遠征。

「師匠、おそらくこの辺かもしれないですね」

「そうか、ここどこかに石油とやらがあるのか」

そして、石油を掘り出す為に2人でゲイ・ボルグ（ツルハシ）を使い、地面を掘り進めた。

石油の加工方法はクー・フリーンは知識としてある。

石油は原油にし、さらに分留によつて成分を分ける。精製することにより、天然ガス、ナフサ（ガソリン）、灯油、軽油、重油、潤滑油、アスファルトなどの成分に分けられる。

この石油を原油にしさらに分留してカーボンブラックやオイルを手に入れる必要があった。

「む、石油とは？これか？」

「おお！ 師匠！ グッジョブです！」

そして、石油を掘り当てたスカサハはそれを一部を入れ物に入れてクー・フリーンに見せる。

確かに黒い油、石油であった。

その石油を持ち帰るため、たくさんのおれ物に入れて2人はさらに旅を続ける。

次の目的地はゴムノキの樹液に含まれる天然ゴムを得る為にタイへと向かった。

道は険しかったが、クー・フリーン、スカサハの2人は名高いYARRIOの英霊、こ

れだけでへこたれるほどヤワではない。

タイについた彼等は現地人の人に頼んでゴムノキまで案内してもらった。

「これが…ゴムノキ…」

「よし！ ゴム回収しましょう！ 師匠！」

そして、天然ゴムをタイにて大量に回収。

こうして、2人の旅は帰り際の道で硫黄を手に入れる事でようやく終わりを迎えた。手に入れた素材を用いて加工、配合を行なっていく。

作成した3つのパーツを貼り合わせる成型から、金型に入れて加熱・加圧し、化学反応させることによって、強力な弾力のあるタイヤに仕上げ、一通りの加工を済ませればタイヤの完成品が出来上がる。

それをクー・フリーンはだん吉へとはめ込んでいった。

「まさか…タイヤを作る為に石油を掘らなあかん事になるとは思わんかったけど師匠がいてくれて助かりましたわ」

「ふふん、そうだろう」

そうやって、クー・フリーンの褒め言葉に鼻を高くするスカサハ。

デロリアン、もとい『だん吉』がだんだんと形になつてくる姿はスカサハもなんとも
言えない感動があつた。

この調子なら『だん吉』の完成も近い、あとはルーン魔術などでタイヤを強化したり、
エンジンや世界を渡るシステムを作り上げれば良い。

『だん吉』の完成に向けて、ふたりは意気揚々と車作りに没頭していくのであつた。

今日のY A R I O。

石油採掘————↑NEW!!

タイヤ作り————↑NEW!!

ゲイ・ボルグ加工————↑NEW!!

仲間探しへGO!!

失われた仲間達を探すため違う世界へ飛ぶためにデロリアン『だん吉』を共に作り上げる事になったクー・フリーンとスカサハ。

過酷な修行をこなしながらクー・フリーンはスカサハと共に顔を煤だらけにし、『だん吉』の組み立てに勤しんでいた。

材料を原材料から集め、加工し、そして、組み立てる『だん吉』にはスカサハから教わったルーン魔術を組み込んである。

そして、いよいよ、『だん吉』作りも大詰めに差し掛かり、クー・フリーンはいつも通り煤まみれになったまま車の下からひよっこり顔を出した。

「よっしゃー！ こんなもんやろー！」

「できたのか？ できたのか!？」

「はい！ あとは試運転入れれば完成です！」

車の下から顔を出したクー・フリーンに目をキラキラと輝かせながら問いかけるスカサハに彼はサムズアップしてそう答えた。

石油を取りに中東へ、ゴムを取りにタイまで。遠い道を遥々歩き集めた努力の結晶を集めたデロリアン『だん吉』。

スカサハとクー・フリーンの2人での共同作業により、デロリアンもとい世界を越える『だん吉』のフロントガラスはキラリンと光を発していた。

いよいよ、試運転の段階まで漕ぎ着けた。エンジンとタイヤにはルーン魔術が施されており、これならば、理論的には世界を渡る事ができる。スカサハ、クー・フリーンの2人は完成した『だん吉』を誇らしげに見つめていた。

そして、クー・フリーンは『だん吉』の試運転について、スカサハにこう問いかける。

「よし！ 師匠！ 試運転はどっちがやります？」

「!? これを動かすのか」

「せやで、でもまあ、最初はやっぱり僕がしましょうか、運転の仕方とか教えるので助手席に座ってください」

「…お、応！ こんなにワクワクするのは何年振りだろうか」

スカサハは上に扉を開く『だん吉』の助手席に座りながら、車の乗り心地や感触を確かめつつキラキラと目を輝かせている。

運転席に座るのはクー・フリーン、重機歴13年のベテランは久方ぶりに乗る車の感触を確かめながらしみじみとハンドルに手を伸ばした。

懐かしい感触が蘇る。自家製自動車『だん吉』の運転をするのは感慨深いものがあった。

「よし、それじゃ…場所を決めてやな、とりあえずそれらしいところに座標合わせてみましょ」

「おお!? そんなところに小さなレバーが!」

「むふふ、これはだん吉の移動する世界線を調整するレバーで…って、まあ説明すると長くなるでまた次の機会に、あ、師匠、ちゃんとシートベルトせなあかんよ?」

「ん? シートベルト?」

「これやでー」

「…っ!! 横からなにか帯のようなものが出たぞ!」

そう言って、クー・フリーンからガチャリとシートベルトをしてもらおうスカサハは目

が目新しいものに感動し声を溢す。

シートベルトだったり、だん吉の中にある機器だったりと長く生きてきた中で知らない物がたくさんありスカサハにはまるで新しい発見ばかりであった。

しかも、これらを作るのに自分も作業に加わった分。その感動もさらに大きい、だん吉が音を立ててエンジンを鳴らしはじめたあたりでスカサハのテンションはだだ上がりであった。

そして、広くひらけた場所で助走をつけるクーフリーン。いよいよ、『だん吉』が世界を越える時が来た。

「いくでー！ 師匠！ しっかり掴まってな！」

「なんだかワクワクしてきたな！」

ブオン！ というアクセル音と共に温まった『だん吉』のエンジンを見計らい、アクセルを思いっきり踏み込むクー・フリーン。

スピードメーターはグングンと上がっていき、バチバチと『だん吉』からは火花が散り始める。

時速140kmに到達することにより、この『だん吉』はルーン魔術を施した世界転

移装置の働きによって時間を飛び越える事ができる。

スピードメーターが130を上回り、世界の境界線が見えてきた、2人は湧き上がる感情を抑えきれない。

ついに自分たちが作り上げた『だん吉』が世界を越える。それだけで、2人にとってみればこの『だん吉』のために積み重ねた月日が報われたと感じる事ができたのである。

「跳べえー！」

「よし行けー!!」

テンションが上がったスカサハは嬉しそうに声を上げながら両手を上に突き出し、ハンドルを握るクー・フリーンは笑顔を浮かべて大声を上げる。

そして、加速した『だん吉』は火花を散らしながらバチン！と音を立てると、閃光を放ち、地上に炎のタイヤ跡を残すと影の国からその姿を消した。

ケルト神話。フィン物語群、フィニアンサイクル。

吟遊詩人オイシンによって語られるその物語にはある有名な英雄が幾多も存在している。

その物語で語られるのは神話上の英雄であるフィン・マックールと彼の率いるフィアナ騎士団の功績を主題とする物語が主なものだ。

その中でも、フィアナ騎士団の一員でドウンの息子。若さの神、妖精王オエングス、海神マナナン・マクルルを育ての親に持つ英雄が存在する。

それがこの…。

「へい！ イカお待ち!! イキの良いイカだよ！ お客さん！」

「流石は大将！ 早いね！」

「そっちのお客さんは？ ご注文なんにしましょう？」

「カンパチの握り一つと、あー…！」

「フィンさんが釣ってきたヒラメのえんがわが今日はオススメだよ！」

「おお!! じゃ、じゃあそれで！」

「よっしゃ！ ご注文入りましたー！ カンパチとえんがわの握りでございやすね!!」

白い板前衣装に身を包んだフィアナ騎士団、寿司職人もといタオルを頭に巻いた男前大将デイルムツド・オディナ、その人である。

デイルムツドは二本の槍と二本の剣を持つ、アイルランドの英雄。

槍はゲイ・ジャルグ、ゲイ・ボウ。そして、二つの剣、モラルタとベガルタ。

デイルムツドには魔法の黒子を妖精によって頬に付けられ美しい容姿である上に女性を虜にしてしまうという呪いがかけられており、それ故にフィアナ騎士団の英雄フィン・マックールの3番目の妻となるはずだった婚約者グラニーアは、デイルムツドと恋に落ち、デイルムツドは彼女を連れて逃避行をする不義を行う事になる。

数年の放浪の後、デイルムツドは不義を許されたが、史実では異父弟の化身である耳と尾のない大きな魔猪に瀕死の重傷を負わされてしまい、その不義が原因でフィンの癒しの手で掬った水を飲む事が出来ずその命を落としてしまったという悲劇の英雄だ。

しかし、このフィン物語群にいるデイルムツド・オディナは一味も二味も違う。

何故ならば、デイルムツド・オディナもまたY A R I Oだからである。

彼の宝具。槍のゲイ・ジャルグ、ゲイ・ボウ、剣のモラルタとベガルタ。

Y A R I Oであるデイルムツドは二つの槍はどっかの誰かさん同様に二本とも鋏に、モラルタとベガルタは切れ味が良いからとなんと魚を捌くための包丁に加工してしまっただけ。

デイルムツドには史実では己を死に追いやるであろう女性を虜にしてしまう魔法の

黒子がある。しかし、これは、デイルムツドは逆に捉えていた。YARRIOたるもの男女子供に人気があつてこそなんぼのものであると。彼の前世も同じようなもので女性には人気があつたし、さして、気にはならなかつた。

もちろん、彼に対して結婚の話はいくらでも舞い込んで来たが、彼はその話に対して毅然としてこう答え続けた。

『YARRIOのメンバーとしてリーダーが結婚するまで俺は結婚するわけにはいかん！』

『え？ YARRIOって何？ ちょ、デイルムツド？』

『デイルムツド、その気持ちはわかる』

『親父!?!』

『流石はADフィン！ やっぱりわかつてくれるなんてあんたは最高のADだ!』

『ADって何!?! 親父は騎士団長だぞ!』

こうして、ガツチリと手を取り合い、互いに頷くフィンとデイルムツドのやり取りにフィンの息子のアシーンは仰天させられた。

この出来事をきっかけに騎士団の皆はそれ以上結婚について、デイルムツドに何も言

えなくなってしまうたのである。

このフィニアンサイクルの主人公であるフィンもまたYARRIOの一員と言っている。彼の目的はただ一つ、YARRIOの黒子役として彼らをサポートしたいという願望があった。

彼はデイルムツドとは異なり妻サーバとの息子アシーンがいるが、YARRIOの情熱はデイルムツド同様冷めてはおらず。いつか、リーダーが迎えに来ることを夢見て日々生活している。

こうして、今日も今日とてデイルムツドとADフィンの2人は共に女、子供、男性まで大人気のフィオナ騎士団という名の板前騎士団をやっている訳だ。

そして、デイルムツドに感化されて騎士団ではない者でも寿司や調理の腕を磨くものや弟子入りしたがる者たちも後を絶たない。

デイルムツドの調理の腕はまさに芸術と言って良かった。

連日のようにフィオナ騎士団の本拠地であるアルムの砦には人々が寿司や板前料理を食べたいと訪れ賑わっている。

噂を聞きつけたコーマツク上王も来訪し、あまりにも美味しいデイルムツドの料理に感動し涙したという話は有名である。

「ふう、今日も頑張ったな、みんな」

「いやー、流石はデイルムツドの大将だ！」

そう言いながら、閉店後に汗を拭うデイルムツドに晴れやかな表情で告げるフィオナ騎士団の仲間の一人、ロナン。

しかし、デイルムツドはどこか浮かない表情を浮かべていた。これだけ料理の腕があり皆から愛されていてもポツカリと空いた穴が塞がらない。

それを見ていた団員の1人、フィンの息子であるアシーンはデイルムツドにこう声をかける。

「どうしたんだ？デイルムツド？」

「あー…いや、もう何年もなるけどさ、これで良いのかなって思ってた」

「…何がだ？ 料理を振る舞うお前さんは楽しそうだし、何より親父もお前さんとは仲が良いだろ？」

「まあねえ、けど、そうじゃないんだわ」

長い年月が経ちデイルムツドより歳を取ってしまったフィン。

彼の奥さんであるサーバも鹿に変えられ、黒いドルイドに連れ去られてしまった。顔には出さないがフィンから話を聞いた人情に厚いデイルムツドは彼が辛い思いをしている事を察している。

長年、一緒にいた仲間だからわかる。ここでは無いがあの人島や村での事は今でもデイルムツドは鮮明に覚えていた。

フィンは前のようにはいかない、自分よりも年老いてきて、これ以上、前みたいは無理はさせられ無い、それに、このままこの場所に自分がいれば彼に負担が掛かってしまう。

デイルムツドはそんな事を考えていた。長い年月の間によく再会できた仲間の1人だが、リーダーが居ない今、彼の側に果たして自分が居てもいいのだろうか。

フィンのここでの立場は騎士団長、自分は騎士団料理長（板前）に過ぎない。

そろそろ、この場所から立ち去らねばならないのでは無いのか、そういう気持ちがある中には少しずつ芽生えていた。

すると、砦の厨房の扉が開き、騎士団員の1人であるルガイドが慌てたような表情で2人にこう声をかけてきた。

「お、おい！ 2人ともちよつと来い！ 砦の前になんたか凄いもんが現れたぞ！」
「…んあ？ ちよつと待つてよー。俺、今からアシーンと一緒に明日の仕込みあんだつてー」

「いいから来いって」

そう言いながら、顔を見合わせるデイルムツドとアシーンの2人の手を引いてを半ば強引に厨房から引つ張り出すルガイド。

2人は仕方ないと互いに肩を竦めると、ルガイドに案内されて、砦の外まで案内される。

するとそこには…、一台の大きな箱状のものが煙を吹き上げて置いてあつた。それを見た3人は顔を見合わせる。

そして、デイルムツドはしばらくしてから啞然とした表情でこう声を溢した。

「これって…、車じゃん！ マジで?!? 嘘でしょ!?!」

「これがなんだかわかるのかお前？」

この時代にまさか自動車を見ることになるとは思わなかつたデイルムツドは目をパ

チクリさせていた。

驚いたように声を上げるデイルムツドにアシーンは首を傾げて訪ねる。アシーン達からしてみればこのような鉄のようなもので出来た箱など見たこともないものだった。すると、デイルムツドは苦笑いを浮かべて頭を掻きながら彼にこう話をしはじめた。

「え？ まあ、ちよつとね？ 弄った事あるからさ、いやー、懐かしいわ…でもなんで」

そう言いながらまじまじと鉄の箱を一周して見つめるデイルムツド。

すると、その自動車の扉が上へと開き始め、中から人がゆつくりと降りてきた。そして、咳き込み、腰に手を当てながら出てきた彼の声を聞いた途端、デイルムツドの世界が変わった。

「あー、イタタ…、いやー中々の衝撃やったなー、師匠どないでした？」

「…最高だったな、これ、次は私に運転させてくれ！」

「OKです！ ほんじゃまず…仲間を探して…」

中から出てきたのは男女2人、しかし、デイルムツドが目を丸くしたのは男の方だ。

聞き慣れた声、そして、いつも自分達をまとめてくれた彼の事を片時も忘れたことなど、なかった。

いつか必ず会えると信じて待っていた。デイルムツドの目には薄っすらと涙が滲み出てきている。

「あれ？ なんやねん、あんたら…」

「いや、それはこちらのセリフだ、お前らこそ…」

「リーダー!! リーダーだよな!」

そう言いながら、板前の制服を着たデイルムツドは青い作業着を着た男に近寄り手を握りしめた。

長年、待ち望んだ再会、ようやく巡り出会えた彼にデイルムツドは感動すら覚えていた。やはり、自分達を探しに来てくれたのだと。

デイルムツドから手を掴まれた彼は目を丸くしたまま、ゆつくりと笑顔を浮かべていた。

「もしかして…」

「待ってたよ！ リーダー！」

そう言いながら、デイルムツドは感動のあまり涙を流しながら彼にハグをする。

ずっと待ち望んでいた彼がやって来てくれたのだと再会を喜んでいた。薄っすらだが、デイルムツドからハグを受けた時に作業着を着た彼は確信する。

懐かしいこの感覚、間違いない、彼はY A R I Oの1人であるという事を。

「まさか！」

「そのまさか！ マサだけに！ なんちゃって！」

「バカ！ それは僕の専売特許やん！ 久方ぶりやんかー！」

そう言いながら、デイルムツドのしようもない洒落を聞いて作業着を着ている彼、クローリンもまた涙を流しながら仲間との再会を喜んだ。

いまいち状況が掴めていないフィン騎士団のアシーンとルガイドの2人は顔を見合わせ、喜ぶ弟子の姿を見ていたスカサハは微笑ましくそれを見つめていた。

『だん吉』で越えた世界で再会したY A R I Oの仲間の1人、デイルムツド・オディナ。

クローリンとデイルムツド・オディナの2人のY A R I Oの再会が果たして、ケル

ト神話に何を与えるのか!?

そして、それは！ 次回の！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

砦で板前ができる———↑NEW!!
世界を飛び越えられる———↑NEW!!

まず草から探します

失われた仲間達を探すため違う世界へ飛ぶためにデロリアン『だん吉』を共に作り上げる事になったクー・フリーンとスカサハ。

世界を『だん吉』で飛び越えた二人はY A R I Oの一人であるフィオナ騎士団、板前料理長デイルムツド・オディナに再会する事となる。

再会を喜ぶ、Y A R I Oのリーダー、クー・フリーンとデイルムツド・オディナ。

Y A R I Oの仲間にも再会したリーダーのクー・フリーンとその師匠であるスカサハは手厚くもてなされ、フィオナ騎士団の本拠地の砦であるアルムの砦へと案内された。

だが、再会したクー・フリーンはデイルムツドの話聞いて深刻な出来事に直面する事になった。

そのデイルムツドの話というのは…。

「…そうか、まさか僕らのA Dが…そんな事になってたやなんて…」

「ああ、なかなか深刻だぜ、リーダー、それに問題はA Dフィン足立だけじゃない」

「なんだ、それだけじゃないのか？」

「ああ、最近、デツカい猪が出て俺たちファイオナ騎士団が耕した畑が手酷く荒らされてんだ……」

深刻そうにデイルムツドは深いため息を吐いてクー・フリーンとスカサハの二人にそう語る。

まずは、ファイオナ騎士団団長であるADフィンが年老いており、ADの作業が困難であるという事。

そして、もう一つは凶暴な異父弟の化身である耳と尾のない大きな魔猪が自分やファイオナ騎士団の皆がせっかく耕した畑を荒らしに来るといふ悩みであった。

どれも大変な悩みである。確かに、ADフィンの力はYARIOには必要不可欠なものだ。これから先、ADフィンの協力が無ければ今後の活動にも支障が出て来てしまう。

畑に関してもそうだ、猪のせいで新鮮な食材が手に入らなくなるのはあまりにも酷い、それに、猪が出たとなれば怪我人や死者が出てしまう可能性がある。

その話を聞いた我らがリーダー、クー・フリーンは拳を握りしめて熱い感情を前面に押し出しバンと机を叩いた。

「よっしゃ！ 決まりやな！ まずはADフィンからや！」

「決まりだと？ どうする気だ？」

「つまり、ADフィンを若返らせたらええんやろ？」

「何?! フィンを若返させるだと！ 馬鹿な!!」

そう言つて、机を叩いて告げるクー・フリーリンに声を上げるフィオナ騎士団の団員、口ナン。

若返らさせたらいいと簡単に言うが、それは、すなわち不死の類の術でも持ちいらなければ不可能な業だ。

そして、スカサハもまたクー・フリーリンの言葉に目を丸くしている。仲間を若返らせるなどという考えを聞かされれば、そうなるのは当たり前だ。

スカサハは神霊の類を狩り続けた事により、信仰が集まりすぎた結果、神の領域に片足をつっ込んでしまいそれにより人間の枠を越え、不死になってしまった女性である。

そんな、彼女にしてみても仲間の若返りを行うなど神に反逆するようなクー・フリーリンの発想にあまりにも度肝を抜かされた。

しかし、それだけに逆に興味をそそられるものがある。

「…あははははは!! 本当に面白いなお前は! 流石は儂の弟子だ!」

「でしよう? ナイスなアイディアでしょ!」

そう言つてスカサハにサムズアップして満面の笑みを浮かべるクー・フリーン。何故
だか、それは周りには清々しい程に爽やかなものに映る。

しかし、それを静かに聞いていたデイルムツド・オデيناはY A R I Oのリーダーで
あるクー・フリーンの言葉に納得したようにポンと手を叩いていた。

「あ、その手があつたか、流石はリーダーだわ」

「!? ちよつとまてえ!! デイルムツド! 何でお前は平然と納得してるんだ!」

納得したように頷くデイルムツドに思わず突つ込みを入れるフィオナ騎士団の一員
でありフィンの息子であるアシーン。

しかし、そうと決まれば彼らの行動は早い、すぐさま、その場で今後どうするか
の打ち合わせをしはじめた。

「ちなみにどのレベルからはじめる？ リーダー」

「せやなー、若返りって言ったらやっぱり薬やる？」

「やっぱり原材料から集めるのか？ 今回も」

「話を聞け！ お前ら!!」

そう言つて、淡々と話を進める彼らに声を上げて突つ込みを入れるアシーン。

何故か、もう自分の父親であるフィンを若返えらせる方向で話がトントントン拍子に進んでいけばそうなるのも致し方ない。

だが、彼らは顔を見合わせると首を傾げる、別になにもおかしな事は言っていない。単に仲間であるフィオナ騎士団団長のフィンを若返らせADとして復帰して貰おうとしているだけである。

そこで、クー・フリーンはある事に気がついた。

「あ！ 師匠！ そういや、僕ら自己紹介まだでしたやん！」

「む？ おお、そう言われてみればそうだったな」

「違う！ そうじゃないんだよ！ 確かにしてないが！」

そう言われて、打ちひしがれるように地面に両手をつけて項垂れるアシーン。

それを見ていたフィオナ騎士団の騎士団員であるロナンも頭が痛くなってきたのか額に手を当てて左右に首を振り、ルガイドはそれを見てゲラゲラと笑っていた。

それから、とりあえず改めてその場にいる3人に自己紹介をはじめめる。

「僕はクー・フリーンって言います、そんなもってこちらが師匠の…」

「スカサハだ、よろしく頼む」

「……は？」

その瞬間、その場の空気が止まった。

彼は今何と言っただろうか？ 更に言うなら隣の女性もサラツととんでもないことを言っていた様な気がする。

クー・フリーン？ スカサハ？ いやいやいや、おかしな話である、今から昔の伝承に残されている英雄の名前では無いだろうかと彼らは顔を見合わせた。

「も、もう一回いいですか？」

「あ、クー・フリーンです、呼びにくかったらしげちゃんでもええよ？」

「私はスカサハだ、私も呼びにくかったら……」

「いやいや、師匠は愛称とか無いですよん」

「む、そうか、何か考えとかねばな……サーちゃんとかどうだろう？」

「なんか大佐っぽいですね、返事がサー、イエッサーとか言わされそうな気がするの僕だけやろうか」

「いいな、それ」

「あかん、僕、余計な事言うてもうたかもしれん」

そう言って、もう一度、アシーンに問われた名を告げて漫才みたいなやり取りを行うクー・フリーンとスカサハの二人。

それを見ていたデイルムツドはウンウンと頷いてそのやり取りを見ていた。しかし、二人の名を聞かされた3人の顔は蒼白である。

クー・フリーンと言えば、今から三百年以上前の伝承に残されている大英雄であり、スカサハと言えば影の国の女王でこんなところに軽いノリで来ていい様な人間ではない、というか神様に近い類の者である。

しかし、デイルムツドに関してはそんな大物達に対して実に親しく接していた。

こうなってくるとファイオナ騎士団の3人にはY A R R I Oと呼ばれるもががよくわか

らない得体の知れないものの様に思えて仕方なく思えてくる。

「じゃあさー、サーちゃん師匠はリーダーの師匠って事は俺の師匠にもなるって事かな？」

「まあ、そうなるか、じゃあ、お前も私の弟子だ」

「おー！　なんか知らないけど俺、弟子になっちゃったよ！　しげちゃん！」

「やったやん！」

そう言つて、ディルムツドとクー・フリーンはサムズアップをし合いながら笑みを浮かべて互いに喜び合う。

それを、3人のフィオナ騎士団は呆然と眺めることしかできなかった。いや、それよりも色々突っ込みたいたいことが多すぎて、もはや、どうしてもよくなってきたのかもしれない。

そして、彼らはとりあえず自己紹介が終わるとすかさず先ほどの打ち合わせに戻ることにした。

「それで若返り薬ってどのレベルから作るの？」

「えーと、師匠なんかわかりますか？」

「んー、そうだな、私の知識が確かなら若返りの霊薬というものがあるはずだが……」

若返りの霊薬。

文字通り、飲んだ人間を若返らせる薬である。その製造法としては深淵から持ち帰った不老不死の霊草を加工したものを使用する。

かつて、かの英雄王ギルガメッシュが深淵から持ち帰った不老不死の霊草を加工したものがこの霊薬と言われているが、しかし、それを入手するには過酷な道を歩んでいなければならないだろう事は容易に想像できる。

しかし、クー・フリーン達は至って簡単に考えていた。

要は深淵まで行つて薬草をブチっと回収して砦まで帰ってきて加工して薬を作ればいいというわけである。

「なるほど、まずは草から取りに行かなあかん訳やね」

「深淵まで野草狩りか！ 胸が熱くなってきたなりーダー！」

深淵までなんの迷いなく草取りに行こうと告げる二人の会話にポカンとするフィオ

ナ騎士団の3人。

だめだ、ついていけない。こいつらは一体何を言ってるんだとその場にいる3人は素直にそう思った。

野草狩りなら0円食堂で何回かした覚えがある二人にはそれが自然な事なのだろうが、草を取りに行く場所が場所だけに普通にぶっ飛んだ発想である事は誰が聞いても明らかだ、少なくとも彼ら以外はそう思うだろう。

スカサハは深淵まで野草狩りに行く勢いの二人の会話がツボに入ったのか、腹を抱えて笑いを溢していた。

自分の弟子であるクー・フリーンがある意味色んな意味で発想がぶっ飛んでいる事はわかっていた事だが、この、Y A R I Oのメンバーであるデイルムツドも大概である。

さて、こうして、話がまとまった所で今回のザ！ 鉄腕／f a t eはADフィンを若返らせるためにカタツシユ隊員達が深淵まで伝説の野草、霊草を手に入れるという挑戦だ。

今回、野草狩りに挑戦するY A R I Oのメンバーはリーダーのクー・フリーン、そして、再会したデイルムツド、彼らの師匠であるスカサハの3人である。

「ところでデイルムツド、その妖精につけられたであろうウザったい泣き黒子、私がひつぺがしてやろうか？」

「…え？ これ、取れるんですか!？」

「まあ、私にかかれればチョコチョコイのチョコイだ、ほれ、ちよつと顔かしてみろゲイ・ボルグで決つてやるから」

「痛い！痛い！ 師匠！ それ絶対、痛いやつですよん！」

「冗談だよ、ちよつと待つてろ、ルーン魔術でなんとかしてやる」

そう言つて、何やら呪文らしきものを唱え始めるサーちゃん師匠、もとい、スカサハ師匠。

すると、何という事だろうか！ デイルムツドの泣き黒子がみるみるうちに消えていくではないか！ それを手鏡で確認したデイルムツトは目をパチクリさせている。

そして、クー・フリーンはマジマジと黒子が消えたデイルムツドの顔を見つめていた。

元々、デイルムツドは綺麗な容姿をしているが黒子が顔を傷つけずに跡形もなく無くなっていった。これはまさに神業、デイルムツトの黒子に呪文を唱え終えたスカサハはフウと一息入れる。

これを目の当たりにした二人は素直に師匠であるスカサハを賞賛したくなった。

「ほえー、凄いなー師匠、整形外科医になったら絶対金儲けできるぞ」

「本当に無くなってる!? 正直、最近日焼けして肌を真っ黒にして黒子目立たなくして無くそうかと思つてたけどこれは助かった!」

「いや…日焼けで消える類のものじゃないぞ、その黒子…。というか整形外科医とはなんだ」

そのクー・フリーンとデイルムツドの二人の言葉に呆れたように苦笑いを浮かべるスカサハ。

Before : 以前はデイルムツドにあつた泣き黒子、女の子を魅了する反面、女難的な要素を含むこの泣き黒子でしたが…。

After : 何ということをしてくれたのでしょうか! なんと、デイルムツドさんの美貌はそのままに、顔を傷つけずチャームポイントだった泣き黒子が綺麗に無くなっているではありませんか! ケルトの女の子達が涙を流しながら打ちひしがれる姿が容

易に想像できてしまいます！

さて、こうして優しい妖精さんがつけてくれた面倒臭い黒子はスカサハから取り除かれ、綺麗な素顔になってしまったデイルムツド。

これで、彼には何ら不安要素は無くなった。

ケルト内での女の子の人気の気がそれなりに落ちた気がしないわけではないが、要はその分、農家や職人の方からの人気を取れば彼には何ら問題ない。というより、そちらがY A R I Oとしてはメインである。

「さて、それではひと段落ついたところで深淵まで野草狩りに行きますか！」

「馬を三頭とりあえず借りるけどええかな？」

「あー…、はい、もう好きに使っちゃってください」

クー・フリーンの言葉にもう投げやりな返答を返すフィオナ騎士団の団員の一人、口ナン。

なんだか、目の前でいろいろ言いたいことがあるすぎてもう、彼らはクー・フリーン達に何も言えなくなってしまうていた。

こうして3人はフィオナ騎士団から馬を借り、幻の0円野草、霊草を求めて深淵まで野草狩りに出かける事になった。

果たして、野草狩りに出掛けた彼らの前に立ち塞がるものとは一体どんな困難なのか！

この続きは…、次回の鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

深淵まで幻の野草狩り↑↑NEW
顔面ビフォーアフター↑↑NEW

伝説の食材その1。霊草

さて、前回の鉄腕／f a t eでADフィンを若返らせる為に深淵にある霊草を探しに旅に出たクー・フリーン一行。

その道は多難が当然のように待ち受けていた。まず、草を探すにしてもアテがない、果たして探している霊草がどんなものかスカサハも含めて想像がつかないからだ。

深淵の知識のあるスカサハもこの霊草については断片的なものしかわかってはいない。

「霊草は…深淵の暗い海底にあると聞いた事がある」

「ほえー、じゃあ海藻なんやな」

「どんな海藻なんだろうねー、海藻料理なら結構作ったことあるけど」

馬に跨る一同はそんな会話をしながら霊草を探し求め、スカサハが先導する中、深淵の海へたどり着くための過酷な道のりを行く。

借りた馬は当然、道中降りなくてはならなくなり、途中からは徒歩で進み、食料が底をつけば無人島や村での生活の知識を活かして生き延びながら彼らは進んだ。

深淵にある海底にある海藻、かつて、ギルガメツシユ王が手に入れたとされる海の野草。

手を取り合い崖を登り、過酷な道のりをスカサハが先導する中、彼らはただただついで行く、時には自分達の昔話や他愛の無い会話や豆知識を披露しながらの旅は苦難はたくさんあれど彼らには実に楽しいものだった。

そして、ついに、深淵の海を目の前に彼らはその場所へと足を踏み入れる事になる。

「ついに……ここまで来たか……」

「ここに伝説の真昆布があるんだね……リーダー」

「なんかアルギン酸めっちゃ取れそうやね」

暗く広がる深淵の海。

スカサハと共にこの場に訪れた二人は待ちに待った伝説の野草、霊草の生えているであろう場所の近くまでやって来ることができた。

暗く海底が見えない海、この海底にそのアルギン酸たっぷりの真昆布、ではなく、A

Dフィンを若返らせる為の靈草が生えている。

自作で作った船、『つれたか丸』を漕いで行き、靈草を取るべく深淵の海に行く。

そして、ある程度、深淵の海を進んだところで、『つれたか丸』の上で3人は会議を開いてひとまず顔を見合わせると、どうやって草を回収するのかを相談し始めた。

「やっぱり素潜りして取り行くしかないよね？」

「うむ、なら私がいこうか？」

「いやいや、あかんよ、師匠でも女の人をこんな暗い海に入ってもらうなんて危ないですから」

「ふふふ、今更、私を女扱いか？しげちゃん？」

「いや、結構、師匠は女の人扱いしてましたよね？ 僕」

そう言つて、クー・フリーンは悪戯そうに含んだ笑みを浮かべているスカサハに首を傾げながらそう告げる。

確かにいくら不死とはいえど、暗い深淵の海に女性である彼女を潜らせるにはあまりにも酷としか彼には思えない。

紳士的であるクー・フリーンはそう思った。危ない事こそ、男性である自分達が身体

を張つて進んでやらなくてはいけない。

その言葉を聞いたデイルムツドは待つてましたと言わんばかりに自身の背後から手作りしたあるものをクローフリーンとスカサハの二人に見せた。

「リーダー、じゃあ俺らで潜るんだ？ 一応、足ヒレ自作してみたけど」

「おー、これなら下までガンガン進めるな！」

「デイル、お前なかなか器用だな」

「へへへ、こんぐらいならまだ楽勝つすよ」

「おー、サイズピツタシやな、よし潜つてとつとと草筆つて来よう」

「イメージ的には？」

「禿頭にする感じで」

「了解！」

禿頭にするイメージでもつて足ヒレをつけた二人はスカサハに水中でも息ができるルーン魔術を施してもらい、海底にある霊草を取りに深淵の海に潜った。

深い深い海の底、真つ暗な海の底をひたすら潜り続ける事、数時間。

無心で潜り続ける二人、建築作業なんかに打ち込む際にはよく無言でひたすらに作業

に打ち込む彼らには懐かしい感覚だろう。

水中の中で息ができるのは非常にありがたい、これなら、きつと海底まで難なく辿り着く事ができる。

それからさらに数時間、ひたすら海を潜り続けるクー・フリーンとデイルムツドの二人。

すると、ようやく、海底まで近づいてきたのか：彼らの前に光り輝く海藻が目に入ってきた。その海藻はユラユラと揺られながら、わかりやすく光を発光している、これは…。

「ゴポポポポ…」

「ゴポポ」

間違いない、探し求めていた霊草だ！

海の底で蓄えた豊富な栄養分、そして、神秘めいたその海藻はまさに探し求めていたそれに違いないとクー・フリーンとデイルムツドの二人は水中でサムズアップして満面の笑みを溢している。

そして、霊草をむしむしと無心で采る二人はとりあえずそれをできるだけ大量に持ち

帰るべく持つてきた容れ物に押し込んだ。

これだけあれば、靈草を使った薬も作れるであろう。二人は互いに頷くと草を回収して深淵の海から数時間かけて浮上していく。

「プハツ…！ 師匠！ 取れましたよ！ 大漁です大漁！」

「おお、靈草を手に入れてきたか!？」

「とりあえずたくさん筆つて残りもある程度残してきたんで」

「これならまた一年くらいしたら大量に海底に生えて来るやろうしね」

そう告げる二人は深淵の海に浮かぶ船、『つれたか丸』に登り、回収した深淵の靈草を師匠であるスカサハの前に置く。

大量にある靈草を前に興味深そうにそれを見つめるスカサハ、知識にはあつたがこうして目の前にある実物を見るのは彼女も初めてだ。

靈草は海から揚げてもなお綺麗な光を帯びている。後はこれを持つて、砦に持つて帰り加工するだけだ。

「靈草、海藻、靈薬…ふむ、うーん、閃いた！」

「ん？ なんやデイル？ どないしたん？」

「ああ、しげちゃん、これさ、ラーメンの出汁に使えんじやないかなって思ってたさ」
「らーめん？」

そう言つて首を傾げるスカサハ。

らーめん、聞いた事がない言葉である。『つれたか丸』を漕ぎながら、デイルムツドはスカサハ師匠の言葉に力強く頷いた。

そして、そのデイルムツドの話を聞いたクー・フリーンはその画期的なアイディアに賛同するようにこう応える。

「おお！ ええやん！ けど、材料がまだ足らへんね」

「だよねー、どうせならこの良い海藻を使うなら良いもの揃えたいしね」

「なあなあ、らーめんとは一体なんなのさ？ どういった物なのさ？」

「あ、師匠は食べた事なかったんかな？ ラーメン？ ラーメンってのはやな…」

そう言つて、二人が話すラーメンについて訊ねるスカサハにラーメンとは一体どういったものなのかを説明しはじめるクー・フリーン。

そして、その聞いたこともない食べた事も無いラーメンの話をクー・フリーンから聞かされたスカサハはそれについて興味深そうに聞いていた。

まず、彼が話したのは以前、仲間達と作ったラーメンについてである。

まずは出汁から取る事からラーメン作りは始まる。

通常の鰹節よりも、力強いパンチのある出汁を生む宗田節。朝4時から船に乗り込み、高知県土佐清水沖で捕ったソウダガツオを、静岡県西伊豆で行われている伝統の「手火山式」で2週間かけて燻して作り上げたものを以前はラーメンに使った。

宗田節からはイノシン酸と呼ばれる旨味成分が出る。

そして、旨味成分として知られるグルタミン酸を多く含む真昆布。

前回のラーメンに作りに使ったのは、「昆布の王様」と呼ばれている北海道函館南茅部町白口浜で採られる真昆布。

彼らの仲間の一人が自ら海に潜り、4mの長さのある漁具を使って、長さ2m、厚さ7mmの肉厚な極上の真昆布を手に入れたものを旨味を最大限に引き出すため、3日間天日干したものを使った。

これらの出汁のベースにまた様々な高級素材をふんだんに使い作った小麦の麺が入った食べ物、それがラーメンである。

クー・フリーンから話を聞いたスカサハは納得した様に頷く。なるほど、確かに聞けば聞くほど美味しそうな食べ物であると。

「して、この霊草で霊薬を作り、その残った余りを使ってそのラーメンとやらを作ろうかと考えているんだな？」

「ええ、そうなんですよ」

「けどやね、今回はちよい趣向を変えようかと考えてまして」

「ほほう、なんだ、その趣向とやらは、聞かせてみる」

そう言うてにこやかな笑顔を浮かべているクー・フリーンに訊ねるスカサハ、異なる趣向、それは是非とも聞いてみたい。

クー・フリーンとデイルムツドの二人は互いに顔を見合わせて頷くと、今回作るラーメンについてスカサハに話をしはじめる。

今回はクー・フリーンとデイルムツドの二人が海へと潜り、真昆布の代わりにこの取ってきたグルタミン酸がたくさん含まれてそうな霊草をラーメン作りに使用しようと思っっている訳である。

この深淵の海の海底にあった霊草ならば、旨味成分がたくさん詰まったグルタミン酸

も数多く含まれているはずだ。

そして、今回、デイルムツドとクー・フリーンが考えているのは以前作ったこれらの醤油ラーメンの為に取った出汁とは違う作り方。

つまり、出汁から異なるものを作ろうと思っていた。

「以前は醤油だったんやけど今回は」

「豚骨ラーメンを作ろうかなと思ってまして」

「豚骨? …うむ、なんだか、また興味深そうだな豚骨ラーメンか」

豚骨ラーメンとは、豚骨でとっただし汁をスープに用いたラーメンで白濁したスープが多い事で知られている。

豚骨ラーメンの有名な地名なら博多が挙げられるだろう。細い麺が主流で麺の硬さをバリカタ、カタ、普通と色々な硬さの細麺を頼めるのが魅力の博多の伝統のラーメンである。

さらに、この博多の豚骨ラーメンの魅力として挙げられる細麺。

この細麺の理由としては麺がスープに溶けやすい様にと考えられた手法である。

これにより、簡単に細麺を湯上げできる事から、替え玉などの独特な文化はこの博多

ラーメンが発祥とされており、ご当地料理としてよく知られているラーメンなのだ。

さて、前回は醤油ラーメンだったが、今回は豚骨ラーメンにと趣向を変えたクー・フリーンとデイルムツド。

当然、これには訳があった。

「して、なんで豚骨ラーメンなんだ？ 今回も醤油でもよかつたじゃないか」

「いやー、最初はまた醤油にしようかなと思うてたんですけどね、前回は醤油やったし……」

「それにほら、豚骨ラーメンなら、最近、いい出汁取れそうな豚骨が頻繁にウチの畑荒らしてるでしょ?」

「あ……」

デイルムツドがそう告げた瞬間に話を聞いていたスカサハは全てを悟った。

なるほど、確かに言われてみればそうだ。最近、凶暴な魔猪がフィオナ騎士団や村人が耕した畑を荒らしているという話が以前、彼の口から語られていた事を彼女は思い出す。

なんと、この二人。豚骨ラーメンを作るために魔猪の豚骨を使って作ろうと考えてい

デイルムツド、スカサハの3人のカタツシユ隊員はこの第2の目標、魔猪の豚骨を手に入れる難題に果敢に挑戦していかなければならない！ 果たして、それを手にする秘策は彼らにあるのか！

そして、次回は初めての薬草加工に、クー・フリーンとスカサハ師匠が挑戦！ 果たして、霊草を用いた霊薬は無事に作ることはできるのかだろうか。

まだまだ、これからも我らがY A R I O達の挑戦は続く！

ザ・鉄腕／f a t e！ 伝説の食材達で美味しい豚骨ラーメンはできるのか？

この続きは…！ 次回の鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

伝説の食材でラーメン作りー↑NEW!!

薬作りに挑戦ーーーー↑NEW!!

深淵の海底まで海藻取りーー↑NEW!!

日本食で乾杯！

無事に第1の食材、もとい、ADフィンを若返らせる為の靈草を手に入れ、砦に帰還したYARIO一行。

ラーメンの具材にも、薬の原材料となるこの靈草の入手は非常に大きい、これさえあれば今後のYARIOの活動にも幅が広がることは間違いない。

海藻に含まれているグルタミン酸、アルギン酸は間違いなくこの深淵の靈草には多く含まれているはずだ。

グルタミン酸は料理にも使えるのはもちろんだが、アルギン酸は土の水はけを良くし豊かにする成分が含まれている。

伝説の靈草を持ち帰った三人に、ファイオナ騎士団の面々は腰を抜かした様に驚くばかりであった。

「ほ、ほんとに持って帰ってきたのか!？」

「せやでー、まあ、とはいえこれから加工作業に入らなあかんけんけどな」

「さあ、お前らも今から忙しくなっからしっかり手伝つてくれよ?」

「…ははは、あは…ま、マジかよ…」

フィオナ騎士団達もこの霊草を何事もなく持ち帰ってきた英雄達に開いた口が塞がらない。

確かに、あの大英雄クー・フリーンと影の国の女王であるスカサハならば、そんな、与太話の様な事を成し遂げてしまう事はわかるが、同僚のデイルムツドもまたそれが普通だとばかりに振る舞っている。

これは自分達の認識がもしかしたら間違っていたのかもしれない、フィオナ騎士団のロナン達三人は彼らが持つて霊草を前にしてそう思わざる得なかった。

さて、ひと段落ついたところでこれから薬の加工作業に入るわけだが、我らがY A R I Oも古代の伝統的な薬の加工法は素人。

ここは一つ、深淵の知識があり、なおかつ、ルーン魔術に精通している我らが師匠、スカサハの教えを受けながらの手探りの薬作りを行わなければいけない。

「そういうわけで! スカサハ先生! ご指導ご鞭撻! お願いします!」

「う、うむ、…むー、しかし、私も久々の薬作りだ。うろ覚えなところもあるからな…」
「あー、それなら、ほら、昔ながらの伝統的な薬品加工の方法が書かれた本がウチの書物にあつたはず！」

そう言つて、デイルムツドは砦にある書物庫から薬剤に関する書物をありつたけかき集めてきた。

これだけ本があれば、薬作りを行うにも失敗しなくても良さそうだ。早速、クー・フリーンとスカサハは霊草を加工して薬作りをりはじめた。

まずは、霊草を乾燥させるところから始まる。乾燥させた材料を細かく砕いてこなごなにしやすいようにするのだ。

「ふむ、確かこんな感じだったな」

「日によく当たるところがええやろうから窓側に置いときましょう！」

それから1日ほど待ち、窓側に置いてパサパサに乾燥させた霊草の状態を確認する我がらがリーダー、クー・フリーン。

さて、その一日中おいて乾燥させた霊薬の出来栄えやいかに…。

「おお、パッサパサしとるね!」

「あ、本当だ。これは凄い」

「しかし、発光したままか…流石は靈草だな」

そこには、見事に乾燥しパッサパサになった靈草があった。綺麗に発光はしているものの、これならば加工には申し分ない。

早速、乾燥させた靈草を作業台に移すクー・フリーン達、そこからは書物とスカサハ先生の指導の元、手順から教えてもらう。

まず、葉の加工には薬研という原料をくだくための道具とすり鉢を用意する。

靈草を薬研で細かくしさらにすり鉢を使いその靈草をさらに細かくしていく作業。流石にクー・フリーン、初めて握る薬研の使い方がぎこちない。

「こうだぞ? そうそう、もつと真っ直ぐに」

「おお、こんな感じなんですな!」

「勉強になるなあ」

そんな薬研の使い方がぎこちないクー・フリーンを見かねたスカサハが背後から手を握り、身体を密着させて指導が入る。

心なしかクー・フリーンの背にスカサハの豊富な胸部が当たるが、これをスルー、なんと羨ましい光景である。

その指導を横で見っていたデイルムツドも真似をして薬研を使い霊草をすりつぶしていく。

しかし、流石はデイルムツド、板前で細かい作業が得意な彼は手慣れたように霊草をすりつぶしていた。

それを見ていた薬作りの指導をしていたスカサハは感心したように「ほう…」と声を溢すとデイルムツドにこう声をかけはじめた。

「デイル？ お前、本当に初めてか？ 筋が良すぎるぞ？」

「あーいや、よく料理とかで肉をすり潰したりしてるから案外その要領でうまく出来るかもしれないです」

「ええなー、デイル器用やもんなー」

そう言って、我らがリーダーも負けじと霊草をすり潰す作業に没頭していく、ある程

度、すり潰したところですり鉢でさらに細かくすると綺麗に砕けた霊草が出来上がった。

これらを澄んだ真水とよく練り合わせていく。この真水は不純物を完全に取り除いたものだ。

そして、ある程度、その綺麗な真水と霊草を混ぜ終えたところで栄養価がある薬草を加え更にそこから煮る。

さらに、不純物を取り除く細かい布を通してその煮たものの出汁を丁寧に取りはじめる。これならば、きつと、フィンも飲みやすいはずだ。

出来たものを透明な瓶に溢さぬように入れていくと、あら不思議、綺麗に透き通った霊薬が完成した。

「ふむ、これが若返りの霊薬か…綺麗な色だな」

「初めてやったけど上手くいったな！ よかった！ よかった！ やっぱ先生がええからやろうね！」

「間違いない、これは全部スカサハ先生のお陰だな！ 流石師匠！ ありがとうございませう！」

「ふふ、あんまり褒めるなよ…照れるじゃないか」

そう言って完成した綺麗な霊薬を前に完成に1番貢献してくれたスカサハを褒め称えるデイルムツドとクー・フリーンの二人。

正直、師匠であるスカサハが色々サポートしてくれたお陰でこの薬が出来上がったと言つても全然、過言ではない。

薬作りのやり方、素材の採取にも彼女の功績は二人にとって感謝してもしきれないものがあつた。

さあ、ついに完成にまで辿り着いた霊薬、あとはこれをADフィンに飲ませるだけだ。それからしばらくして、ADフィンは仲間達から連れられてクー・フリーン達の元へと現れた。

「リーダー…、デイルムツド、すいません、私の為にわざわざ…」

「何言うてるん！ 仲間やんか！ 当たり前やろ！」

「そうだよ、俺らはみんなフィンに今までたくさん助けられて来たんだからさ、今度は俺らの番だつて！」

そう言って、二人は今にも泣きそうな表情を浮かべるフィンに笑顔を浮かべたままサ

ムズアツプをしていた。

妻を失い、そして、もう歳を重ねているうちに年老いていくフィンは2度とY A R I Oの黒子役には戻れないんじゃないかと不安な毎日を送っていた。

騎士団長という立派な肩書きはあれど、彼がやりたかった事はそれではない。彼らの隣に立つて一緒に素晴らしい毎日を送りたいという気持ちがあった。

それが、彼にとつての理想郷だったから。

フィンはクー・フリーン、デイルムツド、そして、スカサハの三人が作り上げた伝説の霊薬を口を開き飲み干す。

彼らが作ったそれを飲んだフィンの眼からは涙が溢れ落ちる。やっと、長年に渡り忘れなかつた自分の居場所に戻る事ができると。

霊薬を飲んだフィンの身体はみるみるうちに若返っていく、年老いて皺だらけだった顔は張りを取り戻し、白髪が目立ってきた髪は昔の様に綺麗な艶のある金色の髪へ。

それを見ていた騎士団達は目を輝かせていた。自分達は今、伝説を目の当たりにしている。誰もがそう感じたからだ。

そして、若返つた美しき美貌を持つフィオナ騎士団団長兼Y A R I OのA D、フィン・マツクールは静かにクー・フリーンとデイルムツドに頭を下げるとこう口を開いた。

「ADフィン、お待たせしました。これからはY A R I Oのサポートを誠心誠意、全力を持って務めさせていただきます」

そう言つて頭を上げて、爽やかな笑顔を浮かべたフィンは三人にそう告げる。

クー・フリーンとデイルムッドは嬉しさのあまり溢れ出た涙を拭いながら、ADフィンの手を力強く握りしめると何度も頷いた。

「おかえり……！　ほんとに長くまたせちやったね……っ！」

「ほんまにすまん……！　そして、おかえりなさい！」

「……っ！　……ええ！　ただいま戻りました！」

三人は感極まり、思わずそこから熱い抱擁を互いに交わした。

クー・フリーンやデイルムッドは長い年月をかけて会った訳ではない、だが、ADフィンは長い年月、神話通りに困難に立ち向かい歳をとりながらもずっと忘れずにこうなる事を待ち望んでいた。

その長い空白の時間を自分達の事を忘れずに思つてくれていた。その、ADフィンと大きな絆がとてつもなく大切なものに思えて仕方なかったのである。

感動の再会を果たした二人はこうして、新たな仲間、ADフィンをYARRIOへと無事に迎い入れる事に成功した。

フィオナ騎士団の皆もその光景に惜しみなく拍手を送る。

見事であった。周りから見れば彼らの行動は友を救う為、深淵に靈草を取りに行くという立派な英雄譚になり得るものだ。

しかも、その友と言うのが騎士団長のフィン。そんな彼を若返えらせる為となればその功績も大きいのは明らかである。

着々とYARRIOのメンバーは揃いつつある。デイルムッドは若返ったADフィンの背中をパン！と軽く叩くと声を上げて皆にこう告げ始めた。

「さあ！ 今日は大將の復活祝いだ！ 盛大に料理を振る舞うよ！ AD、いける？」

「もちろん、デイル、今から作るんだろ？ 全員分」

「応ともさー！」

そして、二人は板前の衣装に着替えはじめた。

ここからは本領発揮、YARRIOのADに復帰したフィンとデイルムッドの板前料理が存分に発揮される時が来た。

すぐさま、フィオナ騎士団の団員の皆が近くの村まで馬を走らせアルムの砦での宴会が開かれる事を知らせに回る。

そして、その若返ったフィンのお知らせを聞いた村々の人々がアルムの砦を訪れ、砦が人で賑わうにはさほど時間はいらなかった。

ワイワイとあちらこちらで声上がる中、酒やフィンとデイルムツドが作った日本の伝統的な料理が運ばれてゆく。

そして、村の料理人達もそれに加わり、賑やかな宴会が始まった。

スカサハとクー・フリーンの二人もアルムの砦にあるカウンター席に座らされた。正面では酢飯を握るフィンと魚を捌くデイルムツドがいる。

「師匠、師匠って刺身は食べた事ありましたっけ？」

「いや、無いな？ 刺身とはなんだ？」

「へえーお客さん刺身食べた事無いんですか！ なら、まずはこれからだな！」

そう告げるデイルムツドは道具包丁ベガルタを巧みに扱い、スカサハの正面でヒラメを捌きはじめた。

ヒラメは捌く際、普通の魚を捌くのととは異なり四枚に卸さなければならない。綺麗に

捌かれていくヒラメの公開解体を見ていたスカサハは目を輝かせてそれを眺めていた。

そして、捌いたヒラメの身を更に横にして包丁を入れて丁寧一枚一枚の身に捌いていく、透き通った身がプリプリに光り輝いていた。

そして、ヒラメといったら忘れてはいけないのがえんがわ。ヒラメのヒレの部分にあるそのえんがわをフィンが握った酢飯と合わせて寿司を握る。

さらに、それをヒラメの刺身と合わせて盛りつければ完成。ADフィン、デイルムツド作の『刺身と寿司のヒラメづくし』である。

アルム砦が誇るお手製の醤油につけて食べれば絶品間違いなし。皿に盛ったそれをデイルムツドはバン！　つと、カウンターに座るスカサハに提供する。

「さあ、ご賞味くださいな」

「…おお…!？」

「醤油につけて食べるんやで？　こうやって」

そうやって、手本に食べ方を披露するクーフリーン、近くに置いてある箸を使い刺身と寿司を醤油につけて口の中へと放り込む。

隣でそれを見たスカサハはゴクリと唾を飲み込む、そして、不器用ながら箸を使い、醬

油をつけてそれを口の中へと放り込んだ。

さて、そのお味はいかに…！

「んんー!! なんだこれは！　すごく美味しいじゃないか！」

「はっはっはー！　お客さん、そりゃ私とフィンのこいつがいいからですよ！」

「恐縮です」

「たまげたなあ、またシャリ握る腕が上がったんちゃう？　フィンさん」

そう言って、腕をパンパンと自信ありげに叩くデイルムツドと軽く頭を下げるフィンにヒラメの寿司を食べたクー・フリーンは驚いたように告げた。

だが、まだ食べたのはヒラメの刺身と寿司だけである。

続いてやって来たのはカツオを節に切り、表面のみをあぶったのち冷やして切り、葉味と手作りで作ったタレをかけて食べるデイルムツド特製『カツオの叩き』である。

これを見たスカサハはまたも目を輝かせていた。

長年に渡り生きて来たがこのような食べ物を食べるのは初めての経験、しかも、その料理を作るのは職人的な業を持つ Y A R I O を代表する料理担当、デイルムツドとサポートをさせたなら右に出るものは居ない A D フィンである。

『カツオの叩き』、別名『土佐造り』を箸で掴み上げて慎重に口に運んでいくスカサハ。そして、食べた途端に特製のタレと歯応えのあるカツオの刺身がスカサハの口全体に広がった。

「…はあく…美味しい…」

「これに日本酒やお酒を飲むとさらに美味しいんですよ師匠、な？ デイル？」

「そうですぜひ、そう言うと思って、リーダー…」

「まさかあるんか!? 日本酒！」

「じゃじゃーん！ 実は少量ながら前に作ってましたー！ へへへへ」

「おー！ やるやん！」

「ささ、お二人さん、これで一献づつどうぞ」

「おお、酒か！ いいな！ 貰おう！」

そう言って、僅かながら作り置きして置いたデイルムツドの作った日本酒が入った徳利をお猪口と共に手渡されるクー・フリーン。

手渡された日本酒が入った徳利をお猪口に注ぎスカサハに渡すクー・フリーン、ヒラメの刺身や寿司、そして、カツオの叩きと一緒に飲む日本酒、その味はきつと格別に違

いない。

二人は互いにお猪口を掲げて乾杯すると、それをぐいっと飲み干す。

「かあー！ 美味しい！ やっぱりええな！」

「えー、リーダーおっさん臭い」

「ふう、こんなお酒があつたとはな、実に美味だった…ふふ、お前達といると毎日が新しい発見ばかりで飽きないな、ほんとに」

こうして、アルムの砦で開かれた宴は賑やかに盛り上がりながらも時間は過ぎて行く。

美味しい料理に美味しいお酒、そして、だんだんと集まるY A R I Oの仲間達、次はどんな発見と経験がカタツシユ隊員達を待ち受けるのだろうか。

作り始める予定のラーメン作りにも着手していかななくてはならない。第2の食材、魔猪の豚骨スープは手に入れる事ができるのか。

A D F I N が復帰し、賑やかになるY A R I O達！ さあ、次なる挑戦はなんだ！

気になる続きは！ 次回の！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

幻の靈藥が作れる————NEW!!
師匠が日本食に目覚める————NEW!!
仲間を若返らせられる————NEW!!

インドの文明開化

さて、前回、ADフィンを見事若返らせてADに復帰させたYARIO一行。

盛大な宴から一夜明け、これから本格的な仲間探しと伝説のラーメン作りに着手していかねばならない。

まずは、豚骨ラーメンに必要な魔猪を狩るか、それとも仲間をまずは集めるかを決めてはいけないだろう。

そこで、皆はアルムの砦にある一室を借りて作戦会議を開いていた。

「まあ、魔猪を狩る算段はある程度明確にはしとるんやけどやっぱり人員が足りへんよね」

「うーん、だよねー、やっぱり大掛かりなもの作るとなると兄イが居なきや、やっぱり始まんないしね」

「兄イ? …お前達の仲間か?」

「そうなんですよ、建築するならあの方がいてくれた方が頼もしいんですよ」

そう言つて、首を傾げ訪ねてくるスカサハに力強く頷くデイルムツド。

仲間の中でもより建築に特化し、いわば、Y A R I O が誇る大工の親方。魔猪を狩るにはまずは大掛かりな仕掛けを作らないといけないがそれには彼の力が必要であった。

そうなると、まずは魔猪を狩るのはこの際、置いておいて、このフィニアンサイクルに彼を連れて来なければいけないだろう。

最優先事項は、まずは、我らが Y A R I O が誇る一流の大工のスペシャリストを招集する事が一番だ。

そうと決まればどうするのかは、自ずと決まっている。まずは『だん吉』に乗つて世界を越えなければならぬ。

「とりあえず私は残つておきましょうか、また戻つてくるんでしょう？　下準備だけしときますよ」

「おー、せやね、A D はじゃあ留守番になつてもらつて…、兄イを迎えに行くか」

「あの人の事だからまた納屋でも建ててそうだけどな」

「それじゃ、決まりだな、まずは仲間を探しに行くところからか」

そして、話が纏まったところで一同は席から立ち上がると仲間を探しに行く為にクー・フリーンとスカサハが乗ってきた『だん吉』の元へと足を運ぶ。

『だん吉』の扉を開き、運転席へと座るスカサハ、そして、助手席にはクー・フリーン、後部座席にはデイルムツドが座る。

『だん吉』のハンドルを握ったスカサハは人生初めての車の運転に挑戦する事になる。

「おお…これが運転席というものか…」

「右がアクセル、左がブレーキですよ、師匠。車運転したい言うてたですもんね」

『だん吉』の助手席に乗るクー・フリーンはにこやかな笑顔を浮かべてスカサハにそう告げる。

以前、デロリアン『だん吉』に乗った際、スカサハは車を運転してみたいと言っていたので今回は彼女に『だん吉』の運転をクー・フリーンは任せる事にした。

アクセル、ブレーキは一通り教え、後はスカサハに運転を任せる。140kmを超えれば『だん吉』は世界を越えるのだ、まっすぐ走らせるだけで初めて運転するスカサハにもこれくらいなら軽くこなせる筈。

案の定、運転方法をクー・フリーンから隣で教わったスカサハはすぐに『だん吉』の

運転の仕方を把握した。

スカサハが操縦する『だん吉』は勢いよくバックするとある程度整備された道へと出る。

「なるほどな、ある程度はコツは掴んだ」

「さつすが師匠！ 飲み込み早いですね！」

「それじゃ後は飛ばすだけだな、二人とも覚悟はいいな？」

「え？ ちよつ…！ そんなに勢いよくアクセル踏んだら!？」

ノリノリになってきたスカサハを制止するように背後から身を乗り出して声をかけるデイルムツドだが、既に時は遅かった。

アクセルを全開に踏み込んだ『だん吉』は勢いよく、ニトログリセリンが爆発したかのように加速したかと思うと火花を散らし始める。

このロケットスタートには車に乗っていたクー・フリーンとデイルムツドの二人もびつくり仰天だ。

急加速した『だん吉』はバチバチと火花を散らし、そして…。

「あつはつはつはつ！ これは凄い！ あつははははつ！速いぞー!!楽しいなあ！」

「ひゃああああ?！」

「ぶべっ……！」

助手席に座るクー・フリーンはすかさず、シートベルトと上にある取手を掴み、身を乗り出していた。デイルムツドは車の急な加速の勢いで背後に頭を打ち付けた。

しかし、アクセルを全開に踏み込むスカサハはガンガンスピードが出る『だん吉』に上機嫌である。

そして、『だん吉』はいつものように140kmに到達すると、火花を散らしながらバチン！ と音を立て、眩い閃光と落雷のような音を放ち、地上に炎のタイヤ跡を残してフィニアンスサイクルの世界から姿を消した。

インドの叙事詩『マハーバーラタ』。

その叙事詩に登場する不死身の英雄がいる。太陽神スーリヤが父、ヤドウ族の王シユーラの娘のクンティーを母にして産まれたインドの英雄。

史実では優れた弓の使い手であり、大英雄アルジュナを宿敵とする悲運の英雄として後世にまでその名は語り継がれている。

生まれたばかりのまま身体を箱に入れられ川に流してしまい、御者アディラタに拾われ、ラーダーという養母に育てられ、その身体には黄金に輝く鎧を着ており。彼は黄金の鎧と耳輪を身に着けた姿で生まれてきた。

そして、そんなインドの大英雄である彼は今…。

「よっしや！　これでまた綺麗な洋式トイレが出来上がったぜ！」

インドのトイレ事情と一人で戦っていた。

金槌を片手に汗を拭いながら、完成した洋式トイレを満足に見つめる。彼の名はその英雄であるカルナ、その人である。

そう、クー・フーリン、デイルムツドと同じくしてY A R I Oの宿命を背負いしカタツシユ隊員である。

そして、その大工の腕はまさに棟梁の域に達しており、まさに、Y A R I Oが誇る建築の真髄こそは彼であると言っても過言ではないだろう。

こうして、彼はまた綺麗に用を足せる洋式トイレを一つ作り上げ、今日も一つ目の仕事を完了させる。

「おーい！ 棟梁！ 現場でなんか苦戦してるみたいですよせ！」

「うおい！ またかよ！ しゃあないねーどこの家？」

「こつちですよ！」

そして、そんな凄い建築能力を持つカルナは周りから頼られる兄貴分のような存在で知られていた。

大工の棟梁であり、さらに、いろんな農業や産業に詳しい彼の手により、彼がいる村は今、異様な発展を遂げている。

特に驚くべきは、インドの村に書院造りの家や古民家の家が立ち並んでいるこの異様な光景だろう。

これらはなんと、カルナが家の建て方を村人たちに教え、さらに、その中の数軒は協力は多少なりとあれどカルナがほぼ一人で建てた。

その事から、カルナはこの地域で神として崇められるほどの建築業者として名を馳せている。

カルナが受ける案件の中には王族の宮廷の補修にも携わっており、その腕前はインドを駆け巡っていた。

「んー、そりや無理にそうすればズレちゃうよ、一回この箇所、外さねーとな」

「しかし、親方、これを外すってなると」

「大丈夫大丈夫、みんなでやれば明日にはできるから、な?」

「は、はい!」

そう言つて、にこやかな笑顔を浮かべ従業員の背中を軽く叩いてやるカルナ。

ミスは誰にでもある。要はミスをした時に周りがいかに上手く助けてあげるかが大切な事だ。それが、自信にも繋がることをカルナはよく知っている。

それから、カルナは従業員と共に協力して家の改修をはじめた。力作業ならば、無人島でも村でも行なってきた、これくらいの改修を済ませるのは容易い。

3時間ほどで苦戦していた箇所の改修も済み、片手に握っていた金槌を降ろすカルナ、晴れやかな表情を浮かべる彼は汗を拭いながら皆と笑っていた。

「こんなところに居たのか、カルナ」

「ん? おー! アルちゃんじゃん! どつたの?」

すると、笑顔を溢すカルナの元に一人の男性が声をかけながら現れた。体格がよく、

大変に美男子である彼は汗を布で拭うカルナに近寄ると彼もまた親しく笑みを浮かべていた。

彼の名はアルジュナ、任意の神を父親とした子を産むマントラにより、神の王であるインドラによつてカルナと同じくクンティの腹より生まれた英雄である。

本来史実ならばカルナと宿敵として立ち塞がる筈のアルジュナ、しかし、その様子を見る限りでは何故だか彼らは親しく接している。

それは、カルナがY A R I Oとしての使命に目覚めているのが原因であるのはもはや言うまでもないだろう。

アルジュナは勤勉な事で知られている。そんな彼はインド中に建築で名を轟かすカルナにある事を教わっていた。それは…。

「いや、お前に今日も建築学を教わろうと思つてな…、この後、少し時間あるか？」

「あーいいいよ！　じゃあ、今から屋敷で緑茶でも飲みながら話そうか」

「!!…緑茶か…、味わい深いあれは、ほんとに思考が済んだように冴え渡るんだ。是非頂きたい」

「んじゃ行こう行こう！」

そう言つて、アルジュナを村にある自分が建てた屋敷に招待するカルナ。

立派な書院造りの屋敷に足を踏み入れたカルナはあいも変わらず文化的なその光景を前にして思わず感心する。

座敷、そして、襖、これらが全てカルナが皆に伝え形にしたものだ。長い月日で様々な職人から教わつた事をカルナはこの世界に間違いなく伝えようと尽力していた。

「…うむ、このお茶はやはり…美味しい」

「よかつたら風呂も入つて行くだろ？ 檜風呂だけど」

「おお、ありがたい！ 正直な話、宮廷よりも私はここが断然住みやすいな…何というか、その…知が感じられる」

「まあ、宮廷があんなトイレじゃ、そりゃ嫌にもなるよ」

カルナは座敷で向かい合うアルジュナに肩を竦めて苦笑いを浮かべながらそう告げた。

まず、カルナが驚かされたのはインドのトイレ事情である。当然ながら、不潔な環境下が我慢ならないカルナが行なつたのは清掃活動からだつた。

汚いものを取り除く、近場に水場があるにもかかわらずそれを使わないのは愚の骨頂

だと、カルナはすぐさまその水場の水を引いてきて辺りを綺麗にする事から取り組んだ。

インドのトイレでは便器から豚が飛び出したりするのが日常茶飯事、そんな事がカルナからしては許しがたい事であったのである。

そこからは彼の目標はただ一つに絞られた。インドのトイレを全て洋式の水で流れる清潔なものにしようと、そこからはもう戦いの日々だった。

「今じゃ、建築会社みたいな感じであいつらも居てくれるからなんとかやっつけていけるけど、正直な話、俺はもうこの国から出て行きたい」

「…それは困る！ 私が勉強できなくなるではないか！」

「いや…、アルちゃん勤勉なのはいいんだけどさー」

そう言って、食い下がるアルジュナに困った様に苦笑いを浮かべるカルナ。

正直な話、Y A R I Oとして彼は仲間達を探しに行き、また、再結成する事を強く望んでいる。だが、こうアルジュナから言われてしまうとどうにも断りづらい。

致し方ないため息を吐いたカルナはアルジュナにこう話をしはじめた。

「まあ、とりあえず建築についてはちゃんと教えるからさ、そんじやまずは…」
「すげく…勉強になる…」

カルナによる建築講座を聞きながらアルジュナは一言一句違える事なく聞き逃すまいとカルナが提供してくれた筆と紙で彼の建築についての知識を連ねて書いていく。

こうした毎日を日々、カルナは送っていた。村々の家の補修や時には王宮から補修のお願いをされたりと毎日大忙しだが、それでも充実した毎日である事には変わりなかった。

時々、脱げない金色の鎧が鬱陶しくて仕方ないと思うくらいである。

さて、そんなこんなで、今日も一日中現場に出て、アルジュナに建築学の指導を終えたカルナはゆっくりとできる夜に屋敷の縁側に腰をかけて月を眺めていた。

失われた仲間達、Y A R I Oとして彼らを迎えに行きたいが今の自分は毎日、インドのトイレと戦う事で手が一杯一杯だ。

できる事ならば、後のことは彼らに任せて自分は早く仲間達を探しにインドから出て行きたい。

武術の師匠であるドローナやパラシユラーマに色々教えてもらったが、なんやかんやでやはり自分はこの道が好きだとカルナは改めてそう感じていた。

今日はまた色々あつて疲れた。カルナはそう思い縁側から立ち上がるとそろそろ寝ようその場から踵を返す。

だが、次の瞬間、彼の背後に凄い轟音と稲妻が走つたかと思うと、目の前に勢いよく鉄の塊が出現した。

「どおうわあ!？」

咄嗟に縁側に突つ込んでくる鉄の塊から回避行動を取り、避けるカルナ。

その車は屋敷を勢いよく走ると襖やらなんやらをめちゃくちゃにしながら屋敷を突つ切り、色々と突き抜けて屋敷の中を滅茶滅茶にした。

そして、突き抜けた鉄の塊はプシューツと煙をあげるとピタリとその動作を止める。

「ゲホ……! ゲホ……!」

「快感だったな! これは癖になりそうだ……!」

「……そ、それはようござんした……」

その煙をあげる鉄の塊の中から現れたのは、まるで、死人の様に車から這い出てくる

二人とキラキラした様に嬉しがる一人の女性。

カルナはその三人と、屋敷を突き抜けていった鉄の塊を凝視する。あれは、まさか…。

「え？…車？」

そう声を溢したカルナは現れたそれに思わず目を丸くした。間違いない、あの形からしてそうであると確信できる。

ならば、あの車から現れたのは一体どこ誰なのか、当然、屋敷の中をめっちゃめっちゃにされたカルナは顔を引きつらせたままその車に近づいていく。

そして、そこに居たのは…。

「!? その声は、リーダー達か!？」

思わず驚いた様に声を上げるカルナは目をパチクリさせていた。

この人間は間違いなくそうであるという事がカルナには聞き覚えのある声と雰囲気、そして直感で理解できた。

屋敷を突き抜けた車に乗っていた人物、それは間違いなくY A R I Oのリーダー、

クー・フリーリン、その人の姿があった。

そのカルナの声に反応し、振り返る三人。

そこに居たのは、金色の鎧を着た我らY A R I Oの仲間であるカルナと…。

「あー！ もしや！ 兄イ…つて後ろ後ろ！」

「…ええ？」

倒壊するカルナが建てた屋敷の光景があった。

慌てた様にすぐさま倒壊する建物から脱兎のごとく逃げ出す四人、まさに、爆破されたかのごとく倒壊する屋敷は綺麗に根元から盛大な音を立てて崩れた。

それを呆然と見つめる四人。

まさか、異世界に来て早々、建物を倒壊させることになるとは夢にも思わなかった。

「…師匠、しばらく運転は代わろつか…」

「何故だ！ あんなに華麗な運転だったではないか！」

「いや、今、家一軒潰しましたよね!? ね!?」

そうやって、頬を膨らませるスカサハ師匠に顔を引きつらせて突っ込むデイルムツド、幸いな事に怪我人が誰もいなかったのはよかった。

それからしばらくして、倒壊した屋敷を見届けたカルナはため息を吐くと肩を竦めて、改めて、クー・フリーン達の方へ振り返る。

「こりやとんでもない再会もあつたもんだ」

「あはははは…あは、刺激があるやろ？ しげちゃんだけに？」

顔を引きつらせたクー・フリーンは苦笑いを浮かべたまま告げる。

そんな彼の笑顔を見たカルナは仕方ないとクー・フリーンの肩を軽く叩くと嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。

Y A R I O の大工担当、カルナ棟梁とこうして顔を合わせた三人。

果たして、彼との再会がどの様な波乱を巻き起こすのか！

この続きは！ 次回！ 鉄腕／f a t e で！

今日のY A R I O。

インドに洋式トイレを作る————NEW!!
民家や屋敷作りを伝えられる————NEW!!
屋敷を車で倒壊させられる————NEW!!
インドに書院造りを伝える————NEW!!
インドに檜風呂を作る————NEW!!

魔猪会議！

Y A R I Oの仲間の一人、カルナと合流したクー・フリーン達。

一時はスカサハが運転した『だん吉』によつて、カルナが建てた屋敷が倒壊するといふハプニングもあったものの、無事に再会した彼らの間には穏やかな雰囲気は漂つていた。

長年にわたり、望んでいたY A R I Oへの復帰。

それが叶うとなれば、カルナとしてはこれ以上嬉しいことはない、しかも、親愛なる仲間達がわざわざこうして迎えに来てくれた事にも感謝してもしきれないくらいだ。

「へえ、じゃあ、ぐっさんはインドでトイレを改装しながら家建ててたんや」

「まあねえ、他にやる事なかつたし、後は武術習つたおかげで目からビーム出せるようにはなつたくらいかな？」

「なにそれ怖い」

そう言つて、カルナの目からビームという言葉に引き気味に告げるディルムツド。見知つた仲間がいつの間にか目からビーム出せると聞けば誰でもそうなつてしまふだらう。

しかし、それはそれで鋼鉄の溶接なんかには役立ちそうだ、目からビームはこの時代ならかなり重宝する能力だろう。それに、なんだかかつこいとクー・フリーンとディルムツドは思った。

カルナから案内された木造建築の家で茶を飲みつつ、彼らは今までの出来事や師匠であるスカサハをカルナに紹介した。

彼らの師匠のスカサハを前に彼らの正面に座るカルナはお茶を啜りつつ、こう話をしはじめる。

「…なるほどねえ、じゃあ二人の師匠つてことはつまり俺の師匠になるつて事かな？」

「そういう事になるか？　じゃあお前も私の弟子だ」

「師匠、弟子の取り方そんなんでええの？」

「だって、面白そうじゃ無いか、お前とディルも面白いつて事はこいつもそうに違いないと私の直感が告げてる」

「いやー、師匠のそういうところは尊敬しちゃうなーほんと」

こうして、あっさりとかルナの弟子入りを決めてしまうスカサハの言葉に笑みを浮かべて告げるデイルムツド。

何はともあれ、カルナはスカサハの弟子になる事になった。

本来、スカサハの弟子になるにはいろんな難題を乗り越えるという前提があるはずなのだが、今の彼女は面白そうだという価値観で決めている。というより、彼女の中では Y A R I O は全部弟子にしようというつもりらしい。

確かにこんな建築物をインドにあちらこちら建てているカルナを見れば、彼がクー・フリーンやデイルムツドの様な人物である事はスカサハには容易に想像がつく。

ならば、もはや弟子にするのに彼女にはなんの迷いもなかった。

「そんで、俺ら今、仲間探しながら伝説のラーメン作りやっただけどさ、ぐっさんの力があるわけなんだよー」

「!? 伝説のラーメン作り! 何その面白そうな企画! 話聞かせてよ!」

「あ、そつちに食いつくんやね」

そう言って、デイルムツドの言葉に目を輝かせるカルナに苦笑いを浮かべるクー・

フリーン。

ひとまず、ラーメン作りや話の経緯を一通り話し始めるデイルムツドはカルナにフィニアンサイクルでの霊草や魔猪の豚骨スープについて彼に詳しく話した。

ADフィンを若返らせた事、そして、深淵の海で取れたグルタミン酸たっぷりの第1の食材である霊草を手に入れた事など様々な事を掻い摘んでデイルムツドはカルナに語る。

それを腕を組みながら話を聞くカルナはその魔猪を倒すために何をするのかについて、クー・フリーン達にこう問いかける。

「それで？ 俺の力が必要な？ 何作るつもり？」

「そうやなあ、前に作った宮崎県都城市で作った巨大な弓矢覚えとる？」

「あー、あれねー、作った作った」

「あれと、ほら無人島で投石機作ったじゃん？ あれ作ろうかって思ってたさ」

「あれも作んの!?! どんだけデカイのその猪!?!」

「なあ、私にも教えてくれよ、何作る気なんだ？」

「あ、師匠にはまだ話してませんでしたね、実は…」

そうやって、クー・フリーンは服の袖を引つ張り尋ねてくるスカサハに今回、YARRIOの三人で作ろうと思っっている二つの対猪兵器について語りはじめた。

まず、最初にクー・フリーンが挙げたのは宮崎県都市で作った伝統的な弓矢作りを習い、100メートル先のリング風船を割るという挑戦を行なった際に使用した巨大弓を作るという話であった。

都市市は弓の生産量も日本一。都城を治めていた藩主島津義久が、弓作りを強く支援したことにより、その技が現代に引き継がれている。

スイスの英雄ウィリアム・テルが実の息子の頭の上に置いたリングを、見事射抜いたという伝説を真似てこの挑戦を前回行なったわけだが、なんと作り上げたのは全長6mの巨大弓矢。

今回は対猪兵器にこれの矢の先端にゲイ・ボルグを引っ付けて飛ばそうと彼らは考えていたのである。これなら、外す心配もない。

「はあく、なるほどな、全長6mの弓矢を…」

「都城の力でみやこんじょう見せようぜって感じで、まあ、場所はアイルランドなんですけども」

「リーダー、そのネタ前も使わなかったっけ？」

「気のせいやろ、多分」

寒いオヤジギャグに突っ込みを入れるデイルムツドにクー・フリーンは目をそらしながら告げる。

なんと！ 今回の挑戦は職人達から教わった伝統的な弓矢作りを異国の地、アイルランドで行う！ 今回は復帰したADフィンに師匠であるスカサハもいる。それに、建築なら力強いカルナも仲間に加えた。

そして、今回はそれだけでは無い、この都城の巨大弓矢の他にも対猪兵器を作るつもりだ。

それが、無人島で作ったお手製の投石機である。Y A R I Oお手製の自慢の破壊力を誇るこれならば、巨大弓矢に合わせてあの猪もひとたまりもないはず。

今回は巨大弓矢に合わせて大きめの投石機を建設する予定だ。

「ローリングストーンズって言うんですけどね」

「ローリングストーンズ！ おお！ なんだかかっこいいな！」

「わかりますか、このロマンが！ やっぱり師匠は最高だな！」

そうやって、話を聞いて目を輝かせるスカサハに満面の笑みを浮かべるクー・フリーンとデイルムツド。

果たして、彼らは猪の為に何故ここまでのものを作ろうと考えているのか？

多分、そこまで深く考えてはいないのだろうがデイルムツドは自分の中で想定した展開について手を用いながら熱く皆にこう語りはじめた。

「もし猪が向かってきたら、こんな感じに石を投げれば」

「あー、そんな感じ、なるほどね」

「猪もビビって、来ない」

そうやって、仮想猪戦をイメージしながらデイルムツドは全員に投石機の役割や、どんな風に対峙するのかを淡々と語る。他のメンバーはそのデイルムツドの言葉に頷きながらふとした疑問を彼に投げかけた。

「猪って何も考えず突進してくんじゃないの？」

「そんなことしたらほら、石が頭の真ん中に刺さっちゃうからさ」

「おー、上手く考えたな、確かにそうだ」

熱く説明するディルムツドの言葉に納得したように頷くカルナ。確かに『ローリングストーンズ』という名前からしてロマンがある。その戦況分析に師匠であるスカサハも感心して言葉を溢していた。

それに、攻城兵器『ローリングストーンズ』やこの都城の巨大弓矢は猪を倒した後もアルムの砦に設置すれば無駄にはならない。

「確かに俺達には敵が多い」

「そうなんですよ」

—————ロックバンドの宿命。

師匠であるスカサハにディルムツドとカルナの二人はまっすぐに目を見つめてそう告げた。

そう、YARROとして活動していれば、いずれは敵が出てくるはずだ。とはいえ、彼らの敵は農作物を台無しにする自然災害が主な敵なのだろう。

しかも、ロックバンドと言っても彼らが楽器を握ったところを見た事がない、緻しか握っていないと思う人達が大半なのが現状である。

「とりあえず、今から移動するでー、だん吉に乗るから早くみんなのりこめー」

「おう!!」

「師匠、さりげなく運転席に座ろうとしてもダメです」

「うぐつ……! ……仕方ない、今回は諦めるか」

「まあまあ、機会があればまた運転させてあげますから、ね?」

「あ、ちよつと待つて、アルちゃんに置き手紙書いてくわ!」

カルナはさりげなく運転席に座ろうとしたスカサハを制止している。デイルムツドとクー・フリーリンにそう告げると一旦、木造建築の家の家に帰り置き手紙と支度をし終える。

そして、カルナは身支度を終えて、クー・フリーリン達が待つだん吉へと戻つてくると荷物を全部積んでしまい、だん吉の助手席に腰を下ろす。

これならば、自分が居なくなってもアルジュナなら大丈夫だ。彼には自分が今までいような建築学を教えてあげた。インドから自分が居なくなっても彼が引き継いでくれる筈だとカルナはそう確信している。

クー・フリーリンはメンバー全員が『だん吉』に座った事を確認すると再びフィニアン

サイクルに戻る為に設定を定める。

「よーし！ みんな戻るで！ しっかりつかまっててな！」

「トイレと戦う日々もこれで終わりか、なんだかしみじみするな」

「あ、そういや、壊れた包丁あったから兄イ後で目からビーム出して溶接手伝ってくれな
い？」

「おお！ いいよ！ 目からビームね！ 任しとけ！」

「お主らの会話を聞いてるとかなりシニールに聞こえるんだが……」

そして、エンジンが掛かった『だん吉』はインドの整備された道にまっすぐ入るとそこからぐんぐんと加速していく。

アクセルを力強く踏み込み加速した『だん吉』140kmに到達すると、火花を散らしながらバチン！ と音を立て、眩い閃光と落雷のような音を放ち、地上に炎のタイヤ跡を残してインドの叙事詩『マハーバーラタ』の世界から英雄カルナを連れてその世界から姿を消した。

魔猪の豚骨を手に入れる為に仲間を探し、なおかつ、巨大な弓矢と投石機『ローリン

グストーンズ』を作り上げる。

遂に新たな仲間を加えたY A R I O達の魔猪への挑戦が今、始まろうとしていた。

果たして、Y A R I Oは魔猪を倒し第2の伝説の食材、魔猪の豚骨スープを手に入れる事のできるのだろうか？

美味しいラーメン作りはまだまだ序盤！ 失われた他の仲間達もクーパーリン達を待っている！

そして、この続きは…次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

巨大な弓矢を作る————NEW!!

投石機を建設する————NEW!!

巨大な猪を狩りに出る————NEW!!

なんとロツクバンドだった！————NEW!!

まず木から作ります

Y A R I Oの仲間の一人、カルナを連れて『だん吉』に乗りフィニアンサイクルに帰還したクー・フリーン達。

今回は建築のスペシャリスト、インドの叙事詩『マハーバーラタ』から遙々、Y A R I Oのカルナを引き連れての帰還、カタツシュ隊員達も久々の活動に力が入る。

アルムの砦で待機していたA Dフィンと合流した彼らは早速、第2の幻の食材、魔猪を手に入れる為に被害のあつた畑へと訪れていた。

「うわあ…酷いねこれ」

「めっちゃ荒らされとるねー」

「この足跡からして魔猪かな、やっぱり」

そう言って、三人は被害のあつた畑を散策しながらその有様を見て回った。

畑の側にある建物は倒壊し、ボロボロに崩れてしまっている。農作物を仕舞うである

う倉も破壊され中身がごっそり食い荒らされていた。

これを見たクー・フリーンは悲しげな表情を浮かべて、畑の土をそつと触る。その土の感触は間違いなく農家の人やフィオナ騎士団の人達が手入れした綺麗な土だ。

こんな綺麗な土を踏み荒らして、しかも、せつかく実った穀物が全部食い荒らされているこの状況はY A R I Oとして見過ごせない。

「それで、どうするんだ？ しげちゃん」

「また魔猪がここに戻ってくる可能性が高いですからね、ここで迎え討ちましょ」

土を触るべく屈んでいるクー・フリーンの背後から声をかけてきたスカサハに彼は確信を持ったように告げる。

魔猪ならば、必ずここに帰ってくる。畑の土は良いし、ここに穀物や野菜を植えておけばそれに釣られて奴が舞い戻ってくるはずだ。

「奴は味をしめてる、間違いない」

「デイルちゃん、マタギのおっさんみたいになってるよ？ 顔が」

そう言つて、表情を引き締めて告げるデイルムツドの肩にポンと手を置くカルナ。

マタギとは東北地方・北海道で古い方法を用いて集団で狩猟を行う者を指す。他の猟師には類を見ない独特の宗教観や生命倫理を尊んだまさに古から伝わる伝統的な狩人だ。

そんな伝統的な狩人に習い、YARRIOのメンバーは魔猪を狩るべく、この場に投石機と巨大弓矢を作り上げなければならぬ。

「さあ！ んじゃ取り掛かろつか、まずは投石機から作る？」

「そうだね、それもだけど、まずは丈夫なバリケード作った方がいいんでない？ 猪に突進されてもビクともしないやつ」

「おお!! ついに作るんだな！ よし！ 私も手伝うぞ！」

「それじゃバリケードも視野に入れて、まずですね…」

それから、役割分担をし、早速、YARRIOメンバーは別れて、魔猪討伐の為の投石機の組み立てに取りかかり始める。

バリケード係にはデイルムツド、カルナチーム、そして、巨大弓矢の作成にはスカサハ師匠、リーダーのクー・フリーン、ADフィンが着手する事になった。

そして、スカサハとADフィンと共に巨大弓矢の作成に取り掛かろうとしたクー・フリーンはここである事に気付く、それは…。

「あ！ この木材…！ もしかして！」

「はい、用意しときました。木材切るところから始めなきゃいけないんだらうなと思ってたんで」

「流石！ ADフィン！ 準備ええな！」

なんと、ADフィンが用意した木材が積まれていた。

三人がインドにカルナを連れ戻しに行っている間、ADフィンもじつと待っていた訳ではない、騎士団を連れて彼は必要になるであろう木材の確保を既に行なっていたのである。

それも、見る限り、丈夫そうな木ばかりだ。これを切り倒してここまで運んでくるには大変な労力がある筈、しかし、ADフィンは何でもないかの様に爽やかな笑顔でクー・フリーンにサムズアップ。

流石は優秀な我らがカタッシュスタッフ、抜け目がない。

「この木はしかもオークの木やない？ あとザンザシと…トネリコ？」

「そうですね、これ切る時にドルイドさんに見つからないように気をつけながら伐採してきました」

「…それは見つかったら大ごとやろうからなあ…」

そう言って、クー・フリーンは積まれ、フィン達が伐採してきた木を触りながら引きつった笑顔を浮かべていた。

このクー・フリーンが挙げた3つの木にはある意味いろんな迷信がある。

まず、オークの木だが、オークの木は神聖で魔力のある木といわれている。

ドルイド僧の魔法の杖は、オーク製。オークの木には妖精が住んでいるといわれている、伐られると激怒し、切り株からでている若芽は、怒りに満ち、悪意を持っているとか。

そして2つ目はトネリコの木。トネリコの木はキューピットの矢がそれでできているとか、生木でも火がつき、しかも煙がでないそんな不思議な木であると言われており、トネリコの赤い実で出来た首輪を牛にかけると魔よけに狂牛病に効くという迷信がある。

そして最後は、サンザシの木。本来の目的としては雷よけの木として生け垣や畑に植

えられていたという話で、このサンザシが3本以上生えているところは妖精の住処だとか、このサンザシの木を切れば、牛や子供が死んでしまったり、記憶を喪失するとも言われている。

とはいえ、もうさっぱり綺麗に切りとられてここに3本ともずつしりと積まれてしまっている。見つければ大ごとのような気がするが、大事に使えばきつと妖精さん達も喜んでくれる筈だ。

「罰当たりどころではないな、これを見られたらドルイドから『お前は明日死んでしまうだろう』と言われかねないぞ」

「その時はデイルムツドさんにお願ひしてみます」

「あー…確かに妖精関連ならデイルやもんな…、ま、なんとかなるやろ」

そう言って、互いに笑顔を浮かべながらスカサハの言葉に頷くADフィンとクー・フリーンの二人。

その顔を見たスカサハは深いため息をついて頭を抱える。どうせ、彼らの事だからそう言い切るとはわかっていたが、開き直っている彼らを見ているともうどうでも良くなっていた。

そして、丁度その頃、バリケード班のカルナとデイルムツドはと言うと？

「しゃあ！ 倒れるぞー！」

「おーし！ いい感じ！ いい感じ！」

盛大にオークの木を思いっきり切り倒していた。

妖精の住処という話もあったにも関わらずこれである。しかも、斧を持っているのはデイルムツドだ。

妖精王オエングスの息子であるにも関わらずこの有様。しかし、なんの躊躇もなく木を切り倒しているあたり思い通りの良さが感じられた。

「ふう、なんていうかやつぱり久々に斧持つと気持ちいいよな！」

「大自然に感謝だよ、ありがとう！ 大自然！」

そう言って、また木こりの様に木に斧を振り下ろし、巨大弓矢に必要な木を確保しはじめ二人。

思いっきりの斧を使い木を切り倒すところを見る限り、デイルムツドも全く迷信を信

じていないのかそれともわかっていないのか…。

兎にも角にも、彼らはADフィンと同じ様に木をたくさん手に入れる為に木を切り倒し、畑へと馬車を使いながら持ち運んでいく作業を淡々と行なった。

そんな木材を運ぶ作業を行う中、デイルムツドはふとした疑問をカルナに問いかける。

「どころでさ？ バリケードってどんなの作るのよ？ 兄イ」

「あーそれね！ 一応、ヒルフオート作ろうかなって考えてるけど」

「おー、ヒルフオートね！ …ヒルフオートって何？」

「ってわからんのかい！ ヒルフオートってというのはねえ…」

そう言って、ヒルフオートとは何かという事について、理解していないデイルムツドに話をしはじめカルナ。

ヒルフオートとは要塞化した避難場所。または防御された居留地として使われた土塁などの一つである。主に防御に有利になるよう周囲より高くなつたところを利用して建設された事で知られている。

ヨーロッパで青銅器時代から鉄器時代にかけて建設されたものを一般にこのように

呼んでおり、敵を迎え撃つ為の拠点として広く役に立った。

今回、カルナはこのヒルフオートを使い、巨大弓矢と投石機を守るバリケード代わりに使おうと考えていたのだ。

「へえー、兄イ流石だねえ、俺全然知らなかったもん」

「アイルランドの英雄なのに？」

「いやー、俺は厨房で戦うことが多かったからさー」

「それなら仕方ないね」

「てか、それを知ってる兄イが逆にすげーよ、どっから知ったのその知識」

インドに居ながらヒルフオートについて知っているカルナに感心するディルムツド。建築についてはやはり本職のカルナは頭一つ飛び出ているなど改めてそう感じさせられた。

さて、二人はこうして木材を持ち帰り、早速、投石機を作るADフィンとクー・フリーンの元にそれらを次々に運んでいく。

「これだけあれば足りるでしょ？」

「まあ、ADも木は確保してくれてたみたいだからね」

「お前達、戦争でもする気か？」

淡々と積まれた木材に目を丸くしながら告げるスカサハ、巨大弓矢と投石機を作つても余りが出そうである。

すると、そんな木材を見つめたカルナは笑顔を浮かべたまま、スカサハにサムズアツプし心配ないと言わんばかりにこう話をしはじめた。

「投石機と巨大弓矢もう一個作れば問題ないですよ、数が多いほど助かりますからね」

「おー、確かにそうやな、もう一個作ろう！ もう一個！」

「もう一個つつ作るのか？ …いよいよ本格的に戦みたいになつてきたぞ」

そう言いながら、五人は魔猪を狩る為にさらに投石機と巨大弓矢を増やす事にした。

数が多いほど確かに有利な事は間違いない、手作りのノコギリや金槌を使いながら作業を分担し、彼らは作業に取りかかる。

巨大弓矢作成の作業はクー・フリーン達三人。

まずは弓の作成。前は19人の弓職人が集結し完成させた巨大弓を今回はこの三人で作り上げなければならぬ。

生前、ご当地PR課で訪れた宮崎県都城市。生産量日本一の和弓をPRするため、通常2m程の弓矢を約3倍の6mに巨大化！ 見事、100m先の的を射抜くことに成功した。

そんな都城で学んだ反発力と粘りのある弓作り。その作り方は、体が覚えている。

確か、都城の和弓職人は竹の間にハゼの木を入れていた。

この1枚で弓の強度が増し、大きな反発力を生む。そこで、竹の幅に合わせて板を切り出し、二つの竹で挟んで、7か所をロープで縛って固定する。

しかし、今回は…。

「竹なんて無いもんなんーしかもハゼの木でもあらへんし」

「竹？ なんだその竹というのは」

「あ、竹っていうのはですね」

そう言ってクーパーリンはスカサハに竹について説明をしはじめた。確かにここはアイルランド、竹を手に入れようにも入手場所が無い。

どうするか悩む一同、早速、壁にぶちあたってしまった。しかし、これは原材料を手に入れなくてはいけない事であり、避けては通れぬ道だ。

クーフリーンは長く悩んだ末、こんな言葉をポロリと溢し始める。

「竹かあー…だん吉使わないかんかな？」

「あー、それなら日本に取りに行けますもんね」

「せやねん、やから日本に竹を取りに行かないなんかなって考えてんねんけど」

「ほほう…なら、また『だん吉』に乗るんだな？」

「師匠、運転する気満々やね…」

「次は上手くやるさ、やらなければ上手くはならんぞ！ さあ！私にやらしてみろ！」

そう言って、自信有り気にクー・フリーンに告げるスカサハ。確かに前回はあんな感じではあったが運転自体はうまく出来ていた。

それにスカサハが言うように運転しなければ上達しないことも事実である。ならば、経験を積ませてあげる事も大事だ。

「もー、ほんまに仕方ないですねー、そんなに言うなら師匠に運転してもらいましょう

か

「ほんとか！」

目を輝かせるスカサハに仕方ないとジト目を向けながら告げるクー・フリーン。

本当に彼女の運転で大丈夫なのだろうか？ 心配はあるが、いろいろと助けられている手前あんな顔を向けられてはクー・フリーンも無下にはできない。

こうして、二人は今回は巨大な弓矢作りに使用する竹を手に入れる為、『だん吉』を使いわざわざ日本へ向かう事にした。果たして、二人は無事に竹を手に入れる事が出来るのだろうか？

ようやく動き出した巨大弓矢作りに投石機作り、そして、伝説の食材の魔猪討伐！

竹を手に入れる為にクー・フリーンとスカサハは日本へ！ なんと、そこに待ち受けていたのは新たな出会い！

そして、ディルムッドとカルナの二人は初めてのヒルフオート作りに挑戦！はたして、魔猪も壊すことが出来ないヒルフオートを作ることができるのか！

この続きは…次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

ヒルフォートが作れる
マタギになる
魔猪の生態観察
竹を取りに日本へ行く
NEW!!
NEW!!
NEW!!
NEW!!

石橋ヒルフオート

前回のザ！鉄腕／f a t eでようやく動き出した魔猪退治。

さて、その作業に急遽、巨大な弓矢作りに竹が必要になり『だん吉』に乗り、日本へ向かおうとしたクフリーンとスカサハの二人。

そんな二人だったのだが、ここに來てあるトラブルに巻き込まれてしまった、それは…。

「行き先、間違えてルーマニアになってたやん…」

「うまく運転できただろ？ 私は」

「今回は師匠のせいじゃないですよ。僕が設定し忘れてたのがあかんかったんで」

なんと、日本じゃなく、どこかの別世界のルーマニア南部の地域に『だん吉』で飛んで來ていたのだ。

『だん吉』の設定を間違えたまま、目的地がY A R I Oの仲間の一人がいるであろう場所

に調整されていたのである。

このルーマニアの時代は1459年。オスマン帝国がワラキア公国が睨み合うそんな激動の時代だ。

二人はとりあえず『だん吉』を草むらに隠すようにして置いて、間違えて来てしまったルーマニアにてY A R I Oの仲間を探す事に切り替える事にした。

「師匠、ごめんなー、僕のミスやね」

「いやいいんだ、気にするな、それより仲間を探すんだろ？」

「せやね、この時代にいるみたいなんやけど…、どこに居るんやろうなあ」

そうやって『だん吉』から降りた二人はひとまずルーマニア南部の町ワラキアに散策に出掛ける。

その街に住む人達は笑顔で生き生きとしながら生活していた。なんでも話を聞くと領主であるヴラド3世と呼ばれる人物の治世が非常に良いとか。

木炭の輸出やオスマン帝国との上手い交易によりこの街はかつてないほど活気がある街に変わったのだと街人は語る。

「ほえー、そのヴラドさんってすごい人なんやね」

「そうなのよー、ウチも最近、黒字でねえ、特にヴラドさんが直々によく作ってくれる木炭が上質なものだから美味しいパンができて大助かりなの！」

街のパン屋で働くおばさんにはこやかな笑顔でクローリンにそう語る。

そのヴラド三世はどうやら、その卓越した炭作りから『木炭公』と呼ばれているらしい、それからさらにスカサハとクローリンが街で聞き込みを行うとさらなる事が判明していった。

ヴラド公は木炭だけでなく、粘土を使った土器作りにも力を注ぎ、菜園なども自ら手がけているとか。

「あいつ…身体が病気で無理できんやつたのになあ」

「…しげちゃん？」

「ああ、ごめんな、師匠。 多分、そのヴラド公って僕らの仲間やね」

クローリンはこぼれ出そうな涙を指先で拭い、笑顔を浮かべてスカサハに告げる。

最近、妙に涙脆くなってしまう。力作業やキツイ仕事をできない身体であった彼が

自らそういった事を進んで行なつてると聞いてリーダーのクーフリーンは感慨深く感じてしまったのである。

今かどうかは知らないが、炭作りも菜園も土器作りもこの時代にやるのは大変な事。それを進んでやっていると聞かされて必死に彼が生きているという事をクーフリーンは実感した。

ならば、迎えに行つてあげないといけない、それが、Y A R I Oのリーダーとしての自分の役割である。

間違えてルーマニアに来てはしまったが、これはむしろ来てよかつたなどクーフリーンはそう思った。

それから、クーフリーンとスカサハはルーマニア南部、ワラキアの領主であるY A R I Oの仲間であろうヴラド三世を迎えに行くべく彼が住んでいるであろう城へと向かった。

当然ながら、ワラキアの城の城門には見張りの兵士が立っている。それを見たクーフリーンは早速、その兵士に声をかけた。

「こんにちはー！ すいません、僕らヴラドさんから呼ばれて来たんですけど？」

「ヴラド公が？ 貴様ら何者だ？」

一見すれば農業の服に身を包んだ怪しい男女の二人組。鋤を持っているあたり、貴族やそんな類の人間ではない事は明らかだ。

よく見れば間者とも見て取れる、門番からしてもこんな怪しい連中を易々と城内へと入れるわけにはいかない。

すると、クーフリーンは満面の笑みを浮かべたまま、城門に立つ門番にこやかな笑みを浮かべたままこう告げる。

「僕はY A R I Oのリーダーのクーフリーンと言います、そして、こちらが……」

「こいつの師匠のスカサハだ」

「!?……あ! ……や、Y A R I Oの方々でしたか!? これはすいません! ……どうぞ城内へ……」

なんと、クーフリーンとスカサハの二人はこんな怪しい農作業者の格好ながらもY A R I Oという名前と顔パスで行けた。

Y A R I Oがどう知られているのかは定かでは無いが、これならば、何事なくヴラド公と面会ができるだろう。

二人は門番に案内されるまま、ワラキア城の城内へ、果たして、この城の中にYARRIOの仲間の一人がいるのだろうか？

そして、ちょうど二人がワラキアの城を訪れていたその頃、フィニアンサイクルに残りヒルフォート作りに勤しむデイルムッドとカルナはというと…？

「前作った石橋つてこんな感じだったよね確か」

「そうそう、そんな感じだった」

前に無人島で一度作った石橋作りの経験を活かし、ヒルフォート作りに着手していた。

今回ヒルフォートに使うのは丈夫な石。これに粘着物を取り付けながら積み上げていきヒルフォートを作成する。

その数は石橋を作った時の倍の石量を使う事になる。これにはカタツシユスタツプであるADフィンとフィオナ騎士団、そして、村の石積みを専門とする職人さん達に協力してもらった。

異国でも生きて、職人から教わった石橋作りの技術。二人はコツコツと石を金槌で削

りながら作業を行う。

「コツは？」

「繊細にかつダイナミックにかな」

「恋愛と一緒にだな！」

「そうだねー」

そんな雑談をしながら、石を削りながらコツコツと積み上げるフィオナ騎士団とデイルムツドとカルナの二人。

それを聞いていたデイルムツドは思わず笑いを吹き出しながら、カルナにこう問いかける。

「そうなの？　恋愛と一緒になの？」

そのデイルムツドの言葉に次は思わずカルナも吹き出して笑いが溢れでてしまった。

デイルムツドとカルナの二人の脳内には『だん吉』で師匠と旅に出たリーダーの顔が思い浮かんでいた。

「……石も恋愛も勉強や。」

そんな言葉（テロップ）が思い浮かび、遂にはADフィンからも笑いが起きてしまった。石を組み上げながら、デイルムツドは笑いを溢しながらふとした疑問を口に出す。

「あの人がいつ結婚すんだろうね？」

「いつときは無理そうな気がすんだよねえ」

「師匠美人だからくつつきやいいのに」

「あの人の頭の中は0円食堂とかそんなんでいっぱいだからなあ」

そんな、我らがリーダーダーについての他愛の無い雑談をデイルムツドとカルナが繰り返しているうちにも作業はどんどん進む。

積み上げる石の微調整を行うカルナとデイルムツドの二人。そんな中、デイルムツドの石を見たカルナは石を指差しながらこう話をする。

「もうちよいバツテンだね、上の方が」

「あーマジか、前のしげちゃんみたいになってるわけか」

「臆病なのはダメだよ、ガツンといかなきやガツンと！」

石に気遣いすぎてるデイルムツドにそう告げるカルナ、周りからは思わず笑いが溢れていた。

そして、作業を黙々とこなす中、何故かワラキアにいるクーフリーンの頭の中にはこんな言葉が舞い込んでくる。

「……………石も恋愛も臆病。」

そんな言葉が聞こえて来た我らがリーダークーフリーンはハッ！ っとした表情を浮かべて背後を振り返る。

「？ どうしたしげちゃん」

「今、僕の頭の中で何かが聞こえて来た気がしまして」

「？ そうか、とりあえず行くぞ」

フィニアンサイクルにて行われているヒルフォート作りにまさか自分の名前が使われていることを察したのは定かでは無いが、思わず気配を感じて立ち止まるクーフリーンにスカサハは歩くように促す。

そんな中、ヒルフォート作りの作業も淡々と進んでいき、いよいよ、石の面を平べっ

たくする作業へ。

そこで、ディルムツドはあるものをカルナから手渡された、それは…。

「またお前を使うことになるか、肉用ハンマー」

「ディルちゃん、ディルちゃん、それピシヤンだから」

そう、カルナから手渡されたのは石の面を平らにするためのハンマー、ピシヤンである。

以前、作った石橋作りではこれを使い面を平らにして石を積みやすい形に変えていた。そして今回もこれを使い、石を平らにする。

「肉用ハンマーだと思ってたから」

「まあ、肉用にも使えそうではあるよね」

「肉用ハンマーは家にもあるけど…」

そう告げるディルムツドはピシヤンを石に振り下ろし石の形を整えていく。金属と石がぶつかる音が響く中、ディルムツドのピシヤンの使い方は卓越していた。

思わずそのデイルムツドのビシヤンの使い方に感心するように口笛を吹くカルナ、だんだんとデイルムツドも前に叩いた石橋の石での手ごたえを思い出して来た。

「あつ！ 上手！ うまいねデイルちゃん」

思わず声に出して、ビシヤンの使い方を賞賛するカルナ。

「……石もドラムもリズム命。

それは身体に染み付いたもの。

皆さんはもう普段の活動から忘れているかもしれないが、何故なら彼は…。

「……Y A R I O のドラム。

デイルムツドがビシヤンで叩き終え平べったくなくなった石をつぎつぎと運ぶA D フィンとスタッフ達。

「すごいなあビシヤン、うまいなあ。ビシヤンデイルムツドじゃん」

「そつちに改名しようかなあ、俺」

平べったくなくなった石の手触りを確認しながら笑顔を浮かべるデイルムツド。Y A R

IOのドラム担当はやはり伊達ではなかった。

まだ、石は幾らでもある。フィオナ騎士団や石造りの職人さん達も石を削りながらデイルムツドを真似て石を平らにする作業を行う。

まだまだ石はたくさんある。気が遠くなりそうだが、今回は木材も使うので全部が全部この石でのヒルフォートを作るわけでは無いのが唯一の救いだった。

「さ、リーダー達帰ってくる前に形だけでも作っとこー！」

「あの人達大丈夫かな？」

そんな心配を浮かべるカルナだが、世界を越えて飛んだ『だん吉』の行き先が、竹がある日本でなくルーマニアにて絶賛迷子になっているのでその心配は既に的中している。

ひとまず、YARIOの仲間であるヴラドの城には辿り着いたようだが、果たして彼らは無事にお使いをこなして帰ってこれるのだろうか？

ヒルフォート作りもまだまだ完成は遠い、我らがリーダーとスカサハ師匠は仲間と竹を無事に持ち帰ることができるのか？

この続きは…次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

ルーマニアに間違えて飛ぶ————NEW!!

ルーマニアで炭作り、菜園作り————NEW!!

ケルトで石橋ヒルフォート————NEW!!

恋愛に臆病なりーダー (独身) ———NEW!!

ビシャンデイルムツド————NEW!!

ルーマニアでごちになります！

さて、前回の鉄腕／f a t eで日本に竹を取りに『だん吉』に乗り出かけたクーフーリンとスカサハの二人。

リーダークーフーリンが場所の設定を入れなかった事で二人は1459年のルーマニア南部ワラキアに来てしまった。

とはいえ、ここにY A R I Oの仲間の一人がいる事の情報を街の聞き込みにより入手した二人は現在、その仲間の一人がいるであろうワラキアの城を訪ねていた。

「はえー、僕、こんな城見た事ないですよ、こんなんやったんやね」

「うむ、確かに立派な作りだな」

「職人さんとかに話が聞いたら良いんですけどね、参考にしたいですし」

そう言って、辺りを見渡しながら二人は先導する門番の後ろからついて行く。

城内は確かに見た事ない城、非常に興味深い洋式な作り思わず、リーダークーフー

リンは感心してしまった。

日本文化な家の作り方ならば、Y A R I Oのカルナがよく知ってはいるが、やはり、洋式なものとなると我らがY A R I Oはまだまだ学ぶべき場所がある。

「なんでも作れてなんぼやからね、僕ら」

「————洋式だけに様式美や。」

間違えても彼の本業は建築ではないが我らがY A R I Oのリーダー、クーフリーン。ここで確信を持ってそう言い切ってしまう。

さて、門番から連れられ、広い城内を歩くこと数分あまり、彼らが案内されたのは食事を取るための大広間だった。

広い空間には洋風な雰囲気か漂っている。まるで、お伽話に聞くような長いテーブルが置かれた大広間だ。

そして、そこに居たのは…。

「あー！ リーダー！ 待ってたよ！ さきさき！ 座って座って！」

なんと陽気な態度で席を引いている灰色の髪に同色の髭を生やしたおっさんの姿があった。

しかし、その声はクーフーリンにも聞き覚えのある声、間違いない、これはY A R R I Oのメンバーの一人であるヴラドだと確信した。

すぐさま、クーフーリンは席を引いてくれたヴラドの側に近寄ると親しく肩を掴んでにこやかな笑顔を浮かべたままこう告げる。

「あはははは！ 嘘やろー！ めっちゃ髭ぼーぼーやんか！」

「久しぶりーリーダー！ そうなんだよー見てよこれー。めっちゃ髭生えてさ、威厳ある？ 威厳あるかな？」

そう言って肩を掴んで来たクーフーリンに自分の髭を見せながら苦笑いを浮かべて告げるヴラド公。

それを見たスカサハは戯れる二人に近寄ると首を傾げたまま、クーフーリンに問いかける。

「そいつか？ お前の仲間は」

「あ、はい！ そうなんですよ！ ほんまはこんな老けた感じや無いんですけどねー」
「あー！ そりやないよ、リーダー。俺こんなんだけど、結構苦労したんだからね」
「ふふふ、そうか、話は聞いていたぞ街人からな」

スカサハは親しく話す二人に笑みをこぼしながらヴラドに向かってスツと細くて綺麗な手を差し伸べる。

それを見たヴラドは目を丸くしながら、差し伸べられたスカサハの手を見つめた。そして、手を差し伸べた彼女はヴラドに自分が何者であるのかを語りはじめた。

「はじめましてだな、私はスカサハ、このクーフーリンの師匠をやつてる者だ」

「あ！ どうも！ 凄い美人じゃん！ リーダー。…つて師匠なの!? この人!」

「せやでー、僕らの師匠やで」

「うわ！ この感じ懐かしい！ 前あつた村の企画以来じゃない!」

そう言つて、差し伸べられたスカサハの手を両手で握りしめながら腰を低くして握手をするヴラド。

村の企画でお世話になった今は亡きY A R R I Oの師匠。そんな彼の事を思い出しな

がらヴラドは懐かしそうにスカサハと握手を交わしていた。

「とりあえず、いらつしやい! 大したもの出せないけど俺の料理でよかつたら出すからさー!」

「おー! ヴラドの料理食うなんて久々やんね!」

「へっへっへ、こう見えても俺、料理やってたからね」

「でもその顔でキャスターに戻るのは流石にきついやろうなあ」

「そこは触れないでくれたらうれしいなーリーダー」

そう言いながら、互いに笑い声を上げつつ、部屋奥へと消えていくY A R I Oメンバーの一人こと、ヴラド三世。

見る限り、どうやら料理を作りには彼は厨房へと向かったらしい、どうやら今回、彼が自分達に直々に料理を振舞ってくれるようだ。

久々の仲間の一人との再会に嬉しくなるおもてなし、クーフーリンとスカサハ席に着席したまま、ヴラドが料理を運んでくるのをしばらく待つ。

そして、待つこと数分、鉄食器で運んで来た料理をヴラドは丁寧に二人の前に置いていく。

「ゴチになります!」

「懐かしくなるわ! やめい! リーダー大丈夫だから、これ値段当てたりするようないやつじゃないからね?」

「あ、ほんまに? なんか言つとかなあかんかなつて思つて」

「おー、これはまた見たことない料理だな」

二人の漫才のようなやり取りを他所に、そのヴラドから目の前に置かれた料理を見て思わず感心するスカサハ。

目の前には串に刺さつた鶏肉と豚の肉を炭火で焼き、特製のタレをつけた、肉汁がこぼれ出る焼き鳥。

それだけでは無い、輸入し、熟成した葡萄から取つた綺麗な赤ワインがお供につき、これはもう、目の前に置かれるだけで食欲がそそられる。

メインディッシュには…。

「はい! どうぞ!」

「おー!! …すごいな!」

「はえー洋食極めたなーヴラド」

なんとジャンバラヤとジャークチキンが綺麗に盛り付けられて提供されていた。

イタリアンパセリが綺麗に添えられ、ジャークチキンはパチパチと音を立てており、まだ暖かい事を二人に知らしているようである。

早速、二人は食器を手にヴラドから提供された料理を口に運ぶ、まず、スカサハが手にしたのは自慢のお手製の炭で焼いた豚バラの串。

「これは…」

「そのままがぶつと行ってください、がぶつと」

「そうか、なら…、はむー」

カプリと小さな口で豚バラを齧るスカサハ。

すると、口の中になんとも言えない香ばしい香りとスパイスが効いた豚バラの味が広がっていく。

自慢の炭火で焼いた豚バラ肉の肉汁、これは確かに美味だ。お酒がお供に欲しくなる気持ちも分かる。

「ふあく…これは美味しい…！ 焼き方からして普通の焼き方じゃないな！ 味付けも！」

「はい、特製のタレを使ってますからね」

「普通の串焼きならば食べた事はいくらでもあるが、これは全然味が違うな…、こんなにも違うとは正直驚かされたぞ」

スカサハはそう言って、横にある赤ワインを口に運びながら笑顔を浮かべていた。

この赤ワインもまた味が深い、日本酒も確かに美味しかったが、これはこれで焼き鳥と伴い深みがある味わいがある。

「…確かに美味しいなあ、やっぱり料理の腕は確かやもんねヴラドは」

「まあ、けどやっぱり厨房に立つならあの人が一番でしょ？」

「あの人ってデイルムツド？」

「あーそうそう、デイル兄ィ、やっぱりあの方がY A R R I Oの料理長だからさ」

そう言って、苦笑いを浮かべるヴラド。

料理の腕前ならヴラドも負けてはいない、言うなら洋食ならヴラド、和食ならディルムツドと言ったところだろうか。

とはいえ、Y A R I Oは全員料理を作るのが上手い、その中でもと言うとやはり幼い頃から包丁を握っていたディルムツドが1番だと皆はそう思っている節はある。

「ところでリーダー、ここに来たのって」

「迎えに来たって事やね」

「やっぱり! やっぱり! いや、リーダーなら絶対迎えに来てくれるって信じてたよ! 他の皆は?」

「末っ子はまだやけどぐっさんとディル兄イはおるで、あとA Dもやな」

そう言って、顎に手を添えて思い出すようにして告げるクーフリーン。カルナ、ディルムツド、フィン仲間として取り戻した。

後はヴラドとY A R I Oの最年少の末っ子だけだ。あの天然キャラ兼ボーカルが居ないとやはり、Y A R I Oは寂しい。

すると、ヴラドは名前を挙げた二人がいる事に驚きつつ、クーフリーンにこう訪ねる。

「マジか！　じゃあ俺も自分の渾名考えないと、んー何がいいだろ？」

「NDKヴラドでええんやない？」

「名前からして煽ってる感じだよねそれ、ダメだよねそれ」

「びびつとくるヴラドとかはどや？」

「キャスターから離れなさいってば、あんた」

そう言って、ヴラドは顔を引きつらせながらクーフーリンにそう告げる。

仕方ないので、最終的にいろいろ考えた末にヴラドたちちゃんという渾名をスカサハの口から出た渾名に決まった。

ひとまず、ヴラドの渾名が決まったところで、クーフーリンは早速、本題に入る。

「実は今、僕ら伝説のラーメンを作つとるんやけどな」

「え!?　何その面白そうな企画！　俺も混ぜてよ!」

「…お前たちみんなラーメン作りと聞くといつもこんな反応だな」

ラーメン作りと聞いてキラキラと目を輝かせるヴラドにスカサハは苦笑いを浮かべたまま告げる。

それはそうだ、普通のラーメンでは無い、伝説のラーメンなのである。Y A R I Oならば、この企画に燃えない者などいない。

「……ラーメンの為に。」

Y A R I Oの力を結集し世界一やばいラーメンを作る。

「それでどのレベルから作るの？ 小麦から作るのか……」

「やりましょう」

「マジかー、あれまた小麦から作んの!？」

そう言って、クーフリーンの言葉に仰天したように笑いながら声を上げるヴラド、しかし、その表情は心なしか嬉しそうだ。

Y A R I Oが培って来た。食べた、作った、捕まえたものの経験を生かし、幻の食材を手に入れ伝説のラーメンを作り上げる。

世界各地の伝説を集結させ、とびつきり美味しいラーメンを届けたい。

「じゃあ！ そうと決まれば早く行こう！」

「決まりやな！ あ、ヴラド、国は大丈夫なん？」

「あ、俺、領主なんて柄じゃないからね、他の人に任せるよ」

そう言つて、引き継ぎを終えたヴラドたちちゃんはクーフリーン、スカサハと共にY A R I Oの一員に加わり、街外れにあるだん吉の元へ。

こうして、ついにY A R I Oの一員としてヴラドが再び加わった。

クーフリーン一行は竹を求めてルーマニアでヴラドを仲間に加えて日本へと向かう。巨大弓矢を作る為、果たして丈夫な竹は手に入るのか？

そこではなんと、クーフリーン達と昔の日本に住む現地人のN O U M I Nとの遭遇が……。

そして、石橋ヒルフォートでもさらなる動きが…、遂にカルナが目からビームを披露する時が来たのか。

次回も見どころ盛りだくさん。

この続きは…次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

師匠がグルメリポーターになる……NEW!!

ルーマニアにてごちになりますー
ラーメン作りはやっぱり小麦からー
ヴラド、洋食が得意になるー
NEW!!
NEW!!
NEW!!

日本で竹探し

さて、前回の鉄腕／＼f a t eでは間違えて来てしまったルーマニア、ワラキアにて仲間一人であるヴラドを回収したクーフリーンとスカサハの二人。

が、しかし、二人の目的は本来ならこのルーマニアに来ることではなく、巨大弓矢に必要な素材、竹を手に入れる事。

早速、ヴラドと合流し、三人となった我らがカタツシユ隊員達は竹を入手すべく『だん吉』に乗り日本へと渡った。

「はあ、巨大弓矢ねー、懐かしいじゃん、また、あれ作ってたんだ」

「素材が足りへんから頓挫しとる真つ最中やけどね」

「ほほう、ここが日本とやらか…豊かな自然に包まれた国だな」

カタツシユ隊員達はそう言って、昔の日本の土路を歩きながら、昔ながらの風景を楽しみつつ足を進める。

日本に来たからには、できれば丈夫な竹を持ち帰りたい。

ならば、自ずとやる事は決まっている。まずは聞き込みからだ。先日、加わったカタツシユ隊員の一人、ヴラドは土路が続く先で民家を見つけるとスカサハ、クーフーリンにこう提案を投げかけた。

「ちよつとあそこでさ、聞き込みしてみない？」

「聞き込みかあ、なんだかこの感じ久々やな」

「じゃあ、ブランクもある事だし、俺、行ってみてもいい？」

そう言つて、リーダーのクーフーリンに民家での聞き込みを自ら行つて良いかの確認を取るヴラド。

クーフーリンはなんの問題もないと言わんばかりにそれにサムズアップで応えた。さあ、ここからはY A R I Oの腕の見せどころだ。

ヴラドは早速、民家へと足を進めると戸を叩き、中の人が出て来るまで待つ、そして、戸が開き中から人が出て来るといつもの様に笑顔を浮かべたまま、現れた農家のおばさんにこう話をしはじめる。

「こんにちはー！ あ、今、お時間よろしいですか？ 僕たちY A R I Oというものなんですけどもー」

「ん？ あんた達みない顔だね？ Y A R I O？」

「はい！ そうです、僕ら今、鉄槍カタツシュってというのが企画で、竹が必要なんですけど」

「安心してや、僕らも農家の人やから」

そうやって、農家のおばさんを安心させる様にヴラドのフォローに入るクーフリーン。

「……農家のY A R I O。」

フォローの為とはいえ、農家の人という言葉が自然と発するクーフリーン、その光景は確かに彼らが着ている作業着の格好からして妙な説得力を帯びていた。

クーフリーンの言葉を聞いた農家のおばさんは少し考え込む様な素振りをし、こう話をしはじめる。

「あー…、竹の在り処ね、そうだねえ、この路をまっすぐ行くと確か竹藪があつた筈だけどねえ」

「ほんとですか!」

「ああ、ホントさね、あそこに柳洞寺って寺があるんだけど、最近、刀振ってる陣羽織を着た男がいるだろうから話を聞いてみたらええよ」

おばさんにはこやかな笑顔を浮かべるとクーフリーン達にそう告げて、家の中へと入っていった。

聞き込みした甲斐があつた。どうやらお目当ての竹は柳洞寺という寺の周りに沢山生えているらしい。

そうなれば、話は早い、早速、一同は竹が大量に生えている柳洞寺周辺に向かった。軽い足取りで歩く事数分、辺りは田舎の田んぼの風景から進むにつれて竹藪へと変わってゆく。

「はあー竹やね、立派な竹藪や」

「夏場とかなら蚊がいつぱい湧きそうだね」

「嫌やなー、スズメバチならなんとかできるんやけど、蚊は痒くなるから嫌いや」

そう言って、思い出しながら顔を引きつらせるクーフリーン。夏の風物詩とはいえ、

蚊に刺されて痒い思いをするのはやはりY A R I Oとはいえ辛いものがある。

野外での活動が多い彼らだが、蚊に刺されて痒い思いをした事は数え切れないほどあった。

そんな中、師匠であるスカサハは首を傾げクーフリーンに訪ねはじめた。

「ん？ 蚊？ 虫か？」

「せやねん、刺されると痒くなるんやで師匠」

「それは私も嫌だな」

そんな他愛のない雑談を繰り返して、柳洞寺へ続く階段を歩いていく一同、すると、階段の途中に長い刀を振るう綺麗な結った長髪に陣羽織を着た男性の姿が見えてきた。

もしかしたら、柳洞寺の住人なのだろうか？ ヴラドは早速、こんな階段の途中で刀を振るう男性に接触を試みる事にした。

「すいませーん、ここの寺の方ですか？」

「ん？ どなたかな？」

「あ、僕達Y A R I Oというものなんですけどもこの周りにある竹を分けてもらえたら

なと思ひまして」

「ふむ、竹…、竹とはこの柳洞寺の周りに生えている竹の事か？」

そう言つて、振るつていた剣を降ろし、周りを見渡しながら訪ねる男性。どうやら、彼はみた感じこの柳洞寺に関連した男性のようである。

それに、剣を振るうのをみた限りなかなかの達人と見た。鋭く長い剣はキラリと光を放っている。

ひとまず、刀を鞘に納める男性は目を瞑り、冷静な面持ちでこう話をしはじめた。

「ふむ、見たところお前達は変わった服装をしているな、名はなんという？」

「あ、僕はクーフリーンって言います、それでこつちがヴラドに僕の師匠のスカサハ師匠です」

「うむ、師匠のスカサハだ」

「よろしくねー」

軽いノリの彼らは男性に名前を紹介するクーフリーンに続き、簡単な自己紹介を男性に行う。

見たことがない格好の三人組、しかし、その格好とは裏腹に隠せない何かを男性は感じとつていた。

これは武芸を極めるものだからわかる直感のようなもの、だが、間違いなく彼らは只者ではないと男性は確信する。

もしかすれば、望んでいた強者と今日この場で刃を交わせるのではなからうか？ そんな期待感が彼の中で膨らんだ。

刀の鞘を背に仕舞った男性はゆつくりと竹を手に入れる為に柳洞寺まで訪れた彼らに自分の名を語りはじめる。

「私の名は小次郎。農民の出だが、ここで刀の修行に明け暮れている変わり者よ。して、お主らは只者ではないな？ 物腰や格好を見ればすぐにわかる」

「ええー!! ほんとでござるかー!」

そう言つて、キリツとした表情でこちらを見ながら告げる小次郎と名乗る男に間髪入れずに応えるクーフリーン。

そして、それと同時に周りに漂う微妙な空気、小次郎も含め、その場にいたカタツシユ隊員達は無言で言葉を発したクーフリーンに視線を注ぐ。

「……ホントでござる。」

しかし、それを聞いた小次郎は悲しげな表情を浮かべながらそのセリフを発したクーパーリンに対しこう告げた。

「あ、それ、拙者のセリフでござる」

「しげちゃん、他の人のセリフ取ったら駄目だよ」

「あ、ごめん、なんか身体が勝手に反応してもうた」

「それはあんまりだぞ、私のゲイボルクを鍬にした時くらい酷いと思う」

そう言つて、小次郎の言葉に同調するように頷く二人、確かにセリフを取られては彼の立つ瀬がなくなる。

それは、あまりよろしくない、司会業をよくこなした経験があるヴラドが言うのだから間違いない。

スカサハに関してはそのゲイボルクを当初没収されクーパーリンから鍬にされて落ち込んでいた。

しかし、クーパーリンが知る限りでは、しばらくしてYARIOの活動である鍬やツルハシにしたゲイボルクを使うようになり、それを握っていた時は生き生きしていたよ

うにみえたが…。

「…そ、そこまで酷かったですかね！ 師匠しばらくしたら、あれノリノリで使ってたやないですか！」

「だって使いやすかったんだもん、仕方ないじゃないか」

「使いやすかったんだもんって…、貴女…」

普段聞けないような言葉を師匠から聞き苦笑いを浮かべるクーフリーン。確かにそうだ、手に馴染むものを使わないとやはり作業は捗らない。

あまりに使いやすいものだから、スカサハはあれはあれで気に入っている。元は自分の槍なのだから当たり前の話であるのだが。

「……………使い易さは、大事やね。」

仕事において、何よりも使いやすきは大事である、仕方ない。

何はともあれ、ひとまず、本来の目的はこの柳洞寺の石の階段の周りにある竹が頂けるかどうかだ。

すると、竹に関して、柳洞寺の小次郎さんからこんな情報が…。

「それなら、私が修行の為に切った竹がそこら中に倒れていると思うが……」

「え！ その切っちゃった竹って、もしかして、この後使ったりする予定とかあったりしますか？」

「いや、なかりうよ、いつもそのままにしておるからな」

そう言って、農民侍の小次郎さんは肩を竦めながら、刀の修行で切ってしまった竹についてヴラド達にそう告げた。

確かに柳洞寺の周りにこれだけ竹が生えていれば、刀の修行にはもってこいだろう。ならば、切ってしまった竹はそのままにしてしまうのも領ける。

だが、これだけ良い竹が切られたまま捨てられるのは非常にもったいない、それならば、我らがY A R I O が取る手段は1つだけだ。

「え！ その竹って捨てちゃうって事ですよね！ ……って事は僕らが頂いちやっても……」

「ああ、構わぬだろうよ、私は柳洞寺の僧侶とは仲が良くてな、ここをよく使わせてもらっておるのだ。倒れた竹など持って行っても問題なからう」

「リーダー！ ……これって……」

「セーフです」

「じゃあー！」

なんとヴラド、柳洞寺にて修行を積む謎の農民侍の小次郎さんとの交渉の末、上質な柳洞寺の竹をタダで手に入れる事に成功した。

これならば、何本か倒れた竹を半分に分けて切り『だん吉』に積みあげ持ち帰ることができるはずだ。

すると、ここでこの修行で切ってしまい、捨ててしまう予定の竹について小次郎さんから提案が…。

「この竹は結構重いだろうから、私も運ぶのを手伝おう、それに、この竹が何に使われるか少し興味が出た」

「えー！ ホンマですか！」

「いやー、助かるねー。それじゃ折角提供してもらったし、どうせなら完成品見てもらおうよー！」

「おー！ 名案やな！ 流石はヴラドやー！」

そう言つて、小次郎さんが刀で切り倒してしまつたという竹の回収をはじめめる我らがカタツシユ隊員達。

まずは、竹を運搬し易いように鋸などで分けていく作業を行わなければならない、さて、ここで活躍してくれたのがこの小次郎さんである。

持ち前の長い刀でスパスパと竹を運搬し易い大きさまで切り分けてくれた。切り分けてもらつた竹は柳洞寺のお坊さんから紐を分けて貰い、1つに括つてしまう。

「さて、それでは参ろうか」

「サーちゃん師匠大丈夫？ 重くない？」

「平気だ、これくらいならば後何百くらい軽く持てるな」

「頼もしい師匠やね、ほんまに」

クーフーリンは苦笑いを浮かべながら自信有り気に応えるスカサハにそう告げる。

こうして、我らがカタツシユ隊員達は謎の剣士小次郎さんと共に放置される予定だつた良質な竹をたくさん抱えて『だん吉』へ向かい歩きはじめる。

これだけの竹があれば、頓挫していた巨大弓矢作りにも大きな前進が見込めるだろう。

そして、フィニアンサイクルに残りヒルフオート作りを行うカルナ、デイルムツドにも進展が……!

カタツシユ隊員達は果たして幻の食材、猪の豚骨スープを手に入れることができるのか?

この続きは! 次回の鉄腕／f a t eで!

今日のY A R I O。

捨てられる上質な竹を手————NEW!!

農民侍小次郎さんが仲間に————NEW!!

農家のY A R I O————NEW!!

石橋ヒルフォート作り その2

無事、上質な柳洞寺の竹を手に入れたカタツシユ隊員達。

新たに協力してくれた小次郎さんを引き連れ、一同は再び『だん吉』に乗り、フィニアンスサイクルへと戻ってきた。

その柳洞寺周辺で採れた竹だが、確認してみると新たな事がわかった。それは…。

「頑丈だね、これ」

「いやー丈夫やねー、良い竹やな」

かなり頑丈で丈夫。これならば、巨大な弓矢の加工にも問題なく使えるはずだ。

竹を持って、魔猪の為のヒルフォートを作成しているカルナ達の元へとそれらを担いで運ぶクフリーン達。

その姿はまさに竹取物語に出てくる竹取の翁のようだ。ケルト神話の中にあるには明らかにシユールすぎる絵面がそこにはあった。

そして、ヒルフォートにたどり着いたクーフリーン達は作業を行うカルナ達の元へと足を進める。

「おー！　すごいやん！　めっちゃ良い感じになつとるやんか」

「あ、おかえりーりーダー！　ん？　もしかして」

竹を背負い戻ってきたクーフリーン達に手を振り出迎えるカルナ、すると、ここでクーフリーンとスカサハの他にも二人の男性の姿がある事に気付く。

それを察したデイルムツドもまたカルナ同様に彼らの元へとやってきた。

そして、先ほどまでヒルフォートの建築作業を行なっていた二人はヴラドから発せられた声を聞いてそれが確信へと変わる。

「やつほー！　兄ィ達！　久しぶりー！」

「えー！　マジかよー！　うわー！　お前髭ぼーぼーじゃん！」

「それリーダーからも言われたからね！　第一声がそれってどうなのよー！」

そう言いながら、ヴラドは苦笑いを浮かべつつ、声をかけてきた二人に親しく話し掛

ける。

仲間との久しぶりの再会の第一声が髭が濃いと言われれば顔も引きつってしまいうだろう。しかし、二人は嬉しそうにヴラドを迎えながら笑顔を浮かべていた。

やはり、メンバーとの再会ほど嬉しいものはない。もう会えないかもしれないと思つていた仲間にかうしてまた巡り会う事が出来た事が何よりも彼らには心にくるものがあった。

その証拠に笑つてはいるが、カルナもデイルムツドもうつすらとながら涙を浮かべている。

「……いやー、いかんね？ 笑顔で出迎えようつて思つてただけどき、やっぱりこう」

「やっぱりくるもんがあるよね」

「そっか、実は最近、俺も涙脆くなっちゃってさ……」

三人はちよつとだけ溢れ出た涙を手でぬぐいながら、鼻声になりつつそう告げる。

それを見ていた我らがリーダー、クーフーリンもまた、竹を背負つたまま熱くなる目頭を押さえていた。

つい、溢れそうになる涙を見せまいと指で目を押さえつける。

「あー、アカン…、あかんわー」

「ちよ！ リーダー何泣いてんだよ！ 馬鹿！」

「あーダメだわ、しげちゃん泣いちゃったら俺もつられそうになるから」

「よし！ みんな！ とりあえず一旦、竹をおろして深呼吸だ深呼吸」

カルナはパンパンと手を叩いて笑顔を浮かべたまま、そう告げる。

そうだ、まだ、メンバー全員が揃った訳ではない、こんなところで涙を流すのはまだ早いのだ。

まずは、目の前にある事、やるべき事をやらないといけない。

「とりあえず、そちらの方紹介してよ、しげちゃん」

「あ、せやったね、こちらは…」

「私は小次郎と申す者、何やら柳洞寺で採れた竹で面白い事をすると言いたもので見に来たのだが…」

小次郎は背に背負った竹を地面に下ろしつつ、先ほどまでヴラドとの再会を喜んでい

たカルナとティルムツドに自己紹介をする。

すると、二人は互いに頷くと力強く共に小次郎の手を握りしめて固い握手を交わした。

「それはわざわざ、ありがとうございます」

「僕らだけじゃ出来ない事とか勉強させてもらう事とかあると思うんでよろしくお願ひしますね」

「！…ああ、こちらこそよろしく頼む」

その彼らの手は長らく金槌などを扱い、豆だらけになった手だった。握りしめた手からそれがどれだけ尊いものかをすぐに小次郎は察する。

なるほど、確かに彼らは只者ではなかった。

間違いなく、常に向上し学ぶことの姿勢を止めることがない者達である。

固い握手を交わした小次郎はこの者達と握手を交わした瞬間に悟る。実に面白い者達と巡り会う事が出来たと、これも何かの縁なのだろう。

「…おー、これはまた立派なヒルフォートが出来上がりそうだな」

「あ、師匠、まだ途中なんですよね、これ」

カルナは恥ずかしそうに頭を掻きながら、ADフィン達が作業をしている傍でヒルフオートに触れるスカサハにそう告げた。

さて、このヒルフオート作りだが、まだまだ、手をつける箇所は数多くある。

ひとまず、弓矢作りはヴラド、ADフィン、小次郎さんの三人に任せ、我らがリーダー、クーフーリンとスカサハ師匠はこの石橋作りに加わる事にした。

「どこまでやつとる感じ?」

「一応、ビシヤンで石を整えたところまでかな」

「なるほどなあ、次取り掛かる作業はそれじゃ胴突きやね」

クーフーリンは建設中のヒルフオートをまつすぐ見据えたまま、カルナとデイルムツドに告げる。

そう、それはかれこれ十年以上前に福島県のある村で母屋の基礎固めをした時の事。その時に使ったのがこの胴突き。

この胴突きを使い、地盤を固める。既にこの胴突きでカルナ達は石を積み上げている

最中だが、また、新たな面積に石を積み上げるのならばこの胴突きを行う必要がある。
あの時学んだ建築の技術をケルト神話で活かす。

「そんじやまた胴突きで地盤固めますかね」

そこから、地道に地盤を固めていく作業が始まった。

クローリーンの掛け声と共に胴突きで地盤を固めて行くカタツシユ隊員達、ある程度、地盤が固まれば、あとは先ほどと同じく、ディルムツドが叩いた石を積み上げて着物を付けてヒルフォートを作りあげる。

しかし、この石の重さは80kgほどの重さ、持ち上げるにも大変な力がある。
これ運び、ヒルフォートの地盤に積んでいくのであるが。

「普通は櫓で輪石を釣り上げて積み上げるわけやけども」

「何をやってる？ こんなもの自力で持ち上げてこうすれば良いじゃないか」

「師匠、それ80kg以上軽くあるんですけど!？」

なんと、スカサハ師匠、この櫓で輪石を釣り上げる作業を無視し、素手で掴み上げる

と軽々しく持ち運び積み上げていった。

「……まさにガテン系女子。」

こんなのを女性であるスカサハから目の前で見せられては我らがリーダーやカルナ達も負けてはいられない。すぐに根性の元、石を自力で運ぶ作業を試みる事にした。

早速、大きな石に手をかけ、持ち上げるクーフーリン、しかし…？

「あ、アカン、これ腰やる、腰やるやつや」

「おつも！ あの人こんなの米俵みたいに軽々担いで運んでんの？」

「ひいー、ちよつと勘弁してよ」

「お前達、気合いが足らんぞ！ ケルトの男なら根性見せてみる！」

「あ、いや、俺はインドなんですが」

力作業で女に負ける訳にはいかないと息巻くところだが、その相手が我らがスカサハ師匠なら仕方ない。

それでも、カタツシユ隊員達はなんとか持ち前の根性と気合いを入れて、この重い80kgの石を運び積み上げていった。

心なしか生き生きしているスカサハ師匠、久方ぶりに鍛錬に似た事をできた気がする

と彼女は大喜びの様子である。

「……背中を見て、育つ。」

スカサハのそんな後ろ姿を見たカタツシユ隊員達は負けずに石を運んで積み上げていった。

本来の彼らの身体なら腰が砕けて動けなくなってしまうが、そこは流石は名だたる英雄といったところだろう。

「ひい、ひい…ちよい休憩、あー疲れた」

「とりあえずなんとか積み終えた感じ？」

「み、みたいやね…僕らもう本当なら40過ぎなんやで？ ほんまに」

積み上げた石のヒルフォートを見上げながら、クーフリーンは汗を拭い呟く。確かにこんな思い石を運ぶ作業なんてこの身体でなければぶっ壊れてしまうとこだ。

しかし、彼らよりもより多くの石を運んだスカサハは飄々とした表情を浮かべながら息を切らしている彼らにこう告げる。

「なんだ、私なんてそれ以上の月日を…」

「師匠、やめましょ？ 僕らの中では師匠は永遠の20代ですんで」
「そうそう、女性に年齢の話をさせるのはNGだからね」

それを言われてしまったては立つ瀬がない。そう思ったクーフーリンとカルナの二人は満面の笑みを浮かべたまま平気な表情を浮かべるスカサハに告げる。

「……女性の扱いは丁寧に。」

アイドル故の気遣い、自分たちの師匠なら尚のこと気遣って然るべきだというのはクーフーリン達の総意だ。

それにスカサハの場合は神霊の類に片足を突っ込んだ結果での事、そう考えれば、スカサハの年齢はなんの意味も持たない事を彼らはしつかりと理解している。

その言葉を聞いたスカサハは上機嫌にクスクスと笑いながらちよつとだけ照れ臭そうにこう話をしはじめる。

「む、そうか？ ふふふふ、本当に可愛げがある奴らだなお前達は」

「リーダーがそういう人だからね、自然とね」

「そうそう」

そう言いながら笑顔を浮かべてスカサハに応える二人。

リーダーとして纏めてくれた彼がいたからこそ今もこうして自分たちがいる。そして、スカサハや小次郎とも何かの縁で巡り会う事が出来たのだ。

スカサハは二人の言葉を聞いて確かにとそう感じた。彼女は優しい眼差しをクーフリーンに向けこう告げる。

「そうか、やはりお前が弟子でよかつたよ、しげちゃん」

「何言ってますか、僕も師匠が僕らの師匠で、ほんまによかつたですよ」

晴れやかな笑顔で互いに微笑む二人。

それはどこか清々しいものがあつた。影の国に訪れた彼を見た時はどうなる事かと思つたが、今は彼とその仲間たちといる事が非常に楽しい。

毎日毎日、死ぬ事を望んでいた筈なのに近頃は生きる事が楽しいとスカサハは日々、彼らと過ごす中でそう感じていた。

そんな中でスカサハは綺麗な瞳を閉じ、ゆっくりとこう語りはじめる。

「ふふ、そうだな、今じゃ…お前が私の中で…」

「あ、ちよつとちよつと、これこれ」

何かをスカサハが言いかけたところで、ここでクーフーリンは何かに気がついたようにヒルフォートに近寄るとジツというんなどに視線を向けていた。

そして、彼はある重要な事に気付く、そうこの石を積み上げて形にしたまでは良い、完璧だ、だが、しかし。

「ガバガバやな」

そう、石と石の間が空いており、空洞化しているところが目立ちガバガバであった。それを見ていたカルナとディルムツドは顔を見合わせる。

確かにクーフーリンが言う通りガバガバであった。これならば、もし、魔猪が突進してきたら崩れてしまうだろう。

だが、今回はそれ以上にガバガバなところがある、それは。

「しげちゃん、流石にガバガバ過ぎでしょ？」

「せやろー、これガバガバやん、補強せなあかね、なんかで」

どうにも会話が噛み合ってるようで噛み合っていない様子。

カルナは思わずそのクーフリーンの言葉に苦笑いを浮かべ顔を引きつらせる。しかし、リーダーの彼らしいといえれば彼らしい。

デイルムツドは笑いを溢しながら、優しく師匠の肩をポンと叩くとフォローするように彼女にこう告げた。

「まあ、らしいっちゃらしいけどね？ この人の場合雰囲気とかに流されちゃうタイプじゃないからさ、ね？ 師匠」

「これは私はどうすればいいのだ」

「本人には悪気は無いんですよ」

なんとも言えず、プルプルと顔を赤くして震えているスカサハにそう答えるしか無いデイルムツド。

雰囲気には流されないとこは確かに彼の魅力ではあるのだが、これには流石に二人も同情せざる得ない。

それから、クーフリーン達の作るヒルフォート作りは石を積み上げ、ガバガバになっ

た石の間の補強をする作業を行う事になった。

今日のY A R I O。

ガバガバなヒルフオトーーーーNEW!!

ガバガバなりダー。ooooooooNEW!!

ケルト神話で胴突きooooooooNEW!!

重量がある石を軽々持てる師匠ooooooooNEW!!

準備万端!

石橋ヒルフオート作りが捗る一方。

こちらはヴラド、ADフィン、小次郎さんによる巨大弓矢作りが始まっていた。まずは前回頓挫していた竹を用いた製法からだ。

竹の間にハゼの木の代わりにオークの木を使う。ヴラドは慣れない作業ながらも、製法通りのやり方で小次郎さんとADフィンと巨大弓矢を作り始める。

「うわあ、こんな感じだったっけ?」

「二応、ケルトでも弓作りは行われていてこのオークの木や他の木材で弓を作っていたようなので出来ないことは無いと思います」

「うむ、まさに和との調和よな、これはこれで風流がある」

まずは、スカサハ、または、クーフーリンからオークの木とザンザシの木をルーン魔術で強化してもらっておく。

そして、続けてこれらで出来た弓芯を2枚の弓竹で挟み、関板をつけて接着したものをロープで巻く。

クサビで締め付けながら、半円状に反りを付けて打ち上げ、張り台にかけた後、足で踏んで弓型を丁寧に整えていく。

しかし、この作業、弓矢の大きさからしても大変に手間取る作業であるが…。

「はあ、すごいな、ルーン！ 師匠流石だわー…」

「加工しやすいですね、これ」

意外にも、3人の作業は割と順調であった。

一度学んだ都城大弓の作り方、ここで忘れてしまつてはY A R I Oの名が廃るというもの、我らが優秀なカタツシユスタツフと手先が割と器用なヴラドが行えば…この通り、見事な巨大な弓矢の形が見えてくるまでに作業が進む。

——弓は生き物。

愛情を持って弓を育てていく気持ちで接すれば、必ず弓も応えてくれる。この大事な

事は伝統的な都城の弓職人達から学んだ大事なことだ。

生き物を扱うように繊細に。

続いて、弓に角度を付けるべく、さらにロープを巻き付け、竹との間にくさびを打ち込みながら巨大弓矢を途中から加わったフィオナ騎士団達と共に全員で気をつけながら曲げていく。

これも都城で学んだ、江戸時代から伝わる和弓作りの技術。

くさびを打ち込んで弓を曲げ、クセがつくまで、しばし待つ。

そして、4時間後、ロープを外せば…。

「いい感じで曲がってるー」

曲がった弓矢は綺麗な形でカーブを描いていた。これならば、なんら問題無い。

職人達から教わった技術を存分に使った宮崎県、都城市の伝統的な巨大弓の製法、身体と頭が覚えていたこれが今、ケルト神話で蘇る。

続いて、この巨大な弓の端から端へ弦を張るのだが、ここにも、江戸時代からの知恵が！

「曲がった側とは反対側に糸を張る」

つまり、クセをつけた弓を今度は強引に逆へと反らせ、その状態で弦をかけることで、より反発力が生まれる。

弓は巨大だが、弓の作り方は変わらない。ただし、全長6mにも及ぶその弓はやはり加工はそれなりに大変なものだ。

そして、弦の代わりは一番丈夫なスカサハ師匠、特製のルーンの魔術が施された糸。これならば、簡単に引き千切れることもないだろう、巨大弓矢の弦にと彼女が提供してくれたものだ。

「(弓は)一点ものだから無理して曲げんほうがいいですよ」

「同感だな」

「おーけいー!」

ADフィンと小次郎の忠告にそう言って応えるヴラド。

確かに2人の言う通りではあるのだが、しかし、限界まで反らせて糸をかけねば、強力な反発力は生まれない。

多少強引に、メキメキと軋ませながら、全員で徐々に巨大弓を逆方向へ曲げていく。それから何とか、全員で気をつけながら弓が折れることなく、弦を張ることに成功! こうして、巨大弓矢は適度なしなりを備えた。

あとは、巨大な弓矢を立てれば…。

「…ほあー、デカいねーやっぱり」

「全長6 mですからね、この弓」

「ふむ、まさか、提供した竹がこうなるとはな」

そびえる巨大な弓、全長6 mのその弓はしなりも良く、これならばきつと、猪を仕留められる筈だ。

あとは同じ要領でもう一個、巨大弓を作る。この巨大な矢に關してもクーフリーン達と話をしなければならぬだろう。

江戸時代から伝わる都城市の伝統的な巨大な弓矢を使って…幻の食材を手に入れる。

これならば、PRとしても申し分無い。出来上がる弓矢を前にヴラドは満足げな表情を浮かべてそれを見つめていた。

「うん、上出来だね。あとはヒルフオートと投石機だったっけ？」

「そうですね」

「なんと、お主達、まだ作る気か？」

A Dフィンとヴラドの会話を聞いていた小次郎は目を丸くする。

なんと、こんな巨大な弓矢を作ったにも関わらず、彼ら是对魔猪用の兵器をまだ作るうというのである。

しかし、材料は確かに余っていた。これを使わないという選択肢はY A R I Oには無い。

結局、巨大な弓をもう一つ作り、後はヒルフオートと投石機を作るのみといった具合になった。

ちなみに、そのヒルフオート作りはというと？

ヒルフオート作りはいよいよ大詰めに。叩きつける雨の中。いよいよ、完成に向け準備を進めていた。

「いやー、こんだけ木があれば色んなもの作れるよね」

「ほんとだよねー」

金槌を使い、カルナとクーパーリンはあるものを作っていた。

余った木材を使い、より利便よく、数多くの石ができるだけ運べるようにと2人が作ったのは…。

「壁石運び用の荷車、人力で運ぶのは大変やからこうやって荷車に乗つけて運んだ方が効率がいいと思う」

「そっだよね」

というのも、カタツシユ隊員達を作る石橋ヒルフォート作りもいよいよ大詰め。

ヒルフォートに壁石をたくさん積む段階に。

角張った石を積みめば、噛み合いずれにくいだけでなく、奥行きが長いほど安定して崩れにくい。

そこで、手頃な石を集めてきた。その角張った石の数はなんと数百個以上。

「あ、こんなのもいいね」

「あーいい感じやな」

「なるほど、こんな感じの石なのだな」

3人が集めた角張った石、そこから中に転がっていた場所から、3人は手作業で持ち運んできたのだが。

一つ一つ、手で運び、約300m以上ある距離を歩いて運ぶのは、効率が悪く限界を感じていた。

「資源を利用しないとね、やっぱり」

「昔の人はこうやって重いものを運んでたんやろうからな」

昔も昔、遙か昔のケルト神話の世界でそんな事を語るリーダークーフリーン。

確かに言葉は間違っではないものの、その発言はかなりシニールなものがある。ともあれ、古くから木材や石などの資源は運搬方法が多種多様に考えられてきた。

特に陸路が続く場所ではできるだけ数多くものを運ぼうと工夫が成され、今ではトラックや電車などにその形が変わっている。

それは、2人とも経験から知っていた。

「木材の車輪使うとは考えたねー」

「荷車だと車輪がよく転がるからね、クルクルって行って、しかも、この後も使えるしね」
「ほほう荷車で石を運ぶのか、というよりも私が投げて運んだ方が早いんじゃないか？」

確かにスカサハのいう言葉には説得力がある。

投げた方がこの場から離れずとも石を運べてしまうだろう、しかし、場所は300m以上離れた場所、そこで我々がリーダークーフリーンはスカサハにこう話しをした。

「師匠、そんな砲丸投げ選手みたいにしたら人に当たるかもしれないし危ないからですね、
む、そうか、ならば仕方ないな」

「投げるって発想、以前の僕らじゃなかったからね」
「確かに効率は良さそうなんですけどねー」

英雄故に、ここ最近、そんな発想が出来てしまう。

だが、それでは自分自身に進化がない、こうした局面に直面した時こそ初心を忘れずにコツコツとやる。

それがY A R I OがY A R I Oである為に必要な大事な事だと、クーパーリン達は思っていた。

「……初心は物作り。」

職人や色んな人達から学んだ知識を最大限に生かし、生活に反映させる。英雄の身体になつた今でも忘れない大事な心構えだ。

荷車に石を次々と乗せていく3人、その重量は軽く100kg以上はある。後はこの荷車を動かし、石を運ぶわけだが。

「リーダーとりあえず左右から押し出す感じで」

「オーケーオーケー」

「師匠は後ろから押し出す感じをお願いします」

「わかった」

この重量のある荷車を押し出し、石を運ぶには安定感がある。そこで、リーダーとカルナが左右から荷車を押し出す形で後ろからスカサハが荷車を押す。

そこで、安定感を保ち荷車をどんだん前に出していくようにする為、建設中のヒルフォートで待機していたデイルムツドを呼び、4人でこれを運ぶ事に…。

「せーの! そい!」

「おー、いい感じ! いい感じ!」

力を加え、動き出す荷車、左右とのバランスも取れて、これなら順調に石をヒルフォートまで運べそうだ。

下にある車輪はお手製。道が多少悪くても4人がかりならば、崩れる事なくこの石も無事に運べる筈だ。

目指すはヒルフォートの建設現場。と、ここでカルナある事に気付く。

「あ! 車輪やばそう!」

「え! まじ!」

荷車の車輪がバギバキと音を立てて軋みをあげていた。

流石に100kg以上ある石をこれだけ積んでいけば荷車とて、耐え難いものだろう、そして、運んでいる道も整備されている道なわけではない。

そして、4人が運んでいた荷車は。

「退避——！」

「ちよつとおお!?!」

横に倒壊し、運んでいた石がボトボトと横に溢れるようにして溢れてしまった。

これには、荷車を押していたスカサハも目を丸くする。順調に見えた荷車運びだったがまさかの荷車大破。

これには3人も顔を見合わせるしかなかった。

「石なくなっちゃったじゃん」

「なくなっちゃったね」

「まさかの大破だよ車輪」

「うむ、荷車が消えてしまったな」

まさかの展開に4人は思わず笑いが溢れてしまった。

石自体は地面に落ちていたので積み直せば問題無いのだが、それよりも、壊れた荷車の修理をどうするかだ。

そこで、リーダークーフリーン、壊れた荷車の車輪を見つめてこう話しをしはじめた。

「これ…ちよい横幅おつきくして車輪作らへんかな？ 横幅がちっさすぎたんやと思う」

それは、横幅を大きめに作るという提案。

それならば、確かに安定感が増し、先ほどのように車輪が壊れてしまう心配もなくなるかもしれない。

——リーベンジ運搬。

早速、カタツシユ隊員達は車輪の横幅を広げたものを荷車につけ、荷車に石を積み直す。と再び先ほどの配置で荷車を押ししてみる。すると…？

「あー、確かにブレないねさつきより」

「これならいけそうだな」

手ごたえを感じ、荷車を押すカルナとスカサハは口々にそう話した。

確かに先ほどまでよりも安定して、荷車は左右にブレずまっすぐに動きはじめてい

る。これならばきつと、ヒルフォートまで何事まで石を運搬できる筈だ。

それから、ヒルフォートに石を運ぶ為に荷車を使って往復する事、数回あまり。

角張った石がある程度積み上がった事を確認したカタツシユ隊員達は次の段階へと進む。

大量に持ってきた角張った石達、これを…。

「これをこの周りに積んでいきます」

「よっしゃー！」

木材で補強した箇所周りに積んでいく。

魔猪が突進してきてもビクともしない丈夫なヒルフォートにすべく、そのクレープリーの言葉に対してカルナの声にも思わず気合が入る。

重い角張った石を積み重ね、そして、目指すは…。

「お城の石垣みたいな感じね」

「なるほどな、同じ高さくらいでっ！」

それは、熊本城や名古屋城のような丈夫な石垣。

それならば、きつと、魔猪の突進にも耐えられる耐久性があるヒルフォートになり得る筈だ。それに…。

「ルーン魔術を織り交ぜながら、積むんだよね」

「私の出番か、ふふふ、任せておけ」

「お、師匠、生き生きしとるね!」

クーフーリンとスカサハが使う強化型のルーン魔術を石の一つ一つに織り交ぜながら、この石垣を作り上げていけば、その、ヒルフォートはより強固なものへと変わる。

そして、まずカタツシユ隊員達がこのヒルフォート作りの前にやる事は…。

「丁張りからやね」

「丁張り?」

「あ、師匠、丁張りっていうのはですね」

聞きなれないクーフーリンの言葉に首をかしげるスカサハに説明をしはじめるカル

ナ。

丁張り。

丁張り板を立て、高さをだす建物の位置を見る為に出す立体的な目標。その出来は建物の仕上がりに直結する。

鎌倉時代には行われており、区間整備の方法が語源とされている。線を貼り、丁を区分して、高さと言さすを出す。

それは福島で母屋を建てた時にも行われた。14年以上前での仕事だが…。

「おつ、こんな感じでええかな」

身体が覚えていた。

まずは、角石を積む幅の目標を立てていく、黙々と金槌を使って丁張りを立てていくカタツシユ隊員達。

それをスカサハは興味深そうに見つめていた。見たことの無い技術や考え方は彼女にとつても良い勉強となっていた。

金槌を使って丁張りを終えたカルナは汗を拭う。

「はい、オーケー」

「ほいで?」

そして、その間を手作りで作った荒縄で結んでいく。

全長はより大きめに取り、幅は2 m以上にもなるこのヒルフオート、この大ききならば、いくらデカイ猪でも破る事は容易くはない。

まずは、大きく、70 kg以上ある重量ある角石から積んでいく。

「よっこいしょ! …うっほほー! やっべー! 1人で持てたよこれ!」

「うそお! じゃあ、僕も…」

以前は3人がかりだった石も、英雄の身体は今なら1人で担いで持てるようになっていく。これならば、作業は手早く進む。

石を担いでテンションが上がるカルナに続けとばかりにクーパーリンとディルムツドもまた石を持ち上げてみる。

確かにさつきまで思い込みで重いつて持っていた石だが、この身体で持ってみると案外…。

「あ、ホンマや、全然軽く感じる」

「80kg以上あるよねこれ絶対」

新たな発見に驚くデイルムツドとクーフーリンの2人。

だが、驚いてばかりではいけない、そうと分かればバンバン持ち運んで石を積み上げれば早く作業も進む筈。

スカサハはいつものように涼しい顔で石を大量に担いでいるが、これならば、彼女に負けてはいられないとカタツシユ隊員達にも火がついた。

次から次へと石を運び、積み上げるカタツシユ隊員達。

「次は栗石やんな」

「確か隙間なくだったよね」

そして、ここでも、職人達の知識が生きる。

隙間なく敷き詰めた小さな栗石、これにより、横揺れを無くし、衝撃に強いヒルフォー
トが出来上がる。

さらに、壁の継ぎ目を複雑にする事で絡み易くし、そして…。

「こんな風にして勾配を作るんやね」

ここでも、以前、作り上げた石橋の知識が生きる。

クーフーリンが言う、勾配とは水平の積み方とは異なり斜角になるように石を積み上げていくという事。

水平に壁石を積んでしまうと、上からの衝撃に弱く、中の栗石が押し出され外側に崩れてしまう。

しかし、壁石を傾け、勾配をつければ内側へと衝撃を逃がすことができる。上からの衝撃にも栗石が押し出されて崩れる事もない。

それを意識しながら積み上げていくこと数時間余り、しっかりと積み上がったヒルフオートが4人の目の前にそびえ立つ。

勾配もすっかり取れており、これならば、ルーン魔術を織り交ぜながら積み上げたヒルフオートが魔猪にやられる心配もないだろう。

「さ、後は…」

「投石機と弓矢を設置して、エサ撒いて待つだけだね」

「なんだかワクワクしてきたな」

「師匠楽しそうやね〜」

完成したヒルフオートを前に目を輝かせているスカサハに思わずほっこりとするクーフーリン。

皆で力を合わせ、ついにこの石橋の知識を存分に活かしたヒルフオートで魔猪を迎え撃つ準備が着々と整いつつある。

さて、その出来栄えは果たして？

この続きは……！ 次回、鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

石を運ぶ荷車を作る—————NEW!!

石橋ヒルフオート完成—————NEW!!

巨大弓矢完成—————NEW!!

投石機作りに着手—————NEW!!

伝説食材その2。魔猪の豚骨

さて、石橋ヒルフォート、巨大弓矢も無事に作り終えた我らがカタツシユ隊員達。

次なる作る予定の物は投石機、別名『ローリングストーンズ』。

かつて、Y A R I Oのメンバー全員でこの投石機の建造に取り掛かりスタッフ達の手を借りて完成させた対攻城兵器だが…。

「俺たちには、敵が多い」

「ねえ？ それ、この間も言わなかったっけ？」

そう、皆さんは忘れていたと思うが、彼らロックバンド、それ故に敵も多い筈。

見えざる敵との決戦に備えたY A R I Oが誇る最終兵器なのである。これを作らずして、猪と戦えるはずがない。

そうと決まれば話は早い、巨大弓矢の隣スペースに投石機を作成する場所を確保

し、早速、彼らは作業に取り掛かる。
まずは…。

「いやーこれ握るの久々かもねー」

「あ、デイルは久々かあ、俺はしょっちゅうインドで握ってたけど」

鋸でオークやザンザシ、そして、余った木材を切り取っていく作業からだ。

久々に鋸を握るデイルムツドに笑顔で答えるカルナ。流星は棟梁、インドで磨かれた建築の腕前が光る。

鋸で木材を切り終えたところで、Y A R I O が作る投石機、『ローリングストーンズ』だが、元々は重い石を遙か遠くへ飛ばす兵器。

中世ヨーロッパでは、攻城戦の際、火の石で城壁を破壊した。それは、千四百年前の唐の国でも、動力の無い時代、縄や木材を使って作られた。

テコの原理を利用したこれならば、余った材料でも…。

「ここに石運んできて、バシーンって感じで」

「うむ、いいな、見晴らしも悪くない、これなら当たるはずだ」

スカサハ師匠、お墨付きの適正設置場所。

まずは土台を作り、投石機の足場を固めていく、慣れた作業だが今回退治する相手が相手だけにカタツシユ隊員達の手にも力が入る。

「待つてろよー、伝説の食材」

「もう魔猪つて事を既に忘れかけてるよね？ 俺たち」

金槌で土台を作るカルナに冷静に考えてツツコミを入れるヴラド、そう、ラーメン作りに必要な食材という認識でしかないが、相手は巨大な魔猪。

このルーン魔術を施しているとはいえ、ヒルフォートが果たして無事で済むのかも危うい相手だ。

しかし、カルナの隣で同じく土台作りに金槌を扱うデイルムツドは…。

「猪つて包丁で捌けんのかな？ 肉固そうじゃない？」

「いやー、いけるっしょ、だってデイルあの包丁すごそうじゃん」

「まさに、宝丁やな、なんちゃって」

いつも通り、リーダークーフリーンのつまらない親父ギャグが炸裂する中、一同は黙々と作業に没頭する。

「……宝具だけに、宝丁や。」

土台作りが進み、しつかりとした土台が出来上がったところで、デイルムツドとカルナが鋸で作った板を取り付ける。

「支点をどこにするかやね」

「このくらい?」

「コングラチュレーション!」

支点を決めたら、固定し、重さのある枕石を三本重りに取り付ける。この重さの反動で石が飛んでいくといった仕組みだ。

あとはこの枕石を板に張り付け、そして、その反対側には…。

「こうやって結びつけて」

手作りで作った丈夫な網を結びつけ、支え棒に枕石を置けば、いよいよ形が見えてきた。

支え棒を外せば、その重さの反動でしなり、石が魔猪目掛けて飛んでいく、これならば例えデカイ猪だろうとひととまりもない。

これを反対側の巨大弓の横にも取り付ける。それを遠目から眺める小次郎さんはその光景に思わず。

「うむ、小さきながら堅牢な城よな」

出来栄えに感心していた。

完成した石橋ヒルフォートと並ぶY A R I O特製の兵器達、これならば、例え魔猪だろうと倒してしまいうに違いない。

あとは、肝心の魔猪を迎え撃つだけだ、それには、まず、餌となる良質な穀物を大量に集め、ヒルフォートの前に畑を作りそこに撒く。

あとは良質な穀物をヒルフォートのすぐそばにある簡易に作られた倉庫にしまえば、魔猪が食べたくなるような食事場になる。

これならば…、魔猪も顔を出すに違いない。

後はここでキャンプで過ごししながら、魔猪の到着を待つばかりだ。
その間に…。

「ゲイボルクで矢を作りましょう」

「ついにきたか！ よし！ やるぞ！」

嬉しそうに笑顔を見せるスカサハと共に我らがリーダーダークフリーンは都城の巨大弓用の矢を作成しはじめる。

長さはゲイボルクの長さを考慮しながら木を削り、矢の形が歪にならないように調整する。矢が歪になれば飛ぶ方向も異なり外れてしまう可能性があるからだ。

ゲイボルクの長ささと矢の長さが合うように組み合わせ、後は羽根をつければ完成。

「名付けて都城ゲイボルクや！」

「名前がなんかシュールだね」

「早く撃つてみたいな！」

出来上がった矢を片手に笑顔を浮かべるクーフリーンに冷静に突っ込むヴラド、確か

にこの都城ゲイボルクという名前にはどこかシュールな違和感がある。

しかし、師匠であるスカサハはご満悦のようだった。出来上がった都城ゲイボルクを前に早く撃ちたいと心を躍らせていた。

そして、カタツシユ隊員達が伝説の食材、魔猪を待つ事数日。

「グルルルル…ブモォー！」

禍々しいオーラを醸し出しながら大きな魔猪がその姿を現した。

ゆっくりと石橋ヒルフオートの周りを旋回しながら味をしめたであろう穀物を食い荒らしに地面を闊歩している。

その眼は獐猛さが滲み出ており、普通の猪でないことはカタツシユ隊員達も一目見てわかった。

すぐさま、息を殺し、都城ゲイボルクを持って巨大弓へと向かうカタツシユ隊員達、そして、ADフィンや小次郎もまた投石機へ向かい猪を狩る準備が整う。

まずは、第1射目、都城ゲイボルクの弓を一人で引いてしまうスカサハはクーフリーンに肩車されて支えられながら的を夢中で穀物を漁る魔猪へと絞る。

そして…。

都城職人の死翔の槍矢
「都城……ゲイ……ボルク！」

都城ゲイボルクの第1射目が魔猪目掛けて飛んでいった。

石橋ヒルフオートから飛んでいった都城ゲイボルクはまっすぐに魔猪の横腹に飛んでいくと見事に命中！ 魔猪は痛みあまり咆哮を上げた。

それに続くように、都城ゲイボルクの第2射目を発射すべく。カルナとデイルムツドの二人がもう一つの巨大弓から魔猪を狙う。

「やべー！ 俺、そーいや弓矢やったことないや」

「心配するな！ とりあえず発射しろ！ 発射すればなんかしらんが心臓目掛けて飛んでいくはずだ！」

「師匠!! それちよつとアバウト過ぎじゃないですかね！」

都城ゲイボルクの第1射目を見事当てたスカサハはご満悦の様子で満面の笑みを浮かべながら二人にそう告げる。

同じく肩車しているデイルムツドは足を踏ん張らせながら、カルナが弓を引いて咆哮

を上げる魔猪にしつかりと的を定めるまで待つ。

そして、放たれた第2射目、都城ゲイボルクは魔猪にまつすぐ飛んでいくと？

「ピギア!? ブルル!」

見事に命中、これは堪らんと魔猪も怯んでしまい、足元がおぼつかなくなっている。

しかし、このまま魔猪も黙ってやられるわけにはいかない、魔猪はまつすぐ力強く直進すると石橋ヒルフォートに凄い勢いで突撃を敢行する。

だが、その魔猪の突撃だが…。

「やば! 突撃してきた! 退避!」

「ピギアアア!」

「あ、思ったより大丈夫やったね」

職人達の知恵と神業の石橋

丈夫な『石橋ヒルフォート』の頑丈さに突進を敢行した筈の魔猪の方が思わず怯んで

しまった。

職人達の知恵と力の結晶、このヒルフォートの頑丈さはスカサハが織り込んだルーン

魔術を含めて伊達ではない。

そして、仕上げには…、ついに、Y A R I O 最終兵器。『ローリングストーンズ』リーサルウェポン・オブ・ダッシュユが牙を剥く。

A D フィンと小次郎は合図と共に、ローリングストーンズの網に積み込まれた重いルーン魔術で補正された火石を支え棒を外し飛ばす。

ゴオ、という音と共に A D フィンと小次郎さんが発射した投石機リーサルウェポン・オブ・ダッシュユローリングストーンズの火石は巨大な魔猪に直撃し、魔猪はそのあまりの威力に身体が吹き飛んでしまった。

「ローリングストーンズすげえ…、俺らあんなの作ってたんだ」

「凄い音したよね、映画みたい」

その光景に思わず感心するカルナとディルムツド。

それから、都城弓矢とローリングストーンズを使って魔猪と戦うこと数十分あまり、ダメージを受けすぎた魔猪はふらふらと力なく地面に膝をつくと最後に凄まじい咆哮を上げて力尽きた。

それを見ていたクーフリーン達は少し悲しげな表情を浮かべながら力尽きる魔猪を

見届ける。

「なんだか、申し訳ない事しちゃったね…」

「可哀想やけれど、皆の生活の為やからね…、ちゃんとみんな手を合わせて供養してあげようや」

「…ごめんさい！ 魔猪さん！ 絶対！ 美味しい食材にして恩返しするからね！」

そう言って、魔猪が力つきるのを確認した一同はわざわざ石橋ヒルフォートから出て、皆で力尽きた魔猪に向かって手を合わせて殺生した事を詫びるように黙祷を捧げる。

スカサハは首を傾げながら、クーパーリン達の行動にひとまず同調するように亡くなった魔猪に手を合わせた。

致し方ないとはいえ、やはり、命を頂くのだからこうして手を合わせてご冥福を祈る事くらいはしてあげなくてはいけない。

YARIO達はこうして、魔猪の命を貰い受ける事にした。

兎にも角にも、こうして、第2の伝説の食材、魔猪の豚骨を手に入れる事が出来たわけだが…？

「いやー、でもおつきいね、牙とかさ」

「あ、牙って確か毒あるらしいよ毒」

「え?! マジで! この猪、毒牙とか持ってるの!?!」

「あ、とりあえず荷車に積んでアルムの砦の貯蔵庫に運ぼうや、腐らんようにしとかなあかんし」

一同はこの猪をひとまず、アルムの砦に持ち帰る事にした。

確かに腐ってからだだと、美味しい豚骨スープは取れなくなってしまう。早めに捌いて形にして豚骨スープに使えるようにしとかなくてはいけないだろう。

こうして、第1の幻の食材、霊草と第2の食材、魔猪の豚骨を無事に手に入れる事に成功したY A R I O一同。

さて、この魔猪が一体どのような料理や食材となってしまうのか?

そして、残りの仲間の一人の行方は?

まだまだ、見どころがたくさん! この続きは、次回! 鉄腕 / fateで!

今日のY A R I O。

投石機で魔猪を撃退――――NEW!!
都城ゲイボルク――――NEW!!
幻の食材ゲット――――NEW!!
魔猪に突進されても平気な石橋作り――NEW!!
スカサハ師匠ご満悦――――NEW!!
投石機が知らぬ間に宝具になる――――NEW!!
石橋作りが知らぬ間に宝具になる――――NEW!!
都城の大弓が知らぬ間に宝具になる――NEW!!

0 円卓の食堂編

天空の花嫁

前回の鉄腕／f a t eでは無事に幻の食材、魔猪を狩ることに成功したクーフリーン達。

前回、巨大弓矢と石橋ヒルフォート、ローリングストーンズで見事に倒した魔猪の死体は一旦、低温で保存が効く貯蔵庫へと運び、霊草と共に無事に保管した。

これで、深淵の霊草と合わせ、二つの伝説の食材を手に入れた訳だが、ここで彼らにはある事について未だスツキリしないでした。

それは…。

「やっぱり未っ子いないと俺ら締まんないよね」

「ボーカルがないとなあ」

そう、我らがY A R I Oのボーカルが現在不在である事だ。

幻の食材、魔猪を倒した今、新たな伝説の食材を手に入れ、Y A R I Oメンバーの再結成するというミツシヨン。

これをクーフリーン達はこなさなければならぬ、次なる幻の食材の目処が立たない今、優先すべきは我々がY A R I Oのボーカルの回収となる。

「行きますか、迎えに」

「せやねー、師匠それでええかな？」

「ああ、私は構わんよ」

「A Dフィンと小次郎さんは？」

「自分もそのつもりでしたから」

「大丈夫だ、問題ない」

メンバー全員の総意は一致した。

寂しくはなるが、フィニアンサイクルから末っ子の回収にだん吉で異世界に向かうことになる。

とはいえ、食材はこのフィニアンサイクルのアルム砦の近くにある冷凍保存が効く地下洞窟の貯蔵庫に保管してある為、いずれは戻ってくるのだが、しばらくの間はこの場

所とはお別れだ。

ひとまず、だん吉で世界を越えて残りのY A R I Oメンバーを探しに行く事に決まったが……ここである問題が。

「だん吉、五人乗りなんよね」

「あー、じゃあ往復して移動すればいいんじゃないか？」

「これも不便だよねー、今度、なんか考えようか」

そう、だん吉は五人乗りなのである。

これでは全員乗る事は出来ない、仕方ないのでスカサハのいう通り今回は往復して移動する事になるがこれはこれで手間がかかる。

この改善点もいずれは解消していかなくてはならないだろう。少なくとも伝説の食材や大量の物を運ぶには大きさが足りなくなってくる。

前に竹を運んだ際は、小次郎さんが竹をコンパクトにしてくれたおかげで荷台にも詰めたが、今度からはそうはいかなくなるに違いない。

「それじゃ運転は僕と……」

「……………」

「いや、師匠、そんな目を向けられても…」

そこで、往復する運転手を決めるクーフーリンだが、その言葉を待つてましたと言わんばかりにスカサハはジッと彼の顔を見つめていた。

だん吉を運転したくて仕方がない、そう言わんばかりの無言の訴え、そんな彼女の視線からクーフーリンは視線を逸らすが暫くして根負けしたのか、ため息を吐いてこう告げはじめた。

「もー、仕方ない子やねー！ お母さん今回だけ許したげる！ しっかり頑張らなあかんでー！」

「あ、久々のオカンフーリンだ」

「!?…ほんとか！ よし！ 任せておけ！」

ふんす！ と胸にトンと自信ありげに拳を置いてオカンになったクーフーリンに告げるスカサハ。

その光景にデイルムツドは思わず微笑ましく笑みを浮かべていた。久しぶりのオカ

ンクローフリーンの姿になんだか一同も懐かしさを感じる。

さて、こうして、次の行き先は最後の仲間がいるであろう世界。そして、ついでにできればラーメンに必要な材料もそこで手に入れたい。

「さーみんな、だん吉に乗るぞー」

異世界に渡る為、すぐにだん吉に乗り込む彼らはいつものように火花を散らしてお世話になったフィニアンサイクルを後にする。

果たして、最後の仲間がいる世界はどんな世界なのか？

英国、大昔のブリテン島。

今もなお知名度の高い英雄譚として語り継がれているアーサー王の聖剣の物語。

その物語にはアーサー王に仕えた精鋭の騎士たち。各々魔法の円卓に席を持つ円卓の騎士達がいる。

その中に登場する円卓の騎士の一人でエクスカリバーを湖の貴婦人に返還した人物として知られる者が居た。

古くからアーサー王伝説に登場し、巨人王イスバザデンが使っていた巨大すぎる槍を

投げ返した逸話を持つ。

さて、そんな彼だが、現在。

「ニンゲン…カエレ…」

「いや何やってんの？」

完全に野生に放たれた完全なゴリラ状態で近くに生い茂る森の中にある小屋の側で木の上に登っているところをだん吉から降りたY A R I O達から発見される事になった。

彼の名はベディヴィエール、Y A R I O最後のメンバーにして、ボーカルを務めている末っ子だ。

そんな彼が居たのはなんとアーサー王がいるお城ではなく山にある質素な小屋である。円卓の騎士と名高い彼が何故こんなところに…。

「ポケ○ンのトレーナーって多分こんな感覚なんやろうね」

「野生のベディが現れた！ みたいなの？」

「おーい降りておいでー」

まるで、生い茂る木々が重なりもの○け姫の様な場所、そんな場所で野生化した仲間がいれば見過ごすわけにはいかない。

YARIOのメンバーの呼びかけに応じて、スルスルと木から降りてくる円卓の騎士が一人、ベデイヴィエール。

そして、リーダーやカルナ達の姿を見た彼は涙を流しながらすぐさま駆け寄ってきた。

「ぐすつ……！ うああああ！ リーダアア！ みんなあー」

「お、おう、……なんかわからんけどお帰りやな」

「泣きすぎだつてば」

そう言いながら、泣きつくベデイヴィエールの背中をポンポンと叩いてやるクーフリーン。

どうやら、彼もまたこのブリテン島で苦労を重ねていたらしい。そして、気になるのはどうしてここに彼が居たのかという事だ。

皆との感動の再会を済ませた後、クーフリーンはベデイヴィエールに師匠であるスカ

サハを紹介した。

「こいつらの師匠のスカサハだ。今日からはお前の師匠になる。よろしくな」
「うわっ！ リーダー！ この人めっちゃべっぴんさんじゃん！ しかも、おっばいめっちゃデカいし！」

そう言いながら、たゆんと弾む豊満なスカサハの胸部に対して目を丸くしながら告げるとベディヴィエール。

すると、スカサハは首を傾げ笑顔を浮かべたままベディヴィエールの肩をポンと叩くと、サムズアップをしてこう告げる。

「ん？ 心配するな。胸なぞ鍛えていればそのうちお主も大きくなるぞ」

「師匠、それ多分おっばいやなくて大胸筋やで」

冷静なクローリンの突っ込みが冴え渡る。本来なら彼もボケる立場なのだが、自身のおっばいに関して爽やかな笑顔を浮かべ告げるスカサハ師匠に今回は流石に彼も突っ込みを入れざる得なかった。

——胸が無念。

確かにスカサハが言うように大胸筋を鍛えれば胸は大きくなるだろう。多分、それは硬い筋肉ほうになるのだろうが…。

「すげー！ みんなこんな美人の弟子なんだ！」

「今日からはお前も私の弟子だ」

「えー！ほんとですか！ めっちゃ嬉しい！ アキオさん思い出すなあ」

「やっぱりみんな思い出すよねー」

それは、昔。まだ、皆が農業に関して知識が足りなかった頃。

福島村のお世話になった師匠、そして、その師匠の愛犬だった柴犬。

彼らは間違いなく自分達の仲間であり、今でも敬うべき相手、自分達がここでこうして今でも農業が出来ているのも彼の教えがあったからこそだ。

彼から学んだ農業の知恵、そして、受け継いだ業は今でも彼らの中に生き続けている。そんな受け継いだ彼らがこうして再び集まる事が出来たのも自分達の師匠であった彼が背中を押してくれたからに違いない。

時には諦めそうにもなった。自分達の時代で英雄らしく一生を終えようかと挫けそ

うにもなった。

けれど、彼らは…。

「…リーダーのお陰だよなこうして俺たちがまた会えたのも」

「生まれ変わっても、やっぱりこうして俺たちは集まるんだな…やべ…涙出てきたわ」

「…あー、せやなあ…ホンマにお前ら大好きやわ」

苦楽を共にする仲間にも再び出会い、こうして結集する事が出来た事にメンバーの目からは涙が溢れ落ちる。

見えない強い絆で結ばれた五人。そんな五人は涙を流しながら、再び会えた事に感謝しADフィンを含めて抱き合い、喜びを分かち合う。

そんな彼らの姿を見ていたスカサハは笑みを浮かべ暖かい眼差しで見守り、小次郎さんもまた瞳を閉じ静かに頷きながら笑みを浮かべていた。

そして、彼らは…。

「よっしゃ！ せっかく五人揃ったし久々に本業やるか！」

「ん？ 本業？ あ、あれか！」

「いや、本業忘れちゃダメでしょ、リーダー。俺たちYARIOだよ?」

そう言いながら、笑顔を浮かべて笑いを溢す五人。

懐かしい感覚、五人がこうして揃った事で胸の中にポツカリと空いた穴が塞がった。

…とここで、クーフーリン。話題を変え何故、ベデイヴェールがこんな山の中の小屋にいたのかについて訪ねることに。

「そーいや、お前なんでこんな山奥におったん?」

「あー…それね! それなんだけどね…」

そう言いながら、YARIOのリーダー、クーフーリンの問いに答えはじめるとベデイヴェール。

それは、数日前の出来事に遡る。

ある日、円卓の騎士達はアーサー王を含めてある話をしていた。

それは、元々、とベデイヴェールが振った話題でとある勇者の結婚相手についての話であった。

幼少期と青年期を共にした金髪に青い瞳の可愛い幼馴染の村娘と、富豪の娘で、おし

とやかで心優しい可愛いお嬢様どちらを選ぶのかという話題であった。

早い話がなんとこの円卓の騎士の会議の場で、ベデイヴィエールはドラクエの話を振ったのである。

そこで、円卓の騎士達とアーサー王が答えたのが…。

『私はフローラですね、品がありそうだ』

『王がそう仰るなら私も』

『あ、それでは私もフローラで』

『嘘だ！ ビアンカだろ！』

という理由で円卓の騎士の大半がフローラ派に占拠され、ベデイヴィエールは円卓の騎士でありながらわざわざ森の小屋まで泣き寝入りに逃亡したという経緯だった。

確かに王であるアーサー王がフローラ派と言えば従者である円卓の騎士達は従うしかない。

そうなれば肩身が狭くなったビアンカ派のベデイヴィエールが泣いて逃亡するのもなんとなくわかる。

——王にはビアンカの気持ちかわからない

というわけで、ベディヴィエール、円卓の騎士から絶賛逃亡中という訳である。これにはクーフリーン達も思わず頭を抱えてしまった。

「相変わらずアホやなあ…」

「だって！ フローラ派だよ！」

「いやいやいや、なんでドラクエの話題出してんのよ」

そう言いながら、カルナも苦笑いを浮かべて目を見開いて訴えるベディヴィエールに顔をひきつらせる。

一方、スカサハ師匠とディルムツドは絶賛大爆笑中だった。どこの世界に勇者の結婚相手が村娘派か富豪の娘派で逃亡する英雄がいるのか。

なんと目の前にいた。しかも、先ほどまでゴリラ状態で木に登り木の実をとっていたのでこれまたびつくりである。

「しゃあないなー、こうなったら、ちよつとその王様に会いに行かないかね」

「世話が焼けんねーもう」

そう言いながら、笑みを浮かべる一同。

こうして、Y A R I O 達の行き先は円卓の騎士達がいるであろうアーサー王の居城、キヤメロット城へ赴く事になった。

あわよくば、彼らから新たな伝説の食材についての情報を得られるかもしれない。

最後の仲間、ベデイヴィエールを仲間に迎えたY A R I O 一行はだん吉と近くの村で馬を借りキヤメロット城へ。

果たして、彼らを待ち受ける新たな挑戦とは？

この続きは次回！ 鉄腕／f a t e で！

アーサー王、フローラ派————NEW!!

円卓の騎士フローラ派になる————NEW!!

本業を思い出すY A R I O————NEW!!

Y A R I O! ついに集結!————NEW!!

Y A R I O ブリテン島上陸————NEW!!

アンビシヤス！

さて、前回の鉄腕／＼f a t eでアーサー王に会うべくキャメロット城まで移動したY A R I O一同。

そんな彼らは今、ベデイにより円卓の騎士達とアーサー王と顔合わせをする為に謁見の間にて面会を行っていた。

玉座に座るのは幼さを感じるも、まごうことなき王の気質を兼ね備えたアーサー王の姿がある。

そして、アーサー王の周りには王に付き従う円卓の騎士達が控えており、品定めするかのようにベデイとY A R I O達に視線を送っていた。

アーサー王は帰還したベデイヴィエールに連れてきた者達について、こう語り始める。

「よく戻ってくれたベデイ。先日の方は…その、すまなかつたな…して、そちらの者達は？」

「よくぞ聞いてくれました！アーサー王！」

そう言つて、膝をついていたベティは勢いよくその場から立ち上がると目をキラキラと輝かせてアーサー王に告げる。

すると、急なベディヴィエールの反応に円卓の騎士達は身構えた。

もしかして、前回の一件でベティヴィエールが叛旗を翻しこの者達を使つてアーサー王を倒しにきたのではないかという疑念があつたからだ。

しかし、ベディヴィエールは謁見の間において、キレの良いポーズを決めるとキリッとした表情を浮かべてアーサー王と円卓の騎士達に向かいこう告げる。

「太陽剣士！ベディヴィエール！」

「!？」

思わず身構えた円卓の騎士達はポカンとしていた。

そして、そのベディのポーズと名乗りを聞き、膝をついていたYARRIOのメンバーも自己紹介を兼ねて、その場から立ち上がるとベティのように次々とポーズを決めると名乗りを上げはじめる。

「激烈騎士！デイルムツド！」

「!!!」

なにか、カツコイイポーズを次々と決めるY A R I O達にビクリ！と身体を硬直させて反応する円卓の騎士達。

しかし、何だかわからないが妙にカツコよかった。それを見ていた円卓の騎士の一部の中からは『おお！』と感心するように声もあがる。

まるでヒーローの名乗りのようなシニールさがあった。それを間近で目撃したスカサハも思わず目をキラキラさせている。

「冒険勇士！カルナ！」

「…そのポーズは何か果たして関係が…」

「いや、我が王、あれは名高い英雄達に違いありません！」

そのポーズと名乗りを挙げているY A R I O達の姿に思わず、全身を甲冑に身を包んだ円卓の騎士の一人が興奮気味にアーサー王に告げる。

ポーズ自体は特に意味はない、ただ単にかっこよく名乗りを挙げたいだけに単純に彼らが勝手にやっているだけである。

「博愛勇者ヴラドン！」

「!!?」

なんだか、かなりシユールな光景がそこにはあった。

変な立ち絵でポーズ取りながら名乗りを挙げるY A R I O達にアーサー王も円卓の騎士もなんとも言えない表情を浮かべるしかない。

「友愛戦士！クーフリーン！」

「五人揃って！」

「英雄戦隊！Y A R I O!!」

バーン！ という音と共にかっこよくアーサー王と円卓の騎士達に自己紹介を簡潔に述べる我らがY A R I Oメンバー達。

なんだか知らないが、妙にカッコいいその名乗りにポカンとしてしまうアーサー王と

円卓の騎士達。

A Dフィンと小次郎とスカサハは拍手を送りながら納得したように頷いているが、明らかにいろいろとおかしかった。

五人は決まったとばかりにハイタッチを交わしている。何も特段決まった訳ではない、ただ単にアーサー王と円卓の騎士達に名乗っただけである。

そこで、円卓の騎士の一人、ガウエインはY A R R I Oメンバーの名乗りを聞いて思わず気がついた事を話しはじめた。

「ちよつと待ちなさい、ベデイ。太陽の騎士は私の名称ではありませんか」

「だから俺は！太陽剣士！」

「いやいやいや、そうじゃなくてですね、被ってるじゃないですか！」

「ガウエイン！ 突っ込むところはそこじゃないでしょう！」

ベデイの太陽剣士という名前に思わず声を挙げるガウエインを制するようにベデイの友人である赤い髪の騎士、トリスタンが思わず声を挙げた。

確かに重要なのはそこではない、重要なのは彼らが名乗った名前だ。

クーフリーンと聞けば、円卓の騎士の者達にも聞き覚えがある英雄だ。それも、ブリ

テンの隣の国アイルランドの大英雄である。

何故そんな伝承に記された英雄がここにいるのかの方が重要な事柄であった。

「あ、ちなみに僕らのA Dのフィン・マックールとスカサハ師匠、農業スタッフの小次郎さんです」

「どもっ!」

「うむ、こいつらの師匠のスカサハだ。影の国を治めさせてもらっている」
「農業スタッフの小次郎だ。お初にお目にかかる」

そう言って簡単な自己紹介でさらりとY A R I Oメンバーをアーサー王と円卓の騎士達に紹介するクーパーリン。

王の御前だというのに無礼だとかそう言った類でなく、なんだかもう呆気に取られるばかりだ。

クーパーリンはサラツと自己紹介をしたがスカサハは影の国の女王だ。それに、A Dフィンはあの伝承逃げあるフィオナ騎士団の騎士団長だ。

あまりに面子が面子だけにもうなんとやっていいかわからない、ベティヴィエールが何故彼らを連れてこれたのかも不明だ。

そのことも相まって、なんだか、円卓の騎士達は頭が痛くなってきた。一部の騎士は名乗りを上げた彼らに目をキラキラさせている。

「…クーフリーンに…スカサハだと?」

「あ、これゲイボルクです」

「…鍬ではないか!」

声をあげてクーフリーンが提示する鍬になったゲイボルクに突っ込みを入れる円卓の騎士が一人、白銀の甲冑を纏った騎士湖の騎士、ランスロット卿。

確かに言われてみればそうだ。鍬を見せられてこれが名高いゲイボルクですよと言われてハイそうですかとなるわけがない。

そこで…。

「あ、これ、こうしてやな…こうしたら、先端が取れるんやで」

「嘘オ!」

なんと、先端の金具を外せば、鍬が槍になった。

それを目の当たりにした全身に鎧を身にまとう円卓の騎士が一人、アーサー王の息子であるモードレッドはまさかの展開にびっくり仰天する。

確かにみれば、言われる通り朱色の魔槍だ。

しばらくして、円卓の騎士達にゲイボルクを見せたクーフリーンは金具を取り付け再びゲイボルクを鍔にした。

そして、それに続くようにスカサハは…。

「ゲイボルクならたくさんあるぞ? ほら」

「いや、もう大丈夫だ。なんだか頭が痛くなってきた…」

「大丈夫か? アグラヴェイン卿」

そう言って、頭を抑える険しい顔立ちの、真つ黒な鎧を来た偉丈夫のアグラヴェイン卿を気にかけるように声をかけるアーサー王。

目の前に鍔やツルハシなんかにもなった宝具がたくさん、これを見れば頭も痛くなつてくるというもの。

挙げ句の果てに包丁になった宝具まで、これには、もはや言葉が出ない。

「と、とりあえず名高い英雄の方々。遠路はるばるようこそブリテンへ、大したもてなしはできないかもしれないがゆっくりしてゆっくりしてくれ」

「あ、お気遣いどうもです」

「アーサー王、という訳でピアンカ派の俺は円卓の騎士を抜けてYARRIOになります」

「円卓の騎士を抜けるだど！ 何を言ってるのかわかってるのか!?!」

「うん、だつて元々、俺、YARRIOだし」

ガウエインの言葉に頷き、何事もないように告げるベディヴィエール、これには周りも騒然とした。

ベティヴィエール本人は円卓の騎士をもう辞める算段らしい、それを聞いていたアーサー王と円卓の騎士達は頭を抱える。

ハイわかりましたと円卓の騎士を簡単に辞めさせるわけにもいかない、しかし、本人がそう言い出した以上はその意思は固いだろう。

アーサー王はしばらく思索した後、ゆっくりと口を開くとベディヴィエールにこう告げた。

「わかった……。しばらく暇を与えよう」

「王!？」

「ベディヴィエールがこう言っているのだ。しばらく考える時間を与えるべきだろう、それに、見たところ腕前に自信があるであろう英雄達が側にいる、心配は不要だ」

そう言つて、アーサー王は寛大な心でベディヴィエールの出奔を認める事にした。

腕前に自信があるとは言つても料理だとか農業だとかの腕になる。戦闘経験はあの魔猪狩りだけで、スカサハとフィン以外はあとはほとんど無いに等しい。

それに、ベディ本人が選んだ事を捻じ曲げて忠義を尽くせと言つたところでそれは束縛でしかない、アーサー王としては彼の居場所が円卓の騎士ではなく違う場所だったという事だと納得している。

こうして、正式にY A R I Oとして復帰する事になったベディヴィエール。彼らの側にいるならばアーサー王に弓を引くことは無い筈だ。

「それじゃ僕らもしばらくこちらでお世話になります。それでお礼と言つてはなんですけど」

「ん? なんですか…これ?」

すると、クーフリーンは首をかしげるアーサー王を前にして笑みを浮かべるとある紙を王の側に立つそつとガウエインに手渡した。

その紙には、なんと、ブリテンの城下町で歌うという宣伝用の紙であった。

そう、ようやくここに来て、Y A R R I O 達は五人揃った事を祝して、ブリテンの街で本業をしようという訳である。

「……って訳で僕等、この街で演奏したいんですけど、ええですかね？」

「ほほう、これはまた興味深い催しだな、よし、いいだろう。許可しよう」

「ほんまですか!?! いやあ、助かりました!」

そう言って、許可を出してくれたアーサー王の言葉に嬉しそうに微笑むクーフリーン。

ようやく、久しぶりの本業である。久々という事もあつてカタツシユ隊員達のテンションもだだ上がりだ。

そうと決まれば話は早い、楽器をブリテンに持ち込み早速、歌う場所を確保しなければ。

「何故がトントン拍子に話が進んでますが、この人達は大丈夫なんでしょうか？」
「大丈夫さ、考えすぎだ。ベデイヴィエールの友人達だ。間違っても問題は起きないだろう。奴の人柄はお前も知ってるだろ？」

円卓の騎士の一人であるモードレッド卿は不安げな表情を浮かべているトリスタンの肩をポンと叩きそう告げる。

それに型破りな彼らがなんとなく、モードレッド卿は気に入っていた。

ベデイヴィエールは前から面白い奴だとは思ってはいたがこうもあつさり円卓の騎士を辞めるあたり、やはり思った通り面白い人間であった。

彼の仲間も仲間で武器を農具にするなど、面白すぎる。あのアグラヴェイン卿が頭を抱える姿など見たのは彼女も初めてだった。

それから、しばらくして、楽器を寄せ集めてブリテンの城下町に降りたYARRIO達は久々に握る楽器を手に晴れやかな笑顔を浮かべていた。

旅をし、仲間達を集め、新たな出会いをしながら冒険をする彼ら。

そんな彼らが歌うのは、やはり、それを思い起こさせてくれた曲だ。

ルーン魔術を施した手作りギターを握るリーダークーフリーンは何がはじまるんだと集まってきたカメラロット城の城下町の人達を見渡しながら笑顔を浮かべる。

———全ての職人と出会いに感謝。

そして、デイルムツドが頷くと、ドラムをパン！と叩いてリズムを取り始め、カルナとクーパーリンがベースとギターで合わせて、キーボードのヴラドがそれに続き、曲が流れはじめる。

スカサハがルーン魔術を施し、音響が響くマイクを握るベディヴィエールはそれに合わせて曲を歌い始めた。

「未来に向かってまっしぐら〜♪」

いつも、五人揃って演奏し、歌っていた曲を噛み締めながら徐々に声を出すベディヴィエール。

それを聞いていたブリテンの城下町の人達からは手拍子が巻き起こる。皆さんは鍬や建築物を作る彼らを見慣れているかもしれないが、彼らの本業であり本来やるべき事なのである。

そして、極め付けは裏返る我らがリーダーの声高な声。

彼らの歌を遠目から聞いていたアーサー王と円卓の騎士達はそれを聞きながら思わず目を丸くする。

先ほどまで、顔も知らない他所者の筈だったY A R I Oの者達がブリテンの人々に受け入れられているその光景に。

彼らの全てのきつかけは逢いたい人に会いに行くため、その為だ。

盛り上がりを見せるブリテンの城下町、そんな五人の姿を見つめるスカサハは五人の奏でる曲に耳を傾けながら瞳を瞑る。

(よかつたな…、クーフリーン)

彼らが集まる事を望んでいたリーダーであるクーフリーン。

彼の願いが叶った事がこの旅をしてきて一番の収穫だった。時を越えてフィニアンスサイクルへ行き、インドへ行き、ルーマニアへ行き、日本へ行き、そして、今度は隣の国であるブリテン島へ。

長い旅路の中で、伝説の食材を探し、ラーメンを作る為に魔猪とも戦った。石橋作りの知識を活かしたヒルフォートも作った。

しかし、彼らの旅路は今ようやくスタート地点に立ったばかりだ。

これから、様々な挑戦が彼らを待ち受けるに違いない。果たして、このブリテン島で彼らは何を残して行くのか見届けよう。

彼らの師匠として、名を上げたスカサハは改めてそう心に決めたのだった。

今日のYARIO。

英雄戦隊になる————NEW!!

ベディ暇を貰う————NEW!!

鍬が槍にできる————NEW!!

ブリテンの城下町で本業————NEW!!

モーさんYARIOがお気に入り————NEW!!

新企画スタート!

さて、前回の鉄腕／f a t eでアーサー王に面会し、キャメロット城の城下で久々の本業をしたY A R I O。

懐かしい曲を楽器を握りしめて熱唱した彼らであったが、現在、ブリテンから遠く離れた土地に来ていた。

この場所には人が一人もおらず、土地が荒れるだけ荒れ放題。あまり、土地的にも豊かとは言いがたく、未開拓地である事がわかる。

そして、そんな荒れ果てたブリテンから遠く離れた土地に哀愁漂う背中のがりーダー、クーフリーンとインドの棟梁カルナの姿が…。

一体何をしているのだろうか? よく見てみると。

「いやー、久々の鋏だな」

「この間は 俺達 楽器持ってたからなー」

「こっちの方が落ち着くな」

二人とも手に鍬を持ち土を耕していた。

その手並みは慣れたもの、やはり、しばらく鍬を使う事から離れていても身体が覚えていた。

「……楽器を持つよりやはり鍬。

何故、この二人がこんなブリテンから遠く離れた荒れ果てた土地を訪れ、鍬を握りしめて土地を耕しているのか？

というのも、それは数日前の出来事に遡る。

伝説のラーメンの食材を手に入れる為に会議をしていたY A R I O達。そんな彼らはキャメロット城の一室を借りて会議を開いていた。

霊草に魔猪の豚骨スープは手に入れた。次なる食材の目処をつけて次なる活動をどうするかを決めるための会議だ。

とそこへ…。

「えー、皆さん、ラーメン作りの会議の方は順調でしょうか？」

「おー！ ADフィンじゃん！ どうしたの？」

「実は、ブリテン島を訪れた皆さんに挑戦して貰いたい事がありました」

カタツシユ隊員達が借りている一室に突如、隣の部屋に居たADフィンと小次郎が来訪し、新たな企画について彼らに相談を持ちかけてきたのである。

ADフィンが言うその相談というのが、実はカタツシユ隊員達がこのブリテン島で挑戦する企画についての概要だ。

そして、ADフィンからY A R I O達に告げられた挑戦というのがこちらである。

「今回、カタツシユ隊員の皆さんは…このブリテンを治めている王様をご存知ですよね？」

「そりゃ、知ってるよー。昨日会ったもん」

「ああ、アーサー王だったな」

そう言って、ADフィンの質問に答えるデイルムツドの横からひよっこり顔を出して話すスカサハ。

しかし、その場に居たカタツシユ隊員達は目を丸くしている。記憶が正しければスカ

サハは自分達とは違う部屋をアーサー王に手配して貰っていた筈だ。

何故、そんな彼女がいつの間にこんなところに来ているのか？

「あれ？ 師匠、師匠つて隣部屋やなかった？」

「なんかこつちが面白そうだったからこつそり入つて来た、私抜きで話を進めようたつてそうはいかんぞ」

そう言つて、サムズアップをしてクーフリーンに答えるスカサハ。どうやら彼女としては自分の居ないところで話が進むのが嫌だったようだ。

流石に男女と共同部屋はよろしくないと思ひアーサー王に部屋を分けて貰ったのだが、どうやら彼女が居た隣部屋まで話が聞こえて来たらしい、それは、彼女の耳が地獄耳からかもしれないが…。

さて、本題に戻るが、確かに現在、ブリテンを治めている王はアーサー王。

ならばと、ADフィンの隣でわかりやすく画用紙を持っている小次郎さんは次のページをめくる。

そこに書かれていたのは…。

「さて、そのアーサー王ですが、実はあの方を王様にした人物が居ます」

「え？ つてことは、アーサー王さんは王様にさせられたんだ!」

「え! じゃあ!アーサー王って作られたの!? すげー!」

そう言つて、目の前に飛び込んで来た画用紙の内容に声を上げるヴラドとベデイの二人。

ヴラドが驚くのはわかるが、以前まで円卓の騎士なのに仮にも仕えていた王様の出自を知らないベデイヴィエールにその場にいる全員はズルツとずっこけた。

確かに彼の性格を考えればあり得ない事ではないのだが、とりあえず、気を取り直してADフィンは全員に話を続ける。

「えー、コホン。話は戻りますけど、実は話を聞くところによれば王様作りの達人と呼ばれる職人がこのブリテン島にいるとか」

「えーと、つまり…?」

「はい、つまりですね…」

すると、ADフィンの合図と共に画用紙を持っていた小次郎さんは頷き、ページを捲

る。

そこに書かれていたのは、なんと、今回、Y A R I O が挑戦する事についての詳細と概要であつた。

ザ！ 鉄腕 / fate！ Y A R I O はこのブリテン島で王様を作る事ができるのか？

小次郎さんが持つ画用紙には、バン！ とこういつたタイトルで今回の挑戦についての内容を簡潔にまとめたものが提示されてあつた。

それを見たデイルムツドは…。

「マジカー！ 王様を作るの!?! 今まで色んなもん作ったけど、こんなん初めてだよ!?!」

「王様作りかあー、一応、ヴラドとか師匠は王様やってたんやつけ?」

「んー、領主みたいな感じだねー。なんか俺とか、一時期、人質みたいにされてたからねえ」

「私は一応、治めていたが大体、弟子に修行つけるみたいない感じだったからな」

「そつかー、そんな感じなんか」

そうやって、国を一応治めていた経験があるスカサハとヴラドに訪ねるクーフリーンは難しそうに顎に手を当て考え込む。

今まで、様々な農作物や建築物、はたまた、攻城兵器まで作り上げたYARIO達だが、王様作りは今回初めての挑戦だ。

それに農作物や建築物とは違い今回は人である。

以前、やっていた企画のもので世間的にも素行が悪い人達を更生し、ボクサーやレーサーにした事はあるが今回は果たして…。

「それで今回の企画なんですけどYARIOの力を結集して、凄い王様を作って頂きたいな、と」

「王様かあ、それでどのレベルで作るの？　王様が治める予定の土地耕して豊かにするところから？」

「やりましょう、それ」

「どんな王様が好きかは人それぞれだからね。ラーメンの麺の加水率だつて違うしね」

「マジかー、王様だよ？　ラーメンの加水率と同じに考えて良いのかこれ！　初めてだよこんな企画！」

そう言つて頷く、デイルムツドに冷静に突つ込みを入れるカルナ。まさか、ブリテンに来て王様を作る事になるとは思いもしなかつた。

という訳で、このようなやり取りが行われ、冒頭に戻るわけであるが。

現在、そのような経緯もあつて、クーフリーンとカルナはブリテンの土地を豊かにすべく鋤を使い土地を耕している最中な訳である。

「いやー、今朝は凄かつたねー、まさか俺達が王様作ることになるとはね」

「せやなー、というよりなんで王様作りなんやろ？」

「さあ？」

そう言つて鋤を担ぎながら顔を見合わせるクーフリーンとカルナの二人。

何故、今回の企画が王様作りになったのかは未だに疑問ではあるものの、せつかくA Dフィンが発案してくれた企画だ。何かしら彼に考えがあるに違いない。

二人はそう信じ再び鋤で土地を耕し始める。何はともあれまずはこの場所を豊かな土地にしてしまうところからはじめなければ。

豊かな土地には豊かな人間達が住まう。

きっと、Y A R I O 達が学んだ事を生かせば、この荒れた未開拓の土地でも豊かな土地になるに違いない。

一方、その頃、クーフリーン達から別れたデイルムツドとベデイヴィエール、ヴラド、スカサハの四人はというと？

「こんにちは——！」

「ん？ どなたかな？」

ある王様作りの職人さんが住まう森深い小屋に訪れて居た。

今回、訪ねた王様作りの職人さんの名前はマーリンさん（年齢不詳）である。A D フィンからの聞き込みの情報を頼りにこの地に四人で訪れた訳だが…。

そして、早速、小屋から現れた王様作りの職人さんに王様作りの極意を教わるべく、ベデイヴィエールは今回訪れた要件について小屋の中から現れた彼に語りはじめた。

「僕たち実はY A R I O という者なんですけども、現在、鉄腕／f a t e って企画で王様を作る企画をやってるんですけど、ここに王様作りの達人がいらつしやると聞いて極意

を教わりに来た次第でして……」

「……んー、僕の記憶が正しければ君は円卓の騎士の一人じゃなかったかな？」

「あ、辞めてきました」

「辞めてきたのかい。随分とあつさりしてるね君は」

そう言つて何の迷いもなく言い切るベデイヴィエールの言葉に苦笑いを溢す王様作りの職人マーリンさん。

実はベデイヴィエールが円卓の騎士を辞めている事はマーリンも知っている。知つた上でこうして問いかけて反応を見ようと思つたがあまりに清々しく言うもので彼としても苦笑いを浮かべるしかなかったのである。

それに、彼と彼の友人の来訪。ベデイヴィエールの円卓での評判はマーリンも良く聞いている。

人格者で明るい性格の優しい人物の上、円卓の騎士の中でも皆から良く好かれていたと。

そんな彼らの来訪を無下にするわけにもいかない。

すると、しばらく考えた後に小屋の扉を大きく開けたマーリンは彼らを招き入れるようにこう告げる。

「立ち話もなんだろうから、中で話そう。大した持て成しはできないかもしれないけどね」

「ほんとですか!？」

「いやー、やっぱり上手いなー、ウチの特攻隊長は」

「うむ、ではお邪魔する」

そう言ってマーリンに招かれるまま小屋へと入るカタツシユ隊員達。

そして、案内された小屋の中は魔法使いの部屋らしくたくさんの書物や古びた骨董品などが並べられていた。

早速、カタツシユ隊員達は王様作りの匠、マーリン師匠にいかにしてアーサー王が王様になったかを聞くことにした。

「それで、王様の作り方なんですけど…」

「あーそれだね、どこから話したもんか…」

「やっぱりレベル上げとかじゃない? 俺もよくやってたよ」

「ベディ、ドラクエからとりあえず一旦離れよう」

そうやって、目を輝かせているベデイヴィエールの肩をポンと叩くヴラド。

確かにドラクエとは違い、そんな上手い話がある訳がない。とりあえず、王様作りの匠であるマーリンさんの話に一同は耳を傾けた。

アーサー王を作り上げたマーリンさんがカタツシユ隊員達に話す王様作りの伝統的なやり方については以下の通りである。

王様作りの極意、その1。

まずはアーサー王を約定によって父王から譲り受け、騎士エクターの下で育てます。子育ては大事です。王になるには良識ある騎士から知識を得させよく育つまで待ちましょう。

王様作りの極意、その2。

アーサー王がよく育ったら、岩に刺さった選定の剣を聖剣と称して宣伝し、それを抜く際に現われ、魔法使いらしく王の運命を告げてみましょう。みんな、あの人聖剣抜いたよ！ すごい人だよ！ 王様に相応しいよね！ と念を推しておく事が大事です。

王様作りの極意、その3。

あとは王様には家臣と守るべき町民が必要なので彼女の治世を影ながら度々サポートしてあげましょう。そうすれば、後はその頑張りを見ていた家臣や町民達もサポートしてくれるようになります。

という感じの大まかな説明を王様作りの匠、マーリンさんから極意を聞かされる四人のカタツシユ隊員達。

なるほどと納得しつつ、聞き逃さぬように王様作りの職人、マーリンの話当真剣に聞く、確かに王様を作るには一筋縄ではないかない。

まずはマーリンの話聞いて、ある事に気がついたデイルムツドが口を開き、こう話をし始めた。

「いやー早速、難題だよ？ 誰を王様にすんの？ てか、居ないじゃん俺らそんな養子的な子なんてさ」

「しかも聖剣なんて持ってないしね、槍ならたくさんあるんだけども」

そう言って、マーリンから王様作りについて聞かされたカタツシユ隊員達は難しい表

情を浮かべていた。

まずは、アーサー王の様な王の血筋を持つ養子がないという事。次に抜かせる聖劍的な物が槍か鍬かツルハシしかないという事実である。

そんなものが岩に刺さっていて抜いたところで誰も王様とは認めてくれそうにもない、となればヴラドが話す通り聖劍を作らなければならぬだろう。

しかし、スカサハ師匠、ある事に気がつく、それは…。

「ところでお前達は自分が王様になるという選択肢は無いのか？」

「無いですね、それなら俺は司会業がいいな」

「いやー、それなら俺もアイドルかな？」

「それすんなら俺もリーダーとかぐっさんとの活動がいいな」

即答だった。王様をやるよりもY A R I Oの方が良いという事で満場一致。

王様になるという選択肢は全くもってなかった。というより、このやる気の無さである。

司会業やアイドルの様な事をあまりしていないのにも関わらず、これである。流石に話を聞いていたマーリンとスカサハも顔が思わず引き攣る。

仮にも英雄としての素質があり、王様になろうと思えばそれなりに担ぎあげればなれ
そうな彼らだが、微塵もなる気は無いようであった。

そこで、王様作りの匠、マーリンはある事を思い出す。

「ああ、そう言えば、アーサー王の養子なら居るといれば居るよ」

「えー！ そうなんですか！」

「うん、アーサー王はホムンクルスであるその子を跡継ぎには選ばない予定みただけ
どね」

「へえー、そうなんだ…その子の名前とかわかります？」

そう言って、アーサー王の養子について語る王様作りの達人、マーリンさんにさらに
話を聞こうと訪ねるヴラド。

果たして、一体誰なのか？ あの若そうなアーサー王に養子が居たこともびっくりな
のだが、それよりもその話が本当ならばカタツシュ隊員達が挑戦する王様作りにも大き
な前進が見込める。

マーリンは首を傾げるとベデイの方へ視線を向けて彼にこう告げた。

「君も良く知ってるんじゃないか？ ベデイヴェイエル？」

「誰なんだ！ 一体！」

「あー、この子こんな感じなんですよマーリンさん。多分、知らないと思います」

「…そうかい、いや、元とはいえ円卓の騎士ならてつきり知つてるとばかり…」

「なんだかすいません」

そう言つて、真顔で告げるベデイヴェイエルを前に頭を抱え、ため息を吐くマーリンに申し訳なさそうに謝るデイルムツドとヴラド。

まさか、彼が知らないとは流石のマーリンにも予想斜め上の出来事だった。

とりあえず、気を取り直してマーリンはコホンと咳払いをするとそのアーサー王が養子にした息子について語り始める。

「モードレッド卿さ」

「あー、そうだったの！」

「うん、そうだね…、少しばかり彼女の話となるけど」

「え？ モーさん女の子だったの？」

「……そこから話さないといけないみたいだね、どうやら」

そう言つて、王様作りの達人、マーリンさんはモードレッドとアーサー王。アルトリア・ペンドラゴンについての詳しい話をカタツシユ隊員達に語りはじめた。

アーサー王が実は女性で普通の村娘だった事から話は始まり、モードレッドの出自が異父姉モルガンがそのアーサー王を陥れる為に彼女の血を引くクローンのホムンクルスとして産まれ出された事をマーリンは語つた。

それを聞いていたカタツシユ隊員達はなんだか悲しい気持ちになつた。

少なくともモードレッドを良く知っているベデイヴィエールとしてはそんな風にモードレッドは見えてなかつた。

「いやー壮絶な人生だねえ」

「なんだかやるせないよね」

「俺らでなんとかしてあげられないかな？」

そう言つて、マーリンから話を一通り聞いたカタツシユ隊員達はモードレッドの出自と扱いについて相談をし始める。

これはあまりにもかわいそうだ。クローンとして生み出されてアーサー王を陥れる

ためだけに使い捨てにされるなんて酷い。

それに、跡継ぎにはさせてもらえないモードレッドが不憫だ。そこで、カタツシユ隊員達は考えた。それはすなわち…。

「…って事は今の所、モードレッドさんはアーサー王の跡継ぎに使わないって事ですよね！」

「そういうことになるかな」

「って事はこれは」

「セーフだな」

「よしー！」

ならば、モードレッドさんにカタツシユ隊員達が耕した土地を治めてもらえば良い。

まずは第一の極意についてはなんとかなりそうだ。後はモードレッドを説得する必要があるが…。

それにと、あることに気づいたスカサハはモードレッドを担ごうとするカタツシユ隊員達にこう話をし始める。

「王が二人もいれば国が混乱する。それはあまり良い傾向ではないだろう」

「あ、ならば、領主って事にすれば良いんじゃない？ 俺もオスマンさんに献上金払ったりさせられてたし、一時期」

「なるほど、後は領主として俺達が開拓した土地をモードレッドちゃんが治めてアルトリアさんの跡継ぎに相応しい感じになれば…」

「良いんじゃない？ 良いんじゃない？ 王様作りの道筋できてきたよ、これ」

そう話すカタツシユ隊員達はモードレッドのプロデュースの仕方についてワイワイと盛り上がりはじめる。

それを見ていたマーリンは思わず笑みを浮かべていた。当初はアルトリアとモードレッドについての話を彼らにするかしまいかと悩んではいたが、彼らの側にいる影の国の女王であり、神霊の類に近いスカサハと元円卓の騎士であるベデイヴィエールの円卓での評判を聞いていた経緯から話してみても良いだろうと踏み切った。

そして、いざ、話してみれば、やはりマーリンが思った通りに面白い方向に話が進んでいる。最初は王様の作り方を教わりに来たと言うものだから何事かと思つたが、彼らならば安心して良さそうだ。

「それで、次は聖剣だな！」

「あ、マーリンさん、聖剣を作りたいんですけど、作り方知ってる人ってわかります？」

「……………え？ 作るって？」

「いや、聖剣を作らないといけないなって」

「ちよつと待ってくれ、君たち聖剣を本気で作る気かい？」

そう言つて、何事もなく聖剣を作りたいと述べるカタツシユ隊員達に目を丸くするマーリン。

確かにアルトリアを王様にした時は選定の剣である聖剣カリバーンを抜かせて王様にはしたが、まさか、彼らはそれを作ろうと考えているのだろうか？

しかしながら、このマーリンの予想は見事に的中、3人は顔を見合わせると力強く頷いた。

「はい！ 作り方知ってる方教えてもらっても良いですか？」

「どこから作るのかな、やっぱり砂鉄から？」

「あ、もしかして鉄鉱石から？」

「…多分、その作り方なら湖の貴婦人なら知ってるんじゃないかな？」

「それじゃ、次の行き先は決まりだなお前達」

その言葉を聞いた3人はスカサハに視線を向けると笑顔で頷き応える。

こうして、四人のカタツシユ隊員達は聖剣の作り方を学ぶべく、王様作りの達人、マーリンがいる小屋を後にして湖の貴婦人がいる湖へと向かう事になった。

こうして始まったブリテンでの王様作り、王様作りの達人マーリンさんの協力も経て、初めての挑戦を前にカタツシユ隊員達は無事に優しい王様が作れるのか？

そして、モードレッドに次回、リーダーとカルナが接触！スカサハ師匠を含めたヴラド達3人は湖の貴婦人に聖剣の作り方を学びに…！

そんな中、カタツシユ隊員達の活躍の裏方に回るADフィンと小次郎さんは！

次回から本格的に動き出すカタツシユ隊員達。

彼らの新たな挑戦は上手くいくのか！この続きは！次回、鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

新企画、Y A R I O。王様作りに挑戦————NEW!!

王様作りの達人マーリンさんに会う————NEW!!

ブリテン島の未開拓地を開拓中
聖剣作りに挑戦
NEW!!
NEW!!

第一回、0円卓食堂

キャメロット城城内。

鍬を担いだクーフリーン達二人は現在、王様作りのキーマンとなる人物に会うべくこうしてキャメロット城に訪れていた。

というのも、始まった王様作りに必要な人物というのがアーサー王の息子であるモードレッド卿なのである。

このキャメロット城に訪れる前、二人はADフィンからこのモードレッド卿がアーサー王の息子である事をベディヴィエール達とは別に聞かされた。事の経緯やモードレッド卿の出自などは把握済みである。

二人は未だに彼女の性別は知らないが、その事はさておき、ひとまず、彼女が治める予定地の開拓を切り上げて、そのモードレッド卿を呼びに来たのである。

カルナはキャメロット城にあるモードレッドの私室の前で足を止めると扉を3回ほどノックして声高にこう話をしはじめた。

「こんにちはー、モードレッドさん、ちよつとお時間よろしいですかー？」
「あん？ 誰だ？」

「あ、僕らY A R R I Oなんですけどもちよつとお話したい事がありました」
「Y A R R I O？」

全身を甲冑に身に纏うモードレッドはキャメロット城にある自室の扉をノックする
彼らの言葉に首を傾げながらそう告げる。

Y A R R I Oと聞けば、あの円卓の騎士を清々しくやめていったベデイヴィエールが所
属するアイドルとかいう団体だ。

彼らの活動は一度、城下町で演奏する事を彼らがアーサー王に許可されそこで歌つて
いたのを見物したのはモードレッドの記憶に新しい。

「いいぞ、とりあえず部屋に入れよ、こんなところでそんな鍬担いで部屋前に立たれたん
じゃ目立って仕方ねえし」

「あ、ホンマに？」

「そんじゃお邪魔しますー」

そう告げる二人は晴れやかな笑顔を浮かべながら扉を開けたモードレッド卿の部屋に招き入れられる事になった。

モードレッド卿の部屋に招き入れられた二人は甲冑を全身に纏う彼女が座るテーブルの前に腰を下ろすと鍬を立てかける。

一応、二人の鍬は宝具だったものだ。宝具としても使えるがそれを横目に見ていたモードレッドは甲冑の中で顔をひきつらせていた。

「…なあ、おい、それ一応宝具だったんだろ？　こうして見ると鍬にしか見えないな本当に」

「あ、これ先端外せるから、こうやって…」

「あ、いや、それは先日見たんだけどあれは度肝抜かされたわ、てか普通は宝具をこんな風に扱わんだろ」

クローリンとカルナがまたもや目の前で鍬の先端を外そうとしたところを見かね、モードレッドは思わず二人を静止する。

先端外せば宝具に早変わり、非常に便利な鍬である。名高い宝具がその扱いでいいのだろうか…。

さて、そこで、本題に入るわけだが…。

「んで？ 俺に今日は何の要件だ？」

「あ、僕ら今、ある地域の土地の開拓をやってるんですけども」

「良ければモードレッドさんに手伝って貰えたらなと思ってまして、こうしてやって来た次第です」

「開拓う!? お前ら何ちゃっかりそんなことしてんだおい！ アーサー王には…?」

「今日実はそれに関してアーサー王にも話そうかと思つてですわねー、手土産に僕らが作ったこの街の人から要らない物を使った0円食材を使って料理を振る舞おうと思つてまして」

そう告げるクーフリーンはニコニコと満面の笑みを浮かべてモードレッド卿にサムズアップしながら告げた。

それは、二人がこのキャメロット城を訪れる数時間前に遡る。

今回、土地の開拓を少しばかり早く切り上げた彼ら、実はキャメロット城に向かう前、二人はキャメロット城の近隣の農家や城下町を訪れていた。

ここにしたら、多分、要らなくなった食材や食べ物などがあるはず。生前の知識を活かし、直感のまま様々な場所に顔を出す事にした。

そう考えた二人がまず訪れたのは、とある羊飼いのおじさんの住まう小屋だった。

「こんにちはー、僕らY A R I Oというものなんですけどもー」

「ん? …おー、あんたらは、キャメロットの城下町で先日歌ってた…」

「あー、おじさんこの間の見ててくれたんや、せやでーそのY A R I O何やけれど…」

「今、企画でこちらで要らなくなった物とかを頂けたらなーと思ひまして」

「ん?…要らない物…」

「はい、捨てちゃう予定の物とかでいいんですけど…」

そう告げる二人は考える羊飼いのおじさんににこやかな笑顔を浮かべていた。

この一帯で要らなくなった物を貰い、食材を確保してそれを手料理にしてアーサー王をお願いを聞いて貰おうという彼らの得意分野。

すなわち、簡易0円食堂である。

ついでにモードレッドにもこの後会いに行く予定なので、できれば、良い0円食材を確保してキャメロット城に来訪したいと二人は考えていた。

すると、羊飼いのおじさんは…？

「今日、ちようど子羊が不運な事に一匹事故で亡くなつてね…それくらいしか無いが」

「あ、それつてもしかして捨てちやつたりします？」

「そうだねえ…毛以外は肉に加工してしまう予定だが…多分、その後の肉が多少なり余るかもしれないね」

「じゃあ、毛を剃つた後それを頂いても…」

「ああ、持っていつても構わないよ」

「ホンマですか!？」

となんと、ここでYARIOは新鮮な子羊の肉の一部を羊飼いのおじさんから分けてもらいラム肉を手に入れる事に成功した。

その他にも手作りで作ったルアーを使い、ゲイボルクに糸を付けてそれを垂らし、魚釣りをして、シーブリームと呼ばれる鯛の仲間を確保。

そして、更に幸運なことに…。

「あ、リーダー、これリングゴじゃね？」

「あ、ホンマやなー！」

なんと、そのキャメロット城に向かう道中、自然になつていたリング木を発見し、リング木一つ確保する事に成功した。

魚と羊のお肉も確保できたところで、それを調理しやすいように下ごしらえした後、こうして、キャメロット城に訪れたという訳だ。

そんな二人の話を聞いていたモードレッドはため息をつくど頭痛がする頭を抑えていた。

しかし、ここでモードレッド卿はある事に気がついた。それは、このキャメロット城に訪れたとしても彼らがアーサー王に会えるかどうかは確定的ではないという事だ。

アーサー王は仮にも王様、王様であれば政務などいろんな仕事があるに違いない。

「いや…アーサー王も忙しい身だ。お前達に会う予定なんて組めるわけが…」

「あ、ADフィンが色々してくれてたみたいでこの後、食堂で会う予定になつとるよ？」

「なんでだよ!?!」

そう言つて、スケジュール表を開きながら何事もなく語るクーフーリンの話の話を聞いて、バン！と声を挙げて机を叩くモードレッド卿。

確かに王という立場にも関わらず、いとも簡単にこうして彼らが面会ができてしまうと聞かされれば突つ込みたくもなる。

クーフーリンと聞けば名高い英雄なのは間違いないのだろうし、適当に彼らをあしらうわけにもいかないというアーサー王の考えもモードレッドにもわからんこともない。

それに、そんなアーサー王のスケジュールを何故か把握している我らが優秀なカタツシユスタツフのADフィンの活躍もまた素晴らしいと言わざる得ないだろう、面会に至つたのは彼の功績が非常に大きい。

流石は黒子役、年季が違う。

「てな訳やから、モーさんもこの後、食堂に来るようになってるね」

「はあ？ ちよつと待て、それは確定事項なのか!? てかモーさんってなんだよ！」
「お父ちゃんが呼んでるんだから行かなきゃね」

そう告げる二人はこうして、モードレッド卿の身柄を無事に確保し、アーサー王が待つキャメロット城の食堂へ。

キャメロット城の食堂は器材もそれなりに揃っており、料理をするには申し分ない。だが、悲しきかな、ここの食堂で作られている料理は壊滅的においしくなかった。コックが悪い訳でなくお国柄的に料理の作り方が単純に良くなかったのである。

そこに目をつけたのが我らがカタツシユ隊員達。

ADフィンからの事前の情報を得た二人はこうしてアーサー王に料理を振る舞う事に、そのついでにモードレッドを巻き込んだという感じである。

「さあ、今回も始まりましたこのコーナー、ブリテンで要らなくなったものを使って料理を作るといふ0円食堂なんですけども、ゲストには」

「この国の王様！ アーサー王と円卓の騎士、モードレッド卿ことモーさんをお迎えしております」

「…ふむ、なんだかわからないですけど、今日は美味しい料理が食べれるのですか？」
「それはもう！ 楽しみにしといてください！」

「なんで俺まで…」

さて、始まった第一回ブリテン0円食堂。

まずは要らなくなった食材を調達してきたカルナとクローリングが二人に今日振る

舞う料理について紹介をしはじめる。

画用紙を使いながら、クーフリーンはアーサー王とモードレッド卿にわかりやすいように今日の食事についてこう話をしはじめた。

「今日作るの、まずはこれ！ ラム肉の唐揚げに、鯛の煮付けやね」

「ラム肉の唐揚げに鯛の煮付け？」

「ラム肉？」

「せやね、唐揚げはお二人は食べた事ありますか？」

「いや、無いですね、食べるのは初めてです」

そう言って、食堂にて話を繰り広げるクーフリーンに場を任せたカルナは厨房に入り、下ごしらえしてある食材の調理をしはじめた。

まずは、取り掛かるのはラム肉の唐揚げ。

ラム肉に醤油、すりおろしたリンゴ、お酢、おろし生姜、おろしニンニクを手作りの袋に入れ、揉みしだき、味をよく浸み込ませる。

それを今回は30分から1時間ほど既に放置して下ごしらえしてあるものを使う。

水気を取り、片栗粉にまぶして食用の油で揚げていき良い色がつけば盛り付けて完

成。

ラム肉の唐揚げである。あとはリングゴを少しばかり添えてやれば多少なり、見栄えが良くなる。後は好みのマヨネーズなど調味料を付けてお召し上がりを。

次にカルナが調理に取り掛かるのは…。

「ぎ、煮付けかあ、久々だなあ、これ作んのも」

鯛の煮付け。

生姜、醤油、みりん、砂糖、酒、水などの調味料を全てフライパンで火にかける。

ふつつつとしてきたら切り身にした鯛の身を並べていき、3分ほど寝かせる。

火をとめて、そのままねかせると更に味が染み込む。これならば、良い味が出そうだ。

後はこれを盛り付ければ完成、鯛の煮付けである。

早速、できた料理を食堂に運んでいくカルナ。並べられた二品を前にアーサー王は目を思わず輝かせていた。

「おお、これはまた…良い香りです」

「確かにアーサー王が言う通り。香りは良いな、しかし味はまだどうかは怪しいところだ。

毒が入ってるやもしれんしな」

「あ、大丈夫大丈夫、火を通せば大抵なもんは食えるから」

「いや、そう言う意味じゃ無いんだが」

そう告げるカルナの言葉ににズルツと盛大に滑るモードレッド卿。

——とりあえず焼いとけば平気。

多分、モードレッドが言いたかったのはそう言う事では無いのだろうが、カルナは満面の笑みでサムズアップしていたので彼女はもう何も言えなかった。

ひとまず、試食、まずはラム肉の唐揚げからである。ブリテンで育った羊の死体を捌き、良質なラム肉を揚げた一品。

早速、卵と酢、サラダ油、砂糖、塩、コシヨー、辛子を混ぜ合わせ作ったマヨネーズに付けてアーサー王はそれを口に運ぶ。

「…はうあ!？」

「ち、父上!?! やはり貴様ら毒を!!」

「美味しい…、なんでしようこの美味しい食べ物は、初めて食べました」

「へ…う？」

思わず、ラム肉の唐揚げを口に入れ涙を流すアーサー王の言葉に目を丸くするモードレッド。

すると、そこからはアーサー王の食欲が一気に上がる。パクパクと自分の机に並べられたラム肉を食べ終えると次は鯛の煮付けへ。

鯛の煮付けの切り身を口に入れた途端、香ばしい香りと今までに無い食感が彼女の口の中に広がった。

「う、うう…！ …こんな美味しい御飯があるなんて…！ 今まで生きてきてよかった！」

「泣いてる!?!」

「ささ、モーさんも食べてみ？ 美味しいで？」

「うぐ!?!…たくつ！ じゃあねーな！」

すると、モードレッドは甲冑の頭部を仕舞いフォークを使い始める。

その頭部の甲冑を外す様はまるでロボットの變形のようにかっこいいものだった。これにはクーフリーン達も思わず目を輝かせた。

今までにいろんなものを見てきたがこんな風に音を立てて變形する甲冑を見るのは二人も初めてである。

Y A R I Oであればこれに感動しないものなどいるはずもない。

「うお！ すげー！ トラン○フォーマーみたいや！」

「かっけー！ これどうなってるの!？」

「…!? は、はあ？ あ、そういや、お前達の前で甲冑外すの初めてだっけ？」

そう告げるモードレッドは甲冑の變形に興奮する二人に目を丸くしていた。

モードレッドが顔の部位の甲冑を外すのは確かに二人の前では初めてだ。であれば、驚くのも無理はない。

それはともかく、モードレッドの素顔がこれで露わになった訳だが。

「あ、モーさんそんな顔してたんだ」

「綺麗な顔してるじゃんか、甲冑で隠すの勿体無いよ」

「っ…!? るっせーな！ 別に良いだろうがっ！ はむ！」

そう告げるモードレッドは声を荒げながら褒める二人の言葉に照れ隠しの様に目の前にあるラム肉の唐揚げを口に入れる。

すると、ラム肉を口に入れたモードレッドはしばらく目をパチクリさせると先ほどまで険しかった表情が柔らかくなり、ほっこりとした表情を浮かべた。

口に入れただけで、その味が今までに食べた事の無いカルナが作った0円料理が美味だと彼女も理解したのだろう。

「はうく…美味しい…、なんだこれ、めちやくちや美味しいぞ！」

「せやろ、喜んでもらえて嬉しいわ」

「お粗末さまです」

こうして、食堂で0円食材を振る舞うクーフーリン達。

ブリテンで取れた0円の食材、これだけで美味しいものは出来る。その事を彼らはモードレッドとアーサー王に伝える事が出来たに違いない。

さて、続いては本題について二人に話をしなければならぬだろう。果たして、二人

は無事にモードレッドを引き連れてくる事ができるのだろうか？

今日のY A R I O。

ブリテンで0円食堂—————NEW!!

アーサー王0円料料を堪能—————NEW!!

モーさんの素顔を披露—————NEW!!

作り手の思いを伝えたい

キャメロット城食堂。

手に入れた食材を使い、Y A R I O 達が作る美味しい日本食を堪能したアーサー王とモードレッド。

さて、ここからは本題だ。二人に食事を振舞ったのは他でもない、お願い事があったからである。

「それで、アーサー王さん……。先ほど食べた食事なんですけど……」

「私の事は私用の時はアルトリアで構わないですよ。なんですか？」

口についた食べ物の汚れを綺麗に白い布巾で拭いながら食事に関して話すカルナに首を傾げるアーサー王ことアルトリア。

すると、クーフーリンは頭を掻きつつ、先ほど提供した食事について、彼女に語りはじめた。

それは、この提供した食事についての話である。

「実はこの料理、未完成なんですよね」

「?!? なんですって！それは本当ですか！」

「マジかよ！ こんなに美味しいのに！」

そう、料理が未完成だという事だ。

というのも確かに美味しい唐揚げや煮付けの味付けは申し分ないので、これを食べたアルトリアとモードレッドは大層満足していた。

だが、しかし、よく見てみればわかる。この料理には決定的に欠けているものがあった。

その欠けているものとは。

「新鮮な野菜、彩りが全く無いし栄養偏つてまうからね、これやと」

「そういう事なんですよ」

「!?…確かにそう言われてみれば…野菜がありませんでしたね…」

新鮮な農作物であり、身体の健康を整える野菜、これが不足していた。彩りも少なく、これだと確かに味は美味しいが、なんだか物足りなさを感じる。

それに、これだけオカズがあれば、欲しくなる筈の炭水化物、これもまた、ここには不足していて当然出してない。

この事を踏まえた上でクーフリーンはアルトリアにこう話をしはじめた。

「僕ら、今、ブリテン島の荒れた土地の開拓をしているんですけども、そこで、新鮮な農作物やこんな風な料理を作る食材を作ろうかと考えてまして」

「……それは面白そうですね、それで？」

「ここにいるモードレッドさんにその土地を管理する領主になってもらって、その土地を發展させていきたいなって考えてるんですけど」

「…!? おい！ ちょっと待て！ 聞いてないぞ！ そんな話！」

それはYARIO達が掲げる盛大なプロジェクト。

ブリテンにある地域を緑豊かな資源のある地域に開拓しようという、壮大な計画であつた。その名も。

————カタツシユ村。

以前、訪れた福島県の村でY A R I O達は様々な人に支えられながら、その村を見事に発展させ、開拓していった。

王様作りという土台の上で、彼らがまず思い浮かべた情景はまさにあの村。

あの村こそ、彼らの原点であり様々な事を学び成長させてくれた場所なのだ。

そんな、村の様な場所をこのブリテン島でも作りたい、彼らはそう思っていた。

そして、村を発展させ、いずれはブリテンの島の人々に自分達が学んだ事を伝えていつてあげたい。自分達の前の師匠がそうだったように…。

「僕らの作るこんな料理が、みんなに食べられるようになってくれたらホンマに嬉しいんですよ」

「…確かに、これは今迄に食べたこと無いほどに美味でした」

「…っ！…我が王！…ですが！」

「ならば、この料理がブリテンの皆が食べれる様にしてあげるのが王の勤めですね。モードレッド、貴方にこの件を任せてもよろしいですか？」

そう言って、アーサー王は柔らかい口調で自分と同じく、彼らの出した料理を口にしたモードレッドに問いかけた。

よく考えれば、こうして父子と食事を取るのとは初めての事ではなかっただろうか？

そんな中、アーサー王はモードレッドに使命を授けた。

あの様に美味しそうに食事を取る父の姿をモードレッドは目の前で初めて見た。

そして、更にそんな美味しい食事を取る幸せを民草に分けてあげたいと、アーサー王は自分を信頼してこうして改めて使命を与えてくれた。

今迄、見向きもされていないと思っていた遠い存在が、まるで、身近にいる様にモードレッドは感じた。

モードレッドはすぐに膝を折ると、アーサー王の前でこうべを垂れ、真剣な眼差しで王の前でこう宣言する。

「…承りました。その任、この円卓の騎士が一人、モードレッドが受けさせて頂きます」
「ええ、貴方が作りあげたものがどんなものであるのか、しっかり見定めさせてもらいますよ」

「…はいっ！」

アーサー王のその言葉に嬉しそうに頷くモードレッド。

理想とする王からこうして信頼され、使命を言い渡されたのだ。これに燃えない騎士

は居ないだろう。

というのも騎士というのは今日までの話、絵になる二人のやり取りを見て居た二人は感動のワンシーンを領きながら見届けた後、膝を折るモードレッドに近寄り、あるものを手渡しはじめる。

そのあるものとは…。

「いやあ、ホンマに絵になるなあ、それじゃモーさん、はいこれ」

「…ん…なんだこれ？」

「鍬ですね」

「……………」

何を隠そう、モードレッドに手渡したのはクローリンお手製、スカサハから貰った鍬にしたゲイボルクである。

これさえあれば、どんな開拓だってなんのその、食堂の椅子に座るアーサー王の前で膝をついていたモードレッドは目をパチクリさせてそれを見つめている。

そして、それを手に取るとクローリンとカルナはモードレッドの肩をポンと叩き、満面の笑みでサムズアップしていた。

「これでモーさんも僕らの仲間やね！」

「似合う！ 似合う！ いやあ、やっぱりモーさんが鍬持つと様になると思ってたんだよ」

「……………いや、なんだこれ」

「では、後のことは任せましたよ！ 私はこの後用事がありますので」

「合点承知！」

「ちよっ…!? 父上!? まっ…！」

そうこうしているうちに、食事を終えたアーサー王は食堂をそそくさと後にしてしま
う。

食堂に取り残されるモードレッド、確かに王は忙しい身だ。この後、いろいろな予定
が詰まっていることはモードレッドにも理解できる。

理解はできるが、このタイミングで一人にされるとこれはこれで困る。しかし、彼女
の手にはしっかりと鍬が握らされていた。

——鍬が似合う騎士。

こうして、アーサー王との交渉の末、Y A R I Oの新たな仲間にもードレット卿が鍬を持つて加わる事になった。

彼女の本職が騎士というよりも農家の人になる日もそんなに遠くはないだろう。

一方、その頃、聖劍の作り方について、湖の貴婦人の元を訪れているスカサハ達、四人はというと？

王様作りの名職人マーリンさんから案内され、その湖の貴婦人がいるという湖の側へと訪れていた。

さて、湖を訪れたのは良いが、湖の貴婦人にどう接触するのか、生憎だが、ここにはドアがない故、いつもの様にこんにちはー！ というわけにもいかない。

「斧落としてみる？ 金の斧か銀の斧かとか言われるかもしれないけど」

「うーん…：そうだねえ、師匠どう思う？」

「それより私が泳いで引つ張ってきた方が早くないか？」

「あの…：やめて貰っていいかな…：一応、僕の弟子みたいなものだから…：」

そう言つて、湖の前で腕を組みながら相談する四人に顔をひきつらせるマーリン。

スカサハに関しては準備万端と言わんばかりにグルグルと肩を回しているものだから、尚更、本気で強引に湖から貴婦人を引きずり出しそうな雰囲気があった。

とはいえ、このままでは湖の貴婦人に会えるかどうか定かではない。

「仕方ないねー、マーリンさん、仲介お願いできないかな？」

「お願いします！」

「うん、まあ、そうなるだろうとは思つてたよ」

こうして、スカサハ達はマーリンから仲介をしてもらい、湖の貴婦人に取り次いでもらう事にした。

マーリンとしても仲介しなければ、スカサハが湖に飛び込んで本気で湖の貴婦人を引っ張り出すだろうという嫌な勘が働いていたためにこれは彼としても得策だろうという判断。

何をしでかすかわかったものではない彼らよりもこうして自分に取り次いだ方が実に平和的である。

しばらくして、マーリンが取り次いでくれたお陰もあつてか、湖の貴婦人が彼らの前

に姿を現した。

そして、姿を現した湖の貴婦人にベデイヴィエールはいつもの様に笑顔を浮かべ挨拶をする。

「こんにちはー！ 僕らY A R I Oという者なんですけど、実は鉄腕／f a t eという企画で聖剣の作り方についてお訪ねしたい事がありますよ…」

「なんだか、急な来訪ですねマーリン」

「いやあ、すまないね」

そう言って、苦笑いを浮かべながら湖の貴婦人に謝罪するマーリン。

呼び出された湖の貴婦人はと言うとなんだか不機嫌そうだ。それもそうだろう、いきなり来たと思えばやれ斧を投げ入れてみようだの、湖の中から自分を引つ張りだすだのと湖の前で話をされていたのでは機嫌も悪くなるのも必然だ。

一応、師であるマーリンが呼びかけたので呼び出しには参上したが、彼女としてはすぐにも湖の中へ帰りたいたいという気持ちがあった。

「私の名はヴィヴィアンと申します。さて、それで…聖剣に関しての話でしたか？」

「そうなんですよ、僕ら聖剣を作りたいので造り方を教わろうとヴィヴィアンさんに教わりに来た次第です…」

「そうでしたか、貴方、名前は？」

「あ、俺はデイルムツド・オディナと言います、こちらがヴラドに挨拶したのがベティ、こちらに居るのが俺らの師匠のスカサハ師匠ですね」

「ふうん、そうですね…」

そうやって、ヴィヴィアンと名乗る湖の貴婦人はジツと品定めする様に彼らを見つめる。

確かに見た限り彼らは名高い英雄の様な雰囲気がある。それと、同時に周りにいる精霊達も彼らの放つ不思議な雰囲気が入っているようだ。

農業に精通している彼らはある意味、農業の精霊みたいなようなもの。

なるほどとマーリンがこの場所に彼らを導いた理由がなんとなく理解できたヴィヴィアンは笑みを浮かべたまま話をしはじめた。

「それで聖剣の造り方でしたね、聖剣の造り方ですが…私は存じ上げません」

「えー…マジかー」

「あれは星が造ったものですから」

「そっかー、星が造っちゃったならわかんないよね、それは」

その湖の貴婦人、ヴィヴィアンの言葉に納得したように頷くYARIO達。

早速、聖剣作りが頓挫してしまった。しかし、ここでデイルムツドはある事を思いつく、それは…。

「じゃあさ、星が造ったもので剣打って作れば聖剣になんじやないかな？」

「あ…！ なるほど！ その手があったか！」

「なるほどね！ じゃあ星が造ったものをハンマーにしたりすればいいわけだ！」

「いいわけないだろう、何さりげなくとんでもない事をしようとしてるんだ君達は」

思わずマーリンは右斜め上の発想をする3人に顔を引きつらせてそう告げる。

星が造った宝具のものを改造しハンマーを作り、それを使って剣を造って聖剣にするなんてとんでもないのも良いところである。

——僕らの本業はみんなのスター。

あらがち間違つてはいない。確かにアイドルなのだから、その通りである。

話を聞いていたスカサハ師匠もこれには大爆笑であった。

星が造つたものを打ち直してハンマーにして、さらにそれを使って剣を作るなんて聞けば笑いが出て当然だ。

しかし、デイルムツドはこう話を続ける。

「あ、兄イが持つてる槍、確かあれ対神宝具とか言つてたなそういや」

「じゃあ！ それハンマーにして剣作ろうよ！ 素材はなんがいいかなあ凄い鋼材がいいよね」

「あとは、ほら、鋼材いろんなところから探して来てさ」

「あはははははは!! お前達は本当に面白いなあ」

「…うん、…まあ、好きにしたら良いと思うよ…」

こうして、マーリンから湖の貴婦人まで導かれた四人は聖剣についてどうするかの話
を纏め、ひとまず、聖剣作りは手探りで言う事に方針は決まった。

星が造つたものを自分達の手で作る。それには材料と聖剣にするのに必要な道具が

必要だ。

確かに、湖の貴婦人の元へと赴いたが造り方が結局は分からないというアクシデントはあったものの、ならば、造り方自体を自分達の手で編み出すのもまたチャレンジである。

四人は湖の貴婦人から貴重な話を聞いて、湖を後にする事にした。目指すは荒れた土地に待つクーフーリン達の元だ。

いよいよはじまった聖剣作りにブリテン開拓。

さて、彼らの挑戦は上手くいくのだろうか？　そして、この続きは……！

次回の鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

聖剣の造り方を自己流で—————NEW!!

モーさん農家の仲間入り—————NEW!!

ブリテンにカタツシユ村を設立予定—————NEW!!

カタツシユ村開拓記 その1

さて、前回の鉄腕／f a t eでモードレッド卿を仲間に加えたカタツシユ隊員達。

アーサー王から使命を受け、カタツシユ村開拓予定地まで足を運んだモードレッドだったが、この目の前に広がる広大な荒地を見た途端に鋤を担いだ彼女は目を丸くしていた。

「なんだこれ！ こんな場所開拓すんのかよ！ 頭おかしいんじゃないのか！ おい！」

「こらこら、そんな言葉の使い方しちやあかんで、モーさん」

「そうだぞ、やってやれないことはない！ 土なんて変えりゃいいんだからさ」

「はあ!? なんだそれ!？」

そう言いながら、広大な荒地を何事もなく平然と見つめる彼らの言葉に目を丸くするモードレッド。

どんなに耕しても豊かになる情景がモードレッドには思いつかないが、二人は俄然やる気になっている様子だ。

とりあえず、鍬を持ったからにはやる事は一つ、耕すだけ、二人はせつせと土地を耕す作業を開始しはじめる。

「あー！ もう！ しゃあねえな！ たく！」

そして、そんな二人の姿を見せられては任を承ったモードレッドも黙って見てるわけにはいかない。

そんな二人に続くように土地を耕しはじめる。今は荒地となっているこの地域だが、どんな風に生まれ変わるのだろうか？

…とそこへ。

「おー、やってるやってる、ただいましげちゃん」

「帰ったかー、どうやった？」

「まあ、手ごたえは上々って感じかな？ あ、そっちが…」

「モーさんじゃん！ じゃあ今日から…」

「せやで」

「よっしや！ テンション上がって来た！」

そう、デイルムツド達がこの場所に帰還して来たのである。

メンバー全員が集結、となれば、開拓もより捗るのは明白だ。

彼らの師匠であるスカサハはツカツカとモードレッドに近寄ると品定めするように彼女の顔をジツと見つめる。

「ふむ、こやつがモードレッドか？ まだまだ小娘だな」

「…っあ!? 今なんつった！ テメエ！」

「あ、モーさん！ その人は…」

そう言いながら、小娘呼ばわりしたスカサハにすかさず突っかかるモードレッド、その目は殺気に満ちており、スカサハを殺さんとするばかりだ。

怒りのあまり、静止しようとするベデイヴィエールの言葉に耳を貸そうとしないモー
ドレッド。

すぐさま、持ってきていた自前の剣を構えた彼女はスカサハに向かってそれを振り下

ろさんとするが…。

「遅いな、まだまだ甘い」

「があ!?!」

間合いをスカサハに詰められると同時に顎を掌で打ち上げられ、大きく仰け反った。

それを見ていたカタツシユ隊員一同はあちやーとばかりに頭を抑える。

スカサハ師匠はこう見えてもバリバリのガテン系女子、しかも、武闘派だ。下手すれば熊を片手で遊んで倒せるくらいの技量を持っている。

「ぐ…くっそ…!! ぶっ殺して…」

「もう! あんたら何しとんの! ホンマ! アホやないんやから!」

「あいた!?!」

「…つつう! 何する! しげちゃん!」

「あ、オカンフリーンだ」

…つと二人がヒートアップしそうな瞬間、オカンと化したクーフリーンの拳骨が二人

の頭に直撃する。

痛みのみならず、その場で拳骨を受けた二人は険しい表情を浮かべ頭を抑えている。今から殴り合いか殺し合いになろうという時に水を差されたのだ。そうなるのも当たり前な話。

しかし、頭を抑えた二人が振り返った先には、背後に仁王と化した大阪のおぼちゃん
の守護霊を身に纏しケルト神話の大英雄が立っていた。

仲間同士で揉め事があれば、リーダーであるクーフーリンが本気を出す。それが、仲間内のリーダーというポジションだ。

「あんたらは仲ようせなアカンやろ！ モーちゃん！ なんであんたは手出したんか
！」

「…いや、だつて俺のことを小娘つて…」

「女の子なんやから当たり前やろ！ しかもこんな危ないものもつて！ 怪我したらど
ないすんの！」

いつの間にか、クーフーリンから土の上で正座させられた二人はシュンと縮こまりし
おらしく仔犬の様に大人しくなっていた。

流石、オカン力A+は伊達ではない、仁王と化した大阪のおばちゃん
の迫力は凄まじいのである。オカンフリーンは怒髪天だ。

モードレッドは正座のまま、涙目になりながら両手の指をちよんちよんと合
わせている。

「あ、いや、それは…その…」

「師匠も師匠や！ もうちよい穩便に済ませなあかんやろ！ 女の子にあんなこと
したりしたらあかんよ！」

「…はい、ごめんなさい」

そして、師匠であるスカサハも申し訳無きそうに小さくなっている。オカン
となるクーフリーンを見るのは2回目だが、その迫力は以前と同様に健在であ
った。

クーフリーンはふう、と一通り説教をし終えると一息つくとき正座をしてい
る二人の肩をポンと叩きいつものように優しい笑みを浮かべる。

「うん、互いに悪いところがあったら謝る。それがちゃんとした人間の基本
やで、ほら、アメちゃんあげるから仲よろしいや」

「…うつ…うつ…ごめんなさい…かあちゃん…」

「そうだな、私も配慮が足りなかった。気をつけるよ、しげちゃん」

「ええんやで、はい、アメちゃん」

そう言いながら、アメちゃんを一個づつスカサハとモードレッドに配るクーパーリン、その眼差しは慈母の様に優しくかった。

大阪のおばちゃんは時に厳しく、しかし、世話焼きでとても優しいのだ。

——シゲフリーンオカン。

確かに謎の包容力があり、昔ながらのいいオカンな彼は皆のまとめ役として申し分ない、こんな風なトラブルは仲間内でも起きることはある。それをどう丸く収めるかがアイドルのリーダーとしての技量が問われるところだ。

それを、遠目から眺めていたカタツシユ隊員達はどういうと？

「モーさんついにしげちゃんの事、お母さん言っちゃったよ」

「うんうん、やっぱり仲良しは良いことだよ」

鍬を持ちながら土を耕しつつ、反省している二人を見ながらほっこりした表情を浮かべていた。

やはり、自分達のリーダーなだけあって伊達ではない、実に頼り甲斐がある。

すると、説教をし終えたクーフリーンは再び鍬を持ったところである事に気がついた。それは…。

「え!? モーさん女の子やったん!？」

「今更かい!」

そう、勢いで説教をしたのはいいが、なんと我らがリーダーここに来てようやくモードレッドが女の子であるという事実を知る事になった。

そのあまりの天然振りにデイルムツドも突っ込みを入れざる得なかった。確かに、性別についてはクーフリーンとカルナは存じていなかったがデイルムツドが言う様に説教を終えて今更である。

と、何やら内輪で揉め事が発生しそうになったものこのうして和解した我らがカタツシユ隊員達は再び鍬を握り開拓を再開しはじめた。

まずは鋤を使って土を耕さなくてはいけない、何事も土台が大切なのである。というわけで…。

「ここはこうして、鋤を持って入れる。こんな感じに」

「へえ、そんな感じに鋤って使うんだ…ええと…」

「あ、俺の事は兄イでいいよ、あとデイルはデイル兄イね！　あとはヴラドと…ベティは前の同僚だからわかるでしょ？」

そう言いながら、笑顔を浮かべて、鋤の指導をしていたカルナはモードレッドにメンバー全員を紹介する。

言われてみれば、出会い頭、モードレッドは小娘と言われスカサハに斬りかかったのぢやんとした紹介をされてなかった。

カルナからメンバーの紹介をされたモードレッドは鋤を握ったまま、満面の笑みを浮かべてこう答える。

そのモードレッドの表情は何やら色々吹っ切れたようなそんな笑顔だった。

「ああ！　オーケー！　兄イ！　そんなじゃよろしく頼むぜ」

「応ともさ！ それじゃ、さっきの続きだけど」
「すごく…勉強になる…」

そこから、モードレッドへの農業に関するY A R I O達の英才教育がはじまった。
まずは土の知識から、土は水捌けの良い土が農作物を作るのに適している。これを見極める術をモードレッドはクーフリーンやカルナから学んだ。

「こうやって土を触って見るといい土かどうかわかるんやで、だいたい固形やなくて粒子が細かい丸い土が農作物がよく育つ土なんや」

「…ほえー、でもなんでだ？」

「粒子が細かいと、根つこの下まで水が届きやすいし植物も根を伸ばしやすいいんだよ」
「なるほどなあ…」

農作物に適した土作りから豊かな土地は出来上がる。

水捌けが悪い固形の土では農作物は上手く育たない、昔に彼らが学んだ知恵、それがこのブリテンの地でも生きる。

そして、デイルムッドやヴラドからは料理を学んだ。調味料や味付けの仕方、食べら

れる野草や包丁の使い方などいろんな技術を彼らからモードレッドは教わった。

ベティヴィエールとADフィンからは作業のしやすい小道具の使い方、作り方と木材などの加工の仕方、そして、壊れた物のレストアのやり方など今まで見たことがない物を彼女は目の当たりする事になる。

スカサハからは武術の基本やルーン魔術について教わった。レストアした物にルーン魔術をどのように適用するのか、はたまたルーン魔術がどんな風に使えるののかをモードレッドは学ぶことが出来た。

そうした経験をずる事一ヶ月。

すつかり、板についた鍬の作業と農作業着、そして、晴れやかな笑顔と土を耕す彼女の姿がそこにはあった。

思春期だった彼女はすつかりいろんな経験を積む中で少しずつ大人になっていた。トゲトゲしかった彼女も今ではすつかり彼らに溶け込んでいる。

「昔もあんななんだったな俺たちも」

「年をとるにつれて丸くなってまうもんなあ」

「俺たちもモーさんみたいに昔のY A R R I Oに戻ろうぜ！ 今はただただ丸くなっ

ちやつてるけどさ」

そう言いながら、畑仕事に勤しむモーさんを眺めながらしみじみと感じるクーフリーン、デイルムツド、カルナのおっさん3人衆。トンがっていたあの頃に戻りたい。

————最近丸くなってきたY A R I O。

いろんな意味で丸くなってきているのかもしれない、モーさんのキラキラしている光景を見ていた3人衆は改めてそう感じるばかりであった。

そんな中、畑を耕し終えたモーさんは顔に泥をつけたまま鍬ボルクを担いでおっさん3人衆の元へ。

「なあなあ！ かあちゃん！ 兄イ達！見てくれよ！ ここ全部俺がやったんだぜ！」

「…いやあ、上達したなあ凄いよモーさん」

「モーさんは筋がええからなあ、ようやったでー」

「えへへ、そんなに褒めんなよ照れるじゃんか」

そう言いながら、クーフリーンに撫でられ頬を染めたモードレッドは照れ臭そうに三人に笑みを浮かべながら告げる。その顔は実に幸せそうであった。

彼らは面倒見が良く、実にモードレッドを可愛がっていた為、彼らにモードレッドが懐くにはそれほど時間はいらなかった。

今まで自分が嫌っていた女の子扱いも彼らならば特に気にすることもない。素の自分でいられる分、尚更、この場所が彼女には楽しい居場所になりつつあった。

さて、それなりに下地は整った。あとは植える野菜や農作物などを決めていかななくてはいけないだろう。

「さてと、そんなじゃとりあえずお茶でも飲むか、一息入れよう！」

「お、いいね！」

「そういやこの間、スズメバチの巣見つけたんだけどさ」

「お、マジで！　ここにスズメバチの巣とかあったんだ」

なんと、ここでカルナが近隣の森でスズメバチの巣を発見。

これは駆除しなければ、いずれ開拓の障害にもなるかもしれない。でも、それはとりあえず後回し。

まずはお茶で一息入れるのが先だ。

「あ、モーさんお茶飲んだことあったっけ？」

「ん？ お茶？ いや、無いな、聞いたこともねえし」

「なんだ？ また面白い話でもしてるのか？ 私も混ぜろ」

「…うお!? 師匠！ いや、今からみんなでお茶でも飲もうかと思ってまして」

「お茶？」

そんなこんなで、お茶の話をしている間にスカサハ師匠も彼らの会話をどこからか聞いてかすつ飛んできた。

さて、こうして、お茶を作る事になったカタツシユ隊員達だが、果たして今回作る事になったお茶とは？

この続きは！ 次回！鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

スズメバチの巣を発見———NEW!!

ブリテン開拓開始ー
モーさんファモさんになるー
NEW!! NEW!!

カタツシユ村開拓記 その2

ひとまず、前回、作業に一息入れる為にお茶作りをする事にしたクーフリーン達。

いろいろなお茶を作ってきた我らがリーダーを筆頭に今回も新たなお茶作りにチャレンジする事に！

さて、その本題となる、今回作るお茶だが…。

「あ！ しもた！ お茶にする予定の物がまだ無かったわ！」

「えー、マジかよ、しげちゃん…」

「リーダーそりやないぜ、俺と師匠、お茶飲むの楽しみにしてたのに…」

「むう…、しかし無いものをねだっても仕方あるまいな」

ここにきて、お茶にする原材料がないことが発覚してしまった。

本来ならば、お茶にするなら枇杷の葉なんか好ましいが、今、手元には枇杷の葉も無い。

となれば、簡単に手に入るお茶の原材料となるものとして考えつくのは一つしかない。

ここで、クーパーリンは閃いた。そうだ、確か、森の中には…。

「…せや！ スズメバチの巣があるって言うてたな！」

「え？ もしかしてあれ使うの？」

「…これしかない！」

残念そうにしているモードレッドとスカサハ師匠の顔を見たリーダークーパーリンはそう思い立った。

そう、そのスズメバチの巣を使えばきつと、美味しいお茶ができるに違いないと。

スズメバチの巣を作ったお茶。それは、二年前、見つけた空になったキイロスズメバチの巣。

クーパーリン達は以前、見つけたこのスズメバチの巣を使って、お茶を作る事に成功した。ならば、今回も…。

「やりますか」

「やりましょう」

お茶にして飲むことが出来るはず。

作業で乾いた喉にはやはり栄養があるお茶が必須。だが、ここで二人は肝心な事を忘れていた。

それは、その時飲んだお茶の味である。しかし、お茶作りはクーフリーンの生きがいが。だが、以前、作った飲んだお茶は全て…。

『うえ…』

『くそ不味イ…』

そのどれもが、強烈な味わいで、口に入れたカタツシユ隊員達もこれには阿鼻叫喚。

———飲めたもんじやない。

だが、それでもお茶を作った本人であるクーフリーンは何事もなくそのお茶を嘔みしめるように飲んでいた。

玄人ならではの味わい方、それをクーフリーンは心得ている。

『……………』

「……若造にはまだ早いねん。

つまり、このスズメバチの巣を使ったお茶作りは失いかけていたクーフリーンの生きがいを取り戻す為の挑戦。

二度目の失敗はないだろう。彼らには、前に学んだ知識もある。

早速、スズメバチの巣がある現場に向かうクーフリーン達。

以前のカタツシユ隊員達の目撃証言を元にしばらく森林の中を歩くと、その発見した巣に近づいてきたのかスズメバチの姿も。

これには、流石のカルナも。

「あースズメバチいたねー、一旦戻ろっか」

「え？　なんでだよ、この先にスズメバチの巣があるんだろ？」

スズメバチの姿を発見したところで一旦撤退を進言。

それには、何故わざわざ巣を発見したのに撤退する必要があるのかとモードレッドも首を傾げた。

確かにこのまま巣に向かっても相手はあのスズメバチ。何も無い状態では危ない事は明白だ。

刺されでもしたら大ごと、スズメバチには凶悪な毒針がある事はカタツシユ隊員達なら誰でも知っている。

「モーさん痛い思いしたくはないやろ？ プスってやられるで、プスって、しかも、下手したら死んじゃうかもしれへんからな」

「そ、それはやだな…、刺されて痛い思いしたくないもんな」

モードレッドはクーフリーンの言葉に納得したように頷く、確かに相手は自然が生み出した産物。

舐めてかかれば痛い目を見るのは明白だ。ここはしつかり準備をして相対する事が一番賢いやり方である。

「私は刺される方じゃなくて刺す方が好きだ、蜂程度素手ではたき落としてやるんだが」

「さすがにそれは危ないですから一旦引きましょう？」 師匠

そう言って、スズメバチに対しての意見を述べるスカサハに顔を引きつらせながら突っ込みを入れるクフリーン。

確かに、彼女の場合はスズメバチを全部手ではたき落としそうな気がする。

しかし、スカサハ師匠もレディである、ここはアイドルとして彼女を淑女として扱わねば。

さて、そういう事でスズメバチを発見した一同は一旦退却し、対策を講じることにした。

長年に渡り培った経験、その経験からわかる。スズメバチに相對する方法、それは…。

「フルセット着てやれば今すぐ（スズメバチを）駆除できる」

「え？ 何？ もしかして、さつき話してたスズメバチの巣を駆除する気なおたくら？」

「あ、デイル兄イお帰りなさい」

森の中から撤退してきたカルナ達と同じく、鍬を担いで開墾から帰ってきたデイル

ムツドがその会話を聞いていたのか目を丸くしながら告げる。

スズメバチに対して長年に渡り戦ってきた彼らにはその戦い方は身についている。

「……四年以上も蜂と戦った猛者達。」

ならばこそわかる。スズメバチを退治するある物さえあれば、奴らを駆逐できるとい
う確信。

Y A R I O V S 外来種のスズメバチ。

スズメバチと戦う術はカルナとリーダークーフリーンは既に持ち合わせている。
数々の戦場を経て不敗、スズメバチには負ける気がしない。

「(スズメバチを駆除する為の)フルセットあるから」

「もつと大きいの駆除したことあるから」

「あんた達何なの? 業者の方?」

デイルムツドの言葉も全くもってその通りである。聞く限りスズメバチ駆除に関する業者の人の会話だ。

モードレッドも二人の逞しい会話に目をキラキラしていた。あの凶暴なスズメバチを難なく駆除できると言つてのけるのだから大したもののである。

「夏前だから、そんな、攻撃的ではないからね」

「せやねー…早くした方が巢もでつかくならんやろうし」

「スズメバチ駆除の方法を学んで数年。

もはや、彼らにはスズメバチ駆除も慣れたもの。ならばあとは道具さえあれば良い、そして、そんな事前の準備が完璧な黒子役がY A R I Oにはいる。

それが…Y A R I Oを支える名スタツフ。

「フルセット来たよーADフィンが持つて来てくれた」

「ちゃんとあるな、流石や！」

そう、ADフィンがいるのである。

道具は揃つた。これで、安心してスズメバチとも戦える。

白いフルセット、ヤリオーIII。

これさえあればもう鬼に金棒だ。早速、スカサハ師匠もフルセットに身を包みクーフリーン達と共にスズメバチの元へ。

流石にフルセットにはスズメバチ達も敵わない。モードレッドに関してはヤリオアIIIIではなく宝具、不貞隠しの兜をADフィンが改造し作り上げたフルセット、ファモさんIIIIを装着済みだ。

変形するようにファモさんIIIIを装着するモードレッドを目の当たりにしたクーフリーン達はどうと？

「やっべー！ 何それ！ モーさんのフルセットだけカツコ良すぎだろー！」

「えへへ、そうかな？」

そのフルセットの出来栄えにテンションが上がっていた。

今まで見たことないフルセット。ファモさんIIIIには宝具としての能力はもちろんスズメバチ駆除にも役立つ加工をADフィンから施されている。

これで、モードレッドも晴れてスズメバチ駆除の業者に仲間入りである。これさえあればプライベートのスズメバチ駆除も容易にできること請け合いだ。

さて、こうして、完全防備のクーフリーン達は奥へと進み、スズメバチの巣を探索す

る。森奥に進むにつれ増えてくる蜂達。

「木の上にあるかどうかやな」

「そうだねー」

それは、数年前、対馬列島でのスズメバチ駆除の経験から知っていた…。

直径70cmもなるスズメバチの巣は地上から20mにもなる木の上に、これは天敵であるクマなどから身を守る術。

冬になると、女王蜂は越冬、働き蜂も死に中は空に…しかし、今回はあいにく冬ではなく、夏前の季節、今からスズメバチが活発になるかならないかの瀬戸際。

「……狩るなら今しかない。」

そして、歩く事数分、そこには…。

「あーおったおった」

「やべ！ すげーいる！ 怖い！」

「大丈夫大丈夫、フルセット着てるから」
「ふむ、これだけいるとやはり迫力があるな」

大きなスズメバチが群がる巨大な巣が…。

怖がるモードレッドと冷静なスカサハを置いて、まずは、カルナとクーパーリンが先導するように巣に近づき状態を確認。

巣の場所は発見した。そして、スズメバチの巣を発見してまずやる事は…。

「燻ってみようか」

煙で燻る、これも、経験済み。これにより蜂は山火事と勘違いし逃げたり気絶したりする事も。

これで蜂がいなくなったことを確認すると、次に巣の回収をし。さらに、巣の中にいるスズメバチを駆除するため手順通りに蜂の巣を回収するクーパーリン達。

スズメバチと格闘すること数分、その巣にいるスズメバチは全部取り除き、無事に巣を回収。

「よし、持ち帰るか」

「一応、燻ながら帰ろう、中におつたら大ごとやからな」

「うお！ でっけー！ すげー！」

「うむ、これが蜂の巣とはな、驚きだ」

それから、戦利品である巣をカタツシユ村へ持ち帰る。道中、そのあまりのサイズに驚くスカサハとモードレッド。

二人ともスズメバチの巣を目の当たりにするのは初めての出来事。そこで、クーフーリンは二人にフルセットの中からサムズアップしこう告げはじめた。

「今度は二人にやって貰おうかな？ 手順はさっきの通りやで」

「やるやる！ やつてみてえ！」

「なるほどな、勉強になった」

次は二人がスズメバチの巣を回収する番。これさえできれば、スズメバチ駆除ができるカタツシユ隊員が増えてクーフーリンとカルナの二人としても大助かりである。

持ち帰ったスズメバチの巣を解体し、中にいるスズメバチの幼虫をクーフーリンとカ

ルナはフルセットを着たまま取り除き、分ける。

これには理由があつた。

「この幼虫、ピザにして食べると美味しいんだぜ」

「マジかよ！　すげえ！」

そう、スズメバチの幼虫をピザにして食べると美味しいのである。これにはモードレッドも度肝を抜かされた。

これは以前、蜂&蜂の子ピザを食べた時の経験から二人は知っていた。

食料問題が深刻なブリテン、いずれはこのフルセットを普及させ、このスズメバチを使った料理もモードレッドを通して普及してもらえたらという彼らの願いがそこにはあつた。

ひとまず、スズメバチの巣はこれで中身も無くなり綺麗になった。後はこれでお茶を作る。

「さて、蜂の巣は確保できたな…。残り半分は食料にするとして…」

「ねえ、しげちゃん、本当に作るの？」

クーフリーンに告げるが問題ないと言わんばかりに作業を黙々と続ける。

露蜂房に含まれる亜鉛やミツロウには精力増強と解毒の効果など様々な健康に良い成分が含まれており、平安時代の天皇も好んで飲んでいたとか。

まずは、エキスを取り出すため蜂の巣を細かく砕く。中には女王蜂がいる事もあるがそれは既に取り出し既に食料にしてあるため、砕いている最中に出てくる心配もない。

「おー、いい感じ」

「これはなかなか…」

クーフリーンが砕く蜂の巣を興味深く見つめるスカサハ。

初めて目の当たりにするクーフリーンのお茶作りにモードレッドもスカサハも興味津々だ。結果出来るお茶がどんな味なのか知らない二人はだからこそその新鮮な反応。

これには、クーフリーンも思わずにつこり。

だが、心配は募る。カルナもこの光景に思わず。

「大丈夫なの？ これ？」

と思わず口に出してしまふ。だが、クーフリーンの手は止まらない黙々とお茶作りに励む。

「素人は黙つとれ。」

そして、続いては煮る作業に入る。砕いた巢からタンパク質やミネラル分を溶かし出す。

「あー、なんか木の匂いやね」

「ん…本当だ」

クーフリーンの言葉に頷くモードレッド、確かに漂う木の香り、これには、カルナからも思わず笑いが溢れる。

色が濃くなったら巢に含まれている成分が煮出せた証、殺菌も兼ねて30分。

「……………30分後。」

「煮出せたかな」

蓋を開けてみると、そこには広がる黒いエキスが、いかにも濃ゆそうな色合い。そして、蓋を開けた途端に広がる匂いが…。

これには、クーフリーンも思わず手ごたえを感じる。

「あ、すごい匂いするじゃん」

「あ、なんかする、なんかするね」

以前とは異なる匂い、しかし、まだ油断はできない。

あの強烈な味は未だに舌が覚えている。カルナはその匂いに若干、嫌な予感を感じていた。

「これがスズメバチの巣の甘酸っぱい匂いや」

「クンクン…。確かに甘酸っぱい匂いがする」

「…うむ、確かに」

その匂いを確かめるモードレッドとスカサハの二人、完成したスズメバチ茶の匂いに期待を膨らませつつ納得したように頷く。

しかし、よく見てみると色が真っ黒、これには、クーフーリンも思わず。

「多分、カラーチャートやとこれが一番端やな」

そう、今まで作ってきたどのお茶よりも色が極端に濃い、見た限り地雷臭しかしないそのお茶。

香りこそ甘酸っぱいものの、既にカルナは確信していた。これは今回もリーダーはやらかしたのだろうと。

「……まずはリーダーから。」

「…お…これは」

思わず声に出してしまうほどの味

しかし、リーダークーフーリン、身体に染み渡る栄養を感じ取ったのか飲んだ後に話

を続ける。

「今までに飲んだ事ない味。でも身体に良いのはわかる、前作つたやつよりちよい飲みやすいかも」

その食感と味に手ごたえを感じていた。

確かに色の濃さは一緒だが、今回は新鮮なスズメバチの巣。味は前よりも酷くはないかもしれない。

続いてこのスズメバチ茶を飲むのはカルナ、モードレッド、スカサハの三人。果たして…その味のほどはいかに？

そして、この続きは…次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

モーさんの鎧がフルセットに————NEW!!
魔のスズメバチ茶を製造————NEW!!

スカサハとモーさん業者になるーNEW!!
スズメバチの駆除の指導ーNEW!!

カタツシユ村開拓記 その3

さて、出来上がったスズメバチの巣茶。

リーダークーフリーンが飲んだそれを次はモードレッドとカルナ、そして、スカサハ師匠が口に付け飲み始める。

その味は…？

「…うっ…！」

「もがっ…！」

「ん……」

口に入れた途端に顔色が豹変するモードレッドとカルナの二人。

そして、二人は飲んで間もなく口に含んだお茶をペッ…！ と後ろを向いて吐き出し、ゲホゲホと噎せ始める。

これは…？

「ぴゃあ!?! なんだこれ! なんだこれ! くっそすっぺえ!?!」

そして…?!

「にっが!?! なんじゃこれ! ペっ! ペっ!」

つまり…?!

「くそ不味い!?!」

声を揃えて涙目になるモードレッドとむせ返るカルナ。

その味はあまりにも酸っぱく、そして、盛大な苦味があった。飲んだ途端の鼻に突き刺さる匂いもさることながらザラザラとした気色悪い食感も…。

だが、このお茶を口に入れたスカサハ師匠はというと?

「うむ、少し濃いが身体には良いだろうな」

ポーカーフェイスで何事なく飲んでいた。

心なしか、お茶の風味を楽しんでいる節も…、やはり、年季が違う。そんなお茶を平然と飲むスカサハを横目に見ていた二人は顔をひきつらせる。

この師弟、揃って味覚がぶつ飛んでるんじゃないのか？ と、あの強烈なお茶は申し訳ないがカルナもモードレッドも飲める気がしない。

「…うえー…舌がおかしくなっちゃまう」

「…うん、モーさんには少し早かったな」

「意外といけるが？ そんなに不味かったか？」

「どうなってるのよ、あんた達の味覚」

思わず後引くスズメバチ茶の後味に、舌を口から出して涙目になるモードレッドを見ながら、一方で冷静に何事なくその不味いお茶を飲む二人に突っ込みを入れるカルナ。

カルナは優しく涙目になったモードレッドの背中を摩ってやる。上級茶はやはり、年若なモードレッドには早かったようだ。

口直しにモードレッドにはそのあと水を差し出してあげた。流石に後引くあの強烈

な味はなかなか忘れられまい。

何はともあれ、こうしてお茶作りも無事に済んだ。

「さてと、慣例の不味いお茶も飲み終えた事だし、開拓に戻りますか」

「せやねー、ほんじや何から植えるかな？」

「あ、土はもうできてんだ？」

「モーさんがよく耕してくれてたからやね」

そう告げるクーフリーンはニコリとモードレッドに笑いかける。

モードレッドもそうだが、他のカタツシユ隊員達も農業に関してにはベテラン揃い、この面子ならば下地である土はそこまで日を跨かずとも出来上がる。

となれば、後は植える野菜、穀物を何にするかが重要だ。

「ブリテンの気候を考えると、せやねー」

「小麦、大麦、オーツ麦が良いんでない？ 米はちよつと厳しい気がすんだよね」

「確かに、麦ならお酒も作れるしオーツ麦はフレークなんかも作れるしな」

「なんで兄ィ達こんな農業に詳しいの？」

「農家だからな」

もつともらしいモードレッドの疑問をその言葉で一刀両断してしまおうスカサハ。もう彼らの本業が何かは既に彼方に忘れ去られているようだ。

——農業歴ベテランの風格。

何はともあれ、穀物に関してはその方向で行く事に決まった。続いて野菜、野菜の生産だが。

「最初はジャガイモ、ニンジン、レタス、キャベツ、ソラマメから、きゅうりにトマトとだんだん野菜の作る幅を広げていく形にしたいんやけどね」

「ジャガイモかぁ作りやすいもんね、火星でも作れる気するし」

そう告げるカルナはクーフーリンの話を聞きながら納得したように頷く。

確かにジャガイモやニンジン、レタスやキャベツなどならイギリスでもよく生産されている野菜だ。これならば、日本と気候が異なるこの場所でも生産ができる。

そして、今回はそれだけではない、新たな試みを彼らは挑戦しようとして心に決めていた。

その挑戦とは…？

「やっぱり酪農だよ、ここはさ」

「牛を捕まえに行くか、そんなでもって馬も野生馬ひつ捕まえてこないかね」

「いや、それは流石に買おうよ……兄イ達」

「俺達に買うつていう発想はない！」

冷静なモードレッドの一言にそう言い切つてしまうカルナ。そう、彼らには買うという発想は皆無。

「……買うくらいなら作る。」

という信念の元で動いてる彼らは買うという行為自体が主に存在していない。実に生産的だが、シャルルマーニュ十二勇士の中性的な理性が蒸発している某英霊でも今の彼らを見たら迷わずこう言うだろう事は間違いない。

『YARRIOはどんな人達だつて？ うん！ 馬鹿だよ！』

あらがち間違つていない、事実その通りである。

さて、話は逸れてしまったが、こうしてカタツシユ村に盛大な穀物畑と野菜畑、そし

て、牛や山羊、馬などを飼育し、乳や乳製品を生産する酪農を目標に計画を立てる事に。

「いよいよ俺たちも酪農家か……」

「酪農は初めてやから、いろいろな人に教えてもらわなかあかんね」

「ヨーグルト作ろう！ ヨーグルト！」

思わず、新たな試みに心も踊る。

新たに酪農という手段。豊かな村にする為にブリテンという国で彼らは力を合わせ、ここに福島村の村よりも壮大な村を作りたいと思っている。

自分達の為ではない、強いて言えばこの村で、そして、この村を通してたくさんの笑顔を皆に届けたいから。

ここから、カタツシユ村の開拓が始まる。

それから、約数週間後。

無事にだん吉を使い掻き集めた農作物の種も植え終え、ひと段落ついた。野菜もこれならば来年にはよく実る筈だ。

「いやー、やっぱりスイカ植えるよね」

「一応、野菜だしなあ」

「俺ら結構スイカ作ってきたからね」

その畑には、追加できゆうりと共に見慣れたスイカも一緒に植えた。

この育てたスイカがはずれ、ブリテンの市場に出回ると考えると心が踊る。スイカ作りならば彼らの専売特許だ。

続いては、酪農だが、これは…？

「今、兄イがADフィンと柵作ってんだっけ？」

「せやねんなー、牧場作りってなかなか難しいらしいから心配やね」

「モーさんは？」

「スカサハ師匠と元気に野馬狩りと羊とか山羊とか捕まえいっとるよー」

「いよいよあの人達も本業忘れてきたね」

「ホンマやな」

クーフリーンとデイルムツドの二人は畑の土を整備しつつ、鋤を担いだまま顔を見合

わせそんな話をしていた。

「……まごう事なきブーメラン。」

おそらく、ブーメランが頭部に突き刺さって抜けないだろう本業を忘れている第一人者達。

さて、話を戻すと野菜も穀物も酪農も始める事になったカタツシユ村だが、ここに来て欠けている大事なものがある。

それは、言わずもがな……。

「あ、そろそろちゃんとした拠点もぼちぼち作らなあかんのやない？」

「確かにそうだね、モーさん領主なのに城なしじゃ、可哀想だしね」

そう告げるクーフーリンは納得したように話すデイルムツドの言葉に静かに頷く。

確かに拠点という拠点は無い、今は簡単な家という名の小屋がポツンとあるだけでこれでは立派な村作りには程遠い。

モードレッドはもう農業に没頭していて本人は忘れているだろうが一応、領主である

し、自分達としてもちちゃんとした拠点は欲しい。

「納屋建てるか」

「建てるしかないね、山城」

そう、そうなれば建てるしかないのだ。

このブリテンで神聖なる居住地、山城を建てるしかない。匠たちから学んだ家作りの技術を生かせる今ならこの場所にも建てれる筈だ。

しかし、普通に納屋を建てるなら普通にできてしまう。これでは面白くない、そこで、二人は考えたどうすべきかを。

そして、出した結論は。

「なんか、どうせならかなり丈夫やつ建てたいよな」

「せやねー、このご時世物騒やし、どうせなら破壊光線受けてもビクともせんやつがええよね」

そう、雨風だけではなく、この物騒なご時世。

破壊光線みたいなビームや爆発や攻撃を受けたとしてもビクともしない納屋をこの地に作りたい。

となれば、その材料はより最上級の木材とより最上級の防御魔術を施された納屋。

これならば、世知辛い世の中であつても、たとえ特大な天災や洪水が来ても生きていける筈だ。

「ま、まずは兄いと要相談だわな」

「せやね、あれ？　そういやヴラドとベデイは？」

「あー、マーリン師匠のとこだね、聖剣作りするつて息巻いてたからさ、あの二人」

ディルムツドは問いかけてきたクーフーリンに笑みを浮かべ肩を竦める。

そうヴラドとベデイは現在、聖剣作りの為に様々な書物を王様作りの第一人者であるマーリン師匠の元で勉強していた。

モードレッドに抜かせるための聖剣作り、この素材に相応しいものを用意する事から始める必要がある。

そちらには流石にクーフーリン達は手が回らないのでヴラドとベデイに任せつきりである。

いろいろ作るにもまだ、風呂敷は広い、何をするにしてもまずは一つ一つやり遂げなくてはならないだろう。

「伝説のラーメンもあるしなあ」

「あ、それやねんけど、どうする？」

「麺がいるよね、麺が、丁度、小麦作ってるけど最上級って訳じゃないからねえ……」

「どうせなら最上級の小麦使いたいもんなあ……、小麦の起源っていつやつけ？」

「確かエジプトじゃない？」

「あーそっか、ならだん吉を使ってエジプトに取りいかなあかな」

そう言うつてにこやかな笑顔を浮かべるクーフリーン。

つまり、小麦の起源から取ってきた小麦なら全ての小麦の神様に成る。これをカタッシュユ村に植えて育てれば最上級の小麦が出来る筈だ。

そうと決まれば話は早い、とりあえず、ひと段落ついたら古代エジプトまで飛び小麦を仕入れて来なければ！

二人はひとまず目の前にある畑を急ぎで整備しにかかる。伝説のラーメン作りもこの地のできるならばなんら問題も無い。

まだ、メンマなどのラーメンに使う具材も集めていない状況、それに、そんな伝説のラーメンを入れる器も確保に至っていない。これはこれで進めなくてはいけないノルマだろう。

次々とカタツシュ村、ラーメン作りに納屋作りとやる事は山積みだが、果たして彼らは無事に村を発展させる事ができるのか？

そして、来週はマーリン師匠の元で書物を読んでいた二人から聖剣作りに必要な素材の情報が明らかに……！

その続きは！ 次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

ブリテンに畑を作る————NEW!!
山城計画浮上————NEW!!
スズメバチ茶レンジ失敗————NEW!!

Wonderful Dash!!

前回の鉄腕／f a t eでいよいよ拠点地、山城作りを視野に入れ本格的に動き出した。

その一方でこちらはマーリン宅にお邪魔しているY A R I Oの二人、ベデイとヴラド。彼らは聖剣に関しての作り方を只今、魔術をマーリン師匠から習いつつ、書物を参考に勉強中である。

農業に関しては他のカタツシユ隊員に任せて、こちらは聖剣作りを進めねばならない。

「マーリン師匠！ ブリテンからのホイミは期待できず！一寸先はパルプンテ！」

「…いや、だからそんな呪文はないと…」

「今こそ！ カタツシユ村にルーラです！」

「どうやらこの子的には魔術の呪文らしいです」

そう言つて、真顔で演説するように謎の呪文を口走るベデイに苦笑いを浮かべながらマーリンに説明するヴラド。

もはや魔術の呪文というよりも、用語のように使っている為、ベデイが何を言っているか二人は理解できていない。

「まずは近隣にいる強力な蛮族をマヌーサ、またはメダパニさせるのです」

「…ベデイに魔術の勉強詰め込みすぎたかもしれないですねマーリン師匠」

「そうだね、マヌーサとかメダパニとか僕は聞いた事ないよ」

「さあ！ 共にドラゴラムしてヒヤダインのようにギガデインし、マダンテ的にベギラゴンからのラナルータで意表をついたところでモシヤスで敵を欺いたタイミングでバシルーラバシルーラ!!」

もう何を言っているか二人は理解できていないが、少なくともベデイヴィエールにまともな思考が働いていない事は確かであった。

確かに呪文は呪文だが、その呪文は間違つても魔術を使う呪文という類のものではない。

ーー思わず思考がバシルーラ。

元々、勉強は苦手なベディヴィエールはこうして知恵熱を出すまでになってしまった。これは人選ミスだったなとヴラドは頭を抑える。

まあ、しかしながら収穫がなかった訳ではない。

ヴラドはこんな風に魔術を教えてもらう片手間に聖剣作りに必要な鉱石が果たして何なのかという部分である鉱石を見つけるに至った。

それは…。

「えーと？ 確か血の涙石と呪獣胆石に剣の秘石、レアルタ鉱石にエードラム合金か」

「そうだね、聖剣を作るならそれくらいはいるんじゃないかな？」

「…いよいよ俺たちの冒険が始まるんだな、待つてろよ魔王!!」

「ベディ、お前は何と戦ってるんだ」

もう、方向性が色々とおかしいベディヴィエールに突っ込まざる得ないヴラド。

何はともあれ、これ以上ベティの理性が蒸発する前にヴラドはベティとマーリンを連れて共にカタツシユ村に向かうことに。

手に入れる素材はとりあえず把握した後はこれを手に入れなければならない。

とりあえず、村に帰ってきたヴラドはすぐに畑を耕しているデイルムツドとクーフリーンの二人の姿を見つけると声をかける。

「おーい！ お二人さーん！」

「だから！ 山城は天空の山城にするって言つてんじやんか！」

「なんでや！ 動く山城にする方がええに決まつてるやろ！」

「おーい……」

…と無事に帰ってきたと思いきやこちらもおかしな口論を勃発させていた。

やれ天空の城だの動く城だの何やら現実から非常にかけ離れた会話を繰り返している。
る。

それに拍車をかけるように彼らは鍬を捨てて何故か口論が白熱し何故か取っ組み合いをはじめた。

「だから！ 天空の山城だつてんだろ！」

「やから！ 動く山城やつて！ わからへんか！」

「まあまあまあ、お二人さん落ち着いて」

そして、ヒートアップして掴み合いを始める二人の仲裁に入るヴラド。しかし、仲裁も虚しく二人からヴラドはもみくちゃにされる。

天空の城だの動く城だの彼らが何を言っているかわからないが、さして、先ほど知恵熱を出していたベデイヴィエールの状態と大差ない。

——ファンタジーを夢見る四十過ぎ。

確かに今まで、ルーン魔術などを目の当たりにしてきたのだから、取り組みたい作業にも夢を持って挑みたいのはわかる。

だが、それをきっかけに仲間割れをしては本末転倒だ。

二人からもみくちゃにされるヴラドを遠目で見ていたマーリンとベデイヴィエールは顔を見合わせると首をかしげる。

「あの人達何言ってるかわかる師匠？」

「なんで僕に聞くのかな!?! わかる訳ないよ!?!」

ベデイヴィエールの冷静な質問に思わず突っ込まざる得ないマーリン。

長年にわたり魔術をやったり教えたりしているが、いきなり天空の城だの動く城だのと言われてもわかる訳がない。

しかし、このまま彼らを放つて置くわけにもいかないだろう。そこで、ベデイヴィエールは取り組み合う二人ともみくちやにされているヴラドに近づくと首を傾げたままこう話をしはじめ。

「じゃあ、動く天空の山城にしたら良いんじゃないの？」

「それだ!!」

「どれだ!? いやなんの話だい! 本当に!」

そう言って、先ほどまで取り組み合う二人が声を合わせて告げた言葉に思わず声を上げるマーリン。

ベデイヴィエールによる鶴の一声、それには思わず二人も納得してしまった。なんの話かは予想し難いがどうやら結果的に動く天空の城に決定したようである。

さて、話が纏まったところでヴラドは落ち着いた二人に戦果報告をしはじめ。

「とりあえずマーリン師匠からは魔術の使い方を教わる事ができたよ」

「うん、ヴラド君は非常に優秀だったね、こちらも教え甲斐があったよ」

「それで、聖剣に必要な鋼材も目星がついた」

「ホンマに!?!」

「おお!?! でかした! ヴラド!」

そうやって二人はヴラドからのその報告を聞いて思わずガッツポーズをする。

これで、聖剣作りの方は進みそうだ。鋼材はいくつか手に入れなければならないがツルハシにしたゲイボルクならいくらかでも掘れる。

後はカルナから自前の対神宝具という名のハンマーを借りてその鋼材を用いて剣を作れば良い。

———日本刀なら多分作れる。

その確信は確かにあった。

後は西洋の剣の作り方を鍛冶屋にいる匠から教わり、学ばばきつと聖剣も打てるはず

だ。包丁を手作りで作るディルムツドが言うのだから間違いない。
ならば…。

「それってキリマンジャロにあんの？」

「それともエベレスト？」

「いやいや待ちなさいってば、あんたら掘り行くところが極端でしょ」

後は掘りに行くだけだ。

そうとなればとツルハシを用意して行く気満々の二人を思わず静止するヴラド。キリマンジャロやエベレストに行ったところで掘れるとも限らない。

やる気満々なのは良い事だが、空回っては元も子もない。

「一応、書物に鉱石取れそうな山が記入されてたから、メモって来てんのよ、えーとね、
ハハハ」と、ハハハと…。」

「あ、そんじや俺、ADフィンと小次郎さんとこ行ってマーリン師匠とトラック作るの手
伝ってくんね」

「おう！ 気をつけてな！」

「へえー、そんなところにあんのか」

そう言つて、手を振り告げる末っ子の言葉に笑顔を浮かべてサムズアップをするクーフリーン。その横ではデイルムツドが鉱石を取れそうな場所を確認していた。

マーリンはそんな彼らのやり取りを何かを悟つたような表情で見つめていた。

いつの間にか自分もまた何かわけがわからない事に使われそうになっている事を目の当たりにすればそうなることも致し方ない。

そして、マーリンはベデイヴェイエルに連れられて小次郎の元へ。

現在、ADフィンと農業スタッフ小次郎さんはあるものの作成に取り掛かっていた。

そのあるものとは…？

「よし、ここをスパナで回せば形が見えてきますね」

「うむ、この設計図通りならばタイヤとやらは特殊なようだが」

「ですね、どれだけ重量があるものをたくさん運べるようにするかにもよるんですけれど」

そのあるものとはカタツシユ村でできた農作物を運ぶための2トトラックの製作である。

このトラックさえあれば、いろんな村にたくさんの食べ物をお届けられる。

機械修理なら、Y A R I O の専売特許。ならば、だん吉のようにこのトラックも作れる筈だ。そこで、二人はカタツシユ村での開拓を進めるクーフリーン達が少しでも作りやすいようにトラック作りを進めていた。

さすがはカタツシユスタッフ。黒子役に徹している。

と、そこへ、マーリンを引き連れた作業着に着替えたベティヴィエールがやってきた。

「トラックどんな感じ?」

「上々ですね」

「うむ、私にもこの車はなんだか非常に思い入れが強くてな」

「そっか、大型運転できる人つてなかなか居ないから頼もしいね、俺らはみんなできるけど」

「というより作ってるよね? なんだいこれ、こんなデカイもの作る上に操れるって…」

「君らなんなんだい」

「そうです、僕らが宅配便Y A R I Oです」

「……場所が届けるんじゃない、人に届けるんだ。」

そう、皆が待ち続ける限り宅配便YARRIOは何処まででも宅配に参ります。例え、古代でも現代でも皆の夢を届ける為に。

マーリンはベディのその言葉に頭を抑え左右に首を振る。今までマーリンもいろんな魔法を使ってきたが、ここまで馬鹿げた発想をするのは彼らくらいだろう。

「よく配達やってたからね」

「いやーベティさんあの時生き生きしてましたもんね」

「私もいつハンドルを握れるのかワクワクしておる。これ、1車両デコトラにして良いか?」

「お! 粋だね! 流石は小次郎さん! 武士道出てる!」

「……………」

彼らの会話を呆然と見守るしかないマーリン師匠。

自分も一応、王様を作った職人と呼ばれてはいるものの、こんな常識が外れたものを

目の当たりにさせられては言葉を失うしかない。

しかし、このトラック作りの為にベディはわざわざマーリンをこの場所に呼んだのである。

ブリテンの各地に物資を届ける為の発信地をこのカタツシユ村で行う為に。

———物流が始まる。

とりあえず、まずはトラックの完成が急がれる。これがなければ物流も始まらない。

ベディヴェイエルもまた、トラックの作成作業に加わりスパナを握りしめ、作成中のトラック作りに加わる。

「ほら！ マーリンさん！ 早くこっちきて！ トラックの作り方教えるから！」

「あ、ああ……うん、なんだかわからないけど……わかったよ……」

「よし、作業がこれで捗りますね！ こちらを溶接しなきゃいけないので私はカルナさん呼んできます」

「じゃあ！ 気合い入れてやるか！」

そうやってハチマキを頭に巻いて気合いを入れ直す農業スタッフ小次郎さん。

トラックの運ちゃん魂に火が灯る。自分が運転するトラックを作っているのだ。これに燃えない男はいない。

マーリン師匠を加え、トラック作りに力が入るカタツシユ隊員達。

聖剣に必要な素材も目星がつき、物資が滞り気味のブリテンにいよいよ物流が始まるうとしている。

futureに繋がる物流の拠点カタツシユ村。

この村はこの先どんな発展を遂げようとしているのか？

そして、クーフリーン達が話していた動く天空の納屋。山城とはいったい？

この続きは！ 次回！ 鉄腕／fateで！

今日のYARIO。

天空の山城建設予定—————NEW!!

聖剣作りの素材を目星—————NEW!!

ブリテンに物流が始まる—————NEW!!

多分、日本刀なら作れるアイドル
ベデイがパールプンテに掛かる
2 t t ラツクをブリテンで作る
NEW!!
NEW!!
NEW!!

聖劍作り

その1

さて、前回の鉄腕／f a t eでは、新たに山城の建設と聖劍作りに進展があったカタツシユ隊員達。

そして、現在、リーダーのクーフリーン、デイルムツドの二人はというと？

「いやー、まさかまたアルスターサイクルに帰ってくる事になるとは思わなかったね」
「そうだねー」

聖劍作りに必要な鉱石を掘りにアルスターサイクルにまでだん吉を使いカムバックしていた。

というのも、聖劍作りに必要な鋼材がどうやらこのアルスターサイクルにあるコノトという土地に眠っているという情報をADフィンから聞き出したからである。

よって、アイルランドの土地に詳しい二人はこうしてわざわざこうしてだん吉を使い

出向いた訳である。

だが、ここで、二人には見落としがあった。それは…。

「ふつつつふ、二人とも、私を差し置いてアルスターに戻るなんて良い度胸じゃないか」
「あ…」

「し、師匠!? いつの間にだん吉に…!」

そう、それは師匠であるスカサハがだん吉にひっそりと潜り込んでいたという見落としだ。

というのも、狩りに出掛けた筈の彼女なのだが、長年培った勘がよろしいのか、それとも、誰かのタレコミかこうして引っ付いてきちやった訳である。

二人の肩に手を回すスカサハは満面の笑みを浮かべていた。その表情は何処か子供っぽくしてやつたりという顔である。

「ん? どういうことなんだーしげちゃん」

「僕らは作業分担のつもりやつたんですけどね、師匠ついて来ちやいましたか」

「来ちやったな♪」

「そっか、来ちやったなら仕方無いよね」

そう言つて、お茶目な返答をするスカサハ師匠にツルハシを担いだままの二人は仕方無いといった具合に笑みを浮かべる。

確かにアルスターならば、スカサハも土地勘や知識も詳しい筈だ。ならば、鉱石を手に入れる場所も早く見つけ出すことができる。

となれば、これは逆にクローリン達には心強い助っ人だ。あとはツルハシで掘る場所を探すだけだが、まずは、その探す場所の領主に許可を貰う必要がある。

そこで…。

「コノートつてどこらへんだっけ？」

「確かここらへんやったよね？」

「ふむふむ、あ、確かにヴラドの奴が言っていた場所の一箇所目はコノート領内だったな」

「いやはや、これは骨が折れそうやね」

「またまた、満更でもない癖にー」

そう言つて、ツルハシを弄りながら笑みを浮かべるデイルムツド。確かにツルハシはどちらかと言えば鍬の扱ひ方に近い、それに、ゲイボルクを加工したものならば、きつと、作業も円滑に進めれる筈。

——ツールハシが似合うアイドル。

彼らは農業が得意な農家だけではない、そう、鉱石掘りもできるアイドルなのだ。

という事で早速、いつの間にかだん吉に紛れ込んでいたスカサハを含めた三人はコノートの領内で鋼材を掘るべく領主の元へ。

このコノートという土地であるが、ここにはメイヴという女王がおり。

史実では、夫のアリル・マク・マータとどちら財産が多いのかを競うクーリーの牛争いというアルスター王国とコノート王国との間に起きた七年にわたる戦争のきっかけを作った人物として有名である。

そもそも、このアルスターサイクルであるが、名牛の奪い合いをめぐり、アルスターが、ライバル国コノートをふくむ他の四州を相手に戦争をくりひろげる物語である。

だが、Y A R I O の彼らはという？ 『え？牛？ 養殖して増やせば良くない？』
という考え方であるからして、全くそんな事に縁遠い話なのである。

果たして、物語の主人公というか、主役がそんなことでいいのかどうかはもはや神にもわからない。

ということ、女王メイヴであるが、史実のクーフリーンの死のきっかけになったキーマンであるのだが、当の本人はというと？

「それじゃメイヴさんに会いに行かなあかんね」

「いつものようにこんにちはーで」

「よし、決まりだな」

全く気にも止めていない様子。

そもそも、騎士ではなく産まれながらのアイドル兼副業農家にゲツシユなんてものは鼻から無関心な物なので死に至る事もおそらく考えにくいだろうがあまりにも無警戒過ぎる。

そんなこんなでいつものように軽いフットワークでコノートの城にお邪魔する事にしたY A R I O一同。

そして、コノート城に訪れた彼らは早速…。

「こんにちはー！ 僕らY A R I Oというものなんですけど、メイヴさんいらつしやいますか？」

「ん？ …誰だつて？」

「あ、僕らアイドルでして」

「あ、アイドル？」

「農家の方が伝わんじゃない？リーダー」

「いや、むしろこの場合鉱夫だろう」

そう言つて、デイルムツドの言葉に更に付け加えるスカサハ。重要なのはそこではない気はする。現に門番の二人は顔を見合わせて首を傾げていた。

と、そこで、デイルムツドはポンと手を叩き、何かを思いついたように門番の二人にこう話をしはじめる。

「あ、この人クーフーリンつて言うんですけど」

「え!? も、もしや！ 噂のクランの大工と名高いあの!？」

「そうなんですよー、建築の件でお話がありましたー」

「どうぞ！ どうぞ！ いやー！ やっぱり風格ありますね！ 名大工だけあつて！」

「え？ ホンマに？ いやー照れるなー」

どうやらクランの大工で名高いクーフリーンという通名で通ってしまったらしい。

どういう原理かはわからないが、門番達は嬉しそうにリーダーであるクーフリーンに握手を求めてきた。

——大工で名高いアイドル。

門番達は彼の話を良く耳にしていた。

なんでも立ち寄る村に多大な功績をもたらしながら旅するクーフリーンと呼ばれるクランの大工という素晴らしい人格者がいるという事を。

その生まれも太陽神ルーとコノア王の妹のデビテラという半神半人という生まれ。

英雄と成るべくして生まれたと言っても過言ではないが残念ながら本人としてはアイドルであるのが希望であり、彼は農民や農夫から好かれている。

それに影の国の女王と名高いスカサハの愛弟子である。そんな彼の名前を聞けば知らない者など居ない。

「あ、サイン書こうか？ はい」

「おー、久々にアイドルっぽい事やってるねリーダー」

「サインなんか書いたの何年振りやろうかね」

「ありがとうございます！ いやあ、嬉しいなあ！ うちの村にも今度立ち寄ってください！ 是非おもてなしますのです！」

「え？ ホンマに？ なら今度立ち寄ってみますね？」

そう言つて、にこやかに門番と握手を交わすクーフリーン。

それからしばらくして、門番から通された三人は城内に招かれる形で足を踏み入れる事ができた。

城内にいる従者から案内された三人はすぐに女王メイヴに目通りが叶う事になった。コノートを収める女王、果たしてどんな人物なのか？

なんやかんやでトントントン拍子に話は進んでいるが、彼らの目的はただ一つ、採掘をしていいかどうかを彼女に聞く事。

断られればまた他の方法を探す他ない、話がわかる方で良ければいいが…。

そうこうしている間に女王メイヴが待つ、応接の間に通された三人。そこには椅子に座るコノートを治める女王が鎮座していた。

彼女は人懐こそうな笑みを浮かべ、城を訪れた三人にこう語り始める。

「いらつしやい、クランの猛犬殿、話しかねがね聞いているわ」

「どうもこんにちはー!」

「僕ってそんなに有名人やったんやね、こちらこそ光栄ですよ」

そう言つて、メイヴに元氣良く挨拶をしながら、メイヴの前で膝をつき笑顔を浮かべるクーフリーンとデイルムツド。

話してみれば案外、悪い人ではなさそうだ。これならば、割とあっさり鉱石掘りを許可してもらえるかもしれない。

そんな中、スカサハは膝を付かずジーンとメイヴに視線を向けている。果たしてどうしたというのだろうか？

するとしばらくして、スカサハはコソコソとクーフリーンの耳元に口を近づけるとこ
う話をし始めた。

「気をつけろ、しげちゃん、こいつから泥棒猫の匂いがする」

「え？ 猫？」

「ああ、あれは胡散臭い類の人種だ。警戒しとかなないと何を言われるかわからんぞ」

そう言つて、クローフリーンに告げるスカサハ。

それを目の前で見ていたメイヴは相変わらず笑顔を崩してはいないものの内心では自身に膝を付かないスカサハに眉を顰めていた。

女王であり、クノートを治める自分に膝を付かない無礼者、そして、あろうことか自分の目の前で密かに耳打ちしていれば気分は良くない。

「貴女、クノートを治める女王の私に膝を付かないとは少々無礼じゃないかしら?」

「ん? ああ、すまないな。生憎ながら同じ立場の者に付く膝は持ち合わせていないものでね」

「なんですつて?」

「私はスカサハ。影の国を治める女王だ、その私が貴殿に膝をつく理由があるかな?」

自信ありげにスカサハはしてやったりと言わんばかりに女王メイヴにそう告げる。

だが、これを見ていたクローフリーンはため息をつくときとスパン! と師匠であるスカサハの後頭部をはたきその場で正座をさせる。

このいきなりの光景に女王メイヴは目をパチクリさせていた。それはそうだろう、彼の師匠であるスカサハがまるで猫のように大人しくなっているのだから。

スカサハと聞けばメイヴもその名は知っている。武勇に秀でており神霊の類と戦い続けているうちにその存在と同等かそれ以上になった者だ。

それが、こうも簡単に…。

「あんたはもー！ そうやって無駄に意地張るんやから！ お願いにきとるんやから そんな態度したらあかんやろ！」

「うっ…！ い、痛いだろ！ なぜ私が…！」

「礼節は大切やで、自分達の態度が相手の心を開くきっかけになるんやから」
「…む…むう…だが、私も女王で…」

「……………気持ちにはわかる。」

だが、これとそれとはまた別の話だ。確かに同じ立場の人間に膝をついて話すのはスカサハとしても面白くなく、しかも、その相手が直感的に胡散臭いと判断した相手ならば尚の事だ。

しかしながら、YARRIOを長年にわたり率いてきたクーフリーンだからこそわか

る。

お願いする立場だからこそ、メイヴさんに気持ち良く自分達の願い事を聞けるようにする努力をするべきだと。

それをクーフリーンから聞かされたスカサハは致し方ないと仕方なくコクリと頷くとクーフリーンとデイルムツドに並んで膝を付く。

そんな二人のやりとりを見ていたメイヴは首を傾げていた。そして、ひと段落ついたところを見計らったようにデイルムツドは話題を変えるかのように今回訪れた要件についてメイヴにこう語り始める。

「あ、僕らが今回、メイヴさんのところに訪れたのは実は聖剣作りに必要な鉱石を掘らして貰いたいなと思ひまして」

「聖剣ですって!?! 何その面白そうな話!」

「はい、実は僕ら鉄腕/fateという企画で聖剣作りをやってるんですけど、その鉱石の一つがこの土地にあるみたいで」

そう言つて、話に食いついて来たメイヴに付け加えるように語るクーフリーン。

メイヴは聖剣作りと聞いて嬉しそうに目を輝かせていた。つまり、この話の流れなら

ばもしかすると？

そんな期待を膨らませるカタツシユ隊員達、すると、メイヴはにこやかな笑顔を浮かべたまま三人にこう語り始める。

「あー、それでわざわざ私のところに来たわけなのね！ いいわね！ 気に入ったわ！

許可します！」

「えー！ つて事はコノートで鉱石を掘っても…」

「セーフです♪」

「じゃあー！」

なんとあっさり許可を得る事に成功した。

女王メイヴちゃん、意外と話してみると良い子であった。思わず、スカサハ師匠の言葉に多少なり警戒はしていたがやはり誠意ある態度で臨めば相手も応えてくれる。

という事で、鉱石掘りの許可を得たことで後は目的地に向かい鉱石掘りを行うだけだ。

と、ここで、話が上手く進んでいる中、女王メイヴはパン！ と手を叩くとにこやかな笑みを浮かべて彼らにこう語り始める。

「あ！ なら、私も同行してよろしいかしら？ 貴方達のような英雄の勇姿を間近で見たいわ♪」

「え！ そのままでしてくれるんですか？」

「おい、デイル…それは」

そう、なんとあろうことかメイヴちゃんが仲間になりたそうにこちらを見て来ながら同行を願いでてきたのである。

これにはスカサハも思わず顔をしかめた。流石にこれを同行させては下手をすれば Y A R I O を解散させる爆弾を抱える事になるのではないのかと危惧してだ。

女王メイヴはひたすらに清楚に淫蕩を好み、無垢に悪辣を成す。それらはどちらも彼女の本当の姿であり、どちらも偽りではない。しかし天真爛漫の微笑みもあつてか、多くの者は「清楚で無垢」という印象で見ることが多い。

こういった類の女は騙される男の方が多いに違いない。いい男と強い男、財も大好きで、自分の欲望に一切逆らうことなく、数多くの男たちを恋人としたメイヴ。

彼女にとって必要なのは優れた兵士と美味しそうな領土。そんな彼女の胡散臭い本質をスカサハは感じ取っていた。

だからこそ、同行と聞いてスカサハは難色を示しているのである。だが、そんなスカサハの心配を他所にクローリーンとデイルムツドはというと？

「それじゃ、はい、ツルハシ」

「え？」

「そんな肌がでてる格好なんてしてたら危ないよ、はい、ついてくるならこれに着替えるんやで」

「……………」

なんと、ツルハシと農作業の服をメイヴに手渡していた。

そう、メイヴのように露出がある服では鉱石掘りをするのは危ない、肌を切るかもしれないし、綺麗な肌が泥まみれになるかもしれない。

そんな事を想定していないカタツシユ隊員達ではない、すぐに同行を願い出たメイヴに服とツルハシを用意してあげた。

これにはスカサハも頭を抑える。

「おい、お前達、ほんとに同行させるつもりか？」

「え？ だって手伝ってくれるみたいだし」

「なんだかあれやね、僕ら的には女子アナ同行させてるみたいな感覚やから」

「…これ、着なきやだめなの？」

「はい、着てください」

そう、作業着は大切な必需品、鉱石を掘りに行くなら尚更着てもらわなくては困る。

まあ、着るのが嫌でついてこないという方法もあるが、その場合、聖剣作りにメイヴは携わる事なく彼らの作業を目にかかる事はなくなるだけだが。

それを察する事が出来ないメイヴではない、すぐに作業着に着替えるとカタツシユ隊員達の戦列に加わりスーパーケルト農女がここに爆誕した。

つまる話が、他人から奪うのではなく生み出すのがY A R I Oの本質。奪われるならばいらなくなるまで生み出せばいいのだ。

「…私にこんな格好させるなんて…」

「え？ でもめっちゃ似合ってますよ？」

「ほんまやね！ やっぱりメイヴちゃんには農作業着似合うと思ってたんよ」

「そ、そうかしら？」

そして、忘れてはいけない、彼らはアイドルなのである。女性の扱いも手馴れたものでこうしてのせるのも朝飯前。

二人に煽てられたメイヴは上機嫌にツルハシを担ぐと満面の笑みを浮かべている。そんな上機嫌な彼女はビシッとクローフリーンとデイルムツドを指差すところ告げる

「よし！　ますます気に入ったわ！　なら貴方達は今日から私のダーリンね！」

「あ、ごめんなさい、流石にそれは無理かなあ、僕らアイドルなんで…」

「マネージャー通して貰わないとね、やっぱり」

「速攻で振られた!?　嘘でしょ！」

その言葉を聞いたメイヴは驚愕するしかなかった。まさか、二人から一斉に拒否されるとは思ってもみなかったからだ。

これにはスカサハも爆笑しそうになるが、堪えるようにして口を抑えたまま悶えている。

こんな体験はメイヴも初めての出来事だ。大概の男は自分が恋人にしてあげると言えば付き従うのだが。こいつらはそれを一蹴。

一筋縄どころの話ではなく、もう、即轟沈させられたのである。

メイヴは涙目になるが、二人はサムズアップしながら彼女の肩をポンと叩きこう話をしはじめた。

「ほらメイヴちゃん美人だし！ 可愛いから！ 俺達にはもったいないし！」

「そうそう！ とりあえず鉱石掘りにいけばなんか見えてくるかもしれないからな」

「グス…、ほ、ほんとに？」

「あー、鉱石掘るガテン系女子見たいなー」

「きつとメイヴちゃんツルハシ使うの上手いんやろうなあ」

いかにもわざとらしく煽てるようにメイヴにそう告げる二人、彼女の本質はなんとなく彼らも掴んできた節がある。

本業での経験がここでも生きた。

機嫌を取り戻し作業着を着たメイヴはツルハシを担ぐとすぐさま三人にこう告げる。

「さあ！ それじゃ鉱石を掘りに行くわよ！ 私に夢中にさせてあげるんだから！」

そんな上機嫌な彼女の後ろ姿を見ていたデイルムツドとクーフリーンの二人はとうと腕を組んだまま、しみじみとした表情を浮かべこんな話をしていた。

それは、まるで若いって良いなあと羨むおっさん達の図である。

「とういうわけで労働力を約1名確保やね」

「いやー頼もしいね」

「あはははは！お前達はほんとに最高だな!!」

そして、そんな一癖も二癖もある愛弟子たちの肩に手を回しながら、笑顔を浮かべるスカサハ。

こうして、新たに女王メイヴを労働力として加えたカタツシユ隊員達。

彼女の許可を無事に得る事も出来た。あとは聖劍作りに必要な鉱石を掘り出して持ち帰るだけだ。

必要な鉱石はこの場所以外にもまだある。となれば、このアルスターサイクルになるべく長居は無用だ。

さて？ お目当ての鉱石を無事に掘り出して彼らは持ち帰る事ができるのか？

この続きは、次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

スーパージェルト農女爆誕—————NEW!!
大工で名高いアイドル—————NEW!!
メイヴちゃん鉱石を掘りにチャレンジ—————NEW!!

聖劍作り その2

さて、前回の鉄腕／f a t eでコノートでの採掘を許可されたクーフーリン達。

新たに同行することになったスーパージェルト農女、メイヴちゃんを仲間に加えやって来たのはとある山の麓にある洞窟。

コノートの城からおよそ数キロほどだん吉で移動したところにその洞窟はあった。

「いやー、立派な洞窟やね」

「うむ、こんな場所があるとはな、修行にも使えるかもしれん」

「師匠、何の修行する気ですか？」

そう言つて、綺麗に広がる洞窟の入り口に立ちスカサハに突つ込むデイルムツド。

確かに修行と言つてもデイルムツドやクーフーリンが思いつくのは滝に打たれたりなどという修行だ。

しかし、スカサハはツルハシを担ぐ二人にニヤリと笑いかけるとこう話をし始める。

「知りたいか？　まず、洞窟にいるコウモリを刺激して…」

「あー、なるほどね格闘漫画でなんか読んだことあるわ、それ」

「むうー、私に最後まで説明せんか！」

「あいたつ！」

そう言ってスカサハは納得したように話すデイルムツドの頭をかるくコツンと軽く小突く。

まさか、そんな知識がデイルムツドにあると思っていなかったスカサハは少しだけ不満気味になっていた。

スカサハ的には最近、弟子の修行をしていないせいもあって本職の血が騒いだというのに水を差されたような気分である。

まあ、ともあれ、今回の目的は地上最強を目指す格闘士になるべく修行する事ではなく、聖剣作りに必要な鉱石を持ち帰る事だ。

「ねえねえ、クーちゃん、何処らへんから掘れば良いの？」

「そうやね、ひとまず…」

とディルムツドとスカサハがやりとりを繰り返している間にメイヴがクーフリーンにツルハシの使い方と掘る箇所についてレクチャーを受けていた。

ツルハシを用いての採掘だが、これにはまず安全を確保した上で採掘を行う必要がある。

まずは、お目当ての鉱石を探すところからだ。ルーン探知機を使い、洞窟の中を探索して鉱石が採れそうな箇所を探す。

中にはスカサハが前に言っていたようにコウモリなどがある可能性があるので刺激しないように松明を設置しながら奥へと進む必要があるだろう。

「中、暗いわね、足場に気をつけないと」

「なんだか冒険隊みたいやねー」

「小学生の頃だったらテンション上がってたんだらうけどね」

「歳重ねてまうとやっぱりそうなるよなあ」

「そうか？ 私は案外ワクワクしているぞ」

そう言って、洞窟を進むスカサハは何処か満足そうにクーフリーンに告げる。

「……小学生のような冒険心。」

スカサハ師匠は未だにその心を忘れていない様である。暗闇の中でも新たな発見があるのでは無いかという期待で満ち溢れていた。

非常にエネルギーシユな師匠である。カタツシユ隊員達にも見習って欲しいところだ。

さて、進む事、数十分後。

ある程度ツルハシを担いで洞窟を進んだところでルーン探知機に反応が…これはもしや…!

「お！　ここらへんやね」

「はあ…はあ…。ようやく着いたのね…足が疲れちゃったわ…」

「ゆつくり休んでええよメイヴちゃん、ちよつと休憩挟んで作業再開する予定やからね」
「いやあ、こんなわかりやすく反応出るもんなんだねルーン探知機」

そう言つて、歩き疲れたメイヴちゃんを座らせて一旦休憩を取る事にするカタツシユ

隊員達。

さすがに歩き疲れるのもわかる。洞窟の中はなかなか進み難い道もあり、その前には軽く山道を挟んで歩いて来た。

ここらへんで休憩を挟まねば流石に肉体的にも作業に支障が出るかもしれない、休めるときに休むのは必要な事だ。

さて、休憩に入ったところでカタツシユ隊員達も昼食もついでに取る事に、食事は働く前には大きなエネルギーになる。

「メイヴちゃんの分もちゃんとあるからね」

「……？ 何かしらこれ？」

「え？ メイヴちゃん食べた事無い？」

それは、ブリテンで採れた鯛の煮付け。

以前、0円食堂をした際に採れた鯛の仲間を調理した際、煮付けにしたものを持ってきた。

さらに、デイルムツドは醤油漬けにした鯛のお刺身を取り出す。

これを持って来たごはんの上に乗せ、さらに、持って来ていた熱いお湯をかけてやる。

すると…?」

「鯛の茶漬けと煮付け昼食セットの出来上がり」

「…何かしら…こんな食べ物初めて見るわね」

「はい、匙の方が食べやすいやろうからね」

「これ師匠の分ね」

「ん…すまないな」

そう言ってクーフリーンは持って来ていた匙をメイヴに手渡し、デイルムツドは食事を配り終える。

コノートの洞窟で食べるブリテンの魚を使った料理、そのお味は…?

「?! これ!? 美味しいわね! 食べたことない味だけど!! これデイルが作ったの!?!」

「リーダーと一緒に仕込んできたから、まあ、二人で作ったって感じかな? ね? リーダー」

「前に使った魚、余ってて良かったなあ」

「うむ、相変わらずの食事の腕だな二人とも」

ごはんに染み渡る醤油漬けにした鯛の味。

口に入れた途端にその風味が広がり、メイヴとスカサハの二人は満足気味にそう告げた。茶漬けという文化を未だに知らなかった二人には新鮮な味わい。

煮付けもまた、簡単な味付けであるが良い出汁が出ており、昼食にしては十分に満足できるようなセット。

「付いて来たのが俺で良かったあ、リーダーと兄イなら多分、下手したら洞窟にいるコウモリ焼いて食うとか言い出しかねないかんね」

「えー？ でもカエルと蛇は焼いて食えるで？」

「なんでも焼けばいいという問題じゃない」

「……たいがいのものは焼けば食える。」

確かに焼けば細菌などのものは焼却できるだろうが、なんでも焼けば食っているという発想は料理人、デイルムッドには理解しがたいものがある。

リーダーもそうだが、カルナに關しても無人島に流れ着いたお弁当箱を開けて中身が

意外と食べれそうだとか、とりあえず口に入れて味を確かめるだとか大概の野生児だ。

そんな、二人が揃えば食べそうなものを焼いて塩などで適当に味付けした挙句食べるに違いない。

「失礼やなあー僕は意外と料理上手いんやで？」

「前まで味音痴だったじゃん、お茶作りに関してもだけどさ」

「……………。そんなことあらへんよ？」

「今の間は何？」

そう告げて、視線を逸らすクーフリーンにディルムツドはジト目を向ける。

兎にも角にも、昼食も無事に済ませ、作業に入る準備はこれで整った。後は鉋物を掘り出すだけだ。

ツルハシの指導をメイヴに行いながら無理なく作業を再開し始めるカタツシユ隊員達。さあ、お目当の鉋物を手に入れて来ることはできるのだろうか？

さて、一方その頃、牧場作りに勤しんでいるカルナはというと？

「ぶえつくしゆい!! ん? 誰か噂してんのかね?」

「おーい兄イ、杭の設置場所ここでもいいのん?」

「んあー? ああ、そこに打ち込んだいて」

ブリテンにあるカタツシユ村にて、木槌を片手に牧場作りに励んでいた。

というのも、前回の鉄腕 / *fat e* で酪農を始めるにあたり、牧場の建設に取り組む必要があつたからだ。

動物を調達しに出かけたスカサハはいつの間にかだん吉に忍び込んでおり、モードレッドが彼女の分まで動物を集めに奔走。

そして、ただいま、カタツシユ隊員の一人であるヴラドがその牧場作りを手伝っているのである。

「モフモフ♪ モフモフ♪ モッフモフ♪」

「おーいモーさんや、上機嫌なのは良いけどお兄さん達を手伝っておくれー」

「…んへへー、羊って意外と可愛いんだよなあ」

「メエー」

そう言いながら、モフモフする羊の毛に顔を埋めるモードレッドを微笑ましく見守りながら告げるカルナ。

羊を集めにモードレッドが頑張ってくれたおかげで、ある程度の動物は確保出来てきた。他にも馬に牛、そして、ヤギの姿も…。

これならば、養殖していき、いずれは安定した食料供給をブリテンにできるようになるのも近い。

後は牧場作りを進めて、整地を行い、動物達が住みやすい環境を作つてあげなければ。羊のモフモフをしばらく堪能し、カルナから杭と木槌を受け取つたモードレッドも同じく牧場作りに加わる。

「いやー楽しみだなあー兄ィ！ こいつらが国を豊かにするんだもんな！」

「そうだぞー、だからこうやって牧場作つてこいつらが住みやすいようにしてやらないとな」

「…はあ、だからその間、動物が逃げ出さないように僕が呼ばれた訳か…」

「その通り！ 流石は師匠！ 頼りになります！」

そう言いながらため息を吐くマーリンにカルナはにこやかな笑顔を浮かべたまま、サ

ムズアツプをして応える。

牧場作りに欠かせないのが、このマーリン師匠の魔法。トラック作りを手伝っていた彼をわざわざベディ達の元から借りて来た。

現在はモードレッドが捕まえてきた野生の動物達に大人しくする魔法を掛けてもらい、足留めをしてもらっている。

こうする事で、興奮して動物達が逃げ出さないようにしているのである。この状態が保てるのであれば牧場作りの作業が終わるまでなんとかなりそうだ。

「むふふ、どうなるか楽しみだなあ…」

「そうだねー、モーさん」

「牧場おつきくなったら父上どんな顔するかなあ」

「びっくりするんじゃない？ モーさんすげえ!? ってなると思う」

「マジか!? よーし！ ならもつと頑張らなきゃな！」

キラキラしながら作業をするモードレッドの姿に思わずほっこりするカルナ。

最近になって教えた技術がものになってきたせいかな、筋が非常に良くなってきている。これならば、いずれは山城作りに聖劍作りにもモードレッドが加わる事ができる筈だ。

…と、ここで、カルナは何かを思い出したようにポンと手を叩く。

「あ、そうだ。モーさんに渡すもんがあったんだわ」

「? へ? なんだ渡すものって?」

「これなんだけどさ、流石に年頃の女の子が農作業だけじゃって思って、リーダーと作ったのよ、服」

そう言いながら、思い出したカルナはそのモードレッドの為にクーフリーンと作った服を取りに作りかけの農場の小屋の中へ…。

それは、牧場を作るにあたり二人がだん吉に乗りわざわざモードレッドの為に素材を集めて作り上げた手作りの洋服。

白のチューブトップに切りとられた茶ジーンズの短いパンツという、身軽さを追求した洋服であった。

「カウガールつてのがあつてさ。テキサス州とかで流行してたみたいなんだよねこの格好、モーさんに似合うかと思って」

「おお!? こいつはかなりイカすなあ!! やっぱり兄イとリーダーのセンスは最高だぜ

！」

「茶色の長ジーンズもあるけど…」

「いや！ 俺はこれが気に入った！ これ着る！ 絶対着る！」

どうやらモードレッドのお気に召した様子であった。動きやすくてその上、牧場に似つかわしい格好、それに何よりもデザインが気に入った。

動きやすくて、その上、着やすいとくればモードレッドも大満足だ。

「そっかそっか！ 作った甲斐があった。後はこれな？」

それは良かったとカルナは喜ぶモードレッドに頷きながら、フリスビーのように彼女に何かを投げる。

モードレッドはカルナから投げ渡されたそれを難なく軽く片手でキャッチした。

「ん？ なんだこれ？」

「カウボーイハット、これが無きややつぱりはじまんないでしょ？」

「こう被れば良いのか？」

モードレッドはカルナから投げ渡されたカウボーイハットを首を傾げながら被る。妙に頭にしつくりくるそれは、モードレッドにぴったりであった。

ファモさんもとい、可愛い牧場娘、カウモーさんの出来上がりである。

カタツシユ村の牧場に可愛い看板娘がこうして無事に出来上がった。じゃじゃ馬娘がじゃじゃ馬に跨る図が見れる日もそう遠くはないだろう。

「さて、そんじや渡すもんも渡したし、さつきと終わらせて一休みしようか、どうせ一日じゃこれ出来上がんないしね」

「そっかー、まだ完成までは時間かかる？」

「後数週間掛からない位じゃない？」

そう言いながら、首を傾げながら訪ねてくるヴラドに告げるカルナ。

農場の敷地の整地はもちろんだが、動物達を収納する小屋もいる。まだまだ完成は先になる事が予想されるだろう。

マーリン師匠にはその間、負担を強いる事にはなるが…。

「この程度の魔法くらいなら、まだ美味しい食事と睡眠さえあればなんとかなるね」

「ごめんね、マーリンさん、美味しい食事ならすっかり作るからさ。ヴラドが」

「え!? そこは兄イが作るんじゃないの!？」

「えー…」

「えー、つて何、えーつて」

「俺もヴラド兄イの料理たべたいなあ」

「あー…もう、仕方ないなあ全く」

ヴラドはカルナとモードレッドにそう言われ、致し方ないと肩を竦めてため息を吐く。

協力してもらっているマーリン師匠がいる手前、美味しい食事を提供して奮起してもらわなくてはいけない。

そこで、この串焼き公、ヴラドの腕の見せどころというわけだ。

「そんなじゃ食料調達してきてよ、鶏肉とかその他もろもろ」

「よっしゃ任せられた! 行くぞ! モーさん!」

「じゃあ! 狩りの時間だー!」

カルナからそう言われたモードレッドは手頃な剣を片手に力強く彼に応える。

そう、まだ牧場も農場も穀物や動物達を入れたばかり、食料は別口から手に入れなければならぬ。

ならば、どうするか？ 答えは簡単だ。現地調達すれば良いのである。これが、彼らが無人島を開拓する上で学んだ事。

食べれそうな野草、そして、お肉、魚などならこのブリテンを探せば見つかる筈。カルナとモードレッドは勇ましくカタッシュ村の周辺に食料が無いか早速散策に向かった。

さて、牧場作り、聖剣作りも順調に進みつつあるカタッシュ隊員達。

果たして村を開拓する彼らは無事に目標を達成できるのだろうか？

この続きは……！ 次回、鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

だいたい焼けば食える……NEW!!

カウモーさん上機嫌……NEW!!

カタツシユ村牧場完成間近
服が作れるアイドル
—————
NEW!!
NEW!!

聖劍作り その3

前回の鉄腕／f a t eでは聖劍を作るべく、鉦石掘りが始まり、鉦石をひたすら掘りまくる事になったカタツシユ隊員達。

必要な鉦石は合計6種。これを集めて、立派な聖劍を作るわけだが、今回、このコノトにて掘れた鉦石は…？

「ひーふーみー。3種かあ…まあ、でも上出来、上出来」

「メイヴちゃんツルハシの使い方上手くなってきたんちゃう？」

「えへへ♪ ほんとー？ クーちゃん？」

そう言つて、ツルハシをギユツと握りしめて満面の笑みを浮かべ、クーフリーンに擦り寄るメイヴちゃん。

それを見ていたスカサハ師匠はプクーと頬を膨らませると不機嫌そうにメイヴにこう告げる。

「こら、私の弟子にデレデレするな!!」

「別にデレデレなんてしてないわよー? ねークーちゃん?」

「あ、ここらへんの土ええ感じやね、デイル持つて帰らへん?」

「あんたは気づいたらいつつも土触ってんね」

女性二人のやり取りをそっちのけで洞窟の入り口付近にある土を触るリーダーに苦笑いを浮かべ告げるデイルムツド。

「……土は農業の必需品。」

確かに土と言われてみれば、洞窟付近にある土は粒子が細かく、水捌けが良さげな土がある箇所がいくつもあつた。

これは持ち帰れば農作にも役立つかもしれない、土の知識EXのベテラン、クーフリーンが言うのだから間違いない。

「この土は使える」

「そうだな、お前はそういう奴だったよ」

そう言つて、真顔でこちらを振り返つてくるクーフリーンに向かつて呆れた様に告げるスカサハ。

メイヴちゃんもこれには目を丸くしていた。つまり、これは要するにクーフリーンからしてみれば…。

超可愛いメイヴちゃんの魅力く水捌けの良い土。

という構図が脳内で出来上がっているわけである。これは、数々の英雄を虜にしてきたメイヴもキョトンとするほかなかった。

「とりあえずこの土持つて帰ろ」

「だん吉から袋持つてくるか」

そして、土を持つて帰る事に話が纏まった。

袋をだん吉から持つてくるデイルムツドとクーフリーンの二人、メイヴはこの光景に

先ほどのスカサハ同様にプクーと頬を膨らませている。

それを見ていたスカサハは何やら勝ち誇った様にどうだと言わんばかりのドヤ顔を浮かべていた。

どちらにしろ二人共、クーフリーンに相手にされてないのでどっちもどっちである。

「ちよつと！ クーちゃん！ 私と土どっちが大切なの！」

「そりゃ土やろ」

「即答!？」

「いや、だってこの土で美味しいトマトとかナスとか採れたりするんやで？ なあ？」

「しげちゃん、多分そういう事じゃないんだと思うよ」

確かに美味しい野菜を採る為に良い土は大切ではあるがレディに対してそれはあんまりである。

これには流石にデイルムツドも苦笑いを浮かべるしかなかった。スカサハ師匠に関してには笑い声をあげてる始末である。

——シゲフリーンには女心がわからない。

オカン力A+を持っているにも関わらずこれである。これは結婚できんわなとディルムツドは素直にそう感じた。

さて、そして、これについては逆にメイヴの闘争心に火をつける事になる。

クーフリーンもそうだが、冷静になつて考えればディルムツドに關してもあまり自分の扱い方が彼と大差ないとメイヴは感じていた。

Y A R I O …、今まで落としてきたどんな英雄よりも手強く身持ちが堅い連中である。

アイドルというのは伊達では無いとメイヴは改めて思い知らされた。

「師匠、ツルハシ使わんで槍を突き刺しながら掘るのつて器用すぎやろ、どうやるん？あれ？」

「気合い、根性、直感だ」

「いや、それで掘れるの？」

そんなメイヴの思惑も知らず、採掘の際、器用にゲイボルクでサクサク鉞石を掘つていたスカサハに質問を投げかける二人。

採掘にゲイボルクを突き刺しながら地面を掘る器用な芸当をするのはこの二人でもやれる自信は無い。

普通にツルハシを使えば良いのではと思うところではあるのだが、このスカサハの芸当には二人も驚かされた。

「見てなさいよ…絶対、私に夢中にさせてやるんだから…」

そして、そのやり取りでさらに変な方向へとやる気をあげるメイヴ。

果たして彼らが彼女の虜になる日は来るのだろうか？ それは誰にもわからないが少なくとも心配は無さそうである。

その後、鉱石と土を持ち帰る事にしたカタツシユ隊員達だが、メイヴちゃんが彼らについて来る事になったのは言うまでもない。

さて、その頃、食料を得るべく、カタツシユ村の近くにあるブリテンの森に狩りに出掛けたモーさんとカルナは…？

「これは…獣道みたいだね」

「なるほど、ここによく動物が通りかかるって事だな」

近くの森林にてよく動物達が頻繁に通るであろう、獣道を発見していた。よく目を凝らしてみれば動物のフンや足跡も多く、間違いなく数多くの動物がこの道を利用してゐるのがわかる。

「ここならば、罠を仕掛け、野生の動物を捕獲し食料にする事だつて可能だ。となれば、やる事は…。」

「ここに仕掛けようか、括り罠」

猪捕縛用の括り罠をこの場所に作り、設置しておく。

野生の動物がいる事は分かった。それが、猪などの動物となれば、自分達がカタツシユ村で作っている農作物に害を与える可能性もあり得る。

手は早めに打っておく事が一番だ。

「猪かあ…でも兄イ危なくない?」

「え? そうかなあ?」

「そうだけ？ 猪には牙もあるし突進されたりしたらあぶねーだろう？」

「大丈夫、大丈夫、俺達めちやくちやデカイ猪倒したことあるから」

そうやって、モーさんを安心させるべく笑みを浮かべてサムズアップして応えるカルナ。

——猪退治の達人。

確かに以前、幻の豚骨スープの素材である魔猪を討伐した経験がカルナにはある。その経験がここでも生きた。

猪の習性ならば、なんとなくだが理解できている。普通の猪ならば、あの魔猪よりもしほど脅威にはならないだろう。

というわけで、猪を狩る罠を獣道に隠すように二人は設置をりはじめた。そして、忘れてはいけないのが…。

「よし、このカメラを使ってちよつとカタツシユ村から観察してみよう」

「!? なんだそれ！ すげー！」

「でしょ？ これ作ったんだよADフィンとき、なかなかの出来栄えでしょ？」

手作りで作ってみた映像を撮るためのカメラ。

これには魔術が織り込められており、ライブ中継でこのカメラを通して野生の動物、さらに海の中などの観察が出来る仕様にしてある。

このカメラさえあれば、気づかれず、どんな野生の動物が近辺に生息しているのか？ さらに、仕掛けた罠の付近に仕掛けておけば罠に掛かった際、すぐに駆けつける事ができる。

…という訳で。

「ここにカメラ設置」

「おお!! なんかめちやくちやドキドキしてきた！」

カタツシユ村にある仮拠点である簡易小屋においてある椅子に座り、早速、夜通しでVTRを撮り二人はそこで観察してみる事に。

果たして、仕掛けた罠に猪は無事に引っかかるのだろうか？

目をキラキラさせながら、カメラを見つめるモードレッド。初めての動物観察に彼女

も興味津々だ。

それから、翌日、設置してあるカメラを回収しに向かう二人、するとそこには…？

「ブヒ！ ブモオ！」

「あ、居た！」

罨に掛かっている猪が居た。

威嚇しながら猪はカルナ達をジツと睨みつけてくる。とりあえずカメラを回収し、この猪をどうにかしなくては…。

と、ここでカルナがカメラ回収について考えているとモードレッドがツカツカと罨に掛かっている猪に向かい歩いていく、そして…。

「せい！」

「ブモオ!？」

「あ…」

サクツと剣を振り下ろして猪の首を切り落としてしまった。

猪はご臨終、首が無くなった胴体は。パタリと倒れてしまう。流石は円卓の騎士、劍の扱い方を心得ている。

「モーさん遅しいねえ」

「なんか危ないかなって思ってたけど、よくよく考えたら戦とかに比べたら大した事ねえなって思ってた」

「いやいや、サククリやり過ぎでしょ」

倒れた猪の死体を見ながら満面の笑みでサムズアップするモードレッドにカルナは苦笑いを浮かべる。

ひとまず、猪も倒し、さらにカメラも無事回収した。とりあえず、食料は無事確保できた。後はこれらを持ってカタツシユ村に帰らなければ。

カメラを回収後、すぐにカタツシユ村に帰還する二人、今から帰れば鉋石掘りに出掛けたクローリン達もそろそろ帰ってきているはずだ。

「あ、この野草食べれるやつ」

「え!? 草とか食べれるのか?」

「天ぷらにして食べたらうまいんだよこれ」

「マジかよー！」

その帰り際にも、もちろん食料を持って帰ることを忘れてはいない。

生えている野草から、食料になるものを探しながら二人は猪を持ち帰りつつ、回収していく。

Wood Sorrelというこちら、カタバミの一種で葉を齧るとかなり酸っぱいが魚料理やサラダに酸味のアクセントにもよく使われている。

後はワイルドガーリックやワラビなどの食料を摘み。さらに道中にあるきのこも忘れない。

クローズド・カップ・マツシユルム、ラーズ・フラット・マツシユルム、ポルタバツリーニなどの食べれるきのこを探し、回収していく。

ー　ー　きのこは偉大。

きのこは偉大な食べ物である、味噌汁や焼いて食べるもよし。

きのこはこの世界を作ったと言っても過言ではない、用途がたくさんあるきのこが偉

大なのは当然である。

「久々にきのこ入りの味噌汁とかお吸い物食べたいねー」

「お吸い物？」

「うん、スープだよスープ、出汁は霊草から取ればいつか」

「うわあ！　なんか楽しみだな！」

「鍋もありだね」

採れたての新鮮な野草ときのこ、そして、猪を使った鍋料理。

間違いなく美味しいに違いない、手の込んだ料理とは言わないが大人数で食べるぶんには申し分ないだろう。

そんな新鮮な食料を確保した二人はワイワイと会話を繰り広げながらカタツシユ村の帰路につくのだった。

今日のY A R I O。

きのこ狩りをするアイドルーNEW!!

モーさん猪を倒すーーーーーNEW!!
靈草で出汁を取り鍋料理を作るーNEW!!
スカサハ師匠、槍で鉋物掘りーNEW!!
土の知識が豊富な英雄達ーNEW!!
カメラをちやつかり作っているーNEW!!

木の気持ちになつてみればわかる

そして、その夜。

前回のコノートでの採掘の結果持ち帰つてきた鉱石物を並べながらカタツシユ隊員達は会議を開いていた。

というのも？ 三種では未だ聖剣作りに必要な種類の鉱石は集まつていない。残り三種の鉱石が必要なのである。

現在、手元にあるのは血の涙石、リアルタ鉱石、そして、エードラム合金に使える鉱石物が一種のみ。

呪獣胆石はおそらく、魔猪から採れるだろう事はスカサハとマーリンから彼らは教えてもらった。

残りは剣の秘石、そして、エードラム合金に使う鉱石物の一種が必要な鉱石物である。いよいよ聖剣作りも大詰めに差し掛かつてきた。

「農具が手に慣れてきたよね」

「近頃、手にしつくりくるんだなあ、これが」

「兄イ達も!? 実は俺もマイク握るより金槌が手に馴染んで来てさー!」

「もうさ、これなんの会話? アイドルのする会話じゃないよね?」

そう言つて、円になりながら話を繰り広げるクーフリーン、カルナ、ベデイの三人の会話に冷静に突っ込みを入れるヴラド。

「……確かにアイドルの活動はやってない。」

アイドルらしい事と言えば、ブリテンに来てから一回歌ったくらいのもので、あとはほぼ聖剣作りの採掘やら酪農やら農業やら機械いじりやらしかしてないのである。

そろそろ本業しなくても大丈夫なのか? とは思いつつも、副業になりつつあるアイドル活動に一同は何故か身体がもう慣れてしまっていた。

「てかさ! てかさ! 早く鍋食べようぜ! 俺と兄イがとつてきた猪なんだ! こいつ!」

「おお、せやね!」

「へえ、こんな料理もあるのね…」

そう言つて、ひよっこりとクーフーリンの背後から顔を出して囲んでいた鍋を見つめながら呟く、メイヴちゃん。

そんなメイヴちゃんのいきなりの登場に一同は目を丸くしながら突如現れたメイヴちゃんに首を傾げていた。

いつの間に、一同の内心での反応をそのまま言葉で表すのならそんなところだろう。

「あれ？ リーダーこちらはどちらさん？」

「あ、この人はメイヴちゃんっていつてコノートの国作りの職人さんやで、僕らの採掘作業手伝つてくれてなー」

「はあい♪ コノートのアイドルメイヴちゃんです♪」

「あ、同業者さんだったんだ」

そして、一同はメイヴちゃんの言葉に納得したように頷く。確かに同業者なら何ら疑う余地もない、同じアイドルならば志もきつと一緒の筈だ。

ならば、仲間として迎え入れるのは当然の事、しかしながら、モーさんはカルナの背

後からメイヴをジーツと見つめると、猫のような鳴き声で『シャー!』　つと声に出して威嚇していた。

そして、威嚇していたモーさんは声高にこう皆に話をし始める。

「…こいつはクセエ!　俺の母様と同じ匂いがプンプンしやがる!」

「お、私も同意見だな、流石は私の弟子だ!　モードレッド!」

「まだ脳筋のスカサハ師匠が可愛く見えるくらいだ!　俺の勘がそう言っている!」

「よし気が変わった。明日からお前をしごき倒してやる!」

そう言って、胡散臭いメイヴに対してのモードレッドの自分との同意見に喜ぶのもつかの間、モードレッドの言葉に思わず真顔になりスカサハはパキパキと指を鳴らしている。

モードレッドはそのスカサハの変貌に思わず『ひい!　お師匠様!　勘弁!』と声を上げると再びカルナの背後に逃げた。

余計なこと言うからと顔を痙攣らせるY A R I O達一同、さて、鍋の具合もだいぶ良くなってきた頃。

マーリン師匠は閉じていた鍋の蓋をあける。

「おお…これは…」

「靈草を出汁に使ってみました」

「猪の肉も寄せて、名付けて！ 山菜ときのこと猪の靈草水炊き鍋！」

蒸気と共に広がる匂いに一同は思わずその鍋に釘付けになる。

余った具材も寄せて、天然の深淵の靈草から取れた栄養価満点の出汁に猪の肉が加わり、さらに、とれたてのきのこや山菜が彩りよく鎮座している。

味付けもしっかり行い、ポン酢で食べれば絶品間違いなし、Y A R I O 特製の鍋、さてそのお味はいかに？

「…この染み渡る締まった食感、良い、実に良いな…」

「そうですね、美味です、ほんとに」

「うん！ 美味しい！ こんな料理は食べるのは初めてだけど！ 悪くないね！」

これには小次郎とA D フィン、そして、マールン師匠はご満悦のようだ。

鍋料理としても、靈草の出汁が実に効いていて身体に染み渡るようであった。モーさ

んやスカサハ師匠、メイヴちゃんも続いて口の中に鍋料理を放り込む。

確かに染み渡るように広がるポン酢の風味によく効いた霊草の出汁が更に食欲を掻き立てる。

「はむ！…んん！ 美味しい！ ころなしが身体が軽くなったみたいだ！」

「あ、これ、寿命が延びるらしいからね、なんでも不老不死になるとかなんとか」

「…っ！ ぶっ！？」

「ま、マーリンさあん!? 大丈夫ですか!？」

「ゲホ！ ゲホ！…え!? この出汗！ 不老不死効果あるの!? 聞いてないよ!？」

「私は元から不老不死だから問題ないな」

そう言って、思わず食べてしまった鍋の効力に思わずびっくり仰天するマーリン師匠。

それはそうだろう、気づかず食べた鍋が実は不老不死効果がある伝説の食材が入ってましたと聞かされればそうなることは必然だ。

しかも、彼らはこれを昆布と同じくらいにしか考えていないのである。

気づかず食べてしまったっていつの間にか寿命がカンストしてしまいましたという話な

のだから、マーリンがこんな反応をしてしまうのも無理はない。

「あ、確かになんか身体の感覚がいつもと違う感じだ。いまなら盗んだプリドウエンでビッグウェーブに乗れそうな気がする」

「盗んじやダメだよー」

「そうだよ、盗むくらいなら作れば良いじゃん、兄イなら作ってくれるよ」

「君たちさりげなく宝具作るとか軽々と言うのやめてもらえないかな」

「そう言って、プリドウエンくらい自力で作れると豪語する彼らに真顔で告げるマーリン。」

「実際作れそうだから怖い、というより、既に聖剣作りなんかしているので今更、宝具が作れないなんて事は無いだろう、むしろ、聖剣が作れるならなんでも作れる。」

彼らにはその確信があった。

「おいおい、俺でも流石にプリドウエンとかいうのは無理だよ、多分」

「そっかー、やっぱりそうだよなあ…」

そうやって、カルナの言葉に思わずシユンと縮こまり落ち込むモードレッド。

しかし、それからしばらくして、カルナはサムズアップすると落ち込むモードレッドの肩をポンと叩き満面の笑みでこう告げる。

「だって、俺、プリドゥエンより凄いの作っちゃうからな！」

「…っ!? マジかよっ!? やっぱり兄イは最高だな!!」

サムズアップするカルナの言葉に嬉しそうに目をキラキラさせるモードレッド。その言葉に一同は納得したように無言で頷く。

だが、約1名、マーリンのみ、真顔でプリドゥエンより凄いものを作ると断言するカルナに明らかに目を丸くしていた。

そんな中、マーリンが心の中で呟いたのはたった一つのシンプルな言葉であった。

(それはひよつとしてギャグで言ってるのか!?)

全くもって、ギャグにしか聞こえない。しかし、ところがどっこい彼の場合はギャグではなく大真面目で言っているのだろう。

さて、ブリドウエンはさておき、猪の肉を使った霊草の水炊きは皆から高評価であった。やはり、栄養価が高い霊草の出汁は良い出汁が取れている。

さて、そんなこんなで皆が霊草の鍋を囲んでいると、ここである事をポンと手を叩きクーフリーンは思い出す。

それは…。

「あ、風呂がまだ無いな、そう言えば」

「あ、言われてみれば…」

「確かにくたくたに帰って来て、お風呂無いのは困るよねえ」

そう、カタツシユ村にお風呂が無いという事実。

近くには水場らしきところはあるものの、やはり、ここは疲れた身体を癒すためにお風呂に入りたいところ、そこで…？

「檜風呂作っちゃいますか？」

「そうしますか」

そう、彼らはなんとこのカタツシユ村に檜風呂を作ることに決めた。

以前、ダツシユ村に露天風呂を作った彼らならば、ここでもその経験が活かせるはず、カルナに關してはインドでも檜風呂は作っていた。ならば…。

「木から作るか」

「斧使うよね？ ちよつくらもつて来る」

「今から作るのかい!？」

彼らを取る行動は早い、即決で決めてしまうとすぐさま作業に取り掛かるべく準備を始める。

という事で、今回から始動する新たな企画はこちら。

Y A R I Oはカタツシユ村に露天風呂は作れるか!？」

という具合である。聖劍作りのために鉋石を掘りに行つて帰つて来たばかりだといふのに大忙しである。

「露天風呂…ふむ、和を感じるな、どれ、私も合力致そう」

「おー！ 小次郎さん！ 頼もしいね！ その長い劍つて大木切れたりできんの？」

「気合いを入れれば出来るな」

「スゲエ…俺も剣技を見習わないと…」

「……気合い入れて剣を振れば木は倒せる。」

剣技歴ベテランの小次郎さんが言うのだから間違いない、振るう太刀筋が多重次元屈折現象を引き起こしてツバメを落とせるようになってからが本番だとか。

何はともあれ、大木を長い刀一本で切り倒せると豪語する小次郎の言葉に目をキラキラとさせるモードレッド。

しかし、その話を聞いたスカサハ師匠はと言うと？

「そんなもの本気で殴ったら倒れるだろう」

「いや無理でしょ!?!」

真顔でとんでもない事を口走っていた。

大木など、殴れば倒せる。と豪語してしまうスカサハ師匠の言葉にコノートのアイドル、メイヴちゃんも思わず突っ込みを入れざる得なかった。

——女子力よりも素の腕力には自信がある。

流石はスカサハ師匠、一筋縄ではいかないのがこの人である。

さて、話は纏まったところで、食事をあらかた終えて、風呂作りに取り掛かり始める。女性陣も風呂作りに協力すべく、木材を調達しにカタツシユ村の近くの森へカタツシユ隊員達と向かう事に。

「斧の使い方はモーさんとメイヴちゃん初めてじゃない？」

「…そうね、木は切り倒した事ないかしら」

「えーとね、まずは持ち方なだけだ」

そして、もちろん初参加の女性陣にはカタツシユ隊員のヴラドとベデイがわかりやすく丁寧にレクチャー。

モーさんもメイヴちゃんも初めて教わる斧の使い方を真面目に聞きながら、木の切り倒し方について学ぶ。

そして、そんな二人を見たカルナは一言。

「一番は木の気持ちになる事だね」

「木の気持ち？」

「俺らは木の気持ちみんな分かるから」

「マジかよ!?! スゲエ!?!」

「……木の気持ちになれば分かる。」

そう、木材を加工するにあたり、木の気持ちを理解する事が何よりも大切な事。Y A R I O のメンバーは全員、木の気持ちがよく分かる。

リーダーやカルナに関しては木と土の気持ちも理解できるのだ。

アイドルたるもの、木と土の気持ちくらい理解できなくてはいけない。(※特にアイドル活動には必要ありません)。

さて、というわけでまずは木の気持ちになる事を頭に入れつつ、斧を持った二人は初めでの伐採作業に移る。

「ふむ、それじゃ私も久々にゲイボルクで木を…」

「槍で木を倒すなんて聞いた事無いんだけど」

「当初、素手で倒そうとしてたからね、この人」

「……槍で木を倒す。」

クーフリーン、ディルムツドの二人は木の伐採に槍を使おうとするスカサハ師匠の行動に度肝を抜かされていた。

まさかの槍の使い方である。その発想は流石の彼らにも思いつかなかった。

「ほんまにやり放題やな、槍だけに」

「しげちゃん、久々だね寒いやつ」

「せやね」

さあ、こうして寒いクーフリーンの親父ギャグと共に始まった木材調達の為の伐採作業。

カタツシユ村での露天風呂作り。果たして彼らは無事にカタツシユ村に露天風呂を作り上げる事ができるのだろうか？

聖剣作りの鉱石、さらに、伝説のラーメン作りにカタツシユ村の開拓とまだまだやるべき事はたくさん山積みだ！

今日のY A R I O。

靈草で水炊きを作る――――NEW!!
 大木を刀で切り倒せる農業スタッフ――NEW!!
 木の気持ちまで分かるアイドル――NEW!!
 槍で伐採を試みる師匠――NEW!!
 多分、宝具を作れると断言できるアイドル――NEW!!
 アイドル活動をやってないアイドル――NEW!!

露天風呂作り その1

露天風呂作りに取り掛かったクーフリーンとスカサハ達。

以前、福島県のダツシユ村で作った風呂作りの知識を活かしつつ、この風呂作りに取り掛かる訳だが。

「のう、しげちゃん。こんな感じでいいの？」

「流石師匠、綺麗に切り倒せてるなあ、切り口見事やね」

「ふふん！　こころなしか木の気持ちもわかってきた気がするぞ！　別に撫でて褒めてもいいんだからな♪」

「あー、はいはい、よくできました」

そう言って、丸太を担いでいる師匠の頭を撫でてあげるシゲフリーン。

どこかの赤王様みたく褒めると子供っぽいところを見せる師匠にリーダーも思わず

ほっこりとしてしまう。

そんな二人のやり取りを見ていたメイヴちゃんは羨ましそうにその光景を眺めていた。彼女もプクーと頬を膨らませながら鋸をギコギコと動かし木を加工している真っ最中である。

「うー、私のクーちゃんに擦り寄って…むー!!」

「メイヴちゃんや、変に力入れすぎてるよ肩の力抜かなきゃ」

「まあ、あの二人はずっと前から師弟関係だったからね」

「あれ? 師匠を褒める弟子ってなんかおかしくない?」

デイルムツドとベディヴィエール、そして、ヴラドの三人はメイヴの言葉に突っ込みを入れる。

確かに師匠が弟子に撫でられる図とはかなりシユールだ。しかしながら、スカサハに一番気に入られているのはリーダーであることは既に皆は周知の事。

———なんだか微笑ましい図。

この露天風呂作りを通して二人の仲がさらに良くなってくれたらなと思うカタツシユメンバー達。

さて、露天風呂作りといえ、我らが親方、カルナの出番、そんなカルナはというと今はモードレッドに付いて工具の使い方を伝授していた。

インドにてたくさんさんの建設を手がけたカルナの自慢の職人技がここでも光る。

「ボロボロだな、断面図」

「そうだねえ、兄イ、これ使えるの?」

「こいつは俺達の人生と一緒だぜ? 使わなきゃかわいそうでしょ」

そうやって、訊ねてくるモーさんにキリツとした表情で告げるカルナ、それにはなぜだか謎の説得力があった。

——確かにいろんな事があった。

まあ、それはさておき、風呂作りは経験から作り方はわかる。木の香りが立ち込める中、加工した木を使い風呂を作っていく。

以前ダツシユ村で作った処女作ではリーダーとアヒル隊長が入浴していた際、水圧に耐えきれず、前面の板が外れて崩壊した。

そのため、厚い板を使って作り直し、その後数年間風呂として活用したが、風雨にさらされ水漏れを抑えきれなくなったため、浴室つきの鉄砲風呂に作り変えた。

そして、もちろん、風呂桶作りだけではなく水も引いてこなくてはならない。

ならば！ 山からの水を通す水路を自作しなければ！

以前は無人島で水が山の方にしか出ていかなかったため、自力で水路を作成。途中途中に様々な技術を使い長い長い水路を完成させた。

今回もこれをする必要がある。

「てな訳で川から水を引いてくるわけなんですけども」

「…水路かあ…俺作った事ないもんな…」

「俺達がちゃんと教えるから安心しなさいな」

「…デイル兄ィ…。うん！ 俺頑張る！」

「よーしよし！ なんだらうね、この可愛い娘」

「むー！ ガキ扱いすんなよ！」

「あははは、俺らおっさんだから仕方ないね」

そう言つて、ワシワシと優しくモーさんの頭を撫でるデイルムツドに苦笑いを浮かべながら肩を竦め告げるカルナ。

彼らの心境的には娘か妹が居たらこんな感じなんだろうかという具合なのだが、モーさんはどうやらそれがご不満のご様子。

すると、メイヴの方を見たモーさんはピシッと指差しながら彼女にこう告げ始める。

「やい！ 兄イヤリーダーに手出したら許さないからな！ 絶対お前なんかに渡すもんか！」

「ふーん、なら奪われないようにせいぜい頑張らないとね♪ メイヴちゃんは欲しいものは手に入れる女だから」

「なんだとー！ 見てろよ！ お前なんかに負けないくらい凄い水路作つてやんだからな！」

「へー、なら私はクーちゃんと一緒に凄いお風呂作つて二人で……ふふふ……」

そう言つて、何やら言い合いをしはじめるモーさんとメイヴの二人。

ただでさえファザコンを拗らせているモードレッドだが、どうやら、ブラコンにマザコンも併発しかけているようだ。ちなみにマザコンはシゲフリーン（オカン）に対してだが…。

これにはデイルムツドとカルナの二人も顔を見合わせて肩を竦める。

メイヴに限つてはあんな事を言つてるが、リーダーと風呂に入ると言い出すあたりわかつて無い。

リーダーと風呂に入つても大概良いことはない。

現に以前作つたお風呂ではアヒル隊長と一緒に入つて露天風呂作つたのはいいが浴槽の壁壊れてリーダーがお湯とともに落下してしまった。

それに、下手をすれば入浴後に入浴剤にどれだけ保温効果があるのか検証すべく雪原を走り出したりする事も…。

メイヴの場合はビキニでそれをやる羽目になるだろうが、付き合わされる彼女の姿を想像した二人は左右に首を振らざる得なかつた。

——コノートの女王が裸一貫で雪原へ。

どんな絵面だと言わざる得ない。

リーダーならまだしもそれに彼女が付き合おうとするならば全力で阻止せねばと二人は固く誓うのだった。

まあ、でも露天風呂からリーダーと落下する彼女のリアクションはちよつと見てみると思ったのはここだけの話である。

さて、というわけで、メイヴに威嚇する猫みたいなモーさんをヒョイと掴み上げてひとまず水路作りに取り掛かるカルナとデイルムツド。

そこで使うのが長い竹、日本に行つた際、立派な竹が何本かあつたのでこれを繋ぎ合わせて使う。

「結構幅あるな、これ」

「懐石料理の器みたいだね」

「鯛のお刺身入れて欲しいな」

水路に使う竹を繋ぎ合わせながら、感想を述べるカタツシユ隊員達、確かに、これならば立派な水路になりそうだ。

懐石料理の盛り付けにも申し分ないほどの幅、立派な竹である。

デイルムツドは竹をジツと見つめながらこう語りはじめた。

「万が一、次のサミットがここになっても大丈夫」

「へ？　なんでだ？」

「各国の首相をここでおもてなしできるよ」

デイルムツドはそう言つて、立派な竹を見つめながら頷く。

ほんとに当たり前のように木槌使うし当たり前のように竹割るし各国の首相もおもてなしできる、これでアイドルだと言うのだから驚きだ。

——サミット会議は是非カタツシユ村へ

実際にやってみても面白いかもしれない、モーさんはデイルムツドの話聞いてアーサー王に進言してみようかなとちよつと考えてみた。

今度の円卓会議をカタツシユ村で行うのも面白いに違いない。

しかしながら、この竹はあくまで水路の為の竹だと後にカルナに言われ、モーさんは少しばかりしよんぼりとしてしまった。

まずはカタツシユ村に水路を引く事が最優先だ。

以前は水路500mを開通させた実績を持つ彼らにかかれれば、たかだかこの村の水路を作るくらいいけない。

あの水路は森の古井戸から森を抜け、海を渡り、繋がった。

その経験がここにも活きる。木槌を握るモーさんの手にも力がこもる、このカタツシユ村に対する思い入れは彼らと過ごすうちに日に日に強くなっていた。

「よし、以前の師匠達に習った通りにやれば必ずうまくいくよ」

「…以前習った師匠達？」

「そうだよ、木の師匠、土の師匠、石の師匠から俺達はいろんな事を教わったからね」

作業をしながら二人は質問を投げかけるモーさんに笑顔で頷く。

以前作った水路は彼らだけの力ではない、彼らを支えてくれた職人達がいたからこそなし得る事が出来た水路だ。

水路作りのオールスター集結、そんなプロフェッショナルから直々に教えを受けた彼らに作れない水路など無い。

「…やっぱりすげーよ兄イ達！ ！」

「へへへ、俺達が凄いつて言うか、これを考えた人達が凄いんだよ」

「そうだよ、先人に感謝しないとね？」

「よーし！ 俺も水路作りのプロになるぞー！」

デイルムツドとカルナの話にますますやる気に満ち溢れるモーさん。そんな、彼女のやる気に思わず二人もほっこりしてしまふ。

そんな、三人は水路を露天風呂に引く為、せっせと繋ぎ合わせる。

さて、そんな中、一方のお風呂作りに取り掛かるメイヴとクーフリーン、スカサハ、ヴラド、ベディの五人はというと？

「水圧で崩壊しないようにしとかないとね」

「もう、作ったのもかれこれ十年前くらいだからなあ」

「えー、そんな経つつけ？」

そう、かれこれ風呂作りも結構前の出来事。

かれこれ十年くらい前、ダッシュユ村で作った露天風呂。きつかけは露天風呂巡りだつ

たが…。

しかし、身体が作り方を覚えていた。ダツシユ村での風呂作りの経験が生きる。処女作は失敗こそしたものの、その失敗があったからこそ風呂作りもこうして無事に出来るようにまで成長した。

「…へえ、貴方達、本当になんでもできるのね」

「あ、メイヴちゃん、ここ抑えててもらえる？」

「え？ あ、うん、こうかしら？」

「そうそう！ ありがとうね！」

メイヴが抑えた箇所を木槌で叩くヴラド、その表情は真剣だ。以前なら、こんな作業はできなかつたが今なら問題なくやれる。

他の箇所はベディが手を加えた。そして、風呂に使う木材の加工はスカサハとクフリーンの二人が立派な丸太を形にしていく。

「鋸はこうして…腰を入れるとやり易いですよ」

「なるほど、こんな感じか？」

「そうそう、ホンマに木の気持ちわかってきた感じありますね！」
「ふふふ、お前の師匠だからな」

二人の息はバツチリ、木の加工法を丁寧にクーフリーンから学びながらスカサハ師匠は木材の加工に励む。

そして、ADフィンと小次郎さんの二人は…？

「この辺の木ですかね」

「よし、ならば切るか、あの木なんてどうだろうか？」

「いいじゃないですかー！」

木材の調達に力を注いでいた。こうする事で、カタツシュ隊員達への負担を少しでも軽減でき、作業効率も上がる。

木材の加工に少しでも時間が裂けられるような配慮、これならば、露天風呂の完成もそんなに日を跨ぐ事なく出来る筈。

そして、マーリン師匠は…？

「こ、こら、リンダ！ 晴男！ やめるんだ！ 僕のマントは食べれないと言ってるだろ」

「メエー」

酪農で飼育しているヤギ、晴男とリンダと名付けられた二頭のヤギの世話をしていた。

というのも、ヤギはこの二頭だけではないが、この二頭の言うことを周りのヤギ達が良く聞くのでこうして群の中心である二匹を軸にマーリンは牧場にいる動物たちに魔法をかけている。

柵もまだ不十分なところもあるし、こうして誰か酪農に必要な動物たちを見る役目をする必要がある。

その役目にマーリンが抜擢された訳だが、現在、困った事にヤギ二頭からガジガジとマントを齧られているのである。

「…君からも説得しておくれよキャスパリーグ」

「フオーウ」

「いや、君も僕のマントをガジガジするのはおかしいんじゃないかな!？」

そうやって、ヤギと共にマントをガジガジとしはじめるキャスパリーグに思わず声を上げるマーリン。

このマントは使い物にならなくなるかもしれない、そうマーリンはため息をつくほかなかった。

とはいえ、彼もこれはこれで楽しんでる節はある、動物たちの面倒を見るのは骨は折れるが割とやり甲斐はあった。

この土地を中心にブリテンを發展させようとする彼らの姿勢にも共感できる部分があり、不満は無い。

「はあ、全くもう…」

「フオーウ」

「…君を見たら彼らなんて言うだろうね？ そのモフモフした部分服に加工されるかもよっ。」

「フオウツ!?!」

「うん、割と冗談じゃないんだよこれが」

そう言いながらヤギと共にマーリンのマントをガジガジしているキヤスパリーグにこやかな笑顔を向け告げるマーリン。

割と嘘でなく本当に彼らならやりかねない、確かに品質に関してはかなり良さそう
だ。

さあ、風呂作りの方も順調に進んでいる中、各自カタツシユ村で奮闘する隊員達。

風呂作りの筈が、水路も作る羽目になったが、果たして、無事に皆がゆつくりと疲れを癒せる露天風呂は出来るのか？

この続きは！次回の鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

ブリテンに露天風呂を作る—————NEW!!
ブリテンに水路を作る—————NEW!!
モーさんがブラコンとマザコンを併発気味—————NEW!!
円卓サミットができる村—————NEW!!
褒めると伸びるスカサハ師匠—————NEW!!

メイヴちゃん風呂作りに奮闘—————NEW!!
国の首相をもてなせるアイドル—————NEW!!

露天風呂作り その2 (完成)

露天風呂作りもいよいよ大詰め。

完成にはあれから数日ほど時間を有したが、思いのほか順調に作業の方は進んだ。これもカタツシユ隊員達の頑張りの賜物、皆の協力が実を結んだ。

「いやー、立派な水路だね」

「モーさん頑張ってくれたからだね」

「えへへ…」

モードレッドはデイルムツドに頭を撫でられながら照れ臭そうに笑う。

カルナ、デイルムツド、モードレッドの三人が繋げた露天風呂用の水路。これなら、水も容易に引いてくれる。

後は露天風呂の湯船の方が心配だが？ こちらも…。

「…ふう…、師匠」

「ああ、わかつてる、ここを括ればいいんだよな」

「クーちゃん？　ここも固定しとく？」

「それがええやろうねえ」

「うん！　わかったわ！」

どうやら、順調に進んでいるようだった。

これなら、立派な露天風呂の完成も目前。作業をするメイヴ、クーフリーン、スカサハ、ヴラド、ベディの五人の手にも思わず力がこもる。

水路は大方完成したので、湯船の製作作業にカルナ、デイルムツド、モードレットも加わり、さらに、スタッフ達も助力する。こうすれば時間も短縮でき効率も良い筈。

それから大体、数十分が過ぎたあたり、木で出来た湯船が綺麗な形になった。

「よーし！　ええ感じや！」

「うしー！」

そして、ようやく完成、Y A R I Oお手製で作り上げた露天風呂。

外の開放的な空間を一望でき、なおかつ、カタツシユ村の自然を堪能できる立派な露天風呂が完成した。

気がつけば、皆、身体はクタクタ、ようやく疲れを癒せる湯船の完成に一同のテンションも上がる。

「よし！ それじゃ試運転はリーダーにお願いしようかな」

「お馴染みだよね」

「オーケー！ そんじゃ湯を入れてくね」

水路に通す水を沸かし、湯船へ。

完成させた湯船にどんどん湯が溜まっていく、そして、禪になった我らがリーダーがスタンバイ。

風呂桶にお馴染みの黄色いアヒル隊長を入れ、待つこと数分あまり、湯を張った湯船が出来る。

さて、その湯加減は…。

「…おー…これは…、はあ…」

「いいかんじ？」

「バッチリやね」

何ら問題はない。湯船が水圧に耐えきれず倒壊するような事もどうやら無さそうだ。

お湯に浸かったクーフーリンはしばらく湯船を堪能した後、すぐさま湯船から上がる
と服を着て完成した露天風呂を開ける。

湯船には相変わらずプカプカと浮いているアヒル隊長がいるままだが、これは…？

「え？ リーダーもうちの？」

「僕は試運転だけやからね、安全は確保できたし、師匠達から先に入って貰おうかなと思
うてな」

「あー…確かに、女の子達泥だらけにしたまま、風呂にゆつくり浸かるわけにもいかない
しね」

「なんだ…しげちゃん、そこまで気を使わずとも…」

そう、作業を終えた女の子達から先に完成した露天風呂に入れてあげようという配慮

からだった。

確かに、泥だらけの女の子を他所に自分だけ風呂を堪能するわけにはいかない。

だが、メイヴやスカサハ、モードレッドは皆と混浴でも構わないと言ってはいたが、そこは、しっかりとカタツシユ隊員達は左右に首を振った。

——週刊誌を賑わすわけにはいかない。

アイドルたるもの、そこはきつぱりとしておかねばと一同はそんな変な想いから丁重な御断り、スカサハ達と一緒に入れずに残念がついていたのは余談である。

おっさん達の裸よりも美人、美女の裸の方が視聴者的にも受けが良いのは確かである。

というわけで……?

「はあああ……っ！ 気持ちいい……」

「……うむ、素晴らしい湯加減だな……」

「……ふあ……癒される……」

ここからは、我らがカタツシユ隊員、女性陣の入浴をRECでお送りしよう。

湯加減は問題なく、さらに、カタツシユ村の自然を一望できる最高の癒しの空間、疲れた筋肉の疲労も湯で洗い流せてしまう。

スタイルが良いスカサハ師匠の豊満で自己主張が激しい二つの丘の間にはアヒル隊長が目前に迫る、素晴らしい大きさだ。

普段、髪を束ねているモードレッドは髪を下ろし、綺麗なうなじを露わにしながら湯船の縁に頬をつけてくつろいでいる。

メイヴも妖艶な長く綺麗な髪を湯で洗いつつ、綺麗な脚を湯船の中でケアするように揉んでいた。

確かに湯船を作るのに力作業もあつた為、足に負担が来ていてもなんら不思議ではない。

「…というかこのアヒル、いるか？」

「しげちゃんのお気に入りだそうだ、名前はアヒル隊長というらしい」

「ふふふ、クーちゃんも可愛いところあるわねえ」

「いるか？　メイヴ」

「いや、それらっても使い道がわからないのだけど…」

そうやって、スカサハから投げられたアヒル隊長は湯船を跳ね、メイヴの胸の谷間に綺麗にハマるように落ちるとメイヴの胸部に跳ね返され湯の上でピタリと静止する。

確かにアヒル隊長の使い道と言ってもプカプカ浮かんでいるだけでこれといって無さそうだ。

仕方ないのでスカサハから投げ渡されたアヒル隊長をメイヴは湯にプカプカと浮かべたままにする。

「てかさー、師匠スタイルいいよなあ…なんていうか腰回りに無駄がないって感じだし、メイヴもだけど」

「いやいや、皆大差無いでしょう？ モードレッドも胸とかにこんな立派なものがある訳だし…ね！」

「ぴゃあ!?! な、何すんだ?!」

そうやって、背後からくつろいでいるモードレッドの胸部を鷲掴みにするメイヴ、いきなりの出来事にくつろいでいたモードレッドもこれには可愛い悲鳴を挙げる。

どうやら、露天風呂の方は安全性もあり、特に問題も無さそうだ。

倒壊する恐れもなく、長らく使う事が出来そうである。疲れた体を癒すにももつてこいだろう。

そして、丁度その頃、女性達が湯船に浸かっている間、カタツシユ隊員達はとうとう？

「やっぱ、清潔感はあるよね」

「疫病とか怖いしね」

「この村を綺麗な村にするならやっぱり清潔のプロフェッショナルがいると思う」

そう、カタツシユ村の清潔感について談義していた。

確かに風呂と水路は完成したものの、酪農などを行うにあたり匂いとかも気になるところ、動物などの死体が出たり疫病が流行ったりする可能性も歪めない。

やはり、ここは清潔感がある村にしておきたいところだ。となれば、清潔のプロフェッショナルにどうすればこの村を清潔にしておけるのかを伝授してもらわなければいけない。

という事で…？

「今回、そんな感じで村を清潔にする為の匠をADフィンが連れて来てくれるみたい」「だん吉使つてんの?」

「せやで…多分そろそろ帰ってくるんやないかな?」

そして、この話は以前もやっており、今日、なんとADフィンが清潔のプロフェッショナルを呼びに農家スタッフ小次郎さんとだん吉を使い呼びに行っていた。

もちろん、カタツシユ隊員達は誰が来るのかはわかっていない。

それから待つ事数時間、だん吉が火花を散らしてカタツシユ村に舞い戻ってきた。火花を散らして現れただん吉の中からはADフィンが現れる。

「お、帰ってきよったな!」

「おかえりー」

そう言って、だん吉から現れたADフィンに手を振るカタツシユ隊員達。

そして、農家スタッフ小次郎も助手席から現れると手を振る彼らにサムズアップをして応える。

それからしばらくして、後部座席の扉が開き、今回、カタツシユ村に協力してくれる

匠が姿を現した。

鋭い力強い眼差しに婦長さんの様な格好、さらに腰には物騒な拳銃の様なものをぶら下げている女性。

A Dフィンはニコニコと笑顔を浮かべたまま、カタツシユ隊員達に今回連れてきた清潔のプロフェッショナルについて語り始める。

「あ、皆さん、紹介しますね！　今回、カタツシユ村開拓に協力してもらおう事にしました
フローレンス・ナイチンゲールさんですっ！」

「はじめまして、ナイチンゲールです。A Dフィンさんからお話はお聞きしました。どうぞお見知りおきを」

そう、今回カタツシユ村に協力してくれることになった清潔職人ことフローレンス・ナイチンゲールさん。

彼女の経歴を話せば、凄まじいの一言に尽きる。

裕福な紳士階級の出身。社交界の華とされながら、若き彼女は、卑賤な職業であるとされていた看護婦（看護師）となることを希望した。

医師と看護の知識と技術を得た後、ロンドン・ハーリー街の医院で監督として看護体

制改革に着手。

私財を用いて近代的な設備を作り、看護婦たちの状況改善に努めた。

その後、知己であつた戦時大臣シドニー・ハーバードの頼みを受けて大英帝国陸軍病院看護婦総監督としてクリミア戦争へと従軍する。

医療や看護への不理解から来る不衛生や多数の前時代的な規則が横行し、地獄の様相と化した戦時医療の改革を務めるべく、彼女は奮起する。

一時は「戦時医院での死亡率が跳ね上がった」ものの活動を続け、清潔な衛生と正しい看護を徹底し、惜しみなく私財をなげうつて物資を揃え、成果を導いた。

40%近かつた死亡率を5%までに抑えてみせたのである。

まさに清潔のスペシャリスト。

確かに清潔について清潔職人の彼女からカタツシユ隊員達が学ぶ事は多い。

だが…。

「ナイチンゲールさん連れてきちゃったよ」

「病院作んなきゃいけなくなるパターンだねこれ…」

そう、つまり、それは、カタツシユ村に病院を建てなくてはいけなくなるという事。

まさかのブリテンに病院開設、確かに衛生面を良くするのであれば病院は必須であるし、必要不可欠だ。

一通りカタツシユ村を見渡したナイチンゲール師匠はふむ、と何やら納得した様に頷いている。

「なるほど、確かに見る限りここは不衛生といえれば不衛生ですね、聞けばこの国には病院すらないとか…」

「そうなんですよ、まあ、昔だから…」

「あり得ません、今すぐ作りましょう」

「即答ですねー」

答えはわかっていたものの、そのナイチンゲールの言葉にカタツシユ隊員達は顔を引攣らせる。

今日、ようやく風呂と水路が完成したばかりだというのにまさかの病院をつくる展開に、しかしながら、清潔のプロフェッショナルが言うのだから病院を作らねばならないのだろう。

そして、その病院だが、問題は？

「作るって？ どのレベルから作るの？」

「そんなもの1から建てればいいでしょう」

ナイチンゲール師匠、まさかの即答だった。

容赦無く、病院を1から全て建てろと言う要望がカタツシユ隊員達に飛んで来る。

確かに作れないことはない、作れないことは無いのだが、全く容赦がない、流石は清潔のプロフェッショナル妥協を許さない。

さらに…。

「清潔にするのはまず清掃からです、明日から清掃活動と消毒を行います」

「なんかわからないけど、この人にモーさん会わせたらモーさんが泣かされそうな気がしてきた。勘だけど」

「奇遇だな俺もそんな気がしてきたよ」

カルナの言葉に肯定する様に頷くデイルムツド。

直感だが、そんな気がしてきた。

確かに凄まじく人の話を聞きそうに無いタイプである。芯が通っているのです。そこは良いところではあるのだろうが、尻に敷かれそうだなと一同はそう感じてしまった。

ナイチンゲール師匠なら確かに医療に関しての知識も豊富であるし、これ以上頼もしい人材は居ない。

クリミアの激戦区から連れてきたのか、はたまた、彼女がいる大学にお願いしに伺ったのか定かでは無いが、よくこの人を連れてこれたなどカタツシユ隊員達はADフィンの手腕に感心するばかりである。

さて、水路と露天風呂が完成したカタツシユ村。

清潔の匠。フローレンス・ナイチンゲール師匠を迎え、この村は新たな発展を強いられる事に。

果たして、彼らは無事にカタツシユ村を清潔感ある村にする事ができるのか？

今日のY A R I O。

清潔の匠ナイチンゲール師匠襲来——NEW!!

カタツシユ村に水路と露天風呂建設——NEW!!

女性陣露天風呂を堪能ー
カタツシユ村に病院建設予定ー
NEW!! NEW!!

カタツシユ村清潔計画 その1

清潔の匠、ナイチンゲール師匠を迎え、カタツシユ村を清潔にすべく立ち上がったカタツシユ隊員達。

現在、カタツシユ村の清掃活動中、楽器の代わりに箒や清掃道具を持ち、村のゴミを取り除く作業を行っていた。

「あー、花が咲くー、理由もー無いけどー」

「最近やたら咲き誇ってるよね、マーリン師匠の周り」

「ベデイの口から久々に聞いたかもそのフレーズ」

そう言いながら、箒で清掃活動をするカタツシユ隊員達。

と、ここで、デイルムツド、地面に落ちていた糸状になった変わった紐の落し物を発見。摘み上げるようにそれを持ち上げた。

「ん？ デイル兄イ何よそれ」

「なんか拾った」

「いや、なんか拾ったって…」

そう言つて、拾いあげたそれについて告げるデイルムツドに苦笑いを浮かべるヴラド。

何でもかんでも彼らは拾う、そして、使えるものは使うというスタンスである。

ちようどそんな時だった。風呂から帰つて来たモーさんが首を傾げながらそれを拾いあげているデイルムツドを見つめる。

「ふう…露風呂気持ちよかつたあ…、ところで兄イ達何やつてんの？」

「あ、モーさん、実はね…」

そして、モーさんに事の経緯を話し始めるベティ。清掃活動をしている理由とナイチンゲール師匠についての話を風呂上がりの彼女にわかりやすく伝える。

カタツシユ村を綺麗にするための清掃活動、清潔な村を目指すためにこうして、皆で掃除に勤しんでいるわけだが…。

「見て見て、これ！ メデューサー！」

「いやいや、何やってんの!?!」

「あはははは!! なんだそれ！ おもしろー！」

悪ふざけをしはじめたデイルムツドの一発芸、メデューサーに思わず笑い声をあげる風呂上がりのモーさん。

しかし、これを目の当たりにしたヴラドとベデイの二人も悪ふざけに乗っかるようにして頭に紐が纏めてあるロープを被るデイルムツドから逃げはじめる。

ー※アラフォーのおっさん達です。

どうやら、このロープはカルナが作ったもので船の帆に使えるかもと彼が作り置きしていたものという事がわかった。

そうとわかれば…。

「メデューサーだあー」

「助けてー」

「わー！ 逃げろー！」

そう言つて、完全にデイルムツドの悪ふざけに便乗する三人。はたから見れば微笑ましい光景である。

ーーーだが、当然作業は進まない。

そんな時だ、悪ふざけに乗じる彼らの側に近寄るメデューサーよりもおつかない、拳銃を携えた婦長の影が…。

婦長は四人の微笑ましい光景を目の当たりにしたまま、ニコニコと満面の笑みを浮かべている。

それは、一見すると天使の様な可愛らしい微笑みのように見えるが…。

「何をやってるんですか？ 貴方達？」

その目はどうやら笑っていなかったようだ。

悪ふざけに乗じていた一同の動きがピタリと止まる。そして、ゆつくりとその満面の笑みを浮かべる婦長に視線を向ける。

そして、暫しの間、顔を見合わせるモーさんとカタツシユ隊員達。

紐を頭に乗つけて三人を追いかけていたデイルムツドは声を上げて皆にこう告げる。

「妖怪殺菌婦長だアー!!」

「みんな! 死ぬ気で逃げろー!」

「待ちなさい! 貴方達!」

「やべえ! 銃撃ってきたよ! ガチだアレー!」

「ひい!? つ、捕まったら消毒されるのか!」

「かもしんない!」

そう言って、ルパ○三世さながらの逃走劇を婦長と繰り広げはじめる四人。

婦長は容赦なく拳銃を発砲、目が本気であった。これは捕まったらお説教間違いなしである。

一見すれば、まるで、小学生の男児を追い回す先生の凶の様にも見えるが、本人たちは必死である。

「鬼ごっこを刑事さん百人とやった時より迫力ある!？」

「まあちいなあさあいく!!」

「びゃー!？」

ナイチンゲール師匠と鬼ごっこを繰り返す事数時間。

あちらこちらに逃げ回っていたカタツシユ隊員達だが抵抗虚しく御用となった。

しかし、ナイチンゲールも彼らを追い回し続けたせい、肩で息をしている。やはり、100人の刑事と鬼ごっこを繰り返した事のある彼らを捕まえるのは彼女とはいえ骨が折れたようだ。

息が上がっているせいか、彼女の髪が怒髪天の様に逆立っている様にも見える。正直言つて怖い。

そんな彼女を見てモーさんは恐ろしさのあまり涙をグスグスと流しながら正座をしていた。

かわいそうなので慰める様にデイルムツドとベデイの二人がヨシヨシとモーさんの頭を撫でてあげ、敢えて婦長に目を合わさせない様にさせている。

「ぜえ…ぜえ…、ふふふ…ふふ、さあ、どんな風に消毒しようかしら…」

「ままま、まあまあ、ナイチンゲール師匠落ち着いて、この娘怖がつちやつてますから」

「はあ…はあ…、ほんとに…貴方達を捕まえるのには骨が折れましたよ」

「…いや、あそこまでガチで追い回されたらそりや逃げちゃうよ」

もつともである。ヴラドが言い放つ言葉に追い回されたカタツシユ隊員の二人はモーさんの頭を撫でながら肯定する様に頷く。

刑事さんより追い回されるのが怖かった。

凄いい勢いで拳銃を発砲されたり消毒液が飛んできたりされれば誰だってそうなるだろうと全員の見解である。

正座をさせられたカタツシユ隊員達に婦長は顔を引きつらせながら笑顔を浮かべる。

「誰のせいですか誰の！」

「こいつのせいです！ 婦長！」

「この紐の束の奴が俺にメデューサしろって言ってきたんです！」

「通りますか！ そんな理屈！」

そう言い切る三人に婦長も思わず頭を引っ叩いてツツコミを入れる。アラフォー軍団の言い逃れは流石に厳しかった。

そんな婦長の勢いにモーさんも思わず恐縮してしまう、まるで、小学生に説教する学校の先生のような図だ。

「デイル兄イー妖怪殺菌婦長が怖いよー」

「大丈夫だぞー、こう見えてこの婦長さん優しいからなー」

「ほら、婦長さんが怖いから泣いちゃってるでしょう?」

「いや…もう息切れして私も結構キツイんですけど…」

そう言いながら、怒り疲れた婦長はため息を吐くと呆れた様に彼らにこう話をし始める。

「どうやら、ひとしきり彼らを追い回したおかげで一周回って冷静になったようだ。別にそこまで怒こる事柄でもない。」

もつとも、掃除を放つて遊んでいた彼らが悪いのだが…。

しかし、ナイチンゲールはモーさんの聞き捨てならない言葉を訂正させる為、先ほどと、うって代わり彼女に柔らかい笑みを浮かべると視線を合わせこう告げる。

「これからは私の事はお母さんと呼びなさい、いいですね？ 妖怪ではありません」

「え……？」

「いいですね？」

「…ひゃい!？」

顔は笑っているが、目が笑っていない。

そして、何故か呼び方がお母さん、モーさんに対して婦長の中にある慈愛に満ちた母性が目覚めたのか、それとも、彼女を教育しなければいけないという使命感が芽生えたのかは定かではない。

そして、カタツシユ隊員達に対しても。

「良いですか？」

「イエスマムツ！」

「サー！ イエツサー！」

三人とも婦長の言葉に思わず敬礼。

「流石にこれから婦長からお説教と殺菌されるのは嫌だという全員が満場一致の意思だった。」

「気がつけば、モーさんのオカンがもう一人増えている。女性にしても威圧が凄い、流石は元祖看護師、気の強さは段違いだ。」

「そんな彼らの元へゲイボルクを箒にして清掃に励み仕事を終えたクーパーリンが現れる。」

「何やってるん？ 君ら」

「あ、リーダーじゃん、いやー、掃除をよそに遊んでたら婦長に怒られちゃって数時間、鬼ごっこやってた」

「…鬼ごっこって…、懐かしいなあ」

「いや、そこは怒るところでないの？」

まさかのリーダーの返答に思わず突っ込みを入れるヴラド、寛大にも程があるが、リーダーらしいといえばリーダーらしい。

鬼ごっこと言えば対百人で行った懐かしい企画。思い出せば、色んな事があつた。

とはいえ、今はそんなことよりも清掃活動の方だが作業が進んでいない事が重要だ。

「さあさ、みんなでやるで！　ほんとにもう！　あんた達は世話が焼けるんやから！」

「はい！　オカン！　了解しました！」

「みんなでやれば早いしね」

そんなわけで清掃再開、カタツシユ村を清潔な村にする為に一同は心を一つにする。

消毒や殺菌により、疫病を流行らせない村作り、昔は彼らがいた時代よりも医療は発達しておらず、病で亡くなる方も多かった。

だが、それを未然に防ぐ事はできる。何故ならば清潔のプロフェッショナル、ナイチンゲール師匠がいるからだ。

医療にも精通している彼女なら、この村から病気の予防や治療法などを発信していけるようになる筈。

妖怪殺菌婦長なんて呼んではいけない、彼女は紛れもなく皆の天使であり、白衣の母なのだ。

さて、一方、ADフィンと共に病院建築の為に土地の下見を行っているカルナ親方達は……？

「うん、この辺かな？」

「ですかね、この立地なら割と場所も取りませんし人も通いやすいかと思います」
「なるほどな」

病院を建てるのいい具合の立地を発見していた。

傍らにいるスカサハ師匠もカルナとADフィンの言葉に納得したように頷いていた。しかし、いまいち、彼女には病院がどういったものかが理解できていない部分がある。病や怪我を治療する施設とは聞くが、彼女自身、不死身の身体故、ピンとこない。

「ちなみにその病院とやらはほんとに必要なのか？」

「そうよねー、ほんとに正しい身体とかなら別に病や怪我なんて無縁だし」

「これはこの村に住む人達の為の施設だからねー、やっぱり万が一って事もあるからさ」

そう言つてカルナは疑問を口にするスカサハとメイヴの二人に病院の必要性について語る。

この施設があるだけでも遠方から人が集まるかもしれないし、そうなれば、カタツシユ村の発展にも当然繋がる。

さて、そうとわかれば話は早い、すぐさま作業に取り掛かる。まずは木材の調達だが、これは以前、風呂作りに伐採した木材が余っている。

ならば、これに木材をさらに追加し、骨組みを作り上げる過程は割とスムーズに行えそうだ。

さあ、ここで建築について、皆さんにはマーリン師匠からの建築についての解説をご視聴して頂こう。

「建築の話をしよう。まずは地縄張りとは縄張りから、住宅の建築の初めに行うもので、敷地内における建物の配置を示していく作業だ」

そう、建築において、基礎となる地縄張りとは縄張り、住宅の建築の初めに行うもので、敷地内における建物の配置を示していく作業。

後は、地盤の調査や建造物をどうやって建てるのかの段取り、そして、建て方。カルナは以前、納屋を建てた経験もあり、インドでは建造物をいくつも建てたベテランの大工、これくらいは朝飯前にやってのける。

———出来るだけ丈夫な病院に。

建て方にも工夫を加えて、皆が安心できる病院を建てる。

「さあ、そんじゃ作りますか」

ヘルメットを着用するカルナの安全第一の文字がキラリと光る。

何事も安全が一番、無事にこの病院が完成する事を願いつつ、カルナの指導の元、スカサハ達は作業に取り掛かりはじめた。

さて、果たしてどんな病院が出来上がるのだろうか？

この続きは、次回、鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

婦長と本気の追いかっこ————NEW!!

婦長、モーさんの母になる————NEW!!

マリーン師匠の建築の話————NEW!!

初めての病院作りに挑戦—————NEW!!
ディルムツド、メデューサになる—————NEW!!

カタツシユ村清潔計画 その2

数ヶ月の月日が過ぎた頃。

ナイチンゲールの指導のもと、衛生状況の改善と清掃作業も無事に進み、清潔感のある村に変わりつつあるカタツシユ村。

そんなカタツシユ村では、彼らが制作に取り掛かっていたあるものが完成を間近に迫っていた。それは…。

「オーライ、オーライ！」

「おーいいねー」

部品を1から制作し、組み立てた2トトラックである。

それだけではない、小次郎さんが希望していたデコトラの制作もまた仕上げる段階までできていた。これならば、カタツシユ村から物流を始めることができる。

だが、そんな目覚ましい進展があつたにも関わらず不機嫌な女性が一人、そう、スカ

サハ師匠、その人である。

「なあ、カルナ、しげちゃんが好きなものってなんだ…?」

「何…って、そりやお師匠、水捌けの良い土とか、後はお茶とかじゃない? それとダジャレ」

「いや、そうじゃなくてだな…もつとこう…」

「ん…、それとは違うベクトルかあ…そうだねー」

そう言いながら、スカサハの言葉を聞きつつトラックの制作の為にスパナを回し作業を続けるカルナ。

そういう事に関して察しが悪いカルナではない。確かにスカサハがそんな事を言い出す理由もなんとなくだが理解はできる。

メイヴやナイチンゲールなど、自分とはまた違う魅力がある女性が増えき
た。

もしかしたら弟子であるクーフリーンが取られるのでは? という不安があった。

「それで、あいつが好きなのはなんなんだ?」

「それ以外って言ったら皆でしょ？ リーダーが好きなのって」

「……え？」

「あの人は分け隔てなく皆好きなんだよ、だから、俺達もリーダーが好きなんだわ」

そう言って、汗を拭ったカルナは満面の笑みを浮かべてスカサハにサムズアップをして応える。

分け隔てなく、どんな人間も受け入れる度量がクーフリーンにはあった。それは、Y A R I O のリーダーとして皆のまとめ役を引き受けている。

そんな彼の魅力はやはり、その人柄であった。何度も解散しようとした自分達を繋ぎ止める橋渡しをしてくれた。

積み重ねた彼らの年月が紡ぐ絆、最初は期待すらされなかった者たちが力を合わせ踏ん張り、今がある。

——だが、残念な事にこれもベクトルが違う。

聞いた話は確かに感動的だが、スカサハが聞きたい事はそうではない。

すると、カルナはポンと手を叩くと思ひ出したようにスカサハ師匠にこう告げる。

「あ、そうそう、リーダーの好きなもの？ カレーライスだよ」

「そういうのが聞きたかったんだよ！ ちよつと良い話で泣きそうになっただろう！この馬鹿者！」

そう言いながら、良い話の後にあつさりクーフリーンが好きな物を告げるカルナに思わず目頭を拭いながら突つ込みを入れるスカサハ。

クーフリーンを慕う彼らの心に思わずウルつと来てしまったが、カルナのおかげで台無しである。

とりあえず、紆余曲折ではあったが、スカサハはクーフリーンはカレーライスと辛いものが大好物という情報を仕入れる事が出来た。

「ところでカレーライスとはなんだ？」

「そこからかい」

というものの、スカサハ師匠、カレーライスを知らなかった。

それもそのはず、カレーライスはインドの伝統的な料理、インドと言えばカレーとい

うほど、多種類の香辛料を併用して食材を味付けするというインド料理の特徴的な調理法を用いた料理である。

インドと言えばカルナだが、果たしてスカサハにどういった料理であるかを伝えるか、その点に関してカルナは難しい表情を浮かべていた。

「まず、スパイスやらがいるんだよね」

「ふむ」

「それを混ぜ合わせて」

「ふむ」

「野菜やお肉やらの具材をそれに加えて入れて煮込んで」

「ふむふむ」

カルナの話に耳を傾けながら頷くスカサハ師匠、果たして、カレーライスがどういったものか彼女は想像できているのだろうか。

「ご飯にかけて完成」

「なるほど、わからん」

「ダメだこりゃ」

「どうやら、駄目なようである。」

即答のスカサハ師匠に肩を竦めて告げるカルナ、諦めるのは早かった。

料理と言えばヴラドとデイルムツドであるし彼らならば、スカサハ師匠にカレーライズがどういったものか教えられるかもしれない。

まあ、それはひとまず後回しでいいだろう、まずは目の前の事からだ。

2トトラックを完成させること、まずは、これを終わらせてからだ。

「おーい、兄ィ、こんな感じなんだけど…」

「いいんでない？ エンジンも掛かるんでしょ？」

「バツクも出来たし、まあ、問題無いかな」

「ここでも、以前学んだレストアと機械弄りの知識が生きる。」

2トトラックの試運転を終えたベディに問題無いと告げるカルナはその出来に確かな手ごたえを感じていた。

カタツシユ隊員達が力を合わせて作り上げた2トトラックは計3輛ほどだが、最初に

しては上出来。

さらに、農民スタッフ小次郎さん専用のデコトラを合わせればなんと4輛も…。

これならば、ブリテンの街や村に新鮮な野菜やお肉を届けて回る事が出来るだろう。

そして問題は、現在、建築中の病院だが、現場にて建造に取り掛かっているクーパーリンとデイルムツド達はどうと？

「デイル兄、この辺？」

「あーそうだね！　そこがいいよ」

必要な機材を置くモーさんの言葉に頷くデイルムツド。

基礎工事が完了し、次の工程である土台敷きに入っていた。

土台敷きとは、基礎コンクリートの上に土台や大引を設置していく作業、さて、このコンクリートだが、ローマン・コンクリートを彼らは代用で使用した。

このローマン・コンクリートとはローマ帝国の時代に使用された建築材料。セメントおよびポツツオーリの塵と呼ばれる火山灰を主成分としたコンクリート。

現代のコンクリートは、カルシウム系バインダーを用いたポルトランドセメントであ

るが、このローマン・コンクリートはアルミニウム系バインダーを用いたジオポリマーであり、倍以上の強度があったとされる。

主にコロッセオなどの建造物に使用されたコンクリートがこのローマン・コンクリートだ。

そして、このローマン・コンクリートの作り方を学びにローマの地を訪れた彼らだが、そこでも新たな匠との出会いがあった…。

今回はその話についてだが…。

まず、クーフリーン達を訪れたのはイタリアのローマ。そこで、彼らが出会ったのは。

「こんにちはー！ 僕ら鉄腕／f a t eのY A R I Oという者なんですけどもー」

「^{ローマ}余がローマである！」

「おー、なんかそのポーズかつこいいですね！ 実は今回お願いがありましたて…」

ローマを作った建造の父、ロムルス師匠であった。

そして、彼らはロムルス師匠にお願いし、ローマ建築のなんたるかをカタツシユ村の

病院建造と並行して学ぶ事になった。

そこで、出て来たのがこのローマン・コンクリートのだが、作り方を1から学び、実際に作り上げる過程をロムルス師匠に習った。

ローマン・コンクリートの作り方を習ったわけであるが…。

「うーん…。やっぱり難しいよね」

「つてなるとやっぱり現地の人の話や知識も必要だよね当然」

やはり、古代のコンクリート、そう易々とは出来上がるわけもなく、カタツシユ隊員達は現地の人の話を聞きながらローマン・コンクリートを製造する方針に変えた。

というわけで、ロムルス師匠からローマン・コンクリートの作り方を学んだ彼らは、再びだん吉に乗り込むと、そんな、現地の人のアドバイスを得るべく移動。

そして、建造物の現地監督をしてくれる匠をローマの地にて探したわけだが、結果。

「あれは誰だ？ 美女だ？ ローマだ!?! もちろん、余だよ♪」

というわけになったのである。

晴れやかな笑顔に可愛らしい容姿に赤い衣装に身を包んだローマの王。満を期して、ローマの皇帝。ネロ・クラウディウス師匠がなんと、今回、このローマ・コンクリートを使いカタツシユ村に病院を建造する現場監督に…。さて、こうして、ローマン・コンクリートを学んだ彼らはロムルス師匠からコンクリート作りを学び、さらに、現場監督にネロ師匠を加える事になった訳だが。

「うむ！ この余に掛かれればこのカタツシユ村とやらもきつとローマな感じに仕上がるに違いない！」

「リーダー、こう言っちゃなんだけど、一言言つていい？」

「ん？」

「すつごく不安」

そのカルナの言葉に肯定するように頷くヴラドとデイルムツド。

「……皇帝だけに皆が全肯定。」

確かに不安はある。この娘で大丈夫なのだろうか、しかしながら、このネロもロー

マ皇帝であり、しかも、ローマに建造物をそれなりに建てさせた実績もある。

ローマのコロッセオみたいな病院。

殺し合いの場なのか、はたまた医療を施す場なのか、ナイチンゲール師匠曰く、病気を殺す場なら問題ないとの事。

というわけで。

「その赤いの！ その場所はもつと出っ張るようにするように配置をしろと言っておるだろう！」

「にやんだとう!? うるせー！ テメーも赤いじゃねーか！ ばーかばーか！」

「余を馬鹿と言ったか！ 今！ 余を馬鹿と言ったか!? この痴れ者め！ ばーかばーか！」

カタツシユ村の病院の建築に加わった訳だが、ご覧の有り様である。

こんな風に喧嘩をモーさんとネロ師匠はいつものようにここ最近、繰り広げていた。まるで子供の喧嘩である。

しかし、しばらくすると、病院の建築を放って言い争う二人の背後に般若が満面の笑みを浮かべて立っていた。

その般若は二人の襟首を猫を摘み上げるように持ち上げるとこう告げる。

「…あら？　奇遇ね、私も服は赤いんだけど…二人とも消毒液で頭を冷やした方がよろしくて？」

「…ぴい!!」

「母ちゃん！　勘弁!!」

こうして、二人は般若、もとい、ナイチンゲール師匠から説教される事になるまでがテンプレになりつつあった。

それを見つめながら、笑みを溢し、病院建築を進めるカタツシュ隊員達。

最初は何もなかったこの村も、今では人がどんどん増えてきて随分と賑やかになってきたものだ。

いつもモードレッドと喧嘩をしているネロ師匠。果たして力になっているのだろうか？

しかし、このネロ師匠を侮るなかれ、仮にも王様であり、そして、なんと自称ながらローマのアイドル！

アイドルならば建築、農業、漁などなんでもござれが当たり前、当然ながら、ネロ師

匠もローマの建築については意外と詳しく、そこは間違いなく彼らの力となっていた。建築物の美しきは確かにローマは完成度も高く、彼らが学ぶべき事はまだまだ数多くある。

ネロ師匠はそういった意味でも非常に頼りになる建築アドバイザーであった。

「なんとたつてローマのアイドルだもんねえ」

「建築に関してはほんと色々学ぶことがあつて勉強になるんだけどね」

そう言いながら、ローマン・コンクリートの上に土台や大引を設置していく作業をしつつ会話をするデイルムツドとカルナの二人。

丁度、そんな会話を二人でしていると2トトラックに乗ったクーパーリンとメイヴの二人が帰ってきた。

2トトラックの荷台には積まれた木材が、そう、これらはこれから木工事に使う木材である。

2トトラックから降りてきたクーパーリンはパンパンと乗ってきた2トトラックを上機嫌に叩く。

「うん、実用化も問題なしやね、丈夫なトラックや」

「クーちゃんこれ凄いよい乗り心地ね！ 気に入ったわ！」

「せやろ？」

そう言いながら、2トトラックから木材を降ろし始めるメイヴに笑みを浮かべながら告げるクーフリーン。

しかし、それを眺めているスカサハは頬を膨らませている。そして、何かを決めたように口に出してこう宣言した。

「決めたぞ、絶対カレライス作って見返してやる」

「その意気だよ師匠、デイルやヴラドなら多分ちゃんと教えてくれるからさ」

それを見ていたカルナはポンと彼女の肩を叩いてあげる。

前途多難であるが、ひっそりと彼女を応援してあげよう。そう思いつつ、二人はローマな病院作りの作業へ戻る。

果たして、ローマの皇帝ネロが現場監督として入ったカタツシユ村に建つ病院は一体どんな病院になるのだろうか？

この続きは！ 次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

制作トラック実用化—————NEW！
師匠。カレー作りに挑戦—————NEW！
ネロちやま建築アドバイザーに—————NEW！
ロムルスさんが師匠になる—————NEW！
古代コンクリート作りに挑戦！—————NEW！
ローマン・コンクリートを作る—————NEW！

そうめん流すしかない その1

カタツシユ村にて病院作りを行なっているカタツシユ隊員達。

だが、この日、カタツシユ村にある来訪者が…。それは、なんと円卓の騎士の一人であり、アーサー王の参謀と言っても過言ではない人物。

そう、アグラヴェイン卿である。

何故、彼がこの地に訪れたのか、それには理由があつた。というの…。

「今日は我が王の遣いで来た…。実はそなた達に頼みがあつてな」

そう言つて、語り始めるアグラヴェイン卿に彼らは耳を傾けた。

なんでも、ブリテンにおける食料問題が深刻であり。キャメロットの城下町でもその影響が出て来ているという。

日によつては食事を取れないという世帯もあるとアグラヴェイン卿は彼らに語つた。

「うわー…そんな事になってるんだ」

「どうするよ？ かなり深刻そうだけど」

ブリテンに住む民衆の食べ物が無いというこの事態に、心を痛めるかのように腕を組みながらそう語るディルムッドとカルナ。

こうなつては病院作りをしている場合ではない、早く何かしらの手を打つてあげなくては…。

だが、畑や野菜はまだ収穫できる段階ではなく、麦や穀物もまだ収穫には早い。

そこで、彼らは考えた。どうすれば、キヤメロット城の街に食べ物をいち早く送れるようにするのかを。

そして、思いついた方法が…。

「そうめん流すしかない」

「あ！ その手があったか！」

そう、デカイそうめん流しをこのカタツシユ村からブリテンの城下町まで繋げる。

これがあれば、そうめんをこの地から流し、食べ物が無いブリテン城下の街までそう

めんを届けれる筈だ。

しかし、そんな話をアグラヴェイン卿と話している最中であつた。

カタツシユ村の農園で働いていたモードレッドが慌てた様子で彼らの元に駆け寄つてくる。

「お、おーい！ 兄イ達！ なんだか赤い外套着けた物騒な奴が用があるつて訪ねて来たぞー！」

「はえ？」

「次から次へと…、今日はなんか来訪者が多いなあ…」

「赤い服着た人たくさんいるからねこの村」

「赤いのが最近流行りなんやろうかね？」

「……赤い稲妻が村を攻める。」

なんだか赤い稲妻と聞けば、ネロ師匠が際どい格好をする水着を着用している姿が目に見えちゃうが、おそらく気のせいだろう。

というわけで、リーダーとカタツシユ隊員達はモードレッドに率いられて、カタツシユ

村を訪ねて来たという赤い外套を身に纏う男性の元へ。

「…うむ、抑止力として送られてきたのはいいが…この村を見る限り、なんの問題も無さそうなんだが…しかし立派な畑だ」

「おーい！ 連れてきたぞー！」

「…む、来たか…」

赤い外套を身に纏う男はモードレッドが先ほどまで耕していた畑の土を触る為に屈んでいたが、カタツシユ隊員達を連れて来たというモードレッドの言葉に反応しその場から立ち上がる。

褐色の肌に赤い外套、白髪に近い髪色、そして、彼の力強い眼差しがカタツシユ隊員達に向けられる。どうやら、見る限りこちらを警戒しているようだ。

しかし、しばらくして、彼らの顔を確認した赤い服を着た男性は目をまん丸くしてパチクリさせていた。

「えっ？ …あー、すまないが貴方達は…」

「…こんにちはー！ どうなさいました？」

「いや、あの…、貴方達の事はよく存じているのだが、改めて聞いても良いだろうか？」

そう言つて、赤い外套を着た男性は何故だかクーフリーン達の姿を確認するとあたふたし始める。

そして、彼らは顔を見合わせると首を傾げ、赤い外套を身に纏う男性に向かつて自分達が何者であるのかを名乗り始めた。

「僕らはY A R I O と言つて、アイドルやってます！ あ、僕の名はクーフリーンと言うんやけれど」

「は…？ あ、いや、私の記憶が正しければ貴方達はその…」

「Y A R I O です。ほら、見てみてよ！ こんな作業着の下に青タイツ着て鋏持つてる人間なんて名高い英雄くらいじゃないよ？」

「俺たちの師匠なんて普段、紫タイツみたいな格好だかんね」

「ん？ なんだ？ 私を呼んだか？」

そう言つて、赤い外套を着た男性の言葉を遮るカルナとデイルムツド。

確かにこんな作業着を着てその下に青タイツを着ている鋏持った人間など英雄しか

考えられない。

—— 타이ツ着てればだいたい英雄。

動きやすさではこれはこれで動きやすいのだ。師弟揃って変態などではなく、英雄だから仕方なく着ている。

しかし、赤い外套を着た男性は少しばかり考えた後、首を傾げるとなんだか納得していない様子ではあるが、白い色紙をどこからか取り出し、ついでに黒いペンも用意する。彼らは名高いアイドル、となれば、赤い外套を着た男性がする行動は一つであった。

「すまないが、ここにサインをくれないか？ あ、エミヤくんへと名前を書いてくれたらありがたい、後二つほど、藤村大河と遠坂凜へと書いてくれたら助かる」

「あ！ もしかして、僕らのファンかな？ 全然ええよ！」

「はい、毎週日課になっていて欠かさず見てました！ 勉強になりますね、特に料理や剣作りなんかは！」

そう言って、満面の笑みを浮かべながら色紙に赤い外套の男性へサインを書いていく

クーフリーン。

どうやら、彼らの事を以前から知っているような口ぶり、やはり、英雄達が集うアイドルグループなだけあって彼らはかなりの人気があるようだ。

——これといってアイドル活動はやっていないけれど。

サインを書くのは久しぶりだが、綺麗な文字でささつと書き上げるクーフリーン達にこやかな笑みを浮かべて赤い外套の男性にサインを手渡し。

気がつけば自然と彼と仲良くなっていた。主な話題は料理や農業についてだが…。すると、赤い外套の男性は思い出したかのように彼らにこう告げ始めた。

「名乗るのが遅れたな、私はエミヤという、実は上から君らの動向を見るように言われてな」

「あ、そうなんや、それじゃお仕事でこちらへ？」

「そうなるな」

「えー、そうなんだね、そのお仕事のお給料ってどんくらいなの？」

「むー、難しい質問だ。強いて言うなら…」

そう言つて、エミヤとワイワイと話しをし始めるカタツシユ隊員達。

しかし、彼らは忘れてないだろうか？

和むのは大変良いのだが、今はブリテンの食料危機、今日はアグラヴェイン卿もわざわざこのカタツシユ村まで訪ねて来ている。

エミヤさんには悪いが、カタツシユ隊員達にはやらねばならない仕事が…。

その事を思い出したカルナは笑顔で話していたエミヤさんにこう告げ始めた。

「あー、エミヤさんごめんねー、もつと色々お話したいんだけど僕らこの後、やらなきやいけない事があつてさー」

「…おつと、つい話し込んでしまったな、すまない」

「いやいや、大丈夫やで！ まあ、ちよつと困つた事になつててなあ」

「む？ それはどういふ…？」

そう言つて、頬を掻きながら苦笑いを浮かべるリーダークーフリーンに訪ねるエミヤさん。

それは、その筈、このエミヤさん、実は大のお人好し、困つた人を見逃せない性分を

持っているため、カタツシユ隊員達の言葉に敏感に反応してしまう。

すると、カルナとクローフリーンの二人は顔を見合わせるとエミヤさんにこう説明をはじめた。

「実は今、このブリテンが食料危機に直面してるらしくて…」

「やから、このカタツシユ村から巨大そうめん流しをキャメロット城下まで作ろうと考えてたんやけれども」

「!? そうめん流しだと!? 馬鹿な! そんなので食料危機を脱すると!? 栄養が偏つてしまうではないか!」

「……突っ込むところはそこではない。」

しかしながら、エミヤさんは真剣な表情で彼らに問いかけていた。

確かにこのままそうめんだけでは栄養が偏ってしまう、これではキャメロット城下の人は主食がそうめんにだけ…。

「……そうめん主食のブリテン市民。」

確かにシユールだ。ならば、栄養を考えて他にも食料を供給する必要があるが…。

「デイルと同じ事言ってるね」

「まあ、その通りやからね」

「いやあ、同じ料理人としてはエミヤさんに同意見だねほんと」

「なあなあ、そうめんとはなんだ？ しげちゃん？」

「まあ、それは流すまでのお楽しみやね師匠」

「ぶー！ 教えてくれても良いではないか！」

そう言って、頬を膨らませるスカサハ師匠。

確かにそうめん流しはスカサハ師匠も知らない料理であり、興味を持つのはわかる。がしかし、クーフーリンに訪ねるその様はどこか子供っぽい。改めてだが、これでも一応、スカサハ師匠はクーフーリン達よりも年上である。

一方、話を聞いていたエミヤさんは何やら考え込むようにブツブツと呟いていた。

「いや、待て…、そうめんではなく、蕎麦を流せば…うん、これならまだ栄養も期待が持

てるか…」

「エミヤさん？　おーい？」

「決めた。その企画、私も混ぜてもらおう」

そう言つて、キリツとした表情でカタツシユ隊員達に告げるエミヤさん。その表情はどこか自信に満ち溢れている。

人手が増えるなら尚更ありがたい、クーパーリンとカルナは嬉しそうに目を輝かせ、エミヤさんにこう告げる。

「え!?　手伝つてもらえるんですか!？」

「ふっ…愚問だな。私はこう見えてもかつては穂群原のブラウニーと呼ばれていてね」

「へえ！　そうなんですな！」

「ああ、機械修理なんかも良くしていた」

「すげー！　しげちゃんこれ！　レストア要員一人確保出来たよ！」

機械修理も料理もできる優秀な人材。

これは心強い、確かに今回の企画、カタツシユ村からキャメロット城下までの距離は

かなりあるが、これならばそうめん流しを作るにも期間の短縮が期待できる。

サムズアップするエミヤさんにサムズアップで答えるカタツシユ隊員達。

こうなれば、話は早い、すぐさまブリテンの危機を救うため、巨大そうめん流しをカタツシユ村からキャメロット城下まで引かねば！

「んじや、俺らは竹の調達行ってくるね」

「やっぱりそうめん流しをつつたら竹だよな！」

「モーさんと兄イ、気をつけてね！」

「えへへ、任せなつて」

「てやんでい！ このデコトラの小次郎も居るからまかせろい！」

そう言つて、出来上がった。だん吉式トラックに乗る3人に声をかけるメイヴ。

これから3人はそうめん流しを作るための竹の調達に出かける。荷物には鋸や小次郎の刀など竹の伐採に必要な機材は全部積み込んだ。

カタツシユ隊員達はブリテンを救うため各自、動き始める！ というわけで今回の企画はこちら。

ザ！鉄腕／＼f a t e！ Y A R I Oはブリテンに巨大そうめん流しを作れるのか！

そして、カタツシユ隊員達がブリテンの食料危機に立ち向かおうとしているその頃。酪農で家畜などの動物の世話をしているマーリン師匠はとうとう？

「そうだ、良い子だなあ、よしよし」

思いのほか楽しんでいた。ヤギの頭を撫でつつ顔が綻んでいた。

この牧場にいる動物達も数が増え、さらに、カタツシユ村に移住してきた人達が世話を手伝ってくれるのでマーリンも助かっている。

この調子なら、来年には家畜などの出荷や、乳製品などの製造にも着手していけるはずだ。

「よし！ それじゃ次は馬のブラッシングだな！ がんばるぞー！」

「フォーウ（誰だこいつ）」

顔がキラキラと輝いているマーリン師匠。

希望

カタツシユ村でのブリテン食料危機を回避するための活動が始まった。

前回、新たな仲間、エミヤさんを迎え入れたY A R I O達はこの危機をそうめん流しで回避する事に決めた。

そして現在、手作りで作り上げた2トトラックを1台使い、クーフリーンとディルムツドの二人はブリテンの村々を回っている最中である。

「よし、こんなもんでしょ」

「こんにちはーY A R I O運輸でーす」

そして、もちろんこの食料危機を脱する術はそうめん流しだけではない。

そうめん流しももちろんだが、そうめん流しだけではこの食料危機を回避するのは困難だ。

というわけで、現在、余った2トトラックに乗ったリーダーとディルムツドは村々を

回りながら笑顔を振り撒き、ケルトから食料を仕入れて村々に届けていた。

——場所に届けるんじゃない、人に届けるんだ。

ブリテン発、新宅急便。Y A R I Oの真価が今こそ問われる時である。

「いやー助かったよ!」

「ポイントカードは使われますか?」

「ポイントカード? なんだそれは?」

「えーとですね、ここに名前を書いていただくとカタツシユ会員にもれなくなれます」

「おお! よくわからんがやろうやろう!」

「ありがとうございます!」

そう言いながら眩しい笑顔を振り撒き、村々に食物を届けて回るリーダーとデイルムツドの二人。

特に容姿が整ったデイルムツドは女性の人気も受けが良く、好印象で商品を受け取る村娘達が顔を赤くしている始末である。

クーフリーンの方も流石はアイドルのリーダーなだけあり、村々の人達から絶大な人気を集めていた。

「こつちだこつちー！」

「はーい！ たいま持つて参りますねー！」

「こんにちはーYARIO宅急便のクーフリーンですけどー」

「はーい！ わあ！ こんなにー、重かったでしょう？」

「いえいえ、皆さんの笑顔が守れるならお安い御用ですよ」

物流を届けながらキラキラと汗を流し、眩しい笑顔を浮かべる二人。

「ー本業より本業をしていた。」

というわけで、各地の村々を2トトラックで回りながら次々と商品を届けていく、そして、村々に着くたびに2トトラックを見たブリテンの人々が驚くまでがもはやテンプレであった。

だが、忘れては行けない、2トトラックを操縦するにあたり安全は確保しなければ、事

故などあつては遅い。

そんなわけで、二人は行き着くブリテンの村々でこども安全教室を開く事も欠かさず行なつた。

「はい、みんなー、ここ読めるかなー？」

「車のそばであそばない！」

「はい！ よく読めましたー！」

そう言いながら、ブリテンの子供達に2トトラックや馬車などの危険性を説きつつ、彼らは楽しく、こども安全教室を開いた。

ブリテンの子供達も初めて見る2トトラックに興味津々である。

リーダーと一緒に2トトラックに乗る子供は周りを見渡しながら目をキラキラと輝かせていた。

「ほら、リオナちゃんお友達見える？」

「見えなーい」

「ほんとにー？ お友達たくさんいるよ？」

こうやって、トラックの死角になる場所を体験させたりし、実際に運転席での光景を間近で見てもらった。

また、馬車やトラックがよく通る道などでは…。

「はい、みんな右見て左見て、はい、手を挙げて渡りましょう！」
「はいー！」

子供達の元気な声が響き渡る。

こうして、2トトラックを運転し仕入れてきた食料をどんどん手渡していく彼らの姿に村の人々は感謝しなかった。

ただでさえ、ブリテンの街でも食料を手に入れるのが困難な状況で彼らは笑顔で物を流してくれる。

まさに、彼らにとっては救世主の様なアイドルであった。

「次の現場どこよ、リーダー」

「んーと、マーリン師匠の作ってくれた伝票見る限り次は3キロ先の村やね」

「オーケイ！ それ終わったら一旦、カタツシユ村に補充しに帰ろっか」
「せやね」

そして、一通り配り終えればすぐさま次の現場へ。

これぞ、物流の極意、彼らを待っている人がいる。ならば、届けに行かねばならない使命が彼らにはあつた。

そんな中、竹を仕入れているカルナ達かというと。

前回トラックに乗り込み、良質な大量の竹を古代の日本から仕入れる為に移動。早速、竹を大量に集める作業を行う事に…！

そのついでであるが、なんとここで、かぐや姫という人物が竹に詳しいという情報がADフィンが現地にて入手。

すぐさま、竹の匠であるかぐや姫に接触を図った彼らなのだが、ここで新たな問題が発生。

なんでも結婚をいろんな人達から迫られているらしく、竹に詳しいとかぐや姫は困っていた。

そこで、彼らはわざわざ、公家や帝がいる中、彼女の無理難題を聞く事になった訳だ

が…。

「石作皇子には『仏の御石の鉢』、車持皇子には『蓬萊の玉の枝』、右大臣阿倍御主人には『火鼠の裘』、大納言大伴御行には『龍の首の珠』、中納言石上麻呂には『燕の産んだ子安貝』、Y A R I Oの皆さんには……」

「あー、多分この人達なら全部作っちゃうよ」

「えっ……?…えっ!?!」

「あ、今言つてたの全部作ればいいの?」

「できないことはないなあ……」

モーさんの一言に仰天するかぐや姫。

だが、案の定、彼らはそれを肯定するものだからその場にいた者達はびっくり仰天。

という事で彼らは大体、来てから4年とちよつとくらいでそのかぐや姫の難題をクリアした後。

カルナ達がかぐや姫から良質な竹やタケノコが採れる場所を教えてもらいそれを荷台に積んで帰ってきた。

「という事があつたんだよ」

「へえー、そりや大変やつたな」

「おかえりモーさん」

「あ、デイル兄イただいま」

そう言いながら、先ほどまで事の経緯をクーフリーンに話していたモーさんは荷物を2トトラックに積んでいたデイルムツドに笑顔で応える

「なんやかんやあつたが、無事に大量の竹を仕入れて帰ってくる事ができ、これで、巨大そうめん流しを作る下準備も整いつつあつた。」

そして、そのついでと言つてはなんだが、なんと竹の匠、かぐや姫まで、これは一体…。

これにはベディとヴラド、カルナが困つた様子でこう語り始めた。

「いや、だつて難題クリアしたら結婚だなんて言うんだもん」

「俺たち竹だけ仕入れに行つただけなのにね」

「いやあ、まさかカタツシユ村に姫様まで持つて帰ってくる羽目になるとはねー」

「す、すいません、まさか難題を全部作つてきちゃうとは本当に夢にも思わなくて…」

そう言いながら、申し訳なさそうに顔を両手で覆うかぐや姫。

彼らにとってはただ単に竹を仕入れに出掛けただけなのだが、気がつけば、農民である竹取の翁夫妻に気に入られトントン拍子に話が進んでしまっていた。

本来、かぐや姫は月に帰る予定がブリテンに来てしまった不測の事態だが…？

「ここが月だよ」

「そうだ、ここは月面都市なんだよ」

「二人ともそれは無理があるぞ」

「……どう見ても地球です。」

ヴラドとベデイの二人にベシツとツツコミを入れるスカサハ師匠、流石にそれは無理があった。

という訳で、古代の日本昔話。彼らが竹を仕入れに出掛けに向かった結果がこちら。

今は昔竹取の翁達ありけり。

野山にまじりて竹を取りつつ萬のことに使つたり、開拓し田畑を耕し果樹園を作り、

竹以外も取り東屋を建てたり、窯を作り陶器を焼いたり、山羊等の動物を飼育したり、井戸を掘つたりしにけり、名をばY A R I Oとなむ言ひける。

こんな感じの昔話が完成してしまった訳である。

「あんたら、行つた先で何やってたのよ」

「いやー…思いのほか作業が捗っちゃつて」

ちなみに、竹を取りに出掛けた竹取の翁との邂逅だが、それもなかなか衝撃的なものであったと小次郎さんが語ってくれた。

というのも…？

「それはちょうどお爺さんが竹を切るところに出くわしたんだが…」

そう、その邂逅はなんとかぐや姫が生まれる前だとか。

なんでも、竹を物干し竿で伐採していた小次郎さんであったが、光る竹に近づくと竹取の翁の姿を確認。

それを皆に報告したところ、ベデイが早速、竹を切り倒した竹取の翁に近寄り、おじいさんが光る竹を切ると、可愛らしい女の子が出てきたところで、なんと。

『あのーその竹つてもう捨てちゃいますかね？』

かぐや姫が入ってきた光る竹を仕入れて来たのである。しかし、これにはちゃんとした訳があった。

そう、それは、皆さんもうお忘れかもしれないが彼らが作っている物がもう一つある、それが…。

「いやー、伝説のラーメンのメンマに使えるかなって思ってたさー」

そう、伝説のラーメン作り！ そのラーメンに使うメンマをこのかぐや姫印の竹で作ろうと考えていたのである。

これには彼らも納得、なるほど、確かに伝説のメンマを手に入れるには必要な食材だ。幸いにもかぐや姫の入っていた竹は辛うじてメンマに使える。

図らずもなんと彼らは幻の食材、かぐや姫印のメンマを入手して来たというわけであ

る。

「あ、かぐやちゃんだったっけ？ 私はメイヴ！ 良ければ村を案内するから付いてきて！」
「え！ あ、は、はい！ よろしくお願いします！」

そう言いながら、村の案内を進んでしてくれるメイヴの言葉に頷き、トコトコと付いていくかぐや姫。

さて、村にまた住人を一人迎えたところで、皆は顔を見合わせる。
早速、竹も仕入れたところで巨大そうめん流しを作る作業だ。

「ふむ、この竹は良いものだな…香りからして違う」

「エミヤんわかんのか？」

「ああ、持ってみたらその良さがよりわかるよ」

「あ、本当だ、これ良いやつだ」

「わかるの!?! それでわかるのかい!?!」

そう言いながら、竹を持って感想を述べるエミヤとモーさんの二人に目を丸くしながら

ツツコミを入れるマーリン師匠。

普通ならわからないが、カタツシユ隊員たるもの、自然とそういったものに触れていれば把握出来るようになってしまいうらしい。

そういうわけで、竹を切り分けながら、いよいよ本格的に始まる巨大そうめん流し作り。

果たして、ブリテンに巨大なそうめん流しは無事に完成するのか!?

この続きは…! 次回! 鉄腕／f a t eで!

今日のY A R I O。

竹Y A R I O物語—————NEW!

幻のメンマ入手—————NEW!

新Y A R I O宅急便—————NEW!

モーさん竹の気持ちかわかる—————NEW!

そうめん流すしかない その2

カタツシユ村で数週間が経った頃。

彼らが作る巨大そうめん流しの作業は本格的に進んでいた。

竹取物語からわざわざ取り寄せた上質な竹たちを使い、手慣れた手作業で次々とつなぎ合わせていく。

「おお…鋸が綺麗に入るねー」

「んしよ、んしよ」

「モーさん上手いなあ鋸使うの」

「兄イ直伝だからな！ ふふん！ なんとつて兄イの一番弟子はこの俺だぜ？」

「あー…、モーさん、それだとアルちゃん拗ねちゃうからあの子の目の前で言うの禁止ね」

鋸を担いで自信満々なモーさんにそう言つて顔を引攀らせるカルナ。

インドにおいてきたアルジュナの事が気がかりなのか、そう言わざる得なかつた。勤勉で建築について自分から懸命に学ぼうとしている彼の姿を知っているカルナからしたら、モーさんを一番弟子と断言できない。

果たして、彼は元気にしているだろうか？

さて、それはともかく、巨大そうめん流しの竹は繋がつていき、形が出来てくる。作業に割く人数も多いので効率よく組み立てても出来ていた。

「後はこれが数十キ口先まで伸ばさなきゃいけないつてとこだよなあ……」

「先は長いね」

そう言いながら竹をひたすら組み立てていく作業。

絵面的にはかなり地味である。こんな単調作業を繰り返しては次第と会話の方も残念ながら。

「……………」

「……………」

「……無言になってしまおう。」

無言ながらも、黙々と作業に取り組むカタツシユ隊員達。

だが、そうめん流しはそんな無言な彼らとは異なり、だんだんと長さを順調に伸ばしていた。これならば、完成にもさほど日数をかけなくてもできるかもしれない。

そうして、作業をする事数時間あまり、ここである出来事が彼らの前に立ち塞がる。それは…。

「おい、カルナ、ここはどうする？ 川だぞ」

「あーマジカー、川跨いじやう？」

そう、エミヤが発見したのはカタツシユ村から暫し離れたところに流れている川。

あいにくと、この川はまだ橋が架けられておらず、そうめん流しをするにはこの川をそうめんが渡せるようにしなくてはならない。

これは参つたと一同は表情を曇らせる。しかもこの川、なかなか幅もあり埋め立てるわけにもいかない、そこで？

「川の中にこう、支柱を作ってさ」

「その上から繋いでつってな感じでどうよ」

「ほほう、なるほど確かに名案だ」

川に入り、支柱を立て、その上からそうめん流しを建てる。

こうすれば、川を渡らずとも竹は向こう岸まで伸び、そうめんも開通するはず、そうと決まれば話は早い、早速、リーダークーフーリンが川の深さを調べる。

すると？ この川の深さはなんと…。

「あ、意外と割と深いね、こりや、ロープ腰に巻いてなきや危ないかもわからん」

「いやーほんとゲイボルク便利だよ」

「ほんとだなー」

そう言つて、川の深さをゲイボルクで調べるリーダーの姿に頷くカルナとデイルムツドの二人。

この3人、ゲイボルクの使い方が明らかに間違っているのだが、さして、問題ないと言わんばかりに利便さに感心している。

さて、深さもある程度わかったところで、水着に着替えたモーさんと禪一丁になったクーパーリンの2人はロープを腰に巻いて早速、支柱を作るために川の中へ。

「モーさんまでせんでええのに…」

「リーダーがやるんなら俺もやるよ、2人でやった方が早いじゃんか、な？」

そう言つて、赤いビキニを着たモーさんにはこやかな笑顔を浮かべてクーパーリンにそう告げると2人はとりあえず支柱になるものを建てにゆつくりと川に足をつける。

しかし、この川…。

「ひゃー!? つ、冷めてー!!」

「無病息災! 無病息災!」

かなりの冷たさだった。

あまりの冷たさに思わず可愛らしい声をあげるモーさん、そして、リーダーは何故か冷たい川に入る際、大寒の儀式まで行う始末。

そう言われてみれば今年はまだやっていなかった大寒の儀式、この機会についてに済

ませるあたり流石である。

さて、そうして、流されないようにゲイボルクを地面に刺しながら先に進み始める2人、だが、流れは相変わらず早くなかなか前に進まない。

そして、ある程度、川の中を進み支柱を立てる場所に2人はたどり着くと竹の支柱が流されないようにしつかり川の地面にめり込ませるように入れていく。

仕上げは木槌で上から叩き、周りは川にある丸い石で固めれば完成、これならば、川が大洪水の様な事にならない限りは大丈夫なはずだ。

「よーしー！そんなじゃ上に竹を通すぞー！」

「はいはい、それじゃこっちにくれー！」

そして、支柱の上に竹を通し、紐でしっかりと固定していく。

なかなかの出来栄え、川を挟むという予想外な出来事があったものの、問題なく作業は進めれそうだ。

さて、川の上でのそうめん流しも無事に完成しあとは戻るだけ、だが、ここでそう簡単に終わらないのが彼ら。

なんと、岸に帰る途中、モーさんとリーダーにあるハプニングが…。

「よいしょ、よいしょ、あっ…!?!」

「あー! リーダー! ちよ!?!」

なんとリーダー、足を滑らせ、なんと川に流されてしまった! 幸いにもロープを巻いていたのでそれを掴んでいるのだが…。

リーダーの顔面に冷たい川の激しい水流が襲いかかる! ガボガボ言つて、陸にいる3人には何言っているのかよくわからない。

「……リーダーの川流れ。」

エミヤ、カルナ、ディルムツドの3人は大爆笑。リーダーを助けるべく、ロープを引つ張るのだが笑いのあまり腰に力が入らない。

そして、同じく川に入っていたモーさんにも悲劇が…。

「あー!! ちよ! ちよつと待てえ!」

「ブボォー!」

「あはははははははははは」

「ちよ！ 何やってんの!? 2人とも！ あはははは！」

なんと、モーさんが付けていたビキニの上の部分が川に流され、なんと、足を滑らせ流されていたリーダーの顔面に直撃。

これには腹筋をやられた3人の手から思わず力が抜ける。

「上げてえ〜！ たすけて〜」

「リーダーその声やばい」

「わかったわかったから」

モーさん赤いビキニが顔面に直撃している中、大爆笑している3人から引つ張り上げられる我らがリーダー。

それからモーさんも片手で胸を隠しながら顔を真っ赤にしつつ、ゆっくりとゲイボルクを地面に刺しながら進み、岸に上がる。

その上からカルナがポンポンと頭を軽く撫でてやると上着をそっとかけてあげた。川に入っていた二人とも唇が紫でフルフルと震えていた。

「しかし、すごいタイミングだったな」

「いやー、笑った笑った、リーダーの顔面に追い打ちだもんな」

「べちん！　つていったぞ、べちん！　つて」

「う、うるさい！　俺もまさかリーダーの顔に飛んでくとは思わねーし！」

「なかなか凄い衝撃やったで」

そのリーダーの一言に再びエミヤ、カルナ、デイルムツドの3人から笑いが溢れ出る。川に流されたリーダーの禪がズレてもうちよつとで危うい場面もあったので余計に笑いが出てしまった。

名高い英雄がなんと禪一丁であわや川に流されるという珍事、しかも、二人ともポロリしそうになるというおまけ付き。

さて、こうして、カタツシユ隊員は再び、そうめん流しをキャメロット城の下町まで引く作業に戻る。

気がつけば、多分、半分くらいだろうか、長い長いそうめん流しがキャメロット城下町までの半分くらい出来上がっていた。

「ま、こんなとこやろうかねとりあえず」

「今日はここまでにしとこうか」

「いいねー」

とキリが良いところでそうめん流しの作業を一旦やめるカタツシユ隊員達。

もう、日も暮れはじめ、そろそろ夕飯の時刻も迫ってきている頃だ。クーフリーン達は作業を終えてひとまずカタツシユ村に帰ってくる。

「おかえりー」

「あー！ クーちゃん！ お疲れ様！ ご飯にする？ お風呂にする？ それとも…」

「た・わ・し？」

「ちよー！ ベデイー！ せっかく私の見せ場なのにー！」

そう言いながら、ずいっと横から現れたベデイの顔を押し退けるようにして不機嫌そうに告げるメイヴ。

ヴラド、ベデイ、スカサハ、メイヴの四人はどうやら先に帰ってきて夕飯を作ってくれていたらしい。

すると、スカサハはなんだか恥ずかしそうに顔を赤くしながらクーフリーンにこう告げ始める。

「あ、しげちゃん！ …きよ、今日は私がなんとカレーとやらを作ってやったぞ！」

「なんと師匠初挑戦です」

「おー！ ほんまに！ 楽しみやわー！」

「ほう、カレーか…」

「俺らしいなかったら多分、禍々しい何かが出来上がってただだろうけどね」

そう言いながら、ドヤ顔のスカサハ師匠を横目に苦笑いを浮かべているヴラド。確かにカレー自体をわかっていないので、監督役が居なければ凄いものが出来上がっていたであろう事は容易に想像がつく。

というわけで、病院作りの方向かかっていたADフィンとナイチンゲール師匠、そして、牧場で羊の毛狩りをしていた小次郎、マーリン師匠を呼び食卓を囲む事に。

「あれ？ かぐや姫ちゃんは？」

「いや…あの後、戻って月の使者さん達に身柄返したよ」

「まあ、流石にお姫様に農作業させるわけにもいかないからね」

そう言いながら、仕方ないとヴラドは訊ねてきたリーダーに説明をする。

確かにかぐや姫をこんな場所に連れてきたまま、農作業をさせるわけにもいかない、それに元々帰る場所があるなら保護者さん達も心配するはずだ。

すると、話を聞いていたメイヴとスカサハの二人は顔を見合わせると納得するカタツシュ隊員達にこう告げる。

「え？ 私、女王なんだけど？」

「ん？ 私も女王なんだが？」

「えっ？」

「えっ？」

「ちよ、えっ？」

思わず、この2人の返答にカタツシュ隊員も顔を見合わせる。そう、実は何を隠そう、メイヴもスカサハも女王。

か弱き女の子であるのだ、そう、それはあくまで自称であり、カタツシュ隊員は彼女

達の遅しさを知っているのですっかり忘れていた。

「あはははーまたまたご冗談を」

「そうだよ、槍突き刺して鉤物掘ったり平気でクソ重い石ぶん投げたりする人がまさかー」

「よし、お前らのカレーだけめちやくちや辛口にしてやる！」

「手伝うわ、スカサハ」

「ごめんなさい！ 嘘です！」

そう言いながら、涙目のスカサハにすぐさま謝罪に入るベディとヴラドの2人。

それを見ていたクーフリーン達は思わず目をそらしながら苦笑いを浮かべていた。

そう、何を隠そうこの人達もそう思っていたからである。

こうして、笑い声が上がる中、賑やかな夕飯が始まる。

明日は遂にそうめん流しの仕上げ、そして、病院作りもいよいよ最終段階に入る。

スカサハとメイヴが作ったカレーで力をつけて立ち向かわねば！

こうして、夜はゆっくりと更けていった。

今日のY A R I O。

リーダーの川流れ—————NEW!!
 モーさんの水着が流される—————NEW!!
 かぐや姫送還—————NEW!!
 メイヴとスカサハは女王だった—————NEW!!
 流れの速い川に支柱を建てれる—————NEW!!
 冷たい川で大寒の儀式—————NEW!!

カタツシユ村清潔計画 その3 (完成)

ここはキャメロット城。

カタツシユ隊員の1人、ネロちやまことネロ師匠はこの日、1人でこのキャメロット城にいる王、アーサー王に謁見を求めていた。

というのも、病院や建造物を建てるのに必要なローマン・コンクリートの仕入れを考えていたのだが、やはりそれにはこの国の王との協力が不可欠。

貿易に疎い我らがリーダー達はちよつとそういった決め事をするのは向いていないとネロ師匠に今回お願いしたわけである。

まあ、事實はアーサー王を見たいと彼女が駄々をこねて泣き始めたので致し方なくだが。

そして、手土産にヴラドとデイルムツドが作ったお弁当を携えてキャメロット城に赴いたというわけである。

——はじめてのおつかい。

さあ、ネロちやまは果たしてちゃんとおつかいはできるかな？

「うむ！ 当然、余くらいカリスマ性に溢れた皇帝ならば青いのだろうが、ピンクだろうが、紫だろうが、色が被つていようがなんら問題はない！ いざゆかん！ キヤメロツトへ！」

不安だが、自信満々に農作業着を着たネロ師匠は満面の笑みを浮かべながら、キヤメロツト城の門を訪ねる。

しかし、そこには、門番が、どうする？ ネロ師匠？

「む？ その作業着は…？」

「うむ！ 何を隠そう！余はローマ皇帝…」

「あ、農家のYARIOさんですねどうぞどうぞ！ 先日の配達助かりました！」

「え!? そ、そうではなくてだな…」

「あ、入ってください！ 我が王がお待ちしていますので！」

「う、うむ！」

おっと、門番さんが気を使ってくれて通してくれたぞ！ やったね！ ネロちやま！
門が潜れるぞ！

しかし、ネロ師匠の顔はどこか不満げ、それはそうだろう、皇帝の威厳もまったく関係なく、農家のY A R I Oというだけで門が開かれたのであるネロ師匠の心境としては複雑だ。

だが、ローマの皇帝はこれだけで心折れたりしない。

さて、門番から案内されネロ師匠はアーサー王がいる王の間へと足を運んだ。さて？
無事にローマン・コンクリートは仕入れをできるようになるのだろうか？

王の間には腹心の騎士達がズラリと並び、にこやかな笑顔を浮かべ、ネロ師匠を出迎えてくれている。

これならば、一悶着ある事も無いだろう。

「遙々、よく足を運んでくれた。話は彼らからだいたい聞いている、私がアーサー王だ」
「うむ！ 出迎え痛み入る！ 我が名はネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクス！ ローマ…」

「ローマン・コンクリートを仕入れに来た業者の方だな？ うむ、確かに彼らの仲間だけ

の事はある、立派な作業着だ」
「!？」

しかし、アーサー王、アルトリアちゃん、まさかのローマ帝国の皇帝をローマン・コ
ンクリートを仕入れる業者呼びである。

これには流石のネロ師匠も動揺を隠せない。

「……だが、あなたが間違っていない。

円卓の騎士の1人、トリスタンはネロ師匠に近寄ると手を握り、嬉しそうに上下に
振った。

「いやー、先日は助かりました。配達して下さった農作物や食べ物のおかげでいくつ
も村が救われました……」

「いや……あの……余は……余はな……!」

「特にあの唐揚げという食べ物には実に美味でしたよ」

涙目でプルプル震えているネロ師匠にこやかな笑顔を浮かべ、さらっと追い打ちをかけるように告げるトリスタン。

あー、ネロちゃま、ついに限界かな？ プルプル震えている小柄な身体は可愛いが、流石に耐えかねてこう話をしはじめ。

「余は皇帝で…皇帝なんだぞ！ ローマなんだぞ！」

「ええ！ もちろん！ 皇帝でローマン・コンクリートの仕入れの業者さんなんですよね！」

そう、間違いではないが、彼らの感覚は最早、麻痺していた。

スカサハにメイヴと女王で農業やら鉱夫やらをしている人たちを見ていたので、皇帝で、さらに業者なのは別に普通であるという感覚に陥ってしまったのである。

ついに、ネロ師匠は涙を堪えきれずに泣き始めちゃいました。あらら。

「うえええええええええん！」

「えええええ!!？」

「ちよ！ トリスタン！何泣かせてるんですか！」

「えっ…!? いや、ええええ!」

そう言いながら、唐突に泣き始めたネロに動揺を隠せずにオロオロするトリスタンにギヤラハッド卿からの理不尽な声上がる。

これは、あんまりである。ペタリと座り込みわんわんと泣き始めるネロ師匠。そんな中、アーサー王はいつの間にか良い匂いに釣られ彼女の側にある風呂敷に興味を示していた。

そして、中身を勝手に広げるとくんくんと匂いを嗅いでネロ師匠にこう訊ねる。

「くんくん…。あ、このお弁当は…もしや彼らからの差し入れですか?」

「王よ!」 なんでこの状況でネロさんが持つてきてる風呂敷を覗き見してるんですか!

あつ…!? 摘み食いしてはいけません! 何やってんですか!」

そう言いながら、食欲に負け歯止めが効かなくなりそうなアーサー王に突っ込みを入れるガウエイン。

そんなこんなで、いろいろあつたが、ネロ師匠は無事にローマからローマン・コンクリート仕入れの許可を彼女から頂くことに成功したのだった。

さて、そんな出来事を振り返りながら、翌日、スカサハが作った一日おいたカレーを頼張るネロ師匠はドヤ顔で彼らにこう告げる。

「やはり！ 余は偉い！ 外交の才も一級品だな！」

「いや、ネロ師匠、それ明らかに失敗してるよね」

「…そこからほんとにどう巻き返したんだろう」

これが、泣き落とし外交だとばかりに勝ち誇るネロ師匠の言葉に愕然とするカルナとデイルムツドの2人。

多分、アーサー王の事だから、ローマン・コンクリートを許可したのは、また、弁当が食べたいからとか単純な理由に違いないが、兎にも角にもネロ師匠は無事にはじめてのおつかいを終えてきてくれたようである。

ローマとブリテンの交易もはじまり、winwinな関係を今後、築いていけるに違いない。二国の未来は明るそうだ。

カレーを食べているネロ師匠もこれには上機嫌に歌まで。

「だ〜れにも〜ないしよ〜♪」

「ネロちゃん、音程ズレてるズレてる」

「リーダーの裏声並みだね、可愛いけど」

そう言いながら、ヨシヨシとネロ師匠の頭を撫でてあげるカルナ、何はともあれ、ネロ師匠の功績には違いない。

さて、気を取り直して、不足していたローマン・コンクリートを仕入れて病院作りもこれで再開できる。

カルナの腕にも気合いがみなぎってきた。

いよいよ、病院作りも最終段階、不足していたローマン・コンクリートで外壁を組み立てていき、形が出来る筈。

「後は、屋根だねーやつぱり」

「棟上げですか…、ふむ、いい段階までできましたね」

「あのさ、ナイチンゲール師匠、違和感なくヘルメット被って土方の格好してるんだけどなんで誰も突っ込まないの？」

そう言いながら、腕を組み、出来上がっていく病院の建物に満足気味のナイチンゲー

ル師匠の格好に思わず突っ込むヴラド。

「しかも、カルナの隣でなんと仁王立ち、女ながらの逞しさと色気がにじみ出ているよ
うだ。

さて話は戻るが、屋根の工事は、棟上げの後に行く。まずは、屋根の下地工事を行い、
下葺き材を施工し、最後に屋根の仕上げ工事へと工事が流れていく。

さて、ここで、マーリン師匠から一言。

「屋根作りの話をしよう。屋根の最頂部に棟木があり、この棟木から軒桁へと垂木が架
けられている。この垂木は母屋と直交するように架けられていくんだね」

そう、こうやって、建造物の屋根は組み立てられ作られていく。古くからある匠の技
を存分に活かした建築法だ。

そして、ここで、忘れてはいけない、そう、それは、今まで学んだ知識を活かすとい
う事だ。

次に作るのは、雨漏りを防ぐための瓦である。

早速、学んだ知識を活かすため、カルナは以前、竹取物語で見つけた神社の屋根を思
い出す。

そう、それは、屋根作りのお手本、土葺き。

「やっば、屋根には杉の皮だよね」

土を接着剤代わりに瓦を葺く場合、土の下に杉の皮を敷く。

これによって、染み込んでくる雨水から屋根を守る事ができる。

しかし、この島には皮を剥がせるような適当な木はない。

そこで、カルナが持ち込んだのは、柿を発酵・熟成させた液体「柿渋」。

かつて、福島県のある村で古民家の柱にも塗って使った天然の防水・防腐材。

柿渋に含まれる柿タンニンという成分が、酸化する事で防水効果を発揮する。

以前、カルナとリーダーが新聞紙だけで自転車を作ったときにも、新聞紙の強度を上げるために塗ったのが、柿渋だった。

これを、分厚い紙に塗れば、杉皮の代りに使えるはずとカルナは考えた。

「うん、こんなもんか」

柿渋を仕入れた紙にしつかり染み込ませ、あとは天日干しで乾かすと強度が増し、水

も弾くようになる。一時間かけ、ひたすら干した柿渋紙120枚、これが乾くと、手触りは油紙を固くしたようなパリパリした感じになる。

試しに水を掛けてみると、ちゃんと弾いて水も通さない。

これを晴れの日を選び、カタツシユ隊員が代わる代わるで二日間、120枚の柿渋紙を屋根に貼り、下準備は完了。

後はこの上に水で練った粘土質の土を乗せ、そして、肝心の瓦は。

「こんにはー！ あの一、僕ら鉄腕／＼ fateという企画で、実はこの辺に使われなくなった古びた民家とかありませんかね？」

わざわざ、だん吉を使って仕入れてきた。

さて、粘土を練る作業は水と土の比率を調整しながら、練っていく。これは、なぜか練る作業が得意なベテランアイドル、クーフリーンがモーさんに教えながら仕上げた。

こうして出来上がった屋根には瓦が貼り付けられる。

手順は、まず屋根の下地に粘土質の土を載せ、その上に瓦を置いていくが、ここで必要なのが柄の部分に目盛りが付いた金槌。

「クーちゃんどうかしら？」

「うん、ええやん、その調子」

メイヴの作業具合を確認するクーフリーンの顔からも思わず笑みが溢れる。

金槌を軒に当て、瓦を目盛りに合わせて、出っ張り具合を調整すれば、何枚葺いてもズレることはない。

最後に、瓦に開けた穴と打ち付けた竹ひごに番線を通して固定する。

瓦は1000枚以上、わずかなズレも最後には大きな狂いに。作業はカタツシユ隊員達が力を合わせ慎重かつ、急ピッチで進んだ。

「それでは私はそろそろ鬼瓦の制作に入りますね」

「…もう母ちゃんがそのまま屋根に仁王立ちしてた方が良くないじゃ…」

「モーちゃん？ 何か言いました？」

「いえ！ 何にも言っていないですっ！」

そう言いながら、にこやかな笑みでモーさんに告げるナイチンゲール師匠。これには、モーさんも思わず背筋が凍りついた。

——鬼瓦よりおつかない婦長

お寺など瓦屋根の上に構えられている、魔除けの鬼瓦。

その起源は諸説あるが、古代ローマで建物の入り口に飾ったメドウーサ。

それが1400年前に伝わり、始めは蓮華(れんげ)模様、後に鬼の全身へと変わり、さらに現在の鬼の瓦へ。

これは厄除けだけではなく、雨水の浸入も防いでいるという。

この出来る上がる病院にもナイチンゲール師匠は守り神を据えようということらしい。むしろ貴女が守り神なのでは？　と言うと問答無用で拳銃の弾が飛んでくるのはご愛嬌だ。

鬼瓦の作り方としては、板状にした粘土をそのまま使ったり、ちぎって・丸めて・盛りつけて、鬼瓦の形を作っていく。

今回は型などはいらず、ナイチンゲールの盛り付けでオリジナルの形を作る。

まずは、鬼瓦の基本となる図面を板状の粘土の上に敷き、上から線をなぞることで大体のパーツの位置を下書きする。

そして、輪郭を切り取ったら、これを土台に顔のパーツを盛っていく。

こうした過程に加え、その後、いろいろと手を加える。

最終段階として、鬼瓦を乾燥させ、若干、縮んだ鬼瓦に、つや出しを吹き付けていく。あとは、窯に入れ、焼き上げれば出来上がりだ。

そして、それらを屋根につけていけば…。

「立派な病院やな」

「はい、文句のつけようがない見事な出来です」

待ち望んでいた、カタツシユ村に病院が建った。

見た目は和風ながらも、そのナイチンゲール作の鬼瓦が病魔を払わんと目を光らせている。死神もこれならばなかなかこれまい。

斬新な出来栄えにナイチンゲール師匠もこれにはほっこりしていた。

さて、ついに完成を迎えたナイチンゲール師匠とY A R I O達の手で建てられた病院。

これから先、ブリテンに巣食う病魔や怪我に立ち向かわなければならぬ最前基地、まだスタートラインに立ったばかりである。

今日のY A R I O。

カタツシユ村に病院を建てた————NEW!
ネロ師匠の泣き落とし外交術————NEW!
屋根作りに詳しいマーリン師匠————NEW!
ローマン・コンクリート輸入開始————NEW!
ブリテンで瓦屋根ができる————NEW!

カタツシユ村散策 その1

さて、前回の鉄腕／f a t eで無事に病院を完成させたカタツシユ隊員達。

次に取り掛かるのは、残りのそうめん流しの完成だ。あと半分、皆で取り掛かればなんとか終わるはず。

「いやー、そうめん流すの楽しみだね」

「美味しいもんね、カロリーも割とあるし」

そう言いながら、竹を繋ぎ合わせる作業に取り掛かるヴラドとベデイの2人、なんやかんやで作業も折り返し地点まで、ここまでくれば後は突っ走るだけだ。

一方、その頃、クーパーリン達はどうと？

「いやー、生い茂ってんね」

「割と村の周辺は緑豊かなんだよね、不思議だ」

そう、村の周りに生い茂っている森林地の探索に出かけていた。いずれは開拓する土地を後々増やしていきたいという計画もある。こうした探索も必要な事。

今回はモーさんとメイヴちゃんをお供に連れて、三馬鹿トリオは今日も行く。

さて、それから歩く事数分あまり、生い茂ってる森は思いの外深い、自然が豊かなのは良いことだが…。

すると、ここでカルナ、あるものを見つける。それは…。

「あ、これ見てよ、トゲ付いてるトゲ！」

「うお、これチーゼルってやつじゃない？ とんがってんねー」

そう、発見したのはチーゼルと呼ばれる植物。

主な用途として布に起毛加工するときを使うことでよく知られた植物である。しかし、それにしてもすごいトゲだ。

チーゼルをしばらく見つめていたデイルムツドはふと、モーさんに視線を向けてみると何やらモーさんは納得した様にチーゼルを見て頷いていた。

「俺と同等か、それ以上にトゲがあるよな」

「……………」

「……………」

「ばっかおめえ！ 俺もあるぞ！ トゲ！」

「……………」

そして、そのモーさんとデイルムツドの2人の一言にシーンと静まり返るカタツシユ隊員達。

——最近、丸みしかない2人。

当の本人たちは何故だが嬉しそうにハイタッチを交わしていた。何とか側から見れば微笑ましいがクーフリーン達はなんとも言えない。

「…あー、そうですか」

「…うん、せやね」

「…トゲとかあったかしら？」

メイヴの最後の一言に思わず笑いが吹き出すカルナとクーフーリンの2人。

トゲというより愛嬌と可愛らしさが増してきたモーさんに板前に定着しているディルムツド、トゲというより現在は肉球ばりの柔らかさしかない。

さて、気を取り直して探索に戻る。歩いている4人は探索の最中にはこんな会話を繰り広げていた。

「そういえばクーチちゃん達っていつごろアイドルになったの？」

「せやなあ…、えーと、最初は僕とカルナの2人やったんやけど2人とも楽器やってて」

そう言いながら、メイヴの質問に懐かしそうにYARRIOの結成当時の事を振り返るクーフーリン。

今はこうして再結成できてはいるが、当初彼らがこうやってアイドルになった経緯はモーさんやメイヴ達にはわからない。

YARRIO誕生秘話は彼女達としても気になる事柄でもあった。

「で、バンドやって、楽器のメンバー、他にも欲しいなど」

「へえー、で、デイル兄イは？」

「ちょうどそんな時、ドラム叩いてて、楽器やつてる2人がいるからそつちいきなさいってな感じで…で、行つたら、この2人」

そう言いながら、デイルムツドは懐かしそうに笑みを浮かべつつ楽しそうにメイヴとモーさんの2人に語る。

これだけ見れば、順調にアイドルグループとして形になりつつあるように聞こえる。だが、これには大きな落とし穴があった。それは…。

「俺は当時、アイドルでデビューするもんだとばかり思ってたから、リーダーと兄イと初めて会った時に、あれ？ これもう終わったなと思った」

「!？」

「あははははははははは！」

「いや、気持ちわかるけどさー！」

そのデイルムツドの一言に思わず笑いが出てくるクーフリーンとカルナの2人。

当時は彼らにはさほど期待がされておらず売れないだろうと思われていたのだろう。

そして、デイルムツドは思い出しながら、メイヴとモーさんの2人に続けて語り始める。

「いやー正直、俺も売れる売れない組み合わせは直感的にわかってたところがあつたからさ、この2人を見て『おーデイルムツド来たの?』と聞いた時に俺もそつち仲間かと」

「あははははははは！ マジかよー！」

「へえー、なんだか意外ね」

デイルムツドの語り思わず笑みがこぼれるメイヴとモーさんの2人。今はこうして仲の良い3人にそんな過去があるとは意外だった。

それを聞いたカルナとクローリンも頷いていた。

「俺たち『ようこそ』言っちゃってたもんね」

「いやー、デイルムツドが来てくれて心強かったわー」

本当に売れない人たちと自己認定するほどのメンバー。デイルムツドも正直、諦めていた感がものすごかったという話だった。

しかし、ここで彼らにとって光明と言える出来事があった。それは…。

「でも、ここでベデイが入ってきて、よっしゃ！ まだ頑張れる！ まだいける！ つてなったのよ」

「あー、ベデイは人気出る面子だったわけだ」

「んー、私はクーちゃんもカルナちゃんも好きだけどなー」

そう言いながら、メイヴはデイルムツドの話聞きながらクーフリーンとカルナの2人を非常に気に入っている事を告げる。

すると、一通り話し終えたデイルムツドの語りを聞いたカルナとクーフリーンの2人は顔を見合わせると改めて今の現状を語り始める。

「でも、気がついたらアイドル目指してたのが結局、バンドになって気づいたらこんな事やってるからね」

「転職しすぎやね、僕ら」

———結局、本業はアイドルではない。

そう、本業は最近やったのはこのブリテンに来た当初だけ、しかも、アイドルというよりはバンドで歌うお仕事。

その後、運送業や酪農、ラーメン作り、病院作り、スズメバチの駆除、農業全般、そうめん流し、そして、村づくりなど彼らはアイドルからは想像できない縁遠い事ばかりをやっていた。

他にもレストアや石油掘り、車作りなど挙げればキリがない。

「そう考えるともうアイドルは卒業したな」

「そうだね」

そう言いながら、笑みを浮かべるカルナとデイルムツドの2人。

アイドルがアイドルを卒業したと言い切る。確かに彼らみたいな人間をアイドルと呼んで良いのかと言われれば首をかしげるところだが本人たちがそれで良いものか…。

さて、話題は変わりここで何故かお酒の話に。

「クーちゃん達もお酒とか飲むの？」

「まあーせやな、3人とかでよく飲んだりとかはあったね」

「ふーん」

お酒と言えば、そういえば、カタツシユ村にはまだお酒作りはしていなかった。いずれはお酒作りにも手を伸ばしていきたいところ。

さて、お酒についてだが、モーさんはこんな疑問をデイルムツドに投げかける。

「デイル兄イが2人とお酒飲んでてめんどクセエってなることある？」

「いやー！ そりやもうしよっちゆうよ！」

「おいおい」

「いやいや、そんな事ないやろ」

「えー気になる！ どんな感じなの？ 2人とも！」

そう言いながら、デイルムツドの話に食いつくメイヴ。確かに、お酒を飲んで酔っ払った2人は見たことがない。

すると、デイルムツドはお酒を飲んだ後の2人の話を各それぞれ語り始めた。

「あーまず、兄イからね、兄イは典型的な暴れん坊です」

「ええ!? 俺そんな酒癖悪い!?」

「いやいや、自覚なしかい!」

「へー! まじかー!」

そう言いながら、思わずカルナに突っ込みを入れるクーフリーン。

お酒を飲むと典型的な暴れん坊になるというカルナ、それにはデイルムツドからこんな話が…。

「一緒にお酒飲むじゃない? だいたいの奴は兄イからブレーションバスター食らってるから」

「!? ぶ、ブレーションバスター!? なんだそれ!?」

「そうそう、ブレーションバスター、あ、こんな風に人持ち上げて背中から落とすプロレス技ね」

そう言いながら、驚いたように声を上げるモーさんに説明するデイルムツド。

なんと、酔っ払った勢いでカルナはブレーションバスターをするというのだ。

その経緯はなんとも単純で、お酒を飲むことにより気持ちが昂ぶり、カルナはプロレ

スゴっここに興じるという。

確かに英雄ならばお酒を飲んで気持ちがあがるのもわかる気はするが…。

「大英雄カルナのブレーンバスターを今まで何人食らった事か…」

「いやー、それは大昔であって今はやってないよー」

「いやいや、そんな事は無いはず、胸に手を当てて思い出してみ？」

そう言いながら、デイルムツドはカルナに今現在までブレーンバスターをやっていないのかを問いかける。

すると、カルナは何かを思い出したのかいきなり吹き出すように笑い始めると口から
告白しはじめた。

「…いや、やってたわ多分、ウチの建築の社員とか、あと、アルちゃんにもかましてたと
思う」

「ほらー！ やっぱり！ あんた絶対やってると思ったもん俺！」

どうやら、思い当たる節が見つかったようで告白したカルナの言葉に一同はゲラゲラ

と笑い始める。

しかも、なんと、インドにて建築を教えていた作業員だけでなく、英雄であるアルジュナにもブレーンバスターをしていたというのだから驚きだ。

カルナはその時の様子をこう語る。

「いや、翌日、背中抑えてるもんだからさ、アルちゃんにどうしたのか聞いたのよ、それたら、『あのブレーンバスターという組み技、教えてくれ』って言うもんだから、もうやっちゃったなって」

「いや、記憶なかったの!? 兄ィ!」

「全然覚えてなかった」

カルナは楽しそうに笑いながらモーさんに告げる。

お酒を飲み、酔っ払うとブレーンバスターをかますというカルナ、お酒を飲むと絡みなくなっちゃう熱い男、それが、我らがカルナ兄である。

熱いというかブレーンバスターは迷惑であるのは間違いないのだが、しかし、ディルムツドが言うには楽しいお酒だそうだ。

「それってよくよく考えたら王様達とか、一緒に会席でお酒飲んだら大変じゃない？」
「全員、ブレーンバスター食らうよ」

そう言いながら、メイヴの言葉に頷き答えるデイルムツド。

確かに楽しいお酒なのだろうが王様全員にブレーンバスターはまずい、しかも本人に酔っ払った自覚がないから尚更だ。

仮に王様が集まり、問答するとしよう、その場にカルナを投入すればアーサー王だろうが、英雄の王様だろうが大王様だろうが彼は勢いあまってブレーンバスターをするに違いない。

——酔った勢いで王様バスター。

想像しただけで凄い絵面である。

「ちなみにリーダーは？」

「あれは楽しくないね」

「ちよ!?! なんでやねん!」

全員その言葉を聞いた途端、グラグラと笑い始める。

カルナはブレーンバスターとかいろいろと熱い男でお酒も楽しいと聞いたばかりにリーダーのお酒が楽しくない酒と言われればこのオチには思わず笑ってしまふ。

哀愁漂うリーダーだが、でも、こんなところもまた彼が皆から愛される理由の一つだろう。

それからしばらくして、談笑を交えつつ、クーフリーン達が散策するとあるものが見つかった。それは…。

「お、これは…」

「まだ熟してないけど、さくらんぼじゃない？」

そう、見つけたのは、まだ、熟していないさくらんぼを発見した。色はまだ赤くは無いがこれは貴重な食料になり得る。

早速、一つだけさくらんぼを摘んでみる。デイルムツドとリーダーの2人、実は熟していないがこれをどうする気なのだろうか？

「噛んでみる？」

「せやね一つだけ」

「あ！ それじゃ俺も！ 俺も！」

「あ、私も一つ良いかしら？」

そう言いながら、カルナとデイルムツドからさくらんぼを手渡されるメイヴとモーさんの2人。

なんでも口に入れようとするのは果たして大丈夫なのだろうか？ 何はともあれ、ひとまずはさくらんぼの味見。

多少、色がマシなものを選んで、さくらんぼを口に運び、4人は噛む、すると、その味は…。

「ふおおおお………！」

「ふああああ………！」

「ひああああ………！」

「ほおおおうあ………！」

言葉にならないような声をあげて顔を洩らせる4人。どうやら、熟していないさくらんぼの渋さが口に広がり、あまりの味に驚愕しているようである。

酸っぱいし、苦味もある。

酸味があるというのはそれだけ甘くなるという事だが、色が多少マシなやつでさえ食べれないのは誤算だった。

匂いは確かによく、さくらんぼの匂いはするが…。

「俺たちもさあ、大人なんだからさく、ちよつと気が早いよー、焦りすぎ焦りすぎ、成長過程をね」

デイルムツドは熟していないさくらんぼを見つめたまま、皆にそう告げる。

確かに気は早い、酸味が甘味に変わる日までしっかりと待つてあげることも必要だ。

という事で、このさくらんぼの大人の楽しみ方を…。

「このさくらんぼの実の気持ちになって、この子のね」

さくらんぼの葉にそつと触れながら皆にそう告げるデイルムツド、さくらんぼの気持ちになるとは果たして…。

さて、ここでデイルムツド、さくらんぼの実になった気持ちで心を込めた一句を読み上げはじめた。

——言葉が湧いてくる。

「まだダメよ 甘くなるから 待っててね」

ここで再び、さくらんぼの映像と共にデイルムツドが聞いた、熟していないさくらんぼの気持ちになった句を再び聞いてもらおう。

まだダメよ 甘くなるから 待っててね

デイルムツドは熟していないさくらんぼの一つを口に近づけると口付けをしこう語り始める。

「まだまだな、酸っぱい時期だよな…待ってるよ」

「……………」

「……………」

しかし、句は凡作、特にこれといって傑作なようには感じられなかった。

デイルムツドの句を聞いて首をかしげるモーさんは沈黙が流れる中、一言、こんな言葉を投げかける。

「なあ、兄イ、デイル兄さくらんぼに頭やられたのか？」

「モーさん、あれが素のデイルムツドだよ」

そう言いながら、質問を投げかけるモーさんの頭を悟ったように撫でるカルナ。そんな中、デイルムツドは相変わらずさくらんぼに口付けを送っていた。

確かにあんな風に接していたらさくらんぼの木の気持ちはわかるようにはなりそう
な気はする。

さて、散策で新たにさくらんぼの木を発見した一同はひとまず散策を終えてカタツシユ村に帰るのだった。

今日のY A R I O。

さくらんぼの木を発見ー
デルムツドの凡作が出来上がるー
丸くなったモーさん&デルムツドー
インドにブレーションバスターが伝わるー
NEW!
NEW!
NEW!
NEW!

そうめん流すしかない その3 (完成)

竹を組み合わせて作る巨大そうめん流し。

ブリテンを股にかけるそれは、この島の食料問題にピリオドを打つ象徴。

さて、そのそうめん流しだが、もうその長さはカタツシユ村を離れ、ブリテン城下町へと達していた。

全長は最早、想像し難いほど長い竹の道、ここを通ってそうめんがキャメロット城の城下町へと送られてくることに…。

「…いやー、なかなかね、しんどかったよ、こいつをここまで伸ばすのは」
「竹とこれだけ格闘したの俺達くらいだよな」

自信を持ってそう言える。

このそうめん流し作りにはなかなか苦勞をさせられた。川を越え、丘を越え、そして、辿り着いたこの街。

全てはお腹を空かせた街のみなさんにそうめんを届けるために…。
さあ、後はこれを城の中に引いていけば良いが…。

「問題はキャメロット城にどうやってそうめん通そうか」

「だよなあ、やっぱり城つてなると距離感あるし、城の中にそうめん流しを通すと
なあ」

彼らの目の前に聳え立つキャメロット城。この国の王であるアーサーペンドラゴン
の居城。

この場所にそうめんを届けるには、そうめん流しを繋げるしかないが流石にそれだと
いろんな意味で問題になりそうだと彼らとしても考えるところであった。

そこで、カルナは考える、つまり、城内にそうめん流しを繋げなければ良いのだ。

「そうめん飛ばすしかない」

「なるほど」

つまり、そうめんを飛ばし城内に入れてしまえば、キャメロット城の中にまでそうめ

ん流しを繋げる必要は無い!

そうめんを飛ばし、城内にあらかじめ作っておいたそうめん流しに落としてしまう。こうすれば何の問題も起きないはず。

見事な発想、これにはベデイも関心するように声をあげた。

「落つこととして下で拾う」

「そうめん空飛ぶよ」

———空飛ぶそうめん流し。

空を飛んだそうめんは城門を越え、キャメロット城の城壁の下に設置した待機しているそうめん流しへ…。

この斬新なアイディアなら、きつとアルトリアちゃんをはじめとした円卓の人達も満足にそうめんを食べてくれる筈。

後は飛ばしたそうめんをしつかりとキャッチするような作りと、丘や坂などの箇所を勢いよくそうめんが駆け上がるために高圧洗浄機を設置していく。

こうすれば、水の勢いが増し、そうめんもスムーズに街の中を行き渡るようになって

くれる筈。

以前、やった時はそうめんが水圧で吹き飛んだ事もあったが、水の量などを調整しておけば何とでもなる。

「さて、それじゃ後はデカいザル敷いて、カタツシユ村から流すだけだな！」

「伸びそうな気がすんだけどさ……これ」

「大丈夫大丈夫！ 伸びてもうまいのよ！ 俺たちのそうめんは！」

そう言って、ブリテンの城まで長々と続く巨大なそうめん流しを見つめるモーさんの肩を叩いて満面の笑みを浮かべるディルムツド。

——伸びるのもまたそうめん流しの醍醐味。

大量にあるそうめんをどっさりと用意し、割り箸をトレースオンしたスタッフエミヤからそれを受け取るカタツシユ隊員達。

いよいよ、そうめん流しの試運転、果たして、そうめんは無事にブリテンの城までたどり着く事ができるのか。

そうめん流しの先にはまだかまだかと、麵つゆを構えたアルトリアちゃんと円卓の騎士達が目を輝かせて待機している。

そして、そうめんの他にも手作りで打ち付け作り上げた蕎麦を摘み上げたエミヤはキメ顔でカタツシユ隊員達にこう問いかける。

「別に、蕎麦も飛ばしてしまっても構わんのだろうか？」

「いよ！ 待つてました！」

「さあ！ そうめん流すでー！」

さあ、いよいよ発走です。

まずはエミヤから流された蕎麦がそうめん達を先導するようにそうめん流しを流れていく。

そして、それを合間合間にカルナ達やモーさん、婦長、マーリン師匠などが割り箸を突っ込み麵を次々と掬うと麵つゆにそれをつつこんで食べはじめ。

「うお！ うめー！ これがそうめんか！」

「…私は蕎麦が気に入りました。胃にしみます」

「そうめん流し…何という高等魔法なんだ…」

そう言いながら、味わい深いそうめんと蕎麦を食べるカタツシユ隊員一同。

しかし、蕎麦とそうめんの旅は終わらない、次は川を渡り、高圧洗浄機の力で丘を越えていく。

だが、ここでそうめんが…。

「あー！ やべえ！ 吹っ飛ぶ吹っ飛ぶ！」

「リーダー！ 早く！」

「ちよ！ まっ！ あだあ！」

高圧洗浄機が暴走し、なんと勢いよく吹き上げたそうめんがリーダーの顔面に激しく直撃、クーフリーンは思わず仰け反る。

それを間近で見ていたスカサハ師匠はすかさず、暴発し自身に飛んでくるいくつものそうめんを巧みな割り箸テクニクで捌いて麵つゆの中へ。

そして、それを口に運ぶ。さて、そのお味は…？

「…ふむ、まだ行けるな、伸び切ってない。全然おいしいぞ！」

「いや、スカサハ師匠、リーダーは伸びちゃってる」

「…む！ そうめんによられるとは鍛え方が足りていないな!! 情けないぞ！ しげちゃん！」

「め、面目無い…」

「それでも食って気合いを入れ直せ！ ほら！」

顔面にそうめんが直撃したリーダーにスカサハ師匠からのありがたい厳しいお言葉。

しかし、スカサハ師匠、ここでさりげなく麵つゆにつけたそうめんをリーダーに食べさせてあげるさりげない優しさをここで見せつける。

さて、場面はさらに変わり、次はブリテン城下町へと差し掛かる。

高圧洗浄機が暴走するハプニングはあったものの、根気強くそうめんが次から次へと流れてくる。

カタツシユ隊員達が莫大なそうめんの量をトラックを使い何日もかけて運んできた甲斐があつたというもの、そうやすやすとはそうめんは無くならない。

ここからは流れてきたそうめんは多岐に渡り街の中を巡り、最終的にはキャメロット城へ行き着くようになっていく。

さて、この城下町にはネロちやまとADフィン、鉢巻を巻いたトラック野郎こと小次郎が麵つゆを片手に待機していた。

さあ、ここまで流れてくれば流石にそうめんも伸びている頃、さて、その味は果たして？

「…あれ？ そうめん伸びてないですね？」

「うむ！ …これがS O U M E N!! ツルツルしていて喉越しも良いな！ 余は大変気に入ったぞ！ ローマでも造らねばな！」

「この蕎麦…なかなかわかってやがる…。いい味だ！」

3人は変わらぬそうめんと蕎麦の味に思わず驚いたような声を上げる。

カタツシユ村からブリテン城下町まで、かなりの距離がある。にもかかわらず、味はさほど落ちていない。

これは一体どういう事なのか？ カタツシユ村魔法使いの第一人者マーリン師匠の話によると…。

「そうめん流しの話をしよう。間違いない、これは魔術的なものがかけられたそうめん

と蕎麦だ。固定化や何かで品質を保ちつつ流しているようだね」

「実は私がやった」

「僕もやで」

「あんたら揃いも揃ってそうめんに何してんのよ」

そう、言つてスカサハとクーフリーンの2人は仲良くそうめんをズズツと嚙りながら、同じくそうめんを嚙り解説をするマリーリン師匠に告げる。

それを聞いていたカルナはすかさず突っ込みを入れた、そうめんに魔術を施すこの師弟コンビは何を考えているのか…。

しかし、これのおかげでそうめんと蕎麦が伸びなくなつたのもまた事実である。

ルーン魔術によるそうめんと蕎麦の品質改良。

これにより、ある程度水に触れてもそうめんと蕎麦が伸びない工夫を施し、皆も安心してそうめんが食べられる。

確かに長い距離をそうめんと蕎麦が水を使い巡るのだから、これくらいの工夫を施さないと美味しいそうめんはブリテン中に届けることができない。

「だって、伸びた麺なんて美味しくないやん、ねえー?」

「ねえー、私もそう思う」

「ねえーってなによ、ねえーって」

そう言いながらカルナは呆れたように左右に首を振る。

と、何はともあれ、そうめんはこうしてブリテンの街を駆け巡り、街の人々は麵つゆと共に流れてきたそれを美味しく頂いていた。

これが、世界最古、ブリテンそうめんブームの到来である。

「いやー、我が王よ、そうめんとは美味しいものですね」

「確かに、このわさびというものはツーンと鼻にきますが、癖になりそうです」

「ズルルルルルル、ズルズルズルズル」

「…食べてばっかりではないか」

アグラヴェイン卿の突っ込みが冴え渡る中、キャメロット城でも城壁を飛んでやってきたそうめんがアーサー王と円卓の騎士達の元へと流れてきていた。

一心不乱にズルズルとそうめんを食すアーサー王、その顔は実に幸せそうな表情を浮かべていた。

そうめんに蕎麦、今までアーサー王が食べた事がない食べ物に喉越しも良く食が進む。

「ゴクン、…これがMENTUYUのDASH!」

「いいえ、王よ、これは麵つゆのダシです」

「!? なんですって! DASHではないのですか!」

卿。あらがち間違いではないのだが、麵つゆのダシであるので訂正を加えるランスロット

……DASHで作りました。

アーサー王、円卓の騎士そして、ブリテンの人々も麵つゆとそうめんの素晴らしさに気づいたに違いない。

その後、円卓会議にて、年間行事にブリテン伝統のそうめん流し祭りが開催される事が決定されることになるのだが、それはまた別の話である。

貧困に苦しむ家庭にも流れてくるそうめんと蕎麦。

このそうめん流しによって、カタツシユ村にまた人が増えてくるようになるだろう。果たして、この村は今後どのような発展を遂げていくのだろうか？

その続きは…、次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

礼装・ルーン魔術を施したそうめんーNEW！
ブリテンの城壁を飛ぶそうめんーNEW！
ザ！麵つゆD A S H!!ーNEW！
ブリテンにそうめんブームーNEW！
空飛ぶ蕎麦ーNEW！

明日を目指して!

さて、ブリテンの食料問題も配達や繋げた巨大そうめん流しによってあらかた解決した我らがカタツシユ隊員達。

ブリテンの街や村の人々から感謝を惜しみなくされ、さらにそうめん流しという文化をブリテンに普及させることに成功した。

眼前に迫った課題をこなした彼らだが、だが、ここで、彼らが忘れていることがあった。それは…。

「聖剣どうすんのよ」

「あと、ラーメンまだ完成してないし」

「山城もまだまだ制作にすら入ってないよー」

「せやなー」

そう、以前から考えて積もり積もったままの挑戦。

これを未だそのままにしている。そうめん流しが終わったところだが、やるべき事は多い。

聖剣作りは鉱物集めがもうちよつと、さらに、ラーメン作りは具材がメンマとチャーシューのみ、これではまだ寂しい。

あとは山城だが、これに関してはまだ手をつけていない。山城を建てる前に病院や牧場などの建築物を優先して建てていたためだ。

なので、現在も未だに突貫で作ったプレハブ小屋的な拠点地のままである。

雨風は確かに防げるし、色々と便利ではあるのだが、人数も増えつつあるカタツシユ村、このままでは、会議をするにもいずれは溢れてしまいそうだ。

それに、王様作りも現在進行中もあり、このプレハブ小屋をいつまでもモーさんの城と言ひ張るにはちよつとキツイ。

だが、ここで、ヴラドはふとした提案を持ちかけはじめた。それは…。

「そーいや、伝説のラーメンに使う小麦の原点だっけ？」

「そーそー、だから場所的にはエジプトかなって」

そう言って、ヴラドの話に頷きながら告げるカルナ。

エジプトといえば、ビールやパンなど、発酵醸造食品の発祥の地でもある。小麦を使う加工に関しての知識がより確立された地。

そんな土地に赴き、より、良質で伝説の素材の味を失わない麺を手に入れる、ヴラドはこの時そう考えていた。

しかし、デイルムツドは…。

「いやさあ、ちよつと待とうよ、麦の栽培はメソポタミア地方が発祥じゃん？ だからさ、バビロンじゃね？ 行くなら」

「え？ バビルの？ エジプトじゃなくて？」

「ベデイ、バビるって何？ バビるって」

全く新しい言語に思わず突っ込みを入れるヴラド。

バビロニア王国。確かに世界最古と思いつくのはその場所であり、確かに人類史として最も古くからある王国としても思い当たる。

となれば、小麦もこの時代がもしかすると発祥の可能性もあり得る。それに、空中庭園などもあり、建築物に關しても学ぶべき事は多いはずだ。

実際、空中納屋山城を作るにあたって、空中庭園作りを学ぶ必要があり、必ずこのバ

ピロニアには足を運ばなければならぬ事には違いない。

「で？ どうすんのよ？」

「いやだから、バピロニアじゃない？ 山城の製造もあるんだし」

「いや、小麦の発祥だよ？ エジプト、ピラミッドすげーじゃん」

そう言つてカルナとディルムツドは互いに意見の相違に関して、各自の意見を述べる。

それを聞いていたリーダーは頷きながら静かに何かを考えているようで、その隣にいるスカサハ師匠は寝ているモーさんに膝枕をしてあげていた。

どちらにしろ、動かない事には事は動かない、話をまとめる必要がある。

そんな中、ベディは笑いながらこう告げる。

「解散の危機になるかも、ラーメンの麺で」

「……ラーメンの麺で解散危機。」

ラーメンの麺で解散の危機に直面するアイドルなど彼らくらいしかないだろう。

しかしながら、互いとも意見に間違いはない。ラーメン作りに必要な小麦の調達は必須であり、その伝説の小麦は二人が言う通りバビロニアとエジプトのどちらかにあると思われる。

であればと、リーダークーフリーンはここで彼らにこう話をし始めた。

「なら、両方から取ってきたらええやん」

「なるほど」

「ああ、確かに！ 食べ比べできるしね！」

そう、両方の小麦を栽培し持ち帰れば何の問題も無い。

もしかしたら違う味の麦の麺が出来上がるかもしれない。そうなれば、この伝説の食材達をふんだんに使った豚骨ラーメンにも深みが増してくるはず。

二つの文明には二つの文明の良さもあり、学ぶべき事は多い、ここは是非とも、先輩である古き文明から学べる事は学んでおきたいところだ。

まずは、小麦の発祥とされるエジプトに行く組み分けから行う。今回はヴラド、ベデイ、デイルムツドのガヤトリオに加え、モーさん、ADフィン、の5人がこちらのグ

ループに、移動手段は食材を調達できるようにと時空トラックだん吉Mk2を使う。

「mk2って響きカッコいいよね」

「だよー、モビルスーツっぽいよね」

「……ガンダムっぽいだん吉。」

できる事ならお台場あたりに置いてもらったら尚良いだろう。

ちなみにモーさんの鎧は現在ではADフィンから改良に改良を重ねられ、対スズメバチ兵器として効果音にクポーンとプツピガンという謎の音が加えられ、なおかつモノアイになっている。

これに関して、現在、スカサハの膝枕でスヤスヤと眠っているモーさんはどうと？

『いやー、いつもの三倍くらい農作業も捗るんだよな！ あれ着てるとさー！』

「……赤い彗星のモーさん。」

同じ赤色とはいえ、そんなので良いのだろうかと突っ込みを入れたくなる。

これは完全にカタツシュ隊員の一部の趣味とADフィンの趣味が重なり合った結果

だろう。

モーさん曰く、特に斧の使い方に関して身体が軽くなるとか、さらに機動性も3倍増しに、これならスズメバチもイチコロだ。

さて、話は戻るが、これが、エジプト組みである。

続いてバビロニア組みだが、これは、建築の山城の件もあり、カルナ、リーダーの二人が…、そして、2人には当然ながらスカサハ師匠がついてくる。

「お留守番は嫌だぞ、私がついてく！」

「いや、お留守番って貴女…。言い方が…」

まあ、確かにスカサハ師匠はやたらとリーダーについて来たがるのでこればかりはカルナも何とも言えない。

さらに居残り組みだが、農作物にはメイヴちゃん、街へのトラック配達は小次郎さん。

それから、酪農関係は当然マーリン師匠、そして、現在、村に建ててる建築物の監督役にネロちやま、建てられた診療所件病院の管理にはナイチンゲール師匠、壊れた機械類の修理及び、農作業の補助にスタッフエミヤと配役を決める。

農作業の補助には当然、小次郎さんも、こうする事で女性であるメイヴちゃんの負担を少しでも減らす配慮を行なっておいた。

こうして、振り分けられる各自の役割分担、各自の長所を活かしつつ、このカタツシユ村をより発展させる為に頑張るって欲しいものだ。

「ま、こんなもんやろ」

「リーダー達がバビるの担当か…、なら俺たちは頑張るってエジって来るしかないよね」
「バビるって何？ エジってくるって何なのよ!？」

「……湧いてくる新しい言語。」

もしかすると、今年の流行語大賞を狙っているのか？ しかし、流行語大賞には確かな自信がある。現に彼らは新しい波を常に起こして来たのだから。

さあ、そうと決まれば話は早い、すぐさま行動に移すのが彼らだ。

デイルムツドはスカサハ師匠の膝上で寝てるモーさんを優しくお姫様抱っこして回収するとエジプト組としてだん吉Mk2へ向かい始める。

「じゃあ俺たちエジってくるわ！」

「おけー！ 僕らもすぐ出発するから頑張つてな！」

「バビるのに必要な道具入れとかなきゃな、あらかた大工道具はいるし、あと、鍬も持つてくか」

「あんたらそうやってすぐ染まるんだから、もー」

馴染んで来た新しい言語を話すカタツシユ隊員達に呆れたように呟くヴラド。

そんな中、デイルムツドからお姫様抱っこをされスヤスヤ寝てるモーさんは幸せそうな寝顔を見せていた。何とも可愛らしい寝顔である。

「ああーだめえ…ブリドウエンは魚じゃないってえ…」

「…寝言かな？」

「どんな夢見てんだらうねこの娘」

「……確かに鰻は魚だが。」

さて、こうして、寝言を呟くモーさんの言葉に首を傾げつつもだん吉mk2に乗り込んだエジプト組一同は車を走らせいつものように時をかける。

それを見届けたカルナ達もすぐさまバビロニアに行く為にいろんなものをだん吉m

k2に詰め込み準備を終える。

「じゃ、行ってくるで！」

「はい行つてらっしゃい、気をつけてね？ クーちゃん」

「村は任せておけ！ 余がいれば百人力だぞ！」

そう言つて笑顔でクーフリーンに告げるメイヴにネロ。

彼女達の表情は明るく、晴れやかな笑顔だった。旅に出る彼らがまた元気でこの村に戻つてくると信じているからだ。

そして、村の開拓者であるカタツシユ隊員達からも…。

「酪農のコツ、ようやく掴んで来たからね」

「もし、だん吉が故障したのならば呼んでくれ、すぐに飛んで行つて修理する」

「怪我をしたらすぐに報告ですよ？ わかりましたね？」

「配達なら私に任せておけ、相棒もいる事だしな」

メイヴとネロと同様に優しく3人を見送る。

見送ってくれるカタツシユ隊員達に笑顔で頷くカルナとクーフーリン、そして、スカサハ。

最初は一人だったクーフーリン、だが、出会いを経て、仲間達と再会し、そして、いろんな物事に取り組んだ。

それは、以前に学んだ先人たちの知識、そして、新たに学ぶ先人たちの知識により成せる事。

そして、これからも皆が築き上げたこの村でまた新たな挑戦が始まる。

果たして、伝説のラーメンを彼らは作り上げる事は出来るのだろうか？

さらに、聖剣作りに山城作りなどやる事はまだまだ山積みだ。

「それじゃ出発!」

「あいよー!」

そのリーダー掛け声とともにカルナが運転するだん吉Mk2は走り始める。

これまでの物語を振り返れば様々な出来事があった。仲間との再会、新たな師達との出会い、そして、カタツシユ村の発展。

様々な困難が立ちはだかる中で彼らは成長し、絆を深め、また新たな仲間達との出会

いを果たして来た。

——大地を蹴り出すんだ。

これから先の文献の記述には、彼らの様々な記録や伝説が載ることになるだろう、だが、彼らがその足を止める事は決して無い。

ここまで話は彼らが再び出会い様々な挑戦に挑み続ける物語の一端。

彼らが一体、これから先、どうなるのか？ どんな物語を描いて行くのか？

この続きは！ 次章！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

新たな言語を生み出す——NEW！
各自エジプト、バビロニア——NEW！

ラーメンの麺で解散危機? ー ー ー ー NEW!

絶対開拓戦線　バビロニア with エジプト

鉄腕／ウルク　その1

バビロニア。

シュメール文明とアッカドを征服して、チグリス川とユーフラテス川の間を中心に栄え、後にアッシリアの支配を受け作られた王国。

のちアッシリアが衰えると新バビロニア王国が興り、ネブカドネザル2世の時その勢力は各地に及んだが、アケメネス朝ペルシア帝国に征服されてその属州となったとされている。

メソポタミア地方の古代都市で。市域はバグダードの南方約90kmの地点にユーフラテス川をまたいで広がっている。

旧約聖書創世記ではバベルと表記され。創世記10章第2節によると、ノアの子ハムの子孫である地上で最初の勇士ニムロドの王国の主な町が、シナルの地にあったバベル、ウルク、アッカドであったという。

さて、そんなバビロニアだが、現在、我らがクーフリーン一同は伝説のラーメンに使う小麦、および、山城建築のための空中庭園の技術を学ぶべく、この地に訪れていた。

「なあー、しげちゃん、私は最近、思うんだ。お前は私の事は好きなんだよな？」

「ん？ それは当然やないですか、師匠、今更、何言うてるん？」

「ほんとか！ 私の事が好きなのか?！」

「そりゃ、僕らの師匠なんやから大好きに決まっとるやんかー、なー？ ぐっさん？」

「いや、リーダー多分、趣旨がズレてると思うんだけど…」

そう、リーダークーフリーンのいつも通りの反応に引きつった笑みを浮かべるカルナ。

師匠が好きかと訪ねたのは異性として、そして、クーフリーンの返答としてはもうみなさんは察しがついている事だろう。

しかし、スカサハ師匠、これに気を良くしたのか満面の笑みでクーフリーンの距離をグツと近づけながら傍らに寄り添うように歩き始めた。

しかも、上機嫌のあまり鼻歌のおまけ付きである。

「師匠、なんで歩く距離近いん？」

「んー？ 良いではないか？ 私の事が好きなんだろう？ な？」

「なるほど、そういう事か、せやな！ つまり今からみんなで肩組んで歩いて城まで向かうチャレンジやね！ぐっさん！ 肩組もう！」

「…あーもう、この2人は本当に…」

そう言いながらカルナは頭を思わず抑えてしまう。

何というかこの師弟のやりとりを見ていると微笑ましいが、明らかに2人の見事なまでのすれ違いをカルナは察しているため巻き込まれる事に関してため息を吐き左右に首を振るしかない。

というわけで…。

——果たして！肩を組んで三人四脚で城にたどり着けるのか！

まあ、当然、そんな事は始まることもなく、クーフリーンとの距離を詰めすぎたスカサハ師匠が足をもつれさせ可愛い声を溢して、何も無いところでずっこけたところでのチャレンジは終了した。

そんな漫才みたいな事をしながらしばらく歩くこと数分あまり、だん吉から離れ、彼らが訪れたのは素晴らしい造形美を誇る宮殿と城がある城下町。

都市国家ウルク。

その遠目から見ても分かる建造物からしても、この時代の繁栄の度合いが凄い事がうかがえる。

「はえー、すごい街やね」

「人が溢れてんもんな」

「築地の市場思い出すわー、懐かしい」

「えー？ これむしろアメ横の商店じゃない？」

「ふむ、そこはわからんが確かに凄い活気だな」

神秘が色濃く残る紀元前2655年古代メソポタミア。

このメソポタミアで繁栄の時代を迎えている城は素晴らしい様式美を誇っており、その城下町では人々が満面の笑みで活気溢れた商売を行なっている。

そして、その賑やかな城下町を一望できる素晴らしい造形美を誇る城の玉座に鎮座するのはこの栄えあるメソポタミアを納める唯一無二の王である。

とりあえず、この王様に会わない事には伝説の小麦を持ち帰る事は難しいだろう。というわけで、いつものように一同は城に向かって足を進めるのであった。

ウルク都城。

この城の主は強き英雄であると同時に暴君でもあった。

その横暴ぶりを嘆いた市民たちの訴えを聞いた天神アヌは女神アルルにその暴君の競争相手を造るよう命じる。

その作られた競争相手は紆余曲折あったもののその暴君と出会って早々、大格闘を繰り広げることになった。

結局のところその戦いは決着がつかず、2人は互いの力を認め合い深く抱擁を交わして親友となったという。

そのような過程を経て、2人はウルクの民から讃えられる立派な英雄となり、今ではこうしてウルクも繁栄している。

さて、そんな国を収める暴君様を我々カタツシユ隊員達は訪ねた訳だが。

「遅いぞ！ 全く何をやっておったのだ！ 待ちくたびれたぞ！」

「ようこそ！ ウルクへ！」

熱烈で盛大な大歓迎を受けた。

城内には彼らを出迎えるようなようこそ！ ウルクへ！ と横断幕のようなものが掲げられ、そして、彼らを熱烈に出迎えるギルガメッシュ王の反応に関して、リーダー達はポカンとしていた。

すぐさま彼らを出迎えた従者達が彼らに近寄るとレッドカーペットを眼前に引く始末。

そんな中、口を開いたのは暴君というよりも賢王という言葉が相応しいウルクの王からだった。

「…貴様らの活躍は毎週日曜の夜7時あたりからいつも見ておったぞ」

「随分具体的な時間ですね」

「録画できないんだね！ わかるとも！」

そう言いながら、賢王ギルガメツシユの言葉に思わず突っ込みを入れるカルナ。

そして、千里眼で見ていたため毎週、録画できない事をカミングアウトする賢王ギルガメツシユの友人であるエルキドゥ。

——毎週チェックを欠かさない。

それだけ、自分達の活躍を見ていてくれる方がいるのはカタツシユ隊員達としては嬉しい限りであるのだが、ここまでの歓迎は正直予想外であった。

「実は貴様らに影響を受けて我も最近、水上建築を自らの手で始めてみてな、これがなかなか面白く気に入ってきたところだ」

「え！ 水上建築なんてされるんですか！」

「いやー、凄いですねー、僕らもまだ水上建築は勉強してないから…」

そう言いながら、ギルガメツシユ王の水上建築の話に華を咲かせるクーフリーンとカルナの2人。

水上建築、これは確かに今後の建築作業にも活かせるはずだ。時間があれば是非ともギルガメツシユ王にご教授願いたいものである。

従者達が豪華で彩りある食事を運んでくる中、それを口に運びつつ、クーフリーン達にギルガメツシユは軽い笑みを浮かべながらこう話をしはじめた。

「ふん、我にとつてはただの余興に過ぎぬ、しかし、貴様らは本当に面白い人材だ。人の身でありながら我を全く退屈させないことばかりをする」

「いやいや、恐縮です」

そう言いながら、ギルガメツシユ王のべた褒めに思わず顔が綻ぶ我がリーダークーフリーン。

そんな中、彼の友人であるエルキドゥはニコニコと笑みを浮かべたまま、カタツシユ隊員達に対してこんな話をし始めた。

「ギルガメツシユはね、君らが要らないものが無いかと訪ねて来るだろうと捨てるものをたくさん用意したり君たちが来るのを楽しみにしてたんだよ?」

「…え! もしかして捨てちゃうものとかあつたりします?」

「ふん、腐るほど用意しておいたわ」

そう言いながら、食事を口に運びながら実に嬉しそうな表情を浮かべているギルガメッシュ。

その口調とは裏腹に彼らに会えてものすごく嬉しそうだという事は側から見たら一目でわかる。よほど、彼らの事が気に入っているようだ。

だからこそ、ギルガメッシュ王が解せない事があった。それは…。

「おい、何故、貴様らは全員で来なかった」

「…えーと、実は今、伝説のラーメンを作ってまして…」

「それはわかる。何故、ここに残りが来てないのかと言っておるのだ」

「あー、もう一方がエジプト行ってるからですね、今」

そう言いながら、あつさりとギルガメッシュ王にもう片方が古代エジプトに行っている事をカミングアウトするカルナ。

「……エジプトの幻の小麦を手に入れる為。」

伝説のラーメン作りに必要な伝説の小麦を入手すべく、デイルムツド達は現在、エジプトに出張中である。

実はギルガメッシュ王、彼らが歌う歌を実は密かに楽しみにさせていたのである。

だが、未来を見通す千里眼を持つとしても彼らが取る行動はたまに予想外の方向に働く。

そんなこともあつて、本来なら、ウルクに集結していた筈の彼らがない事がギルガメッシュ王には大変ご不満であつた。

「それでは歌が聞けぬでは無いか！」

「いや、僕ら歌つたの半年くらい前で……」

「知っておるわ！ このたわけ！」

「鍬しか持つてないもんなー最近、ねえ師匠？」

「うむ、致し方ないな」

カルナの言葉に力強く頷くスカサハ師匠、楽器は向こうに置いて来ている上に手元に鍬しかない。

まさか、このご時世に彼らの歌を聞ききたがる人間が居たとは…。流石はギルガメツシユ王、中々の通である。

というわけで、大変、ギルガメツシユ王の熱烈な出迎えに対してお返しができないうなど感じたリーダーはこんな話を持ちかける事に。

「はい、というわけで、ギルガメツシユ様には僕らが作った伝説のラーメンを試食して貰いたいなと思ったりしてます」

「…ほほう、詳しく聞かせろ」

「えーと、今のところ材料なんですけど」

そう言いながら、リーダーの言葉を紡ぐようにカルナはギルガメツシユ王に対して今回作ろうとしている伝説のラーメンについて語りはじめた。

とはいえ、ギルガメツシユ王は既に彼らがその材料を手に入れている過程を知ってる為、説明はそんなに要らなくて済んだ。

「ふむ、良からう、この度の不敬は許す」

「最初から許す気だった癖に」

「光栄に思うがいい！　この我が直々に食べてやるのだからな！」

そう言いながら、ギルガメツシュ王は上機嫌な表情を浮かべたまま、エルキドウの言葉を軽くスルーし彼らに告げる。

とりあえず、ギルガメツシュ王は機嫌をよくしてくれたようだ。これなら、話もいろいろ進めやすくなりカタツシュ隊員達としても助かる。

という事で、ここでもう一つほどお願いを。

「ギルガメツシュ王、実はお願いがありました…」

「なんだ？　我と友人になりたいと抜かすのではないだろうか？　生憎だが、我の友人はこの隣にいるエルキドウだけだ、あとは、取るに足らない雑種のみ、…いや、貴様らは別だったか」

そう言いながら、ほくそ笑むギルガメツシュ王。

あわよくば友人となれたらなと考えていたクーフリーンだが、出鼻から挫かれる形となってしまった。

しかし、ギルガメツシュ王から学ぶべき事は多い、どうにかして繋がりは持つておき

たいところ。

クーフリーンは少しばかりその場で考えた後、ギルガメツシュ王にこう提案を投げかけはじめる。

「そうですか、うーん……あ！ それじゃ僕らの水上建築の師匠になつてくれませんかね？」

「良からう、ならば許可しよう、今日から貴様らは我が水上建築を教える我が愛弟子だ」
「まさかの即答!?!」

まさかのギルガメツシュ王からの即答に仰天するカルナ。そう、ようは友人でなければ弟子入りすれば良いのである。

しかも、この溺愛よう、よほど、彼らの事がギルガメツシュ王はお気に入りの様子。それもそのはず、最近はじめたギルガメツシュ王の趣味は全て彼らからの影響からはじめたものが多い。

果たして彼の千里眼は毎週日曜日、どんな光景を見ていたのだろうか気になるとこだが、ギルガメツシュ王は大変ご満悦の様子である。

と、ここでギルガメツシュ王は宝物庫から持ってきた宝具を一つ手に取るとこんな話

をしはじめる。

「ところで、この宝具だが最近要らなくなつてな…」

「えっ！ これ！ もしかして捨てちゃうんですか？」

「いやー、僕これまだ使えると思うんやけど…」

「ふふふ、ならば、我に相応しく使える宝具にして来い、我が弟子なら可能だろう？」

「ええ！ いいんですか！」

「いやー、これは修理しがいがあるなー」

「嬉々としてるな、お前達」

ギルガメツシユ王は彼らを弟子にしてすぐにこの提案をもちかけ、さらに、その無茶な提案をなんの迷いもなく数秒で飲んでしまうカタツシユ隊員達のクーパーリンとカ
ルナ。

それを見ていたスカサハは思わず肩を竦め呆れたように首を振る。

ギルガメツシユ王から手渡された立派な剣だが、鍛えようによつては凄い剣に出来そ
うだ。

「これデユランダルやないかな？」

「名剣だよなー、とりあえずこれならデイルムツドなら良い包丁にできるんじゃない？」
「包丁か悪くないな、調理器具はちょうど我也も欲しいと思っていたところだ」

さりげなくこの名剣デユランダルを包丁にする話をしはじめた。

ゲイボルクを鍬にしてきた彼らだが、次はどうやらデユランダルを包丁にする気らしい、確かに魚を三枚に卸す時には役立ちそうだ。

そして、それに満更でも無さそうに答えるギルガメッシュ王、果たしてそれで良いのだろうか…。

ギルガメッシュ王と友人、エルキドゥに手厚く迎えられたカタツシユ隊員達。さて、一方でエジプトにいるデイルムツド達は一体どうなっているのか？

この続きは、次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

T V千里眼で絶賛放送中！—————NEW！

包丁にされるデュランダル
ギル様から水上建築を学ぶ
—————NEW!
—————NEW!

鉄腕／エジプター その1

エジプト。

皆さんはエジプトと言ったら果たして真つ先に何を思い浮かべるだろうか？ ナイル川、ピラミッド、スフィンクスなどなど、エジプトには観光名所は至る所存在し、そして、広がるは広大な砂漠。

古代エジプトの象徴ともいえるものがピラミッドであるが、初期の王墓の形式であったマスタバに代わりピラミッドが成立したのが古王国時代の第3王朝期であり、クフ王のピラミッドを含む三大ピラミッドが建設されてピラミッドが最盛期を迎えたのが第4王朝期。

ピラミッドは言うなれば日本の古墳のようなものであるのだが、こうした建築技術はやはり目を見張るものがある。

さて、そんな中、我がカタツシユ隊員は伝説のラーメンを作るべくこの地にやってきた。

そして、彼らが現在、相対している相手はとうとうと？

「私ハ 名モナキ ファアラオ 頭ヲタレナサイ 不敬 デアルゾ ……コラツ 中ヲ
ノゾイテハ イケナイ！」

「そーい！」

「中身見せろ！ 中身！」

「ヤメナサレ！ ヤメナサレ！」

モーさんとガヤ三人衆は白いてるてる坊主の様な格好をした人物に出会っていた。

そして、どういった経緯からか、そのてるてる坊主の格好をした人物をスカート捲りの様にして襲撃している最中である。

この白いてるてる坊主みたいなものはエジプトではメジエド様として敬われている神様のもののである。

メジエド様には古代エジプト神話において2つの意味があり、どちらもオシリスに關連している。

ひとつは死者の書において言及される神、もうひとつは神聖なものとして崇拜されていた魚の一種である。

魚と聞けばこの人達が黙っているわけがなかった。

幾たびの漁船を経て不敗。

新種の魚を見つけてはニユースに取り上げられるのがもはや定番。

ならば、今回もこの新種の魚の正体を暴かなくては！

しかしながら、彼らから逃れようと足掻くメジエド様もなかなかの抵抗を見せる、手強い相手だ。

「フケイ！ フケイデス！ ヤメナサレ！」

「おー、なんか足とかすべすべしてるー！」

「ほんとだな！ まるで女の脚みてー！」

「ひゃい!?」

「魚拓取れるかなーこれ」

「魚拓!? ナ、ナニヲイツテイル！」

そう言いながらメジエド様から出てきた褐色のすべすべした綺麗な足に触れて感想を述べるベディ。

そして、それに同調するように頷くのは満面の笑みを浮かべて同じくすべすべの脚に

触れているモーさんである。

そんな中、メジエド様を見ていたデイルムツドは神妙な顔をしながらジタバタと捕獲されて暴れている姿を眺めながらこんな話をし始めた。

「これどう捌くかなー？ 三枚おろし？」

「いやーどうだろう、ヒラメとかと一緒にぽいから四枚じゃない？」

「四枚かあ…久々やるか、四枚」

「!? ヤメナサレ！ ワ、私ヲ食ベテモオイシクアリマセヌ！」

そう言いながら、ジタバタするメジエド様。

モーさんとベディがそのうち、そんなメジエド様を捲る様に段々と上へ上へと上げていく。

果たして、メジエドというからには中にいるのも魚に違いない、人間の脚を生やした魚、もしかすると出汁にでも使えるかも。

「ソレ以上ハイケナイ！ 私今シタニ何モ…」

「さあ！ 往生しやがれー！」

そして、メジエド様をひん剥くという不敬極まりないことを実行するモーさん。

さあ、いよいよ、幻の魚と言われたメジエド様の中身とのご対面、果たして、どんな姿をした魚なのだろうか…。

すると、そこに居たのはなんと…。

「ダメだと言ったのにー！」

なんと、真っ裸の褐色の美少女だった。

これには思わず、鼻から吹き出る様に笑い声を溢して視線を逸らすディルムツドとヴラドの2人。

モーさんと同じくメジエド様をひん剥いていたベデイは暫しの間、固まった後。

「…(こ)ら！ 何まじまじ見てんだこの馬鹿！」

「あだあ!!」

隣にいたモーさんから目潰しをくらい、思わずその場で両目を抑えて仰け反った。

まさか、一同、伝説の魚だと思っていたメジエド様の中身が真っ裸の褐色美少女だとは予想だにしていなかった。

これでは、三枚おろしや四枚におろすわけにもいかない。
そんな中、デイルムツドは…。

「とりあえず魚拓取つとく?」

「あんだ、どう見てもあれ魚じゃないでしょ」

と、ヴラドにツツコミを入れられていた。

「……褐色美少女の魚拓

たしかにバストのサイズなどは測れるかもしれない、肌色も褐色だし、墨をつけても多分大丈夫なような気もする。

というより、何故、メジエド様の中身にいるこの美少女は全裸なのだろうか?その経緯も知りたいところだが、ひとまずカタツシユ隊員達は彼女のお名前をお伺いする事にした。

「すいませんがお名前は…?」

「わ、私はニトクリスですっ！ エジプトのファラオですよ！ この無礼者！」
「だつてさ」

「え？ ニトログリセリン?」

「やっべー！ 危険物じゃん」

「違います！ ニトクリスです！」

そう言いながら顔を見合わせるカタツシユ隊員達。そして、すかさず突っ込みを入れるニトクリス。

なんと！ 伝説の魚、メジエド様の中に居たのはファラオと名高いニトログリセリンではなく！ ニトクリス様だった！

特段、彼女をスポーツカーに積んでも爆発的にスピードが上がったりなどしないので皆様ご注意を。

そして、せっかくメジエド様で正体を隠していたこのファラオ、ニトクリス様にインタビューをすべく、ヴラドはどこからかマイクを差し出すところ彼女に問いかける。

「ねえねえ？ 今どんな気持ち？ ねえ？ どんな気持ち？」

「まず私に着的る服を超越しなさい！」

「いや、エジプトがいくら暑いからって全裸は不味いよ全裸は」

「そうだよ、気持ちはわかるけど」

「わかるんだ！ 気持ち!?!」

仕方ないので、カタツシユ隊員はだん吉に積んできたモーさんの服の一着をニトクリスちやんに貸してあげることにした。

とはいえ、こちららもモーさんが動きやすさを追求したせい露出は多い、特に、胸のあたりはサイズが少しだけ合わずぱっつんぱっつんになってしまっていた。

「俺の服が…胸の部分が…」

「気をしっかり持て！ モーさん！ 大丈夫！ 俺たちは好きだから！」

「そうだよ！ モーさん！」

「成長期なんだからさ！」

「やめろ！ なんかしらんが腹立ってくる！」

そう言いながら、励ましてくるガヤ三人衆の言葉に思わずイラつとしてしまふモーさん。

フォローを入れたつもりだが、逆に精神的ダメージを加えてしまったようだ。

そんな中、モーさんのチューブトップとホットパンツを履いたニトクリスはクルリと着心地を確認すると上機嫌にこう話をしはじめた。

「胸の辺りが少しきついですが、良いものを持ってますね貴方達、献上品としては申し分ないです」

「……やめてえ！　モーさん！　ちよつと待つて！」

「離せえ！　あんにやろうの胸もいでやるー！」

「どうどう、また新しいの作つたげるから、ね？」

ガルルルル！　と威嚇するようにニトクリスに掴みかからんとするモーさんを宥めんとするカタツシユ隊員達。

エジプトに来て早々になんだか不安な幸先だが、彼らは大丈夫なのだろうか？

とそんな中、気を取り直してファラオであるニトクリスちゃんにはコホンと咳払いをすと彼らに話をしはじめた。

「コホン！ では改めまして！ 私はニトクリス！ この地を治めるファラオの一人です！」

「ほえー、そうなんだ」

「ちなみに遊戯王とかできんの？ やっぱり」

「…え、えーと、まあ、嗜む程度には…。じゃなくて！ というか貴方達は王であるこの私に不敬ではありませんか！ 頭を垂れませい！ 無礼者！」

「いやー、ニトちゃんが思いのほか良い子だからつい…」

「そんな事を言ってもダメです！」

そう言いながら、頭を照れ臭そうに掻きつつとりあえず、仕方なくニトクリスの目の前で正座をしはじめる一同。

——正座をする砂漠の砂が地味に熱かった。

そんな中、ニトクリスは今回、何故、彼らの目の前にメジエド様の格好で現れたのかを語り始めた。

「…神殿にて神託を受けまして、この地に勇敢たる開拓者が現れると聞きいて」

「ふむふむ」

「この場所で待てばその者達が現れると、しかしながら私はフアラオ。簡単に接触というわけにもいきません。ですのでこうして変装をしてですね」

「それであれ着て来たわけなんだねー、下全裸で」

「…うっ！ …コホン、あの下に服を着るのは熱かったので…致し方なく…」

「これ、なかなか生地厚いもんね、触った感じ」

そう言いながら、メジエド様の生地を確認するベディ。触った感触的にも確かに分厚く、この下に服を着るとなると蒸れそうだと感じた。

そんな中、ひとまず、カタツシユ隊員達はニトクリスちゃんに対して本題に入る事に。

そう、古代の小麦の入手こそ、今回、彼女に協力をお願いしなくてはならないのだが…。

「えーと、僕らは実はこの地で栽培してる小麦を頂きたいなと思ってきました次第です」

「来たというの？」

「あれで」

そう言いながら、ニトクリスちゃんに正座をしたままだん吉を指し示すカタツシユ隊員達。

ニトクリスは目をパチクリさせたまま、その彼らが乗って来た乗り物を見つめる。どう見てもそんなものには到底見えない。

ニトクリスは少し間を置いてから、考え込むと笑いを溢しながら小馬鹿にするように彼らにこう語り始めた。

「あははははは！ またまた…」

「え？ じゃあ乗ってみます？」

「へ…？」

「おーいいね、ちょうど建設王さんに会いに行こうって思ってたから…ニトちゃんも付いて来たらしいよ！」

「…え？」

そう言いながら、ニトクリスはあつという間にカタツシュ隊員達から連れられてだん吉に乗り込む事に。

行き先は太陽神ラーの子であり、化身でもある王が治めている古代エジプト、そう、ニトクリスが治めているエジプトより後の時代、後世のエジプトである。

というわけで、一同は移動し、さらに先の時代の古代エジプトへ飛んだ。

そして、彼らを待ち受けていたのは…。

「…余に用があるというのは貴様達か」

「あわ、あわわわわわわ…!!」

「ニトクリスちゃん！ ファイト！」

玉座に鎮座する神王。

彼こそは人々は王の中の王と呼び、神王と名高いファラオ。広大な帝国を統治した古代エジプトのファラオのひとりであり、エジプト最高のファラオと名高い建設王オジマンディアス。

彼はオシリスの如く民を愛し、そして大いに民から愛された。そんな偉大なるファラオの前にちよこんとカタツシュ隊員達から差し出された形で彼の前に立つのはだん吉

で連れてこられたファラオ・ニトクリスである。

「名を名乗るがいい、余の前に来たからにはそれなりのことがあってだろうな？」

「…わ、私の名はニ、ニト…」

「あーこれ、フオロー入れてあげないとニトクリスちゃん緊張のあまり倒れそうだね」

「だねー、あー、すいません実は僕ら鉄腕／f a t eという企画で…」

という感じで建築王オジマンディアスさんに説明をしはじめのカタツシユ隊員達。

ニトクリスちゃんが実はファラオだとか、古代の小麦を手に入れるためにこの地を訪れた事などを込み込みで話す事になった。

そんな最中、やはり、ニトクリスが緊張のあまり卒倒し、カタツシユ隊員達が彼女を看病する事になった。

こうして、訪れた古代エジプトにて、ファラオ2人に出会ったカタツシユ隊員達。

果たして、伝説のラーメンの麺の素材はこの地で手に入るのだろうか？

この続きは！ 次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

ニトクリスの魚拓取り—————NEW!
建築王に面会—————NEW!
幻の魚メジエド様を捕獲—————NEW!

リリック

前回の鉄腕／f a t eではウルクに来たリーダー達。

出迎えてくれたギルガメッシュユ王に手厚くもてなされ、弟子入りする事に！ 更に名剣デュランダル（包丁予定）も譲り受け、一層メンバーにやる気はみなぎる。

一方でエジプトに向かったデルムッド達はオジマンディアス王と接触することに成功し、こちらにも古きファラオ、ニトクリスの協力の元、順調に話が弾む。

ますます見逃せない今回！ さあ、彼らは無事に伝説のラーメンを作るための伝説の小麦を手に入れる事ができるのだろうか？

というわけで？

「やはりここは砂漠ばかりだな」

「ですわねー」

「いやー、ギル師匠をまさかだん吉に乗せる事になるなんてなあ…」

なんと、番組開始から既にギル師匠を引き連れリーダー達を含めたバビロニア一同はエジプトへやって来ていた。

というのも？ 彼らの歌が聞けぬとわかったギル様、ここに来て、なんと他のメンバーがいるエジプトに行きたいと所望。

協力してもらう手前、この願望を叶えないわけにはいかない。

そういう訳でカタツシユ隊員達はエルキドウさんとギル師匠をだん吉に乗せてこの地を訪れた訳である。

だが、何やら、エジプトの広がる砂漠に関心するリーダー達とは別にスカサハ師匠はブスツとふくれっ面で不機嫌そうであった。

そんな彼女の姿に首を傾げ、顔を見合わせるリーダーとカルナ、するとスカサハ師匠は砂の地面に指で丸を書きつつこう彼らに語りはじめる。

「…運転席取られた、助手席と運転席は私としげちゃんの指定席なのに」

「いや！子供かつ！」

「僕、甘やかし過ぎたんかねえ」

「なんであんたはお母さんみたいな事言ってるのよ」

そう言って、この師弟コンビにすかさず突っ込みを入れるカルナ。

「……オカンだからや。」

そう、久方ぶりで皆さまは忘れていると思われるがリーダーはオカン力：A＋、たとえ神獣の類でもお説教できる大阪のおばちゃん属性を有している。

「もー、師匠は仕方ない娘なんやからー、おかあちゃん置いてくでー！」
「ぶー、…むう、確かに私もたかだか小さな事で大人げなかつたな」

そう言いながら、ふくれっ面の師匠はリーダーから手を引かれその場から立ち上がる
とギル師匠、ディルムツド、エルキドウ達三人と共に歩きはじめる。

目指すはエジプトが誇る建築王、ファラオ・オジマンディアスがいる宮殿。
そこに残りのメンバー達も居るはずだ。

「そーいや、俺らスフィンクスはまだ作った事なかつたね」

「シーサーの作り方調べた事あるし、作ろうと思えば作れるやろ」

「確かに」

そう言いながら、リーダーの謎の説得力がある言葉に頷くカルナ。

果たして、スフィンクスと沖繩のシーサーを同意義に考えて良いものか…、守り神という意味では似てはいるが。

といった具合で、賑やかに会話を繰り広げながら宮殿に向かう一同だが、一方でデルムツド達はどういうと？

「てな訳で、俺達、なんと東京湾でマコガレイを捕まえようとして貴重なイシガレイを捕獲できたんですよ！」

「ニンニク酒粕つてすごいなあつてあの時は思いましたね、いやー、びっくりでした」

「はははははは！ そうか！ そうか！ そんな事もやっていたのだな其方達は！ さあ、飲め飲め！」

なんと、オジマンディアス様と酒盛りをやっていた。しかも、まだ、真昼間である。

その様子を見る限り、かなり親しくなっているようだが、どんな魔法を使ったのか…。そんな中、ニトクリスはちよこんとオジマンディアスの隣で小さくなりつつ、さらに、

彼の傍らでは奥さんであるネフェルタリさんがカタツシユ隊員達やオジマンディアスにお酌をしていた。

「あ、恐縮です、後でこれの作り方を教わっても?」

「余が許す! 弟子にしたのだ、教えを請う弟子を突き放す師など王の器が知れるであらう!」

「やったー!」

そう言いながら、嬉しそうに声を上げるベデイ。

エジプトで生産されるお酒、ワインやビールも作られていた。その味は独特ながらもなかなか美味、これは、教わらなくては損だ。

建築だけでなくお酒や料理まで勉強になることばかり、まさに、カタツシユ隊員達には新鮮な体験であった。

「プハアー! くうー!」

「お! モーさん良い飲みっぷりだね!」

「摘み欲しくなつて来たなあ、オジマンさんちよつと厨房借りても?」

「ん、構わんで、許す」

「よっしゃー！」

そう言つて、許可を得たデイルムツドは厨房へと向かう。

宮殿の厨房には新鮮な魚、また、果物などエジプトで取れた食料がたんまりと流石は神王様に出す料理となると食材からして違う。

これならば、摘みに必要な食材をわざわざ調達せずとも良さそうだ。さて、お馴染みの板前衣装に着替えたデイルムツドは腕を捲り気合いを入れる。

「さあてと！頑張るぞ！ 俺の包丁！」

今日も今日とて、包丁ベガルタとモラルタが唸る。そして、デイルムツドは手持ちの調味料を準備して料理に取り掛かりはじめる。

さて、デイルムツドは果たしてつまみには何を作る気だろうか？

まず、デイルムツドが取り出したのは新鮮な魚、地中海や紅海で獲れる海水魚と、ナイル川や湖で獲れる淡水魚の両方がエジプトでは好まれてよく食べられている。

今回使うのは海で獲れたタイ。

これを臭みを取る為に分量外の塩少々をして10分ほどおき、水気を拭いてさつと湯通しする。

「よし、こんなもんか、それじゃ次は…」

水気を拭いた魚を油を熱したフライパンに皮の方を下にして入れ塩胡椒を振り両面こんがり焼き2〜3分蓋をして蒸し焼きに。

調味料を合わせたものを全体にかけて時々スプーンでタイにかけながら中火で焼く。ソースが煮詰まって照りが出てきたら出来上がり。

この時、火加減に注意し焦げないように。

まずは一品目、タイの照り焼きが完成である。

そして、次は地中海で獲れたボラ。

これを食べやすい大きさに切り分け、ぶつ切りにこれを味がついた片栗粉につける。

ボラの旨みを逃さないため揚げ油の温度は130℃以上にしないようにし、五分程度でサツと揚げていく。

そして、彩りに野菜を盛り付ければ完成。

二品目、絶品ボラの唐揚げ。

まさに、厨房に立つ姿はY A R I Oが誇る料理の鉄人。つまみの品が次々とできる中、完成した品を見たデイルムツドはできた品に納得したように頷いていた。

そして、これをオジマンディアス達の元へ。

「おまたせしやした！ 今日の品は二品でございます！ 味は保証するよ！」

「おお！ これはまた…、変わった魚料理ではないか！」

「へえ、照り焼きと唐揚げにしたんだ」

「すっげーうまそー！」

「私もこんな料理は初めて見ました…」

そう言いながら、全員はデイルムツドが持ってきた二つの品に思わず食欲がそそられる。

さて、そのお味はいかに？ いよいよ全員で試食。

と、その前になんどここに来て宮殿に5人の来訪者が…。

「おー…めっちゃ良い匂いしとる！」

「え？ どつかで聞いたことある声じゃない？」

「あ、リーダー達じゃん」

「ん？ 誰だ？ 余の許可を得ずここに入ってくる不屈者は」

そう言いながら、声のした方へと目の前に美味しそうな料理が並ぶ中、突如として現れた来訪者達に視線を向けるオジマンディアス。

そこに居たのは、なんと、我らがリーダークーフリーン達とスカサハ師匠、ギルガメツシユ王とエルキドウの姿であった。

「ふん、存外、簡単に侵入できたぞ、こここの警備はいささか手ごたえがないのではないか？ 太陽の」

「…ほう、余の事を知っておるのか？」

「我は森羅万象、全ての事柄を見通しておる。天上天下にただ一人、この我となれば尚更、造作もない事よ」

「フツ、随分とこの神王である余を前にしてでかい事を言つてのける。面白いやつだ」

「ささ！ 丁度つまみが出来たところですからみんな食べてよう！ みんなで！」

「お！ ええなあ！」

そう言いながら不法侵入して来た彼らを迎え入れるデイルムツド。リーダー達やギルガメッシュ達は案内されるまま酒盛りの席につく。

しかしながら、ギルガメッシュとオジマンディアス、2人とも互いに我が強く、なんだか一触即発のような気もするが大丈夫なのだろうか？

と思いきや、それから、数時間後……

「あははははは！ そいつは面白い！ 黄金の！ それで？」

「それでだな」

すっかり馴染んでしまつていた。

というのもこの2人、妙に波長が合うのか意気投合してしまう始末。

リーダー達もまた、酒盛りの最中、酔ったカルナがベデイにブレンバスターなどをかましながらいよいよ賑わつていた。

そこで、オジマンディアスはある質問をここでギルガメッシュへ、それは…？

「そういえば、黄金の。何故、お前はこの者達を弟子に迎えた？」

「ん？ ああ、それか、それはだな、こやつら自身が不可能な事を可能にする事に愉悦を見いだしておるからだ」

「ほう…」

そう言いながら、英雄王の興味深い言葉に笑みを浮かべる神王。

それは確かに彼らの話を聞いていればわかる。明らかに常に挑戦する事を楽しんでいるような彼らの話は聞いているだけでも面白い。

「見ていて退屈せぬ、毎週、楽しみに見ておるのだ。こやつらはもともと歌を歌ったりする偶像という存在だったのだぞ？」

「歌か…、あやつらのあの姿からは余でも想像しがたいが…」

「彼ら普段は鍬しか持ってないからね、わかるとも！」

そう言って、オジマンディアスの言葉に笑みを浮かべて杯を付け合わせるエルキ

ドウ。

互いに乾杯したそれをオジマンディアスとエルキドウは一気に飲み干す。それを見ていたギルガメツシユはどこか嬉しそうだ。

すると、杯を空にしたオジマンディアスはギルガメツシユにこう話をし始めた。

「では、互いにこうして奴らを共通の弟子とした我らは同盟相手という事であるな」

「フツ、面白い事を抜かす。良いだろうその話乗ってやろう」

「まあー！ 仲良い事は良いことですわ♪」

オジマンディアスの奥方、ネフェルタリはにこやかな笑みを浮かべ、微笑ましい二人の空いた杯にお酌をする。

———気づかぬ内に天地驚愕の同盟が締結。

互いに杯を突き合わせる二人はそれをグイッと飲み干すとまるで子供の様に高笑いをあげていた。

そして、景気よくなつて来た場の雰囲気はギルガメツシユはカタツシユ隊員達にこん

なリクエストを投げかける。

「忘れておつたが、そろそろ貴様らの歌を聞かせろ！　そもそもそれが今回の目的だったのだ！」

「お！　そういえばそうやったな！」

「兄ィ達が歌うのか！　やったー！」

「よーし、そんじゃ久方ぶりに歌いますか」

そう言いながら、とりあえず、一同はリクエストに応えて、同盟を結んだ彼らの前にやってくる。

準備よく、だん吉で駆けつけたA Dフィンがいつのまにか楽器が置いてあるステージを準備済みだ。

ボーカルであるベディはマイクを掴むと、配置についた皆に視線を向ける。
そして、準備が整ったところで…。

「それじゃ、聞いてください！」

ギターを引きはじめるリーダーに合わせ、ディルムツドがドラムを叩き、曲が流れはじめる。

半年ぶりの演奏だが、感覚は覚えていた。

自然と響き渡る彼らの演奏と歌声に思わず、ニトクリスも聞き惚れてしまった。

「何気ない言葉がくーーーーー」

染み渡る様な歌声、聞いたことのない演奏。

だけれど、確かに彼らが本来あるべき姿を歌を聞いていた英雄達は垣間見た気がした。

ーーーー彼らの思いが伝わってくる叙情詩。

賑やかな酒盛りの場と化した神王の神殿で彼らの歌と奏でる楽器は素晴らしいほどよく響き渡った。

今日のYARRO。

半年ぶりの本業——————NEW!
天地驚愕の同盟締結——————NEW!
エジプトとバビロニアを繋ぐ架け橋となる————NEW!
リーダー、神獣の類でもお説教できる————NEW!

鉄腕／ウルク&エジズ　その2

エジプトにて合流したカタツシユ隊員達。

伝説のラーメン作りのために小麦を手に入れる事、そして、ついだが、エジプトやバビロニアで山城建造に必要な知識を得ることが彼らの本来の目的である。

ついでの、聖剣作りが進めば良いかなくらいには考えているそんな彼らだが…。

「ほう、ではニトクリス、お前はまだピラミッドを持つておらぬのか？」

「えつと…、はい、私のようなものにオジマンディアス様の様な素晴らしいピラミッドを建てるだけの実績は挙げていませんし」

「馬鹿者！　実績など！　貴様はファラオなのだ！　ピラミッドが無いなど言語道断！

それは神王たる余が許さぬ！」

「ひゃい!?　い、いや、ピラミッドは建設はしている最中なのですが…全然進んでいませんので」

そう言いながら、指をツンツンしながら神王オジマンディアスから有り難いお説教を受けるニトクリス。

明らかにニトクリスの方が古きフアラオでオジマンディアスより年上であるというのにこの図はかなりシユールな光景である。

まるで、見方によっては自信がない姉を後押しする弟の様なものにも見えなくはないが。

「はあ、フアラオっていうのも大変なんやなあ…」

「そうだねえ、ねえ？ リーダー、俺たちで何かしてやれないかな？」

「うーん、そやね、お酒も貰ったし何か恩返しはしとかなあかんよねやつぱり」

「そういうところはお前たちはやたら律儀だな」

そう言いながら、ニトクリスとオジマンディアスの会話を聞いて話していたリーダーとヴラドの2人の言葉を聞いたスカサハは呆れた様に肩を竦める。

何もそこまでやる必要はない気はするが、彼らはこういつた困った人を見過ごせない性分らしい。

すると、Y A R I O が誇る熱い男カルナがここでまっすぐにニトクリスの手を掴み酔った勢いで視線を合わせるところ告げ始める。

「わかった！　なら！　俺がお前のピラミッドを作ってやるよ！」
「えっ……！」

そう言いながら、自分の手を握り熱く告げてくるカルナの目を見つめたまま固まるニトクリス。

——真の英雄は目で殺す（意味深）。

まさに、プロポーズ的な何かではないだろうか？

第三者から見てみたらそう勘違いしてしまいそうな熱さだった。ニトクリスは思わず顔が紅潮してしまう。

そして、しばらく手を掴んだカルナはサムズアップするとニトクリスの頭をポンポンと撫でてやる。

「任せときな、これでもインドで洋式トイレたくさん作ってきたからさ！ 俺」

「いや、それが実績ってどうなのよ」

「…はいっ」

「…ニトちゃんもそれで納得して大丈夫?! ねえ!」

「……インドのトイレ事情と戦った実績。」

果たして、それが役に立つのかどうかはわからないが、ニトクリスは紅潮した顔のままカルナから視線を逸らすと思わず頷いてしまう。

そして、炸裂するヴラドのツツコミ、今日もよく冴え渡っている。

だが、この光景を目の当たりにして呆然としている人物が計1人いた。そう、モーさんである。

箸でつまんでいた鯛の照り焼きの身が箸からぼろりと落ちる。

まさか、気づかないうちにこんなわけのわからない事態になっているとは思ってもよらなかった。

「わははは！ 良かったではないか！ ニトクリス！ その伴侶、大事にいたせよ」

「…ん？ はんりよ?」

「伴侶だなんて！ そんな！ 私！まだ気持ちの準備が……」

「はんりよつてあれだろ？ 小判半分にしたやつ」

「兄イ、それは半両、この人達が言ってるのは伴侶、つまり旦那さん」

そう言いながら、肩をポンと叩くヴラド、酒が回っているせいか、カルナの話が気づかない内にどうやら訳の分からない事になっているらしい。

そのどうやら何かズレている問答を側から見ていたギルガメッシュは会話のかみ合いない無さに思わずゲラゲラと笑いを溢していた。

つまり、現在の話を整理するところである。

お前のピラミッドを俺が作ってやる！ ↓ お前の墓を作ってやる！ ↓ お前と一緒に墓に入ってやる！ ↓ 結婚しよう。

かなりめちやくちやなこじつけではあるが、つまる話が勘違いがとんでもない方向にぶつ飛んでいたわけだ。

現代的に言えば、ピラミッドが結婚指輪と思つたらわかりやすいだろう。たしかにダ

イヤモンドもピラミッドも似たような形である。

しかも、シチュエーションがシチュエーションだけにこれはたしかに勘違いしても仕方ないだろう。

しかし、この話の流れをいち早く感じていたモーさんは慌てた様にニトクリスとカルナの仲裁に入ると顔を真っ赤にしたままこう声を荒げる。

「な、ななな何言ってるんだ！ だめだ！ だめだ！ 兄イはやれない！ 俺の師匠だし！」

「な！ では別にそれは関係ないではないですか！」

「いいや！ 関係あるね！」

「いいや！ 無いです！」

そう言いながら、なにやらニトクリスと言い合いを始めるモーさん。

なんだか、面白い事になってきたと傍観を始めるギルガメツシユとオジマンディアスの2人は酒の肴にそんな2人のやりとりを眺める。

そんな中、当のカルナ本人と云えば？

「ピラミッドかあ、どこらへんがいつかなあ？ スフィングスの周辺らへんとか良いと思うんだよね、どうよ？」

「それじゃここらへんがいいんじゃないか？ 私がゲイボルク刺して場所を確保しておこう」

「まあ、そこそこな大きさが出来たらええよね」

「あんたらちよつと、なんでもうピラミッド作る気満々になつてんのよ」

モーさんとニトクリスの口論を放つてピラミッド作りに関して打ち合わせを始めていた。流石は建築歴大ベテランのカタツシユ隊員達、気持ちの入り方が違う。

さりげなくだが、スカサハのゲイボルクの使い方に関してはもう言わずもがなである。

というわけで、早速、ピラミッドの建設について話し合いをはじめカタツシユ隊員達。

まずは場所決めから始め、そして、建設の為の石なども諸々運ぶ必要がある。

そこで、オジマンディアスとギルガメツシユは打ち合わせを急遽はじめたカタツシユ隊員達にこんな話を持ちかける。

「奴隷は何人くらいいいりするのだ？ 余のところのは何人使っても構わないが……」

「我のところからも必要なだけ貸してやるぞ？」

「いやー、出来れば大型とクレーン車運転できる人材が欲しいかなあ」

「まあ、建築関連ならインドから俺のこの社員引つ張つてくれるし、あ、できればハンマーとか使える人とか手先が器用な人が欲しいかも」

「……そ、そうか、わからんがとりあえず手配してみよう」

「あはははははは！ お前達正気か?! やはり貴様らは面白いなあ！」

「ちよつと待つて？ え？ あんたら大型車とクレーン車とか使う気なの!?!」

「……ピラミッド作りに建築車を使う。」

という事はこの時代に大型車の製造をするレベルから始めるという事。

幸いなことに機械類には強いエミヤくんもカタツシユ村にいる事だし、ここはエジプト、石油なんかの資源も割と眠っている。

エジプトは一応石油が出る国で、しかも、それなりの量が生産されている。サウジアラビアの6%ほどだが、それでも、日本の60倍は石油が取れるのだ。

車に必要な鉄なんかの資源に関しても、ギルガメツシユ様とオジマンディアス様がい

るためになんともなるだろう事は明白である。

「いやー、これでわざわざだん吉で中東に遠征しなくてよくなるねえ」

「助かりますよ！ お2人とも！」

「おかしいなあ、俺たちの仕事こんなんだっけ？」

ヴラドの虚しい呟きをよそに淡々と話が進んでいく。

大型車といえば、クレーンにシャベル、ロードローラーなどなど、これから先の建築にもかなり役立つものばかりだ。

カタツシユ隊員達の話を知っていたオジマンディアスとギルガメツシユの2人はそれらが完成して配備するとなれば奴隷達に対しての給金も考えねばならないと言います始末。

奴隷達もこれには大歓喜間違いなしだろう。

「とりあえず石油取ってガソリンつくって、セメントなんかもできるねー」

「道整備せな砂やったら陥没してまうからな」

「うむ、そうだな」

「なんだつたら我の水上建築の技術もピラミッドに取り入れてはどうだ？」

「お！ いいですねえ！ それに植林とかもしときましようよ！ ここらへんとか！」

「おお！ 木材か！ 良い良い！ 余が許す！ 木はいくらあっても困らんからな！」

そう言いながら、楽しそうにニトクリスのピラミッド作りに関して全員が話しを繰り広げる。

砂漠なんて何も無い土地など彼らにとつては宝の宝庫、むしろ、なんとでも発展が見込める土地なのだ。

なんといつても彼らのリーダーの土の知識はなんと驚きのEX！

不毛な土地でさえ、緑豊かな土地にできるほどの手腕が彼らにはあった。

「おい、兄イ！ てか結婚とかどうとかの話はどうなったんだよ！」

「え？ そんな話してたっけ？」

「してました！ そうですよ！」

そう言いながら、先程まで言い争いをしていた2人は原因であるカルナに問いただし始める。

確かにそんな話もしていたような気もする。

するとカルナは軽いノリで片手を上げて、謝る素振りをししながらにこやかな笑顔で2人にこう告げはじめた。

「いやー、ごめん！ とりあえずその件に関してはリーダーが結婚してからまた考えるわ！」

「…あと何世紀くらい先になるかなあ…」

「長いっ！ 長すぎるっ！」

「いやー！ 世紀単位はヤバイやろ！！ 僕をなんやと思つてんのー！」

「リーダーだしなあ…」

——世紀単位で結婚できないアイドル。

確かにリーダーならあり得そうだと頷くデイルムツドとヴラド達。そして、あまりの長さに突っ込みを入れるニトクリスとモーさん。

もはや、それはカルナの永久独身宣言に近い言葉ではないだろうかと錯覚すら覚えてしまう。

多分、リーダーが結婚した時期がノストラダムスの言う世界滅亡の日になるのかもし

れない。

という事でとりあえずエジプトで一同は建築車を作り、ファラオ・ニトクリスちゃん
のピラミッドを作ることに。

という事で…?」

ザ！ 鉄腕／f a t e！ Y A R I Oはエジプトで巨大ピラミッドを作れるのか！

という今回の企画がスタートするに至るのだった。

「とりあえず僕は腕をドリルにしてここを彼女と掘ればいいのかな？」

「すいません、お願いしてもいいですかね？」

「私もいるのだ、任せておけ、すぐに石油をこの槍で掘り当ててやる」

「師匠、今度は槍で土掘りですか」

ひとまず、カタツシユ隊員達は、エジプトの地図を見ながら石油が掘り当てれそうな
場所を選んでエルキドウさんとスカサハ師匠に採掘を担当してもらおう。

この企画の元になる石油の確保は必須だ。

しかし、槍で土を掘りに挑戦とはやはり、スカサハ師匠、只者ではない。さて、その間、リーダー達はどうと？

「これ、霊草っていうんですけどね？　かなりアルギン酸がとれるんですよ」

「…ほう…これが…。ん…？　ちよつとまで、貴様、今、霊草と言わなかつたか？」

「…いえ、これ、ただの真昆布です」

「いや！　確かに霊草と言ったよな！　おい！」

「しげちゃん、霊草を真昆布扱いは無理があるよ」

そう、霊草とエジプトで獲れた昆布から土を豊かにするアルギン酸を取り出す作業を行なっていた。

こうする事で、エジプトの不毛な砂漠の土が丸みがある水分をよく吸収する土へと変貌させることができる。

これに植林を行えば、霊草の効果と昆布のアルギン酸からとんでもない植林地が出来上がりそうだ。

さあ、いよいよエジプトでの新たな挑戦！

彼らは果たしてニトクリスのピラミッドを完成させることができるのか？
この続きは！ 次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

N E W！

1. エジプトで植林活動。
2. エジプトで建築用大型車を作る。
3. 建築用大型車でピラミッド建造予定。
4. エジプトで石油を掘りはじめる。
5. リーダー、世紀単位で結婚できない

ニトクリスのピラミッド作り その1

エジプトでのピラミッド作りが始まってから数ヶ月。

紆余曲折はあったものの、エミヤさんの手伝いもあつて大型建築車を作る事に。

そもそも、だん吉というモデルがあるからして製造はさほど困難ではなく、英雄達が協力し合う事で急ピッチで進めることができた。

「おー、見事なシャベルやなあ」

「クレーンもあるし、これならやれんね」

「アルちゃん達もわざわざ手伝いに来てくれてありがとうね」

そう言って、カルナは壮観な大型建築車がズラリと並ぶ光景を目の当たりにしながら、わざわざインドからだん吉で駆けつけて来たアルジュナ達に感謝を述べる。

アルジュナはカルナの手を握りながら、左右に首を振り満面の笑みを浮かべてこう語

りはじめた。

「何を言う、我が建築の師である貴方とこうして実践で建築ができるのだ。断る理由なぞない」

「いやいやーそれは大袈裟だよー!」

「…貴方が急にインドから居なくなっただけ毎日が寂しいものになった事か…」

「…何これ? 男同士の会話だよね? なんて単身赴任の夫を待つ嫁みたいな会話になっただけだよ」

「さあ? 兄イだからじゃない?」

ヴラドは苦笑いを浮かべながらベデイに訊ねるが、ベデイもこれには肩を竦め首を傾げるだけだ。

さて、何はともあれ、インドから頼もしい助っ人達が駆けつけて来てくれたおかげでピラミッド作りも捗りそうだ。

早速、建築の図面を見ながら皆でどうやってピラミッドを建てるかを相談しはじめる。

「じゃあ、アルちゃんとお前達はここを中心に石を組んでもらって」

「よし、わかった」

「それでもつて、モーさんは俺とここ、リーダーは重機使えるやつと組んでもらつて…」

「この辺に石を積み上げとけばええかな？」

「そだねー」

そう言つて、軽いノリで打ち合わせを進める彼ら。果たしてこんな調子で大丈夫なのだろうか？

さて、心配はあるのだが、一方、その頃、エミヤとデイルムツド達はどういうと？

「これとかどうかな？ えみやん？」

「むっ…これは、…いい感じのモロヘイヤではないか！ グツジヨブだ！」

「でしょ！ やっぱり野菜普段から扱つてるとわかんたなあこういうの」

エジプトの名産野菜、モロヘイヤの栽培をさせていただいていた。

モロヘイヤは春から夏にかけて収穫され、刻むととろろ芋のように粘りが出るのが特徴。カイロではこの季節になると市場や八百屋で大きな束になって売られている事が

多く、国民から愛されている野菜だ。

日本ではあまり馴染みのない野菜だったが、ここ数年、鉄分の豊富な野菜と言うことで名前もそのまま「モロヘイヤ」として日本のスーパーでも売られるようになった。

食べ方としては塩水でゆでて細かく刻み、ネギやしよゆを加えてかき混ぜるとろろのようになる。そのままご飯にかけてたりお蕎麦にものせても良い。

これを、是非カタツシユ村でも栽培したい。

「やっぱり和食って大切だよな、えみやん」

「そうだな、日本人が長寿なのは和食が栄養価があり健康的であるという事に他ならない」

「たまに無性に焼き魚とか、味噌汁食いたくなるよね」

「わかる」

そう言つて、農作業着を身に纏うエミヤは通じあつたとばかりにデイルムツドと拳を突き合わせ互いに頷きあう。

トロロのような食事があれば、また食の幅も広がるし、何より、ご飯が美味しく食べられるようになる。

これからピラミッドを建てるのだからしつかり皆には栄養をつけてもらわねば、腹が減っては戦はできぬという奴だ。

そして、一方、モーさん達だが…。

「むうー、あー、面白くねえー」

「何を拗ねておるのだ」

「だってよお、あいつがいるせいでえ…その…」

「はあ、カルナに構って貰えないからか？」

そう言いながら、綺麗な髪のお湯で梳かすスカサハは首を傾げながら拗ねているモーさんに問いかける

ここは宮殿の近くにある川近辺。

お湯が入ったドラム缶をドラム缶風呂にしながら彼女達は疲れを癒しつつ、作業によって汚れた身体を洗い流していた。

「ナイル川の水を焚いてこんな使い方をするなんて…このドラム缶というもの、凄いですね」

「な、ななな！ んなわけねーだろ！ ばーかばーか！ 年増！」

「…はあ、全く…。おい、今、最後なんと言った？ 小娘」

「あだだだだだ！ う！ 嘘です！ ごめんなひやい!!」

そう言いながらスカサハ師匠は片手で顔を真つ赤にして照れ隠しからか、言っではいけない失言を言い放ったモーさんの頭を持ち上げると凄い勢いでアイアンクローをお見舞いする。

———女性に年齢は厳禁。

虎の尾を踏むとはこういう事だろう。頭を片手で持ち上げられたモーさんはしばらく抵抗はしたものの、それから時間がたたないうちに力なく手足がプラインと垂れ下がってしまった。

しかも両者とも全裸でこれをやってるのだから、その場にいたら凄い光景に違いない。

現にドラム缶風呂に浸かっていたニトクリスちゃんは顔を真つ青にしながらそれを呆然と見ていた。

「ふむ、手がかかる弟子がいると師匠は大変だな全く」

「……………」

「…だ、大丈夫ですか？ 死んでないですよね!? これ!？」

「手加減した心配ない」

「なんだか聞いてはいけない音が聞こえたような気がしたんですけど!？」

チーン、という音が聞こえるかの様に意気消沈してスカサハ師匠からドラム缶風呂に投げ込まれたモーさんの様子に思わず声を上げるニトクリス。

————これがケルト式お仕置き術。

おいたが過ぎるところになるので皆様ご注意ください。

照れ隠しからか、失言は命取りになる。こうしてモーさんはまた一つ大人の階段を登った。この調子ならいつかはシンデレラになる日も近いだろう。

デレも最近出てきた気がするモーさんだが、以前に比べて随分丸くなったものだ。

さて、こちらは再びスフィンクスの近くにある建築予定地だが…。

「ここらへんかー、しげちゃんは？」

「ロードローラー取りいったよ」

「よし！ それじゃ取り掛かりますか」

打ち合わせも終わり、いよいよ、土台作りに入る段階に来ていた。

古代エジプトにおけるピラミッドは、巨石を四角錐状に積み上げ、中に通路や部屋を配置した建造物である。

まずは、ピラミッドを作るにあたって、地盤がしつかりした場所でなければならぬという条件がある。あれだけ巨大な建造物を建てるのだから、地盤がしつかりしていなければ、後に崩れたり傾いてしまうのだ。

以前にカタツシユ村で病院作りを行った際に地縄張り、縄張りを行なったように今回もその経験が生きる。

「高さは147メートル、底部の一辺の長さが230メートルくらいかなあ」
「でつかいねえ」

「まあ、ピラミッドだからね？」

「俺たちこれ作れたら多分、スカイツリーも作れるよ」

そう言つて、だいたいのピラミッドの大きさを述べるカルナにヴラドは真顔でそう告げる。

途方も無いでかき、しかし、ピラミッドはこれくらいデカくなければピラミッドでは無い気がするというのは彼らの持論だ。

——それは石の数にして約300万個。

途方も無い数の石をこれから積み上げ、建設し、ニトクリスちゃんのピラミッドを形にしなければならぬ。

建造完成予定日としては…。

「だいたい半年くらいじゃない？ みんなでクレーンとか建築車使ったら」

「長い年月だなあ…これまた」

「石とかカットしなきゃいけないしねえ」

長い期間が予想される。それに、ギル様の水上建築の技術も教わりながらこのピラミッドに取り入れたい。

とはいえ、このまま作業するとしても監督役が足りないような気もする。人材の補充もいるだろう。

「ネロちゃんに頼むかなあ」

「ネロちやまねえ、確かにあの娘、建築に関してはほんとにいろいろ知ってるから」
「ローマなピラミッドにしよう！ とか言わないように釘刺しとかないとなあ」

「……余がローマ建築である！」

ネロちやまを呼ぶのは既定路線として、駄々をこねられる前に何かしら買収する必要も視野に入れとかなければならない。泣かれても困る。

しかし、それはそれでギル様の水上建築と組み合わせてみても面白そうだ、ヴェネツィアのような外観のピラミッドなら美しい光景に見えるかもしれない。

と、そこへ……。

「おい！ 持って来たでー、このへんでええのー！」

「オーライ！ オーライ！」

「そうそう！ そこら辺！」

我らがリーダーがロードローラーを運転し、到着。久方ぶりの運転に大ベテランの腕も唸る。

「……重機歴13年のベテラン

そう、何を隠そう、我らがリーダーはなんと複数の重機の資格を持ち合わせており、こ
う見えて重機を操るのはもはや本業のそれだ。

安全第一のヘルメットが今日もキラリと光る。

「とりあえず、道を整備しなきゃね」

「道路作りますか、セメントとローマンコンクリートで固めてピラミッドの周りに大型
車停めれるようにしないとね」

「よし、それじゃみんなは始めるよー！」

さて、いよいよ、本格的に始まるニトクリスのピラミッド作り。

今回はこのピラミッド作りの為、力になってくれる建築の匠を求め、カタツシユ隊員は古代のバビロニアへ！

果たして、その強力な助っ人とは？

この続きは！ 次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

- 1、エジプトの道の整備をはじめ。
- 2、ピラミッドつくり開始。
- 3、快適なナイル川ドラム缶風呂。
- 4、スカサハ師匠、年齢を気にする。
- 5、エジプトの名産モロヘイヤ採取。

閑話 Y A R I O は 0 円で英雄を仲間にするのか？

エジプトでのピラミッド作りが始まり、それなりの月日が経過したある日のこと。

ここに来て人員不足が浮き彫りになってきた、というのも、カタツシユ村で農作業をするはずだったメイヴちゃんだが、騎乗スキル持ちという事もあり、大型トラック運転にカタツシユ村から応援に駆けつけてもらわなければならなくなったのだ。

当然、カタツシユ村の農業もこれでは滞ってしまうことに…。

これは、非常によろしくない。

「農民がいるね」

「間違いない」

カタツシユ村に一旦帰還したヴラドとデイルムツドは現状に関してそう結論付ける。

——ここにはベテランの農民が必要。

となれば、知名度的にも農業に精通してそんな人をこの村に招かないといけない。

そういうわけで、今回、ベデイ、ヴラド、デイルムツドの三人はピラミッド作りのために出払ったメンバー補充の為に動く事に。

そして、幸いにも彼らの手元にはA Dフィンがまとめてくれた名簿がある。

ここから、新たにカタツシユ村に来てくれる人を少しづつ招いていこうという考えだ。やはり、黒子役、年季が違う。

「じゃあ、まずどこ行く？」

「えーとね、フランスとかどうよ？ フランスって言ったらやつぱフランスパン美味しいじゃん」

「いいねえ、エツフェル塔なんかあるしね」

しかし、ギャ三人衆は観光気分でこの資料を読み漁っている。

果たしてこんな調子で大丈夫なのだろうか？

というわけで、今回の企画はこちら！

ザ！ 鉄腕／f a t e！ Y A R I Oは0円英雄を仲間に行けるのか？

「0円英雄かあ…、というより、英雄に値段がつくの自体、俺初耳なんだけど」
「何言つてんだよー、千円札見てみなよ？ これ英雄だよ？」

「確かに言われてみれば」

そう、名高い英雄となればきつとこんな風にお札になつたりしているはず。

となれば、当然、英雄も現金にはうるさい人物なんかもいるかもしれない。

だからこそ、世界のどこかにいるだろう0円英雄を仲間に行ければこのカタツシュ村も大きくなるはずだ。

ピラミッド作りが忙しい今、リーダー達の負担を出来るだけ減らす人材に協力を仰がなければ。

という事で三人は早速、荷物をまとめてだん吉へと乗り込む。

そうと決まれば行動は早い、目的地も決まっているし、あとは、彼らの頑張り次第だ。

1431年、フランス、ルーアン。

十七歳で故郷を発ち、奇跡とも呼べる快進撃を成し遂げるも捕縛され、異端審問にか

けられ、魔女と貶められた果てに十九歳で火刑に処せられる聖女が今、まさに、その命の灯火を消さんとしていた。

「死ね！ 魔女め！」

「悪魔の手先め！」

いたるところから、石や木の棒などが投げつけられ、弱々しい彼女の身体にぶつけられる。

イングランドとフランスの間で起きた百年戦争。

その戦争で素晴らしい戦果を挙げ、人々から聖処女と崇められた彼女の今の姿は痛々しく見える。

彼女を火刑に処す事を命じた異端審問官は笑みを浮かべながら、鎖に繋がれ、引き連れられていた彼女を満足そうに眺めていた。

人間の狂気が満ち溢れている。

容赦なく、19歳に向けて放たれる罵倒の数々、しかし、彼女はそれでも下を向かず凛とした表情を浮かべていた。

(……これも神が与えし試練、受け入れる覚悟はできています)

石がぶつけられ額から血が流れ出てくる。そして、兵士が彼女を火刑に処す為の火刑台の前まで彼女を連れてきた。

民衆はその光景にさらに勢いを増して、石や罵声を彼女に投げかけた。

「早く燃やしてしまえー！」

「この魔女がー！」

だが、そんな罵声飛び交う中、彼女は火刑台になんの迷いもなく足を踏み入れた。今から燃やされるというのに、まるで、祈るかのように手元に十字架を抱き、目を瞑る。

これが、フランスを勝利へと導いた聖処女と崇められた英雄、ジャンヌダルクの最後。

いよいよ、松明に火が灯され、彼女の足元に火が点火されそうになったそんな時だった。

どこからかはわからないが、大きな声がその場に響き渡る。

「えっ…！ その可愛い娘！ 燃やしちゃうんですかっ!?」

そして、その瞬間、ジャンヌを処刑せんとした兵士が持っていた松明の動きがピタリと止まった。

しばらくして、三人の農作業服を着た三人組が躍り出るように火刑台の前に現れる。

「勿体ないですよー、おっぱい大きいし」

「…!? な、なんだ貴様らは！」

「あ、すいません、僕ら鉄腕／＼f a t eという企画で0円英雄を探しているY A R I Oという者なんですけどもー」

「実はここに捨てちゃう聖人がいるという話を聞いて駆けつけた次第です…」

躍り出た三人はにこやかな笑顔を振り撒きながら明るい表情で顔を険しくして驚いたような声を上げる兵士に告げる。

そして、兵士の1人が目をパチクリさせると、恐る恐る三人に驚いたようにこう問い

かけはじめた。

「えっ!?! Y A R R I O って…あの!?!」

「あ、はい、そうです」

「お、俺! 大ファンなんですよ!! まさか、この街に来るなんて!」

「いやー、うちのA Dがここに燃やされちゃう優秀な農民の聖人が居るからという情報を頂いた次第で」

そう言いながらにこやかな笑顔を浮かべ、彼らに話すY A R R I O達一同。

まさかの登場に先程までジャンヌダルクを囲んでいた市民達は顔を見合わせて、騒めいている。

そして、ベディは磔にされたジャンヌダルクに近寄ると縛られた手を解いてあげて、ジーンと上から下へと視線を落とした後、納得したように頷いた。

「まだこの娘全然やれますよ! この感じは間違いないDはあるな」

「いや、あの…貴方方は一体?」

「え? 俺らは、アイドルだよ?」

「アイ…ドル…？」

「その名乗りはちよつと無理があつたね、デイル兄イ」

あまりの出来事にポカンとしているジャンヌダルク。

そして、アイドルと名乗るデイルムツドの肩をポンと叩くヴラド、そう、もう認知度的にはアイドルという枠では広まっていないのだ。

すると、ジャンヌダルクに待ったを掛けた三人を目の当たりにした異端審問官のボウエ司教ピエール・コーションが彼らの元にすごい剣幕でやってきた。

「おい！ 貴様ら！ 魔法の処刑を止めるとはどういう見だい！」

「え？ この娘魔女なの？ じゃあさ、魔法とか使えたりするんですか!？」

「え…いや、私は魔法は使えません…」

「え？ 魔法使えないの？ あー、それは残念だなあ」

「おい！ 話を聞かんか！」

怒鳴り声を上げるピエール。

それはそうだろう、今から処刑するはずのジャンヌダルクの処刑が三人に止められて

しまったのだ。

すると、しばらくして彼の腹心らしき人物が近寄り、恐る恐る彼の耳元でこんな話をしはじめる。

「あの…ピエール司教、…ご存知…ないのですか？」

「なんだ！ 今取り込み中だ！」

「だから…彼ら、あのY A R I Oですよ？」

「は？」

彼の言葉にピタリと凍りつくピエール。

すると、聖書を取り出してトントンとそれを指で軽く叩いた腹心の部下は顔を引きつらせたまま、ピエールにこう話を続ける。

「はい、ですからY A R I Oです。後は分かりますよね？」

「え？ ……も、もしかして？」

「はい、察しの通りです」

そう言った腹心は満面の笑みを浮かべ、一方でその事実を聞かされたピエールは顔がだんだんと血の気が引いたように真っ青になっていく。

まあ、腹心が遠回しにピエールに何を伝えたのかは知る由も無いのだが、まさに、その表情は蛇に睨まれたカエルのようであった。

そして、周りの民衆も彼らがY A R I Oだと分かると罵声を彼らに浴びせたピエールに怒りのこもった様な眼差しを向けていた。

「おい！ あんた！ なんて言い草だ！」

「そうよ！ Y A R I Oに対して酷いんじゃないの？」

「そうだ！ そうだ！」

「彼女に物投げたやつちよつと出てこい！ 全員謝れよ！」

「まあまあ、皆さん落ち着いて落ち着いて」

そう言って、ピエールに怒りを露わにする民衆達、そして、それをすかさず宥めるヴラド。

すると民衆達はシーンと静かに静まってしまった。しかし、その表情は皆笑顔に満ち溢れている。

そんな中、ベデイは火刑に使われるはずだった火刑台を眺めながら一言。

「この火刑台も勿体無いよねえ」

「じゃあ、皆でバーベキューしようか？　良い木炭になるよこれ」

「お！　いいねえ！　しようしよう！」

そう言つて、よく燃えそうな火刑台を見つめるベデイに賛同する2人。

———処刑場がバーベキュー会場に。

すると、それを聞いた民衆達は歓声を上げて口々に嬉しそうに話をしはじめる。まるで、その表情は祭りでも今から始まるかの様に晴れやかなものだった。

「おい！　聞いたか！　今からバーベキューだよ！」

「まあ！　それじゃ家からお肉持つて来なきや！」

「それじゃ俺は家に野菜があつたからそれ持つてくるぞ！」

「あ…いや、ちよつと…あの、ジャンヌダルクの処刑…」

「そんなの中止に決まってるだろ！馬鹿司教！」

そう言っただけ、皆は散り散りになって各自、家庭にある肉や野菜を集めに帰る。

さて、そんな彼らの姿を見たカタツシユ隊員も黙っているわけにはいかない、これは、この火刑台を立派なバーベキューセットにしなれば。

すると、ベディはしばらくして火刑台を鋸を使って切り始めた。

「おー、サクサク入るねやつぱり」

「はい、ジャンヌちゃんこれ、着替えと鋸ね」

「え？ ……、これは…」

「農民出身と聞いてたんで用意しときましたぜ」

「サイズは師匠とおんなじくらいだけど多分合うと思うよ」

そして、当然、こうなったからにはジャンヌちゃんにも協力してもらおうとディルムツドとヴラドは用意していた鋸と着替えを彼女に手渡した。

————用意周到なカタツシユ隊員。

金網も手作りりで用意、大人数でのバーベキューとなり、これにはルーアンの人々も手伝ってくれた。

こうしてできた簡単なバーベキューセットに入れるための木炭を確保するため、ノコギリで切り取った木をヴラドが木炭にしていく。

「こうしてね、すごくいい木炭になるのよ」

「……すごく……。勉強になる……」

これにはピエール司教も思わず感心した様に声を溢した。

ヴラド特製の木炭、これは民衆も思わず心が躍る。

なんせ、あのイングランドのアーサー王が絶賛した串焼き公で有名なヴラド印の木炭であるのだからそれは期待も膨らむというものだ。

こうして、できたバーベキューセットに肉や野菜を乗せていく、すると辺りには香ばしい香りが広がった。

「やっぱり、人間焼くよりこっち焼いた方が絶対美味しいよ」

「人間じゃ食べれないしね」

「貝とかイカとか魚とかも焼いてもいけるからこれ」

「おお!? ほんとですか! いやー、お酒が進みますなあ」

そう言いながら街の人々はバーベキューをしながらワイワイとカタツシユ隊員達に感謝の言葉を述べつつ食事を楽しむ。

先程まで、物騒な雰囲気だった街が嘘の様な変わり様だった。

そんな中、1人の少女が農作業服を身につけているジャンヌに近寄ると満面の笑みを浮かべて彼女にこう告げ始める。

「聖女さま! バーベキューセット作ってくれてありがとうございます!」

「い、いえ、私は成り行きで…、美味しいですか?」

「うん!」

「それは良かったです、久々に頑張った甲斐がありました」

そう言って、ジャンヌは笑顔を見せる少女の頭を優しく撫でてあげた。

——久々に農家の血が騒いだ気がする。

やはり、生粋の農家の血筋だけあつてジャンヌの作業の腕は確かなものであつた。これはカタツシユ村開拓にも期待が持てそうだ。

こうして、我らがカタツシユ隊員達は一人目の0円英雄を仲間に入れることに成功した。

これで、エジプトの開拓に人員を割いてもある程度どうにでもなりそうである。

「あ、ジル達も連れてって良いですか？」

「どうぞどうぞ！」

それに、ジャンヌの協力のおかげでピラミッドの建設要員も凶らずも増員。

半年かかる予定だったピラミッド建造もこれで多少なりと短縮出来そうである。

こうして、フランスから農業のベテラン、ジャンヌ隊員達を引き連れてルーアンでバーベキューを楽しんだ一同は帰路につくのだった。

今日のYARIO。

- 1、0円英雄、ジャンヌちゃんを回収。
- 2、ルーアンの火刑をバーベキューパーティーに変える
- 3、火刑台をバーベキューセットにする。
- 4、どこの市民にも愛されるアイドル。

鉄腕／ウルク&エジる その3

さて、前回、農民枠の聖人を無事確保できたカタツシユ隊員達。

ニトクリスのピラミッドの製作を見据えての人員補充なのだが、大成功！ まさかの農民聖女ジャンヌ・ダルクだけでなく、フランスの兵士達までオマケについてきたのだ。

ちようどカタツシユ村にも酪農の手伝いや畑を大きくする人員が欲しかったところなのでこれは有り難い話である。

そして、そんなカタツシユ村にも活気が出てきたちようどその頃、我らがリーダー達はなんと紀元前800年頃のアッシリアへ。

というの？ 今回、ニトクリスちゃんのピラミッド作りには是非取り入れておきたい技術があった。

「山城作りのモデルをね」

「だねー、モーさんの立派な納屋作り（居城）もいずれはあるわけだからねー」

「やっぱり専門家はいるよね」

「確かにな、あ奴なら空中庭園作りにも詳しかろう」

そう言いながら、デイルムツド、カルナ、リーダーの言葉に瞳を瞑ったまま笑みを浮かべるギルガメッシュ師匠。

バビロンの空中庭園、すなわちバビロンといえはこの人！ といった具合で思いつきで今回は彼にご同行をお願いした。

残念ながら、今回はスカサハ師匠とモーさん達はお留守番である。

今頃はエジプトで重機を操ったり、トラックを用いて物資の運搬をしているに違いない。

少なくとも、メイヴちゃんと小次郎さんは最早、世界最古の至高のデコトラ乗りになりつつある。

現場監督はネロちやまが行なっているので何も心配無いはずだ。多分。

「あー、思い出した！ デイル、そういや、お前の事、婦長さん呼んでたで？」

「ん？ ナイチンゲール師匠が？ なんで？」

「いやー、それがやなー、最近、看護婦が不足してるから看護師として手伝ってくれやっ
て」

「あれ？ デイル、ナースとかできたっけ？」

そう言つて首を傾げるカルナ。

記憶が正しければデイルムツドにはナースの経験はなかったような気がするが…。

すると、デイルムツドは笑みを浮かべ、カルナにサムズアップするとなんの問題もないと言わんばかりにこう返した。

「やつてたよ！ ナースマン。バリバリで!!」

「それフィクションじゃねーか！」

そう言つて、冷静にツツコミを入れるカルナ。

確かにデイルムツドにはナースマンの経験はあった、フィクションでの話だが。

すると、デイルムツドは何やら指で数えるようにしながら更にカルナに話を続け始める。

「他にはねえ、家政婦とかもやってたねえ、あと、ホストとかもしてたよ」

「だからそれフィクションでの話だよな？」

「我は見てたぞ、なかなかあれは面白かったではないか」

「えー！ ほんとですかー！ 嬉しいなあ、いやー、俺かなり感動しましたよ！ ギル師匠！」

そう言つて、ギルガメツシュの手を握り締めて嬉しそうに笑みを浮かべるディルムツド。

フィクションであるが面白いと褒めてくれるギルガメツシュ師匠は流石は心が広い。流石は千里眼を伊達に使っていないとみえる。

さて、茶番はさておき、こうしてアツシリアまで建築の匠を訪ねに来た一同であるが、すぐに宮殿に赴き、協力を仰ぐ事に。

さあ、今回はどんな癖者師匠に会えるのだろうか？

「思ってたけど、俺達も大概癖者ばかりだよな」

「そんなこと言わない」

——自覚はあった。

確かにスカサハ師匠にモーさんも濃いのが、もともとのリーダーを含めた五人もキャラが濃いすぎる。

今では更に濃いメンバーを迎えたせいとか、色で言えば真つ黒か極端に凄い濃い色になっっているに違いない。

そんな他愛ない雑談を交えながら一同はなんやかんやでアッシリアの宮殿へ。

「こんにちは——！ 僕ら鉄腕／f a t eのY A R I Oという者なんですけど——」

といつも通りに門番に話を通し。

「え！ あのY A R I Oさんですか！ こ、こちらです！ どうぞどうぞ！」

と案内され。

「なんだお主ら？ 我に何の用だ？」

と言った具合にトントン拍子で今回も匠に会うことができた。

しかも、隣にはあのギルガメッシュ師匠がついて来ている為、心強い。

さて、というわけで、今回、建築の達人はこちらの方、父さんが残した熱い思いを形にしたバビロンの空中庭園を作り上げた空中庭園作りの達人。

アツシリアの伝説の女王。セミラミスその人である。

彼女は美貌と英知を兼ね備えていたとも、贅沢好きで好色でかつ残虐非道だったという話もあった。

彼女の在位はなんと驚異の42年間だという。

「今回、僕ら空中庭園作りに精通してる匠さんにいろいろ教わりたいなど……」

「……ふーん、変わった奴らよの」

そう言って、玉座に座るセミラミスは品定めするような眼差しで彼らを見つめる。

農業の格好、鍬にした槍を担いだアイドル。

こんな胡散臭い、もとい、アイドルがアイドルの定義を成してない人物達を見れば疑わしくも思われてしまうだろう。当然である。

「おい、私の弟子共の願いが聞けぬか？ 雑種よ。貴様、誰を前にして玉座から見下ろしている」

「……人礼節を知らぬ者がいるな？」

「ほう？ よく吠えた。ならば是非もない、この我が直々に……」

「まあまあまあ、お二人さん抑えて抑えて」

「そうだよー、ギル師匠、折角、ニトちゃんのピラミッドに師匠の水上建築と空中庭園の技術を取り入れようとしてるのにさ」

そう言って、すぐさま仲介に入るカルナとデイルムツドの2人。

険悪な2人に対して仲良くしてほしいという彼らの言葉に不機嫌そうにしながら、仕方ないと言葉を一旦区切るギルガメッシュ師匠。

確かに、ギルガメッシュが本気を出せばこのアッシリアの宮殿を丸々壊滅させるのも容易く、目の前にいるセミラミスを屠るのも簡単だろう。

普段なら、煽る側の彼らとしても今回は抑えて貰わねば、最悪の場合はリーダーを生贄に捧げるしかないが……。

「まあ良いだろう。そこまで言うなら空中庭園の作り方について教えてやらんでもな

「い」

「ギルガメツシユ師匠…我慢ですよ我慢」

「抑えて抑えて」

「ええい！ わかつておるわ!!」

そう言うと、ギルガメツシユはため息をつくといライラを抑え、セミラミスの言葉を静かに受け流す。

賢王というだけあって、自制心は保ててるようだが幸先が不安になってくる。こんな調子で大丈夫なのだろうか？

さて、一方、ニトクリスのピラミッド作りの方だが。

こちらの方も総動員に近い体制でガンガンと建築を推し進めていた。大型車がピラミッドの周りを往き交い、どんどんコンクリートや石が積まれていく。

石を運搬しているトラックから顔を出したメイヴは現場の大型車を誘導するモーさんに声をかける。

「メイヴちゃん到着ー！ はーいバックするよー！」

「おけー！ オーライ！ オーライ！」

「余が思うに、この辺りなど良いのではないか？」

「おー、流石はネロちやまは目の付け所が違うねー」

順調に進んでいた。トラックからの物資の運送もそうだが、大型車の活躍により作業も円滑化され効率的な建設作業が可能に！

アルジュナ達もそして、ジャンヌを慕うジル・ドレエ達も安全第一のヘルメットを被り作業に加わっている。

「アルジュナ殿、クレーンのフックはこの辺りでよろしいですか？」

「いや、もうちよつと上だな！ ちよつと巻いてくれ！」

「わかりました、聞いたな！ もうちよつと上だ！」

「了解！」

キュルキュルと音を立てて、ローマンコンクリートを持ち上げるクレーン車に指示を飛ばすジル。

場所を確認しながら、アルジュナはコンクリートを下ろす位置を調整する。こうする

事で噛み合わせが悪いズレを無くし、ピラミッドの綺麗な並びを実現させる事ができる。

ピラミッドの下部分は割と順調に組み上がっているようだ。これならば、予定よりも作業が終われるかもしれない。

「これ壮観だねー」

「だよねー、エジプト始まった感があるわ」

そうやって見晴らしの良いピラミッドの出来上がっていく様子に感心するヴラドとベデイの2人。

そんな中、盛大なピラミッド作りを前にしてニトクリスは彼らの隣で目をキラキラと輝かせていた。

まさか、こんなおっきなピラミッドが自分のピラミッドになるなんて、なんて恐れ多い事か……。歴代のファラオに申し訳ないと思いつつも内心では舞い上がっている。

「す、凄い！ …わ、私のピラミッドもしかしたらエジプトで一番大っきくなるのではないですか！」

「そりや、下があんだけデカければねえ」

「ですよね！　ですよね！　やったー！　大変、嬉しく思います！」

満面の笑みを浮かべて嬉しがるニトクリス。

そんな姿に思わず2人も和む、巨大なピラミッドを作るのは大変だが、こんな風に喜んでもらえるなら本望だろう。

さて、そこだが、2人は肝心な事を忘れていた。

その事を思い出したベディはハツとしたように手をポンと叩くと建築現場を見ているニトクリスとヴラドの2人にこんな話を持ちかけはじめる。

「あー！　そうだ！　名前！　名前考えようよ！　このピラミッドのさー！」

「まだできてないのに？　もうニトちゃんピラミッドで良いじゃん」

「いや、それは捻りがないな、遊び心が無い」

「!?　スカサハ師匠！」

そう言って、彼らの背後からいつのまにか現れるスカサハ師匠の姿に一同は驚きながら目を丸くする。

しかし、確かに彼女の言葉は正鵠を射ていた。ニトちゃんピラミッドだと可愛くはあ
るものの、捻りがなく普通。

もうちよつとインパクトが欲しいところだ。だが、ニトクリスは納得できないように
突如現れたスカサハを指差すと異議を唱えはじめる。

「ちよつ?! それおかしくないですか! 私のピラミッドなのに!」

「それは余もそう思う」

「お、オジマンディアス様まで!? 何故エ!」

だが、これまたいきなり現れた同じくエジプトのファラオであるオジマンディアスの
まさかの援護射撃には勝てなかった。

しかし、このピラミッドはニトクリスの物であるのだが、元々はY A R R I Oが作ると
言い出したものである。

そして、現にニトクリスのピラミッド作りに積極的に尽力してくれているのだ。

そういう意味で彼らの活躍した証を何かしら残しておくべきだとオジマンディアス
は考えていた。

「名前はこやつらに付けさせよ、これだけ立派なピラミッドを建ててくれているのだ。それに応えるのもまたファラオの務めだぞ」

「!?…っは！…た、確かに言われてみれば…」

「え？ 良いんですか？」

「これは貴様らの功績だ。良いか？ ニトクリス」

「！ は、はい！ もちろんでございます！ 彼らの付けた名前ならファラオたるもの喜んで受け入れます！」

オジマンディアスの問いにそう応えるニトクリス。それを聞いていたスカサハ師匠も満足そうにうんうんと頷いていた。

こうして、ヴラドとベディの2人はこの場にはいない三人の分までニトクリスのピラミッドの名前を考えることに…果たしてどんな名前が良いだろうか？

「前は一字づつ取って山城だったからねー」

「そっか、それじゃ、今回もおんなじ感じで一字づつ取って付けようか」

「よし、おっけー、…んー……」

ヴラドの提案に納得したように頷き考えはじめるベディ。折角、名前を付ける機会を得たのだ、ここはよりインパクトのある名前を。

そうして、考え込む事数分あまり、ベディは何か閃いたようにカツ！と目を見開くと、紙と筆を用いて全員にニトクリスのピラミッドの名前について書きはじめる。

丁寧な文字でささっと書いていくベディ。そして、完成した文字をその場にいる皆の前で公表しはじめる。

「それでは、このピラミッドの名前は長岡と命名する事にします」

—————ピラミッド長岡。

明らかに和風な名前のピラミッドであるし、いろいろ突っ込みたいところだが、なんだか、しつくりくるところもある。

そのベディから公表されたピラミッドの名前を見たヴラドがここで一言。

「え？ 新潟県だっけ(こゝ)？」

「今更何言ってるんだよー、エジプト県長岡市に決まってるじゃん」

「そっか、エジプト県だっただ(こゝ)……ってんなわけあるか！」

——エジプト県長岡市。

恐らくはベデイがこの名前にしたのは、山城同様の付け方なんだろうが、ピラミッド長岡というネーミングセンスには流石にヴラドも突っ込まざる得なかった。

ならわかったと、ベデイは納得できない様子のヴラドを見かねて更に訂正を加えはじめる。

そして完成したのがこちら。

「ピラミッド長岡国」

「市から規模でつかくしたただけだね、それ……。場所は相変わらず新潟だね、明らかに
さ」

「だからエジプト県長岡国だって」

「ふむ、ではもうそれで良いな」

「ちよつと待つて！ オジマンさん！ せめて国だけ消させて！」

こうして、ヴラドの要望により、国だけ消され、ただの長岡になる事に。

さらに、ニトクリスの名前をここに加えていき、略称は長岡だが、結果的にこんな名

前になった。それがこちら。

——ピラミッド長岡ニトクリス。

もう芸名か何かではないかと疑ってしまうが、これが略されとりあえずピラミッドの名前は長岡になる事になった。

この名前にニトクリスもとりあえず満足した様子だが、明らかになんの建物か、意味不明な名前になってしまった感は歪めない。

だが、本人が満足ならそれで良いと言うことに、こうして長岡という名前も決まり一同は満足した様子であった。

「長岡か…悪くないな」

「確かに良い響きだ」

「ちよつと俺には何言ってるかわかりませんね」

満足げに頷くオジマンディアスとスカサハの言葉に容赦なく突っ込みを投げかけるヴラド。

至って普通の反応である。エジプトに長岡とかいう変な名前のピラミッドがあるらしいと言われてもなんらおかしくはない。

さらに、このピラミッドの正式名称は芸名みたいな名前である。

こうして、ピラミッド、正式名称、長岡ニトクリスの命名も無事に終わり、一層やる気がみなぎってきた。

完成まではまだかかりそうだが、これに水上建築や空中庭園の技術も取り入れて凄いピラミッドを完成させたい。

果たして、長岡は無事に建てられるのか？

この続きは……！ 次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

1. 空中庭園の技術を学びにアッシリアへ
2. ピラミッド名『長岡』
3. ピラミッドの正式名称『長岡ニトクリス』
4. 建築予定地 エジプト県長岡市。
5. 大型車が普通に走るエジプト。

ニトクリスのピラミッド作り（大詰め） その2

さて、前回の鉄腕／f a t eでは空中庭園の達人、セミラミス師匠を建築にお呼びし、ニトクリスちゃんのピラミッドに長岡という名前を付けたカタツシユ隊員一同。

そんな一同セミラミス師匠をエジプトで迎え盛大な歓迎会を開く事に。
というのも？

「なんと！ 今日みなさん！ メジエド様祭りですよ！」

「とうわけなんですよ」

「何がどう、とうわけなの？」

そんなわけで、このメジエド様を讃える祭りをニトクリスちゃんが開きたいと希望するので致し方なく付き合っあけることに。

どうせなら盛大にやろうと、オジマンディアスも国を挙げて全力サポートしはじめ

のでこれはもうせざるを得なくなってしまうたわけである。

さて、こうして、セミラミスを盛大にお迎えするために開かれる事になったメジエド様祭りだが、その概要はというと？

「ソウ ワタシ ガ メジエド サマニ ナリマス！」

「なるほど、それでそれで？」

「アシキ モノ ヲ タイジスベシ！」

そう言って、ベデイの質問に対して、初対面で彼女と出会った時のように珍妙なメジエド様の白布を被り、耳の様な癖毛をピコピコと動かすニトクリス。

確かに愛嬌があり、可愛いのだが、これで悪しき者を倒すと意気込まれても正直な話、皆はピンとこない。

そこで、カタツシユ隊員達は考えた、このメジエド様に対抗すべき好敵手を、そうして、考えついた結果がこちら。

「なんで俺がこんな格好……」

「いいじゃんいいじゃん」

「スッゲーかわいいよモーさん」

そう、人間サイズのアヒル隊長。

これをモーさんにやつてもらおう事にした。理由は特に無い、リーダー達の思いつきである。

しかし、モーさんはカルナ達から可愛いと言われて満更でも無いのか、無表情のアヒル隊長のぬいぐるみを被ったまま照れくさそうな声を挙げていた。

「えへ、えへへ、そ、そうかあ〜？ な、なら仕方ねえなあ、俺がやるしか無いか！ うん」

（チヨロいなう、モーさん）

（先が心配だなあ、大丈夫かなあ…）

さんざん持ち上げておいて、天使の様な笑みを浮かべるモーさんに思わず心配になるカタツシユ隊員達。

無表情なアヒル隊長の顔が相まってかなりシユールな光景である。

さて、そんなアヒル隊長とメジエド様の姿を目撃しているセミラミスは目をまん丸くしながら指を差し、ヴラドにこう問いかける。

「なあ、ヴラド、あれはなんなのだ？」

「アレですか？ ウチのマスコットです、あと、この人達もその類ですね」

「うむ、そうだな、…うん？ …ちよつと待て、何故、私もあれらと一緒に扱いなんだ!!」
「え！ 僕マスコットやったん!!」

そう言って、説明されるヴラドから指差されたリーダーとスカサハ師匠は思わず声を上げて突っ込む。

「……マスコットのなリーダーと師匠。」

確かにアヒル隊長やメジエド様みたいなシニールさは無いが、我らが愛すべきリーダーとスカサハ師匠は間違いなくマスコットのな存在である。

「愛されキャラで良いじゃんか」

「だって片方は魚類で片方はアヒルやで」

「そうだけでも、似たようなもんでしょ」

「なんでやねん！」

「こら、刺すぞ、プスっていくぞプスって」

2人の息の合った突っ込み。

スカサハ師匠は頬を膨らませながらゲイボルクを構えて牽制している。

しかしながら、普段から槍で鉋石を掘ったり木を槍で刺し倒したりしている師匠を見ているカタツシユ隊員達からしてみればあの珍妙なマスコットとなんら変わりがなく見えても仕方ないようにも思える。

リーダーはリーダーで、もうみなさんはご存知の通りだと思われるので割愛してもらう事にしよう。

というわけで、メジエド様とアヒル隊長のマスコット一騎打ち祭りが催される事に。

「さあ、みんな！ メジエド様とアヒル隊長を応援するんだぞー！」

「はーいー！」

そして、エジプトの子供達に応援を促すデイルムツド。

まるで、一種のヒーローショーのようだが、大人達も珍妙なマスコット対決を一目見

ようと宮殿の近くは賑わいを見せていた。

この祭りはこの催しをきっかけにエジプトでの伝統的な祭りとして後世に語り継がれる事になるのだが、その祭りの名前が別名…。

長岡マスコット祭りである。

早速、祭りは盛り上がりを見せる。神輿に担がれたニトクリスのメジエド様とモーさんの担がれた神輿が激突。

このモデルとなっているのは日本伝統の喧嘩祭りである。

日本の祭りにおいて、山車、行燈、曳山、神輿、太鼓台等でぶつかり合うように行う祭りでこうする事で神威を増すといわれている。

新潟県の天津神社のけんか祭りでは、神輿のぶつかり合いは、神威をいや増すものであるが、女神のぶつかり合いは神婚を意味し、五穀豊穡、大漁、子孫繁栄をあらわすと言われているのだ。

つまり、互いの誇るマスコットをぶつけ合う事でお互いの土地が豊かになりますようにという意味で願いを込めた行事になっているのである。

ここまで長々と説明があつたが、ここは新潟県ではなくエジプトである。

「グッ… フッフ アヒル タイチヨウ ナカナカ テゴワキ コウテキシユ デス
！」

「グワー（てめーもな！）」

ピコピコと頭の羽毛が動くメジエド様に呼応するように、アヒル隊長モーさんが羽を広げて威嚇を見せる。

——互いに成りきっている。

その余興を楽しむようにオジマンディアスとギルガメツシユの2人は酒盛りをしながら満喫していた。

珍妙なマスコットの戦いはまだまだ始まったばかり、今年の長岡祭りを制するのは一体どちらのマスコットなのか！

さて、それはさておき、時は過ぎ、祭りを眺めているセミラミス師匠は面白い光景に大変満足されている様子であった。

「こんなものを考えるとはなかなか面白い奴らよな、気に入った」

「え！ それじゃあ…」

「ああ、我が直々に空中庭園の技術を授けてやろう、どんなものが出来上がるのか見て見たくなった」

「やったー！ ほんとですか！」

こうして、なんとかセミラミス師匠から空中庭園の技術を学べる事が出来るようになった。

これで、長岡も空中に浮かぶエジプトで一番大きなピラミッドにすることが出来る。それに空飛ぶ納屋、山城も作る事が可能に！

さあ、いよいよ、ピラミッド作りも大詰めだ。

さて、そんなわけで、ピラミッド作りが順調に進んでいる最中。

ひと段落ついた一同はこのマスコット長岡祭りを無事に終えて一度カタツシユ村に帰る事にした。

というのもこれには理由があつた。それは…。

「病院の人手が不足しています、これでは…助けられる命も…」

「そうですか…」

「ジャンヌさん達も作業の合間を使っていろいろと手伝ってはくれてるんですけどね」

そう言つて、深いため息を吐くのはこのカタツシユ村の病院の婦長、ナイチンゲール
師匠である。

病院という施設自体がこの場所にしか無いため、人が足りず、回らなくなつてきてい
るといふのだ。

それにこの時代の医療では病人を助けるにも限界がある。

容易に靈草を使えば不老不死にはできるもの、それでは彼らに望んでいない苦しい
生活をずっと強いる事につながってしまう。

「…どうにかなりませんかね？」

「うーん、そうだね、なんとかしなきゃだね、それは」

「医者も麻酔医も居ないから手術もできてないんだよね？」

「…はい、良くても切除かそのくらいの処置くらいでしょうか」

「若い命が無くなるのは僕らも見えてられへんからなあ」

そうやって、ナイチンゲール師匠から病院の事情を聞いたカタツシユ隊員達は顔を見合わせてどうするか思案し始める。

確かにこのまま、この状態にしておくのは良くない。

なので、彼らはひとまずこの件に関してナイチンゲール師匠のお願いを聞き入れる事にした。

「まずはお医者さんだねー」

「あ、僕、1人心当たりあるわー」

「え？ リーダーそれほんと？」

そうやって、リーダーの言葉に驚くヴラド。

リーダーはにこやかな笑顔を浮かべながら頷く。どうやら、医者に心当たりがあるようだ。

ならば、それに越したことはない、あとは片っ端からだん吉で皆が散り散りにお医者さんに協力を求めに行かなければならないのは確定事項。

心当たりがあるなら、それならそれでだいぶ助かる。

というわけで一同はそれぞれ、お医者さんを求めてだん吉へ、リーダーはカルナと共に移動をすぐさま開始した。

「リーダー行き先は？」

「えーとな、現代のちよつとした紛争地域なんやけれども…医療支援団体の方に心当たりがあつてなあ…」

「えっ!?! げ、現代!?! マジで!」

「マジやでー」

そうやって、だん吉に乗り医療支援団体が活動している地域へと赴く事になった2人。

カルナもまさかの行き先が現代という事に驚きが隠せない、リーダーの心当たりがある人物とは一体誰なのだろうか？

「この人ならもしかしたらいけるんちゃうかなって…」

「いや…いくら医術が発展してるからって…個性強いあの人達に現代で馴染む方なんているのかなあ」

「心臓手術なんかはやっぱり専門家しかわからんやろうし……外科医はやっぱり専門家がええよ」

そう言つて、カルナの言葉にもっともらしい事を述べるリーダー。

果たして、カタツシユ村に呼ぼうと思うほど人材とはどんな人物なのだろうか？　すると、リーダーは医療支援団体のテントを潜り抜けそこで患者と話をしている一人の人物に話掛けた。

「あの一……すいません、僕らY A R I Oという者なんですけども」

それから、しばらく話すこと数分ほどで協力をしてもらえる事を承諾してもらうことができた。

こんな紛争地域で患者を診る変わった外科医、果たして医術の匠とは一体どなたなのだろうか。

それから数日。

散り散りになったカタツシユ隊員達は医者経験がある方を呼びにだん吉で走り回

り、何人かの人材を確保する事に成功した。

「こちらパラケルススさん、錬金術と医療に精通してらしての方でして」

「：助かりました。正直言っただうしようかと思っていたので」

「いえ、私もお会い出来て嬉しいです」

そう言っつて、ヴラドが紹介してくれたホーエンハイムと名乗る男性と握手を交わすナイチンゲール。

「医術と錬金術に精通してある方ならば患者さんもある程度は問診や診察ができ、怪我や病の様子なんかも把握できる。」

そして、続いて現れたのはベデイと手を繋いで現れた可愛らしいワンピースを着た一人の幼女であった。

「私達は、ジャック・ザ・リッパーっていうの！ よろしくね！」

「えーと、いろいろ聞きたいことがあるんだけども」

「この娘こう見えて外科手術ができるんだよ！」

「いや幼女じゃん！ どっから連れて来たのよ！ 事案だよ！ これ！」

そう言つて、突つ込みを入れるヴラド。

誘拐犯になつてしまう！ これは流石に不味い。

しかし、ベデイは至つて冷静な口調でヴラドに事の経緯を話し始めた。そう、ベデイが向かつたのは産業革命期のロンドン。

そこではなんと、娼婦による捨てられちゃう子供達がたくさんおり、悲惨な光景になつていたとか。

せつかくの子供達の未来を大人の身勝手で奪うのは許せるわけが無い。そこで考えた。なら、貰つてしまえば良いのだと。

「ほら、カタツシユ村たくさんお母さん居るからさ、リーダー含めて」
「リーダー、一応、性別男なんだけどなあ…」

「……オカンやから仕方ない。

そう、メイヴちゃんだけでなく、大型車を運転できるのは小次郎さんもいる。

それに、カタツシユ隊員なら大型車の運転もなんのその。

ロンドンからわざわざ、大型バスに乗つけてカタツシユ村に連れて来たのである。

「そしたらなんかこの娘が解体も得意だつて言うからさあ、聞いたら外科手術なんかもできるみたいで」

「うん！ 得意だよ！ 解体！」

「そつかー、解体得意なら助かるねー、建物の立て直しとか船舶の分解の時におじさんお願いしちゃおつかなー」

「うん！ 任せておいてね！」

そう言つて、にこやかに可愛らしい笑みを浮かべるジャツクの頭を撫でるカルナ。しかし、幼女に家や船舶の解体なんかをさせても良いものだろうか？

すると、そこでデイルムツドがこんな提案を持ちかける。

「マグロでもいけるかな？」

「うん！」

「よし、この娘採用！」

「待つて、その判断基準はおかしい」

——幼女によるマグロの解体ショー。

確かに珍しいだろうが、それですぐさま採用する彼らも彼らである。ヴラドは呆れたようにため息を吐いた。

そして、肝心のリーダー達が…。

すると、ナイチンゲール師匠は彼らの連れてきた人材についてこう質問を投げかけはじめた。

「そちらの方は？」

「あ、えーとですね、お医者さんって聞いたので…その、紛争地域から来ていただいたんですけど…」

すると、カルナの紹介を見計らって、白衣を着た男性は鋭い眼差しを向けたままポケットに手を入れると自己紹介を自らはしはじめた。

そう、彼は現代医学において最高のパチスタチームを形成し、数々の困難な手術をやり遂げたプロフェッショナル。

きっかけはリーダーがよくその雄姿を知っていたからという話から始まった。

「心臓外科医の朝田龍太郎だ。よろしく頼む」

「はい、というわけで来てもらいました」

なんと、あの朝田龍太郎先生に来てもらう事に。

その名前を聞いたヴラドはここで思わず、目を見開いたままこんな事を話しはじめる。

「ちよつと待って！　なんか違う話が始まりそうなんだけどー！」

ーブリーテンだけにTeam Medical Dragon（医龍）。

なるほど、確かにアーサー王にちなんだ素晴らしいバチスタチームができそうな予感
はする。

しかしながら、手術チームが本当に凄腕ばかりである。

内科医兼麻酔医にヴァン・ホーエンハイム・パラケルスス師匠。

手術の助手にはナイチンゲール師匠。

そして、外科医には朝田龍太郎にジャック・ザ・リツパーちゃん。

さらにこれからまだまだ朝田先生がツテを使って人材を呼んでくれるという話まで挙がり。

ローマ、バビロニア、エジプトからも医術研究をさせてほしいとカタツシユ村に医者派遣するという話にまで。

さらに医療機器はメイヴちゃんと小次郎さんが部品を仕入れてくれるそうなので。

「つまり、医療機器を作れというわけですね、俺らに」

「人工心肺とか手作りでできるかなあ？」

「図面あればいけるいける！ 作り方はまた教わり行ってもいいしね」

そう言つて、医療機器をまず部品から作るところから彼らはやる事になった。

エミヤさんもいるので多分、大丈夫だろうがこれは神代で心臓バチスタチームができるという事になる。

「カタツシユ村に…帰るぜよ、みたいな？」

「そっちの方が良かったかな？」

「ヤメテ!？」

こうして、ナイチンゲール師匠も安心して医療に専念できる環境は整った。後にこのカタツシユ村病院では医龍的な展開が繰り広げられるのだが、それはまた別の話である。

さあ、ピラミッド完成ももう間もなくだ。

今日のY A R I O。

1. 世界最古の心臓バチスタチーム結成。
2. ロンドンの捨て子を回収。
3. マグロの解体ができる幼女を発見。
4. エジプトに長岡祭りが開催される。
5. エジプトにアヒル隊長が祀られる。

聖剣作り その4 (完成)

さて、前回の鉄腕／＼f a t eではニトクリスとモーさんのメジエドとアヒル隊長の長岡祭り。

無事にそれも終わり、いよいよ、ピラミッド作りも大詰めへ、皆の士気も上々に上がり始め本格的に動き始める事に。

「さて、それじゃ今から組み立てていくんだけども」

「いえーい！」

当初の打ち合わせ通り、ピラミッドの内部から、水上建築の技術と空中庭園の技術を組み合わせたものを作りたい。

彼らの手にも思わず力が入る。重機を動かして石を積み上げ形にしていく。

ピラミッド作りに協力してくれているアルジュナは石を削りながら汗を拭い、爽やかな表情を浮かべていた。

「こんなものだろうか？」

「やっぱ筋がいいねえ、アルちゃんはさ」

「なあ、なあ、なあ、なあ！ 俺は！ 俺は！」

「モーさんももちろん上達してるよー」

「ほんとか！ えへへ、よし！ 頑張るぞ！」

そう言つて、カルナから頭を撫でて貰うモーさんは上機嫌で頬を紅潮させ、顔を綻ばせながら喜んでいた。

側から見たら和む、どこからどう見てもとても可愛らしい女の子である。

しかし、これがあのアーサー王と対立したであろう叛逆の騎士モードレッドだと言つて誰が信じるだろうか？

――反抗期は過ぎました。

今は天使のような娘がエジプトで石を削ってピラミッド作りをしているだけである。さて、水上建築の方も順調で設計図と睨めっこしているのはギルガメッシュ師匠であ

る。こちらはセミラミス師匠と打ち合わせをしながらどういった具合にピラミッドに組み込んでいくのか打ち合わせをしていた。

やはり、建築において打ち合わせは重要である。

無計画で建ててしまうと建物が倒壊したり、場合によっては改築も必要になる可能性がある。

「うむ！ 余のローマンコンクリートは大活躍だな！ もつと褒めて良いぞ！」

「ネロちゃんすごいなー憧れちゃうなー」

「そうだろう！ そうだろう！」

ヴラドの棒読みのような褒め方に満面の笑みを浮かべるネロ。褒められると上機嫌になるので彼女は本当に扱いやすい。

なお、放置したり扱いを疎かにすると泣き出すのでご注意を。

という事で、適度にヴラドがネロを甘やかしている間にカタツシユ隊員達はある話に入る。

それは？

「聖劍作りの素材、集まりそうだよね」

「エジプトとバビロニアで残りは集まるだろうし、包丁にしたデュランダルの破片もあるしねー」

「あとはこれを溶かして形にすればいいか」

そう、皆さまは忘れている方もいるかもしれないが、モーさんの聖劍作りである。

素材はバビロニアとエジプトの鉱山から掘れば出てくる。そこは、優秀な我らがADフィンとADエミヤが揃えてくれた。

ピラミッド作りに忙しい皆の代わりに泥まみれになりながら持って来てくれた素材、お二人共御苦勞様である。

さて、それでは我らがマーリン師匠からここで皆様にお話が。

「劍作りの話をしよう。まずは山子というものを行い、鉄を溶かすための炉の火のための炭を焼くところから始めるんだね」

詳しく話せば、炭を作るところから始めるのだが、ここには炭職人のヴラドがいる。

というわけで早速、上質な炭作りに入る。手順は以前から行っている炭作りと同じよ

うに作る。

以前、彼らが過ごした島の集落跡では、長年放置されてきた井戸の水があった。

その井戸の水質検査の結果、細菌の巣窟だった。

内側の壁は、雑草に苔、ヤモリの卵が巢食う劣悪な環境。そこで、井戸造りのスペシャリストに応援を頼み、再生に取り組むことになったのだが、その時にもこの炭が役に立った。

炭にはゴミや臭いを吸着する浄化効果あることで知られている。

「炭は大切だよ炭は」

「いやー、やっぱベテランは言うことが違うわ」

——炭を作り続け数年のベテラン。

炭焼き・レンガ造り・陶器作りなどの窯物関連は彼が担当しているだけあって、かなりの手際の良さ。

さて、炭の確保が容易にできそうなところで、ここで再びマーリン師匠の話に戻ろう。

「次に行うのは積み沸かし。大きめの鋼板をあらかじめ沸かしつけてあるテコ棒の先に

素材を隙間なく並べ、積み重ねぬれた和紙で包み、さらに水溶性粘土と稲藁の炭、灰で包んだものを、火炉中に入れ、加熱し大槌で打って鍛接し、鑿で切れ目を入れて折り返し、また沸かしをかけて鍛接する、このとき折り返しを縦横、交互に折り返す鍛錬法を「十文字鍛え」というんだね」

このように、剣を鍛えていくわけだが、日頃から包丁作りを行っているデイルムツドがこちらを担当。

日頃から作っているだけあってこちらも手馴れたもの、まるで本業のようである。こうして、作業を繰り返していくうちにだんだんとそれらしい形になってくる。

次に行うのは。

「作り込み、素延作りだね、こちらはそれぞれ鍛錬された集めた素材を鋼塊として組み合わせ、鍛接し、沸かし延ばし刀匠の意図した原型作り出すんだ」

こちらは匠ADエミヤが担当する。

剣作りならお手の物、何もないところから剣が出てくるというより作ることできる彼はこういつた意図した形にする作業は得意なはず。

劍を打ちながら、汗を拭うADエミヤ、その顔には真剣さが滲み出ている。

「なかなか良い経験だ。普段から見ている良かった」

「あれ？ エミヤん初体験だっけ？」

「いやー、初体験には見えないなー前世で刀鍛冶でもやってたんじゃない？」

「はははははは、そんなはずないだろう」

そう言つて笑顔で劍作りに没頭するエミヤ。

その手際の良さにカタツシユ隊員からも思わず関心する声が溢れる。

悲しい事にこの時既に、彼の本業がなんなのか覚えている人物は本人も含め一人も居なかつた。

多分、彼の本業はこちらなのかもしれない。

すると……で？

「おーい！ みんなー！ 追加素材いいかなー？」

「あれ？ ベディじゃん？ どったの？」

「いやさー、なんか久々に円卓のみんなに顔出ししたらさー、アルトリアちゃんが劍折つ

「ちゃったみたいで」

「ええ!? ほんと!?」

「うん、カリバーンって言うらしんだけどポキっといったみたいで」

そう言つて、劍作りをしていた皆は一旦作業を中断してベデイの元へ。

そして、彼が持つてきたカリバーンを見てみるとこれは見事にポツキリと折れていた。これでは使い物にならないのは明白である。

「だからさ、アルトリアちゃんに『えー! そのカリバーン! 捨てちゃうんですか!?!』

って聞いたたら、今度からは折れそうに無い槍使うからあげるよって言われた」

「あー…これだけポツキリいつてたらねー」

「折れた部分は溶かして使わせてもらおうか、根元からまだ使える部分はもつたいたいから包丁にしておこう」

「おーいいねー」

「…かつてカリバーンの扱いがこれほど雑だった事があるだろうか」

そう言つて、彼らの会話を聞いていたエミヤさんも流石に顔を引きつらせながら突つ

込みを入れざる得なかった。

今度、アルトリアちゃんには美味しいご飯を差し入れしなければならぬだろう。これは有難い素材だ。

という事で、デユランダルとカリバーンの他にそれぞれ高級な鉱物が入ったんだか
とんでもないものができそうになっている。

それから、形成・火造り、センスキ・荒仕上げ、土置き等の作業を順に行い、いよいよ、焼き入れに入る。

それが終わればいよいよ仕上げ。

ヤスリなどで刃を研いで鋭い刃にしていく、さらに装飾にも一味加え、見栄えある剣へ。

そうして完成したのが。

「日本刀じゃないの？」

「日本刀だよね、これ」

「思いつきり日本刀だな」

「どっからどう見ても日本刀だね」

物凄い仕上がりの良い、日本刀が出来上がった。これでは、剣でなく刀である。

——いつのまにか聖刀作りに。

まさか、剣を作っているつもりが刀を作る事になるとは思いもよらなかつた。しかしながら出来栄は上出来。

カリバーンやらデュランダルやらを溶かして使っているのだからそれはそうなるだろう。

カルナが頑張つて眼からビーム出したり、雷光でできた槍であるヴァサヴィ・シヤクティをわざわざハンマーにして打ち込んだのに出来たのは日本刀である。

「まあさ、逆に考えようよ、これ石にぶつ刺しても中々抜けんでしょ？」
「だよね、そうだよね」

という具合で仕方ないのでとりあえず前向きに捉える事に。

聖劍が出来上がったと思いきや、やはりやってしまった。とはいえ、刀と劍の使い道なんて変わらないのだからと開き直るカタツシユ隊員達。

それに多分、これを使う機会は彼らとモーさんが一緒にいる限り、あまり無いであろうことは周知の事実である。

という事で？

「名前決めよう！ 名前！」

「そっかー、名前か…、リーダーなんか良い名前ある？」

「せやなー」

ここから、この聖刀の名前を決める事に。

いろいろ良い名前が浮かぶが、ここはリーダーに皆は決めてもらう事にした。刀、刀といえ、以前、新宿の沼で発見した刀が思い浮かんでしまう。

しばらく考え込む我がリーダー、そして、思いついた名前は。

「すっぽん沼江やな」

こうして、聖刀の名前はすっぽん沼江に決まった。

由来はかつて、新宿で見つけた刀の名前から取ったもの、しかし、カリバーンやらデュ

ランダルやらをふんだんに使った刀の名前がこれである。

——聖劍すつぽん沼江。

かつこ悪いにもほどがあるが、皆は納得したように頷いていた。多分、モーさんが使う刀だし、これくらい可愛い名前の方が彼女にも使いやすいだろう。

しかしながら、すつぽん沼江——と叫びながらビームを放つ光景が、かなり滑稽であることは間違いない。

こうして、聖劍作り、もとい、刀作りも無事に終わりを迎える事に成功した。

あとはこれをモーさんに石から抜かせてあげるだけである。

さて、果たして、モーさんは選定のすつぽん沼江を石から引き抜くことはできるのだろうか？

ちなみにすつぽん沼江を刺した石は上等な漬物石であることをここに記しておく。

今日のY A R I O。

1. 折れちゃったカリバーンを貰う。
2. カリバーンとデュランダルを混ぜた刀作り
3. 聖剣すっぽん沼江完成。
4. 本業を忘れ去られるエミヤさん
5. 聖剣作りが聖刀作りに

刀の指南 その1

前回、完成した聖剣、もとい聖刀。

別名、すっぽん沼江だが、それを漬物石に使っていたカリバーンが刺さっていた石に再びぶつ刺し、彼らはモーさんと呼んだ。

「なんだー兄ィ達、俺に用って」

「あ、モーさんやつと来たかー」

「選定の剣だよ！ 選定の剣！ ほらずつとモーさんやりたいって言ってたじゃん」

そう言つて、にこやかな笑顔を浮かべ、選定の漬物石の前でサムズアップするカタツシユ隊員達。

しかし、石にぶつ刺さっているのは刀で、しかもその石の下にはカタツシユ村で取れた野菜を漬けてある漬物の壺があった。

これにはモーさんもなんとも言えない顔を浮かべている。

「いや…これ、違うような…」

「何言ってるんだよー、カリバーンとデュランダル使った超すげー刀なんだよ！ これ！」

「刀って言ったよな？ 今、刀って言ったよな!?!」

そう言ってる、漬け物石にぶつ刺さっているすっぽん沼江を指差して抗議するモーさん。

「…確かに剣ではありません。」

しかしながら、このすっぽん沼江だが、あのカリバーンにデュランダルを使い、さらには神代の最高級の鉱石をふんだんに使った神造宝具なのだ。

作ったのはY A R I Oだが、神造宝具のハンマー使って作ったのだから神造宝具に決まっているという謎の自負が彼らにはあった。

しかしながら改めて聞いてもひどい名前である。

「それか僕と契約して魔法少女になる？ 願い事は叶えられへんけど」

「初耳なんだけど、リーダーそれってどうやんのさ……」

「モーさんにゲイボルグを持たしたらそれらしくなるんやないかな」

「最近じゃ、アイドルも絶唄しながら戦う世の中になったからねー」

そう言いながら、魔法少女を希望しても構わないという具合に話を進めはじめるリーダー。

「……おっさん達には無理や。」

正直、歌で世界を救うなんて事をやってのけるのはびちびちの10代アイドルだけである。平均年齢が四十越えのアイドルには荷が重い気がした。

「やっぱ最近の若い子は凄いや。パワーあるよ、俺らおっさん達だからねー」

「やっぱり羨しかねーよな」

「わかる、…そんでなんの話してたんだっけ？」

「いや、だからこれ刀じゃねーか！」

そう、本題はそもそも選定の剣ではなく刀だった事である。名前をすっぽん沼江とい

う。

モーさんは不満げなご様子だ。確かにこれは剣ではなく刀、しかも、デュランダルやカリバーンの材料をふんだんに使った伝説的な刀である。

名前は果てしなくダサイが、そこさえ目を瞑れば最高級の刀である。

「良いじゃん、来週からるろうにモーさんが始まるよ」

「いやー、領主で農業できて、建築もできて、しかも剣豪でなんでもできるなんて凄いなー憧れちゃうなー」

「い、いや…あのだな…、こう、もつと…ビーム出せそうだな」

「ただでさえガンダムのモビルスーツみたいな鎧着てるのに何言ってるのよ」

もつともなカルナの突っ込みに全員が肯定するように頷く。

正直、言って羨ましい。スズメバチも駆除できるしフォルムもカッコいいとくれば文句のつけようがないモーさんの鎧。

それに加えて贅沢にもカリバーンとデュランダルが入った聖剣（日本刀）まで、原価を考えれば相当の価格はするはずだ。

「……ビームサーベルはまだ早いねん。

つまる話がそう言う事である。ビームサーベル出す前にまずは斧らしいもので我慢しなさいという事だ。

まあ、抜こうとしているのは日本刀なのだが。

かつて選定の剣が突き刺さっていた石（漬け物石）とにらめっこしはじめたモーさん、抜くか抜くまいか迷っている様子。

暫し考えた後、モーさんは腹を決めたのか、よし！ という掛け声と共に選定の刀に手をかける。

「よし！ 抜くからな！ 今から抜くからな！」

「よし抜け抜けー！」

「しゃあ！ 見てろよー！ このー！」

そうやってモーさんは刀を両手で掴むとグツと持ち上げるように力を加える。すると、選定の漬け物石からズブズブと剣が抜けて…。

「あ……っ」

抜く衝撃に耐えきれず選定の漬け物石が爆発した。

漬け物の壺の上に置いてあった選定の漬け物石は爆発四散し、さらに、下にあった漬け物の壺も衝撃で吹っ飛んでいく。

それを呆然と眺めるカタツシユ隊員達。

するとそこへ、上機嫌の様子の子ジャンヌちゃんがやってきた。

「あー！ みなさん！ 何やられてるんですか？ ちょうどその壺に漬けていた漬け物
が
いい感じにですね……ぶっっ！」

そして、破裂した漬け物の大根がジャンヌちゃんの顔面に直撃。

これには一同、苦笑いを浮かべる。勢いよく破裂した漬け物があちらこちらに、1番最悪だったのは通りかかっていた婦長の頭にキュウリが直撃した事だろう。

しかしながら、ジャンヌちゃんも破裂した漬け物に関してご立腹のご様子で、しなっている大根を片手にワナワナと震えていた。

「…これは、どういう事でしょう？ 説明願えますか？」

「…今、私の頭にこんなのが飛んできたんですけど誰ですか？ こんな投げてきた人は？」

「…あわわわわっ！」

これには刀を抜いたモーさんもワタワタと焦っていた。

般若が二人目の前に、モーさんは蛇に睨まれたカエル状態である。そんな中、漬け物に刀を突き刺した彼らは…。

「先生ー！ デイルムツド君が刀抜けてモーさんに言いましたー！」

「あー！ ずりーぞー！ お前！ それはなしだろ！」

「おい、貴様ら、私の頭上から白菜が降って来たんだが」

「げっ！ 師匠…！」

そして、挙げ句の果てには髪の毛に白菜を乗つけたスカサハ師匠まで出現。

ー刀を抜くだけで大惨事。

刀を抜いたモーさんは涙目になって刀を抱えたまますぐさまカルナの背後に隠れた。だが、この惨事、流石にカルナといえど庇いきれそうに無い。

そこで、皆は顔を見合わせて頷く。そうだ、こういった場合、切り抜ける方法は一つだけ。

思い立ったら行動、それが彼らである。

ベディは般若の表示で迫る美女三人に背後を指差してこう声を上げた。

「あー！ ラ○ユタだー！」

「ん？！」

「え？ ラ○ユタ？ なんですかそれ…」

「どこだどこに…」

そう言つて、後ろを振り返る美女三人。

その隙を突いて、モーさんを抱えてカタツシユ隊員達はすぐさまその場から逃走を試みた。

そして、彼女達が振り返ればその場に彼らの姿はなかった。見事な逃走劇である。

「逃げましたね！」

「あんの馬鹿弟子どもめ！ この私を騙すとは！」

「あ！ リーダーがこけた！」

「走れー！ 振り返るなー！」

「ちよつ!? 僕リーダーなのに見捨てるのはおかしいやろ！」

「尊い犠牲だった…」

だが、メンバーはモーさんを脇に抱えたまま振り返えらずに突っ走っていく。

背後からリーダーの悲鳴が聞こえたような気はしたが、多分気のせいだろう。そう思うことにした。

という事で？ 無事に聖刀、すっぽん沼江を手に入れたモーさんだが、三人から逃げ切ったところでこの刀を改めて見つめ直す。

「ほえー、確かにこりやすげーな」

「でしよー？ まあ、兄イが仕上げしたかんね」

「よせやい！ 照れるじゃん」

「本当に！　ありがとう兄イ！」

そう言つて、照れ臭そうにモーさんに告げるカルナ、そして、そんなカルナにお礼を述べながら嬉しそうに抱きつくモーさん。

まるで本当の兄妹のようだ。しかしながら、ここで肝心な事を思い出す。

そう、刀は確かに抜けた。刀は抜けたのだが…。

「ところでこれってどう使うんだ？」

「だよねー、一応、鞘とかも俺が作つておいたんだけど」

「やっぱ使い方わかんねーとなあ」

「ーとりあえず使い方がわからない。」

両刃剣ならまだしも、日本の伝統の刀となればやはり、使い方も異なってくる。

よくて野菜を切るとか、はたまた肉を切るとかそんな使い方しか思いつかないような気もする。

という事で？

「達人を呼ぶしかないよね、刀の使い方知ってる」

そう、今こそ日本刀ならではの良さをよくわかつている人物に教わらなければ。

よくてこのままでは包丁くらいにしか役に立たない刀になってしまおう、せめて、小次郎さんみたいに竹を刀で伐採できるようにしてほしいところ。

しかし、小次郎さんは人に教えるというよりは独学で燕が切り落とせるようになったとか、それはいささかモーさんにはハードルが高いように思う。

まずは小次郎さんから本格的に教わる前に基礎から教えてくれる師匠を探さなければ。

「というわけで、リーダー良いかな？」

「…なんも良くあらへん、めっちゃ怒られたんやけど…」

「よく丸く収まったね」

こつてり三人からお説教を受けて帰ってきたリーダーを迎え、早速、今回の件の話を振るカルナ。

よくあの怒りが有頂天な彼女達を宥められたものだと感心する。やはり、我らがリー

ダーは器が違った。

——リーダーやからね。

かつこ良くサムズアップするリーダーだが、説教されてるので事実かなりかつこ悪い。前にも旅館で枕投げをすればはじめ怒られた事があつた経験がここでも生きた。

さて、気を取り直して、こうして我らがリーダーとカルナの二人はモーさんに刀の使い方を見せてくれる師匠を求めだん吉へ。

目的地は江戸時代、幕末の日本。

「さて、ついたわけなんですけど」

「ここらへんやないかな?」

話をしながら江戸時代の街を歩く場違いな二人、民家を歩き回りながらある住宅を探していた。

果たしてここに日本刀の使い手、達人はいるのだろうか?

そして、数時間ほど歩き、彼らは目的の住宅を発見。

「あれやないかな？」

「あ、それっぽいね」

そして、いつものようにノックするとにこやかな笑顔を浮かべ、突撃を試みる。

一応の声かけも忘れない。

「あの一、すいませーん」

「はい一、空いてますよー」

「僕ら鉄腕／f a t eという者なんですけど」

そう言いながら、民家の扉を開ける二人。

そこにはにこやかな笑顔を浮かべた色気のある綺麗な髪をした女性が床から起き上がり出迎えてくれた。

そう、これが今回、彼らが訪ねた刀の達人。

「あの一、新撰組一番隊隊長、沖田総司さんですかね？」

「はい！ 私はおっしやる通り沖田総…ゴバア…！」

「あかん！ 死んだー！」

「ちよっ!?!」

沖田総司さん、その人である。

幕末期の人斬りであり、刀の達人、まさに侍。9歳の頃、天然理心流の道場・試衛場
に入門。若くして才能を見せ、塾頭を務めたともされている。

だが、まさか女性だとは思ってもよらなかった。そして、会って3秒で吐血し瀕死に
なっている。

果たしてこんな調子でモーさんに刀の使い方を教える事が出来るのだろうか？

不安が募る中、瀕死の沖田さんを担いだカタツシユ隊員の二人は急いで村の病院に連
れて行く事になった。

その後、チーム医龍によって瀕死の彼女の命はかろうじて救われる事になるのだが、
これはまた別の話である。

今日のY A R I O。

1. 聖剣を石から抜いた衝撃で漬け物が爆発四散。
2. モーさん、刀の指南を受ける事に。
3. 沖田さん大勝利！
4. 僕の名前はシゲベエ（リーダー談）

ついに長岡もエジプトに出来るのかと、一同は興奮気味だ。

ギルガメッシュ師匠は建築の進行具合を彼らに説明しながら現在、必要なものについて話をしはじめる。

「あとは丈夫な丸太が不足していてな」

「丸太ですか、なるほど」

「丈夫な丸太がいるんですね、わかりました」

「用意出来そうか？」

「そりやもう！ 期待しといて下さいよ！ 上質な丸太持つてきますんで！」

「ふっ…、貴様らなら心配はいらぬか、では頼んだぞ」

そして、必要な物資を聞いた彼らはトラックに乗り、それらを補充に回ることになる。

果たして、上質な丸太は手に入れて来れるのだろうか？ ギルガメッシュの要望を受けてベディとデイルムツドの二人は丸太を探しに。

その結果、彼らが見つつけてきた丸太は。

「持つてきました！」

「いやーなかなか上質なマルタだと思えますよ！」
「……何これ」

「……」なんと聖人だった。

ベデイの脇に抱えられた聖人、聖女マルタは状況がわからない今の状況に目をパチクリさせていた。

確かに上質なマルタだが、丸太は丸太でもマルタ違いである。

「……聞くが、貴様らこやつを柱を立てるための支柱にできると思うか？」

「え!? 支柱に使うんですか!？」

「……って言われてますけど」

「いや無理無理!?! あんた達聖女をなんだと思ってるのよ!?!」

当たり前前に無理である。

聖女といえど、何十キロ以上あるであろう石の柱を支えるなんて芸当ができるわけがない。

しかし、何故だろうか、このマルタさんからはやれば出来そうな雰囲気があった。

「なんなのこの状況!? 私の力が必要だって言うから…」

「でも、ドラゴンを殴って大人しくさせたとか自信満々に言ってたじゃないっすかー」
「だから柱も持てる馬鹿力があるってか! そんなわけあるかーっ!」

ベデイの言葉に突っ込みを入れる聖女マルタ。

まさか、彼らがこんな間違いを犯すとは珍し…くもないが、そういうわけで、仕方ないので聖女マルタさんもピラミッド作りに加わってもらおうことに。

ちなみに上質な丸太はメイヴちゃん達トラック班が持つてきてくれた。

やはり、騎乗スキル持ちは仕事ができる。

演歌が流れるトラックからサムズアップしてくるメイヴの笑顔は作業に加わっている皆には眩しかった。

「女トラック乗りってカッケーよなあ」

「クーちゃんの為ならなんのそのよ!」

「だってよりーダー」

「いやあ、流石メイヴちゃんやね」

「へっへーん、てやんでい」

「……大型トラックの運転ならお任せを。」

他にもコンボやクレーン車、建柱車などなんでもござれ、大型車全般ならばなんでも乗りこなしてみせます伊達女。

それが、騎乗スキル持ちのコノートの農業アイドルメイヴちゃんなのである。ちなみに本業はコノートの女王なのでお忘れなく。

さて、そういうわけで滞りなくピラミッド作りは再開。石を積み上げ、空中に浮かせる準備を急がせる。

ローマの建築技術を取り入れた外観は今までのエジプトの建造物よりも鮮やかに、そして、文化的に仕上げられている。

「うむ！　ざっとこんなものだな！　後は余のライブ会場があれば文句なしだ」

「そんなものはピラミッドに必要ありません、それにこれは私のピラミッドなのですよ？」

「良いではないかー、そんな器量だから婿から逃げられるのだ」

「な!? ななななな!! に、逃げられてなどおりません! 保留にされてるだけです!

「フアラオに対して不敬ですよ!」

「余も皇帝だからそんな事は知らぬ」

そう言つて、プイッとニトクリスにそっぽを向いて答えるネロ。

確かにニトクリスもフアラオとはいえどローマを支配した皇帝であるネロとの身分は大差ない。

それどころか実績ではネロの方が上手であるので、思わず言葉に詰まってしまう。だが、ここでカルナは笑顔を浮かべたまま二人に近寄るところ話をしはじめ。

「まあまあ、ライブは俺たちもするからねー、ライブ会場はあつた方が助かるよ」

「えっ…!? お前達も歌うのか!」

「ネロちゃん、俺たちの本業アイドルだよ? アイドル」

「なるほどアイドルはピラミッドも作れて当たり前なのですわね!」

「…それは余も初耳なんだが」

「……アイドルならピラミッドを作れて当然。」

アイドルという仕事は料理ができて、土地の開拓が出来て、橋も建築でき、川も復活させることができ、ピラミッドも作れ、病院も作れ、働く車も運転できるのは当然の事。それに歌って戦って世界を救ったりする事もあるとかないとか。

今や世間はなんでもできるアイドルが一般的なのである。ただ歌うだけでは一流のアイドルにはなれない。

アイドルの卵達が行う合宿でも、彼女達は無人島で木から自分たちが歌うステージ作りを始めるのが一般的だと誰が書いたのかわからない古事記にも書いてある。

「アイドルとはつまり農業から始めるものなんですネ」

「俺たちの場合はバク転からはじめさせられたけどね」

「いやー、あん時は大変だった」

そうやってしみじみ昔を思い出すカタツシユ隊員達、今思えば下積み時代は大変だった。

そんなこんなで、話はまとまり、とりあえず長岡ニトクリスにライブ会場を作ることになった。

空中に浮かぶピラミッドで空中ライブ、これは間違いなく歌声がエジプト中に届くだ

ろう。

「ふーん、アイドルって大変なのね」

「エリちゃんもいざれ分かるようになるよ」

「とうかこの斧、全然使い物にならないんだけど！」

「斧は悪くないよ」

「ふーん斧は悪くないよ。」

さて、いきなり登場し、使っている斧に対して文句を述べているこちらは領主経験者のエリザベート・バートリーちゃん。

彼女もまた、駆け出しのアイドルであり、ヴラドと同じく領主として地域を治めていた経験を持つ経営経験豊富な匠である。

何故、彼女がこの場にいるかという点、簡単に説明すると人手が足りないのがまた連れてきたのである。

というのも？ 最近、病院ができ、ひとの人口もそれなりになってきたカタツシユ村だが、やはり人口が多くなればお役所仕事も増える。

そんな中、人を纏める人材が必要という事で今回、エリザちゃんを連れてきた。

ちなみにカタツシユ村にはフランスから処刑されそうになったアイドル、マリーアン
トワネットちゃんもなんと0円でベデイ達が回収済みである。

彼女達はまだまだアイドルの卵、これから伸びるであろう貴重な人材達である。

「まさか俺たち以外にもアイドルが居たなんてね」

「だねー」

「斧はね、こうして使うと刃が入って…」

「…すぐ…勉強になるわ…」

そう言って、カルナの斧の使い方に感心するエリザちゃん。

斧は使い手次第で非常に変わってくる、その事を身に染みて感じた、まだまだトップ
アイドルには程遠い事を痛感させられる。

というよりアイドルという職業を完全に履き違えているが、誰もその事について突っ
込まないこの状況は異常だという事を誰か認識してほしいところである。

「という事は私もアイドルになれるという事だな」

「スカサハ師匠、今朝なんか悪いものでも食べましたか？」

「いやー、師匠は…というか若い娘に混じって短いスカートとか履いて歌えます?」
「おい、お前達、私に喧嘩を売っているのか」

「……年齢がネック。」

流石に血迷った事を口走りはじめるスカサハ師匠にオブラートに包みながら話すカタツシユ隊員達だが、スカサハ師匠はどうやらそれを聞いてご立腹の様子。

それはそうだろう、スカサハ師匠もまだまだスタイル抜群の美人、声も綺麗で需要はある筈。というのは本人談である。

アイドルの格好をしたスカサハ師匠を見てみたい気もするが、ここは流石に止めるべきだろうか。

と、ここでリーダーが。

「いや、いけるやろ、僕らもおっさんやけどアイドルやっとするし」

「うん、確かにそうだね」

「スカサハ師匠、声綺麗だしね」

「…しげちゃん…」

そう言つて、スカサハ師匠に優しいフォローを入れてあげた。

それはそうだが、見た目はバリバリの現役でやれる、ならば年齢など関係ない。というより彼女もすでにカタツシユ隊員なのでアイドルのようなものである。

リーダーをはじめとした皆から大丈夫だと言われて思わず嬉しそうに笑顔を溢すスカサハ師匠。

だが、これを聞いていたモーさんは。

「いやキツイだろ、年齢的に」

地雷を思いつきりぶち抜いていった。

皆が敢えて、スカサハ師匠をその気にさせているにもかかわらずこれである、これはスカサハ師匠も満面の笑みを浮かべながらモーさんの頭を片手でひっ擱んだ。

「いつペン、死んでみる?」

「あだだだだだだ!?! ちょよ! まっ!?! ごめんなさい!! スカサハ師匠は若くて可愛いですっ!」

スカサハ師匠のアイアンクローに悲鳴をあげるモーさん、だが、笑みを浮かべているスカサハ師匠の眼光はギリりと光っていた。

若いからといって調子に乗るなよと、そう言わんばかりの力加減だった、現にモーさんの頭からギシギシ何か軋む音が聞こえてきたのだからもはや恐怖である。

しばらくして、モーさんを手放したスカサハ師匠はいじけたようにしゅんとしながら屈み地面に文字を書きながらこんな事を言っていた。

「…若いし、いけるし」

「スカサハ師匠、心配せんでもいけるで？ 僕もそう思うよ？」

「そうだよ、俺たちと違って師匠バリバリ踊れるじゃん！」

「俺たちなんて楽器弾いて歌ってるだけだから！ そしてたまに本番で歌詞間違えるし！」

「歌うのも最近、俺たち稀だしね」

そう言って、いじけるスカサハ師匠をフォローするカタツシユ隊員達。

「……みんな暖かい。」

しかし、フオローの仕方が何というかがアイドルがそれでいいのかと言いたくなるようなフオローの仕方である。

これも彼らならではのやり方なのだろう、やはりベテランは年季が違う。

という事で、落ち込んだ師匠を励ましたところで、ため息をついたエリちゃんがポツリと呟いた。

「アイドルって大変なのね」

さて、ピラミッド作りもいよいよ完全間近。

新たなカタツシユメンバーを加え、この先、どのような挑戦が彼らを待ち構えているのか！

この続きは！ 次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

1. エジプトにライブ会場ができる。

2. アイドルの定義がおかしい。
3. 騎乗スキル持ち大募集中。
4. 丸太とマルタを間違える。

トラベリングマン

ピラミッド長岡が完成した。

期間は半年以上を有し、高さは147メートル、底部の一辺の長さが230メートルの超巨大ピラミッド。

さらに、バビロンの空中庭園の技術により、地面から浮かんだそれは壮大な光景。

ピラミッドの中の一部からはギルガメッシュ王が考案した水上建築の技術が用いられ、まるで、ピラミッドから滝が流れ出ているかのような錯覚さえ感じられる。

さらに、外観はローマン・コンクリートをふんだんに使い、ローマの皇帝、ネロが直々に監督した文化的で美しい外観。

これがエジプト県が誇る文化遺産確定建築物長岡である。

「絶景かな絶景かな」

「小次郎さんもそう思いますか」

「いやはや、トラックでエジプトを何往復した甲斐があつたというものだ」

「助かりましたよ、ほんと」

まさに、この光景を見るためだけに今まで頑張ってきた甲斐があるというもの。当然、ピラミッドにはライブ会場まで取り付けてあるので、空中でのライブも可能。さらにピラミッドも移動式という優れものだ。

——もはや墓ではない。

墓という名の何かである。独創的な建物に仕上がってしまった。だが、彼らからピラミッドを作ってもらったニトクリスはというと？

「これが私のピラミッドなのですわ！ わー！ なんとという素晴らしい外観なんですよー！」

「…なんかもう違う建築物な気もせんでも無いが」

「何を言っているのですか！ オジマンディアス様！ あれこそは私の長岡ですよー！」

「そうか、それなら良いのだ。それならな」

そう言つて、ぴよんこぴよんこと耳を跳ねらせ興奮するニトクリスの頭をポンポンと撫でてあげるオジマンディアス。

何というかエジプトの領地にまたとんでもないものが出来たとオジマンディアスは思う。

世界の技術を取り入れた最先端のピラミッド。というかピラミッドという名の何か。

「いやー、大変だったね、ピラミッド作り」

「みんなのおかげで完成ですよ」

「さあ、今日はパアーツと騒ぎましょう！」

そう言つて、にこやかな笑顔で皆に告げる棟梁カルナ。

完成した長岡の前で歓喜に沸く建築に関わつてもらつた人達。彼らもよく頑張つてくれた。

アルジュナも感極まり涙を流している中、カルナは嬉しそうに彼と肩を組んで笑顔で浮かべる。

「カルナ…、私は今猛烈に感動している。お前から教わつた建築の知恵がこんな風に形

「なって……」

「わかる、わかるよー、その気持ち、俺も最初はそんな感じだったからさ」

自身が初めて建てた建築物がこれほど素晴らしい物というだけで、胸が熱くなる。

棟梁カルナはアルジュナの気持ちがよくわかった。こうして、出来上がった建築物は何世代にも渡りきつと語り継がれる事だろう。

破壊されそうになっても上に逃げれる仕様であるし、綺麗な形のまま残っていくに違いない。

建築の奥深さを皆、肌で感じられたような気がした。

という事で？

「久々に本業やりますかステージもあるわけですし」

「半年ぶりかー、マジで歌ってなかったからね俺ら」

「いやはや、思いのほか長かったですな」

「ですなー」

お手製のステージがピラミッドに設置してあるのでライブをさせていただく事に。

長岡完成を祝う宴会の席でそれぞれ歌や芸を披露するという事になった。発案者は当然、ギルガメツシユとオジマンディアスの二人である

エリちゃんやネロちゃんはやる気満々のご様子でリハーサルしてくると、意気揚々と練習をしに。

そして、こちらでは？

「私も…ですか？」

「はい、ジャンヌさんとマルタさんの二人で聖女ユニットを組んでもらえたらと思います」

「えーと、それは…」

「メイヴさんもスカサハさんと共に出演するみたいなので是非」

なんと、ジャンヌちゃんとマルタさんにADフィンから歌わないかというオファーが。

というのも、今宵限りのお祭りで宴会芸で歌うだけ、こればかりは楽しんでおこうという事で二人は承諾してくれた。

Y A R I O 達のメドレーでもよかったのだが、やはり、華がなければという彼らなり

の心遣いである。

やはり、皆が楽しめてこそその宴会だ。

という事で賑やかな祭りの最中、派手な登場と共に歌姫達がY A R R I Oと共にライブを彩る事に。

可愛い、もしくはカッコいい衣装と共に彼女達の歌が皆に届く。

一部、例外があったがこれはこれで盛り上がりを見せていた。

「~~~~~♪」

特に意外だったのはモーさんが歌が上手いということだろう、本人もノリノリであった。

このライブにはなんとエジプトの至る所から商人や住民が駆けつけ、膨大な興行利益を生む事に。

この時代にはCDなどの技術が未発展なのが悔やまれるところであるが…。

「ボエ~~~~~♪」

同時に無くて良かったという事もある。

そんな具合で祭りが進行する中、舞台裏ではY A R I Oのメンバーが楽器の調整を行なっていた。

こんな風に本格的に歌う機会はそうそうない、ツアーをする時のように気を引き締めてライブをしなければ。

さて、前座という形ではあるものの、歌姫達の歌が歌い終わり、いよいよ、彼らが歌う時が近づいてきた。

久方ぶりのライブ、それも半年ぶりである。

「さて、じゃ、いきますか」

「じゃあー!」

ギター、ベース、ドラム、キーボード。

彼らはそれぞれ自分の持ち場につくと演奏する構えを見せる。そして、ある程度音量を調節したところでベディがルーン魔術を施したマイクを握りしめた。

そして、デイルムツドのドラムに合わせ、カルナがベースを弾き始めると、それに続くようにギターを持つリーダーも指を動かす。

さらに、ベデイが歌を歌いはじめた事で宴会はより盛り上がりを見せた。

「願うのなら〜♪」

厳しい事もあつた。挫折そうになりそうにも間違えた事もあつた。

それを乗り越えて今がある、そう、みんなに伝えたい。

時には壁にぶつかる事もあるかもしれないが、そんな時はふと思ひ出して欲しい、常に困難に挑戦するアイドルがいるという事に。

――渡り歩くこの世界は時に厳しいけど。

彼らにはまだまだ知らない世界がある。

だけど、旅をして、仲間を集め、村を作り、そして、これからも彼らの道は続いていく。彼らがY A R I Oであり、旅人である限り。

自分たちが訪れた事で人々の中で夢が生まれ、ほんの少しでも強くなつて貰えたら。彼らのライブを聞いていた観客からは拍手とアンコールが巻き起こる。

「…凄い…これが本物のアイドル」
「うむ、…さすがだな」

そう言つて、彼らの曲に感心するように声をこぼす二人。

たしかに歌詞はたまに間違えるが、それでも、ベデイの声、カルナやヴラドのハモリ、そして、リーダーの裏声などは聞いていて痺れる。

それはやはり、人々の事を思つて歌を伝えようとして歌っているからだろう。

自己満足ではない、歌を歌うこと、農業をする事で人々の力になりたい、そんな、心情が身体に伝わってくる。

それから、彼らのライブはメドレーのように次々と曲を歌いながら進行していった。

合いの手はもちろんの事ながら、ステージにいる五人全員が一体になつているような気がした。

しばらくして、ライブも終わり全員裏に引つ込んだところでようやくやくひと段落。

久方ぶりの本業、流石に彼らも緊張したのか胸を撫で下ろしている。

それからしばらくして、ベディが舌を出してこんな事を言いはじめた。

「やっべー！ また歌詞間違えちった！」

「てかりーダーまた声裏返ってたし！」

「え!?! ほんまに!?! うそやん！」

「もー、この人達は本当にー、もーさん達やジャンヌちゃん達の方が上手かったじゃんか」

「め、面目ない」

駄目だしに次ぐ駄目だし、本業を最近してなかったのでブランクはあるものの、これには全員苦笑いをして反省するしかなかった。

今回は即席で作った曲を歌ってくれたスカサハ達が盛り上げてくれたおかげでライブが上手くいつてよかったと感謝するばかりである。

と、ここで、彼らの歌を聞いていたもーさん達がやってくる。

「やっぱり上手いなー、兄ィ達歌うの！」

「ありがとうー、けど主に歌ってるのベディだけだけどね」

「兄イのハモリカツコ良かった！ 色っぽいって言うのかな！ ああいうの！」

そう言つて、満面の笑みを浮かべるモーさん。

こうやつて来る彼女を見てると本当に和む、以前の彼女なら到底考えられない姿だろう。

すると、リーダーも自身を人差し指で指差しながらモーさんにこう問いかけはじめた

「あ、僕は僕は？」

「しげちゃんはまた裏返つてただろう」

「うげえ!? やつぱりバレとつたんかー」

話を聞いていたスカサハ師匠からのダメ出し。

小綺麗なステージ衣装を着ているスカサハ師匠は新鮮だが、大人の色気に満ち溢れていた。

スカサハの隣にいるメイヴは露出が多いが、大胆でカッコいい衣装を着ており、同じ妖艶さを全体に押し出している。非常に動きやすそうだ。

ちなみにY A R I Oのメンバーはなんと農作業着、お洒落もへつたくれもあつたもん

じゃない。

しかしながら、しっくりはまっていてステージにその格好のまま居ても違和感がなかったのは流石だとしか言いようがない。

こうして、夜は更けていく。

エジプトでの建築を終えたカタツシユ隊員達。

楽しい宴の時は過ぎ、ピラミッド作りで知り合った新たな師匠達とのお別れの時は近づいていた。

果たして、次はどんな地に向かうのか？ 彼らの挑戦はこれからも続いていく。

今日のY A R I O。

1. 久しぶりの本業。
2. モーさん達のアイドルデビュー。
3. Y A R I O、本番で歌詞を間違える。
4. 世界最古のライブフェスが行われる。

5. ピラミッドという名の何かができる。

伝説の豚骨ラーメン その1

さて、前回エジプトに出来上がった長岡。

完成を祝って行われた宴会も無事に終わり、カタツシユ隊員達はエジプトにいるオジマンディアス達と別れる事に。

「これがエジプトで取れた最高級の小麦だ」

「ありがとうございます！」

「我からはバビロニアが誇る一番良い小麦を仕入れておいた」

「おお!？」

そして、王様二人からはなんとここで伝説のラーメン作りに必要な小麦を贈呈された。

ピラミッド作りを通して築き上げた絆。特にオジマンディアスとギルガメツシユは同盟を組むほどの仲にまでになった。

このお二人から頂いた最古の小麦のおかげで彼らはまた伝説のラーメンに近づくことができる。

古代から伝わる小麦の原点。世界最古、最上級の高級小麦が二つ、つまり、これは…。

「組み合わせさせて使えば、絶対すげー良い麺ができるよ」

「いやー楽しみだね」

麺にして組み合わせることですらなる高級食材に。

そう、どれが1番などではない。小麦を組み合わせることにより歯ごたえがあり食べやすい麺に仕上げる事ができるのだ。

エジプトとバビロニアの力が融合したこれなら、きつと満足いくラーメンの麺が出来上がるに違いない。

———深みがある魔猪の豚骨スープに…。

さらに、かぐや姫が使っていた竹のメンマ、そして、熟成された味わい深い魔猪のチャーシューと豚骨スープに深みを増す霊草の出汁。

これにバビロニアとエジプトで取れた小麦で作った麺を加えれば、絶対に美味しい。

「元は取れないね、これ絶対」

「元取る気無いよねというより」

「店を出したら店が吹っ飛んじやうよきつと」

「——元が取れないのは当たり前の話。

というより、これの元を取るとしたらそれこそ何千兆円積まれてもなんらおかしくな
いラーメンである。

これが出来上がったら、また、ギルガメッシュ師匠とオジマン師匠をはじめとした職
人達に食していただきたいところ。

だが、これだけではまだ物足りない気もするが…。

「うーん、なんかねー、こうパンチが足りない気がしてさ」

「それならカタツシユ村で採れた野菜とかの旨味を閉じ込めたスープを使おうよ」

「おお、いいね！ それ！ ジャンヌちゃんとかエミヤンとか喜ぶと思うよ！」

それなら、カタツシユ村で取れた新鮮な野菜のスープを用いれば良い。

英雄や聖女が愛を込めて育てた野菜なら、きつとこれらの食材達とマッチしてくれる筈だ。

というわけで、二つの小麦はとりあえず頂いておく事に。

こうして、カタツシユ隊員達はアルジュナ達建築班、メイヴ達運送班を連れて一度カタツシユ村に戻る事に。

ラーメン作りに必要な材料はあらかじめ準備できた。なので、ここからは、伝説の豚骨ラーメンの製作にいいよ取り掛かる。

「いやあ、長かったですな」

「ここまで集めるの大変だったよね」

長かった伝説のラーメン作り。

まずは、材料からだが、水はブリテンにいる湖の乙女に頼み、その湖の中でも澄んだ綺麗な水を大量に仕入れ頂いた。

この水が基本的なとんこつラーメン作りの土台となる。

それを使い、聖女達がカタツシユ村で作った野菜の出汁、そして、霊草で取った出汁

を合わせる事で深みとコクがあるスープに。

豚骨スープのベースになる熟成させた魔猪。

さらにチャーシューには同じく味を壊さぬように熟成させた魔猪の肉を用いる。

薬味だが、かぐや姫が生まれた時の竹をそのままメンマに変える。

ラーメンの麺にはエジプトとバビロニアで手に入れた小麦を合わせ、細く歯ごたえのある麺に仕上げた。

それから、海苔にした霊草をアクセントにして、そこに、あの伝説の魔法使い、マールン師匠が手塩にかけて育てた鶏の卵で作ったゆで卵もお好みで加えてもよし。

今回使われている二つの小麦は素麺のような白っぽく細い、極細ストレート麺にした。

麺が細い理由は、麺とスープがよく絡むようにするため、これは以前から言っていたが、博多ラーメンをモデルとしたとんこつラーメンなのだ。

早速、その煮込んだスープを少量、器に乗せて味見してみる。そのお味は？

「おー…やばい、これは美味いわ」

「えー！ 俺も吸ってみていい？」

「わ、私もよろしいでしょうか？」

「いいよー、はい、お二人さん」

そう言つて、鍋を煮込んでいるデイルムツドは二人に出来上がったとんこつスープを小さな器に入れて差し出してあげる。

差し出されたそれを見て顔を見合わせるモーさんとジャンヌの二人。その顔からしてこのスープに対しての期待値は高いと見える。

それを恐る恐る口に近づける二人、そして、そのスープを口に入れると？

「…ああ、…天に召されそうです」

「…うめえ!! デイル兄ィ! これすつごく美味しいよ! …ヤベエ涙が出てきた…」

「あははは、スープは上々って感じだな」

大絶賛だった。

当然ながら、このラーメン作りに関わっているカタツシユ村の人達にもまだスープの段階だが、試食してもらおう事に。

野菜をジャンヌ達と一心不乱に育てていた食の大ベテランのエミヤさんもこのラーメンスープには当然ながら太鼓判を押しした。

「この味わい深さ、そして、コクのある舌触りに天にも登るような衝撃。ああ……そうだ、そうだな……俺はもう答えを得たんだ……」

むしろ、このラーメンの出汁の完成度と味わいに大号泣していた。

「……自然と思いと涙が出て来る味。」

飢餓一歩手前でご飯を食べるとあまりの美味しさに涙が止まらなくなるという話がある。

このスープはそんな感情が溢れ出てしまうような味わい深さ、そして、人を悟らせてしまうような衝撃があるスープに仕上がってしまったのである。

あとはこれに麺を入れて、薬味やさまざまな具材を乗つけていけば完成。

世界最古の伝説の豚骨ラーメンである。

早速、皆を呼んで試食。

味わい深くコクがあり、さらに食べやすい。

麺とスープが絡み合う事で、その味は舌を離れなくなってしまうほどの衝撃と歓喜に

沸く。

YARRIOの五人を除いた食べたほとんどの隊員達はあまりの美味しさに涙を流さずには得られなかった。

「美味い……こんな天に昇るような美味しいものが……あるなんて」

「余は正直、これほどのものを食べたことがない。これぞ芸術!!ローマだ!」

カタツシユ隊員達から大絶賛のラーメン。

だが、これを作ったリーダー達はどこか首を捻っていた。なんだか物足りなさを感じているのだろうか？

「美味いけどねえ、なんか足んないよね」

「あー、わかる、なんかね。なんだろう?」

「とんこつラーメンは奥が深いからなあ」

そう言うと、五人はもう一度、ラーメンのスープを作った鍋の元に集まり、何が足りないのかを真剣に考え始める。

今のままで、ギルガメッシュやオジマンディアス達は納得してくれる味には仕上がっているのだろう。

だが、まだ、このスープは化けそうな気がした。何か別のものが足りない気がする。

「あ、そうか、調味料だ」

「胡椒とか？」

「そう！ それ！」

「いや、違うな鶏骨と魚だろ」

「うん、僕もカルナと同じ意見やね」

「……鶏骨と海産物が足りていない。

スープは出来たが、さらに化けさせるにはこれらの食材を仕入れてくる必要がある。

まだまだラーメンは未完成、これらを加えてさらに深み味わいが増せば、しっかりとした完成品を彼らに提供できる。

「鯉、取り行くか」

「それじゃ漁船いるよね？」

「漁船つてどのレベルから作るの？ やっぱり木から？」

という話になり。

昔ながらの漁船を作る事になった一同はとりあえずその船造りについて、学ぶべくまただん吉で世界を越える事になった。

旧約聖書の『創世記』に登場する、大洪水にまつわる、方舟物語がある。

皆さまはご存知の方もいらっしやるかもしれない。

神は地上に増えた人々の墮落を見て、これを洪水で滅ぼすと「神と共に歩んだ正しい人」であった男性に告げ、神は箱舟の建設を命じた。

その時代に飛んだ彼らはその箱舟作りの達人である男性に漁船作りを学ぼうと今回やってきたのである。

「いやーまた随分、大昔にやってきましたね」

「では早速参りましょうか」

箱舟作りを学べば今後役立つことは間違いない。

山城作りも、実はカタツシユ村でなく島で作ろうという案がカタツシユ隊員達の中で浮上しており、これから先、今回彼らが作ろうとしている漁船が島へと渡る為に必要になつてくる。

「こんにちはー！ 僕ら鉄腕／f a t eという企画で今回、船作りを学びに来たんすけどー」

「ん？」

「あ、貴方がノアさんですか？ 実は僕らY A R I Oというものでして」

こうして、彼らはいつものように交渉に入る。

大洪水と戦う為、船作りに一人で立ち上がったノアさんの力になり、さらに、船作りの奥深さを学べたらという思いが彼らを突き動かしていた。

さて、今回、彼らが挑戦する箱舟作りだが、長さ300キュビト、幅50キュビト、高さ30キュビトとこれまた馬鹿でかい箱舟を作り上げないといけない。

「いやー、大変つすね」

「神様の啓示じゃからな、ワシも歳じゃがそれに応えなければならんのだ」

「なら、俺たちも協力しますよ！ ついこの間まで同じくらいでかい墓作ってたんで！」
「というよりあれ墓じゃないよね」

巨大なピラミッド作りができたのだ。船作りくらいどうって事はない。

というわけで、ラーメン作りに必要な海産物を取るための漁船作りのために船作りの達人であるノアさんの箱舟作りを教えて頂く事に。

というわけで、今回、新たにカタツシユ隊員達が挑戦する企画がこちら！

ザ！ 鉄腕／f a t e！ Y A R I Oは巨大な箱舟を作り上げることができるとか？

例え洪水が来ても大丈夫な箱舟を作り上げなければ、そうと決まれば話は早い。彼らはすぐさま作業に取りかかり始める。

船大工歴数十年の大ベテランの彼らだが、この箱舟作りを通して船作りの匠であるノアさんに学ぶことはたくさんあるだろう。

とはいえ、ラーメン作りからこうして漁船作りが始まり、彼らのやる気もますます上がる。

果たして、超巨大な箱舟を彼らは作り上げることができるのだろうか？

今日のYARIO。

1. 新企画漁船作りスタート。
2. ノアさんに箱舟作りを学ぶ。
3. ラーメンの未完成品ができる。
4. 妥協しないYARIO。
5. 世界最古の豚骨ラーメン（試作品）ができる。

裏番外編 医龍 team medical Drag
on

ここはカタツシユ村病院。

現在、この病院で心臓に病気を抱えたある少女が居た。

ロンドンからジャック達と共にストリートチルドレンになっていたところをベディから連れて来られた子供である。

お金もなく、貧しい生活を送っていた彼女は心臓に大きな病気があり、現在はカタツシユ村の病院の病室で療養を強いられていた。

「…拡張型心筋症か」

「知っているのですか？ 朝田先生」

「まあな、このヴァンのカルテを見てわかったが…これはまた厄介な症状だ」

朝田はそう言って、ナイチンゲールにカルテをすつと差し出す。

拡張型心筋症とは、心筋の細胞の性質が変わって、とくに心室の壁が薄く伸び、心臓内部の空間が大きくなる病気。

その結果、左心室の壁が伸びて血液をうまく送り出せなくなり、うつ血性心不全を起す。

左心室の血液を送り出す力は、心臓の壁が薄く伸びるほど弱まるので、心筋の伸びの程度で重症度が決まっている。拡張型心筋症の5年までの生存率は76%だが、突然死の発生もまれではない。

今回のケースは。

「…劣悪な環境下、それも、ロンドンでのストリートチルドレンなら、なおさら不健康な生活を強いられていた筈だ。体の負担を考えれば体力的にも長期の手術は厳しいだろうな」

「…ッ！ …では、あの娘を助けるには…」

「相応のリスクがある」

朝田はまっすぐにカルテを見つめたままナイチンゲールに言い切った。

このままでは、さらに病状が悪化する一方なのは間違いない、それに、ストリートチルドレンで過ごした彼女の身体を考えれば本来より短い期間で危険な状態になり得る。

そんな中、カタツシユ村病院の窓から中庭を覗く朝田。

そこに居たのは、そんな心臓に爆弾を抱えた少女に寄り添うように白衣を着て車椅子に座る彼女の隣に腰掛けて座るジャックの姿だった。

彼女の仲間であり、そして、同じように捨てられたストリートチルドレンの一人。

ジャックは彼女を含めた子供達を大事にしており、自分の身体の一部だと彼らに話をしていた。

「ねえ…、やつぱり痛む？」

「…うん、ちよつとだけね？」

そう言って、作り笑いを浮かべる少女。

苦しそうな事はジャックにも理解できていた。

自分達をあのおんどんからこのカタツシユ村に連れてきてくれたカタツシユ隊員達のおかげでこうしてようやく自分達が安心して過ごせる安息の地を得たというのにこれではあまりに救われない。

「ねえ、ジャックちゃんも先生なの？」

「うん、私も一応外科手術できるから」

「えー！ 私と同じくらいなのに！ 凄いね！」

「そんな事ないよ、解体は得意だけど」

「かいたい？」

「うん！ 解体っていうのはね…えーと」

そう言つて、解体の説明について考えるジャック。

正直、この娘に人を殺して人間の身体を解体するのが得意なんて事は言い切る事は得策ではない。

外科的な考えなら、ここは患者を考えてとりあえず、ジャックは幼いながら考えた答えを語り始める。

「おつきなお魚とか！ あと家とか！」

「へえ！ そうなんだ！ すごーい！」

朝田先生とナイチンゲールから念を押しして悪影響にならない事を言わないようにと告げられているのでジャックはとりあえずカタツシユ隊員を思い出しながら、目の前の娘にそう告げた。

そうして、他愛の無い話をしながら二人はロンドンでの出来事などを思い出しつつ互いに語り合い笑い合う。

それを窓から見ていた朝田はふと笑みが溢れでていた。

あの娘の置かれていた環境下も知っているし、壮絶な生い立ちも把握している。

だから、なおのこと、心臓のバチスタ手術は無理だと突っぱねる事は到底彼には考えることはできなかつた。

「婦長、確かに今回の手術はかなり高難易度の心臓手術だ。俺一人では難しい」

「…そう…ですか」

「だが」

そう言って、言葉を区切る朝田龍太郎。

彼の頭には患者を諦めるなどという言葉は存在しない。確かにバチスタ手術を施すのは一人では難しいだろう。

だが、仲間がいれば。

「俺たちなら、Team Medical Dragonなら必ず成功できる」

「!? それじゃ…!」

「明後日、彼女のバチスタ手術は…俺が執刀する」

その目には覚悟があつた。

たとえ、金がなくとも、困難な手術であろうとも助けられる幼い命が目の前にある。ならば、朝田が執刀しない理由など存在しなかつた。

パラケルススは医療品の開発をしながらその話をナイチンゲールと朝田から聞いた。

「そうか、朝田が執刀するのか…」

「ええ、明日は私が第1助手に。ジャックが第2助手を務めるわ」

「それで…麻酔医は」

「お前に頼めないか? パラケルスス、お前の力が必要だ。頼む」

そう言って、医薬品開発に取り組んでいるパラケルススに真剣な眼差しで告げる朝

田。

優秀な麻酔医がいなければ、この手術の成功はいくら朝田が優秀な外科医でも困難だ。だからこそ、こうしてパラケルススの協力を仰ぐ必要があった。

しかし、パラケルススは医薬品開発を進めている。これを滞らせるのは彼にも医薬品を待ちわびてる人にも申し訳がない。

「team Dragonにはお前の力が必要不可欠だ」

「…朝田」

「目の前にある幼い命が無くなるかもしれない。それを俺は見過ごすことはできない」
「…しかし」

正直、バチスタ手術はこの時代ではじめての試み。

もしかしたら失敗する可能性だってある。チームを組んだばかりでいくら英雄たちが組んだバチスタチームであつてもこれはハードルが高い手術になるのは明白だ。

「オペが怖いのはお前だけじゃない。命を前に怯えない奴はいない。だけど俺達はチームなんだ、一人では無理でもお前の後ろには仲間がいる。お前は一人じゃない」

「……………」

「だから…」

「いや、もう大丈夫だ。わかった、明日は私も立ち会おう」

「!?…ありがとう助かる」

そう言つて、頭を下げてお礼を述べる朝田。

こうして、チームドラゴンのメンバーは揃つた。まだ四人だが、明日はこの四人で彼女を執刀する事に。

優秀な麻酔医がいるだけで、手術の質はガラリと変わる。

————不安が募る夜。

静けさが漂うカタツシユ村の病院。その病院の屋上で朝田は一人、パラケルススの診断したカルテを見ながら明日の手術の予習を行なつていた。

少女を救いたい気持ちは皆が同じ。

上を脱ぎ、肌を露出させた朝田の上半身からは湯気が立ち上る。そして、背中には昇り龍のような火傷があつた。

手術前夜に、白衣を着たジャックは執刀する彼女の部屋を訪れた。

彼女の手は震えていた。明日、執刀し身体を割いて心臓を手術するわけだが、怖いのは当たり前。

特にこの地ではじめてのバチスタ手術ということもあり、一人で病室にいる幼い彼女には耐えがたい孤独との戦いであつた。

「…眠れない？」

「うん…。みんなお見舞いに来てくれたけどやっぱり明日が不安で」

「…そっか、でも安心して、明日は一人で戦うわけじゃない」

そう言つて、ジャックは彼女の手にとつと自身の手を添えてにこやかな笑顔を浮かべて告げる。

執刀にはジャックも立ち会う、だからこそ、彼女は一人で戦うわけじゃない。ジャックは優しく彼女の頭を抱きしめて撫でながらこう告げた。

「貴女には私達がついてる。だから、安心して」

「…ッ！ うん！」

そう言って、力強く頷く少女。

ジャックの心強い後押しに彼女からも生きたいと言う意思が感じられる。

それから翌日、いよいよバチスタ手術の執刀の時。

「それじゃ行くぞ」

白衣を着た四人の医師たちが患者が待つ手術室へ向かい歩み始める。

古代のブリテンの地でTeam Medical Dragonが始動する。

果たして、ブリテンでのバチスタ手術は成功させることができるのだろうか？

小さな少女の命は彼らの手に委ねられた。

「よくて、手術ができる時間は2時間。その間に終わらさなくてはいけない、朝田、どんな手術をするつもりなんだ？」

照らし出される少女の身体を見つめ、問いかけるパラケルスス。

しかし、朝田の目には既に彼女を救う手立て、光明が見えていた。

そして、その手立てとは。

「オーバーラッピング方式を使う」

「オーバーラッピングだとツ！ バカな！ それだと2時間ではとても終わらせられんぞー」

「それじゃこの娘の心臓が…」

そう言って、朝田が提案する手術のやり方について異議を唱えるナイチンゲールとパラケルススの二人。

とてもじゃないが、設備が揃い切つていると言い難いこの状況下でオーバーラッピングは流石に無茶が過ぎる。

オーバーラッピング方式は心臓の左室を回転楕円体に近い形態に保つように工夫された術式である。

左室切開部自由壁外側と、心室中隔の健常部と梗塞部の境界を直接縫合閉鎖するが、その際に楕円形サイザーを用いて心室を楕円形化しつつ縫着する。

本術式はパッチを用いずに心室の形態が楕円になるように直接閉鎖するため、人工物を使用しない

朝田は変わらぬ眼差しで彼らにこう告げ始めた。

「俺なら40分で終わらせる」

「40分…っ!? 馬鹿な!」

「しっかりついてこい、メス」

こうして朝田主導の手術が幕を開けた。

その技はまさに神業、あつという間に切開を済ませると切除、接合などの作業を最短で最速に終わらせていく。

その手には迷いなどはなく、彼女の命を救う為に極限にまで研ぎ澄まされた集中力が如何なく発揮されていた。

御仏がいるとするなら、この手腕の事を言うのだろう。

「は…早い! まだ10分程度で…っ!」

そうしているうちに更に朝田の手術スピードはテンポアップする。

早い手捌きに目を丸くするパラケルススにナイチンゲール。

そうこうしているうちに手術はあつという間に完了してしまった。まさに早業、本来なら数倍以上時間を有する手術をこの男は40分足らずで終わらせてしまったのである。

「手術、完了」

「ありえない……」

後に、この手術の噂はカタツシユ村を越え、ブリテン国内に留まらずローマ、ギリシャ、フランスなどの諸国から注目されるようになる。

これが、朝田龍太郎と呼ばれる男とブリテンが誇る最新鋭の医療バチスタチームteam medical Dragonを知らしめるきっかけとなるのだった。

そして…。

「朝田先生！ 急患です！ 呼吸困難に陥った女性患者が！」

「今手術が終わったばかりだぞ！」

「わかった、行こう」

彼らは手術が終了して間もないというのに、担ぎ込まれた、桜色掛かった色彩の髪をした急患の対応に彼らはすぐに追われる事になった。

なんと、これが新撰組の沖田総司という衝撃の真実を彼らが知る事になるのはまた別の話である。

そして、沖田さんはそこから1ヶ月ほどカタツシユ村病院に入院する事になるのだった。

方舟造り その1

ノアの箱舟作り。

聖書に書かれているノアの方舟の話では洪水は40日40夜続き、地上に生きていたものを滅ぼしつくした。水は150日の間、地上で勢いを失わなかったとされる。

すなわち、今回の方舟作りではこの洪水に耐えられる丈夫で頑丈な船を彼らは作らねばならないわけだ。

「洪水つてえらいこつちやだね」

「せやなあ」

「うーん不安だねー」

そう言って、スリスリと方舟に使う木材をさするベデイ。

だん吉に乗ってエミヤンやアルジュナ達が手伝いに来てるものの、やはり不安は拭えない。

そいで……!

「やっぱりさ、木だよ木」

「心当たりあるん? 方舟はゴフェルの木使うつもりやったんやけど」

「いやー、どうせならもつと丈夫なやつ使おうよ」

なんと、この洪水を乗り越えられるだろう木材にカルナには心当たりがあった!

というのも? この方舟作りをする数ヶ月前から準備を行っていたのだが、ここで、カルナは北欧神話にてある木材に目をつけていた。

それはユグドラシルと呼ばれる世界樹。

ユグドラシルは世界を体現する巨大な木であり、アースガルズ、ミズガルズ、ヨトウンヘイム、ヘルヘイムなどの九つの世界を内包する存在とされている。

これを……

「この木材なら行けると思う、だって世界樹だぜ? 世界樹!」

「すげーよな」

「船に使ったらぜってー沈まないもん」

ノアの方舟に使えば、きつとすぐ丈夫な船に仕上がるに違いない。

だが、まるごと世界樹を伐採しては大ごとになるので世界樹の一部を頂いて、この船の木材として使用させてもらう事に。

そんな馬鹿でかい木を伐採しては環境にも影響が出てしまう。それは、東京湾や幾多の川を復活させてきた彼らの本意ではない。

後にこのユグドラシルを使ったノアの方舟と呼ばれる船は魔術師ユグドミレニアのシンボルマークとされ。

これを作ったY A R I Oに敬意を表すために定期的にマグロを捕まえるための遠洋漁業に繰り出すという謎の伝統が家系で継承されていく事になるのだが、それはまた別の話である。

船をつくる職人として知られる船大工。

金属などの材料がなかった時代に昔ながらの職人達によってつくられた木造船には、驚くような技術が秘められている。

というわけで、では早速、舟作りの話に入るとしよう。今回もまたマーリン師匠から

（説明が。

「船作りの話をしよう。まずは船型を決めていくところから始まるんだね。船型は搭載量、最高速度、安全性に影響する最も重要な要素でもある。商船は大量の荷物を安価に運ぶことができる事を求められるため、積載量が重要だ。軍艦は最高速度や堅牢性が求められる。船主の望む性能を備えた船型が理想的だとされているね」

そして、この船型を具体的にどのような構造で作るかを図面化する。

なるべく少ない木材で必要な強度と使いやすい船内配置にするには、外板を支える構造部材の構成が主要で具体的な設計段階での課題だ。

日本の高度経済成長時代には「造船業は日本のお家芸」と呼ばれていた。

生粋の大和魂を持ったこの五人なら、きつとこのノアの方舟も凄い船になるに違いない。

とここで、デイルムツド、ヴラド、ベデイのガヤ三人衆は鋸を握りながらこんな事を。

「どうせなら戦艦大和作ろうぜ！」

「いいね！ なら艦長は沖田ちゃんにしようよ！」

「波動砲積もう！ 波動砲！」

そんなものは当然必要ない、一体積んだとしてどこで使うというのだろうか？

箱舟作りから宇宙戦艦作りにシフトしようとする彼ら。確かにユグドラシルを使えば出来そうな気もしない気はしないが、それではこれはもはやノアの箱舟ではなく。

——ノアの宇宙戦艦大和。

になってしまふ。それはあまりにもスケールがでかすぎるし波動砲をどこにぶっ放すのかという話に。

しかし、造船技術を学んだ彼らの事。

そう、あれは遡る事数十年前、彼らはある出来事を思い出しはじめる。

「そーいや、俺ら鎮守府で提督やってたよね？」

「いやー懐かしいね、みんな元気にしてっかな？」

そう、ある企画で鎮守府に着任し、造船技術を学んだ出来事である。

かれこれあれから何年も経ったが、今回もあの頃に学んだ造船技術が生きるに違いな
いという謎の確信が彼らにはあった。

さて、そういうわけで、ノアさんから造船の技術を学び取りつつ、巨大な船作りへと
励む。

「まずはの、木の気持ちになることが…」

「ばつちりです。俺らポプラの木とかともよく話してるんで」

「木の気持ちちってやっぱり大切っすよね！」

「お、おう、そうじゃの」

彼らは木の妖精か何かだろうか、木の気持ちを理解できるアイドルはおそらく彼らく
らいなものだろう。

ところで、上記であったユグドラシルだが、こちらの探索の方はなんと強力な助っ人
が来てくれた。

その方達とは？

「よし、話はわかった。我が行ってこよう」

「斧の使い方とかわかります？」

「最悪、乖離剣で伐採してくるから案ずるな！ わははははは！」

「安心してくれ、僕なら手を斧に変えられるから大丈夫」

「さて！ 黄金の！ 行くぞ！」

「あ！ 太陽の！ 運転席は我の特等席だと言っておるだろうが！」

なんと、幸運が高いギルガメッシュ師匠とオジマン師匠の天地驚愕の同盟コンビにエルキドウさんである。

国を治めてるだけで暇だからと彼らが今回、なんと、伝説の世界樹ユグドラシルの探索にひと肌脱いでくれる事になった。

彼らの付き添いにはベディとすっぽん沼江を携えたモーさんである。

「じゃあ！ こいつの試し斬りにはもってこいだな！ おい！」

「モーさんそれ使い方違うから」

——日本刀で世界樹を伐採。

まあ、とはいえ、流石にユグドラシルをまるごと伐採するのは不味いという事でこう

して静止役にベディがいるわけであるし、問題はないだろう。多分。すると、すつぽん沼江を試しに素振りするモーさんはそれを仕舞うと深いため息をついた。一体どうしたのだろう？

「…あーあ、兄イも付いてきてくれたらなあ」

「まあ、あの人達は船作りで忙しいからねー仕方ない」

「言ってくれりや俺も手伝ってやるのに…」

「そっかなー？ しつかりモーさんが木材調達したら兄イも喜ぶと思うけどなー」

そう言つて、しよんぼりとするモーさんに笑みを浮かべながら告げるベディ。

すると、モーさんは目をキラキラさせて、一変し嬉しそうな表情を浮かべていた。つまり、頼りにされているという事が嬉しかったらしい。

ならばと、モーさんはますます世界樹調達に意欲が湧いてくる。

「そ、そうだよな！ 兄イ達も喜んでくれるよな！」

「そりやもう、モーさんありがとうーってなるよー」

「えへ、えへへへへ」

自分が褒められる姿を想像し顔がつついづい綻ぶモーさん。

何というか、この娘は本当に頑張り屋さんなので、そろそろご褒美的な物も考えてあげないとなと兄貴分の一人としてベディは思った。

というよりか、カタツシユ隊員達がモーさんに対してかなり過保護なだけである。やはり、妹分となると彼らとしても可愛くて仕方がないのだろう。

「よし、それじゃ行くぞー！　モーさん！　兄イ達見返してやろうー！」
「おーー！」

こうして、ユグドラシル探索隊はだん吉に乗り込むと出発！

北歐神話に登場する9つの世界に枝を伸ばす1本の巨大な「トネリコ」の木を果たして彼らは伐採し回収することはできるのだろうか？

さて、ここで場面は再び変わり、ノアの方舟作りに移る。

まずは世界樹が来るまで時間があるので、その他に用意できる木材、及び鋼材を持ち込み洪水が来ても大丈夫な装甲作りから始めることに。

まず、取り掛かったのは飛来する敵弾をはね返す目的で装備される鉄板。

本来、戦艦には自艦の搭載する主砲弾の攻撃に耐えられるだけの装甲を施すことが求められていた。

艦の水線部近辺に垂直に装備する水線甲鉄と水平な甲板に装備する甲板甲鉄があり、これらはどちらも特殊鋼でできている。

ここでも、彼らがかつて鎮守府にいた時に学んだ知識が生きる。

「ドレッドノートってこんな感じだったよね？ 設計図」

「あーそうそう、そんな感じだった」

「案外、覚えてるもんだねー」

なんと、覚えていた知識を各自で出し合い、その時に学んだドレッドノートの設計図を書いてみせた。

ドレッドノート、つまりはこのノアの方舟を丈夫で沈まない船に仕上げるため、彼らは嵐が来たとしてビクともしない戦艦を作ろうとしているわけである。

確かに戦艦ならば、砲撃に耐え得る装甲も兼ね備えているし、嵐が来ても吹き飛ばす心配もない。

だが、ドレッドノートと聞いてもピンとこない方もいらっしゃるはず。

では、ここで皆さんにはドレッドノートについてマリーリン師匠からのご説明を聞いて頂こう。

「戦艦の話をしよう。ドレッドノートは中間砲・副砲を装着せず単一口径の連装主砲塔5基を装着して当時の戦艦の概念を一変させた革新的な艦の事だね、従来の戦艦の速力がレシプロ機関で18ノット程度なのに対し、ドレッドノートは蒸気タービン機関を装着して21ノットのスピードを出すことが可能にしたんだ」

だが、一つここで疑問が生まれる。

彼らが作っていたのは、確か戦艦ではなく木造の船ではなかっただろうか？

というより、いつのまにか気がつけばノアの方舟とは別に船の竜骨があった。これはもしや…。

「…やってしまいましたか」

「やっちゃったなあ」

「はい！ メイヴちゃん参上ー！ 依頼されてた鋼材置いとくわよー！」

「あー、うんありがとう、メイヴちゃん」

「お安い御用！ あ、私、次の配達先があるからそれじゃ頑張つてねー」

そう言つて、鋼材を置いてスタコラサッサと配達が終わわり大型車で立ち去つて行くメ
イヴちゃん。

それといつのままにか出来上がっている鋼の竜骨に言葉を失うデイルムツドとカルナ
の二人。

何が、どつからおかしくなったのかわからないが、木造船を作る段階の物ともう傍で
戦艦の基礎部分が鎮座している。

久しぶりにどうやら、いつのまにかリーダーを含めカルナとデイルムツドの二人は盛
大な勘違いをしていたらしい。

「そういや、こんなの造つたのいつ頃だっけ？」

「多分、だいぶ前にデイルが戦艦作ろうぜ戦艦！ つて言うてた時くらいやないかな？」

「あー…、言つたわ、言つてたわ俺。まさか、あれに釣られてこれやつたの？」

二人はデイルムツドのその問いかけにうん と素直に頷いた。

それを聞いたデイルムツドは顔をひきつらせる。余計なことを言つたばかりに、想定

外のこんなものができてしまった。

作ってしまったこれを一体どうするのか、がそもそも問題である。

「どうすんのよ、これ」

「とりあえずもう造る？ 戦艦大和」

「いやどう考えても今から造つたら洪水に間に合わへんやろ！ しかも大和はアカン！

デカすぎや！ ホテル建てるようなもんやで！」

確かにリーダーの言う通り、戦艦大和なんか造つてたら造る最中に洪水にやられて終わりである。

そんなのを造っている暇などない、というよりわざわざ戦艦をこの時代に作る必要性もそもそもない。

ピラミッド作りでさえ、半年以上掛かって総出でやっと出来上がったのだ。

洪水という期限がある中で全長263mを誇る戦艦大和をわざわざ造る意味が無い。

「浪漫つてこえーな」

「やっぱり造りてえなあ、ここまでやったら」

「とりあえずこれは分解してメイヴちゃん達に持って帰って貰わなな？」

そういう事で残念ながら今回は戦艦造りは断念せざる得なくなってしまった。

というより、そもそも戦艦が造れるのならわざわざ木造船を造る必要もないような気もするが…。

その後、メイヴと小次郎さんに鋼材を回収してもらいやる気満々のカルナをなんとか説得し、改めてノアさんの木造船建造に取り掛かる事に。

方舟の骨組みをしつかりと造り、船の形を丈夫なものにしていく。

「そーいやさ、この船の名前ってなんて言うんですか？ ノアさん？」

「む？ 名前か…はて、考えたことはなかったの」

「じゃあさ！ 俺らで名前付けようぜ！」

方舟に使う木を鋸で切りながら会話を繰り返して広げるカタツシユ隊員達。

こうなると珍妙な彼らのネーミングセンスがつけられるだろうノアさんの方舟。しばし考えること数分。

するとここでデイルムツドがあるものを木材の中から見つけて持って来た。それは

「撃てー」

「ドカーン」

「ー」それじゃ武装化。

さて、こうして見つかった懐かしの形をした木材だが、これの用途について少しばかり説明をしよう。

ここでの説明はまだ未登場であるが、この木材の用途について詳しい専門家の方から皆さんにご説明をさせて頂きたいと思う。

『んんん、拙者から説明させていただきますぞ！ これは船首像と言って、当時は相手を威嚇するために使ってますなあ、あつ、拙者としては船首像は可愛いロリっ子がべス…』

という具合に、カリブ海に海賊船が数多く存在していた時代、船首像は威嚇や魔除け、守り神的な意味合いを込めて船に飾り付けられていた。

そう、彼らはこの木材をなんとこのノアさんの方舟に船首像として取り付けようと考えていたのである。

これを取り付ける事で考えられるのはこんな効果が…。

「なんて魅力的な船なの！　つていう」

「つまり」

「女が集まる」

「なるほど、それは大切やね」

そう言つて納得する二人。なるほど、確かに船首像があれば見栄えが良くなることは間違いない。

多分、女性に関しては彼らの場合さして困っているようにも見えないが…。

皆さまは色々言いたいことがあるだろう。

ディルムツドの黒子でも船首に引っ付けとけという野暮な突っ込みはしてはいけな
い。

「さて、じゃあ船首像、付けてみようか」

とりあえず懐かしの形の木材を船首像に設置してみる。

何というか、ここまで来たらもうこのノアの方舟の名前は決まった様なものだった。

彼らは既にその時の小学生の様なテンションに立ち返っているのだから。

そして、帽子の代わりにカタツシユ村から持ってきた黒いバケツを乗せれば。

「男爵デイナーじゃないですか」

「男爵デイナー……」

それはデイルムツド世代にお馴染みの昭和の格闘漫画。

マジックと融合した武術の使い手。

麦わら帽子がトレードマークの海賊とは遠く離れた船になってしまった。というよりこれはもはや開拓船というよりは海賊船と言った方が良いだろう。

「……開拓船から海賊船に。」

さて、こうなれば話は早い、ノアさんの方舟の名前はこうして男爵デイナーという名前に決定してしまった。

そして、船長はこの人。

「男爵デイーノ…良い名前じゃ」

「まじっすか!？」

案外、簡単に男爵デイーノを受け入れてくれたからびつくりである、しかも海賊船に
関わらずだ。

なるほど、確かにこんな寛容なら神さまも助けたくなるわけだと素直に彼らはそう
思った。

こうして始まったノアの男爵デイーノ造り。

果たして彼らに待ち受けているのは大洪水か！それとも驚邏大四凶殺だろうか！
彼らと木材との戦いはまだ始まったばかりである。

今日のY A R I O。

1. 船を造る木材に世界樹を使う予定。
2. モーさん刀の使い方が迷走中
3. 間違えて戦艦を作ろうとする。

4.
ノアの方舟が男爵テイラー。

宙船

さて、ノアさんの方舟、別名、男爵デイナーを作り始めたカタツシユ隊員達。

伝説の海賊を目指すため、彼らの冒険が今まさに始まる！

世はまさに！ 大開拓時代！

という茶番は隅に置いておくとして、ノアの男爵デイナー作りから3日目、作業の方は割と順調に進んでいた。

「洪水っていつくんのかなー」

「わからへんけど急いだほうがええのは間違いないやろうね」

「がんばれよー男爵デイナー」

そう言つて男爵デイナーをさするカルナ。

まだ未完成だが、このノアの方舟、少しばかり普通の船とは作り方が異なっている。

そして、作業の方が進む中、彼らに心強いカタツシユ隊員が派遣されてきた。そう、朱

色の鋳製造機。

「助っ人はやつぱりスカサハ師匠かあ」

「なんだ、不満か？ デイルムツド」

「だって師匠、どうせリーダーが居なくて寂しくなったから手伝いにきたんでしょ？」

「そうだ！ 悪いか！」

「清々しいねえ、そう言われたらなんも言えないっす」

我らがおっぱいタイツ師匠こと、スカサハ師匠がなんと彼らのお手伝いに駆けつけてくれた。

しかしながら、たしかに限られた時間での舟作りには人手は一人でもあつた方が助かる。

さて、ノアの方舟、別名、男爵ディーノだが、これは今回なんと普通の船とは違う円盤型に作ることに。

だが、目指すは海賊帆船！ 開拓船からもちろん、ノアの方舟を男爵ディーノにする。

「ところでしげちゃんはどこだ？」

「あー、リーダーはねえ…あそこ」

「ん？」

前回、完成させた船首像、今度は新しい帆の取り付けに着手。

長さが大きく、かなり重いうえ、風に煽られるなど作業は難航したものの、メンバーとスタッフ総動員で取付作業を実施。

今回、リーダーもまた、ノアさんと共にこの帆の取り付けに取り掛かっていた。スカサハの視線の先にはリーダーが帆作りに勤しむ姿があつた。

その完成度は高く、思わずヴラドもこれには。

「これだよ、これ。俺が作りたかったのはこれだ！」

という納得の出来栄え、さらにカルナも海賊の模様を描いた帆の出来栄えに嬉しそうに笑みを浮かべていた。

そして、カルナは皆にこんなことを。

「伝説の海賊になるぞ俺ら」

「……ついにアイドルが、海賊に転身するのか。」

当初の方舟作りが戦艦作りにシフトしかけたと思えば次は海賊船へ、彼らは当初の目的を忘れていたのではないだろうか？

だが、それにしてもアイドルでありながら、いとも簡単に海賊帆船造りあげる技術力があるうえ、「ダツシユ海岸」での漁師力もある。

彼らなら、あらがち伝説の海賊になることも可能かもしれない。

しかし、手伝いに来たスカサハ師匠はそんなカルナの言葉を聞いて目をキラキラと輝かせている。

「どうやら、また彼ら面白い事をやり始めたという確信を得られたからだろう。」

更に、そんな彼らを援護するかのようここに来て、もう一方の木材の方がなんとこのタイミングで届きはじめる。

「ただいまー！ 帰ったよー！」

「ユグドラシルとやらの枝！ 仕入れて来てやったぞ！」

「おー！ ベデイ！ ギル師匠！ モーさん！ みんなおかえりー、大変だったね」

そう巨大な枝を括り付けたトラック型だん吉が3輛ほど陳列し、ギル師匠、モーさん、ベデイが木材を仕入れて帰ってきたのだ。

そして、荷台には立派な枝が加工してと言わんばかりに鎮座している。立派な枝、間違いないユグドラシルの枝だ。

すると、トラックから降りたベデイが方舟作りに勤しむ彼らの元にやってくると、こんな話をしはじめる。

「とりあえず、仕入れはできたんだけど……みんなに相談があるんだよね？」

「ん？ どつたの？ なんか問題あった？」

「実はちよつと依頼受けちゃって」

そう言つて、苦笑いを浮かべるベデイ。

一体、こんな馬鹿でかい枝を持ち帰るのになんの問題があったというのだろうか？

すると、今回、協力に乗り出してくれたギルガメツシユとオジマンディアスの二人がベデイの後ろからやってくるとこんな話をカタツシユ隊員達にしはじめた。

「うむ、実は枝は持ち帰っていいと言われたんだが、代わりに馬鹿でかい蛇を退治してくれと言われてな」

「ヨルムンガンドとかいうクソでかい蛇なんだが…」

「マジっすか!」

そう言って、申し訳なきようにぼりぼりと後頭部を搔きながらめんどくさそうに告げるギルガメッシュとオジマンディアス。

ヨルムンガンドとは北欧神話に登場する毒蛇の怪物。その名は「大地の杖」あるいは「大いなるガンド（精霊）」とも呼ばれている。

世界蛇の名の通り、その身を伸ばせば世界を締め上げられるほどの巨体を持ち、海底で体を何周にも巻いて横たわっているという。

海底だけでは長さが足りず、仕方なく尻尾の先を啜えているらしい。

「髭が凄いおっちゃんが枝やるからあれどうにかしてくれって」

「そっかー、それならなんとかせなあかんね」

ヨルムンガンドは確か、雷と農耕の神であるトール神とは浅からぬ因縁があり、三度

にわたって戦いを繰り広げている。

農耕の神、すなわち、Y A R I Oである彼らにも縁が近い神様。そうであれば、少しでも畑や農作物が豊かになるように彼の力にならなければ！

まあ、今は船作りが先だが、とりあえずこのヨルムンガンドについて彼らの意見はどうと？

まず、顔を引きつらせたデイルムツドから一言。

「それママシじゃないの？」

——※ママシではありません。

すると左右に首を振るベディ達、一応、彼らもヨルムンガンドの姿を髭が凄い依頼人に力を使って見せてもらったので姿はわかる。

しかし、ここで大問題が……。なんとデイルムツド、蛇が嫌いなのである。

だが、依頼されたのであればいずれにしろその馬鹿でかい蛇を退治しなくてはならない。

するとここでヴラドがこんな意見を……。

「アオダイシヨウ？」

「だからヨルムンガンダだってば！」

「もう俺やだよー、でっかいマングース見つけて退治してもらおうぜえー」

そう言つて今までより弱腰のデイルムツド。

しかし、彼らは蛇退治に関しても以前、リーダーとカルナが猛毒を持つハブの駆除を行なつた事がある。

これまでもハブの駆除を行なつて来たカルナとリーダーならきつと馬鹿でかいヨルムンガンダのような蛇でもハブを一発で捕まえるアイドルという威信にかけて、捕獲する自信があつた。

「あれつて要は慣れだから」

弱腰のデイルムツドに対してそう言い切るカルナ。

特にカルナのハブ駆除スキルはとても高い、さすがは頼もしい我らが兄貴分である。

ちなみにこのヨルムンガンダ、馬鹿でかい蛇だが、捕獲したとして、用途はどうするつもりなのだろう？

それについてモーさんがこんな意見を。

「でもあれ捕まえても何にも使い道ないんじゃないか？」

「塩焼きにして食う」

「俺たちだけで食べられなくてもアルトリアちゃんなら食べれるでしょ」

「嘘だろ!!? あんな馬鹿でかいのに!!?」

——蛇を塩焼きにして食べるアイドル。

デカさなどあまり関係ない、とりあえず塩焼きにして食べれば、最悪、我らが最終兵器腹ペコ王様アルトリアちゃんをはじめとしたジャンヌちゃん達が背後に控えている。

これなら、調理しても無駄にはならない。というか彼らはどうやって調理するつもりなのだろうか？ 疑問に残るところだが…。

しかし、話を聞いていたスカサハ師匠はこんな事を言いはじめた。

「串焼きにしたらいけるんじゃないか？」

「ゲイボルグで？」

「なんなら、僕が鎖になって縛ろうか？」

「俺個人的にはエルキドウさんには巨大なハブ捕り棒になってほしいかなあ」

そう言つて、個人的なお願いをしはじめのカルナ。

英雄に対して、巨大なハブ獲り棒になってくれと頼むのはおそらくこの人達くらいである。

しかも、退治するのはハブではなくヨルムンガンドという馬鹿でかい蛇だ。と、話がある程度進んだところで、デイルムツドが珍しくこんな一言を。

「…とりあえず、方舟作ろう？ 作業進まないし」

「そうだねー、とりあえず蛇駆除は後回しで」

「んじゃ、これ使うか、馬鹿でかいユグドラシルの枝」

蛇が嫌いだからか、珍しくガヤ三人衆の一人が作業を促してくるので、とりあえず一同は持ち帰ってきたユグドラシルの枝の加工に移る事に。

とりあえず、丸太にしたユグドラシルの枝。

とりあえずはこれを床板の長さ4 mに切り揃え、縦割りにして、さらに中の状態を確

認する。

このユグドラシルの丸太の断面を見れば、福島県の村で数多くの木に触れて来たカルナは、すぐに分かった。

「この木はいいよ！ なんでも使えんなこれ！」

穴や割れも見当たらない。棟梁・カルナの目利き通り、かなり上等な木材。

さすがはユグドラシルの丸太、質が段違いである。

これを必要な分だけ、帯ノコで丸太を厚さ3cmにスライスしていく、更に、無駄がないように帯ノコ製材機で貴重な丸太の使える部分を切り出し形を整え、船底や壁に取り付けられる大きさに。

これを目の当たりにしていたモーさんもそのカルナの手際の良さに見入るよう目キラキラさせていた。

「すんげー！ こうやって加工するんだ…」

「モーさんもやってみる？」

「うん！ えーと…」

「まずはこうやって…」

そして、モーさんに木材加工の手ほどきをしはじめると、

有り幅で切ると、丸太のどの部分かによって、幅はまちまち、モーさんの作業をレクチャーしながらカルナはこの木材の加工をしながら一言。

「節の位置は同じだね」

それは長年の経験で培われた知識。

この木材をかんな盤で滑らかに仕上げる。機械の中の刃が高速回転して、板の表面を3mmだけ削る。

上から2mm、下から1mmと両面同時にうまく削っていく。

出来上がったこれをディルムツドやリーダー達が担ぎ上げてノアさんの方舟へ持ち込んで船の骨組みや板張りに使う。

ギルガメツシュやオジマンディアスら師匠達もこの作業に参加。

ギルガメツシュは釘を口に咥え、さながらベテランの大工のような雰囲気すら醸し出していた。

「ここはこのように張り付けるが良いか？」

「はい！ えーと、あと3センチほど右にずらしてもらって…」

「こうか？」

「はい、バッチリです」

鋸や金槌の音が辺りに響き渡る中、夜通し作業は行われた。

スカサハ師匠もこの船の出来栄えにはにんまり、これが、大洪水の中を進んでいくと
いうのだから今からワクワクが止まらない。

そうして、それから作業すること数日。

無事に長さ300キュビト、幅50キュビト、高さ30キュビトの巨大な方舟が出来
上がった。

方舟には3つのデッキがあり、更に、帆もつける事で風を拾うことも可能。

さらに船首像には我らがカタツシユ隊員達が作った男爵ディーノが鎮座している。

これが人類史上、初の海賊船、ノアの男爵ディーノである。

「立派な船じゃ…、皆さんありがとう！」

「いやいや、ノアさんから船作りを学べて僕らもすごく勉強になりましたよ！」
「ほんまありがとうございます！」

そう言つて、今回、船作りをさせてくれたノアさんに感謝を述べる一同。

後は洪水を待つだけ、だが、カタツシユ隊員達はこの後、巨大な蛇の駆除の依頼がある。なので、40日間後に船の様子を見にくることしかできない。

なので、彼らはこのノアの男爵、ディーノの完成を記念して、ノアさんに対してエールを送ることにした。

「俺たちも正直、ノアさんと航海したいんだけどね」

「この後のスケジュールがね……」

「ええんじや、船作りを手伝つてくれただけでもありがたい」

「だから、代わりに歌送りますね！ 頑張ってください！ 俺たちもこれから頑張つてくるんで！」

もちろん、それは歌である。彼らなりのエール。40日間という間の長い航海に向け、ノアさんに対して彼らができるのはそれくらいの心遣いだった。

スカサハやギルガメッシュ達も笑顔を浮かべながら彼らとノアさんのやり取りを見守っていた。

そうして、彼らは楽器を設置し、準備に取り掛かる。

40日という長い航海、そんな長い旅にノアさんに送る曲。

マイクを久々に握るベデイも真剣な眼差しでゆっくり配置についた。

ギター、ベース、ドラム、キーボードの配置にそれぞれつくカタツシュ隊員達。

そして、前奏が始まり、ベデイは声を張り上げた。

「その船を〜♪」

もちろん、それはノアさんがこれから挑む困難を打開できると選んだ曲。

洪水なんかになんて全てを任せるな！ と己の手で道を切り開けるように心を込めて彼らは歌を歌った。

流されまいと、船は大洪水に挑む。

全ての水夫が恐れてしまうような洪水であっても、この男爵デイナーならば、どんな海にも耐えられる筈だ。

こうして、ベデイの声が響き渡る中、熱唱が辺りに響き渡る。

動物達も、そして、スカサハ達もその歌に耳を傾けていた。

こうして、彼らの夜は更けてゆく、果たして完成したノアの方舟は無事に40日間の航海を終えることができるのかはわからない。

だが、少なくとも彼らとノアさんの間には船作りを固い絆ができたのは確かな事実であつた。

今日のY A R I O。

1. ノアの方舟完成。
2. ヨルムンガンド駆除を頼まれる。
3. ユグドラシルの枝を加工できる。
4. 人類史上初の海賊船完成。
5. 海賊に転身するアイドル。

年末年始ウルトラマンカタツシュ編

ザ！ 年末年始ウルトラマンカタツシュ！

体が冷えるような冬。

皆さんはこの季節は寒い中、炬燵で暖まりながら年末年始は年越しそばを食べ、過ごされていくことだろう。

お年玉を貰う子供達、そして、凧揚げなんかもこの時期には定番。

そして、我々、カタツシュ隊員達の年末年始と言えばもう皆さんはお馴染みかもしれないあの企画が持ち上がるのも必然だろう。

そう、寒い季節こそ！ 身体を動かすことが1番！

駅伝が開催されるこの季節！ 我らがカタツシュ隊員達が訪れたのはなんと。

「はい！ 今回はですねー、オリンピックの本場、ギリシャに来ております」

「いやー久々ですね、この企画」

というのも？　ギリシャにある森に何とかかなり足が速い女性ランナーがいるという。

またの名を狩猟の女神アルテミスの加護を授かって生まれた「純潔の狩人」。

アルカディアの王女として生まれるが、男児が望まれていたため生後すぐ山中に捨てられ、女神アルテミスの聖獣である雌熊に育てられる女性だ。

そのことについて、カルナは一言。

「俺らみたいな雌熊もいるもんだね！」

「だよな、俺達ならそんなの見かけたらすぐ拾っちゃうもんな！」

「…あんだ達はなんでも拾って来すぎだから」

同乗するデイルムツドの一言に苦笑いを浮かべながら突っ込みを入れるヴラド。

というわけで、今回の企画はこちら！

ザ！ウルトラマンカタッシュ！　YARRIOは駅伝でギリシャ最速陸上狩人に勝てるのか！

さて、年末年始と言えば毎度のことながらこの企画、身体を動かし、挑戦する姿を皆様に今年も我らがカタッシュ隊員達がお届けします。

この企画は本来、超人がすごい技を見せてくれるという企画なのだが、彼らの周りは超人だらけなので当然当たり前のようにできてしまう。

なので、趣向を変え、英雄ながら普段から農業ばかりしている体力自慢の我らがカタッシュ隊員達が挑戦するという今回の企画に至ったわけである。

「まあ…昔は電車走ってなかったからね」

「ほんとは電車リレー考えてただけどき、流石にね? ほら、最近、陸上の話やってたし年末にはいいかなと」

「ねえ? ……箱根の山じゃないよ? ギリシャの山だよ? ちょっと」

——ギリシャ箱根駅伝。

そして、助っ人には超人体力無双のスカサハ師匠が我らがカタッシュ隊員達の助っ人に来てくれた。

応援には鉢巻を巻いたギルガメッシュ師匠をはじめとした彼らに普段から協力してくれる英雄達が集結し、横断幕を掲げ、盛り上がりを見せていた。

そんな中、リーダーであるクーパーリンはにこやかな笑みを浮かべたまま一言。

「まあ、僕はこう見えてフルマラソンやったことあるからね！」

「確かに、リーダー走ったもんねー頑張った」

1ー124時間走った実績持ちのリーダー。

確かに、今回の駅伝、走った経験も生きてくるはず。それを踏まえた上で気を引き締めて彼女に挑戦せねばならない。

なにせ、相手は陸上女狩人、足の速さはとんでもなく早いはず。しかし、持久戦なら彼らにも勝機があるかもしれない。

そんな中、デイルムツドは冷静に一言。

「今回は駅伝だからね、しかも俺ら対最強女性狩人ランナーって感じだから」

「ふん、私にかかればどんな奴が来ても恐るに足りんな」

「お、珍しくスカサハ師匠が頼もしい」

そう言って、体力に自信満々で体操着、しかもブルマ姿のスカサハ師匠に感心するカ

ルナ。

年齢的に彼女の体操着、ブルマは大丈夫なのか? などとは言っただけいけない、それは多分、タブーである。

確かに普段から鍛えているスカサハ師匠ならば、彼らに襷を繋ぐにもかなり有利に働いてくれる筈だ。

そう、今回、彼らに立ち塞がるのは最強の女狩人ランナー、決して油断はできない相手であり、強敵だ。

では、早速、彼女に登場してもらおうとしよう。

「ではアタランテさん! 今日にはよろしくお願いします!」

「……………いや、呼ばれたと思ったら、なんだこれは」

「駅伝です」

——そうじゃない。

と言いたげな表情を浮かべている、住処にしている森からわざわざ彼らに呼ばれたアタランテ。

しかも、訪ねた第一声が駅伝だと言われてもまずピンとこないのが普通である。

森の外から今日はやけに騒がしいと思いきや、いきなり訪ねてくるやいなや住処である森に何やらルートを作り始める。

そして、その後、お便りらしきものが置かれており、その内容を確認したアタランテが森から出てきたらこれである。

アタランテと言えば、勝った者を夫とする命がけの駆け比べが有名。

つまり、彼らは今回、駅伝という形でこの駆け比べの猛者、陸上女王アタランテに挑むつもりなのである。

そのことをこと細かく彼女に説明するカタツシユ隊員達。

「ふむ、なるほど、話はわかった。では私に勝ったとして誰が私の夫の座に……」

「ん？ なんの話ですか？」

「……は？」

思わずカルナの言葉にポカンとしてしまうアタランテ。

その後ろではツボにハマったのか悶えるようにして笑いを堪えるスカサハ師匠が居た。

実際、六人で襷を繋いで走るのに対して、アタランテさんは一人だけだ。

これではフェアとは言い難いし、何より。

「僕ら六人で走るってのはやっぱりダメですかね?」

「どうか夫つてなんの話?」

「いやいやいや、汝達、私を娶りたくて駆け比べに挑むんだらう?」

「いやいや、年末年始企画で駅伝しにきただけですよ」

「えっ?」

「えっ?」

どうにも話が噛み合っているようで噛み合っていない。

今までは自分を娶りたくて駆け比べを挑む英雄達が後をたたなかつた。彼女もそれに応じて何人もの英雄が彼女を娶るためにそれに挑んだ。

そういつた過程があった事もあり、この彼ら返しはアタランテにとって予想の斜め上をぶつちぎって突き抜けていたのである。

「…んー? つまり、私とその…」

「駅伝しにきただけですよ?」

「アタランテさんはフルマラソンなんですけどね……すいません」

「いや、あのだな……え？　というか本当に私に走り挑みに来ただけか？」

「正式にはギリシヤ箱根駅伝をしに来たんですけど」

「箱根ってどこだっ!？」

頭を抱えたアタランテの鋭い突っ込み。

箱根ではなくギリシヤ、しかし、彼らにはこのアタランテの住む森が箱根の山に見えるのだろうか？

そんな中、彼らの駅伝の応援に駆けつけた英雄の一人であるジャンヌダルク団長をはじめとした観客席にいる応援団から意気込みを一言。

「ふれーふれー！　Y A R I Oー！」

「余が来たからには一着しか許さんぞー！」

「ペース大事だぞ！　ペースが！」

そう言つて、フランスの旗だったものを応援旗として振るジャンヌに引き続き、オジマンディアスにエミヤさんが熱烈な応援を彼らに送っていた。

しかも、もしもの為に医療スタッフは各コースに配置されており、サポート体制は万全。ナイチンゲール婦長がこちらにサムズアップで応えてくれた。

レースに関する準備はバッチリだ。

と、ここで観戦に来ているマーリン師匠から皆さんにお話が…。

「駅伝の話しよう。駅伝は各走者は途中の「中継所」またはゴールまで走り、走り終える毎に前の走者から受け継いだたすきを次の走者に渡していく、42.195kmを6区間に分けて5 km、10 km、5 km、10 km、5 km、7.195 kmで走るんだね」

そう、総距離は42.195km。

この駅伝の為、Y A R I Oのメンバーは空いた時間を特訓に割いていた。

——全てはこのメンバーで走り遂げる為。

足を痛めていた時も何食わぬ顔で船作りや畑作りを行っていたのである。

身体は英雄だが、精神は平均40歳、彼らも良い年、だが、彼らに止まるという言葉

そうやって、スタートラインに立つ二人はばちばちと火花を散らす。
そして、上に複製した宝具を構えるエミヤさん、スタートラインに立つ二人は静かに待つ。

「位置について…よいい」

クラウチングスタートの構えを取る二人、すぐに走れるように足にも力がこもる。
それを上に大きく放ると同時に爆破。それがスタートの合図であった。

「ドーン…」

その瞬間、凄まじいスタートダッシュを決めたのはアタランテだった。
バシユン! という音と共にあつという間にカルナを置いてきぼりに、これは、早々にまずいのでは?

しかし、カルナは冷静に自分のペースでかけはじめ。それに対して、皆は大声援。

「がんばれー！ 兄イ！」

「頑張ってくださいーい！」

コース脇からはモーさんとニトクリスの二人。彼女達も走り出すカルナに惜しみない声援をかける。

しかし、足の速さは一目瞭然、だが、カルナ達には作戦があつた。

確かに今は遥か彼方に走り去ってしまったアタランテ、だが、これは駅伝、ならば、持久戦になる。

これだけリードが広がれば差を縮めるのは容易ではないが、あのペースで走っていれば、いずれ、足に負担が返ってくる。

「はっはっはっ……」

積み上げてきたものが出る。それがこのギリシヤ箱根駅伝。

呼吸を一定のリズムで整えて、カルナはひたすら足を動かす。スパートをかけるタイミングを逃してはならない。

こうして、遥か先に走るアタランテを見逃さない距離を保ちながら、駆けるカルナ。

実況席に座るエミヤは本日初登場の解説のフランスの王妃、マリーさん、マーリン師匠と共に実況に入っていた。

「さあ、いよいよ始まりました、ウルトラマンカタッシュ主催、第一回、ギリシャ箱根駅伝。さて、今回は解説にマリーさんとマーリンさんをお迎えしています。よろしくお願ひします」

「皆さんヴィヴ・ラ・フランス! よろしくね! ついに始まりましたわ!」
「うん、よろしくね」

そう言つて、互いに頭を下げて実況に入る三人。

始まった第一回ギリシャ箱根駅伝という事で三人もこの激闘がどういった展開になるのか実に楽しみであった。

早速、実況のエミヤさんがこの展開について解説のマーリンに問いかける。

「マーリンさん、この展開はどう見ますか?」

「そうだねえ…、いや、カルナは実に賢い走り方をしているね」

「え? だけど、かなりリードされてるわ?」

「いや、これは繋ぐ駅伝、だから、彼の走りは初戦を戦う選手には理想的な走り方だよ」

そう、駅伝ではチームワークが勝敗を決める。

一人で無理でも、みんなでなら戦い抜けることができる。今は大リードを許していても捲るチャンスがきつとやってくるはず。

硬いアスファルトではなく、ある程度整備された土道を走るので足の負担も大きくなって済む。

「なるほど……長年、駅伝は私も見ているが、今回は先が見えませんか」

「そうだね」

ペースは一定、しかしながら、その差は比べるまでもなく明らか。

これがどうなるが、皆もわからない。しかし、絶え間ない声援が脇道にいる各自から上がる。

さあ、いよいよ始まった第一回ウルトラマンカタツシユ！ 箱根ギリシヤ箱根！

電車にリレーで勝ったことがある彼らはアタランテに挑むカタツシユ隊員達は彼女

に勝つことができるのか!

この続きは次回! ウルトラマンカタツシュで!

今日のY A R I O。

1. ギリシヤに箱根という土地ができる。
2. 陸上狩人アタランテに駅伝で挑戦。
3. 年末に走る陸上アイドル。

ザ・ウルトマンカタツシユ！ その2（決着）

前回、始まったウルトマンカタツシユ主催、第一回、ギリシヤ箱根駅伝。

第1走者のカルナは順調なペースで足を動かし、次走のヴラドにたすきを渡すため駆ける。

レースは序盤からアタランテが大幅にリード、だが、これはまだ序盤、これからの展開次第ではまだ巻き返しは効くだろう。

そして、5 km地点。そこではヴラドがたすきを受け取る構えを取り、カルナの姿を見つけると足を動かし始めた。

「がんばれ！ もうちよいだよ！ 兄イ！」

「はあー…はあー…た、頼んだ！」

「任された！」

バシっとしつかりたすきを受け取ったヴラドは前を向いて、リードを広げているアタランテに向かい駆けはじめる。

だが、最初よりもリードが多少なり縮まっていた。これはカルナの頑張りのおかげだろう。

脇に立っている観客からは完走したカルナに対して大きな拍手が送られた。カルナはモーさんとニトクリスの二人に肩を貸してもらいコースから出る、その足は当然、痙攣していた。

実況のエミヤはこれについて。

「いや、見事な走りだったな、前半から飛ばしていたアタランテとのリードを最期、スパートをかけて縮めてきましたね」

「そうだね、足が痙攣しているとところを見ると相当きている」

「英雄だけあってやはり持久力は高い! これはまだわからないわ! !」

そして、淡々とレースを分析して解説するマーリン師匠と同じアイドルとして完走したカルナに賞賛を送るマリー。

ヴラドも負けじと、第2走者としてアタランテを追走する。

以前は身体が弱く、カタツシユ隊員として村や島などの活動を自重せざる得なかつたヴラド。

できることは炭作りや土器、そして、司会業、料理に畑の開拓などには携わつていたものの何でもできる他のメンバーと比べるとどうしても見劣りしてしまう。

そして何より、本人には自覚があつた。多分、自分は他のメンバーよりもそういった嫌なイメージが強い。

だが、この身体になりメンバーと離れ離れになつたヴラドは領主になり、その領民達に対して、自分が学んだ事や出来ることを精一杯やってきた。

10kmという長い区間を走る事を自ら進んで志望したのもそれが理由である。知らぬ間に離れ離れになつてしまったメンバー。

もしかしたら、このまま解散してしまうかもしれないという不安は他のメンバーの中にもあつた。

だが、それを纏めてくれたのはやはり、自分達のリーダーである彼だつた。

だから英雄になつて身体が少しだけ丈夫になつた彼は彼なりにできる事を進んでやろうとしているのである。

だが、残り700m地点、アタランテの後ろ姿が縮まりかけたその時だった。

「痛っ……!」

ヴラドが太ももを抑えて失速しはじめたのである。

そして、右足を庇うように走り始めるヴラドに傍にいる観客達から悲鳴が上がる。

長丁場になる距離、10kmで少しでも距離を縮めようとした無理が祟ったのだろうか。

違和感に気がついたエミヤがガタリツと実況席から立ち上がると声を張り上げる。

「おーと! アタランテ選手と差を詰めかけていたヴラド選手に異変! 故障発生か!」

「割とオーバーペースで走っていたようだからね」

「…でも、彼、走るのをやめる気はなさそうだけれど…」

肉離れか、それとも別の何かか。

しかし、ヴラドに起こっている足の異変はただごとではない事は間違いない。

すぐさまナイチンゲール婦長が駆け寄りとうとするが、それを制止したのは…。

「何をするつもりだ？」

「…ッ！ 足を故障したのでしょうか？ ならば競走を中止させて治療する必要が」「だめだ、それは監督役を務めるこの我が許さぬ」

そう、ギルガメッシュ師匠である。

彼は毅然とした態度で、ナイチンゲールを見据えたまま一步も退く事なくそう告げた。確かにナイチンゲールが言う通り、故障が発生したのは確かだ。

しかし、ギルガメッシュ師匠がナイチンゲール婦長を止めたのにはもう一つ理由があった。

「奴は走る意思を見せている。仲間の為にな…。たすきを繋げ、託す、それが駅伝である」

「しかし！ このままでは悪化して最悪歩けなくなるかも…」

「ならばっ！ 貴様はあやつの意味を捻じ曲げてでもやめさせるといふのか？」

「それが私の仕事です」

そう告げるナイチンゲールもまた英雄王と名高いギルガメッシュ相手に一歩も退く気配を見せない。

だが、ギルガメッシュは退こうとしないナイチンゲールに対し、ため息を吐くところ語り始めた

「確かにそうだろう。だがな、それは奴の意思で決める。リタイアを宣言するまでは足を止める事は我が許さん。それがルールだ」

「何を勝手な!」

「二度は言わんぞ? 奴らから監督役を引き受けたこの我が走るのを止めるなど言ったのだ。我が管轄するこの駅伝を第三者が勝手に止める事は我が許さん」

「…くっ…!」

そう告げるギルガメッシュはまっすぐにナイチンゲールを見据えていた。

確かにルールはルールだ。医療チームとして何より看護婦として見過ごせないというナイチンゲールの気持ちはわからないでもない。

しかし、ヴラドは汗だくになりながらも長い距離を走り、足を引きずりながらも仲間

にたすきをつなげようと足掻いている。

それに呼応するように傍道にいる観客達も後押しするように声を上げて、彼を応援していた。

「…はあ…はあ…デイルが…見えた…」

たすきを外し、懸命に足を引きずりながら10km地点に向かってくるヴラド。

彼がよく喧嘩をするのはデイルムツドだった。だが、同時にグループで活動して、いろんな企画を力を合わせて乗り越えてきた仲間だ。

いつしか、二人の間にあつたわだかまりもそれは固い絆へと変わっていた。めでたい事なら祝ってくれる信頼できる仲間だ。

だから、ヴラドは足を懸命に庇うように走りながら倒れる寸前までたすきをしっかりと握りしめてデイルムツドにちゃんと託した。

「よく頑張った！ ヴラド！ あとは俺に任せろ！」

「…ごめん…っ！ 差が…ついちゃって…！」

「馬鹿野郎！ 気にすんな！ 俺がちゃんと挽回すつからさー！」

仲違いをよくしていた二人。

だからこそ、それぞれの良さが長年一緒に活動する事になってよくわかった。

ヴラドが故障した為、開いた差をカバーするデイルムツド。彼らが繋ぐたすきは確かに絆でできていた。

「ヴラド! あんた大丈夫なの!?!」

「はあー…はあー…。やっぱり俺、足引つ張っちゃったなあ」

そう言って走り終えたヴラドに駆け寄ってきたエリちゃんは心配そうに毛布を彼の肩に掛けてあげた。

彼の顔を見ると、そこには悔しさからか目頭に涙を浮かべているヴラドの姿があった。

完走はできたものの、結局、自分の故障のせいで差を開いてしまった。

だが、エリちゃんはそんなヴラドの肩を叩いて満面の笑みを浮かべてこう告げる。

「馬鹿ね! …かつこよかつたわよ、ヴラド」

「…あーだめ、そんな優しい言葉かけられたらほんとに泣いちゃうから！」

そう言つて目頭を抑えて溢れそうになる涙を堪えるヴラド。

見事に完走した彼の姿に駅伝を見にきていた他の人達も惜しみなく拍手を送つてあげた。

そして、たすきを受け取つたデイルムツドは駆ける。それも、ハイペースでだ。流れ板のデイルムツド。その名は伊達じゃない。

「いけー！ デイル兄ィ！ 気合いが違うんじやー！ 気合いがー！」

「モーさん、めっちゃ声デカイ」

「今回参加できなかつたもんね」

猛迫するデイルムツドに声援を送るモーさんに苦笑いを浮かべるカルナにそう告げるヴラド。

それからはアタランテとの耐久戦だった。序盤から飛ばしていたアタランテ、流石に長距離レースともなるとここで足の負担もやつてくる。

先程よりもやはり、ペースは落ちていた。

「くそつ…はあはあ、悪あがきを…!」

「はあ…はあ…背中遠いいー…!」

そして、デイルムツドも負けじと粘る。仲間が繋いでくれたたすき、ここでこれ以上、引き離されてはおそらくアタランテには勝てない。

そして、次走に控えているのは末っ子ベディ。

たすきをデイルムツドから受け取り、第4走者が駆け出す。

「頼んだー!」

「うおおおおお! やるぞー!」

「第四走者ベディ選手に今たすきが渡されました! 走る走るー!」

「やっぱり一番若いだけあってパワーあるね彼」

第1回、ギリシヤ箱根駅伝もいよいよ終盤。

リードは相変わらずアタランテだが、その差はメンバー達の頑張りもあり確実に縮まっていた。

残りにはベディを含め3区間。これなら、挽回できる可能性がある。

そこからは怒涛の追い上げ！ という美味しい話はなく、やはり、アタランテも意地があるのかペースを上げ突き放しにかかりはじめた。

「はあ…、はあ…、なんなのあの人！ 変態だよ！ 変態！」

そのスピードアップが変態じみていたので思わずそう声を上げてしまうベディ。

「……変態じみて足が速い狩人。」

だが、体力自慢なら負けてはいない、必死で食らいつき、離されまいと足掻く。

そして、第五走者。

我らがスカサハ大先生が仁王立ちでベディが来るのを待ち構えていた。

とはいえ、平仮名で「すかさは」と書かれた体操着とブルマ姿がいろんな意味で威厳やらなんやら台無しにしている。

だが、最速なら負けないと言わんばかりにスカサハは意気込んでいた。

そして、横をアタランテが通過するのを目視で確認し、続いてやってくるベディから

たすきを受け取る直前でスカサハは反転し、クラウチングスタートを取る。

「よせー!」

「はい! 師匠!」

そこからは、スカサハ劇場の始まりだった。

クラウチングスタートから勢いよく飛び出した彼女の信じられないスピードに会場からは思わず歓声上がる。

「はっや! 師匠早すぎ!」

「信じられないスタートダッシュ! 怒涛の追い上げだ! あっという間にアタランテに並んだ!」

体操着のスカサハの素早さに度肝を抜く一同。

体力が有り余ってるのか、スカサハはさらにそこからスピードアップ、アタランテを一気にぶち抜いてしまった。

フルマラソンのアタランテとは違い、駅伝ルールなスカサハとは温存していた体力量

が違う。

「最初からアタランテが飛ばしていたので当然といえば当然、抜かれてしまうのも無理はない。」

「くそっ……!」

「はっはっはっはっ! 何故だか私は貴様には負けたくないのぞな! キャラ的に、若干被ってる感があるし!」

「なんだその理由は?!」

「ではお先!」

笑い声を上げて余裕でアタランテをぶち抜いていくスカサハはそのままのスピードを保ちつつ、最後の走者我らがリーダーの元へ。

「……負けられない戦いがある。」

そんなスカサハの意地を彼らは目の当たりにしたような気がした。

そして、ラスト走者のリーダーは怒涛の勢いでこちらに向かってくるスカサハの姿を

見てすぐにたすきを受け取る構えを取る。

「しげちゃん!」

「よっしや! 任されたっ…! へぶ!」

だが、勢いあまって転倒、それを見た一同は思わず頭を抱える。

顔面からいったヘッドスライディング、しかし、すぐに立ち上がるとクローリーンはかけはじめた。

「…さあ、ラスト走者ですが、大丈夫でしょうか」

「幸先が不安だね」

これには実況席からも苦笑い。

年末年始から転ぶとはなんと縁起が悪いことか、だが、立ち上がって走り始めるクローリーンに観客からは声援が送られる。

だが、転んだ事によるロスは取り戻すのはなかなか難しい、当然ながら、アタランテが追撃をしてくるわけ。

気づけば間がどんどんと縮まっていく、これは不味い。

いよいよ、最後の直線に入る。

ラストスパートで全力疾走をはじめたアタランテとクーフーリンの二人、すぐ後ろまで迫るアタランテ、逃げ切れるのかクーフーリン。

「デットヒート！ これは熱くなってきました！」

「二人とも頑張れー！」

思わずマリーちゃんも身を乗り出して二人を応援する。

勢いよくゴールに向かい駆ける彼らの姿に思わず観客達のボルテージも上がり、熱気に包まれる。

粘り込みをはかるクーフーリン、後ろから爆走し追撃するアタランテ。

そして、最後の直線で最終的に勝ったのは…。

「…今！ ゴールイン！ 勝ったのはYARRIOの皆さんです！」

そして、ゴールを切ったのはクーフリーンだった、その差はなんと僅か30センチ。ギリギリの勝利であった。

こちらは駅伝ルールに比べてフルマラソンで走ったアタランテのこの激走に思わず、観客から惜しみない拍手が送られる。

「あの人、世界最速の人より早いんじゃない!？」

「もうなんであの人狩人してんのか不思議だよね」

「ごもつともである。彼らはその気になればアタランテは足だけで普通に食べていけるような気がした。」

「しかしながら、本業が狩人なので仕方がない、彼らが農家なんて言われてるので皆からしてみればどっちもどっちである。」

「なんにしろ、こうして第一回、ギリシャ箱根駅伝はY A R I O達の勝利で幕を締めたのであった。」

今日のY A R I O。

1. アタランテさん変態じみて足が速い。
2. スカサハ師匠も足が速い。
3. そんなアタランテにリレーで勝てるアイドル。
4. やはり歳には敵わないアイドル。

ザ・ウルトラマンカタッシュ その3 (完結)。

ウルトマンカタッシュ主催、第一回、ギリシヤ箱根駅伝。

勝者は我らがアイドルY A R I O達。さて、そんな彼らだが、駅伝で疲れた中、皆から熱烈な胴上げの祝福を受けた。

さて、その後、勝負に勝ったアタランテさんと対面。すると、ここでマイクを手にとつたヴラドが彼女に一言。

「ねえねえ！ 勝負に負けたけど今どんな気持ち？ ねえ！どんな気持ち？」

「あんた、前回、やっと株上がったのに全部台無しだよ！それ！」

息が切れてるアタランテが負けた悔しさからか肩をプルプル震わせているのを見て思わずヴラドに突っ込みを入れるベデイ。

そう、色々と残念である。

とはいえ、流石にそこは冗談ということではヴラドは苦笑いをしながら謝罪。当たり前である。

「いや、強かったよ、アタランテさん、めっちゃ足早いもん」

「リーダー焦って転ぶしな！」

「くそ…こんな奴らに負けるとは…」

「まあまあ、ガチンコでぶつかり合ったんだし年始から良い戦いでしたよ」

「私もあそこまで貴様が速いとは予想外だったな、驚いたぞ」

そう言いながら、爽やかな笑顔を浮かべてアタランテに握手を求めるYARRIO達。

スポーツマンらしく、互いの健闘を讃えるのは当たり前、そして、リスペクトを決して忘れない。

すると、アタランテもそれに対して、一呼吸吐くと仕方ないといった具合に負けを素直に認めたのか彼らの握手に応じた。

「確かに貴様らは強かった、完敗だ」

「今日はありがとうございます」

「それでだがな……」

すると、握手を交わしたアタランテはここでコホンと軽く咳払いをすると、何やら、彼らに対してこんな話をしはじめた。

それは、彼女が駆け比べをするきっかけにもなった大事な案件。

彼らとしてはとりあえず駅伝が終わったのでそんなことはどうでも良いのだが、彼女は真剣な眼差しで話しはじめた。

「私を娶る話だが、真剣に走るお前達五人が気に入った。よって貴様らの求婚を受けようと思う」

「あ、球根ですか……、えーと、持ってきたかなー？」

「リーダー！ リーダー！ これならあるよ！ 玉ねぎの球根！」

「おお！ でかした！ すいませんねえ、こんな球根しかないんやけれど」

そう言いながら、カタッシュ村で取れた玉ねぎの球根をアタランテに手渡すリーダーのクローリン。

すると、差し出されたそれを見たアタランテはニコニコと笑顔でそれを受け取る。そ

して、一言。

「そうそう、こんな感じに森に植える丁度良い球根が無いかと思つてな……つて違うわ！」

だが、すぐさま突つ込みを彼らに入れた。どうやら、玉ねぎの球根ではなかつたらしい。

スカサハ師匠、これにツボつたのか笑いを堪えて悶絶していた。それはあからさまに球根違いである。

そんな中、アタランテは息を切らしながら彼らに向かいこゝ声高に興奮気味のまま、話をしはじめた。

「私を娶れと言つてるんだ！ 勝負に勝つたんだから誰か貴様らの中の一人の伴侶になつてやると言つてる！」

「と言われましても」

「僕らアイドルなんで」

——これは困った。

最初に娶るつもりなど微塵もなかった彼らだが、まさか、彼女自身から娶れと言われ
るとは予想だにもしてなかった。

これは週刊誌が賑わいそうだ。

という具合だが、ここで、体操着のスカサハは何か閃いたのかアタランテの耳元に近
寄るとコシヨコシヨと耳打ちで話をしはじめ。

それを聞いていたアタランテはそんなスカサハの耳打ちに何度も頷きながら耳を傾
けて話を聞く。一体何を企んでいるのだろうか？

すると、アタランテはしばらくして咳払いをし改めてY A R I O達に向かい合うと声
を上げてこんな事を告げはじめた。

「私を煮るなり焼くなり好きにしろ！ いっそのこと殺せ！」

そう啖呵を切るアタランテ。

すると、彼らは普段からの条件反射からか、そんな事を口走るアタランテにこんな事
を告げはじめた。

「えっ！ その命捨てちゃうんですかっ?！」

「だったら僕らがもらっちゃって……。 はっ！ しまった！」

「よっし！ 聞いたか！ スカサハ！」

「ああ、確かに聞いたな」

「あー!! 汚ねー！ ずるいよそれー」

そう言いながら、入れ知恵をしたスカサハとハイタッチを交わすアタランテ。

言質が取れたのでこれで何も問題はない。

むしろ問題しかないのだが、彼らのいつものやりとりを見ていたスカサハの巧妙な罠だった。女とは時に怖いものである。

しかし、先程まで火花を散らしていたアタランテとスカサハはもういつのまにか仲良くなっていた。

となったところで、とりあえずアタランテさんを娶らないといけなくなったので、Y A R I O 男性陣は作戦会議をする事に。

「どうすんよ、俺、リーダー結婚するまで結婚しない宣言してるよ?。」

「俺も俺も」

「やつべーな、ベディ、お前、言っちゃったんだからもらっちゃえよ」
「えー!? いや、それは無いっすよー! 確かにめっちゃ美人だけど! 俺もリーダー結婚するまでしないって決めてるし!」

そう言いながら、アタランテの娶り会議が始まる。人生の分岐点である結婚だが、こんな風な会議をするのは初めて。

しかも、自分達が言った手前、なんだか断れない雰囲気、ここで応えなければ男が
廃る。

「じゃあ、リーダーで良くね?」

「なんでやねん! いや、おかしいやろ!」

「あんた、どうせ後、半世紀は結婚しないんだからさ」

「いや、そんな事したらスカサハ師匠が怒りそうな気はする…」

「えー、だって嵌めたあの人じゃん、そりやないよー」

「僕の実権はないんやね、リーダーやのに」

「……………選択権がないリーダー。」

とはいえ、言ってしまったものは致し方ない、形とはいえ、誰かがアタランテを娶らなければ。

すると、スカサハはベデイの背後に近寄ると彼の肩をポンと叩き、にこやかな笑顔でこう告げはじめた。

「もうこいつで良いな、ベデイ、貴様に決まりだ」

「ええっ!? オレエ!?」

「師匠からご指名はいりました」

「というわけで、ベデイ、よろしく」

「いや聞いてないよー、そんなのつてアリですか!? 兄イとかヴラドで良いじゃんか!」
「市役所に入籍届け出しに行くのは早めがええでー」

そう言いながら、スカサハから指名打者に選ばれてしまったベデイはこうしてメンバー全員の中から選ばれる事に。

とりあえず話はまとまった。スカサハ師匠から直々指名なら致し方ない。

というより元々、彼がもらっちゃつてもなんて言ったのが原因なので嫁にもらうのは当たり前である。

すると、ベデイの前に来たアタランテは顔をほんのり赤くしながら彼にお辞儀をしこ
う告げ始める。

「不東者だが、よろしくお願いする」

「ちなみに結婚式はどこです？ オススメとしてはやっぱりキャメロット城で盛大に
するのがいいと思うけど」

「入籍届け書かないとねー、ハンコもいるよハンコ」

「もうこれ断れないじゃんかー、もうー」

そう言いながら、トントトン拍子に進む話に打ちひしがれるベデイ。すると、アタラン
テは悲しそうな表情を浮かべはじめる。

それはそうだ、あからさまにそんな風にされてはアタランテとしてもなんだか、申し
訳がない。

結婚とは一生に一度、自分が望まれてないとなれば悲しくなるのは当たり前前の話だ。
すると、ベデイはそんなアタランテの顔を見ると、すぐに、彼女に近寄り、頭を下げ
てこう告げはじめた。

「…俺と結婚してください」

「…ああ、こちらこそ…その…はい」

「…女性に応えるのがアイドル。」

決して女性を悲しませるような事はしない、それが、Y A R I O の男気というものである。

このベデイの潔い男気に周りからは祝福の拍手が巻き起こる。実に新年早々からめでたい。

「見てください、リーダー、あそこに裏切り者がいますよ」

「ほんまやな、結婚かあ僕より先に結婚してもうた…めでたいなあ…」

貰つてもいいとか聞くからそうなる。しかし、確かにアタランテのような美人が嫁になるのは遥かに羨ましい限りだ。

しかし、一同はこうも思う、これは絶対、ベデイは尻に敷かれてしまうだろうと。

そして、哀愁漂う我らがリーダー。しかし、人生とはそういうものである。

だが、このベデイの結婚に対し、異議を唱える聖女が二人いた。

「待った！ ベデイ！ 貴方！ 私たちというものがありませんながらそんな事が許されるとでも思っているのですか？」

「そうよ！ 貴方、心に決めた嫁がいながら結婚するなんて許さないわよ！」

「おーと、これは面白くなって参りました」

なんとここでまさかの修羅場が…。

しかしベデイ、まさか、聖女である二人に二股をかけていて三つ巴のドロドロな展開になっているのか!?

だが、よく考えれば二人ともベデイが拾って来た英雄達、彼女達がそうだった可能性も捨てきれない。

すると、そんな彼女達の言葉を聞いたベデイはハツとした表情を浮かべている。そうだ、忘れていた。自分には…。

「なんて事だ。そうだよ、俺の嫁ビアンカじゃん！」

「そうですよ！ 私たち、ビアンカを愛する者としての固い絆を忘れたのですか！」

「ビアンカ党まで作るって言ってたじゃない！」

「……つてドラクエかい！」

なんと、ビアンカという名の村娘を愛する聖女同盟の一員であったのだ。

村娘、このワードに惹かれた者たち、しかも幼馴染とくれば、もうこれは、ジャンヌとマルタの二人としては完璧に自己投影した愛すべき人物である。

つまり、ビアンカ以外を嫁にするとは何事だとベデイに告げているのだ。

だが、アタランテは聖女二人にこう反論しはじめた。

「ならば！ 今日から私がお前のビアンカだ！」

「いや、アタランテさんですよ」

「違う！ 私が！ 私たちが！ ビアンカです！」

「そう！ 私達のビアンカよ！」

「もう三人とも何言ってるかわかんない」

ヴラドもこれには流石に突っ込みを投げざる得なかった。

つまり、ベデイと結婚するにはビアンカにならねばならないが、ドラクエの影響を受けすぎた聖女二人はビアンカに自己投影しすぎて自分こそがビアンカだと思っている

らしい。

ちなみに二人とも、嫁はビアンカである。つまり、ビアンカがビアンカと結婚して以下略。

と言った具合にビアンカがゲシユタルト崩壊してしまい、もはや収集がつかない事態に。

とりあえず、場を一旦しずめるため、リーダーはベデイにこんな質問を投げかける。

「え？ つまり、ベデイの嫁さんって最終的に誰なん？」

「それはもう、間違いなくビアンカだよ」

——ビアンカが嫁です。

というわけで、アタランテさんとの婚約はこうしてうやむやに、仕方ないのでとりあえず彼女にはカタッシュ村で働いてもらう事になった。

いつか、彼女も立派なビアンカになった暁にはきつとベデイと結婚もできるに違いない。

というわけで、またもや新たな人員を加えて彼らはカタッシュ村に帰ることに。

何はともあれ、これで一件落着。

狩人である彼女から学べることもきつと多いだろう。

第一回ウルトラマンカタツシユギリシャ箱根駅伝はこれにて終了。今年も皆さまよろしくお願ひします。

今日のY A R I O。

1. ビアンカに憧れる英雄達。
2. アタランテさんカタツシユ隊員に。
3. ギリシャ箱根駅伝終了。

北欧神話蛇駆除大戦 ア・オダイシヨウ・タイジ

刀の指南 その2

さて、今日はなんともめでたい日。

というのも、入院していた沖田さんが復活を遂げたのである。カタツシユ村病院が誇る医療チーム、team medical Dragonの医療技術の賜物だろう。

そういうわけで、退院した沖田さんを彼らは出迎える事に元気な姿を見せてくれる筈だ。

すると、しばらくして、元気な沖田さんが刀を携えニコニコと笑顔を浮かべて彼らの前に現れた。

「沖田さん！ 無事に復活しました！ いえーい！ 皆、観てるー？ 皆の大好き沖田さんですよー！」

「おかえりー、というより初登場から即退場してましたが、なんとか調子が戻って何よりですよ」

そう言いながら、調子に乗っている沖田さんに厳しいヴラドからのお言葉、病弱だから致し方ないとは言え、正直、あの吐血はテレビ的にNGなグロテスクな絵面だった事はメンバーの記憶に新しい。

そんな沖田さん、彼らを送ってくれた着物を着用し完全復活！

しかし、着物の下の丈が短くてスースーしてそうと刀を携えているモーさんは元気な沖田さんを見てそう思ったのだった。

「むふふ、これで沖田さんの株も今日からだだ上がりです。頼りになってなおかつ可愛い謎の刀使いの匠！ いやー、このミステリアスな感じが私的には合ってますとも！」

「はい、という訳です、前回、刀の使い方をお教われなかったという事で、沖田さんにモーさんがご指導してもらおうという事です」

「え？ まさかのスルー？ スルーするんですか？ カルナさん」

そう言いながら淡々と話を進めるカルナに思わず顔を引きつらせる沖田さん。軽く話をスルーされた事が地味にダメージを与えてきたらしい。

それについて、カルナはヴラドにこんな事を。

「この娘もなかなか癖があるね」

「めんどくささで言ったらどんくらい?」

「リーダーよりは下くらいでスカサハ師匠とどっこいどっこいかな」

「ちよっ!!? なんで私そんな扱いなんですかー!」

「……英雄は目立ってなんぼや。」

そう、桜セイバーもとい、沖田さんだから仕方ないのである。製作者から寵愛を受けし沖田さんが愛されてしまうのは致し方ない事なのだ（本人談）。

というわけで、これまたキャラが濃い沖田さんを迎えたカタツシユ隊員は早速、すっぽん沼江を携えているモーさんの元へ。

「今日は先生が刀の使い方を教えてくださるぞー!」

「押忍ッ!」

「ほんと楽しそうだね、あんた達は」

気合いの鉢巻を頭に巻いて、モーさんもカルナの言葉に意気揚々。元はモーさんに関

してもめんどくさい性格だったのだがだいぶ丸くなってしまった。

よくよく考えたら、カタツシユメンバーを含めて関係者の英雄はめんどくさい性格のメンバーだらけなのでは？ と、野暮な突っ込みは入れてはいけない。

では、早速、可愛くて強い桜セイバーこと沖田先生から刀の使い方についてのご教授を受けることにしよう。

「はい！ では私を使う天然理心流についてですね！ 日本の古武道の流派。剣術、居合術、小具足術を含み、柔術、棒術も含んだ総合武術です！」

「ほえー、刀の技だけじゃないんですね」

「そうなんです！ 実践では刀が折れる事さえあります！ そんな時は鞘で！ 鞘が駄目なら拳で！ 拳が駄目なら頭突きで！ これが私達新撰組のモットーですの！」

天然理心流の稽古の中心は木刀での組太刀が主となるが、他に各種の構え、素振り、移動稽古、抜き付けなどの稽古が良く行われていた。

天然理心流の特色のあるものうちのひとつとして「平晴眼」というものがある。これは、他流派という「正眼」と呼ばれる構えであるが普通、正眼の構えというのは自分の体の正中線に構えを取る。

武道では、正中線に人間の急所がありこれを攻防するのが基本とされているのだ。

しかし、天然理心流の平晴眼の構えでは、普通の構えより右側に刀を開いて構える。

そうすることにより普通の正眼の構えでは、首を狙った突きでは、かわされやすいが平晴眼の構えから突いた場合、例えかわされても次の攻撃に移行しやすいのである。

これにより、突きと斬るといった二つの攻撃を即座に出来る構えなので、すぐさま、相手の頸動脈を斬れる体制にもっていけるようになっていいる。

「このことから沖田さんの剣術は「沖田の三段突」とか「無明剣」とか呼ばれていたんですよー? どうですか? すごいでしょう?」

「へえーかつこいいな!」

「モーさんにはびつたりの剣術かもね、性質的に」

「今回、教える人が基本脳筋っぽいもんね」

「グハア……!」

「……病弱と見せかけた脳筋。」

まさか、スカサハ師匠同様の思考の持ち主がいるとは…、いや、もしかしたら基本的に英雄とは脳筋が大半を占めているのかもしれない。

というわけでヴラドの毒舌で思わず精神的ダメージを受け吐血する沖田さんに早速、お手本を見せてもらおうことに。

今回、使うのはこちら。

「はい！ という訳で用意しましたよマグロ！」

「ま、まま、マグロオ!？」

そう、今回、用意したのは130kgにも及ぶ巨大なマグロ！ だん吉で足を運んだ冬の大間の海で取れた超巨大マグロである。

そのお値段、1キロ辺り5千円〜1万円くらい、しかしながら、これは自分達で釣ってきたので実質的にはタダである。

ちなみにスカサハ師匠がゲイボルク一本突きで仕留めたマグロである。

デイルムツドは吊るし上げる大間の本マグロを見上げながら目をまん丸にする沖田さんにサムズアップする。

「さあ！ どつからでもどうぞ！」

「いや!? マグロって！ えっ!? 沖田さんがこれ捌くんですか!！」

「自慢の無明三昧おろしとやらを見せてくださいよー姉御ー」

「三段突き！ 突きなのっ！ 三昧おろしじゃないんですっ！」

「……三昧おろしでなく突きなんです。」

そう、突きでは魚は捌けない、これが天然理心流の限界なのか、沖田さんは期待の眼差しを向けてくるカタツシユメンバーにそう告げる。

だが、これに対してモーさんとヴラドは。

「なんだー、ならデイル兄イの方がすげーよな、だって三昧おろしなんて簡単にしちゃうもんな」

「ジャックちゃんだって幼女なのに本業医者だけど魚の解体めっちゃ上手いからねー」
「う……！ ぐぬぬ……！」

これは沖田さんも言い返せない、天下の天然理心流であればマグロの一匹や二匹、解体できてしまうだろうという期待を裏切ることではできない！

というわけで、沖田さんはカツ！ と目を見開くと覚悟を決めたように彼らにこう告げはじめた。

「いいですよ！ やりやいいんでしょ！ やれば！ やってやりますよ！ しかも目ん玉くり抜いてみといてくださいよ！ 見なかったら私がくり抜いてやりますからね！」

「なんか沖田ちゃん、芸人魂ついてきたんじゃない？」

「うん、リーダーとおんなじ匂いがする」

——芸人枠と言われる新撰組隊長。

デイルムツドとカルナの二人は腕を振り回しながらマグロと対峙する沖田さんの背中を見つめながらそんな話をしていた。

そんなこんなで、沖田さん、天然理心流をカタツシユメンバーの前で初披露。

抜刀の構えから、トンツと駆け出し始めると静かに口を開く。

「一步海峡超え……二歩大間……三歩包丁！ 『無明——三枚おろし！』」

スパスパスパーン！ つと沖田さんの振るう名刀が煌めき、吊るされている大間のマグロが頭を残して見事に身が切り裂かれ別れる。

そして、それを丁寧にキヤツチしてまな板に並べるデイルムツド。周りからは盛大な

拍手が沖田さんに送られる。

マグロを無事に捌ききった沖田さんはここでキリツとした表情で一言。

「マグロご期待ください」

「もう今年のやつは終わったけどね」

そう言いながら、綺麗に沖田さんが捌いたマグロを運送しにきたメイヴちゃんのトラックに積み込み始めるはじめるカタツシユメンバー達。

これらは、ブリテンをはじめとした街に運送され美味しい寿司や刺身などに使われる。

というわけで、沖田さんの天然理心流を目の当たりにしたモーさんもこれには感動したのかすぐさま彼女の元へ駆け寄り教えを乞うことに。

「すげー！ ど、どうやるんだ！ 俺にも教えてくれよ！ あんな風に魚を捌けるようになりてえ！」

「…そこは天然理心流を学びたいんじゃないんですね」

思わずモーさんの一言にガツクリとうなだれてしまう沖田さん、剣術指南を引き受けた師匠とはいえ何というかやりきれない。

マグロの解体に憧れるという部分で剣術を学びたいというきっかけは果たして良いのだろうか？

何はともあれこうしてモーさんは沖田さんから天然理心流を学ぶことになった。

「あ、私の事は母上と呼ぶと良いですよ、なんだかそちらがしつくり来ますので」

「はい！ 母上！」

「またモーさんのお母さんが増えたよ」

———日に日に増えるモーさんママ。

モーさんの保護者がだんだんと増えて来ているような気がするのは気のせいではないだろう。

少なくともナイチンゲール師匠とリーダーを含めて既に三人いる。リーダーに関しては男であるにもかかわらず母ちゃんである。

というわけで、沖田さんを母上と呼び、刀の指南を受ける事になったモーさんは名刀すつぽん沼江を使いこなす修行に入ることに。

目指すはマグロの三昧おろし。

あそこのレベルになればたとえ巨大な魚類だろうが蛇の怪物だろうが三昧におろせるようになるはず。

また、包丁の使い方やディルムツドに習いつつ天然理心流を沖田さんから学ぶことによりその技術は向上間違いなしだ。

さて、修行を終えたモーさんは名刀すっぽん沼江をどれだけ使いこなせるようになってるのか？

この続きは、次回！ 鉄腕／f a t eで！

そして、今回、出番がなかった我らがリーダーから綺麗に沖田さんが捌いたマグロに（二）で一言。

「隊長の体調が不安やったけど、これはおつきーマグロもイチコロやね」

「はい、寒いので頂きました」

ちなみに、ただいま別行動をしていたリーダーとベデイとスカサハは極寒の地、大間まで出かけております。

寒い地方でさらに寒いギャグ、これにはベデイも顔を引きつらせずにはいられなかった。

今日のYARIO。

1. 沖田さん新宝具無明三枚おろしを開発する。
2. 増えるモーさんのお母さん。
3. みんな大好き沖田さん復活（芸人枠）

蛇駆除 その1

蛇。それは、驚異的な攻撃力を兼ね備えた獰猛な肉食の爬虫類。

その生息種は世界を見渡してみるとなんと3000種類もあり、南極大陸以外には生息するかなりメジャーな生き物である。

そんな獰猛な蛇たちと戦い続け、何十年。

この男達は蛇という強大な生き物に果敢に挑み続けて来た。

「いやー、蛇ってどんな味だっけ？」

「もうしばらく食べてへんからなー」

「なんでアイドルが蛇は一般食材みたいな言い方してんのよ？ おかしいよね？ ね？」

蛇取り棒にしたゲイボルクを担ぐリーダーダーとカルナの二人にそう突っ込みを入れるヴラド。

その後ろでは嫌そうな顔をしたデイルムツドがベデイとスカサハ師匠の二人に引きずられながら連行されていた。

「嫌だー嫌だー！ 僕お家帰るー！」

「駄々を捏ねても無駄だ諦めろ」

「まあまあ、でつかいだけだから、蛇がでつかいだけだから」

「それが問題なの!! 一番の問題なの！ 俺蛇嫌いなの!!」

ーーーー大事な事なので念を押す。

さあ、舞台は北歐神話へ、キリスト教化される前のノース人の信仰に基づく神話であり。スカンディナヴィア神話とも呼ばれている。

その中でも有名なのが主神のオーディン。

オーディンは、北歐神話の主神にして戦争と死の神。詩文の神でもあり吟遊詩人のパトロンでもある。

魔術に長け、知識に対し非常に貪欲な神であり、自らの目や命を代償に差し出すこともあったとされていた。

「いやー命捨てちゃうなんてもったいないよね」

「俺たちが建築やらなんやら全部教えるからむしろ欲しいよね」

「だよなー」

ちなみに髭のおっさんから蛇退治を頼まれた訳だが、あれがオーデインさんである。

そんな、オーデインさんとの邂逅を髭のおっさんから頼まれたと済ます天地驚愕コンビとベデイ達は偉い神様達から怒られても致し方ない。

しかし、怒られていないあたり、多分、丸く収まっているのだろう。

さて、話しているうちにだん吉がミズガルズの最端、大蛇ヨルムンガンドの頭がある現場へと到着した。

「はい、というわけでついたわけなんですけれど」

「では、今回、ゲストをお呼びしてまして、蛇退治に協力してくれる雷神ツールさんにお越し頂いてます」

「今日はよろしくお願いする」

そう言いながら握手を交わすツールさん。

トールとは、北歐神話に登場する神様である。

主に神話の中でも主要な神の一柱であり、神々の敵である巨人と対決する戦神として活躍する。

その他考古学的史料などから、雷神・農耕神として北歐を含むゲルマン地域で広く信仰されたとされている。

「いえいえこちらこそ！ いやー、まさか、トールさんと共演できるとは…」

「あれ？ シビル戦争は？」

「あれは出演依頼が来なくてな…」

「はーい！ 話題は変わりますけど！ 今回トールさんもこの蛇駆除に協力してくれるそうなんです！」

そう言いながら、カルナが振った話題を変えるヴラド、ナイスフォローである。

Y A R I Oに縁が深い農耕神、怒らせるような言動は控えねば、さて、気を取り直して今回駆除をお願いされたヨルムンガンドについて説明しておこう。

北歐神話に登場する毒蛇の怪物。その名は「大地の杖」あるいは「大いなるガンド（精

「靈」と呼ばれている。

ロキが巨人アングルボザとの間にもうけ、たまたまその心臓を食べて産んだ3匹の魔物の一匹とされており、獐猛な毒蛇だとか。

詰まる話が、捨て子のような扱いをされた可愛そうな怪物なのである。

そこで、彼らは考えた。つまりロキさんが捨てちゃった蛇ちゃんなのである。

「退治はかわいそうだから、せめて毒抜いて保護しよつか」

「デカさ聞いてよくよく考えたら、多分調理できねーよそれ」

という結論に至る事に、しかし、この意見にデイルムツドはというと顔を真っ青にしていた。

獐猛な毒蛇、初夏を思わせる日差しと共に森にジメジメした湿気が漂い始めると、そろそろ厄介な蛇が動き出す時期。

そして、この季節が来るたびに思う、細い道で蛇に出会ったらどうしたらいいんだろう。

しかし、皆さまご安心ください。我らがアイドルが今回も馬鹿でかい毒蛇を相手にやってくれます。

まずは、現場で待つ事数分あまり、ある人物達の到着を彼らは待った。

「あ！ 来た来た！」

「おいギル様ー！ こつちこつち！」

「ぬはははははは！ 待たせたなア！」

「わはははははは！ 余が来たぞオ！」

「相変わらず元気がよろしいようで」

そう、天地驚愕コンビと今回蛇取り棒役のエルキドウさん達である。

楽しそうにだん吉に乗って現れた彼らだが、今回、強力な助っ人だ。

すると、ギルガメツシュ師匠はここで何かに気がついたのか、乗ってきただん吉から降りるとテクテクとトールの元へ。

「ん？ 貴様、どこかで…見覚えがあるような…」

「あー、ギル師匠、その人がトールさんです」

「ああ、なるほど、道理でな…千里眼で見た気がしたがやはりそういう事か」

「ギル師匠の千里眼って映画観れるんですね」

「そうだ、便利であろう?」

そう言いながら、何やら勝ち誇ったようにドヤ顔を見せてくるギル師匠、本人談によるとシリーズは全部見たいらしい。

流星は英雄王、見識の広さは海よりも深い。なんでもお見通しである。

ハリウッドで活躍中のマイティなツールさんからギル師匠達がサインを貰ったところで、早速本題に入ること。

「ヨルムンガンドを捕獲して毒抜きをするか…なるほど」

「ほら、毒つていろんなのに使えるじゃん、殺虫剤とかさ、薬品なんかにもさ」

「どうせなら人の役に立つ事に使いたいですよね」

「靈草を躊躇なく畑の肥料にするお前達が言うとなんか知らんが説得力があるな」

——人気アイドルゆえの謎の説得力。

いや、この場合、アイドルというよりかは農業に近いのだが、色んなところに渡り、素晴らしい秘宝だろうが宝具だろうがなんだろうが農具にしてきた彼らが言う事はやはり違う。

靈草すら真昆布と変わらない扱い、ゲイボルクは釣竿や鍬、拳句は蛇取り棒。デユラ
ンダルなどの名刀は食材を切る包丁なんかになった。

という事で幻の大蛇ヨルムンガンダの捕獲が当面の目標なのだが。

「トールさん、どうやってヨルムンガンダ見つけたの？」

「釣りだ」

「釣るか！ いやー久々だなーオオカミウオなら8月末の北海道・オホーツク海で釣り
上げた事あるけどね！ 俺たち！」

「蛇なら楽勝やろー」

「ちよつと規模考えて？ 漁船転覆するから」

そう言いながら、自信ありげに語るリーダーとカルナの二人の男達に突っ込みを入れ
るヴラド。

すると、腕を組みながら話を聞いていたスカサハ師匠は納得したように何度も頷きな
がらこう語り始める。

「それより素潜りしてゲイボルクで突いた方が早いだろう」

「スカサハ師匠、毎回毎回、人外技を軽々とやろうとするのをやめましょう、扱い辛いからっ!!」

「師匠やから仕方ないやん」

「そうだぞ、ヴラド、今更何を言っておるのだ」

「貴方達も納得しないでっ!!」

そう言いながら、ねえ? と何言っただこいつと言わんばかりに顔を見合わせているギル師匠とリーダーの二人に声を上げるヴラド。

今更何を言ってるのかと、スカサハ師匠は木を素手で張つ倒したり湖の妖精を湖に潜ってちよつくら引き摺り出してくるなんてことを平気で言っただけのけるとんでも超人だ。

おまけに足もかなり早い、陸上狩人をぶち抜いていくし、巨大なマグロすら大間で槍一突きで仕留めてしまう。

ある意味というか、かなりの変態である。

———全身タイツだから当たり前。

「さて、変態師匠は置いておくとして、蛇駆除の基本的な事からおさらいしましょうか」
「マーリン師匠！　お願いしまーす！」

さあ、今回も蛇駆除について説明して下さるのはこの人。

最近、魔法以外のどうでも良い知識が付いてきたなとボヤいている我らがマーリン師匠から皆さまに蛇駆除についての解説をお聞きしてもらおうとしよう。

「蛇駆除の話をしよう。狭い道で急にヘビに出くわしたらどうすれば良いか？　まず取るべき行動はヘビの体長くらい離れることだね、突然、出会った時はすぐに距離を取り離れる。駆除は体勢が整ってから、が鉄則だ。蛇は昼間は穴に潜んでいることも多いんだね」

地中にいるうちはヘビの動きが制限されるが、引き出した時に暴れ出すので十分に距離をとる。そして、潜り込もうとするハブの頭をハブ捕り棒で掴み取るのだ。

毒ヘビの中には目を狙い、毒を飛ばしてくるヤツも。慢心は危険である。

長年に渡りハブなどの蛇と渡り合ってきた彼らだからこそ知っている長年の知恵。

さて、エルキドウさんが巨大な蛇取り棒に変身したところで一同はツールさんが用意

してくれた釣竿を持ちそれをヨルムンガンズが潜んでいそうな場所に垂らしはじめた。

あとはこれにヨルムンガンズが掛かるのを待つだけだ。

皆が並んで座り釣竿を垂らす中、空いた時間を使いベディがツールさんにこんな質問を投げかける。

「そう言えばハルクさんとはどんな感じなんですか？ トールさん」

「ん？ そうだな、中々やばい奴だ。全身緑だし、奴からいきなり殴られたりなんて事は日常茶飯事だな」

「ハリウッドって楽しい？ 俺らもデビュー出来るかな？」

「実に快適だな！ みんなからチャホヤされるし給与はいいいな」

そう言いながら話すツールに目をキラキラさせる我らがカタツシユ隊員達、羨ましい限りだ。

スカサハ師匠はハリウッドがどういったものかわからないため首を傾げている。

昔には映画のような娯楽は無いし、当たり前なのだが、しかし、ギル師匠とマーリン師匠だけはそんな彼らの会話を楽しげに聞いていた。

千里眼とはやはり、非常に便利なものらしい、身につけておけば損はない。

そんな中、次第に時間は経過していく。

トールさんと共に釣りをする一同は果たして伝説の大蛇ヨルムンガンドを捕獲することができのだろうか？

そして、そんな中、オジマンディアスはギルガメッシュにこんな事を。

「今度、ニトクリスのピラミッド使つて余もそれ観てみたいんだが」

「それは良い案だ！ 太陽の！ だん吉を使えばスクリーンくらい用意できるだろうか
らな！ シリーズものだから長期戦になるぞ！」

「なんと…、それは覚悟せねばな」

「ついでにプリズン破壊というシリーズも観るのもおススメする、というか我が観たい」
「あんたら他人のピラミッド使つてなにやってんのよ」

「…確かにその通り。」

ニトクリスちゃんのピラミッドなのに最早王様達の娯楽施設と化している。しかも、
本人達はさも当たり前のように使っているらしいのでたちが悪い。

そんな中、ギルガメッシュ師匠は突っ込んで来たヴラドにこんな話題を降りはじめ
る。

「最近、こやつと共に英雄格付けチェックとやらのオフアーが来ておるのだが」

「ええ!? マジっすか!」

「いいなあ、俺らも出演したいのに中々オフアー来ないんですよねえ」

「一流英雄である余達に掛ければどんなものでも余裕で当てられる自信はあるがな」

「——確かに舌はかなり肥えてる二人。」

ちなみに一流英雄ではないが、一流アイドル兼農家ならば彼らにも自信がある。機会があれば是非、英雄格付けチェックに出てみたいものだと思つた。

さて、こんな感じにのんびりとヨルムンガンダが竿に掛かるのを待つ一同。

彼らはヨルムンガンダに会えるのか?

この続きは…次回! 鉄腕 / f a t e で!

今日のY A R I O。

1. ヨルムンガンダを釣竿で釣り始める。
2. ゲスト、ハリウッドスタートールさん。

3. 天地驚愕コンビ、英雄格付けチエツク出演
4. 蛇退治の達人（アイドル）

蛇駆除 その2

蛇釣りを始めて数時間あまり。

釣竿には一向に蛇が掛かる気配がない、そんな中、暇を持て余したこの人は我らがリーダーの頭の上に豊満なそれを乗せたままこんな風な愚痴をこぼしていた。

「なあ…しげちゃん…いつになったら釣れるんだー？　なあー」

「スカサハ師匠、重い、おっぱいが重いんやけど」

「暇だー暇だー暇だー」

そう、退屈そうにスカサハ師匠が豊満なそれがリーダーの頭の上に乗っかっているの
である。主に胸部だが。

暇だーと叫びながらリーダーの頭の上で大きなものが上下に動きながら何度も頭部
を直撃していた。

「んー…中々釣れないねー」

「やつぱり餌があかのかねえ…イカじや釣れないじゃないか！　ってことかいな」

「…リーダーなんか言った？」

「ごめん、なんでもあらへん」

リーダーの寒いギャグも寒さを増し、思わず扱いもメンバーからの扱いも雑になる。

まあ、リーダーの扱いが雑なのはもともとなのだが、数時間も蛇が釣れなければそうなるのも致し方ない。

そんな中、カルナは釣竿を見上げながらこんなことを呟きはじめる。

「そーいやさ、俺たちって今までブリテンでそうめん飛ばしたり農業したり霊草でラーメン作りはじめたり聖剣じゃなくて聖刀とか作ったりしたりしたけどさ…」

「兄ィ、そこら辺、言い挙げたらきりないよー」

「いや、そうなんだけど。正直、楽器持つてるより安心感あったんだよね、今もだけど」
「それはもう病気の類だと思うよ、俺もだけど」

「…もはや手遅れです。」

医者も匙を投げるレベルである。カタツシユ村病院にいる朝田先生でも治せそうに無いので間違いない。

蛇は釣れてないが、妙な安心感のようなものを彼らは感じていた。

これを手に持っていた方が落ち着く、何故だかわからないがそんな想いは皆同じであつた。

「やっぱ釣りには良いな、我はこんな風に他愛の話をするのが面白い」

「余も同じ気持ちだ」

「アウトドアの醍醐味ですよね」

「しかし待つのは退屈ではないか、私は面白くないぞ」

そう言つて、プクーと頬を膨らませるスカサハ師匠。

たしかに女性にはこんな風にひたすら待つ釣りをしたりという事は退屈に感じてしまふのかもしれない。

素潜りの方が早いというあたり、スカサハは行動派なので尚更だろう。

とキリが良いところで、ここで彼らの元にある人物が二人、宅配便だん吉に乗つてやつてきた。

もちろんドライバーには我らがスーパーケルトアイドルであり、物流に特化した物流女王ことメイヴちゃん。

そして、あと二人ほど弁当を届けにやってきた、その二人というのは…？

「はい！ 皆！ お昼ご飯を持ってきたわよー！」

「カルナ様ー！ 久方ぶりですね！ 会いたかったです！ いえ…ここは旦那様と…ぶっ！」

「何、勝手な事言ってるんだこのうさ耳ファラオ！ おーい兄イ！ 弁当持って来たぜー！」

「うわあ…なんか増えたよ…」

「なんか増えたね、水吸った干しワカメみたい」

ー…美女達を干からびたワカメに例える。

めんどくさそうに呟くヴラドに同意するかのようには頷くカルナ、またまた騒がしいメンバーが加わってしまった。確かに味噌汁などに使う際はかなり増える。使う分量を間違えたら味噌汁がワカメだらけになるのは経験済みだ。

そう、その二人というのはニトクリスとモーさんである。

気安くカルナに弁当を届けようとするニトクリスを押しつけているモーさん、せつかく静かに釣りができると思っていたらこれである。

そして、メイヴちゃんもツカツカと釣竿を垂らしているスカサハとリーダーの元へやってくると満面の笑みを浮かべながらこう訊ねる。

「どう？ クーちゃん釣れてる？」

「うーん、全く釣れへんねえ、蛇とか釣った事あらへんしなあ…」

「そつかあ！ あ、なら、私もそれに付き合ってもいいかしら？」

「ん？ ええよ！ ええよ！ 掛かるのはもうちよい先やろうしな！」

「ん なっ…!!」

そう言って、嬉しそうにリーダーの隣に腰掛けるメイヴ。それを見ていたスカサハは軽くシヨックを受けたのか固まってしまった。

そんなスカサハの姿が目に入ったメイヴはしてやったりと言わんばかりに彼女に勝ち誇ったような表情を浮かべる。

流星は女王メイヴ、したたかである。清楚で固められたあざとさが滲み出ているようだった。

とここで、デイルムツドは運ばれた弁当を見て皆にこんな提案を持ちかける。

「おーい、とりあえずメシにしようぜ！　メシ！　せつかく弁当あるしさ」

「おっ！　いいねー！」

「ちよつとオカズ足んないね、俺、作るわ」

そう言つて、流れ板のデイルムツドは昼食に入る事にしたカタツシユ隊員達に料理を振る舞う事に。

今日のメニューはこちら、北欧という事で天然の鮭を使った料理を作る。

まずは、鮭の切り身を軽く炙り、焼きサーモンにしていく。火がないので火力を調整したカルナの目からビームがここで役に立つ。

ほんのりと生焼けてきたら、次に取り出したのはイクラとウニ、これを上に乗せ、彩りよく盛り付ける。

サーモンとの間に大根をおろしたものを乗せるのを忘れてはいけない。

「おお！　これは！　…なんと素晴らしい！」

「これがジャパニーズサーモンですよ」

「これが…ジャパニーズサーモン!? 何という鮮やかさだ!」

——便利な言葉、ジャパニーズ（日本製）。

ちなみに産地は北欧のサーモンのだが、ツツコミは野暮である。

これが世界に通ずる流れ板デイルムツドの料理の腕前、これには一流の職人も思わず太鼓判を押すこと間違いなし。

伊達に長年、Y A R I O の料理番を張っていない、これが、デイルムツドの腕前だ。

「…久々か、デイルムツドの料理は」

「デイル兄イ絶対将来良いお嫁さんになるよ!」

「俺、男だけどな! がははははは」

ベデイのボケにそう笑い飛ばすように告げるデイルムツド、リーダーが結婚するまで独身を貫くと誓った男はやはり器もデカかった。

自分よりも他人を大事にし、そして、自然に感謝する彼らの常に何事にも挑戦する姿勢は人から好かれ好感を得てきた。

雷神・農耕神と知られているツールもまた例外ではなかった。それは、このサーモン

料理を出される前から彼らから感じ取っていた事。

彼らの為ならどんな事でも協力してあげたい、そう思わせる何かがある、神、英雄問わず彼らにはあつた。

「こいつは美味いな！ 本当にびっくりだ…」

「醤油や調味料かけるとまた違いますよ」

「うむ、やはりデイルムツドは我が見込んだ通りの弟子だ。褒めてやる！ 誇らしい限りだぞ！ わははははは！」

「余も黄金の同意見だ、貴様の料理は食べても温かみがある身体に染みる味だな」

トールだけでなく、それは、英雄王であっても太陽王であっても同様だ。

デイルムツドは嬉しそうに彼らの言葉を聞いて満足げに微笑んでいた。

幼き頃から包丁を握っていた甲斐があつたというもの、料理を作つて数年の腕には年季が入つた宝具に勝ると劣らない歴史があつた。

「お粗末様でした」

「その腕惜しいな…、どうだ？ 貴殿さえ良ければブリュンヒルデという素晴らしいワ

ルキューレがおってな……」

「へえ、そうなんですかー、そのプッチンプリンさんってどんな方なんですか?」

「ブリュンヒルデさんっ! 一文字もあってねーよ!」

「……ワルキューレプッチンプリンさん。」

聞いただけでプリン状のスライムみたいな人物を想像してしまいそうだ。

しかしながら、ブリュンヒルデさんである、デイルムツドは一文字も掠ってはいなかった。

これには失礼だとヴラドも思わず激しい突っ込みを入れざる得ない、当たり前である。

「だって言いにくいんだもん!」

「だもん! って……」

「確かにブリュンヒルデって嘸みそうになるよね、気持ちわかるよ」

「いや、わからんやろ」

「……気持ちわかる。」

共感のカルナの一言に思わず突っ込みを入れるリーダー、確かに、それは人によりけりだろうがそれは、ブリュンヒルデという名前の捉え方次第だろう。

トールさんが言うには依存的で何とか癖が強い女性であると言う話であった。早い話がブツチギリでイカレたイカした女という話であった。

ブリュンヒルデはワルキューレの一人で、古エツダではフン族、ブズリの娘でアトリ王の妹とされている。

主神ヴォータンと知の女神エルダの娘とされる。ニーベルングの指環では愛馬を持ち、愛馬はグラナーネまたはヴィングスコルニルという。

だが、ブリュンヒルデはヒャームグンナル王とアウザブロージル王の戦いにおいてオーディンに逆らった為、神性を剥奪されたとされている。

ブリュンヒルデをトールから紹介されたメンバーはというと。

「大丈夫、もう既にブツチギリでヤバい女の子達で周りにベルリンの壁出来てるからさ俺ら」

「見てよ、あんな全身タイツ着てるどう見てもヤバい人が俺たちの師匠なんだよ?」
「…それもそうだな」

「……雷神トールも納得してしまう面子。

一方、ヤバい女認定されてる師匠は相変わらずメイヴと釣竿を呑気に垂らすリーダーを挟んで牽制しあっている。

あれを見てれば大体のことは把握できてしまうだろう。そうでなくても来て早々、素潜りでヨルムンガンドをぶっ刺してくるなんて事は普通の女の子言わない。ガンダムモバイルスーツみたいなフルセットを着てるモーさんしかり、珍妙なメジエド様衣装を着たりしてるニトクリスしかりである。

という訳で？

「こいつがブリュンヒルデだ……」

「……どうぞ……よろしく……」

トールさんにそのブリュンヒルデさんを連れてきてもらった。

白い長髪に幸薄そうな佇まい、さらに槍を持っている彼女の姿を目視で確認した一同は顔を見合わせる。

そして、しばらくして、彼女の隣にスツと何も言わずにスカサハ師匠を並べてみた。

「…あれ？ 師匠、随分、雰囲気、幸薄くなりましたね？」

「あれだな、全身タイツじゃない方の師匠だ」

「こつちの方がいいな！」

「よーし！ お前たち！ そこに全員正座しろ！」

「あの…えつと…」

スカサハの隣に並べられ、あたふたしているワルキューレのブリュンヒルデ。

最近、スカサハの扱いが師匠なのに雑になりつつあるカタツシユメンバー、それだけ愛されているという事だろうが果たして影の国の女王にこんな扱いをして良いものだろうか？

しかし、物腰というか雰囲気似ている、特に槍持っていることか声質とか。

「二人二役大変つすね」

「コラ、メタい話ししないの」

そう言って、笑いをこぼしながらベデイに突っ込みを入れるヴラド。そこは触れてはいけないところである。

そして、話を戻すが本題に、そう何故、この場にブリュンヒルデさんがやって来たのかだ。

「それで…、そのブリュンヒルデさんはどうしてトールさんから連れてこられたの？」

「私は何やらお見合いだと、言われましたけれど」

「そういうことだデイルムツド、お前の嫁にどうだ？」

「え？　そういう流れだったわけ？　今？」

どうやらトールさん、デイルムツドの板前の腕前を大変お気に入りの様子。

どうにかして彼らとのしがらみを作っておきたいという思いからこういった提案に思い至った訳である。

するとここで馴染みある我らがADが仲裁に入った。

「すいませんーちよつとそう言った話はウチの事務所を通してもらわないとですなー」

「あ、ADフィンじゃん」

「そうだねー怖いもんねー週刊誌砲」

そう言つて苦笑いを浮かべるカルナ。

A Dフィンの仲裁に目を丸くするツールさん、流石は人気アイドルY A R I OのA D、年季が違う。

——国民的アイドルにだって怖いものはある。

という訳で今回のツールさんが持ちかけてくれたお話はお流れに、というよりいつのまに現れたのかA Dフィン、気を取り直して。

「とりあえずブリュンヒルデさん、はい」

「これは…?」

「釣竿ですな」

とりあえず釣竿をブリュンヒルデさんに手渡しておく。これでヨルムンガンドが釣れる確率も上がるはずだ。

そう、ヨルムンガンド捕獲のため協力できる人間は出来るだけ多い方が助かる。

という訳でブリュンヒルデさんも含めて、メンバー全員の釣竿がずらりと並ぶ、これ

ならヨルムンガンドが釣れるのも時間の問題だろう。

彼らの挑戦は続く！

「ちなみにウイディングドレス着るのは、ディル兄イの予定だったらしいよ」
「え！ 俺が着んのっ!?!」

今日のY A R I O。

1. 蛇釣り用の釣竿が追加される。
2. トールさん日本食に目覚める。
3. 楽器より農具が落ち着くアイドル。

閑話2 YARIOは人理を救えるか

人理継続保障機関フィニス・カルデア。

人類の未来を語る資料館であり、時計塔の天体 科を牛耳る魔術師の貴族である、ア
ニムスフィア家が管理する機関。

魔術だけでは見えず、科学だけでは計れない世界を観測し、人類の決定的な絶滅を防
ぐ為の機関なのである。

さて、そんなカルデアにいるマシユ・キリエライトはある伝承についてマスターであ
る女性、藤丸立香と共に医療スタッフであるロマニ・アーキマンの医療室を訪れていた。

三人はいつものように録画していたある番組(伝承)を見るためにここに集まって、毎
週の楽しみであるそれを見に来ていたのだ。

「いやーやっぱり今週の鉄腕カタツシユも面白かったわ！ ねっ！ マシユー！」

「はい！ やっぱり作るなら木からですよね！」

「そうだね、間違いない！ やっぱり無人島なんか持って行くなら彼らみたいな人達が理想だよね！」

「わかるー、私、面接の時にそう言ったもん」

「素晴らしいですねー」

そう言いながら、テレビの前であっている鉄腕カタツシユの感想を各自述べる彼女達。

やはり、国民的アイドルだけあって、皆に愛されている。

特に不可能な事がほぼ無さそうなところとか、メンバーが皆仲良しだとかそういう部分が好感を得ているのだろう。

すると、そんな声を聞いていたカルデアの所長にしてアニメスフィアの後継者であるオルガマリーはバン！ と勢いよく部屋の扉を開けるとほのぼのとテレビを眺めている彼女達に声を上げた。

「そうじゃないでしょ!?! 伝承っていうかテレビで歴史がこんなに変わってるのになんで特異点が出来ないの!?! おかしいわよね！」

「えー、そんな事言われてもー」

「最近、世界の歴史学者が頭抱えて農家に転身する事態にまで発展してるのに何言ってるのよー！」

そう、なんとここ最近、名だたる歴史学者が相次いで農業をはじめるといふ珍妙な出来事が起こっていた。

しかし、副業として始めたりという方がほとんどであるからして、正確には歴史学者としての仕事をしつつという話だが。

とはいえ、この事態に流石に所長のオルガマリーも顔をひきつらせるほかなかった。

「わかってる？　ねえ！　ちよつと！」

「とはいえねー、彼らのおかげで人理も修復する必要無いしねー」

「そうですよー、人理修復のプロだし、あの人達」

「だいたい捨てちやう人理は回収しに行きますからね」

「いやー、平和って良いものだねえ、あ、この後、医龍あるけど所長観ます？」

「え!?　本当に!?　やったー！　私、朝田先生大好きなのよねー！」

そう言って、皆と同じようにテレビの前に集まるオルガマリー所長、毎週の楽しみは

やはり欠かせない。

しかも、オルガマリー所長は大の朝田先生のファンである。

なんでも、あの大人でクールな部分と熱い情熱を持ち合わせているギャップがたまらなく好きだとか。

という個人の好みはひとまずすみに置いておいて。

「…はっ！ つて違あう！ 違うわよ！ この人達をどうにかしないとイケないんじゃないの？ って私は言いたいのに！ ねえ！」

「そうは言いますけど、所長、なんやかんやで彼らに救われてるじゃないですか」

「そうだよ、冬木で彼らが協力してくれたから今の君があるんだよ？」

そう言って、声を上げて否定するオルガマリーに諭すように告げるロマ二。

それは、数ヶ月前、彼らが人理焼却予定にされていた冬木市に訪れた時の出来事だった。

人理修復のために訪れた燃え盛る冬木市、その地で同じカルデアの魔術師であるレフライノールの裏切りにあい、肉体が死亡した状態で精神だけが特異点にレイシフトしてしまったオルガマリーは彼から消滅させられそうになっていたのだ。

しかし、急遽、燃え盛る冬木市を元の街に復興させようと訪れたカタツシユ隊員により、彼女の命は救われたのだ。

その時の光景がこちら。

『生きたまま無限の死を楽しみたまえ』

『いやあ！ まだ死にたく…』

自然に宙に浮き、引きずり込まれそうになるオルガマリー所長。

しかし、ここで、彼らは宙に浮いているオルガマリー所長の足に縄を括り付けるとリーダーが操るクレーン車でなんとか彼女の消滅に待ったをかける事に成功する。

そして、そんなオルガマリー所長を消滅させようとしているレフさんにベディは驚いた表情でこう訪ねた。

『えっ…！ もしかして、その所長、消滅させちゃうんですかっ！』

『いや…その、まあ見ての通りだが…』

『そんな！ 勿体ないですよ！ …良ければ僕らが頂いちゃっても』

『…貴方達がそこまでおっしゃるなら、構いませんが…精神だけですよ？』

『ほんとですか!?! AD! これは…!』
『セーフです』

こうして、オルガマリー所長は無事にカタツシユ隊員に鹵獲され、後になんか新しい肉体を与えられる事になった。

しかも、当然ながらこれだけではない。冬木市に訪れた彼らは人理焼却の話をしつから聞くと彼にこんな話を持ちかけはじめたのだ。

皆さんはもう予想がついているとは思いますがいつもの流れである。

『えっ…! この人理も燃やして捨てちゃうんですか?』

『なら僕らが頂いちやつても良いですかね?』

『我が主人は大変あなた方を気に入っておりますので、全然構いませんよ、こんな人理で良ければいくらでも差し上げますとも』

『やったー! なら有り難く頂きますね! うわあ、人理なんか貰っちゃったよりー
ダー』

『町興しのしがいがあるなあ…』

ローベディは人理を手に入れた。

こうして、ベディの一声でなんとカタツシユ隊員は0円で人理を手に入れる事に成功した。

これには、冬木市に来ていたカルデアのメンバーもポカンとするほかなかった。

いや、まさか、敵だと思われていたレフにこうも好待遇で接され、なおかつ、人理修復する前に焼かれるはずの人理を彼らは難なく手に入れてしまったのだから無理はない。

国民的人気アイドルにもなると捨てるはずだった人理すらも貰えてしまう。やはり、Y A R I O っ て 凄いと彼女達は素直にそう思った。

ちなみに燃えていた冬木市は鎮火後、恐るべき速さで復興し、さらには、農業地域が増え今では作物もよく取れるより近代的な街になったとか。

その時の出来事を思い出したオルガマリーはなんとも言えない表情を浮かべ顔を引きつらせるほかなかった。

「いや…、まあ、その…。そういう事もあった気はするわね、というかあの人達、燃やす予定の人理を毎回貰いに行くから私達の仕事がほぼ無い…」

「えー？ そんな事ないですよ！ 町興しにわざわざ出向いたじゃないですか！」

「被害が出た町の復興に魔獣狩りとか色々してるでしょう?」

「ごめんなさい、こう言っただけですけどそれともうボランティアとかそういう類だ
と思うの」

そうオルガマリーが告げると一同は目を逸らしてシーンと口を閉じ沈黙してしまう。
少なからずそんな風感じてしまっている部分があるからだろう。

確かにやつてることはここ最近ではそんな事ばかりだったような気がする。

もちろん、彼らがカルデアに足を運んで来てくれた時は…。

『はい! ダヴィンチちゃんの店だよー好きなもの買っついてい…』

『俺たちに買っついていう発想はない』

ーダヴィンチショップは閉鎖した。

それに加えて、さらに、こんなところにも彼らは目につけた。そう、カルデアの召喚
システムである。

なんでも、虹色に光る聖石が召喚に必要なとか、そのため、財を削つたり、地方を飛
び回り集めていたマスター、藤丸立香は彼らからこんな提案を持ちかけられた。

『あ、この石くらいならできそうだよ?』

『えっ!　ほんとですか?』

『そんなたくさん使うなら自家生産の方がええやろうしなあ』

という訳で、彼らからだん吉で聖石を定期的に送ってもらえる事になったのだ。

その数は毎月増えはじめており、そろそろカルデアの召喚機材が壊れるんじゃないかなうかとスタッフからも懸念されている。

そんな背景もあり、カルデアとしては友好的な彼らとの関係は切っても切れないものとなっていた。主にマスターだが。

「そう!　そうですよ!　オルガマリー所長!　私達はアイドル活動をしてるんですよ!」

「魔物倒したり町復興が?」

「そうです、さらに農業したり釣りしたりしはじめたら間違いなくアイドル活動になりますし!」

「いや、ここアイドル養成所じゃなくて人理継続保障機関なんだけど!」

「……ごもつともである。

だが、オルガマリー所長としても彼らから命を助けて貰った恩もあるので藤丸立香に強い反論はできない。

何故なら、彼女も毎月送られてくる彼らが作った果物や野菜のお裾分けを楽しみにしている節があるからだ。

人理修復のお手伝いも一応してはいるし、カルデア的には多分問題はないだろう。

「とりあえずあの人達はああいう人たちなので」

「…反論する言葉が見当たらないのが怖いわね…」

「私も彼らとの初対面の時は茫然としちゃいましたし」

そう言って、彼らと出会った当初を思い出すマシユ。

カルデアが爆発し、マスターである藤丸立香と共に炎上汚染都市冬木市に飛ばされたマシユ。

そう、燃え盛る冬木市で重機やトラックに乗り颯爽と現れた彼らから彼女が言われた初めての言葉が…。

『あれ？ 浜風ちゃんじゃん！』

『久しぶり！ 鎮守府以来だね！ ん？ 俺たちが前に作った12.7cm連装砲積んでないじゃん。なんで、そんなまな板担いでんの？』

『すいません、人違いです！ これ盾ですから！』

『あ、ほんまやよく見てみ？ 髪の毛茄子みたいな色してんもんな、もしかしてイメチェン？』

『地毛ですつー！』

以前、彼らが出会ったどっかの誰かさんと間違えられてしかもこの言われようである。

世界にはそっくりさんがたくさんいるという、そのうちの一人に間違えられたのだからなんだかマシユはこの時なんとも煮え切らない心境であったとか。

そして、そんな中、デイルムツドからマシユが言われた言葉が…。

『あ、マシユちゃんシールドダーなんだ！ じつは俺もシールドダー属性あつてさ！ ちよつと盾見せて？』

『え？ あ、べつに構いませんけど…』

そう言つて、マシユから盾を手渡して貰うディルムツド。

彼女の盾をマジマジと見つめ質感を確かめたディルムツドは確信したようにマシユにこう告げた

『やつべえ、かなりまな板だよ！ これ！』

『だから盾ですつてば！』

——まな板認定を受ける。

まあ、そんな些細な事もあつたが彼らのおかげで冬木市の人理焼却は免れることができた。

そして、再び人理を燃やされる事になれば、また彼らはその場所に現れるに違いないとカルデア一同は確信している。

「あ、次会つた時サイン貰わないと！」

「え！ 貴女貰つてなかったの！」

「次はしつかり書いてもらいましょう！ マスター！」

いつ現れるのかは誰にもわからない。しかし、彼らが現れる時、その時はきつと誰かを幸福にしようとする時だろう。

少なからず、カルデアがこんな風に平穏でいられるのは五人のあるアイドルが彼らの元に訪れてくれたからだ。

こうして、今日もカルデアにいる藤丸立香達は何事もない平和な1日を謳歌するのだった。

今日のYARIO。

1. 捨てられちゃうカルデア所長を貰う。
2. ついでに捨てちゃう予定の人理も0円で貰う。
3. 聖石が自家生産で作れる。
4. ダヴィンチショップが閉店する。

蛇駆除 その3 (完結)

しばらく雑談を繰り広げる事数時間。

ここで、仕掛けていた蛇釣り用の竿に反応が…、これはもしや、ヨルムンガンダが掛かったのか？

最初は微動だったはずの竿は激しくしなりはじめ、これは間違いない。

「あ！ 掛かった掛かった！」

「やだこれもー、絶対スネーキーな感じじゃん」

ーー本日初めてのスネーキーな当たり。

激しくしなる竿を慌てて掴み折れないように腰を落とすカルナ。だが、やはり馬力が凄い、掛かったヨルムンガンダは御構い無しに底へ底へと逃れようと足掻く。

と、そこで負けじとブリュンヒルデとツールが釣竿を支える手伝いに入る。

それを皮切りに皆、重さに耐えられそうに無さそうなカルナを補助せんと次々に竿を

引つ張り上げる手助けに入りはじめた。

激しい引きに一同は力を合わせて、必死に釣り上げようとあがく。

そして、何時間かの格闘の末、ついに……！

「上がったぞー！」

馬鹿でかい蛇が頭を出してその姿を見せた。

遙かにでかい巨体、これが、幻の蛇ヨルムンガンドである。牙からは毒が滴り落ち、その凶悪な眼は釣り上げたカタツシユメンバーとツールを睨みつけていた。

この光景にカタツシユ隊員達は目を丸くする。

あまりにデカすぎる、その事に関してベディはこんな感想を述べはじめた。

「これモンスターハンターみたいじゃない？」

「じゃあ俺たちベテランハンターだな！」

「くっそー！　大剣持ってねえ！」

――海賊の次はハンターに転職。

と、冗談はさておき、この馬鹿でかい蛇に睨まれたカタツシユ隊員達は思わずその圧倒的な巨体に後ずさりする。

だが、彼らとて、蛇ハンターの名は伊達ではない、幾たびのハブと戦い不敗、沖縄で培ってきた蛇ハンターとしてのプライドがある。

動いたのはまず、蛇ハンター歴ベテランのカルナからだった。

「くらえ！　これが、エル取り棒じゃー！」

エルキドウが変身した巨大な蛇取り棒を使い、見事にヨルムンガンドの首元を捉えた。その長さはかなりの長さ、間合いを取らなければこちらがやられてしまう。

だが、一人でこの蛇取り棒を押さえ込むのは困難、なので、皆も加わってヨルムンガンドを抑えにかかる。

ヨルムンガンドVS農業アイドル。

火蓋は切って落とされた！　さらに、蛇取りベテランのリーダーもカルナの助力に加わりヨルムンガンドが必要以上に暴れないように抑えにかかる。

「あかん！　このロケの前に保険見直しとらんかった！」

「リーダーそれ今言うかな!？」

「……忘れてしまった生命保険の見直し。」

ヨルムンガンドが相手となれば、確かに命の危険もある。だが、生憎、生命保険は昔には無い。

そうこうしているうちにヨルムンガンドとの決戦も長引く、トールさんもハンマーなどでヨルムンガンドを出来るだけ攻撃してくれるので多少こちらに部があるか？

「シャアアアアア!!」

「綱引きやな」

「とりあえず運動会の曲流そうよ」

「AD! よろしく!」

巨大なヨルムンガンドとの綱引きの最中、そうお願いするカタツシユ隊員達。AD
フィンはその言葉を聞いてBGMを流す。

それは、懐かしの音楽。皆さまも一度は聞いたことがあるだろう。

耳を澄ませばその言葉が鮮明に頭の中で浮かび上がってくる。

——紅組の皆さんも頑張ってください。

ちなみにどちらが紅組なのか白組なのかがわからないが、細かいことは気にしてはいけない。

とそれから数時間の格闘の末、ヨルムンガンドはだんだんと弱りはじめてきた。これなら、捕獲できそうかもしれない。

「はあー！ せいー！」

ブリュンヒルデの振るうスカサハから手渡されたゲイボルク（鍬）で連続殴打の攻撃。流石はワルクユール、この攻撃にはヨルムンガンドもひとまりもない。

そして、頃合いを見計らいここで、トールさんが渾身の一撃。

ハンマーで後頭部を叩かれたヨルムンガンドはドスンと気絶し倒れた。

長い長い綱引き対決はどうやらカタツシユ隊員達に軍配が上がったようである。

いままでとは違った毒蛇の捕獲に流石のカタツシユ隊員達も苦勞した。しかし、皆で

力を合わせればなんとかなるものである。

巨大なスネーキーを前にしたディルムツドも顔を真っ青にしていた。ヌメヌメした鱗に巨大なヨルムンガンドの横たわる姿。

それを目の当たりにした彼は思わず。

「オエエ！ おえ！」

「そんなに嫌いなのね」

「……嗚咽してしまう。」

蛇嫌いに拍車がかかっている。嫌いな蛇がこれだけデカイなら尚更そうなるかもしれない。嫌いな蛇がこれだけデカイなら尚更そうなるかもしれない。

とはいえ、流石にこんなに馬鹿でかい蛇をカタツシユ村には持って帰れそうに無い。どうしたものか。

「うーん、困ったねえ」

「塩焼きにして持ってかえるのか」

「まあまあ、落ち着きたまえ皆の衆、気持ちはわかるがこの子をとりあえずオーデインさ

んに見せよう」

「それが良いだろうな、父には私から報告しよう」

とりあえず、ヨルムンガンドが起きても暴れ出さないように毒のある牙は重機を使って全部取り除いておき、さらに、巨大な縄で身体を固定する。

こうしておけば、噛まれる心配もなく毒の危険性も薄まる。

そして、その状態のまま、とりあえずオーデインさんにヨルムンガンドを見せることにした。

さて、用事は済んだ。ひとまず、毒蛇のヨルムンガンドの捕獲は済んだところで、今回の依頼も無事に終了。

「わざわざすまなかったのYARRIOの皆様」

「いえいえ！ 人手がたくさんあったんで助かりました！」

「うむ、しかし……こやつはどうしたものか」

そう言つてヨルムンガンドを見ながら首を傾げるオーデインさん。

確かにこれだけデカイなら、捕獲しても置き場所に困る。しかし、この場所に放置し

ておくわけにもいかない。

といて、ロキから捨てられたヨルムンガンドを殺すのもなんだか可哀想。そこで、彼らはこんな提案をしはじめる。

「この子小さく出来ませんかね？」

「そしたら捕獲器入れて僕ら持って帰るんで」

「おお！ それは名案じゃ！」

「それなら僕も協力しよう」

「私もルーン魔術を使えば助力くらいはできるだろう」

という事で、マーリン師匠、そして、オーディンさん、スカサハ師匠達の魔法、魔術を駆使しこの巨大なヨルムンガンドを小型化する事に。

小型化したヨルムンガンドをハブを入れるための捕獲器に入れ、ひとまずこれでヨルムンガンドを無事に駆除する事に成功した。

巨大な蛇取り棒に変身していたエルキドウさんも変身を解き、こうして一件落着。

「あ、ついでと言ってはなんだが、ブリュンヒルデの奴も持って帰って良いぞ」

「えっ!」

「ほんまですか! いやあ、助かりますわあ」

「鍬の使い方上手かったもんね」

なんと、ヨルムンガンドを捕獲した報酬にオーデインさんがブリュンヒルデさんを貸し出してくれるという。

農業地帯の開拓が最近進んできたカタツシユ村、ゲイボルクという名の鍬の使い方が上手い彼女が加わってくれば頼もしいことこの上ない。

「基本的ウチの農民英雄ばっかだから」

「本業はアイドルとか領主とか王様とかなんだけどね、きつとブリュンヒルデちゃんもすぐ慣れるよ、癖者ばっかだけど」

「そうですか? それは楽しみですな」

——ヨルムンガンドより個性的。

そう、最近ではステゴロが強い特攻服着た聖女が機械弄りに目覚めてバイク作りはじめたり、王様作りの達人である魔法使いが酪農を極めたり、抑止力の守護者が彼らを見

習つて0円で食堂を開き始めたりとカタツシユ村も随分賑やかになってきた。

しかも、ヨルムンガンドを捕獲した今、彼らには更なる挑戦がこの時点で頭の中にあった。

そう、皆様はもう存じ上げている方もいるかもしれない、納屋山城を作るにあたって、必要不可欠なものがある。

いっか環る、ベき我らが島。
「——それは、カタツシユ島。」

何もない無人島に新たに拠点を置き開拓する事、彼らは懐かしのあの島をノアさんと共に作った男爵ディーノをお借りして目指そうと思つていたので。

「ラーメン作りもまだ途中だしな」
「島からなら鰹も釣れんでしょ」

新鮮な鰹を求めて海に出るにしても、日本海に浮かぶカタツシユ島からならきつと釣れやすいはず。

小型化したヨルムンガンドもあの島なら、自由に放してやる事もできるかもしれない。
い。

ちなみにこの捕獲したヨルムンガンドについて、ベディはこんな事を提案しはじめた。

「この子名前なんにする？」

「ヨルムンガンドって名前だとあれだしねー、兄イなんかある？」

「うーん、そうだなあ」

なんと、それは小型化したヨルムンガンドについての名前である。

巨大な蛇、ヨルムンガンドではなんだが日本的ではないし、何より、物騒な名前、ここは一つ小型化した事だし違う名前を付けてみるもいいかもしれないという彼らの思いつき。

しばらく思案するカタツシユ隊員達、そして、ヨルムンガンドに付けられた新しい名前がこちら。

「塩焼きにして食べようとしたからな、しかも、釣りで釣れたし」

「よし！ なら潮ノ花でいいな！」

——ヨルムンガンド改め別名、潮ノ花。

名前がいかにもそうなのだが、塩焼きにして食べようとしたから潮ノ花なのはどうかと思う。

もちろん、由来は塩焼きにして彼らが食べようとしたところから、これをカルナの口から聞いたヴラドはふとこんな疑問を口に出した。

「…関脇くらい？」

「いやいや大関でしょう、元の大つきさ考えたら」

「いや、こいつは絶対横綱取るよ」

——名前が明らかに相撲取り。

何を思つてカルナは横綱を取ると言い切るのか定かではないが、確かに竿の引きは横綱級だった。

生憎、土俵ではなく綱引きだったので今回は彼らに軍配が上がったが、この場が土俵だったら潮ノ花の尻尾でペチンツと弾かれて負けていた事だろう。

何はともあれこうしてヨルムンガンドは潮ノ花という何故だか相撲取りのような名前を彼らから授けられる事になった。

「さ、そんじや帰りますか」

「賛成ー！ 帰って風呂入ろう！ 風呂ー！」

「ホッホッホ、またいつでも来てくれて良いぞ、若人よ」

「ありがとうございます！ オーテインのおじいさん！」

まるで孫を見送るかのように彼らにそう告げるオーテインさん、北欧の地で彼らはこうして新たに暖かい人達に出会う事ができた。

暖かい人というより暖かい神様達であるが。

こうして、一仕事終えたY A R I O達は帰路につく、さあ、いよいよ、次からはラーメン作りと納屋を作るために彼らが本格的に動き始める。

果たして、カタツシユ島計画は上手くいくのか？

この続きは、次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

1. ヨルムンガンドを捕獲するアイドル。
2. ヨルムンガンド改名。潮ノ花。
3. 蛇に鳴咽するデイルムツド。
4. ハンターに転職を考えるアイドル。

カタツシュ村の日常

聖杯戦争。

あらゆる願いを叶えるとされる万能の願望機・聖杯の所有をめぐり、一定のルールを設けて争いを繰り広げる争い。

その中でマスターとなる魔術師はサーヴァントの触媒となる聖遺物を基にサーヴァントをそれぞれ呼び出し戦わせる。

というものが、最近ちまたでは流行りらしい。

その流行に先駆け、彼らもまたこんな話をしていた。

「そーいや俺たち前に聖遺物作ったよな」

「いやー博物館に展示されるとは思ってたよな」

「横浜の博物館だもんなー」

そんな事を話しながら、彼らは今日も今日とてカタツシユ村の畑を訪れていた。季節は夏、この時期は種子を蒔いた野菜達が美味しく実る時期。

時に彼らはそんな野菜を回収すべくこの畑にやってきたわけだが、丁度、収穫に入っていたカタツシユ隊員農業部門のエミヤさんとジャンヌちゃん、マルタちゃんが彼らを出迎えた。

「畑どんな感じ?」

「そうですねー、やっぱり全体的に見て西瓜は今回実りがかなり良さそうですね」

そう言って、実った西瓜の一つを持ち上げてみせるジャンヌちゃん、顔の周りには泥が付いてしまっているが御構い無しのご様子、やはり、農家生まれは違った。

早速、ジャンヌちゃんから手渡された西瓜を見つめるカタツシユ隊員達。さて、その出来栄はいかに?

まず、彼らが注目したのは西瓜を作っていた土からだ。気がつけばリーダーが既に土を触って感触を確かめていた。

ケルトから持ち帰ってきた水はけの良い土にさらに霊草を使ったアルギン酸を馴染ませたこの土。

リーダーは一言こんな感想を述べる。

「これ、火山灰土使ったやつよりええ土になつとるんやない？」

「あんたは気づけばいつつも土触ってんね」

「——基本はまず土から入る。」

そう言つて、触つた土の感触を確かめるリーダークーフリーンにそう突つ込みを入れるデイルムツド。

だが、この光景も見慣れたもの、土の感触は言わずもがな好感触であつた。これならば、良い質の西瓜に仕上がつてる筈。

そんな中、ジャンヌちゃんは彼らの言葉を聞いて安心したのか、カタツシユ村で農業に励む人たちにこんな声を掛けはじめる。

「皆さん！ 農業に詳しい人が来てくれましたよ」

「西瓜歴何十年のベテランだからね」

「学校の科目に西瓜つてあつたら間違いなく100点取れる自信あるわ」

——※普通の学校にそんな科目はありません

ひとまず、出来上がった西瓜を切り分けてみる事に、美味しそうな赤い身が露わになり甘さにも期待が持てそうだ。

早速、出荷する予定の西瓜を糖度を確認するため、リーダーが一口かじってみる事に、シヤリつとした歯ごたえがあり水々しい西瓜の味をしつかりと噛み締める。

そして、しばらく首を捻ったリーダーが西瓜を確認した後、こう告げた。

「これ……12度くらいやな」

「……ちよつと計ってみますね……。……ドンピシャです」

「なんで分かんだよ！ 毎回の事だけど！」

——スキル人間糖度計。

そう、測定器を使わずとも彼は味覚の感覚だけで糖度を言い当ててしまう。これは、カタツシユ村の畑を管理している隊員達からも思わず拍手喝采が巻き起こった。

思わず突っ込みを入れるデイルムツド、リーダー固有のスキル、人間糖度計に狂いはない。

「兄イ！ 見てくれよー！ 俺こんなにおつきくなつたぜ！ 触つてもいいぞー！」
「うお！ でっけー！ そっか成長期だもんなモーさん、あれ？ 硬くない？」
「あんたら服の中に西瓜入れて何遊んでんのよ」

「ー※食べ物で遊んではいけません。」

コンコンと固いモーさんの巨大化したおっぱいをノックするカルナにそう突っ込む
デイルムツド。

西瓜を服に入れてるだけなのだから硬いのは当たり前、しかし、叩いてみると良い音が鳴った、これは味にも期待できそうだ。

すると、農業に入っていたマルタとジャンヌの二人を見ていたベディはモーさんと同じように西瓜を服に入れるとこんな感想を述べはじめた。

「なるほど、胸に西瓜入つてるとこんな感じなんだね。女の子は大変だ」

「そうなのよー、肩凝るのよね」

「そうですよねー、大きくなると大変なんですよねえわかりますその気持ち…つて何言わせるんですか」

そう言つて、服に入れた西瓜をユツサユツサと揺らしながら話すベデイに突つ込むジャンヌ。

さりげなくベデイから聞かれた為、自分の胸を見ながら語つてしまった。思わず恥ずかしさからか顔も赤い。

そして、そんな楽しく話をしていた彼らに対し近づいてくる人物が…。

農作業を着ている彼女は何やら不機嫌そうな表情を浮かべながら鋤を担いだまま西瓜の話をしていた三人にこう言葉を投げかける。

「ちよつと！ 手を動かさなさいよ！ 手を！ まだ回収する西瓜はたくさんあるんですから！」

「お…誰かと思えば！ ジャンヌオルタちゃん！」

「サボつてんじゃないわよ！ この馬鹿！」

そう言つて辛辣な言葉をベデイに投げかける彼女。何となくだがジャンヌダルクと瓜二つの少女だった。しかし、似てはいるがどことなく黒い。

彼女の名前はジャンヌダルクオルタちゃん。一応、ジャンヌダルクちゃんの妹みたいな感じで現在このカタツシユ村にやってきたカタツシユ隊員の一人である。

きつかけはあのジャンヌの処刑の日、彼女を0円で回収した事から始まった。

ベディが0円でジャンヌダルクを回収しちやったので人々に対する怨みやら何やらがアレのせいで全てペアになった。

おかげで処刑されるはずだったジャンヌダルクが己を見捨てた祖国、国民、そしてこの世の全てに憎悪し、復讐を誓うなんてi fな出来事はなくなってしまった。

しかし、ある事がきつかけでジャンヌダルクちゃんの暗黒面が出現、その結果、ジャンヌオルタちゃんは抑止力から送り込まれる形でこのカタツシユ村にやってきたわけである。

そんなジャンヌオルタちゃんが出現できるようになったそのきつかけはなんと、ジャンヌが楽しみにしていた漬物をカタツシユ隊員達が台無しにしてしまったという事だった。

詰まる話が…。

「漬物でジャンヌオルタがオルタ降ったたって訳やね」

「リーダー…」

今日も今日とてリーダーの寒いオヤジギャグが染み渡る。西瓜もよく冷えそうだ、現

にカルナは可哀想な人を見る目でリーダーを見つめていた。

——食べ物への恨みは怖い。

モーさんの聖剣作りの過程とはいえ楽しみにしていた漬物を台無しにされては暗黒面に堕ちても致し方ないというもの。

というわけで、このように現在は聖女二人、また、カタツシユメンバー達と共に農業に勤しむ毎日を送っているわけである。

すると、ジャンヌはにこやかな笑顔を浮かべてジャンヌオルタの肩をポンと叩く。

「まあまあ、そんなに怒らなくても良いではないですか照れ隠しなんでしょう？ 私にはわかりません」

「ハア？ 何言ってるのよ？ 私が照れる意味が…」

「ベデイまだかなーまだかなーって言ってましたもんねえ、この西瓜見たら喜ぶだろうなあとか言っていましたもんねー、貴女」

「なあ…っ!？」

そうやって、ジャンヌは悪戯じみた笑みを浮かべながらジャンヌオルタにそう告げる。ジャンヌからそれを言われた彼女は顔を真っ赤にして声をあげた。

ジャンヌオルタちゃん、実は大のY A R I Oファンであり、その中でもベディが大好きなのである。

というのも？ その理由は彼女が本来なるべきだった復讐心を彼がどつかへ追いやってくれた事が大きい。

火刑台に送られるはずだったジャンヌダルク。

しかし、ベディ達がいつのまにか現れ、自身の処刑を中断させただけでなくバーベキューで狂気で染まっていた民衆達を正気に戻し、幸せを送り届けてくれた。

そんな、いろんな意味で自分を救ってくれたカタツシユ隊員達、そして、特に処刑を意図せず止めてくれたベディが彼女にとって一番大好きなアイドルになったのである。

「ベベベ別に？ 私は単に農業が好きでベディに見てもらいたいわけじゃ無いし？」

「この西瓜、甘いねー」

「いやー、やっぱ糖度12度は美味しいよな！ すんげー甘い」

「ちよつと話聞きなさいよ！ 燃やすわよ！」

そう言いながら、呑気に西瓜を仲良く齧り感想を隣り合わせに述べるベデイとヴラドの二人に顔を真っ赤にしたまま青筋を立てるジャンヌオルタちゃん。

それを見ていたジャンヌからは笑いが溢れでる。

西瓜には満足してくれてるようなのでジャンヌオルタちゃんも表だつて怒っているような素振りを見せてはいるが内心では育てた西瓜を喜んで食べてくれてる事が嬉しいみたいであつた。

さて、西瓜を楽しんでいるカタツシユ隊員達だがもちろんそれだけでは無い。

「おーい、帰つたぞ、今日はなかなか大量だ」

「ふむ、上々だな」

「アタランテちゃんにスカサハ師匠お帰りー」

「うわー、鹿とでつかいイノシシだねこりゃ」

狩りに出かけていたアタランテとスカサハ師匠もここで帰宅。鹿やイノシシを担いで帰つて来てくれた。

狩りの名人達だけあつて、仕留めるのも上手い。

これだけ傷もなく綺麗に仕留めてある鹿やイノシシなら毛皮を使って衣類にも活用

できるだろう。

「晩飯楽しみだなこれ！」

「いやあ、アタランテさんはやっぱりマタギが似合ってるよ」

「ふふふ、これくらいなら簡単なものだ。なあ？」

「ああ、楽勝というものだな」

そう言いながら、嬉しそうに笑みを浮かべて仕留めた獲物を自慢げに見せつける二人。弓矢の名手であるアタランテと主に幻獣を普段からいくつも狩っていたスカサハ師匠の言葉だけに頼もしい。

——カタツシユ村の狩師。

彼女達ならどんな獲物でも捕まえてきそうだ。クマやトラなんかを狩ってきてても何らおかしく無いだろう。

そして、一方、西瓜を食べ終え農業を終えたマルタちゃんを着替えを終えるとエミヤ、カルナと共に車庫に向かった。

最近、バイクの製造にハマっている彼女、実は整備士であるエミヤと共に作ったこれを彼らに見せようと思っていたのだ。

「どうこれ？ なかなかいいでしょ？」

「うわ！ ハーレーじゃん！ マジか！」

「あの英雄王もバイク作りに協力してくれてな、こんなのも試しに作ってみた」

「これニンジャだよな？」

そこには、バイクにハマった英雄達によるいくつもの製作されたバイクがずらりと並んでいた。

もちろん、車検などはエミヤさんやADフィンら優秀なカタツシユスタツフ達が定期的に行ってくれるようになってる。

そんな中、マルタが嬉しそうに笑顔を浮かべてカルナに見せるのは自慢の愛車。

「私はこいつがお気に入りなのよね？」

「…マルタちゃん、これ…」

「どう？ かつこいいでしょ、私の愛車」

そう言いながら、カルナに愛車を見せつけるマルタ。

そこにはバベルの塔のように天を貫かんばかりの三段シート、そして、独特のカラーリングに真つ赤なバイク。

横文字で夜露死苦と刻まれている文字、特攻の拓なんかでよく見かけるソレがそこに鎮座していた。

おまけに纏いを着るマルタちゃんは胸に晒しを巻いて完全に聖女のお姉さんというより姉御と呼びたくなるような格好に着替えていた。

そして、笑顔を浮かべたままマルタはこう語りはじめる。

「最近、村をこの格好でバイク走らせるのがたまらないのよね！ ほら、ストレス発散っていうか農業も楽しいんだけど…」

「あのすいません、田舎のレディースの方ですか？」

「……こんなバイクを田舎でたまに見る。」

そう、久方ぶりにカタッシュユ村に帰ってみれば、マルタ姐さんが爆誕していたのだ。これにはカルナも顔をひきつらせるしかない。

普段から杖よりステゴロで龍ですら素手でぶん殴るマルタ姐さん、さすがは世界最古のレディース、最先端を行っていた。

とはいえ、やっていることはただのツーリングでバイクを走らせることなので防音もすっかりしているので近隣の人に迷惑を掛けることは無いというのはバイク作りに携わっていたエミヤさんの談である。

「そういう事で、私、今からちよっくらブっ込んでくるんで！　後は夜露死苦！」
「あ、はい」

そう言い残して、すぐさまバイクを走らせてどっかに旅立ってしまったマルタを見送るカルナ。

彼女の身につけている纏いの背中にはタラスクの刺繍と聖女魔流墮参上の文字が記されてあった。さすがは世界最古のレディース、センスが違う。

カタツシユ村にもこういうパンチが効いたものがだんだんと増えてきたんだとカルナは風になりバイクを駆るマルタの背中を見送りながら感心するのだった。

さて、だんだんとカタツシユ村にも人が増えはじめ賑やかになってきた。

こうしてカタツシユ隊員達は本拠地であるカタツシユ村にて、つかの間の穏やかな村

での生活を堪能した。

今日のYARRIO。

1. リーダー、固有スキル：人間糖度計
2. 漬物でオルタ化してしまったジャンヌ
3. 聖遺物を作れるアイドル。
4. 世界最古レディースマルタちゃん爆誕。

閑話3 カタツシユ村音楽祭。

カタツシユ村ではある催しが開催される予定であつた。

それはカタツシユ村で各英雄の喉自慢が競い合う祭典、ずばり、二つに割れた英雄同士の紅白歌合戦である。

いたるところには人だかり、ブリテンだけでなくローマやフランス、エジプトやギリシヤまで幅広い地域に渡りこのカタツシユ村に足を運ぶ事になった。

そして、そんな祭典に向けてカタツシユ隊員達はどうと？

「ステージに使う丸太足んないよー」

「あー、待ってて、ちよつくら切り倒して持つてくるから」

「忙しい！ 忙しい！」

そう言つて、あちらこちら走り回り準備に追われるカタツシユ隊員達、少しでも賑やかな祭りにするため出店を出来るだけ作らなければならなかつた。

何故、このような祭りが開催される事になったのか？
事の顛末は一カ月ほど前に遡る。

その日、村にある生き物が発見された。発見された生き物はどうと愛らしい風貌をしたマスコツトの様な生き物であった。

それを拾ってきたベデイはこの可愛らしい生物を大変気に入っていた。

「ノツプ！ ノツプ！」

「…何それ」

「可愛くない？ ねえ、可愛くない？」

「確かに愛嬌あるなあ、ノツプ言うてるけど」

「こいつ食えんのかな」

「焼いたらいけそうな気はする」

「あんた達はほんと拾ったらなんでも食べようとするね」

そう言って、ノツプをマジマジと見つめながら呟くベデイとカルナにそうツツコミを

入れるヴラド。

よくもまあこんな可愛らしい生き物を食べられるかどうか考えつくものだと感じする。

しかし、これは実は始まりにすぎなかった。というのもこの謎の生き物がいるのには原因がある。

それが…。

「儂が！ 儂こそが！ 第六天魔王！ 織田信長である！」

「すいません皆さん…ちよつとトラブルに巻き込まれちゃつて…」

そう、知る人ぞ知る第六天魔王、織田信長を出張に出かけていたADフィンが連れてきてしまったからである。

しかも、織田信長と言つても幼げつぽい風貌、可愛らしい女の子だった。今までの英雄も女性ばかりだったので今更ではあるが…。

そんな織田信長さんがこの場に来たことによりこのマスコット、ノツプが出現したのである。

そして、この彼女の出現により、さらに連鎖的な出来事がこのカタツシユ村に降り注ぐ事になった。

と、い、う、の、も、？

「これ宇宙船じゃね？」

「うお！ マジだ！ かつけー！ ヤマトじゃん！ ヤマト！」

「宇宙戦艦ほどデカくはないけどね」

「ケホ…ケホ…っ！ 大量のアルトリア顔の反応を追っているうちにこんなところにも不着してしまうとは！」

謎の宇宙船がこのカタツシユ村近郊に不着し、中から現れたのはブルマ姿にジャージのアルトリア顔の少女だった。

そうして、彼女達と彼らは出会った。

そして、同時に信長ことノツブは宇宙から突如現れた謎のヒロインXと意気投合する事になる。

意気投合、すなわち、一緒のタイミングでカタツシユ村に現れたこいつとならコンビを組んでも良いのでは？ と。

そんなこんなで、Y A R I Oが実は農家に見せかけたアイドルでありロックミュージシャンという影響もあり彼女達はある事を決心した。

そう、バンドの結成である。

「僕はギターできるからの！　ボーカルはお主！　そして、ドラムは沖田じゃ！」

「…なんでこんなことに…」

「お主、どうせ仮病じゃろ？　僕に協力せい、霊草で寿命伸びたんならええじやろうが」

「病弱の兆候はまだあるんですよ！　死にませんけどね！　確かに！」

暇そうにしていた沖田さんを無理矢理拉致し、刀使えんならドラムできるだろと無理矢理、信長ことノツブはその座に彼女をつかせた。

こうして、バンドのメンバーは揃った。

以前、謎のヒロインXさんから沖田さんが襲われた挙句始末されそうになったといひざこざもあったが、ロックバンドに衝突は付き物、なんとかヒロインXをボーカルに据える事にも成功。

「ボーカル…、華形ですね、うむ、他のアルトリア顔をおびき寄せるには確かに目立つ方が色々とやりやすいですし、わかりました承りましょう」

こうして、信長、沖田さん、謎のヒロインXからなる謎のバンドメンバーがカタツシユ村で結成されてしまうことに。

確かにイギリスといえばロックの発祥の地として知られている。

では、この破天荒なメンバーがどんな曲を歌うのか？　そして、バンド名は一体どんなバンド名にするつもりなのか？

これらの疑問はすぐさま解消される事になった。

ADフィンが面倒ごとに巻き込まれて本能寺からちやつかりカタツシユ村までやってきた織田信長、そして、アルトリア反応を追っかけてこの村に墜落してきた謎のヒロインX。

そしてノツブに巻き込まれる形でバンドに加わった沖田さん。

バンドを組んだ彼女達のバンド名はこちら。

————謎のヒロインXJ。

そう、なんとボーカルの名前にJを付けただけ、しかし、ただのJでは無い、これは、ジャパンという意味のJなのである。

皆さまはご存知だろう、メイドインジャパンという銘柄の魔力を。

シンプルにしてベスト、そして、彼女達が歌うジャンルはハードなロック。マイクを握る信長は声高にステージからこんな事を観客の皆に告げる。

「儂のイメージカラーは何じや皆の衆！ みんなは当然知ってるからは非もないよネ！」

「あの…そのキャラいちいち作らなくても」

そう言いながら、マイクパフォーマンスに入るノツブを制止する沖田さん、観客からは思わず笑いも溢れる。

しかし、しばらくして、マイクを握ったノツブはギターをギャンギャンと弾くと声高にこう叫んだ。

ノツブのイメージカラー、そう、それは勿論。

「そう、紅じやあああああああ！」

ノツブがそう叫ぶと共にスイッチが入ったのかドラムを激しく叩き始める沖田さん。

元病弱な体とは思えないほど首を激しく上下に動かしながらドラムを叩きまくり始

めた。

そうして、デイルムツドから学んだドラムの技術を習得した沖田さんはハードなドラムの首振りと共にリズムを刻む。

——しかし沖田さんは死にそうになっていた。

この光景を眺めていたカタツシユ隊員達は、こんな感想を各自、思ったように口にしていた。

「あれは死ぬでしょ、沖田ちゃん」

「あれ首やるらしいよ」

事実、沖田さんはドラムを激しく叩いてる中意識が朦朧としているようだった。これはもう止めた方が良いのでは？

しかし、その心配は見事に的中する。

加速する音楽についていけなくなった沖田さんが喀血し、ドラムを叩いている最中に椅子から転倒。

「グハア……！」

「お、沖田ちゃん！」

「担架持つてきて！ 担架！」

血を吐きながらドラムで力つきるといふあまりにロックな出来事にカタツシユ隊員達もすぐさま動いた。

一応、靈草を食べているので命の危険はないのだが、担架に乗せられた沖田さんは何故かサムズアップしながらステージから退場していった。

送り先はもちろんカタツシユ村病院である。

運んでいる最中、沖田さんはアイルビーバックとか呟いていたが皆は聞かなかつた事にした。

「どれだけ涙を流せば、沖田を忘れられるじやろ」

「せめて覚えててあげてください！ 無理して付き合ってくれたんですからっ！」

そう言って、白状な事を口走る第六ロックスターノップにツツコミを入れるヴラド。

当たり前だが、この後、緊急搬送された沖田さんはナイチンゲール婦長からこつてり怒られる事になったのは言うまでもない。

という訳で、すぐさま、ドラムの代役を彼女達は探す事になった。そこで白羽の矢が立ったのはこの人。

「ご無沙汰ー…」

「えっちゃん！ えっちゃんではないですか！」

邪聖剣を扱う彼女。アルトリア粒子を追いかけてこの地に墜落した宇宙船に乗っていたその名も謎のヒロインXオルタちゃんである。

暗黒面に堕ちたセイバーらしく、黒竜双剣勝利剣の使い手、さらに二刀流という事もあつてドラムの補充としては最適解だと言えるだろう。

ちなみに彼女の宇宙船が墜落したことで謎のヒロインXちゃんと合わせてカタツシユ村に大きなクレーターが二つほどできたのは言うまでもない。

「ちなみにリーダーは私がしますので…。貴女達は頼りなさそうだし…」

「えっ!! それはおかしいでしょ! そこはX的な意味でもボーカルの私がリーダーで

すよ！」

「なあにいい！ バンド組もうと言ったのはこの儂じゃ!! だって儂、めっちゃ有名だし！
儂じゃろ普通！」

そう言つて、ドラムのえつちゃんに対し異議申し立てをし始める二人。

バンドを立ち上げたノツプにボーカルでバンド名的にもリーダーであると言ひ張る
謎のヒロインX。

これでは埒があかない、という事でえつちゃんこと、謎のヒロインXオルタはめんど
くさそうにこんな事を二人に告げる。

「ふーん……じゃあドラムの代わりの人探してね」

「ちよつ！ えつちゃん！ チョットマッテ！」

「少し話し合おうかの!? いやー、リーダーの座なんて些細な問題じゃし？ 貴様なら
相応しいかもしれんしな！ だからバンド解散するのは待つてください！ いやほん
とこー！」

そう言つて、えつちゃんを引き止める第六天魔王と謎のヒロインXちゃん。

本来、基本めんどくさがりのこの娘がドラムを引き受けてくれるというの自体奇跡なのだ、それ相応の代価はもちろん必要だろう。

さて、こうして、ようやく話がまとまり、とりあえずバンドは無事結成される事になった。

後に彼女達は伝説的なバンドになるだろう、そんな予感がする。

だがその前に…。

「とりあえず、あのクレーターと荒らした畑を治そうか？ お前ら」

「…えつと…、今からリハやる予定なんじゃが…」

「やれ♪」

そう、満面の笑みを浮かべ青筋を立てているモーさんがすっぽん沼江をちらつかせながら彼女達全員に脅しをかけていた。

一応、カタツシユ村の領主であるモーさん、確かに自分の管理する村に墜落した宇宙船で出来たこんなでかいクレーターが二つできれば捨て置く事は出来ない、当たり前である。

——後始末はしつかりやらなければ。

しかも、彼女達が断りでもしようものなら、ステゴロで首と拳ゴキリゴキリと鳴らしつつ特攻服を着た聖女のお姉さん、そして、同じく仁王立ちしている聖女の農家娘を含めた農家の人達が満面の笑みでお出迎えしてくれる事だろう。

これを見ていた彼らは無言で左右に首を振り、助けを求めるノツブ達に静かに鍬を渡してあげるのだった。

「仕方ないね、やっちゃったもんは」

「さー！ しつかり埋めよう！ なかなか深いけどね！」

「…最近のロックバンドって鍬握るんですね」

「農、殿様なのになんで農民やっとするんじやろう…」

こうして、クレーターを埋める作業に入るノツブ達、人気バンドへの道のりは果てし無く遠い。

人気アイドル兼ロックバンドの彼らも鍬を握っているのだから間違いない、いつか彼女達も違和感なく鍬を握るその日はそう遠くはないはずだ。

「えっちゃん上手いですね、使い方」
「慣れればなんてことないよ」

——二刀流の鍬使いが二人。

流石は剣を日常的に二つ握っているわけではない。というより、鍬の二刀流など見たことが無いが。

眼鏡美少女とジャージ美少女が泥まみれで鍬を握る姿はやはり絵になる。しかし、一方で第六魔王はどこか鍬の使い方がぎこちなかった。

そんなこんなで埋め立てを始めるバンドメンバー、果たしてこんなことで曲を演奏することができるのだろうか？

今日のY A R I O。

1. 親方、空から女の子が！
2. X斬りがカタツシユ村に流行。

3. 村にクレーターができる。
4. カタツシユ村紅白歌合戦開催。

王様作り（完結）

さて、カタツシユ村での休日を満喫したカタツシユ隊員達。

彼らが今回訪れたのは再びノアの男爵ディーノの回収である。というのも、ヨルムンガンド捕獲にも成功した彼らは以前から計画していた事に挑戦しようとしていたのである。

打ち上げられたノアの男爵ディーノを目の当たりにするカタツシユ隊員達。

あの荒海の中を乗り越えて大雨を凌いだ男爵ディーノは傷だらけではあるものの綺麗な形で残っていた。

「こんにちはー！ ノアさんお久しぶりー」

「おー！ そなた達か！ 久方ぶりじゃの！」

「どうでした？ 男爵ディーノ？」

そう言って、打ち上げられた男爵ディーノを見渡すカルナ、船の出来栄えは間違いな

くよかった。その証拠に傷はあれども破損し浸水した形跡は無い。

これなら、まだ使える。彼らはそう確信していた。問題はこの男爵デイーノをまだノアさんが使うかどうかであるが…。

その事について、ベディはこんな質問を早速ノアさんに問いかけはじめた。

「えーと、この後、この船使う予定とかありますかね…？」

「いや、ないのう。とりあえず大雨と洪水は凌げたし、こうして大陸も見つけられたしの」

「じゃあ…この船、僕らが頂いちゃっても…？」

「もちろんOKじゃ！」

そう言つて、サムズアップと満面の笑みで応えてくれるノアさん。同じ船を作りあつた仲、それに協力してくれた彼らに船を譲るのなど何も躊躇する要素はなかった。

お礼を述べ、それを素直に譲り受けるカタツシユ隊員達。これさえあれば、念願のカタツシユ島までの渡航ができる船が手に入る。

長旅になる為、これの他にももちろん様々な補修や改修を行わなければならないがそれでも基になる船があるだけでもだいぶ違ってくる。

「ありがとうございます！」

「いやー、この船ならぜってー行けるな！ ブリテンってイギリスでしょ？ 問題ないな」

「まずは、改修して：ほら、丁度、間違えて戦艦作ろうとして解体して持つて帰った鉄あるからそれ使おうよ」

コロンブスが世界を一周したように、日本の海にもこの船があればきつと渡れる、この男爵ディーノならば。

そんな確信が彼らにはあった。どうせならばラーメン作りに必要な海産物を日本の海で採りそれを使いたい。

ノアさんと作ったこの男爵ディーノならきつとそれも成し得る事ができるはずだ。

そして、この男爵ディーノを早速カタツシユ村に持つて帰ることに。とはいえ、この大きな男爵ディーノをそのまま持つて帰るのは不可能。

なので、小分けにしトラックだん吉に詰める大きさにしてカタツシユ村に持ち帰る。こうすれば向こうで組み立てができ、なおかつ船の改修や補修もできる。

「いつもなら和紙や発泡スチロールの船なんだろうけどね」

「それでどうやって大西洋横断する気？ 沈むよ間違いない」

「だよね」

以前作った和紙や発泡スチロールの船、土佐和紙の船はグニャグニャになり、発泡スチロールの船はクルクル回転するだけだった。

そんなもので広大な大西洋を横断できるわけが無い、ブリテンから日本までの距離は言わずもがな相当な距離がある。沈没不可避である。

よくよく考えてみれば長い航海になるだろう。場所が場所だけに今回の企画は気を引き締めて臨まなければならない。

「きつと中途半端な気持ちでやると目も当てられない酷い航海を公開することになって皆、後悔することになるで！」

「……そうだね」

「今の時点でかなり後悔してるじゃないリーダー」

「……寒いギャグにも負けず。

そう大寒波のようなリーダーの親父ギャグに晒されている彼らにしてみればなんのその、航海でトラブルがあつたところで屁でもない。

というわけで、トラックに積んで男爵ディーノはブリテンの地へ。

重機を使い、慎重にトラックから引き下ろしていくクーフーリン。

ピラミッド作り以来、久々に扱うクレーン車だが、長年重機を使ってきた経験から身体が覚えている。

「このために車両系建設機械整地等の資格を取つたんだから。やってやれないことはないことはい」

「……重機歴18年の余裕。

作業自体もプロ顔負けの扱い方、付いたあだ名が重機王。

様々な重機を扱う資格を持つているリーダーだからこそそのあだ名である。

そんなクーフーリンがクレーン車を操っている最中、一方でカタツシユ村でモーさん、エリちゃんと共に男爵ディーノの組み立てを行うデイルムツドとカルナの2人。

木材を扱うデイルムツドは思い出すかのようにエリちゃんモーさんに対してしみじ

みと昔話をし始めた。

「木の気持ちになつてあげるといいよ　アタマごなしにやられたら木もね…　オレが木の気持ちになつたのは4歳の時かな」

「ふーん、てか木の気持ちつて今思つたんだけど何？」

「木の気持ちつてのは感じるんだよ！　聞こうとしちやダメ！　第六感使うんだよ！」

「…な、なるほど、奥が深いわね」

痛んだ箇所を取り除き、新たな木材を使い張替えを行うカタツシユ隊員達。男爵デイーノはノアさんと共に大洪水に荒波を耐えきつてみせた、だからこそ、改修はしっかり行つてやらねばならない。

デイルムツドはしみじみと男爵デイーノを撫でてやりながら慈愛に満ちた表情で彼女達に話を続ける。

「北海道はポプラが有名だね　オレがどうこうじゃなくて　向こうが話しかけてきたのよ」

「…まあ、精霊の類に強いもんなデイル兄イ」

「妖精王の息子らしいじゃない？ それくらい当たり前なんじゃないの？」

「この身体なる前だからパンピーのアイドルやってた時の話なんだけどね？」

「木の気持ち分かるアイドルの時点でパンピーじゃねえよ」

冷静なヴラドの突っ込みが今日も冴え渡る。

どこの世界にアイドルで木の気持ち分かる一般人がいるというのだろうか？ 英雄になる前から木の気持ち分かる時点で十分な変態である。

幼少期の出来事をディルムツドはふと思い返してみる。

「俺、友達いなかったから 木と遊んでた」

「泣いていいっすか？」

そう言い切るディルムツドに作業を手伝っていたヴラドが思わず同情してしまう始末。

これにはモーさんとエリちゃんの目もウルウルと涙目になって頷いていた。可愛い妹分達に同情される40過ぎのアイドル、これも定めか…。

さて、続いては丸太を削る作業、丸太の中身を削り、以前やった水路作りの要領でベ

デイが丸太を削る。

しかし、その削れた中身は…。

「先生 ボロボロなんですけど」

「俺の人生と一緒にだぜ」

「ディル兄イ！ ほら！」

「おー！ モーさん上手くなってるじゃん！ これで俺と一緒に人生ボロボロブラザーズだな」

「イエーイ！」

サムズアップするディルムツドとモーさんの2人のやりとりに思わず顔をひきつらせるベデイ。

ーーー人生ボロボロブラザーズ。

そんな兄妹で果たして良いのだろうか…、本人達が楽しそうなのでとりあえずそっとしておくことにした。

「我が王よ、これが男爵デイーノなる船らしいです」

「うむ、確かに素晴らしい匠の業だ。私も期待せざる得ないな」

そう、槍を携えたブリテンの王、アルトリア・ペンドラゴンとアグラヴェイン卿の2人である。

まず、注目されるのはアルトリアさんのその成長っぷりである。以前はあれだけ、浜辺で流れ着いたまな板に近いような胸部がなんと一変。

まるで、以前、モーさんが西瓜を胸に入れた時と同じくらいに豊満になっている。

「おー！ アルトリアちゃん！ 久しぶりー！ 元気してたー！」

「え！ 父上か！ 父上ー！ …えっ？ …ち…乳上っ…!？」

「モーさん、シヨックなのは分かるけど文字がいかがわしくなっちゃってる」

たゆんと弾むアルトリアの胸に思わずシヨックを受けたモーさんが真っ白になり固まる姿を見て、突っ込みながら肩を叩くヴラド。

確かに見ないうちに成長しすぎである。こんな凶悪なものを揺らされれば子であるモーさんもそうなるのも致し方ない。

以前、モーさんに限っては西瓜でそんな事をやっていたので余計にダメージが大きかった、目前にはあの西瓜と同じくらいデカイのをぶら下げた父上、もとい、乳上がいるわけだが。

それを見たデイルムツドはリーダーの元に駆け寄るとこんな言葉を交わす。

「あれの糖度何度くらい？」

「あれは大体……。いや、わからへんよ、西瓜やないやろ」

——測定不能の西瓜。

どうもアルトリアちゃんから話を聞くところによると折れたカリバーンの代わりに槍を使うようになって成長期に入ったらしい。

にしてもこの成長っぷりは彼らも度肝を抜かされざる得なかった。

しかしながら、こうも見ないうちにアルトリアちゃんが成長するとなんだか嬉しくもなってしまう。

農業に携わっているものゆえの性分か……。

「いやー、こんなに立派になるなんて」

「毎日、肥料（食料）送っただけはあるよな！」

「こう…来るものがあるよね…」

「……思わず感動してしまう。」

そして、モーさんに対しての期待も高まってきた。あと数十年か、その後かはわからないがあれくらい大きくなるポテンシャルを彼女も秘めているわけだ。

ベディは思わず目をキラキラと輝かせる。今後の成長が実に楽しみである。

さて、それはさておき、どうやらアルトリアちゃんがカタツシユ村に訪れた理由というのは村の視察に来たらしい。

急速に発展していくカタツシユ村、医療関係、食料、物流、e c t…。挙げれば切りがなくその恩恵はブリテン全土まで広がっている。

特に蛮族と思われていたピクト人との交易もカタツシユ村では頻繁に行われている。

彼らとのファーストコンタクトを行なったのはもちろん、ベディである。彼らとの会話はこんな感じに進行していた。

『オレタチ、キウエル、オレタチ、ナカマ！ カンゼンニ ゴリラ ジョウタイ』

『オマエタチ、ヤサシイ、ハイタツ、ヨククル、タスカル、オイシイ』

『ココニ、シルシ、ツケル、スルトポイント、タマル』

『コレハ、オトク』

『もの○け姫みたいな事言ってるけどそれめっちゃ現代的な会話だよね、ねっ?!』

——ポイントタマル。

確かにお得ではある。これにはピクト人の族長もにつこり、というわけで、ピクト人伝説を教わりつつ、文化的な交流を行う事になり今ではこのカタツシユ村のおかげでブリテンで争いが起きる事はなくなった。

ピクト人の中にも建築やトラックの運転に秀でている人材もいるので、今では貴重な人材として活躍している者達までいる。

そんなカタツシユ村を治めている領主であるモーさんことモードレッド卿はブリテンではアイドルであり皆から憧れの存在として広く認知されつつあった。

そこで、アルトリアは考えた。今の彼女ならその器になり得ると。

「モードレッド…、貴殿を私の跡継ぎとしてこのカタツシユ村とキャメロット、そして、ブリテンを後々治めてほしいと思っている。アグラヴェインや円卓の騎士達と話し

合ってそう決めた」

「……………!?…それ、それは本当ですか!?!」

そう言つて、驚いたようにアルトリアに問いかけるモードレッド。

アルトリアは静かに頷いた。モードレッドはこのブリテンに紛れもなく大きな功績を残していた。

領民から愛され、先住民との争いを無くし、そして、何より憧れと敬意を抱かれている。Y A R R I O 達が手塩にかけて育てた彼女を跡継ぎにするのに何の迷いも今のアルトリアにはなかった。

ブリテンの王、アルトリアはゆつくりと馬上から降りると笑顔を浮かべたままモーさんに近づいていく。

「ああ、貴殿は十分によくやってくれた。…紛れもなく私の自慢の息子だ」

そして、彼女を優しく抱き締めるとアルトリアはそつと頭を撫でながら今までの頑張りをねぎらうようにモーさんに優しく言葉をかけた。

それに対し、モードレッドは肩を震わせながら、固まったまま静かに涙を流していた。その光景を目の当たりにしていたカタツシユ隊員達もまた皆嬉しそうに拍手を送りつつ、満面の笑みを浮かべている。

「…よかったなあ、一番認めてもらいたい人によくやく認めてもらえてホンマによかったわ」

「あー…ダメ…俺こういうの駄目だわ…。涙出てきた」

「…いやー、頑張ったもんなあ頑張ったよ、モーさんはよく頑張ってた」

彼女を可愛がっていた兄貴分の彼らの眼からも思わず涙が出てきた。モーさんの頑張りは彼らもよく知っていた。

そうめん流しを作るために、リーダーと一緒に川に流された事もあった。

スカサハ師匠に失礼な事を言ってお仕置きされた事もあった。

木材や建物の作り方工具の扱い方を真剣にカルナから学んだ。

美味しい板前料理の作り方や様々な伝統的なモノづくりをディルムツドから学んだ。

機械弄りやレストア、船造りや乗り物についてはベデイから学んだ。

土器や器、炭作りや新たな事に挑戦する姿勢をヴラドから学んだ。

土の知識や農業の大切さをリーダーであるクーフリーンから学んだ。

彼らは知っていた、モードレッドという自分達の妹分が一日、一日しつかり成長して
いた事を、だからこそわかる、彼女の気持ちだ。

「……は……い……つ、承りました……！ 父上っ！」

しつかりとした口調で震える声でモードレッドはアルトリアにそう答えた。

今までモードレッドが積み上げてきた事は無駄ではない、彼らを通じて人の大切さ、
絆の大切さをしつかりと学んだ。

アイドルとして人に自然に地球に幸福を与える彼らの教えは彼女には大きな財産に
なったに違いない。

それを見ていたマーリンもまた笑顔を浮かべ頷いていた。

アルトリアの決定になんの異議もない、モードレッドはきつと領民から憧れ愛される
立派な王になるだろうとわかるからだ。

マーリンはしつかりと目撃していたモードレッドの腰に携えてあるすっぽん沼江が
薄く光を放っている事を。

そう彼らのはついに作ったのだブリテンを治める王様を。

こうして、彼らの挑戦の一つがまず一つ達成される事になった。
「いよいよ残るは遠回りになりつつある伝説のラーメン作りだけ！
果たして彼らは伝説のラーメンを作り上げる事はできるのか？」

この続きは…！ 次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

1. カタツシユ村 i n 王様作り編完結。
2. ピクト人と会話できるベデイ。
3. おっぱいが成長した乳上。
4. 重機歴18年のリーダー。

酪農のお手伝い

前回の鉄腕カタツシユでついに王様検定一級資格免許を取得したモーさん。めでたく、これでブリテンの王様になることができるようになった。

それは同時にY A R I Oの目標である王様作りが完了したことを意味する。

そんなめでたい出来事を迎える事が出来たカタツシユ隊員達だが、引き続き、カタツシユ島に渡るための男爵ディーノの組み立てがまだ残っている。

と、それとは別に今回、ベディとヴラド、モーさんの3人はマーリン師匠の酪農の手伝いをしにやって来ていた。

牛や羊、豚やヤギなどの家畜を始め酪農に必要な動物が増えて行く中で人手が足りなくなつて来ているという。

「干し草この辺りで良いですかね？」

「うん、ありがとう助かるよ」

「よーしよし、晴男元気にやってたかー」

そう言いながら晴男（ヤギ）の頭を撫でてやるベディ。

この牧場の動物達が人懐っこいのはマーリンが手塩にかけて世話をしてあげているからだろう。

マーリンも最近、酪農についての知識を深めていく中でだんだんと酪農に関するコツをつかめているようであった。

一方でモーさんはじゃれつくように一匹の狼と戯れている。

彼女はペロペロと顔を舐めてくるその狼を可愛がりながら満面の笑みを浮かべていた。

この狼は羊の誘導を行う為の牧羊狼としてカタツシユ隊員達が連れてきた狼である。

「あははは！ くすぐったいってば！」

「ワン！」

だが、この狼はただの狼ではない。

狼王ロボ、「魔物」と呼ばれ恐れられる古狼であり、巨躯の狼で、自分の倍以上もある

体重の牛を引きずり倒す体力と「悪魔が知恵を授けた」とさえ称される知性を持ち合わせていたと言われている。

それがなんと今では牧羊狼。

ニューメキシコから彼らが連れてきたこの狼だが、それにはちゃんとした訳があった。

そう、この狼王と呼ばれている巨大な狼。実はY A R I O達にとって思い入れが強いメンバーの1人だったのである。

「北登く、もう！ 本当にお前は可愛いなあ〜よしよし〜」

「クウーン」

そう、なんとあの福島県の村で彼らの師匠と共にいたあの柴犬、北登だったのである。それゆえ、人懐っこく、特にモーさんはこの北登を溺愛していた。

暇さえあればこうして北登と戯れにこのカタツシユ村の牧場に毎日訪れているわけである。

モーさん曰く、北登のモフモフした毛に顔を埋めるのが大好きだという話であった。

「もう誰か言ってやって、お前の方が可愛いぞって」

そう言いながら幸せな表情を浮かべて北登を撫でているモーさんを見ながらそう突っ込みを入れるヴラド。

そんな中、マーリンと共に牛から乳を絞り牛乳を搾取している。

ベディは手探りながら、マーリン師匠から乳搾りのやり方をレクチャーしてもらい牛から上手く乳を搾り出していた。

白い液体を木製のバケツで回収していく作業。

確かにこれは人手がいる。この作業をマーリン師匠だけでやるのは大変な作業になるだろう。

そんな最中、ベディは勢いよく出る牛の乳を見ながらこんなことをマーリン師匠に話しはじめる

「師匠、俺さ、乳マスターになるわ」

「君はいきなり何言ってるんだい？」

そんな急な決意に思わず顔を痙攣らせるマーリン師匠。

しかし、ベデイは牛の乳を搾り出しながら確信していたこの牛の乳搾りに対する確かな手ごたえ。

かつて、あーご飯食べてお腹いっぱい、を略しておっぱいと口走った男が言う決意は伊達ではない。

「おっぱいで俺の右に出る奴は居ないっていつか言ってみたいなって思つて」「冷静に考えよう？　人前でそんなこと言つたら通報されるよ」

そう言いながら、唾然としているマーリン師匠に変わつて冷静な突っ込みを入れるヴラド、人前でそんな事を言つたりしたらそうなるのは当たり前である。

そんな中、牛の乳搾りの作業にモーさんも加わつて順調に牛乳を回収していくカタツシュ隊員達。

そんな最中、牛で何かを思い出したのか、ベデイはふと搾り出している牛の身体を見ながら他のメンバーにこんな質問を投げかけはじめた。

「そーいやさ、英語で牛の赤ちゃんつてみんな何て言うの？」

「牛の赤ちゃん？」

「何？ またどうしたの急に？」

「いやさ、思い出してさ、牛見てたら」

ベデイは首を傾げながら牛の乳を絞りつつみんなに問いかける。

牛の赤ちゃんを英語で、なかなかそんなシチュエーションはないだろうがカタツシユ隊員達はベデイの疑問に首を捻りながらちよつと考え込む。

そんな中、ヴラドは逆にその質問に関してベデイに問う。

「じゃあ、ベデイは英語で何て言うの？ 牛の赤ちゃん」

そう、そんな事を聞いてくると言うことは以前、ベデイがそう質問をされたというこ
と。

その件に関して、首を捻っていたベデイは間を空けて、ゆつくりと口を開いてヴラド
にこう答えた。

「俺がそんな時言ったのは、ビーフバイビー」

「牛肉に既に加工済みかな？」

——牛肉赤ちゃん。

その瞬間、マーリンとモーさんの2人は吹き出すように笑い始めた。

ビーフは牛肉、つまり、訳すと牛肉赤ちゃんなのである。どうやら、牛の赤ちゃんは牛肉に加工済みらしい。

ブリテンに住んでいるというのにこれではここの現地の人に言葉がちやんと伝わっていたのかどうかすら怪しいところである。

「そんな時はロック調な感じでビーフバイバーって言ってた」

「何ちよつとかつこつけてんだよ」

そう言いながら、ヴラドも思わずベデイのその言葉に吹き出す。

かつこつけても間違いは間違いである。そう言われたベデイはその後、モーさんから牛の赤ちゃんの正しい英語を教えてもらった。

そんなわけで、乳搾りを終え出来上がった牛乳を並べていくカタツシユ隊員達、これが、後々、様々な乳製品に変わっていくのだから楽しみだ。

「マーリン師匠、俺、練乳たくさん食べたいからいっぱい作ってね」

「…う、うん、わかったよ」

「それとスタツフもおいおい連れてきますので、これ、お一人だと大変でしょうし」

「まあね、魔法でカバーはそれなりにしてるんだけどそうしてくれると助かるよ」

そう言いながら、苦笑いを浮かべるマーリン師匠。時々、心優しいジャンヌや優しい姉貴肌のマルタが手伝いに来てはいるが、女性に手伝ってもらえる仕事は限られている。

力作業や酪農のイロハを知っている経験者が欲しいとは前々からマーリンも考えていた事だ。

というわけで、場所は変わって男爵ディーノの改修に移るとしよう。

「アルトリアちゃん、案外不器用なんだね」

「ぐぬぬ…」

「我が王よ、そこはこうしてですな…」

「それでもってアグちゃんがめっちゃ器用過ぎるわ、何で金槌の使い方そんな上手いのよ」

そう、アルトリアちゃんがなんと船造りに協力してくれる事に。しかもアグラヴェイン卿まで手伝ってくれていた。

頭にタオル巻いている姿が妙に似合っているアグラヴェイン卿、一言で言い表すなら日曜日に大工を趣味にしているお父さんのようだ。

アルトリアちゃんは相変わらず苦戦中の模様、工具の扱い方がどこかぎこちない。

「…船造りとはこんなに難しいものだったのか…」

「国を治めるよりは簡単だと思うよ」

「…国を治めるより船造りが難しい。」

そんな事を言い始めたら多分、いろんなところの王様達から抗議が殺到することだろう。しかしながら、最初慣れない内はやはり難しいものは難しいのである。

アルトリアちゃんにレクチャーしながら男爵デーノの加工、改修は順調に進む。

「バックだ！ そのままそのまま！ オーライ！ よしこんなものか」

「エミヤン、もうええの？」

「リーダー、私的にはこの位置がベストだと思う。ここなら運搬も手数が少なくて済み

「そうだしな」

安全メットを被ったエミヤさんは設計図を見ながらクレーンを操り、男爵ディーノに必要な材料を運搬するリーダーにそう告げる。

効率よく作業ができるように工夫をし、運搬に手数をかけなくて済むようこうして必要な材料をあらかじめ移動させておく。

こうする事で男爵ディーノの改修作業もより円滑に進める事ができるはず。

「完成が楽しみやなあ」

一体どんな仕上がりになるのか今はまだ想像できないが期待は高まるばかりだ。

さて、そんな作業を繰り返す最中、一台のだん吉が現場へ帰ってきた。

中からは疲れた様子のデイルムツドの姿が…一体どうしたのだろうか？

「ただいまあ…」

「おー、デイル！ 今クレーン終わったところやで、えらい疲れとるけどどないしたん？」
「いやー…、久々、フィニアンサイクルのみんなにお土産持って帰ったんだけどさー、

ちよつと聞いてよーマジで」

デイルムツドは呆れたような表情を浮かべて深いため息を吐くとそう告げる。

そう、デイルムツドは久方ぶりに挨拶がてらフィニアンサイクルのフィオナ騎士団の皆さまに板前料理とカタツシユ村で採れた作物のお裾分けをしに行っていた。

そこまでは良かったのだが…？

「…なんかさあ、前からなんだけど俺、料亭開いてた時期あつたじゃん？ そんな時になんかコーマツクさんって人がさあなんかえらい気に入っちゃったみたいでさ、和食料理」

「ほうほう」

「そんでまあ、その人にグラニーニアって娘さんいんだけど嫁にやるってんで、アイドルだから俺ってば一回断った訳よ」

「そんでそんで？」

「久方ぶりに騎士団に帰ったらその娘が厨房で包丁チラつかせてて戦慄した」

——まさかの押しかけ嫁。

そう、久方ぶりに帰ってきた実家に見知らぬ可愛らしい娘が包丁を持って眼のハイラ

イトが無く台所に居たらそれは戦慄不可避である。

流石にこれにはディルムツドも身体が強張ったため息をつきながらリーダーに話す。正直な話、巨大な大蛇、ヨルムンガンドより怖かったそうなの。

「嫁だけに読めんかったわけか…」

「いや、嫁じゃないし、貰ってきてないし、なんとか言いくるめて一命取り留めて帰って来たんだからね、俺」

「そりゃ大変やったなあ」

ディルムツドは顔を引きつらせながらリーダーに告げる。トラウマになりそうな出来事だが、なんとかあったみたいである。

久方ぶりに実家に帰ってみたらとんでもないことになっていたのだからそうなるのも致し方ないだろう。

「グラニーアちゃん、別れ際にきつと貴方の元へ行きますからっ！ 待っててね！ っ
て」

「よかったやん！ それでお前なんて答えたん？」

「そこは抜かりなく、俺らのアルバム買ってくれたら握手券付いてくるよって言ったわ！」

「それはちやうやん！ あかんやん！ その商法どつかで見たで！」

「……どつかで見た商法。」

そんな商法が通用するのか、いや、彼らほどの人気アイドルとなればこんな風な商法もいけるのではないだろうか？

しかしながら、皆さまは彼らの事は既に歌うアイドルというより農家の人の認知になっってしまったのでこの商法が成功するかどうかは疑問である。

「…まあ、一応、俺たち島行くから船舶免許取って船を木から作れるようになってから出直しておいでは言っておいたから大丈夫とは思うんだよね、多分」

「いやーわからへんよその調子ならその娘、船舶免許取ってくるかもしれへんで？」

「……本気でやりかねない。」

それくらい勢いはあつたような気もする。なんにしろ、彼女に無理難題を言ってもフィオナ騎士団の皆は優しいので手助けしそうだなとデイルムツドはふと思った。

現にグラニーニアさんが厨房で包丁をちらつかせていた時、もどうやら彼らから板前料理について学んでいたからだそう。

そう考えると、いずれにしろ船舶免許を取得し、更に航海術を兼ね備え、板前料理もできるようにグラニーニアがなつてしまえば……。

そう考えると、デイルムツドは急に背筋が寒くなったような気がした。

「今度帰るときは刺されないように腹に鉄板仕込んで持つていっとくわ」
「Vシネマかつ！」

エミヤさんはそんなデイルムツドの言葉に思わず突っ込みを入れる。

まな板を腹に抱えて持つて行けば確かに刺された時になんとかかなりそんな気もするが、実家に帰るのに任侠映画のカチコミに備える格好はいかなものだろう。

愛のチカラとは時に未恐ろしいものである。

というわけで、予想外の熱烈なファンの押しかけ騒動があったもののデイルムツドも男爵ディーノの改修作業の手伝いに入る。

さて、カタツシユ島に渡る船は無事に完成するのだろうか？

この続きは次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

1. 酪農のお手伝いをする。
2. 狼王と化した北登登場。
3. ビーフバイビー
4. グラーニア嬢板前に弟子入り祈願
5. 国を治めるより難しい船造り

男爵ディーノの改修（完了）

あれから三日後。

カタツシユ村の農業の片手間、男爵ディーノの改修をしていたY A R I O達だが、その作業も無事に終わりを迎えることが出来た。

アグラヴェイン卿の意外な一面を垣間見ることができた今回の船改修作業だったが、大きな事故もなく安全に作業を遂行できたのは幸いだ。

「ふむ、良いではないか、良い出来だと思うぞ」

「ギル師匠のお墨付き頂きました！」

「ありがとうさーすー！」

「良い、特に船頭についているあれが気に入った」

ノアの男爵ディーノの出来栄えを我らが師匠の一人、ギルガメツシユ師匠に見てもらい感想を頂いたカタツシユ隊員達もこれには満足だ。

そんな最中、刀を携えた一人の桜色のセイバーが不満げに彼らの元へふらりと現れる。

そう、カタツシユ村の緊急搬送の申し子という二つ名を持つ沖田さんその人である。

今日はめでたくカタツシユ病院からの退院日なのだが一体、どうしたというのだろうか？

「沖田さんじゃん！ もう身体は平気？」

「…ええ、今日退院でしたから、もう大丈夫ですよ」

「それは良かった良かった！ それで元気ないみたいだけどうしたの？」

完成した男爵ディーノの前で首を傾げながら彼女にそう問いかけるカルナ。

すると沖田さんは指をツンツンとしながら視線を逸らすと言いずらそうにこんな話をぼつりぼつりと彼らに語り始める。

「実は私的には大正ロマン溢れる立ち位置的なものを期待していたのですが、最近、病院に運ばれるばかりで」

「ほうほう」

「それで…ヒロインとしての立ち位置がですね…。私もスカサハさんやモーちゃんみたいに可愛い！ とか、沖田さん大勝利！ 嫁ルート確定！ みたいなイベントがあつて然るべきだと思うんですよ、セイバー枠ですし！ アルトリア顔ですし！」

「それ言いはじめちゃつたらこの村にいる人達、王様含めて全員親戚じゃんとか言われるから」

——アルトリア顔の濃い聖地。

いつのまにかどこかの社長さんが大歓喜しそうな村になってしまつてきているカタツシユ村、おんなじような面影があるもののキャラが濃い面子が集まつて来ている。

そんな村でヒロインを張ると宣言する沖田さん、正直な話、この村では全員がヒロインを張れてしまうため厳しそうと思わざるを得ない。

というより具体的に沖田さんが言っているヒロインとは何を指しているのかがそもそも疑問なのだが…。

「つまり、乙女ゲームの様に…沖田さんを巡りY A R I Oの皆さんが私と共に熱い恋に落ちていく恋愛模様を…」

「はい、作業に入るとすつか」

「いやー忙しい忙しい」

「ちよつと!? だからなんでそんな扱いなんですか私!」

そう言いながら、再び別の作業に取り掛かり始めようとする彼らを制止する沖田さん。

これがピチピチのイケメンアイドルならともかく、中身が平均年齢40歳以上の中年英雄アイドル達に何を求めているのだろうかと一同はそう思わざるを得なかった。

とはいえ、確かに沖田さんも年頃の乙女、そんな恋にロマンスを求めぬ気持ちもわからないでもない。

「とりあえず沖田さん、男爵デイーノの上でタイタニックでもしとく」

「改修したばつかなのに沈没すんの、この船」

ローラブロマンスといえどタイタニック。

しかし、待つてほしいタイタニックをするのは良いが、船の頭には珍妙な船首像があるためどうしてもシュールな光景しか思い浮かばない。

しかも、タイタニックは沈むので船を海に浮かべる前から縁起でもない。

「紅に染まったこの儂を〜！ 慰める奴はもういない、おー、元気になったようじやの
沖田…モガッ！」

「ノツブ、その口閉じてください。それトラウマです」

「むしろ紅に染まったのおつきーだけどね、吐血的な意味で」

しかもタイミング悪くデカイギターを担いだロックなノツブまで現れる始末。

ー…まためんどくさい事になって来た。

毎度お馴染みの展開に一同の思いも計らずも合致する。まあ、この場に集まって来ている面子が面子だけにそれは致し方ないのではあるのだが。

「ん？ どうしたしげちゃん？ 何か問題か？」

「あ、師匠！」

「サーちゃん師匠と呼べ！ 馬鹿者！」

そう言っただけ現れたのは木材を担いでいるスカサハ師匠。

そして、この方もなかなかの癖者でめんどくさい。サーちゃん師匠と最近誰も呼んで

くれないので自ら広めようという事を無理矢理行い始めていたのである。

どんなになっても女性とは可愛く見られたいそんな生き物なのかもしれない。

「いやー、サーちゃん師匠。おつきーが私もヒロインになりたーいと言ってまして」

「あの男爵デイーノの先端でどうブレーンバスターしようかと話し合っていたわけですよ」

「あれ？ 皆さんちよつと待ってください！ ジャンルがラブロマンスからサスペンスになりかけてますよっ！ 沖田さん被害者Aみたいな扱いになりませんかそれっ！？」

さっきの話と全然違うことに思わず突っ込みを入れる沖田さん。後ろではみんなの兄貴分ことカルナが屈伸などの準備体操をしていた。

後輩にプロレスを仕掛け続け数十年、男所帯ならではの恒例行事のベテラン、やはり風格が違う。

するとスカサハ師匠はポキポキと拳を鳴らすとニコニコと笑みを浮かべ、沖田さんの肩をポンと叩く。

「よし、そういう話なら私がやってやろう」

「やめてください死んでしまいます」

満面の笑みを浮かべているスカサハ師匠の頭にズビシツと手刀を入れる沖田さん。

スカサハ師匠のブレーンバスターなんて喰らえばそれはそうなるのも致し方ないと言える。

というより沖田さんは弱い女の子そんな女の子は労らなければならない。

「まあ、こやつは攘夷志士とやらを何人もぶった切って来た脳筋じゃがの。しかも、剣術も脳筋仕様じゃし」

「何ですって！ このあんぼんたんうつけ！ だいたい貴女だつて墓前に灰投げたりするヒヤッハーなキチガイではありませんか！」

そう言つて言い争いを始める沖田さんとノツブ。

しかしながら、それを眺めていたカタツシユ隊員達は顔を見合わせながらため息を吐くとこんなことを彼女達に語り始める。

「ねえ、二人ともこんな諺知ってるかな？ どんぐりの背比べって」

「五十歩百歩だな」

「目くそ鼻くそとも言わないっけ？」

「ちよつとお主ら辛辣すぎやせんかの!？」

——手厳しいお言葉。

カタツシユ隊員達の容赦ない言葉にノツブもこれには思わずツツコミを入れる。

とはいえ、確かに沖田さんも乙女。夢見る乙女の願いを叶えるのも、アイドルとしての使命である。

という訳で？

「まあ、うちのイケメン担当って言えば顔役のこいつでしょ」

「もー、こじつけ酷すぎだつてー、ヴラドでいいじゃんかー」

「こいつ貧弱だから多分、沖田さん海に落っこつすよ」

「なんだとこの野郎！ 何言つてんのよ!?! 俺も遅しくなつたんだよ！ こう見えて
！」

そうカルナの一言にカチンと来たヴラドが思わず突っ込みを入れながら声を上げる。

確かに生前なら全くもって貧弱枠だったヴラドも今では英雄の身体、それならば沖田さんを支え男爵ディーノの先でタイタニックをしても大丈夫なように思える。

だが、沖田さんは…？

「あ、私、髭ボーボーな人は好みでは無いので…すいません」

「好きで生やしてんじやないんだよ!? 元はツルツルだつてたんだよ俺!!」

「威厳はあるやけどなあ…」

「ちくしょう! 髭全部剃ってやる!!」

——威厳と逞しさの代償に老けた。

悲しきかな、前世では端麗で綺麗な顔つきだった（自称）のヴラドもこの身体になつてから威厳と髭と共にそれが失われてしまった。

ヤケになったヴラドは髭剃りを片手に川辺に向かって駆けだしてしまった。という訳で、結局、沖田さんをタイタニックするのはベディという事に。

船の改修も無事に終わり、それを祝す意味で縁起良く男爵ディーノでタイタニック。タイタニックだと沈没してしまうので縁起が良いとは全くもって思えないのだが…、

突っ込みは野暮というもの。

沖田さんの願いを叶えるため、男爵ディーノの先端へ。

「お、おおー…、た、高いですねこー」

「よしやるか！」

「どうせやるなら、シーン再現しながらやろうぜ！ 気持ち入れてさー！」

「いいねえ、やろうやろう！」

という訳で、沖田さんとベデイの二人は男爵ディーノの先端の付近であの幻の映画、タイタニックの再現をすることに。

ドラマや映画に出て活躍する事何十年のベテラン、すでにベデイは気持ちはハリウツドスターになりつつ台詞を話し始める。

見つめる沖田さんとベデイの二人、そして、ベデイはこんなセリフを沖田さんの耳元で囁く。

「目を瞑って…、手を広げてみて」

「はい…」

顔を真っ赤にしながら、言われるがままに男爵ディーノの先端で手を大きく広げる沖田さん。

改修が終わった男爵ディーノは海に浮かべ、プカプカと浮いている。タイタニックまでの豪華客船とは言わないが雰囲気は十分だ。

——ついにあの名シーンが蘇る。

そして、沖田さんの耳元でベデイはこう話しを始めた。彼女の腰に手を回し、背後からしっかりと支えるベデイ。

「そのまま真っ直ぐ歩いて、さあ、目を開けて」

「……………」

そして、ゆっくりと目を開ける沖田さん。そう、これこそ、沖田さんが望んでいたラブロマン的な展開。

暫しの間、様になるその光景を眺めるカタツシュ隊員達、やはり、役に入ると雰囲気

が違う。

だが、それを眺めていたディルムツドの一言でこのラブロマンス的で幻想的なシーンは一気に崩壊する事に。

「北斗の拳で見たことあるよなあれ」

「天翔十字鳳じゃん」

「ちよつとお！ 今いい雰囲気だったのに！ やめてくださいよ!!」

「トドメだ！ ケンシロウ！」

「もう！ なんでベデイさんまで乗っかるんですかそこでー!!」

そうやって、カルナとディルムツドの一言で崩壊したラブロマンスはもう取り戻せない、愛をとりもどせとはなんだったのか。

だが、ここで一同はあることに気づく、そう、沖田さんの腰に回していたベデイの手が離れているという事に。

そうなるかどうか、それは、もちろん…。

「…あ…！」

「あ…」

沖田さんは男爵ディーノの先端からそのまま海へ落下して行く事になる。

それも両手を広げ天翔十字鳳の体制を保ったまま海に綺麗に下の海に落下していく。

「あー!! なんで離すんですかーっ…! へぶしっ!」

それを眺めていたカタツシユ隊員達は海に落下していく沖田さんを見送ると互いに顔を見合わせる。

そんな中、カルナはゆっくりと海から浮いて来た沖田さんを見つめるとこんな一言を呟いた。

「あれ今の落ち方シンっぽかったよな」

「いやあ、名シーンだよなあれ」

「いや、とりあえず沖田を回収じゃろ!! 言うとする場合かっ!」

そう言って会話を繰り返すカルナとデイルムツドの二人に突っ込みを入れるノツ

ブ。

こうして、沖田さんは男爵ディーノから海へとダイビングしたせいで再びカタツシユ村病院に搬送される事になった。

一応、海から引き上げられた沖田さんはスカサハ師匠による人工呼吸などの迅速な処置で問題なく病院へ引き渡す事ができた。

そもそも、霊草を食べているので命の危険はないのだが念を押してというのはスカサハ師匠の談である。

男爵ディーノの改修も無事に終了、さて、ようやくこの船でカタツシユ島を目指せる。

さて、タイタニックは失敗してしまつたが無事にこの男爵ディーノは彼らを乗せて海を渡る事が出来るのか？

この続きは次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

1. 沖田さん男爵ディーノからサラダバー着水。
2. 緊急搬送される沖田さん。
3. 箱舟を鉄船に改修。
4. タイタニツク失敗。

出航

いよいよ出航。

遂にこの日がやってきた。このブリテンの地に長い間滞在し、カタツシユ村を作り、そして様々な出来事があった。

最初は無理な企画だと思われていた王様作り。

モーさんを迎え彼女の成長を暖かく見守りながら、時には困難にぶつかり、メンバーともぶつかり合った。

そんな思い出がこのブリテンの地にはたくさんあった。

時代を越え、様々な人達に支えられたカタツシユ隊員達。

そして、この日新たな門出が始まる。

そう、新たな出合いが彼らにあることだろう。だが、新たな出合いがあればそこには当然ながら別れもある。

「それじゃ、行こっか」

「やっぱり名残惜しいなあ……長かったもんなここに居たの」

清々しい表情を浮かべ、振り返ってみるデイルムツドの一言に一同はにこやかな笑顔を浮かべていた。

そう、別れがある。この地を離れ日本のカタツシユ島を目指すY A R I Oだが、当然、この村にはしばらくは帰ってこれない。

そして、モーさんはこの村の領主でありブリテンを治める事になった後継者だ。当然、この地を離れるという事は出来ない。

そう、モーさんとはここで暫しの別れになるという事。

「……………あの……俺……………」

「うん、わかってる」

そう言つて、カルナは視線をモーさんに真っ直ぐに合わせ、ポンツと頭に手を置いて満面の笑みを浮かべていた。

モーさんの目には涙が浮かんでいた、彼らとの別れはやはりいつかは来るとは思つて

いたし覚悟もしていたつもりだ。

兄貴分として、一番、モーさんを可愛がっていたカルナは優しい眼差しを彼女に向けていた。

かつて、自信がなかった自分の後輩達と同じように男所帯で育った兄貴分として、彼女の成長は何より嬉しかった。

「モーさんは良くやったよ、俺たちの自慢の妹だ!! なっ! だからさ…泣くなよ、なっ?」

「…っ! だっ…だっ…俺…まだ…」

「王様になれるし、お前がみんなから愛される努力をしてきたのはみんな知ってるんだから」

「けど…っ! やっぱり…」

「…離れるのは辛い。」

それは、憧れからの感情か、彼らとの別れがやはり嫌なのか。いや、それよりも彼女自身が抱いている恋慕からなのか…。

彼女を認めてくれたのはまさしく彼らが初めてだった。

真摯に向き合って受け止めて、さらに困難に共に立ち向かったかけがえの無い仲間達。

「心配すんなって、だん吉もあるんだし。ほれ、こいつもやる」

「…これ…」

「モーさんの作業着だ。…手が足りない時はまた助けて貰うよ」

「兄ィ…っ !?」

モーさんはそう言うのとカルナに抱きついた。

勢いよく突っ込んできたカルナはよろけながらも優しく笑みを浮かべてモーさんを受け止めてあげる。

身内と言っても遜色ない程、彼らといた時間はモーさんにとってかけがえのない時間であった。

「まあ、これで一生のお別れって訳じゃないから」

「村にはまた戻ってくることもあるだろうしね」

「まあ、カルナ様の事についてはこの偉大なフアラオであるこのニトクリスにお任せし

てもらえればなんの心配もございませんので♪」
「そーそー……。……。ん？」

そう言つて、船の上からカルナに抱きついてゐるモーさんに対して話をしていたデルムツドとヴラドの二人はピタリと動きを止める。

我々はピコンと跳ねる兎耳に見覚えがあるだろう、そう、以前Y A R I Oのメンバーが彼女のピラミッドを作つてあげた事がある女性。

フアラオ・ニトクリス、その人である。

――いつの間にか居た。

「ニトちゃんいつの間に乗つてたの？」

「てかいつ来たし！ 俺ら全然気づかなかつたわ！」

「ふふーん♪ 変装してましたからね！ こうして」

「それは逆に目立つんじゃないの？」

メジエド様に変装したとドヤ顔を見せるニトクリスに冷静にツツコミを入れるヴラ

ド。

明らかに変装の方が目立っているような気がしてならない、あんなシユールな格好をしていれば嫌でも目につくはずだ。

するとそれを見たモーさんは目を丸くしながらニトクリスを指差し声を上げた。

「あー!! テメエ! 何乗つてんだこら!」

「ふふふ羨ましいですか? 羨ましいでしょうねえ、いえ、羨ましいはずです」

「なんの三段活用なの?」

「まあ、ご心配なく! 私が一人いけば十分ですしね! ささ! カルナ様! 行きましよう!」

「お、やる気満々だねえニトちゃん」

そう言って、船から降りカルナの元に駆け寄るニトクリスはグイグイと満面の笑みでカルナの腕を引っ張る。

しかし、それを目の当たりにしていたモーさんは面白くない。

彼女は青筋を額に浮かべながら、思わずニトクリスを指差し張り合うようにしてこう告げはじめた。

「だあれがお前なんか兄イを渡すかバーカ！ 兄イ！ ダメだ！ 俺もやつぱついでく！」

「いや、ついてくつてカタツシユ村どうすんのよ！」

「父上にお願ひする！ な！ な！ 連れてつてくれよ〜」

そう言つて、モーさんはカルナの腕にしがみつきながら涙目でお願ひする。

妹分のこんな風なお願ひには流石のカルナもたじたじである。可愛い妹分のお願ひ、男所帯で兄貴分として引つ張つて来た彼にとつてはこの初めて男以外の妹分のモーさんの願ひはかなり効果的であつた。

女の子に涙を見せられてはアイドルとしての男気が廢るといふもの、カルナはパン！とモーさんの背中を力強く叩くとにこやかな笑みを浮かべこう話しを始めた。

「…つたくしやあねえな！ 兄ちゃんがなんとかしちやる！ 支度せい！ 支度！」

「もー…ほんとモーさんに甘いんだから、ぐっさんは」

「しやあねえから俺からも頼んでやるよー、刺身振る舞えば王様も許可してくれるつよ」

「そうやってアルトリアちゃんを食事で買収するのはやめてあげて！」

そう言つて、刺身や板前料理を駆使してブリテンの王様を懐柔しようと企てるディルムツドに突つ込むヴラド。

どこの世界に食事で国の王様を買収しようとする英雄がいるというのか、しかし、何故だか説得力を感じるのには不思議である。

だが、その話を聞いていた同じくキッチンに立つ鉄人英雄エミヤは納得した表情を浮かべ静かに頷くところ話をし始める。

「…その手法はたしかに効果的だ。経験者の俺が言うんだから間違いない」

「まさかの経験者だったんっすか!?!」

———衝撃の真実。

まさかの経験者エミヤさん的には間違いなく懐柔できると太鼓判が出た。これにはヴラドも驚きを隠せない。

平行世界の話らしいが、彼も遠い昔にブリテンの王様に同じような手を使ったことがあるとか。

腹ペコな王様にはたしかに美味しい食事が効果的。たくさん食べるので胸もあの大ききさになったのだ、そうに違いない。

「そもそもなんで無人島に渡るんだっけ？ 俺たち」

「そりやお前、ラーメン作るためだろ」

「ラーメン作るために無人島に行つて魚釣つて出汁とる為に開拓するつて事やん」

「誰だこんな企画通したやつ」

そう言つて、今更抗議をし始めるヴラド。

とはいえ、ここまで来たら行くところまで行くしかない。

だいたいそんなノリでこれまでもかなり遠回りをして来たような気がするが、それも過ぎたことである。

というわけで、お別れ予定だったモーさんも無人島に同行することに。

ひとまず、アルトリアちゃんに話を通すため、エミヤさんと共同で料理を作りそれを彼女に見せ、モーさんを連れて行く許可を貰いに行った。

その結果…？

「セーフです」

「よっしや！ さっすがアルトリアちゃん！」

なんとあつさりと許可をもらう事に成功。

これには一同も安心して、モーさんも嬉しそうにメンバーとハイタッチを交わしていた。目の前に出された渾身のエミヤとデイルムツドの料理がやはり効いたのだろうか？

すると、ここでアルトリアはゆっくりと口を開くと何故、あつさりと許可を出したのか、彼らにこんな話をし始める。

「まあ、可愛い子には旅をさせろといひますし。それにそのカタツシユ島は別名アヴァロンという島でしょう？」

「何言ってるんですか、瀬戸内海に浮かぶ島ですよ」

「そう、別名アヴァロンとか呼ばれてます」

「適当な事言ってるんじゃないよっ！ 聞いたこと無いよっ！ そんな設定！」

そう言っつて、適当な事を言い始めるデイルムツドとカルナの二人に声を上げて突っ込

むヴラド。

——俺たちのアヴァロン。

あらがち間違つてはいないが、イギリスから遠く離れたところにある無人島で理想郷というか開拓地である。

まあ、そこは彼ら自身がアヴァロンにすると言い始めればそれまでなのだが、モーさんアヴァロンに修行しに連れてくという大変こじつけもいいところの適当な理由作りが成り立ってしまったわけである。

以後、日本地図では一部の無人島が英語名表記されるようになるのだが、それはまた別の話である。

「まごう事なく日本のアヴァロンだろ」

「あんなに漂流物流れてくる無人島なんだぜ？ アヴァロンだろ」

「何をもつてお二人はそんなに強気なんですかね」

目指すは日本のアヴァロン、カタツシユ島。

遙か遠く日本までの旅路は長いが、皆が力を合わせれば超えられない海はない、今までに無いすごい一体感を感じる。

「ふん！ まあ、無人島じゃ火に困るでしょうし、私がついてつてあげましょう！ 感謝しなさい！」

「へー！ ジャンヌオルタちゃんついて来てくれるんだ！」

「まあ、この娘にも人生経験が必要かと思ひまして」

ジャンヌにはにこやかな笑みを浮かべ、ジャンヌオルタの同行についてベデイにそう語る。

確かに火は貴重。その気になればカルナの目からビームはあるのだがいかんせん火力調整が難しい事もあり、このジャンヌからジャンヌオルタの推薦は彼らには大変助かる部分があった。

うまくいけば、バーベキューの火にも役立つ事間違いない。一家に一台、ジャンヌオルタちゃん。画面の向こうにいる貴方にもいかがだろうか？

とりあえず航海に向かうメンバーはリーダーをはじめ、無人島に渡る五人にスカサハや既存のメンバーから何人が選び、残りはカタツシユ村に待機してもらう事にした。

とはいえ、開拓し、道もそれなりに整備できればカタツシユ村から島までだん吉で移動できるようになるだろう。

なので、村との行き来も将来的には解決することは出来そうである。それは彼ら次第だが、彼らならばきつとやり遂げてしまいうに違いない。

支度を終えて航海の無事を祈るため、一同は男爵ディーノの前で手を合わせ黙祷。安全を祈り、奇妙な艦首を拝む。

さて、彼らは無事にカタツシユ島に辿り着けるのだろうか？

この続きは！ 次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

1. ブリテンの王様を食事を買収するアイドル。
2. カタツシユ村から男爵ディーノ出航。
3. ひつついて来たメジエド様。

4. 瀬戸内海に浮かぶアヴァロン。

島到着

カタツシユ島。

それは、いつか帰るべき場所であり、人類史におけるアヴァロンと呼ばれることになる聖地。

という訳ではなく、彼らの企画の舞台になる単なる無人島である。かつて、人が住んで居たかもしれないこの場所には緑豊かな森林が生い茂り、自然が豊富。

この島にたどり着くまでに数々の困難があつたような気はするが、彼らはいつも通りに解決し、ようやくこの島にたどり着くことができた。

「ただいまーって言ったが良いんかな？」

「もう家無いけどねーダー。建てないと」

緑豊かなのは良いが、まだ何も手をつけていない広がる島を見渡すカルナはため息を吐く。

すると、綺麗な小麦色に日焼けした二の腕を捲り上げているカルナはベディ達と共にひとまず男爵ディーノを海から引き揚げる作業に入る。

それから、引き揚げ作業は全員で行ったのでスムーズに終える事が出来た。

今は拠点らしい拠点が無いので、できるまではこのノアの男爵ディーノを仮宿として利用していく流れである。

そんな最中、エプロン姿のヴラドが顔を引きつらせたまま船内から出てきた。

「もー！ だからいつも言ってるじゃん！ なんで洗濯物一緒にすんのよ！ モーさん達はー！」

「えー、だってわざわざ分けるのめんどくせえじゃん」

「別に良いじゃないですか、航海中、毎回そんな感じだったし」

「良くないの！！ 貴女達のブラジャーやらの紐が服に絡みついたりしてんの！ あとパANTSとかもお願いだからちゃんと分けてよお」

「なんだ細かい奴だな」

「そうですよ！ 偉大なるファラオの服を洗濯できるのですから光栄に思うべきです！」

そう言つて、女性陣に説教するヴラドに反論する女性陣達。

毎回、洗濯の際、彼らと洗濯物が一緒に混ざつて置かれているため、こうしてヴラドやオカンと化したクーフリーンを始め、カタツシユ隊員達が彼女達の服を洗濯していた訳だが、見ての通りである。

普通、お父さんと同じ洗濯機で洗わないで！　みたいな娘が良くいるのはわかるのだが、彼らのケースは逆であつた。

せつかく気を使つているというのに、彼女達は全く気にしないのである。淑女としてこれはどうなのだろうか。

「パンツはせめて分けようよ、俺もう女の子のパンツを手で摘んで洗濯機に入れるの、なかなかキツイんだけど」

「え？　そうなの？　俺とかブーメランみたいにして洗濯機にぶち込んでるよ」

「あれ割と飛ぶよな！　わかる！　俺の感覚的には紫色のやつが割と飛距離出るんだわ」

「ちよつ!?　それ私のパンツではないですか！　なんてことしてるんですか!」

「あー、あれね！　それ力加減間違えて洗濯機越えて、この間壁にベチンって張り付いた覚えある」

「ベディ!! 貴方ねえ!!」

そう言つて、下着の持ち主であるジャンヌオルタは顔を真つ赤にしてベディを追いかけ回し始めた。

「……あまりに雑な扱い。」

確かに紫色の下着の持ち主であるジャンヌオルタとしてもそんな扱い方をされればそうなるのも致し方ない。

それを聞いていたヴラドは説教をしていた彼女達に向き直るところ話しをし始めた。

「あの人達からあんな風に扱われるんだよ? だからちゃんと今度から……」

「ふーん、俺は別に気にしねーけどなー」

「……おい、兄イ! モーさんが今度、自分の下着使つて変態仮面の一発芸していいつてよー!」

「うっそ! マジで!」

「ああああああ!! う、嘘、嘘! ごめんなさい! 今度からちゃんと分けるから!」

そう言つて、顔を真っ赤にしながらヴラドを止めに入るモーさん。下着を分けられない娘達に対する意識改革にはちようど良いだろう。

下着を遊び道具にされたくなければちゃんと分ける事、こうしとけば彼女達も気にして少しは分けてくれるようになるのでは無いだろうか。

だが、あと一つ、ヴラドは言いたい事があつた。

「ニトちゃん、メジエド様はあれかさばるから手洗いにして」
「そんなんっ!？」

ローメジエド様は体積が大きい。

なので、ニトクリスちゃんは次回からは手洗いを強いられる事に。ヴラドの一言にシヨックを受ける彼女は愕然とするしかなかった。

という訳で、洗濯物の件はこれにて解決、皆さまの家でも同じような体験はあるかもしれない。

さて、気を取り直し、リーダーとカルナの二人はまず拠点を作る場所、すなわち、山城を建てる場所の現場見を行う為、無人島を散策してみる。

この島は生前から歩き回っていたおかげか、立地や土地勘が彼らにはあつた。

そうして見つけた場所は、やはり…。

「ここかなあ…、今回は基礎から作る予定だしやっぱり前建てた場所がいいよね」
「せやなあ、さらに基礎部分に手を加えなきやあかんしそれが妥当やない？」

そう、見慣れた川の近く、ここなら水に困る事も無いし何より以前建てた事のある立地。

彼らの建築に関する基礎の知識、それは、数年前、福島県の村で行った事がある建築の作業から学んだ。

建築物の重量を支え、安定させるために設ける建物の最下部の構造。

これを作らなければならないが、今回はそれだけではない、この基礎の部分にさらに手を加えねばならないのである。

というのも、以前、バビロニアでのピラミッド建築において彼らは空中庭園の作り方をバビロンの空中庭園を手掛けた職人、セミラミス師匠から直々にご教授して頂いた。

——目指すは動く空中納屋。

男のロマンが詰まったそんな納屋を自分たちの手で作り上げたい。

以前、自分達が納屋を建てた場所に再び納屋を建てるというのは遊び心が足りないというもの、やはり、作るからにはプラスアルファを加えて前とは違うものを作り上げる方が良いに違いない。

という訳で…。

「この辺りに棒をぶっ刺しておいて…」

「おーい！ 距離はこんくらいでいい？」

「オーケー！ モーさんそこだよ！ そこー！」

納屋の基礎となる場所をゲイボルクを地面にぶっ刺しながら距離を測っていく。

こうする事で、おおよその建物の建築予定場所が把握できる。これを基準に今後、納屋を作る訳だ。

基礎にはローマンコンクリートを使用、ローマで学んだ知識がここでも生きる。

本来、建築ならネロちゃまを呼びたいところではあるが生憎、彼女は現在、カタツシユ村にて大工に目覚めたアグラヴェインとカルナに弟子入りしたアルジュナと共に新し

い建物を建造中の為手が離せない。

そんなわけで、彼らとしても今回の建築に関して、更にみんなで力を合わせてやらなければならないという事である。

ひとまず、初日は建築作業を早めに切り上げ何か使える物がないか一同は砂浜を散策することに。

このカタツシユ島海岸ではいろんなものが打ち上がってくる。もしかすれば納屋作りに役立つものが見つかるかもしれない。

「懐かしいな！ この感じ！」

「せっかくの島だからな！ リゾラバやろうぜ！ リゾラバ！」

だが、精神平均年齢42歳軍団は納屋作りというよりはこの久々に訪れたダツシユ島、もといカタツシユ島を満喫したい様子。

という訳で、砂浜という事もあり、こんな提案をベデイが持ちかけはじめた。

「ひつさびさにバク転の練習しねえ？」

「えー、島まで来てわざわざバク転すんの？」

「いや、だって俺らアイドルだけど踊ってないじゃん。最近、バク転できないんじゃないのって意見が出てまして」

「なるほど、なるほど」

アイドルならバク転ができて当たり前。そう、彼らとて入りたての当初はバク転の練習ばかりさせられてきた。

20年前までは軽くできていたというが…、40を過ぎると足腰は弱り…。

「……ガツチガチ！」

だが、英雄の身体になった今ならもしかしたらできるかもしれない。

「怪我したら困るからね」

「準備運動に5時間くらいかけようぜ！」

とはいえ、やはり、アイドルたるもの身体が大事。とりあえず念入りに準備体操に入る。

そんな中、スカサハ師匠達の姿が見えないがどうしたのだろうか？
するとしばらくして、女性陣がここでようやく姿を現して砂浜にやってきた。

「待たせたな…、ど、どうだ？ 似合うか？」

「いえーい！ 波が俺を呼んでるぜ！ 行くぜ！ 相棒！」

「…わ、私の方を向けば！ 燃やしますよ！」

そう、水着に着替えた彼女達はまさに島の海岸に咲く花、特にスカサハやジャンヌオ
ルタのそれは破壊力満点であった。

そんな彼女達の姿を目の当たりにしたY A R I O 達は顔を見合わせる。

リゾラバといいながら、準備体操に熱中する彼らは女性陣の事をすっかり忘れてい
た。

「…おー、似合うじゃん！ モーさん！ しっかり準備運動しとけよ！ 筋肉痛になっ
たら二日後にくるからな！ 二日後！」

「そうぞぞ！ リーダーなんか一週間後に来たつってたからな！」

「スカサハ師匠、それはちよつと大胆すぎやない？ あたたた…」

「リーダー身体固すぎ」

「……英雄になっても身体が固い。」

平均年齢42歳（精神）達が言う準備運動に関する熱弁は説得力があった。

しかし、一部の女性陣の胸はやはりデカイの一言に尽きる。スタイルの良さは普段から知っていたがまさかこれほどは彼らとしても予想外だった。

「フケイ デ アルゾ」

「ニトちゃん、それ脱ぎなよ」

まあ、さらに一部は別の意味で目を惹くような珍妙なメジエド様の格好をしているが気にはしていない。

さて、準備体操に励む彼ら、かつて、運動神経が抜群であったカルナだが、以前、カタツシユ村に居た際、こんな事が…。

『あれ！ 兄イ！ どうしたの！ それ』

『転びました』

なんと、村の建物を作る際に転倒。

それから、怪我してしまったなんてことがあった。以前のカルナならば、そんなものも簡単に捌けるはずだったのだが。

——反射神経がガク落ち。

咄嗟の受け身も取れなくなってしまうた。だが、この英雄の身体になって、環境の變化にここ最近慣れてきた今では。

「おお〜」

「バク転だ！」

——アイドルスマイル。

バク転もできる棟梁になっていた。久々のバク転の成功に思わずカルナもほっこり笑顔を零している。

これには見ていたモーさんとニトクリスも思わず顔を赤くしボーっと見惚れていた。

さて、ここで、皆さまには現在のカルナのスペックを見てもらおうとしよう。

・なんでもできる

・ものしり

・たくましい腕

・インドの大棟梁

・イケメン

・バク転ができる↑もつさり

今更ながら、こんな感じである。

そして、続いてはベデイが挑戦！ 183cmの身体を生かしたダイナミックなバク

転は最年少38歳（精神年齢）ながら見応えがあった。

そして、ここで忘れず。

———アイドルスマイル。

これには、思わずジャンヌオルタちゃんもキュンとなつてしまい顔を赤くしたままそこから視線を逸らしてしまう。

だが、考えても見てほしい、これは、中身がおっさんアイドル達によるただのバク転

できるかどうかの戯れである。

ちなみに、彼女達が顔を赤くする要素は皆無である。

「バク転くらい私なんて余裕でできるぞ、ほら」

「師匠、それバク転やなくてバク宙や」

そして、そんな彼らのバク転もスカサハ師匠のバク宙によって木っ端微塵に砕かれる事になった。

しかも一回や二回やなくスカサハ師匠は10回連続バク宙するのだから未恐ろしい。しかも、ある部分は激しくプルンと揺れていたので更に恐ろしい。

そんなスカサハ師匠のバク宙を目の当たりにした後、続いてはデイルムツド。

バク転を行う為、身構えるデイルムツド、見せましよう遠山桜、華麗に宙を…。

——桜吹雪の様に舞う。

意気込んでバク転に挑んだデイルムツド、これは成功しそうな予感が漂う、長年、アイドルをやってきた意地を見せてもらいたい。

だが…。

「へい！」

「……不時着してしまった。

これには一同からも笑いが溢れ出てしまう。

流石に久方ぶりのバク転、これに関してデイルムツドは弁解を述べ始めた。

「違う！　こういうやつだから！」

そう言つて思わず照れ隠しで顔を赤くするデイルムツド、これは恥ずかしい。

すると、ここで、本丸と言わんばかりに肩をくるくると回している我らがリーダーが自信満々にこんな事を。

「しやあないなあ、僕がお手本を…」

「駄目！　リーダー！　あんたはやめたが良い」

「腰やるからマジで」

お手本とばかりに意気込んでいたリーダーを全力で止めにかかるメンバー達。最年長46歳（精神年齢）。流石にバク転をやらせるには酷というもの、やらせたらリーダーの身体が崩壊してしまう。

「……ギリギリの男。」

トーンが本気だったので本当にリーダーの事を思っただろう、とはいえ、リーダーも一応、英雄の身体なのでできない事は無いはず。

恐らく、気持ちの問題というやつだろう。

さて、バク転と準備体操も終わったところで身体が温まってきた。そういうわけで、今回、せっかく女性陣もいるので。

「島リンピック、開催」

「島リンピックか……」

そう、オリンピックならぬ、ヴラドの一声でせっかくなので、島リンピックを開催す

る事にした。

さて、彼らの島リンピックとは一体…？

そして、今回は英雄女性陣が大暴れ！ さらに、ある助っ人達がなんと海を越えて島に遊びにやってくる。

ますます目が離せない鉄腕／f a t e。

果たして彼らは島を開拓する事ができるのか！

今日のY A R I O。

1. 雑に扱われる女物の下着。
2. ジャンヌオルタのパンツは飛距離が出る。
3. 基礎作りから納屋を建てるアイドル。
4. ギリギリバク転できるアイドル。
5. アヴァロンとかいう瀬戸内海の島。

エール交換

カタツシユ島、島リンピック開催。

となれば、当然、スポーツの祭典！ ではなく、砂浜での小さな運動会みたいなもの、だがしかし、ギリシヤ出身の英雄や負けず嫌いなスカサハ師匠みたいな方々もいるという事でガチンコ勝負になりつつあった。

そして、チーム分けだが、白組、赤組とチーム編成を行い、紅白戦をすることに。

男爵デイーノに乗らず、カタツシユ村に居残っていたメンバーに関してはだん吉を使いこの島までやってきた。

そういう訳で、バチバチと火花を散らすカタツシユ隊員達。

そんな中、アナウンサーを引き受けたマーリン師匠は我らがリーダーが率いる白組へと中継をしにやってきた。

「さあ、この後、いよいよ筋肉番…じゃなかった、島リンピックの種目によりますYARR IOの直接対決があるわけでありませんが、本番直前、本番前にですね、YARR IOレツ

ドとY A R I O ホワイト、エールの交換を行おうという事になりました」

そう言って話すマーリン師匠はY A R I Oレッド達が会議をしている男爵ディーノの船の前でマイクを握っている。

そして、その付近にはエール交換をしにきた白組のメンバーがずらり。

これは何やら不穏な予感が漂ってくる。

「そして、キャプテンのクーフリーンさんです」

「よろしくお願いします、今日はね、爽やかなスポーツマンシップに乗っかって頑張っていきたいなと思っております」

そう言って爽やかな笑顔で答えるキャプテンのシゲフリーン。

そんな中、白組からはキャラではない爽やかなクーフリーンの姿に思わず笑いが溢れる。

そんな中、マイクを握るマーリン師匠にデイルムツドはにこやかな笑顔を浮かべながら、ある人物をプッシュするかのようになんか話を始めた。

「うちのね、若手のホープ、モーさんがいますんで、彼女が代表でね」
「はい、今日はね、スカサハにね、言います」

ん？ とここで、場の空気がシンッと静まり返る。このモーさんの言葉遣いがもう既に波乱を呼ぶ予感をさせていた。

しかも、よく見れば白組にいるマルタは特効服を着ている。これは間違いない戦闘態勢である。

さらに言えば、それを着た婦長やサングラスを掛けて同じく着ているジャンヌまで。

——レディースの会合場所に。

しかしながら、エール交換をするのは既定路線、気を取り直してマーリンは中継を続ける。

「えー、では気を取り直して、白組の皆さん！ エールの交換を…」

「おい！ お前ら！」

その瞬間、火蓋は切つて落とされた。

勢いよく木刀を担いだモーさんが先頭を切つて赤組に突入。

それを見届けていたリーダー達は置いてきぼりを食らつてしまい、思わずポカンとしている。

「あいつ一人で行つちやつたよ」

思わず笑いを零しながらその光景を眺めるカルナ。

そんな、付いてきてないリーダー達に不安を覚えたモーさんは思わず手招きし、彼らは致し方なしにモーさんの後についていく形で男爵デイナーノの中に入っていく。

そんな中、座っているスカサハを始め、レッドのメンバー達は睨みを利かしながら嫌悪感を抱いていた。

「なんだ？　なんだ？」

「ウチのねー、モーさんがねそちらの大将に一言言いたいみたいなんで」

そう言って、モーさんの肩を優しく掴んでいたカルナは満面の笑みを浮かべそう告げ

る。

すると、モーさんはツカツカとスカサハ師匠の側に寄ると木刀を担いだまま睨みを利かしつつ、こんな一言を…。

「言つてやれ！ 言つてやれ！」

「ん？ 何？」

「ひっ…！」

だが、席から急に立ち上がってきたスカサハ師匠に驚いたのか急に後ずさる。

そう、身体は理解しているのだ、この人に逆らうのは想像以上にやばいと。

だが、モーさんは周りのサポートもあつてか、そこから持ち直すとまっすぐにスカサハ師匠を見つめながらこんな一言を発する。

「サーちゃんじゃねえんだぞ、お前。年齢考えろ年齢」

その瞬間、周りからは思わず笑いが溢れ出てきた。しかしながら、言ってるモーさんからは冷や汗がダラダラと溢れ出ている。

すると、スカサハ師匠はボキリボキリと拳の骨を鳴らし始めた。そう、スカサハ師匠に言つてはいけないタブーを思いつき踏み抜いたのだからそうなるのも致し方ない。

——まさに一触即発。

すると、ここで、デイルムツドがささずモーさんを保護すると宥めるように庇う。

それから、つかみ合いになろうとしている二人の仲介に入ろうとしたベデイに対して、カルナが余計な一言を。

「おめーが入るんじゃねえよ」

「なんだとこの野郎！」

そこからは、なんと一気に乱闘に発展。

揉みくちやにされながら、マーリン師匠は赤組と白組の英雄達の仲裁に入ろうとしてそれに巻き込まれてしまっていた。

マイクを握るマーリン師匠の周りに集まる英雄達は容赦なく取っ組み合う。

「放送できる範囲でお願いします！ 放送できる範囲でお願いします！」

「大人しくしなさい！ 座薬入れますよ!!」

「なんでや！ ワシはリーダーやぞ！ コラァー！」

揉みくちやにされながら、何故か何もしてないのに婦長から取り抑えられ、尻を剥かれるリーダー。

——安定のリーダー。

座薬を婦長から入れられる前に、とりあえず全員一通り乱闘して暴れ回ると仕切り直すかのように落ち着きを取り戻した。

そして、あたりを見渡していた一同はあることに気づいた。そう、この乱闘に加わらず呑気に一人だけ安全圏にいる人物がいる。

そんな中、気づいた第六天魔王ことノツブはその人物について話をしはじめた。

「ヒロインXは何しとるんじゃ！ ヒロインXは……！」

すると、そこにはカタツシユ村から運んできた弁当をひたすらがつがつと食べてる謎のヒロインXことアルトリアさんの姿が…。

どうやら、彼女は乱闘より弁当にご執心らしい。

「何やつとるんじゃ！ お主！」

「何弁当食ってんだよ！」

すると、弁当を食べ終えた謎のヒロインXは口を拭きながら席から立ち上がる。

ヒロインXはお茶を飲み一息いれると乱闘を終えてこちらに注目してくるメンバー達に言い訳するかのようになんか話をし始める。

「違う違う、朝からあ、朝からね？ 農業とかカタツシユ村で色々してきたわけですよ」

「うん」

「私的にはちよつと疲れたんで、ちよつとお弁当食べてたら、なんか…みんながバツツて入って来たんで」

すると、それを聞いていたメンバー達の視線がすぐにモーさんへと集まる。

そして、全員が顔を見合わせるとそこからモーさんをさらに焚きつけるように、ヒロインXの目の前に彼女を連れてこさせた。

「言つてやれ！言つてやれ！」

そうして、乱闘に加わらず、呑気に弁当を食べていたヒロインXに対して物申してやれと煽り出すY A R I O達。

だいたい、乱闘に発展したりするのも彼らが煽っているからに他ならない。もつと穏便にエール交換をする気は無いのだろうか？

すると、カルナから耳打ちされたモーさんは自分の父と瓜二つであるヒロインXに対して馴れ馴れしく肩をバシンと強く叩くとこんな暴言を吐きつけた。

「弁当食つてんじゃねえよ！ お前！」

思わず、一同から笑いが溢れでる。

すると、その瞬間、メガネを掛けていた同じくアルトリア顔のヒロインXの相方ことえつちゃんも横から乱入しヒロインXに暴言を吐いたモーさんに掴みかかる。

その表情は鬼気迫る様子であった。

「ヒロインXを倒し、宇宙をヴィランの闇色に染めるのはこの私だあああああ！」

「ひ、ひい、ごめんしやい！」

「待って！ ちよつと落ち着いて！ えっちゃん！」

そして、再び乱闘勃発、揉みくちやにされるマーリン師匠を尻目に一同は男爵デイナーで暴れ回る。

えっちゃんから迫られ涙目になるモーさん。そして、そのえっちゃんの腰を掴み必死に制止する謎のヒロインX。

遂に勃発、Y A R I O 全面抗争！ 爽やかなエール交換とは一体なんだったのか！

あるところでは、なんと、マルタの姉御のチョークスイーパーがエミヤさんを締め上げはじめてる最中である、まさにカオス。

そんな中、この事態に終止符を打つべく、我らが仲介役のヴラドが立ち上がる。

すぐさま、赤組と白組の間に割って入るヴラド、すると彼はみんなにこんな話を始めた。

「ちよつと待て！」

「はい！ 聞いて！」

すぐさま、火消しに入ろうとするヴラドに便乗するようにボロボロになったマーリン師匠が皆に注目するように告げる。

一同の動きがびたりと止まり、ヴラドに視線が集まる。
すると、ヴラドはコホンと咳払いするとこんな話をし始めた。

「いや、俺たちだつて、そりやこういう喧嘩はしたくないよ！ だけどさ！ モーさんのその口の利き方されたらさ、やっぱ、俺らだつて黙つてないでしょ」

「そうだ、そうだ、とヴラドの意見に賛同し始める赤組の英雄達。

「そう、本来なら爽やかなエール交換が目的のはずなのにこれでは本末転倒だ。これで、丸く事が収まるかもしれない。

だが、カルナがヴラドの目の前に立つと軽く小突きこんな一言を發した。

「おーい、弱いのですつこんでろよ」

「おいおいおいおい」

そして、再びそれが火蓋に始まる大乱闘。

乱闘に参加をしているみんなは思った。だいたい、この人達のせいで乱闘が収まらないのではないかと？

とはいえ、これはあくまでY A R I O式のエール交換なのである。男所帯ならではの伝統行事なのだ。

すると、ここである奇跡が……！！

「ちよつと！ みんな待つて！ リーダーが！ リーダーが！」

そうして、その声でぴたりと収まる乱闘。

そう、遂にこの乱闘の末、犠牲者が出てしまったのである。

すぐさま、メンバーは声が上がった場所に駆け寄る。すると、なにやら壁に背を向けて座り込んでるリーダーの姿が。

「リーダー！ リーダー！」

「しつかりしろ！ リーダー！」

流石に我らがリーダーもここまでか、シゲフリーン、精神年齢46歳は疲れきった表情で座り込んでいた。

するとしばらくしてこんな話をリーダーはゆっくりとし始めた。

「争いは…何も生みやしない、みんな、仲良くやつてくれ…！」

「リーダー、俺たち悪かったよ！」

「仲良くするよ！」

「どうしたんだよ！ リーダー！」

「二人を止めてー、私のためにー！」

そして、何故か歌い出すリーダークーパーフリーン。

それに釣られるように、リーダーの周りに集まってきた一同も何故か歌を歌い始める。

すると、しばらくして、その姿を見ていた婦長がツカツカと歩いてくると手袋をはめ

ながら、リーダーのそばに近寄り、真剣な眼差しでこう一言。

「貴方の命は必ず救います、死なせやしません！ 絶対に！」

「いや待って！ 婦長！ 元気やから！ 茶番やからこれ！」

ガチトーンの婦長に思わず立ち上がるリーダー、そして、周りからは思わず笑い声が溢れでる。

兎にも角にも、こうして茶番のようなエール交換も終えて、健闘を誓う赤組と白組の両者。

さて、波乱万丈な幕開けとなったカタツシユ島、島リンピック。カタツシユ島での彼らの生活は始まったばかりである。

今日のYARIO。

1. だいたいYARIOのせい。
2. 若手のホープ、モーさん。
3. 乱闘勃発（茶番）。

4. 島リンピック開催。

リゾラバ その1

カタツシユ島、島リンピック。

それは、身体とプライドのぶつかり合い！ すなわち魂のぶつかり合いである！というのはスポ根に目覚めたスカサハ師匠の談であつて本来の目的はもちろんそれではない。

「島リンピックと聞いて着替えて来たんだが…」

「アタランテちゃん真っ黒になっちゃったね」

「最近流行りの肉食系女子というやつかな？」

「……なんか黒くなった。」

しかも、心なしかアタランテ胸も成長しているような気がする。もしかすると着痩せするタイプだったのかもしれないが敢えてそこには触れなかった。

大胆な格好になってしまったアタランテちゃん、の驚愕なイメチェンに唾然としてしまふY A R I O達。

そんな中、メンバーでも天然であるベディがあることに気づいたのか首を傾げながらアタランテにこんな質問を。

「あ！　なんかお腹にマークついてるじゃん！　これ水性ペンで書いたの？」

「いやいやそんなわけないでしょ…」

そう言っつて突っ込みを入れるヴラド。

どう考えてもアタランテのお腹辺りにあるマークは水性ペンで書かれたようなものではない事は一目見れば明らかだった。

「これは…そのだな…、そう、タトウーというやつだ」

「…なるほど、油性で書いたんだねえ、これ落ちにくいよきつと」

「マツ〇ーでこんなん書けるか！」

「いや、シールなんだが…」

「嘘オ!？」

そう言つて、ペリツと何事もなくタトウーを引き剥がしてしまふアタランテに度肝を抜かされるカタツシユ隊員達。

まさか、あんなカツコいいタトウーがシールだったとは予想外である。

位置的にアタランテはシールを下腹部に貼っていたので安産祈願に貼っていたと言われればなんとなく納得できるような気もする。

「さて、それでは何をするんだ？ 砂浜でプロレスでもするのか？」

「ふっ…レスリングか…。久々に肩が唸るな」

「ちよつと冷静に自分達の格好を鏡で見てください、ポロリしちゃいますよ」

「テレビ的には美味いんだろうけどね」

「美味くないよ、カッツされるよ!! A Dから怒られるでしょうが!!」

ーキーキャットファイトではない。

下手をすれば深夜枠になつてしまふ。それは流石に不味い。せつかくの有難い映像が撮れそうな提案だが、これは却下されてしまった。

そんな中、つまらなそうにそんなアタランテとベデイのやり取りを見ている黒い聖女

が一人。

「ふんっ！ 別に黒がなんですか！ 私も黒いから大したことないではないですか！
ほんつとベデイは馬鹿なんですね！」

「はあー…確かに邪ンヌちゃんも真つ黒黒助だけどねえ、でもやっぱ、普段から黒いのと
じゃギャツプが違うよ」

「あの…、そのトト○に出てきそうな呼び方はやめてください、私はあんなにカサカサし
てないです」

そうやって、スパンツとベデイの後頭部にハリセンを入れる邪ンヌちゃん。

真つ黒黒助に例えられれば、いくら黒いとはいえど流石に嫌なのは間違いない。

とはいえ、ベデイが言うように普段から真つ黒な人とそうでない人ではギャツプがあ
ると言うのはわかる。

邪ンヌちゃんもこの意見に関してには納得している部分も僅かだがあった。

「このバカ！ 天然ゴリラ！」

「おかしいな、辛辣な言葉の筈なのになんでこう響かないんだろう」

「バカとゴリラは言われ慣れてるからじゃない？」

「……自覚があつた。」

「こつも悪口を連ねて言われても全く動じない鋼のメンタル、というより、邪ンヌちゃん自身も何気に気を遣つて言葉を選んでくれているような錯覚さえ感じる。」

「という訳で話はだいぶ逸れてしまつたが、早速、競技の方へ移るとしよう。」

「今回は砂浜という事もあつて初戦はビーチフラッグ対決三番勝負！」

「先鋒は赤組からはスカサハ師匠、白組からは真つ黒黒助になつたアタランテちゃんが
出場！」

「お前には駆伝でやられたからな、今日は私が勝たせて貰うぞ！ イメチェンした私の
実力を見せてやる！ この格好も地味に恥ずかしいからな！」

「ふん！ 笑止！ 儂に肉体競技で勝つなどできるものか！ 勝つたらしげちゃんを赤
組に貰うぞ！」

「あの……そんなルールは無いですからね？ 師匠」

「今私が考えた！」

そうやって、ドヤ顔を見せるスカサハ師匠に顔を引攀らせるヴラド。

真面目にやるんだからご褒美くらい寄越せと言うのはスカサハ師匠の談である（※ただしやるとは言ってません）。

そういうわけで、早速配置につく二人。

準備が整ったところで、ビーチフラッグに背を向け、後は開始の合図を待つばかりである。

「位置について！ よーい！」

スカサハとアタランテ、互いの豊満な胸が砂浜に押し付けられる中、静寂な空気が漂う。

そして、合図を待つ二人を静かに見つめる観客達。気分が高揚しているのかうつ伏せになっているアタランテの尻尾が左右に揺れていた。

女同士の激突、互いにプライドの掛かったこの勝負の行方はいかに…。

「頭から突っ込んでっつたー！」

「ヘッスラだぜ！ ヘッスラ！ 顔面から飛び込んだよあの人達！」

ズザアッ！ という凄いい音と共に方や水着、方や黒く露出が多い格好で顔面から砂に飛び込む美女二人。

顔面から飛び込んだ二人は睨み合いながら、両者とも一本の旗を握りしめていた。
これは、本来なら引き分けであるのだが？

「先にー！」

「離れた方のー！」

「負けだア!!」

その瞬間、スカサハとアタランテの互いの拳が交差し、紙一重のところまで互いに躲す。なんとびつくりな事にビーチフラッグからボクシングに競技が変更されたではないか、これにはカタツシユ隊員達も目をまんまるにしている。

しかし、拳を互いに繰り出しながらもビーチフラッグは離さない。互いに譲れない熱い激闘が今始まつ…。

「はい、というわけで一回戦、ビーチフラッグは引き分けに終わりました」

「ええっ!?」

「ええっ!?」 じゃないです、趣旨が違ってきてるからお二人さん」

という訳もなく、女性同士の目も当てられ無いような殴り合いに発展する前にヴラドがすかさず止めに入った。

仮にも美女である二人の顔にモザイクを当てなければいけない事態は避けなければならぬ、美人とはいえ、中身が二人とも脳筋なのは本当に困ったものである。

そんな中、止めに入ったヴラドにカルナからこんな一言が…。

「あー、あいつ、本当空気読めないんすよね」

「いやー青春アミー○だったじゃん雰囲気的にさ」

「地元じゃ負け知らずなんだよ? 二人とも」

「ちよつとそれ以上はダメ?! 何言ってるのよあんた達は」

——青春と言えば河原で熱い殴り合い。

そして、自分達ではない後輩達を連想させる言葉を連発する彼ら、そう、野ブタだけでなく彼らは農業全般をプロデュースする力を兼ね備えたアイドルなのだ。

まあ、それはどうでも良いことなのだが、ひとまずヴラドの適切な突っ込みにより二人のセニヨリータは殴り合いをせずに済んだ。

続いて二回戦、ビーチフラッグは…。

「よーし！ 俺の出番だな！ 任せとけい！」

「よっ！ 団長！ モーさん頑張れー！」

「さあ！ 誰でもかかって来い！ 兄イ、見といてくれよ！」

「おうっ！」

そう言つて、満面の笑みを浮かべてモーさんにサムズアップする皆の頼れる兄貴分であるカルナ。

さて、気になるその対戦相手は…！

「モグモグ…、あの地面に刺さってるカリバーンを引っこ抜けば良いのですか？」

「そうそう、…剣じゃなくて旗だけだね」

「ゲエ!? ち、乳上！」

なんと、バーベキューの串を片手に現れたのは槍に武器を変えたおかげでボンキュボンと化したアルトリアちゃん。

これには意気込んでいたモーさんも仰天し後ずさる。まさか、アーサー王がビーチフラッグにビキニ姿で電撃参戦と誰が予想できただろうか。

——カーリバーンを抜く事には定評がある。

この道、何十年のベテラン。抜いたはずの剣が折れたので最近、槍にジョブチェンジした赤組のアーサー王に対峙するは白組からは我らが団長モーさん。

今こそ叛逆の時、カムランの丘ならぬ、瀬戸内海のカムランの砂浜（仮名）でそれは行われようとしていた。

「見てください、皆さん、おっぱいが砂浜に沈んでますよ」

「興奮してんじゃないよ」

「バカじゃないの」

バシンつと邪ンヌとヴラドから後頭部を引つ叩かれて突っ込まれるベディ。確かに

絶景と言わざる得ないが、天然からくるセクハラ発言に対し邪ンヌちゃんはご立腹なご様子。

——砂に沈むメロンが二つ。

そして、対するモーさんへと目を向ける一同、そんな中、カルナは沈まない小ぶりなそれを見て一言。

「あのレベルはまだまだ遠いな」

「スイカと蜜柑くらい？」

「言うならデコポンだな」

「兄イの馬鹿たれー！ うるせー！ ばーかばーか！」

そう言つて涙目になりながら顔を真っ赤にしうつつ伏せのまま声を上げるモーさん。

——デコポン対スイカ。

構図を簡単に説明するなら、こんな感じなのだろう、農作物に例えるのは彼ららしい。一同はゲラゲラと笑い声をあげながら第2回戦のビーチフラッグ対決を見守る。

果たしてカムランの砂浜（※瀬戸内海の島です）での親子対決はどちらが制するのか

！

「よーい！ ドンツー！」

そして、今、ヴラドの掛け声と共に同時にスタート！

振り返って駆け出すアーサー王とモーさんの二人、だが、ここで明らかな明暗が分かる事になった。

それは、そう、胸についた重りの差である。全盛期であったまな板に近いアーサー王の胸ならばまだしも装備を槍に変えたせいでそれが重しに変わってしまったのだ！

「いけー！ モーさん！」

「くっ…！ ここまで負けるわけには…っ！」

そう言つて足に力を加えて駆けるアーサー王。だが、しかし、その足は胸の重さが加わつた事で砂浜に取られうまく前に進まない。

——胸が無念。

胸躍らせる勝負であつたが、身軽なデコポンことモーさんの機動性にスイカを抱えているアルトリアが叶うわけがなかつた。

そう、この勝負の明暗を分けたのは正にそこである。まな板であればまだこの勝負は分からなかつたのだが、ないものをねだつても致し方ない。

「じゃあ！ 勝つたぞー！ どうだみたか！ 見たか！」

「勝つたのにモーさんの後ろ姿に哀愁が漂つて見えるね」

「リーダーが移つたかな？」

——どこことなく哀愁漂う背中。

我々はその光景に見覚えがある。そう、それは我々がリーダー、クーフーリンの背中にいつも漂っているそれだ。

モーさんの気持ちはわからないでもない、勝負に勝って、なにか大事なものを失ってしまっってしまったような感覚なのだろう。

しかしながら、デコポンほどあれば十分である何がとは言えないが。

さて、こうしてビーチフラッグ対決二回戦を制したモーさん率いるチームホワイト。果たしてここから赤組の巻き返しはあるのだろうか？

続きは！ 次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

1. ビーチフラッグ対決が始まる。
2. 何故か黒くなったアタランテ（日焼けではない）
3. スイカ対デコポン
4. モーさん身軽なデコポンになる

リゾラバ その2

島リンピック、ビーチフラッグ三回戦。

さて、一勝をもぎ取ったY A R I O ホワイトだが、Y A R I O レッドは次を勝ちトントンに持っていきたいところ。

最終戦だけあつて、誰が選出されるのか注目が集まる。

「満を持して！ ファアラオである私が大トリですっ！ さあ崇めませい！」

「はい、かいさーん」

「納屋作りにもどっかな、さて、腕がなるぜ！」

「ちよっ!? 私のこの期待度の薄さはなんなんですかっ！ おかしいでしょう」

チームホワイトからはなんとニトクリスちゃんが立候補、しかし、周りは何故だかわからないが諦めモードに入っていた。

というのも？ ニトクリスちゃんはリーダーも真っ青のうっかりポンコツちゃんな

のである。

ポンコツフアラオの異名は伊達ではない、大事な場面、ここぞという時にそれは発揮される事を彼らは経験から学んでいた。

そして、赤組も…。

「沖田さん参上！ いえーい！ 土方さん見てるー？」

「これは解散じゃな」

「誰ですか、この病人を大トリにしようと言った馬鹿者は…」

「沖田さんの扱い雑過ぎイ!?!」

そして、こちら赤組の大トリに任命された沖田さんもまた雑な扱いを受けていた。

自称病人と豪語する割には、白くフリルが付いた可愛い露出度が高い水着を身につけている沖田さん。

泳ぐ気満々なのは側から見てもわかるのだが、病弱な人間が海で泳ぐというのはいか
かなものだろうか。

汚名を挽回と意気込んでいる沖田さんは果たして白組のニトクリスを退ける事は出来るのだろうか？

「あのー…一応、救護できるようにスタンバツてて貰えますか？ 婦長？」

「とりあえずAEDは持つてきてますので、心肺停止状態からでも蘇生が可能です」
「ビーチフラッグで心肺停止するケースなんて初めて聞きましたよ僕」

そう言つて、水着のままサムズアップしてくるナイチンゲール婦長に顔を痙攣らせるヴラド。

彼女も水着であるあたり、なんだかんだでこのこのカタツシユ島を楽しんでる様子だ。ビキニ姿のナース長とは一体…。

さて、そういうことで、最終決戦はこの問題だらけの不安要素が盛りだくさんの二人だが、果たして勝つのは？

「位置についてー、よーい！…ドンッ」

「どりゃあああ！」

「負けませぬっ！……っへぶっ!？」

そして、火蓋が切つて落とされたと同時に砂浜に見事なヘッドスライディングを披露

するニトクリス。

一同はその光景に思わず頭を抱える。

予想はしていたが、まさか、ここまで見事にニトクリスがスタートダッシュと共にすつ転ぶとは予想だにしていなかった。

それを尻目に、見事にスタートを決めた沖田さんはどんと加速していく。

「はっはっはっ！ この勝負！ 頂きましたね！ いやー！ 相手がポンコツな方で助か…」

だが、加速して、フラッグに向かっていた沖田さんにここで異変がっ！

スタートダッシュを決め、後は旗を奪取すれば良い話なのだが、どうやら、そうは問屋がおろさないらしい。

砂浜を力強く蹴り出し駆けていた沖田さん、歩調を崩すと、次の瞬間、盛大に…。

「…ゴハアツ！」

沖田さんは吐血した。

そして、力なく地面に伏す。なんとまあ、予想通りというか、この泥仕合の模様をなんともしえない表情で見守っている一同。

——意外といい勝負。

血を吹き出した沖田さんはまるで、ゴキブリの様に地を這いながら旗に向かい前進し、そして、立ち上がったニトクリスは砂を振り払うと慌てて旗に向かい駆け始める。

「もらったあー！ あっ……！」

「ゴフウツ……！」

「お、沖田ちゃん！」

が、足元が疎かになっていたのか、地に伏していた沖田さんの横腹になんと勢いよく足を引つ掛けて、二、三回転し、ニトクリスはそのまま海に頭から突っ込んだ。

横腹にいい蹴りが入った沖田さんは吐血したまま、ピクピクと痙攣しており、海に顔から突っ込んだニトクリスもまた気を失っている模様。

ここで、レフェリーのヴラドが仲介に入ると、10カウントを待たずに左右に大きく

手を振りKO宣言。

どこからか、カーンカーンカーンッ！ とゴングの音が幻聴で聞こえてくるようであつた。

この結果に思わず、観戦していたベティ達も。

「あれは、いいの入ってるよ」

「横っ腹だったもんな、横っ腹」

「ガンッ！ 言うてたで」

そう言つて、互いにKOしてしまつた二人のおつちよこちよいを心配そうな眼差しで見つめる彼ら。

まさか、本当にビーチフラッグでAEDが必要になつてしまうとは、とはいえ、沖田ちゃんに関しては霊草のアルギン酸をたくさん食事で摂っているため死ぬ事はないのだが。

だが、流石はナース長ナイチンゲール。準備に関しては全く余念がない、まさしくプロである。

さて、というわけで、三回戦は引き分け。

つまりこの勝負は結局、決着がつかないまま終わりを迎えることになった。

とはいえ、ある意味、平和的に終わったように何よりである。さて、それでは気を取り直して、浜辺の散策をしはじめるY A R I O達。

「いやーなんか落ちてねーかな」

「あ、これ……」

そう言つて、なにかを見つけて足を止めるデイルムツド。

そこには、なんと、発泡スチロールの断熱マットらしき大きなものが、これは、使えそうだ。

「……で、閃いた！」

デイルムツドはおもむろに服を脱ぎはじめ、見つけた発泡スチロールの断熱マットを高く上に掲げると、浜辺を駆け出し海へ一直線。

「サマードリーム♪」

そして、海に突っ込んだデイルムツドはぶかぶかと海に浮かび、スイスイと泳ぎはじめる。

それを砂浜から見ていたモーさんは羨ましそうにこんな声を上げる。

「あつ！ ずつりー！ 楽しそう！ 俺も俺もー！」

そうして、海に浮かぶデイルムツドの元へと駆け出す、モーさん。

だが、発泡スチロールでぶかぶか浮いているとは言え、体重がかかれば、これも危うい。体重に負荷が掛かれば沈没してしまふことは明白である。

デイルムツドの元へと泳いで行ったモーさんはすかさず、小ぶりなお尻をマットの上に乗せようとするが？

「あ！ ばかつ！ 沈む！ 沈む！」

「良いじゃん！ 乗せろよー！ 沈まねーよー！」

と、なんとか沈まずに海に浮かぶ発泡スチロールのマット。

前にモーさん、後ろにデイルムツドとなんとかバランスを保っているようである。仲良くぶかぶかと海で浮かびながら夏にふさわしい曲を口ずさんでいた

すると、それを見ていたカルナも落ちていた漁業に使う丸状の発泡スチロールを発見し、それを抱え海へ。

「あー！ 夏休みー♪」

だが…。海に入った途端。

丸状の発泡スチロールがクルリンと一回転、海にドボンと虚しく顔面から突っ込む結果に、これには、マットの方に乗っていた二人もゲラゲラと笑い転げる。

良い年した英雄が、海で何をはしゃいでいるのか、一方、こちらはベデイがズルズルと何かを引きずって持ってきている。

これは一体…。

「ロープ見つけた！ ロープ！」

「ロープ!？」

「ロープ見つけてどうすんの!？」

そうやってズルズルとロープを引きずってくるベデイに顔を引きつらせる一同。すると、ベデイは自信満々な表情を浮かべて、彼らにこんな事を告げ始めた。

「海で遊ぶんだったら引つ張ったりできる」

「ロープ引つ張って遊ぶの!？」

「ロープを引つ張る遊び。」

ロープをひたすら犬のように引つ張って持つてくるベデイの姿に思わず、ヴラドは笑いをこぼしたままこんな一言を。

「ロープ引つ張って遊ぶってこのご時世楽しいのかな?」

「もうすでに楽しい」

というわけで、何故かロープが遊び道具に。

とりあえず、使えそうなので置いておくことにした。使えるものはなんでも使う、それが、彼らのポリシーである。海から流れ着いたものならば尚更だ。

そして、歩くこと数分、彼らはあるものを発見した。それは…。

「あ！ まな板だ！」

「お、まな板！」

「あ！ エリザちゃん！」

そう、なんと奇跡的に砂浜に落ちていたまな板だった。

これを見た一同はすかさず、それを拾い上げると嬉しそうに皆、集まってくる。これは大発見だ。

そして、ベディは首を傾げたままこんな一言を発する。

「でもさあ、エリザちゃんじゃ遊べないでしょ」

「いやいやいやいや」

「お前はね、お前は、全然まな板のすごさをわかっていない」

「ちよつと待ちなさい？ さつきから私のことさりげなくまな板って言ってるわよね？」

「言ってるわよね？ 貴方達」

そう言って、青筋を立てたエリザちゃん。彼らの話を聞いてポキポキと指の骨を鳴らしていた。

しかし、デイルムツドはまな板を構えたまま、素早くビュツビュツ！ と動かしてはじめる。

これには周りからオオ と感心したような声が上がった。だが、直後に全員にエリザから拳骨が飛んできたのはいうまでもない。

こうして、ビーチフラッグを含めた、賑やかなリゾラバは終わりを迎えた。

次からはついに本格的な開拓に取り組みはじめることに。

久々に訪れたカタツシユ島、果たして彼らはどんな風に開拓していくのだろうか？

この続きは！

次回！ 鉄腕／f a t eで！

今日のY A R I O。

1. ビーチフラッグ引き分け。
2. A E D があるビーチフラッグ
3. まな板認定を受けるエリザちゃん

新章 人類未踏領域開拓地カタツシユ島。

世界を救う戦い（工事現場）

——遠い未来。

荒れた荒野の大地に唯一残る豊かな場所

かつて栄えた人類の終着点、そこでは人が人として生きることが出来る唯一の国。かつては島だったその場所には最後の人類が生きていた。

栄える為の知識を奪われた人間達はその王より生かされている。

争いもなく、そして、それ以上の繁栄は無い。

第一次産業という名を冠するもの全ての知識が失われた大地が広がるこの世界における最後の楽園。

「酷い有様だね…これは」

「ふん、奴が反転すればそうなるだろうよ、想定していなかったわけでもあるまい」

「栄えもせず、滅びもしない、進歩もなく退化も無い…。虚無だね」

そう告げる魔法使いは悲しげな表情を浮かべ、そびえ立つ居城を見つめていた。

まるで、それはかつての仲間達と作った物を彼自身が自らの手で再現したかのようにそびえ立っていた。

耐え難い孤独との戦い、そして、彼が抱えているだろう深い絶望と悲しみが分かる。

——挑戦を奪われた人類史。

この世界はifの世界、だがしかし、その世界は実在していた。

彼の心が生み出した虚無、仲間達と再会出来ず、あまつさえ、人類史を正しくたどらされた結果、かつての仲間達の死を目の当たりにした彼がこの結論に達してしまった。

文化、叡智、そして伝統。

全てを知って、そして、その全てをこの世界に生きる全人類から奪い去ってしまった。

「創世王と呼ばれておるみたいだがな…、あんな小さき場所に限られた人間、限られた知識に限られた生活、これが人類最後の場所とは笑えるわ」

「…英雄王、そろそろこの場を離れた方が良いと思う、彼の宝具の影響を受ける可能性が

ある」

「ふざけた宝具だ…全く」

そう告げる英雄王ギルガメッシュはだん吉に足を進め忌々しいと言わんばかりにその居城を睨みつけた。

暗闇が広がるこの世界に光が灯ることはいつになるのか、はたまた、永久にこのままで人類は滅びぬまま虚無を生かされるのか。

それは、まるで、この状況を生み出したであろう元凶である彼の心情を覗き込んでいるかのような錯覚さえ感じる。

「…奴らの協力が必要になるかもしれないな」

「こればかりは…流石にね…」

神々として干渉できない、否、人々の信仰すらこの世界には存在しはしない。

この世界に生きる人類は何かを信じるといふことさえ思いつかないからだ。

別に信じなくとも彼さえいれば生活は豊かになるといふ考えなのか、はたまたその知識さえ無いのか。

この世界における人類は彼から与えられる最低限の知識だけで生かされているのだから。

「人類の可能性を極限まで無くした世界、人類は滅びもせぬが繁栄もせぬ、神すら存在せぬ、そして……。この世界を作り出した原因が人類自らの責任だと言うのだから笑えるな」

「……………」

「しかしあやつらならこの世界を変えられるやもしれん、例え、雪降る山であつても、火山であろうと、どんな場所に行こうともあやつらは決して挑戦を止めぬ」

生きることをやめない、挑戦することから逃げない。

敢えて、困難な道を選び、そして、自らの手で切り開いていく彼らの生き方こそ、人類が目指すべき場所。

英雄王はこの世界を見て、彼らの力が必要だということを改めて確信した。

——人類の命運はある五人のアイドルに託される。

集結せし、歴戦の職人達。

それは、忘れ去られた小さな島で、海を、大地を、空を拓く戦い。？
神々から祝福されし五人でひとつの英霊達が一から世界を創り上げる。

ザ・特異点カタツシユ！ 人類未踏領域開拓カタツシユ島。

異様な特異点発現から数日前。

人理継続保障機関フィニス・カルデアでは突如として現れたこの特異点について緊急事態対策を練る会議が行われる事になった。

人の文化、伝統、そして全ての知識が失われた未来の発現、これは未だかつて無いほどの大事件である。

「…それで所長…、発現した特異点って」

「過去最大級の規模ね、人類史がこのままだとその歴史に修正される可能性が高いわ」

「では！ すぐさま行かなくては…！」

「いいえ、ダメよマシユ、それは自殺行為だわ…その世界には原因があると思われる場所を中心に世界規模で謎の霧が展開されてるのよ？」

「せ…世界規模!？」

深刻な表情を浮かべ、オルガマリー所長は現時点でのレイシフトの危険性についてマシユに語った。

世界規模、地球を覆い尽くすそれは知識を奪う。

第一次産業についての知識はもちろん、自分の存在すらも頭から抹消しかねようなそんな力。

これらの力を行使する者があの場所にいることは明白なのだが、レイシフトで藤丸とマシユをあの場所に行かせるのは非常に困難を極めた。

人から挑戦というものの自体を全て消し去ってしまった魔鏡、虚無の世界。

「こうなってしまった以上、彼らを呼ぶほか無いわ」

「…ま、まさか！ 彼らを呼ぶ気ですか！」

「それしかないわ、呼ぶなら今よ！ あの五人の人理修復のプロを！」

バン！ つと音を立てて机から立ち上がるオルガマリー。

「……彼らしかない。」

アイドルという身でありながら常に挑戦をしてきた五人の男達。

彼らの歩んで来た道は既に軌跡となり、そして、奇跡を引き起こしてきた。

ちなみに人理修復のプロと呼ばれている彼らだが、本業はアイドルであることを皆さ
まは忘れないでいてあげてほしい。

そんな訳で。

「その世界がそんな大変なことに……」

「リーダーなんとかしてあげられないかな？」

「てか、人理ってどのレベルから作るの？ やっぱリネアンデルタル人から作るのか
……」

「いや、ビツクバンからじゃね？」

「スケールデカすぎだから、修理するだけでいいの」

「……人理修復のプロを呼んだ。」

人理修復をし始めて数年、着実に成長してきた彼ら、壊れた人理なら貫き修理してき
た。

それは、中世のヨーロッパだったり江戸時代だったり多岐に渡る。

さて、今回はことがことだけに彼らはサーヴァントとして現界している。藤丸ちゃん

の魔力供給を受けた彼らの身体は英霊と化している訳なのだが。

「ついに俺らも幽体離脱できるアイドルになっちゃったか」

「来るとここまで来ちゃった感あるよね、わかる」

そう言って、腕を組みながらしみじみと語るバーサーカーとなったベデイにキャストアのクラスとして現界しているヴラドが納得したように頷いていた。

キャストアはキャストアでもヴラドの場合はキャストア違いのような気がするが気のせいだろう。

気を取り直して、Y A R I Oの面々は招集をかけられた今回の件について語りはじめる。

「てなわけで、我々は今回、特異点というものを修復するわけなんですけども」

「いやー、特異点修復って久々だよね」

「何年振りくらい？」

「結構経った気がするね？ てか、俺たちバカンス真っ最中だったしね、ついさっきまで」

「むしろ、僕らが特異点を作った気がするんやけども」

リーダーの一言で辺りに笑いが起こる。

確かにここ最近の行動を振り返ってみると、逆に特異点になっていたような気もしないわけではない。

すると、そこでデイルムツドがすかさずフオローに入る。

「ほら、俺たちの場合はさ、突き抜けちゃってるから」

「ほう」

「出る杭は打たれるっていうけど、もうぶち抜けたらむしろいつかっとなるじゃん、多分そんな感じだと思うよ」

「……確かにわかる。」

出すぎた杭は打たれるが、出てしまえばなんてことはない。

釘を打ちまくっていた職人が言う言葉には説得力があった。

領くカタツシユメンバー達、そんな中、カルデア所長のオルガマリーはコホンと咳払いをすると改めて今回の件について話を始める。

「今回の特異点は特殊なの、甘く見ない方が良いわ」

「そうですか、今回のロケ地って寒いの？」

「いやー、待って待って、南国ってオチなんじゃない？ アマゾンとか」

オルガマリー所長の言葉に楽しそうに会話を繰り広げるカタツシユメンバー達。

これにはオルガマリー所長も顔をひきつらせる。なんで緊急事態って言っているのに楽しそうなのだろうかと突っ込みたくて仕方ないといった様子だ。

そこで、そんなオルガマリー所長にベデイが一言。

「ちなみにロケ弁って、出ます？」

「出ません」

「ほらなー、俺ぜってー出ねえと思ったもん」

「作るしかないかい、ちよつと調味料だけ持って来させて」

「あのねえ、そういう問題じゃないんだけどねえ！」

そう言って、味噌や調味料を用意し始めるディールムツドに顔をひきつらせるオルガマ

リー所長。

しかも、既に特異点先をロケ地とか言っている。おまけに訂正するつもりもないようだ。

そんな中、カタツシユ隊員について来たモーさんから随伴する予定の新人の藤丸隊員とマシユ隊員に一言。

「お前ら！　なんだその格好！　怪我するぞ！　ちゃんと作業服着ろよな！」

「え！？　で、でもこれ、霊装……」

モーさんからの指摘に戸惑うマシユ。

着替えるも何も、普段からこれを着てレイシフトを行なっている藤丸隊員とマシユ隊員にとってはいつもの格好。

だが、モーさんのその指摘にリーダーは拍手をしてこう告げる。

「お、モーさん、ええこと言った！」

「これだからトーシローは！　良いか！　現場つてのはな！　常に危険がつきものなんだぞ！　ヘルメットの確認もしっかりしとかなないと怪我しちゃうんだからな！」

——建築現場で培ったプロ意識。

建築現場を経験して数年、もはや、現場監督としての才覚を見せつつあるブリテンの時期王様の一言は重い。

藤丸隊員とマシユ隊員はこうして作業服に改めて着替え直すことに。

「えーと、着替えて来ました」

「よし！ それじゃ安全確認するぞ！」

「えー…」

「返事！」

「は、はい！」

——安全確認は大事。

こうして、作業服に着替え、ヘルメットを持ち、レイシフトの前で集合した藤丸隊員とマシユ隊員にモーさんが指導を行う。

「復唱！ 作業服良し！」

「作業服良し！」

「ヘルメット良し！」

「ヘルメット良し！」

「安全靴良し！」

「安全靴良し！」

「建築道具良し！」

「建築道具良し！」

「安全確認良し！ 今日も一日ご安全に！」

「ご安全に！」

「ちよつと待って今から貴女達何しに行くの？」

レイシフト前に建築現場に向かう勢いのモーさんとカタツシユ隊員達に突っ込みを入れてくるオルガマリー所長。

すると、ここで、ディルムツドが何を言っているんだお前はとばかりにオルガマリー所長にこう告げる。

「ロケ前に安全確認は大事でしょうがぁー!!」

「特異点修復じゃなくて家建てに行く勢いでしようがぁー!!」

そう言つて、咆えるデイルムツドに盛大に突つ込みを入れてくるオルガマリー所長。それを見ていたカルナとリーダーは顔を見合わせて肩を竦める。

何もおかしいところはない、至つて普通のことである。

「所長さん、何が不満なん？」

「流石にクレーンとかシャベルとかは持つて行けないよー」

「違う、怒つてるのはそこじゃないのよ」

的外れな二人の一言にがっくりと項垂れるオルガマリー所長、そもそも、クレーンとかシャベルとか以前の問題である。

現場は文字通り戦場だ。激しい戦いになることが予想される。

オルガマリーには不安が募るばかりだが、リーダーは満面の笑みを浮かべて彼女の肩をポンと叩くと一言。

「よし！ 今から戦場を洗浄してきますわ！ 容赦せんじよう！ なんちゃつて」

「……あ、……うん、もう行ってらっしゃい……」

寒いリーダーの親父ギャグをかまされ、もう色々と悟ったオルガマリーの目にはハイライトは無かった。

こうして、我らがカタツシユ隊員達はカルデアの藤丸隊員とマシユ隊員を加えて、いざ特異点に向かわんとしている。

果たして、彼らを待ち受ける困難やいかに！

この続きは……！ 次回の鉄腕／f a t eで！

特異点修復のプロになる——NEW!!

モーさん現場監督に昇格——NEW!!

新章スタート——NEW!!

いぎ、特異点へ

レイシフトを行なった後。

さて、ここは例の特異点の地である。

辺りには霧が立ち込めており、非常に危険な場所である。霧をしばらく吸い込んで、すぐに自分の記憶から第一次産業についての知識を奪われてしまうのだ。

そんな地に降り立ったY A R I O 隊員達はまずは拠点を確保することにした。

身につけているのは対スズメバチ用に作ったフルセット、それを改造し、ガスマスク搭載型にした新機能付きの防具である。

「まずは、空気洗浄が必要やね」

「空気洗浄機作らないといけないのかー」

「あ、じゃあさ！ 木炭使ったらどうかな？」

——空気洗淨機を作る。

そう、この地に来てまずやることはなんと火の確保でも水の確保でもなく空気の確保なのである。

その手段として、ヴラドが提案したのは木炭を使った天然の空気洗淨機制作だ。

備長炭、これは空気洗淨のためによく使われている炭だ。

その効果は折り紙つき、濁った井戸さえも洗淨してしまうほどの効果を持っている。

炭は木材を炭化させることによって得られる、燃やしても煙や炎が出ず、火持ちがよい上に火力の調節ができる大変優れた燃料だ。

？ 炭は燃やして暖を得たり、肉や魚を焼いて調理に使ったりする他、その多孔質で灰分はミネラルを多く含む性質から、「湿気を取る効果」「ご飯を美味しくする効果」「脱臭、消臭効果」「水の浄化作用」「土壌改良」など、燃料以外にも幅広い用途があり、軽くて保存や持ち運びが便利で、腐らないため、30万年も前より使われていたといわれる。

この炭を使えばきつと周りの空気も綺麗になり、人が住めるようになるはず。

彼らはかつて、炭による、ろ過システムの製造方法を過去の経験から熟知し、すぐに製造に着手するという他人には真似のしづらい芸当を見せた。

ならば、今回も炭の力を使えば、この辺りを人が住める土地に変えることだってでき

るはずだ。

炭作りの達人、ヴラドの腕の見せ所。

早速、炭作りに取り掛かる一同、まずは、炭の材料になる木材の確保だが……。

「最近さー」

「うん」

「やたら異世界に行くの流行ってんじゃん？　また近いうちに俺達も呼ばれると思うんだよね」

「いや、ここも異世界なんだけど」

—— 既に異世界。

唐突なディルムツドの眩きに冷静なカルナの突っ込み、そう、一応、異世界ではあるのだ。この世界のお陰で人類は危機に瀕しているらしい。

ただし、異世界というにはあまりに殺伐としていて、異世界ではないというのが、ディルムツドの言い分であった。異世界というのは曰く、もっと楽しそうな場所だという。

「いや、ちげーじゃん、もっとファンタジーしてるでしょ？　こう、ドラクエ！　みたい

な」

「せやなー、それはわかる」

「てかき、この間、行ってきたばつかじゃんか、俺達の単行本とか出そうだよね、小説とか漫画で」

「あ、じゃあ、声優始めなきゃなー！」

——CVが本人。

まさかの最近増え始めている異世界転生ものに興味津々なYARIOメンバー達。

それもそのはず、ダイレクトにドラクエ世代の彼らからしてみれば異世界はなんとも冒険しいがある。

皆さんはもう読まれている方はいらっしやるかもしれないが、そこで、彼らのそんな話を聞いていたある有名な英霊の作家達は彼らの要望を叶えるべくいろんな作品を密かに世に送り出していた。

その影響からか、ここ最近、彼らは度々異世界に召喚されているという。それが、作品となり世に出回り、若者を中心に流行っているのだ。

ここで、視聴者の方の読まれている現在流行中の彼らの作品達をこの機会に紹介しよう。

ガチでゼロから始めた異世界生活。

収録後に異世界に飛ばされた彼らは死に戻りの能力を得たが、特にそれも使うこと無く、国を作り上げ、さらには白鯨を使った鯨料理に挑戦！

異世界でスマートフォンを作った。

その言葉の通りである。異世界行ったらマネージャーと連絡できないという理由で異世界で何も無いところから彼らがスマートフォンを部品から作る話。

盾すら要らない勇者達の成り上がり

要塞作ったが早くね？ という事で盾の代わりに彼らが異世界に住む世界の皆の為にとんでもない要塞を作り始める話。

ありふれた職業を極めたので世界開拓。

主にありふれた職業は全部コンプリーと熟知していたので、とりあえず新しい土地の開拓に挑戦。

転生したらアイドルだった件。

元々アイドルであった彼らだが、ようやく異世界にてアイドル活動に乗り出す話。だが、次第にアイドルっぽく無くなっていく。

ダンジョンを1から作るのは間違っているのだろうか？

あらゆる建築をこなしてきた彼らが挑戦するのは、なんとダンジョン作り！ そこには！ 珍しいモンスターも住み始めた！ ついでにオラリオとかいう街も作った模様。

職人転生、異世界行く前から既に本気です。

※彼らはアイドル兼、職業が職人なのでいつも本気です。

そんな感じの小説やらアニメやらが、最近、日本とアメリカを中心に流行っているらしい。

アメリカで流行った理由はどの作品も開拓精神しかないだからだそうだ。

どうやら、古き良きアメリカはこんな感じだったらしく、彼らの精神に共感してユーザーが増えたのだそうだ。

話は逸れてしまったが、それだけの作品が世に出回り、さらには、聖書という本にも

記載されている彼らは、もう既に世界的アイドルグループなのである。

ここまでの道のりは険しかったが、続けてきてよかったと改めてそう感じた。

「よし、木はこんなもんでええやろ、後は炭作りに取り掛かるうか」

「あれ？ モーさん達は？」

「ヴラドと炭窯作ってるよ」

「何事も勉強やね」

モーさん達はヴラド主導で、炭窯の製作に取り掛かっている。

炭は、穴を掘って炭材を入れる伏せ焼きやドラム缶などでもつくることができる。

だが、今回は土を使って炭窯を製作することに。

土でつくった炭窯の場合、土が炭焼きの前半に炭木の水分を吸って、後半でその水分を掃き出して、炭窯全体を循環し、均一に炭化させるため、よりよい炭ができるからである。

「炭でだいぶ住みやすくなるな」

「そうだね」

「え？　今の突っ込んでくれへんの？」

——悲しきスルー。

我らがリーダーの背中中はやはり哀愁が漂っていた。年季が重なってきたのだろうか。さて、ある程度の木材を手に入れた彼らはひとまずそれを拠点へと運ぶ事に。

肉体労働なら慣れている。木を軽々と運んでいく様はまるでベテランの木こりのようだ。

「とりあえず炭ができればね、みんな呼べるから」

「人手欲しいよねえ、わかる」

ベディ、ヴラドとモーさん、藤丸ちゃん達の待つ拠点へと足を早める三人。

フルセットの重さもあるのでなかなかのキツさだが、まだまだと足を動かし、汗を流して拠点へ向かう。

今まで、皆がどれだけ協力してくれていたことか、改めて皆からの助力の有り難さを痛感させられた。

一方、その頃、炭窯作りに勤しむヴラド達というと。

「角型スコップはこうして使うのよ」

「すぐく……勉強になります……」

「メモメモ」

ヴラドから角型スコップの使い方を教わっているところである。

今回も炭窯づくりで主に使用するのは、「角型」。

角型スコップは、硬い土を掘ることは難しいが、より多くの土を効率よく掘ったり盛ったりする際に重宝され、特に、土羽に土を入れる際に活躍した。

藤丸ちゃんとマシユちゃんは今回、初挑戦の為、こうやって丁寧に教えてあげているところである。

一方で他のメンバーであるモーさんとベディの二人は別作業で「背当て」を制作している真つ最中だ。

背当てとは切り出した材木を背負って運搬する際に使う布製の道具の事である。

地面に広げた背当ての上に炭木を置き、その上に仰向けで寝転がる体勢で装着する。

なるべく効率よく作業を進めるためにはこの背当てがあるだけでだいぶ変わってくる。

なお、以前彼らがお世話になった炭焼きの達人曰く「山のよろい」というそうだ。

かつての炭焼き人はこの背当てに一本20キログラムを超える重さの切り出した炭木を10本も背負って山から下りてきたという。

「これで兄ィ達も作業が楽になるだろうから頑張んねーと」

「お、良いねー」

上機嫌でニコニコ顔のモーさんに笑みを浮かべながらサムズアップするベディ。

やはり、こういう作業にはチームの連携が不可欠だ。

共同作業だからこそ、互いに思いやる気持ちが目標に達するための最短の近道になる。

まだまだ、やらなくてはいけない事はたくさんあるし、1日でも早くこの拠点の霧を晴らしてしまわなければ。

この新たな地での挑戦には今まで知り合った英霊や仲間達の協力が必要不可欠である。

「ここに新しい村作りたいよね」

「おっ？ それいいな！ 丁度、アヒル村長も持って来てるし！」
「さすがモーさん！ わかつてるう！」

——最早、生活習慣。

前までは異常だと思っていた事でも習慣となれば違和感なく馴染んでしまう、そういうものである。

幸いにも拠点の周りには木々が生い茂っているようであるし、建物を作る際の木材不足には困らなさそうだ。

どうせだから、ここにはお洒落なログハウスが連なる村を作りたい。
人が住めなかった土地を住める土地に変えていくのはやりがいがある。

「おーい木を持ってきたぞー」

「おっ！ おかえりー！」

そして、そんな雑談を繰り返していた二人だったが、ようやく木が到着。
早速、木の加工に取り掛かる。

まずは木炭にするためにサイズを必要最低限にしなくてはいけないだろう。

そこで、カルナは使い慣れたナタを手にまずは皆にお手本を見せる。

ナタは、炭づくりにおいては枝を切ったり、細かい敷き木を切ったりするのに活躍する。

また、炭ができてからも焚き付けに使う枝木を得るためにも使うので使い方はしっかりと学んでおくべきだろう。

「こうしてね、こうやるのよ」

「ほうほう、こうね」

「そうそれ！ 筋が良いね！ 藤丸ちゃん！」

指導した甲斐があり、ナタを使いこなしてくる藤丸ちゃんに称賛を送るカルナ。

これならば、作業もより順調に進むかもしれない。

以前も彼らは炭窯を作り上げたのだが、なんと、あろうことか、秋口に崩壊。天井部分がぼつかりと崩れ落ち、見るも無残な姿になってしまったことがある。

夏に降った多量の雨が土にしみこみ、徐々に土が軟らかくなって崩れてしまった。

この失敗を教訓にして、完成させた炭窯、あの時の経験を今回、存分に生かしきり、再び、立派な炭窯を作り上げたい。

そして、人が住める土地をどんどんと広げていき、やがて、この特異点で起きている異変を解決に導く。

とはいえ、まだ1日目、これからどんどん炭窯をクオリティの高いものにしていかなければならない。

皆が一致団結し、この苦境から早く脱せねば。

彼らの挑戦はまだ始まったばかり。

果たして、Y A R I O 達はこの世界の異変を解決する事ができるのだろうか？

その続きは……。

次回！ 鉄腕カタツシユで！

今日のY A R I O。

1. 世界を救う前に炭窯を作る。
2. 炭ならなんでも浄化できる。
3. 異世界に行くアイドル。

拠点完成

炭から空気洗浄機を作った一同。

過程は大変ながら、一丸となり汗水垂らした結果、無事に拠点を作り上げる事ができた。

人が住めなくなった地、だが、彼らには関係がない。

住める土地が無いなら住めるようにしてしまうのも彼らである。

「第二のカタツシユ村ができたね」

「よっしゃー！」

立ち込める不浄の空気はなんとやら。

Y A R I O 製、空気洗浄機ならばどんな世紀末でもやっていけるに違いない。

かつて、聖杯の泥を土を豊かにする肥料に変えた経験がここでも生きた。

というわけで、ようやく人が住める土地がここに完成したのである。

「ほんま大変やったなあ」

「まあまあ、とりあえず焼き鳥でも食べながら一杯やりましょうや」

「お、良いね！」

「やったー！ じゃあだん吉でみんな連れてくる！」

「……村に入りきるのかそれ」

スカサハ師匠は無邪気にそう告げるベデイに顔を引きつらせる。

そう、よくよく考えたら所帯が増え過ぎた。

まさに、英雄のバーゲンセールである。カルデアとカタツシユ村（ブリテン）にいる英雄を合わせるとこの村に入りきるかどうか悩ましいところだ。

「それじゃわかった、呼んでくる間にブルドーザー使って整備しとくわ」

「んじゃ俺シャベル使うね」

「なんでここにシャベルカーとブルドーザーがあるの？」

藤丸ちゃんはリーダーとデイルムツドの会話に冷静にツツコミを入れる。

もうなんの躊躇もなく重機に乗り込んでるものだから今更なのだが、彼らだから仕方ないとかもはや言いようがない。

特異点の修理業者を名乗るだけあってとんでもない人達だなと彼女は改めてそう思った。

「おい、とりあえずこちららも炭窯を作ってみたぞ」

「おー！ 流石はエミヤん！」

見事な炭窯、職人の腕を存分に発揮された綺麗な炭窯である。

これには、リーダー達も感心せざる得なかった。

「穂群原のブラウニーの名は伊達じゃないね！ やっぱり天職だったんじゃない？」「フッフ、やめたまえ、我ながらそう思うよ」

生き生きとしてるエミヤ。

建築、料理、農業、家事、なんでもこなせる万能型、まさに、天職を得たとばかりに彼の縦横無尽の活躍振りは見張るものがあつた。

「とりあえず後はアイドルデビューだけやね」

「……エミヤんいつデビューする？ 楽器できる？」

「とりあえずさあ、ポジ的にはギターとかベースが似合うと思うんだわ俺」

「うむ、……実は最近ギターを弾き始めてな、これがまた奥が深くて」

「わかるわー！ エミヤん」

そう言いながら嬉しそうに語り合うリーダーとエミヤ。

もはや、アイドルバンドの一員として迎える気満々である。挙げ句の果てに事務所にはいつでも話通せるからというADフィンからの謎の援護射撃まであるくらいだ。

——アイドル入りまで秒読み。

英霊のアイドル化が加速するばかりである。

そう言えば、最近、ジャンヌオルタちゃんが漫画を描いているらしいのでそういった意味では何というかもものづくりの英雄が一気に増えたような印象だ。

「先輩ー！ 見てください！ 綺麗に畑耕せましたよ！」

「わあ！ マシユ！ すごくいいじゃん！」

だが、肝心なツツコミ役が不在なのでこの始末。

最早、カルデアのマスターでさえもすっかり馴染んでしまった。

目的を忘れてしまっているのはきつと気のせいではないだろう、何をしに来たのか最早覚えている者はこの場にはいなかった。

それからしばらくして、開拓した土地でオルガマリー達やカルデアの皆を呼んでパーベキユーパーティーをすることに。

「なんでブルドーザーとシャベルカーがあんの！ あとユンボ!？」

そして、やってきたオルガマリーが放った第一声がこれである。

順調に拠点が出来上がったと聞いてやってきたら、ユンボで畑を耕しているエミヤや家を建てているガテン系女子サーヴァント達、拳銃には拠点を切り開くためにブルドーザーとシャベルカーを遺憾なく操縦しているリーダー達の姿に度肝を抜かされてしまった。

いや、オルガマリーはおかしくはない。至って普通の反応である。

挙句には時空を越えてISUOZのトラックまで行き来しているものだからだいぶ力オスな空間だ。

「お！ 皆んな来たかあ！ よつしや！ それじゃ早速バーベキューしようぜバーベキュー！」

「はい！ しつかり仕入れてきましたよ！」

「お、ジャンヌちゃん気が効くね！」

「私が燃やされそうになった時に出来たのがまだ残ってましたからね」

わはははは、とジャンヌちゃんの粋なジョークに笑顔が思わず溢れる一同。そんな事もあったかといふ思い出してしまふ。

あの時は何故か街の皆と盛り上がってバーベキューを楽しんだものだ。確かに良い木炭だ、これならバーベキューにはもってこいだらう。

「デイル兄イ！ とりあえず肉は捌いたよー！」

「あーはいはい！ 味付けね、味付け」

そう言いながら、モーさんが捌いたお肉をチエックするデイルムツド、味付けは肝心だ、特に料理人としての腕前が問われる。

エプロン姿のモーさんを助手に真剣な表情で味付けをしていくデイルムツド、伊達に長年Y A R I Oの台所を預かってきたわけでは無い。

さて、そんな二人とは別にスカサハ師匠はトラックから積んできたあるものをリーダーの元へと運んでいた。

「このキャベツはどうだシゲちゃん？」

そう言って、リーダーの元に収穫してきたキャベツを見せるスカサハ師匠。

このキャベツ、なかなかの大きさ、今回、バーベキューという事でスカサハ師匠がわざわざブリテンにまで取りに行ってくれたのである。

「んー、良い大きさはね、ブリテンのやつ？」

「ああそうだ、霊草を肥料に使って作ったやつだ」

「はあ!?! 霊草う!?!」

スカサハの放った一言にオルガマリーは目眩がした。

この人達は靈草をワカメみたいに扱っている人達である。

モーさんや他のサーヴァント達は何を今更と首を傾げているがオルガマリーは頭がどうにかなりそうだった。

そして、他のメンバーも続々とやってくる。

「皆さんー！ 串持ってきましたよ！ 鉄串！」

「火なら余に任せろい！」

「ノツブは燃やすのが得意ですもんね、特に寺」

「なんじやとコラア！」

鉄串を用意してくれていた沖田さんとチャッカマン扱いのノツブがやってくる。

それでいいのか第六天魔王と思いはしたが、元からこんな感じだったなど、ここに関してはさほど驚きはなかった。

「はあ？ 私の方が燃やすのは得意なだけ？」

「お肉♪ お肉♪」

「ジャック、まずは手洗いうがいです、あとオキシドール」

現れたのはジャンヌオルタちゃんにジャックちゃん、それにナイチンゲール婦長である。

お肉にまで消毒はさすがにやめてほしいとは思うが、こちらはほぼ平常運転だ。良かった、まともなサーヴァントも中には居るんだとオルガマリーはひとまず安心した。

「私はパンを持って来たわー、ヴィヴ・ラ・フランス♪」

「おや？ 私はお酒を持って来たんですけど」

「肉が食べれると聞いて、あ、これ魚です」

「やあ、飲み物を持ってきたよ」

そして、フランスパンを持って来てくれたマリー、わざわざエジプトからお酒を持って来たニトクリス、魚を持ってきたブリテン王と飲料水を持ってきたマーリン。

食材がどんどん集まってきている。というか人数が多すぎる。

何人でバーベキューする気なんだとオルガマリーは純粹にそう思った。彼らなら下手すると万単位でバーベキューしそうだ。

そんな中、拠点の建築に携わっている英雄達も続々と集まってくる。

「コンクリート持ってきたぞ！」

「お、ナイスう！ ネロちやま！」

想像できるだろうか？ ローマの皇帝が生コン車を運転しながら生き生き登場してくる姿など。

もはや、それはローマンコンクリートではなくコンクリートである。普通のコンクリートに進化を遂げていた。

ちなみに、最近ではセメントもお手の物らしい、ローマの建築技術のブースト加減が最早、ぶっ飛んでいる。

「へーい、みんなーお待たせー」

「デコトラ小次郎！ 参上だぜ！」

「ふう……少し遅れちゃったわ、ちよつとだけハードラッグとダンスっちゃまったの」

そして、15tトラックに乗ったコノートの女王に派手なデコトラで生き生きとしている巖流の農民侍さん。

さらに、改造バイクに乗ってやって来た超武闘派のヤンキー聖女、しかも、何故か謎の返り血を浴びているという仕様。

彼らの姿を見てオルガマリーは何をどうすればこうなるのかわけがわからなかった。

「……私、もうおうち帰っていい？」

「お、オルガマリー所長、大丈夫ですか？」

「あ、所長！ ほら！ お肉焼けましたよ！ ほら食べて食べて！」

だが、そんなオルガマリーの心情などお構い無し。

さて、その肉だが、なんとメソポタミアから仕入れたばかりの高級牛肉である。

ちなみに仕入れ先はもちろんギルガメッシュ王、とエルキドウさんのお二人である。

「どう味付けは？」

「何これすごい美味しい！ 凄い！ なんていうかこの世のものじゃ無いみたいな

「！」

「あー！ 良かったあ」

満足げに口に肉を運ぶオルガマリー。

今までに食べたことない歯応え、この世のものじやないような美味、まさに、高級品というには言い切れないような旨味が口いっぱいに広がる。

味付けも絶妙だ。舌触りに違和感なく溶けるように染み渡る味は天に召された気分になる。

「こ、これ、本当に美味しい！ なんてお肉なの？」

「あーこれ？ 確か……なんだっけ？」

そう言いながら、首をひねるディルムツド。

メソポタミア産の高級牛とは聞いていたし、育て主であるイシユタルさんとアヌさんにはお礼にお手製、豚骨ラーメンを振る舞った。

しかし、名前が出てこない。

そう、確かあれは……。

「あ、そうそう！ メソポタミア特産牛、グガランナとかいう高級牛だよ」
「ふう——!？」

名前を聞いた途端、オルガマリーは吹き出した。

なんで私、え？ 私、今何食べたって？ グガランナ？

ちなみに霊草を食べているギルガメッシュとエルキドゥはグガランナをいくら殺しても死なない事をいい事にアヌさんとイシユタルさんと最近、牧場を始めたらしい。

「あ、ちなみに味付けはこれね」

「何これ」

「霊草をすり潰して作ってえみました！ 特製胡椒です！」

そして、なんとオルガマリーは知らないうちに不老不死にさせられてしまっていた。いや、確かに美味しかった。めちやくちやうまかったのだ。

オルガマリーもいろんな高級肉を食べたことはあるがあれ以上の肉は食べたことは無い。

だが、待つてほしい、グガランナの肉を焼いてバーベキューして、味付けに靈草を混ぜた胡椒？

「……ばばばば……あ、あははははは……」

「マシユ！ これめっちゃ美味しいよね！」

「本当！ 最高です！ このお肉！」

オルガマリーは頭がどうにかなりそうだった。

そして、それを知ってか知らずか藤丸とマシユは満足そうに肉を頬張っている。

みんなもあちらこちらで食べるものだからさあ大変、皆、不老不死である。というのも最早、今更の話ではあるのだが。

そんな、オルガマリーを他所に皆で集まったバーベキューは一層盛り上がりを見せるのだった。

今日のY A R I O

1. グガランナの焼肉が作れる

2. 靈草の胡椒が作れる

3. 拠点先が最早建築現場